CHRONICLES
Episode IV, V and VI - Vehicles

すべてが"本物"! 銀河最強のビークル図鑑

スター・ウォーズ・クロニクル
エピソード4,5,6 ビークル編

『スター・ウォーズ　エピソード4,5,6』の世界観を象徴する"ビークル"のすべてを、映画撮影に使用された本物のミニチュア・実寸大モデルの記録写真で集大成した、全銀河震撼の超豪華ビジュアルブック!

本文320ページ
収録ビークル数62種
収録写真点数1000点以上

高貴準三・
高橋清二［編著］

Gakken

CHRONICLES

Episode IV, V and VI - Vehicles

A long time ago in a galaxy far, far away....

遠い昔、はるか彼方の銀河で・・・・

Contents 目次

EPISODE V - THE EMPIRE STRIKES BACK

EPISODE VI - RETURN OF THE JEDI

Edited & Written by

JUNZO TAKAGI
SEIJI TAKAHASHI

STAR WARS

CHRONICLES

Episode IV, V and VI – Vehicles

Gakken

Introduction イントロダクション

■日本発のSWエンサイクロペディア

本書は1995年、現在（2016年）から20年以上前に私たちが企画者および編著者として制作し、竹書房から刊行された書籍『スター・ウォーズ・クロニクル（以降「旧クロニクル」）』のビークルについての部分を拡大・アップデートし、新たに発掘できた本邦初公開の画像でほとんどのページを構成したものである。

1977年に公開された最初のSW作品『スター・ウォーズ エピソード4／新たなる希望』（日本公開は1978年）は、日本のSF映画ファン・関係者にあまりにも大きな衝撃を与えた。「旧クロニクル」は、その衝撃に突き動かされた私たちが、日本人の手で完璧なSWエンサイクロペディアを作ろうというプロジェクトだった。

「旧クロニクル」の企画に正式なGOサインが出るまで、当時足掛け3年がかかった。小説『スター・ウォーズ 帝国の後継者』が日本でもヒットしたのが、企画の直接的なきっかけだった。

1991年末ごろ、最初の企画打診に対するLFL（ルーカスフィルム）の返答は、「エンサイクロペディアの企画はこちらで進行中なのでNG」というものだった（注1）。

その翌年、別の切り口での構成案を提出した。宇宙船や兵器、惑星など、カテゴリー別に章立てて紹介するというものだが、それも似た企画が進行中だということで却下された。

そして、三度目の正直、諸条件が折り合い、ようやく企画にGOサインが出たのが1993年であった。

そのとき英語で簡単な台割（本の大まかな構成案）を作成したのだが、そのときの仮題は、『The Legend of Star Wars（SW伝説）』というものだった。

そして1994年1月初旬、私たちは渡米し、この企画の打ち合わせのためにルーカスフィルムにおもむくこととなった。打ち合わせに向かうタクシーの中で、竹書房の担当者と改めて本のタイトルをどうしようかと議論したことを思い出す。彼は「スター・ウォーズ・バイブル」にしたいと主張。SWファンのバイブル的なものを作りたい、という意図である。しかし果たしてキリスト教圏の人々にとって、聖書（バイブル）という単語の使用が許容できるものか

注1
米国でその『スター・ウォーズ・エンサイクロペディア』が完成し、発売されたのは旧3部作の〈特別篇〉が公開された時期（1997年前後）だった（邦訳版はイースト・プレス刊）。

注2
その後『スター・ウォーズ・テクニカル・ジャーナル』という「STARLOG」誌の別冊が刊行され、その合本版はDELREY社から刊行。その邦訳版は1996年にソニー・マガジンズから刊行された。また、DELREY社は同コンセプトを発展させ、各カテゴリー別に1冊ずつ「The Essential Guide」を刊行。その改訂版もオールカラー化して刊行された（邦訳は『スター・ウォーズ・クロノロジー　スター・ウォーズ全史』のみ）。

Junzo Takagi 高貴準三

とうか、少々疑問だった。この時点で私は「レジェント」よりもさらにエンサイクロペディアらしい感じのする「クロニクル」というタイトルを使いたいと考えていた。私は、当時手掛けた新刊「ゴジラ画報」（竹書房刊）をLFLの面々にお土産として手渡し、その表紙にある英語題名（The Godzilla Chronicles）を指さして自論を展開した。

結局、彼らから直に意見を聞いたところ、筆者が主張していた「クロニクル」が採用され、さらに「そのほうが普遍的な意味合いに感じる」ということで「Chronicles」と複数表記にして使用することとなった。

こうして、日本発・日本初のSWエンサイクロペディア「SWクロニクル」の制作は、本格始動したのだった。

■メイキング写真を発掘せよ！

1990年代前半までは、スター・ウォーズ関連書籍といえば海外でも小説とコミックが中心で、カラー写真を使って構成した書籍は極めて少なかった。しかし私は一ファンとして、もっと写真を、特にメイキング写真を見たいと熱望していた。世界のファンがまだ見ぬメイキング写真は、SWシリーズの革新的なVFX（Visual Effects）を担ったILM（インダストリアル・ライト＆マジック）にあるはず、と私は確信していた。それまでに世に出たビークルやクリーチャーを製作中の写真や、それらを撮影中のスナップも、すべてILM内で撮影されたもののはずだった。

ILMについては、いまさら説明は不要だろう。全世界の特撮映画ファンの誰もが憧れるVFXの聖地でもある。特撮ファンなら、一度は訪れてみたい映画工房である。

私たちは渡米2日目に、かねてリクエストしておいたILMでの写真探しを行うこととなった。いよいよ聖地・ILMに足を踏み入れることができる。一日目に行ったスカイウォーカー・ランチでの写真探し（注3）もそれなりにエキサイティングな体験であったが、2日目のILM訪問はそれとは比較にならないほどの期待感で私たちを高揚させていたのだ。

ILMの受付の先には等身大のダース・ベイダー像

注3
まだこのころLFLでは膨大な写真を整理中の段階だった。スカイウォーカー・ランチの写真管理係の男性はまず、大量の4×5大判のラボポジを用意してくれた。その中から選べというその画像のクリアさに最初は驚いていたものの、次第に混乱してきたのを覚えている。一度選んだはずのポジがまた何度も出てくるのだ。そのポジ袋に書かれた数字やマーキングを見て、ようやく理解できた。映画公開時に各メディアに貸し出したデュープ（複製）ポジが返却されてきたものだったのだ（現在写真はデジタル写真と[illegible]所に配布するには、その配布数分[illegible]ればならない）

■『スター・ウォーズ』の撮影技術とミニチュア作り

大量の特撮シーンを必要とする『スター・ウォーズ』第1作目(『エピソード4』)の製作にあたり、ジョージ・ルーカス監督は特撮工房ILM(インダストリアル・ライト&マジック)を設立、その責任者にはアメリカ特撮界の巨匠、ダグラス・トランブル門下のジョン・ダイクストラが迎えられた。

『スター・ウォーズ』では、当時最新のパーソナルコンピューター(アップルII)でカメラの動きを制御する「モーション・コントロール・システム(ダイクストラフレックス)」が開発された。

かつて『2001年宇宙の旅』(1968年)のミニチュア特撮では、気が遠くなるほどのコマ撮り作業(スチール・アニメーションも含む)が行われていた。新たに開発された「ダイクストラフレックス」はその撮影方法をコンピューターを使って再現したシステムで、カメラはさらに正確で複雑な繰り返しの動作が行えるようになった。

また、『2001年宇宙の旅』のミニチュアは市販模型のパーツなども使用して細かくディテールがつけられていたが、『スター・ウォーズ』のミニチュアも同様な手法で、さらに精密な作り込みがなされている。ミニチュアをワイヤーなどで吊って高速度撮影し、そのスローモーション映像で巨大感を出すのが、『2001年宇宙の旅』などを除けば、当時主流の手法であった。しかし高速度撮影の場合、1コマあたりのシャッタースピードが通常よりも速い1/100秒以上となる。しかも被写界深度をかせぐためにレンズのアイリスを絞り込む必要があり、結果として強烈な照明を被写体に当てなければならない。その照明の熱で変形しないよう、被写体のミニチュアは木材か金属で作られることが多かった。

しかし、モーション・コントロール・システムを使用すれば、大光量の照明も不要となる。耐熱性のある木や金属以外の、プラスチックなどのさまざまな素材を利用して、ミニチュアのディテールを細かく作り込むことが可能となるのだ。

トム・ユングがアート・ディレクションを務めた、最もポピュラーなポスター・アートの横長版。Xウイングが前面、大きく描かれている。

インペリアル・スター・デストロイヤーの船体後部のショット。撮影準備中のためか、3基あるエンジン・ノズルが付いておらず、その取り付け部が見えている。

Rebel Blockade Runner レベル・ブロッケード・ランナー

帝国元老院議員であるプリンセス・レイア・オーガナが乗る外交船〈タンティヴIV〉は故郷の惑星オルデラーンへ向かっていた。反乱同盟軍が銀河帝国に対して初めて勝利した戦いの最中に、反乱同盟軍のスパイが奪取したデス・スターの設計図を、彼女みずからが秘密裏に運んでいたのである。このコレリアン・コルベットは全長150メートル、ブロッケード・ランナーとも呼ばれていた。

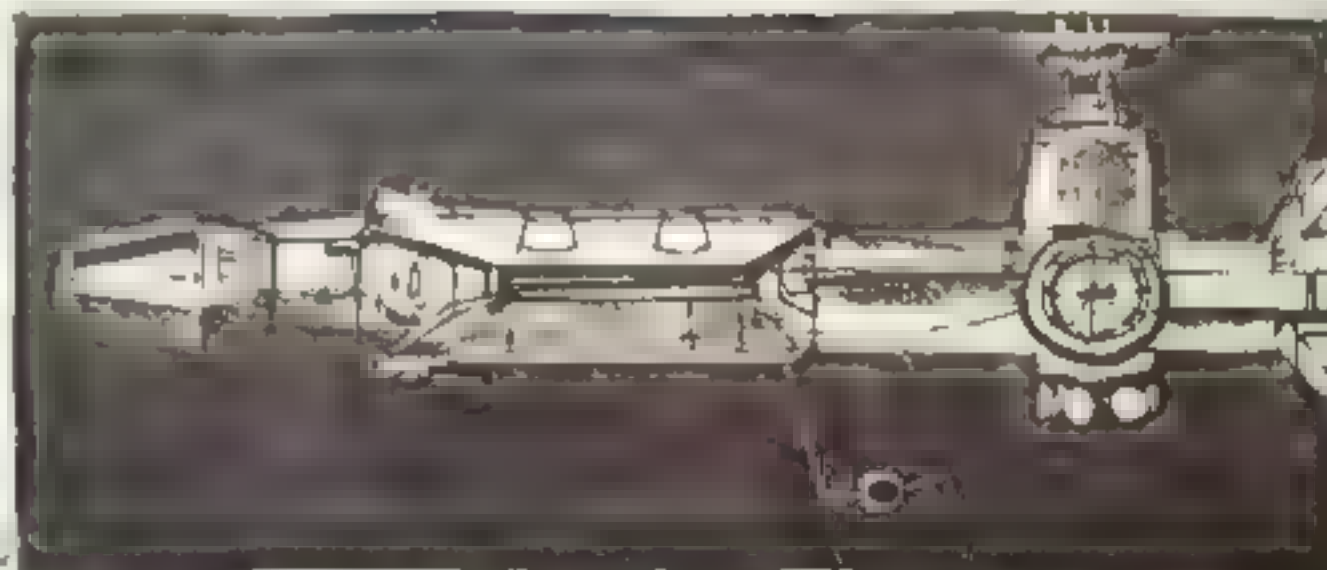
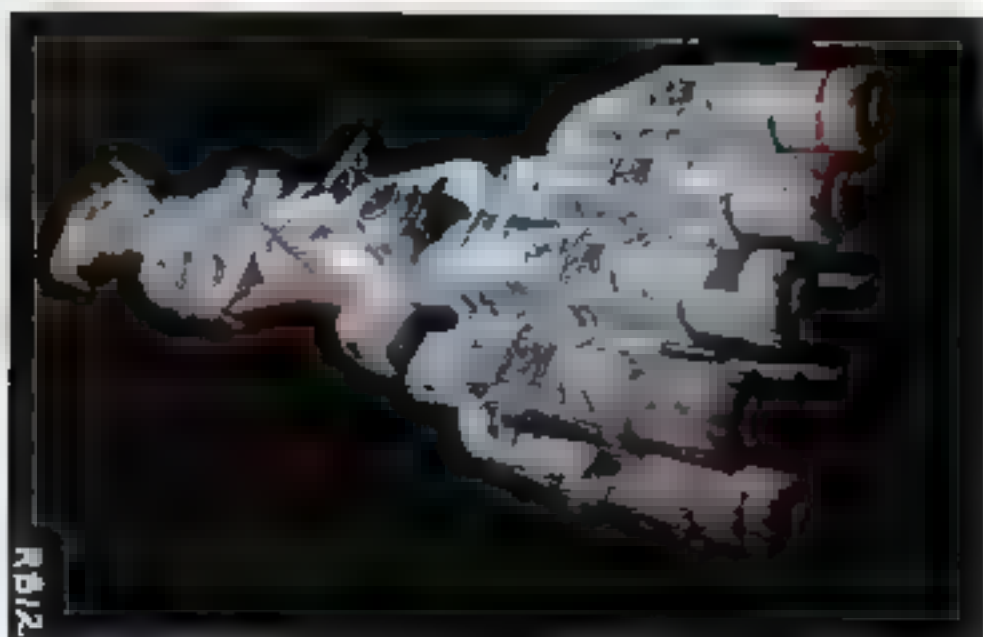
本ページ：レベル・ブロッケード・ランナーの撮影に使用された全長約2メートルの大型ミニチュア完成品。

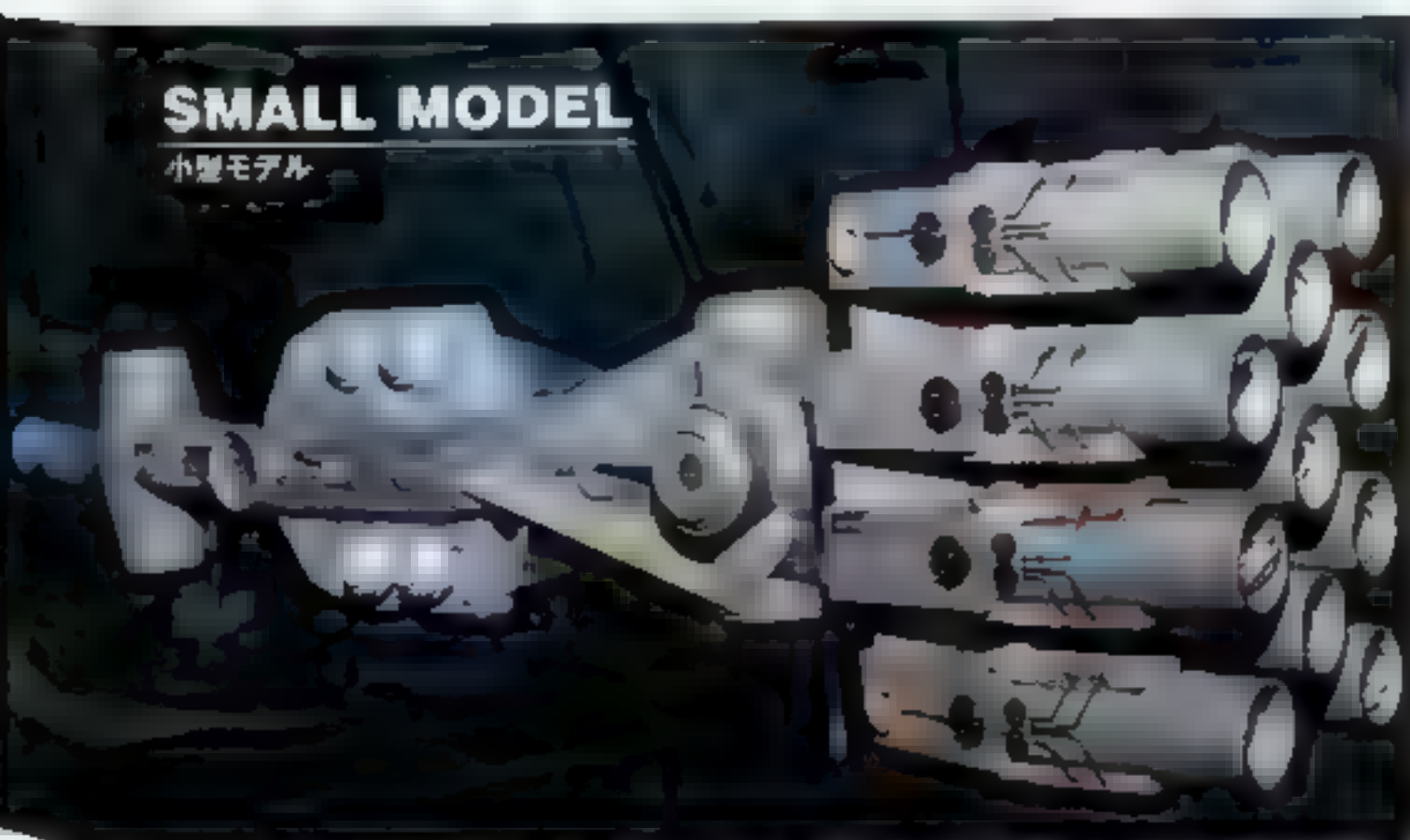
この撮影用ミニチュアが「エピソード4」に登場する宇宙船の中で最も大きく作られているのは、当初は主役ビークルである

PROTOTYPE MODELS & CONCEPT ART

プロトタイプ&コンセプトアート

レベル・ブロッケード・ランナーは撮影開始ギリギリまで海賊船〈ミレニアム・ファルコン〉としてデザインされ、本ページの写真に見られるように、プロトタイプ・モデルも2種類作られた

2種類目のプロトタイプ・モデル（下左写真2点）はコクピットが最終版のファルコンと同様に円筒状だが、このデザインで「ミレニアム・ファルコン」として描かれたストーリーボードや、ラルフ・マクォーリーによるコンセプトアートが残されている（下写真2点）

上2点　コクピット改修前のレベル・ブロッケード・ランナーの左側面と上面

SMALL MODEL
小型モデル

上・右　大型モデルとは別に、小型の撮影用ミニチュアも作られた。オープニングのスター・デストロイヤーに追われるシーンに使われた小型モデルは、船首に支持棒差し込み用の穴があり、撮影アングルは後方からのみに限られている。上写真がほぼ完成時の姿で、細部は省略されている。

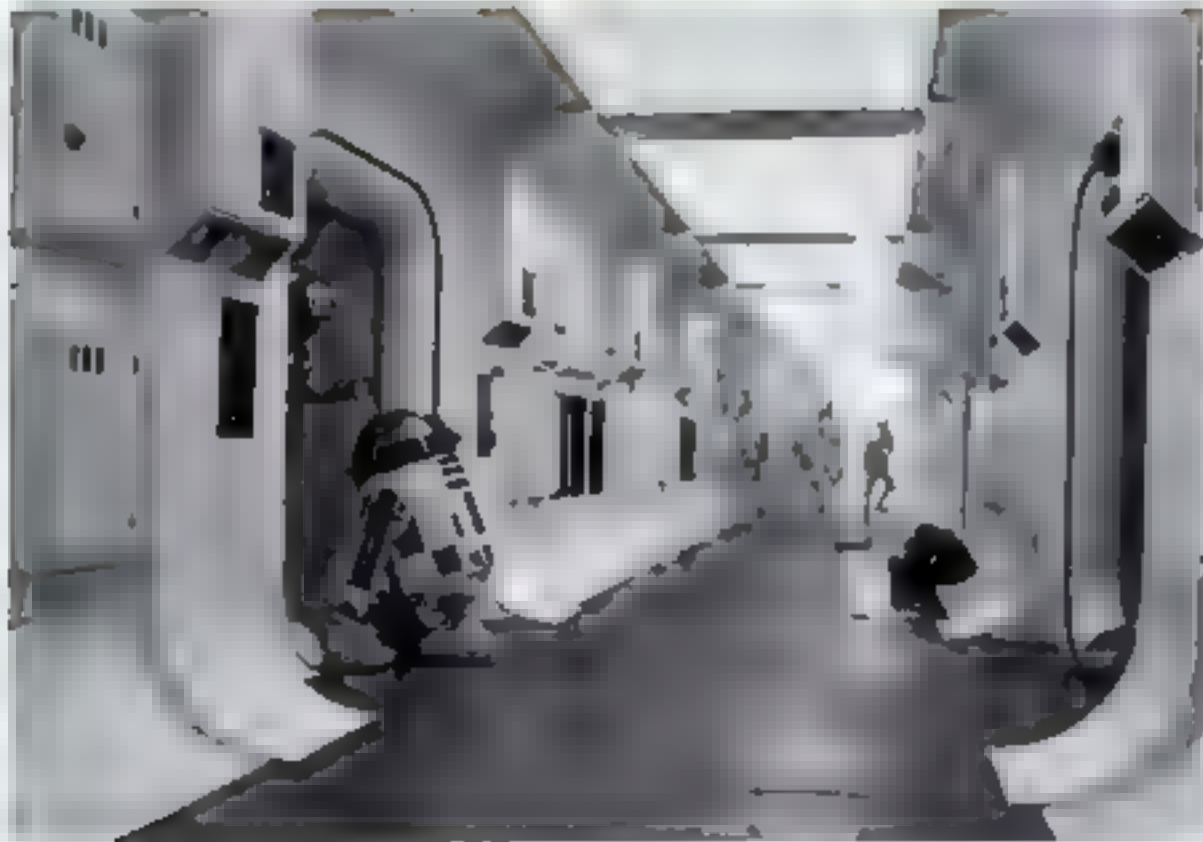
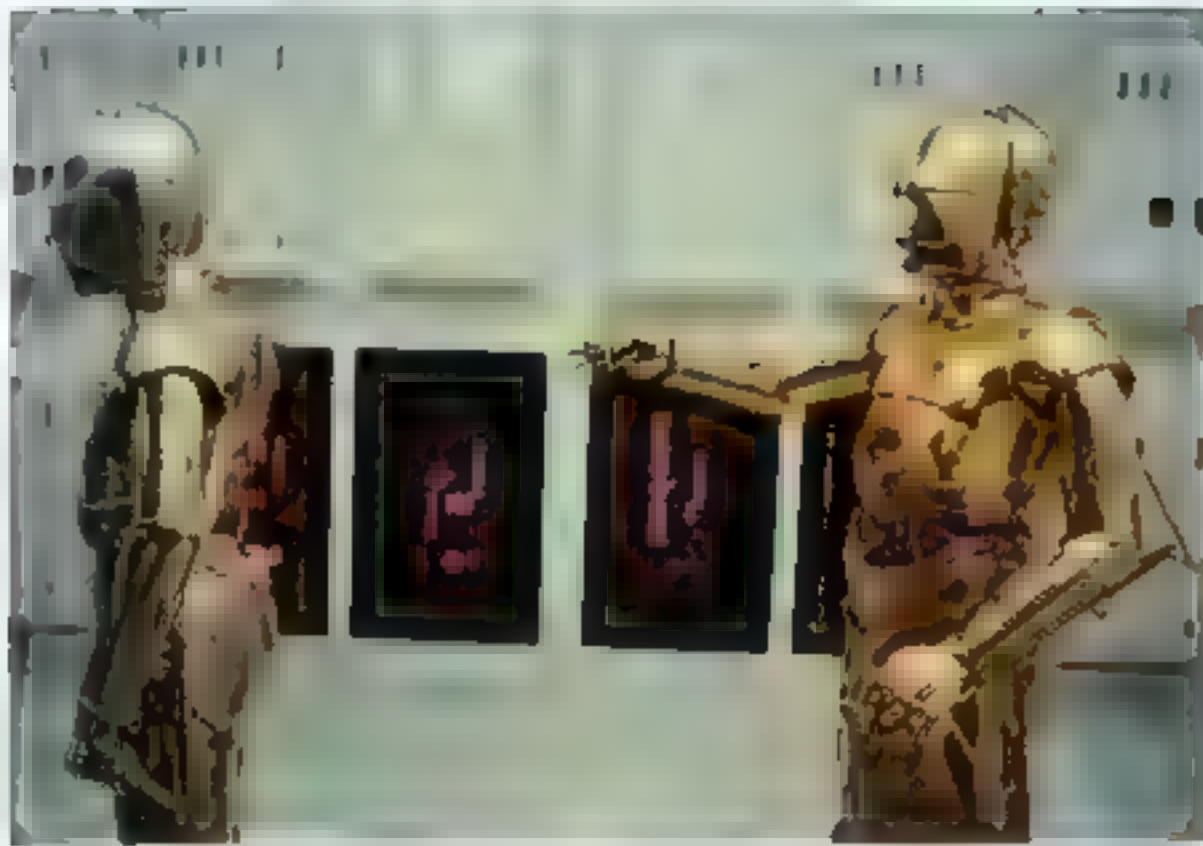
INTERIOR
艦内セット

本ページ：最初に作られたブロッケード・ランナーの内部通路のセット。当初はこの通路でオープニングの銃撃戦を行う予定だったが、このセットでは銃撃戦を行うには狭すぎると判断され、セットの横に新たに右ページの写真に見られる白い通路が作られた

通路の真ん中あたりに脱出ポッドへ向かうハッチがあり、奥にレイアが隠れていた

レイアが隠れていた奥の隔壁のディテール（上写真）と、奥側から見た通路のセット（上右写真）

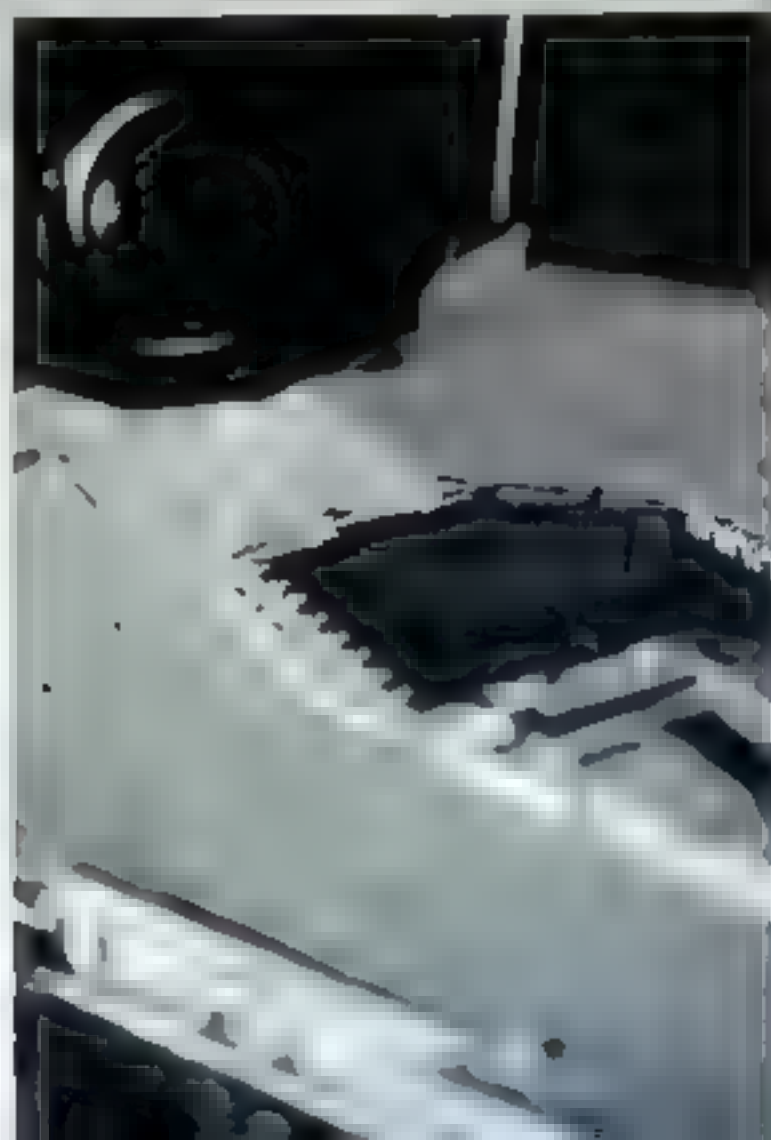
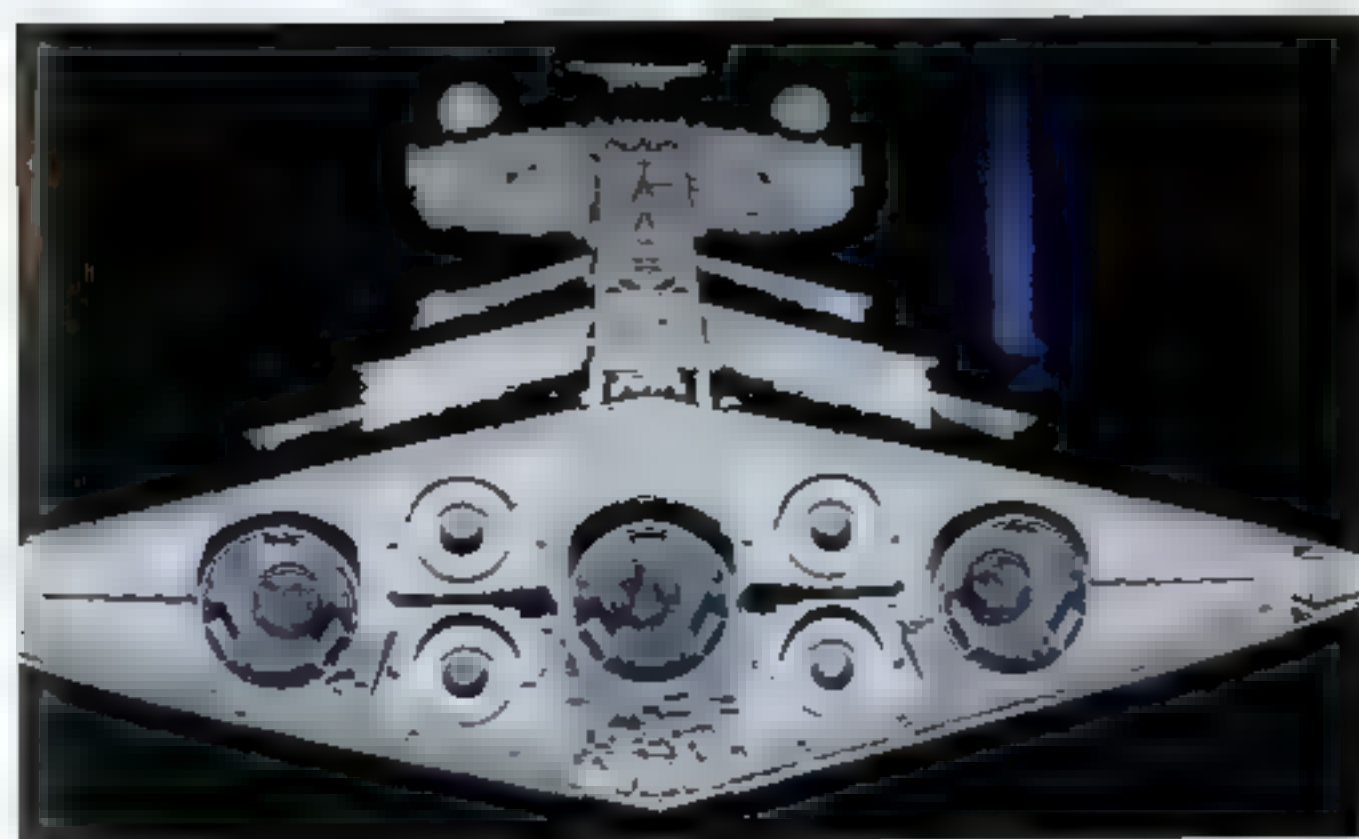
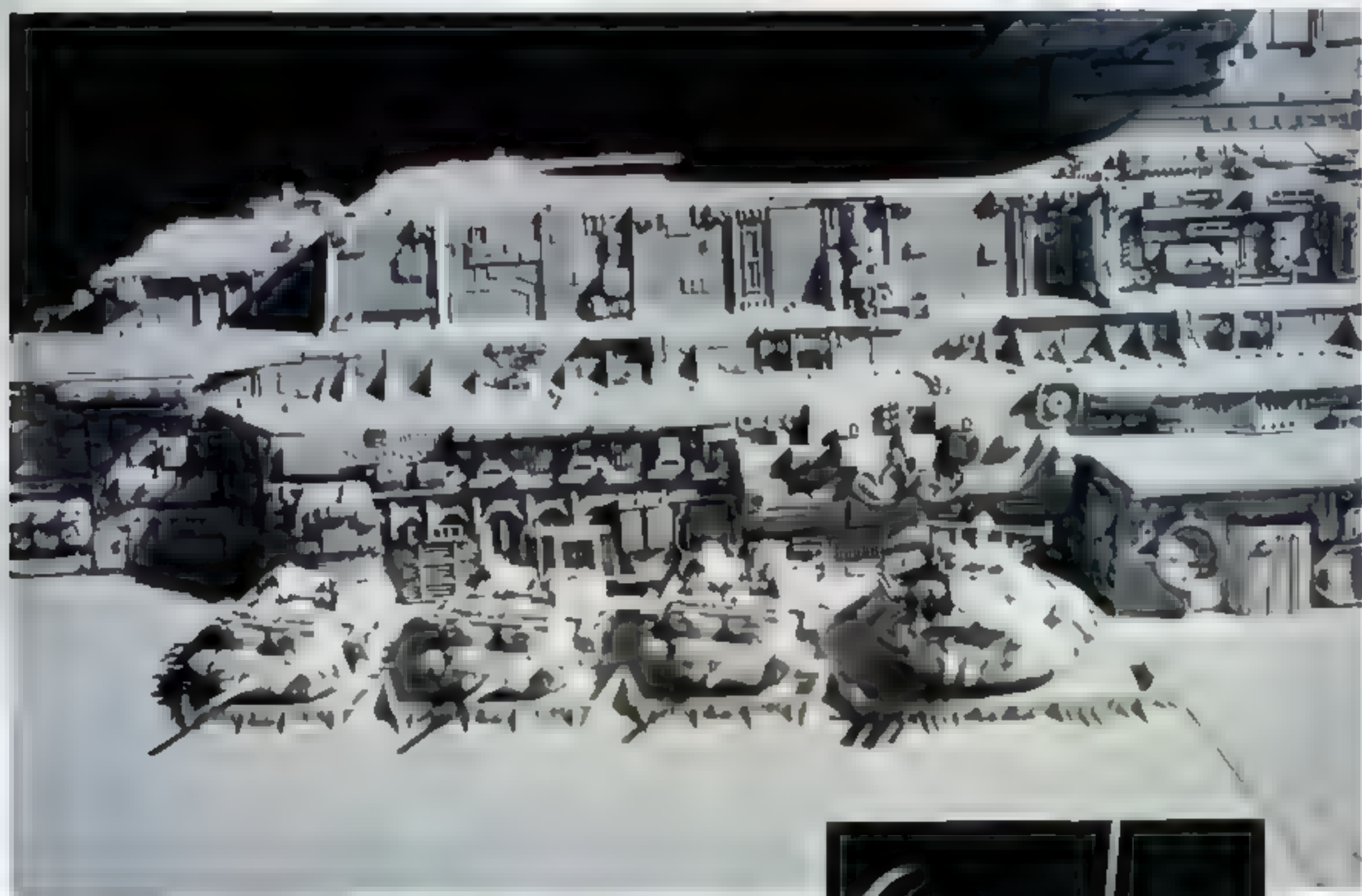
この通路の一番手前の部分は白い通路とつながっており、ここを通って捕まったレイアはダース・ベイダーに尋問を受けた

本ページ　このシークエンスの撮影の最後に急きょ作られた白い通路のセット。このセットは部分ごとに組み替え可能で、多彩なブロッケード・ランナーの艦内通路として使用された。

Imperial Star Destroyer インペリアル・スター・デストロイヤー

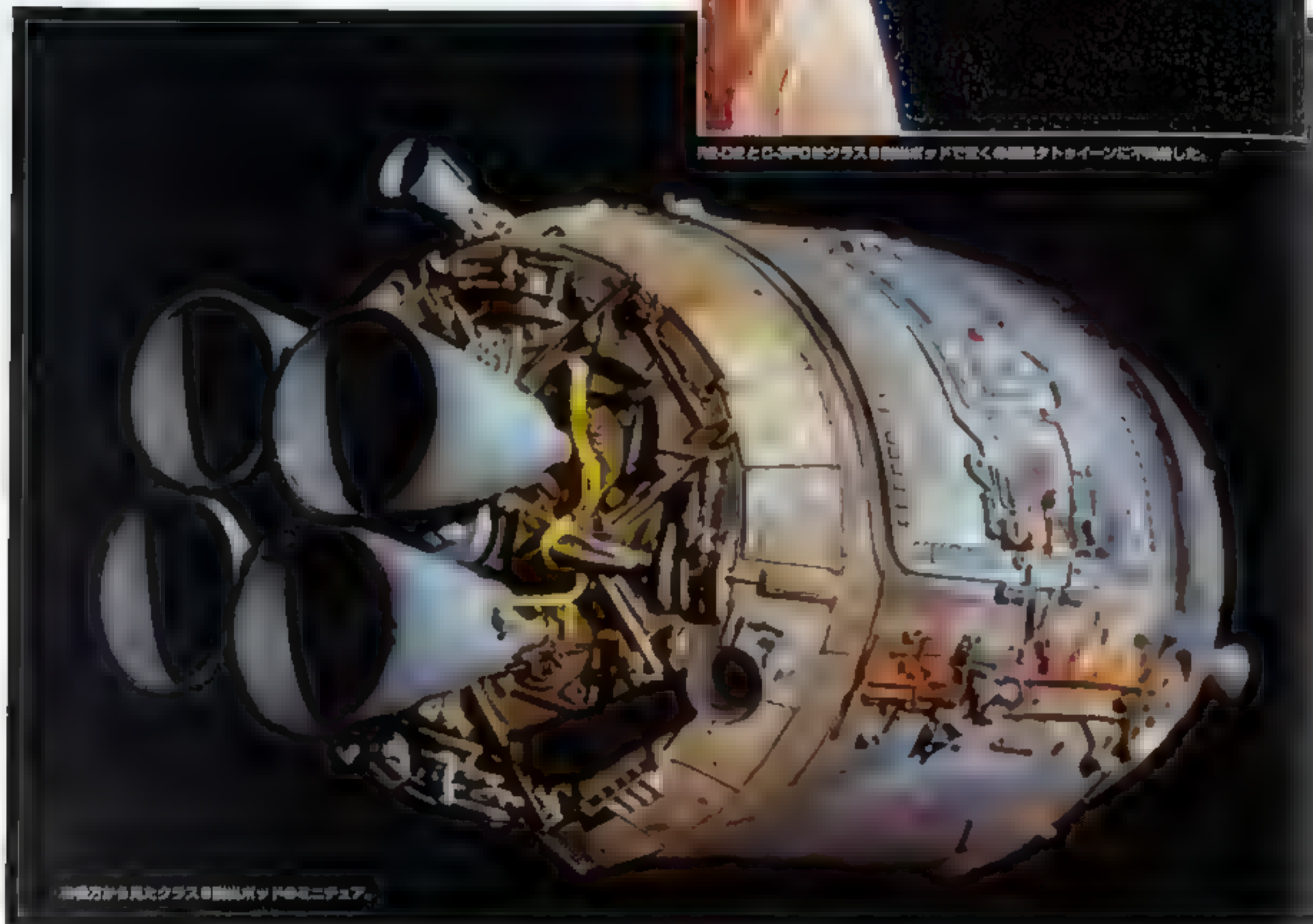
インペリアル級スター・デストロイヤーは強力な武装を誇る銀河帝国軍の主力艦であり、その特徴的なくさび形の船体はターボレーザーとトラクター・ビーム投射装置で覆い尽くされている。腹部のハンガー・ベイにはタイ・ファイターなどの艦載機、地上攻撃ユニットなどを搭載させるほか、拿捕した宇宙船を係留させておくことも可能である。全長1600メートル。製造元はクワット・ドライブ・ヤード（KDY）。

当初は「帝国の」という意味だった「インペリアル」はのちの設定で「インペリアル級の」スター・デストロイヤーという意味に転じた。映画制作中から公開前は「インペリアル・クルーザー」とも呼ばれ、全長320メートルという設定であった。しかし、捕獲したブロッケード・ランナーが途中から大型艦に変更となったため、それに従いスター・デストロイヤーも当初の5倍の大きさに設定変更された。

オープニングシーンはこのように船体の上下面を逆にして撮影された。（25ページ下段右写真も参照）

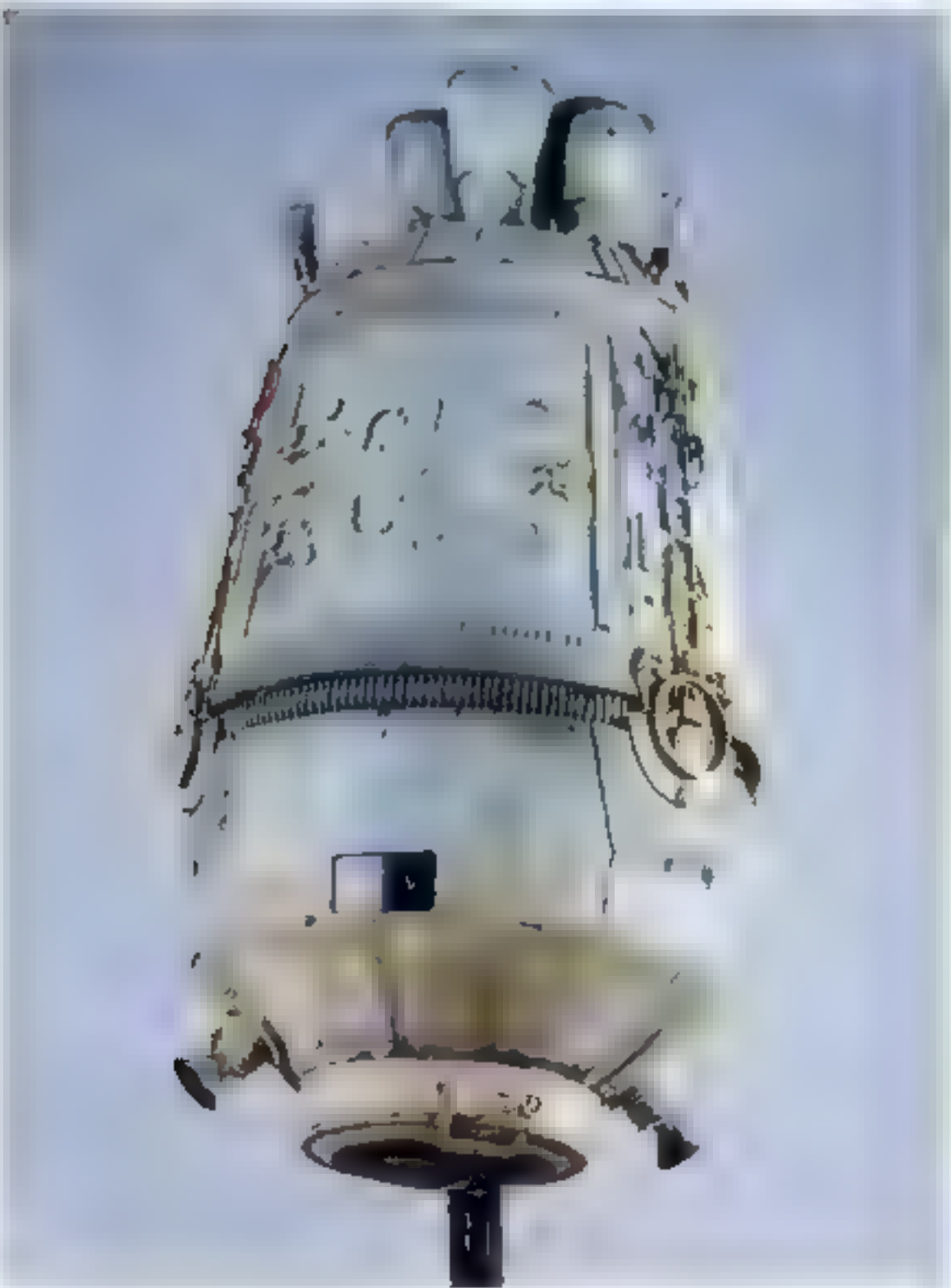
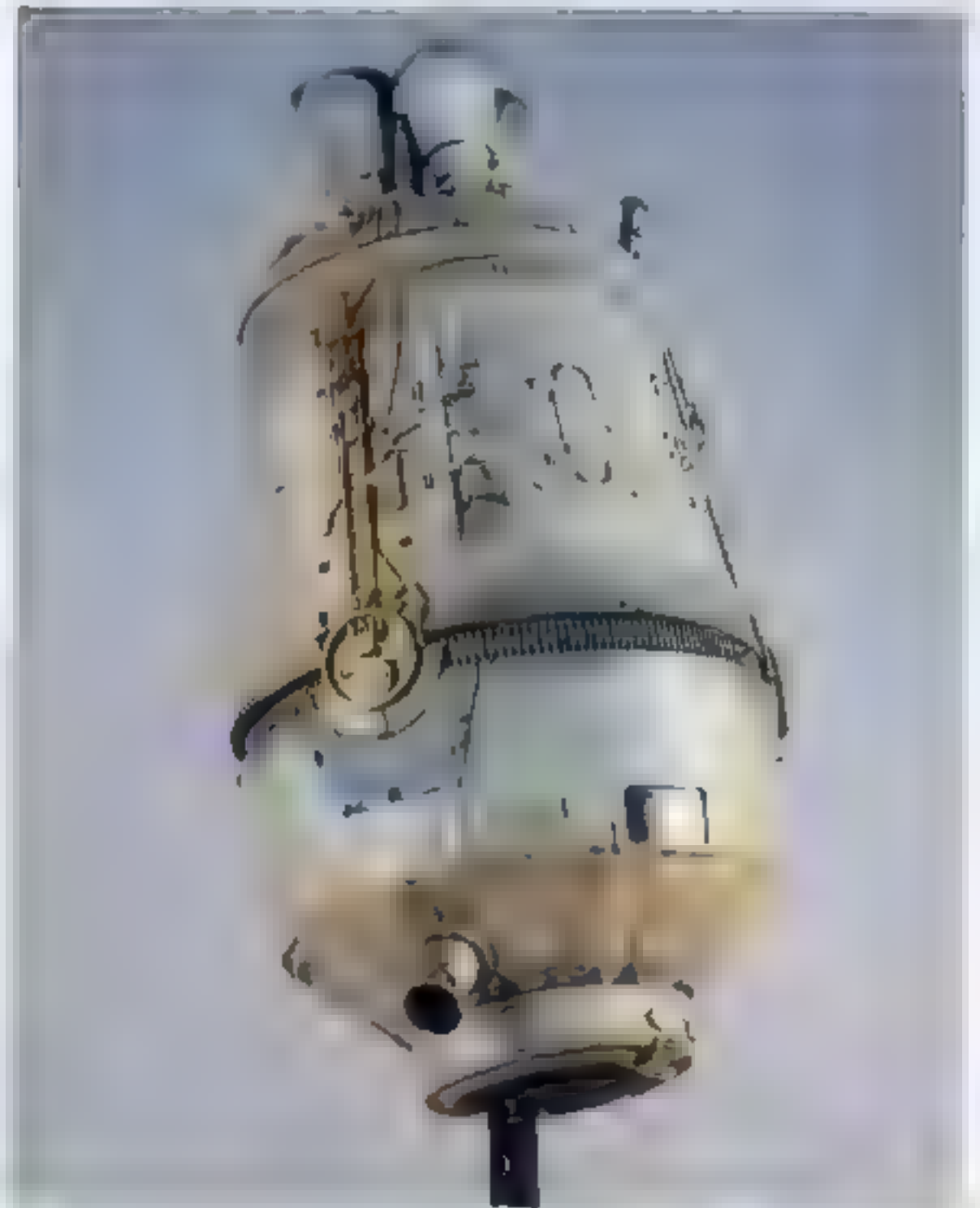
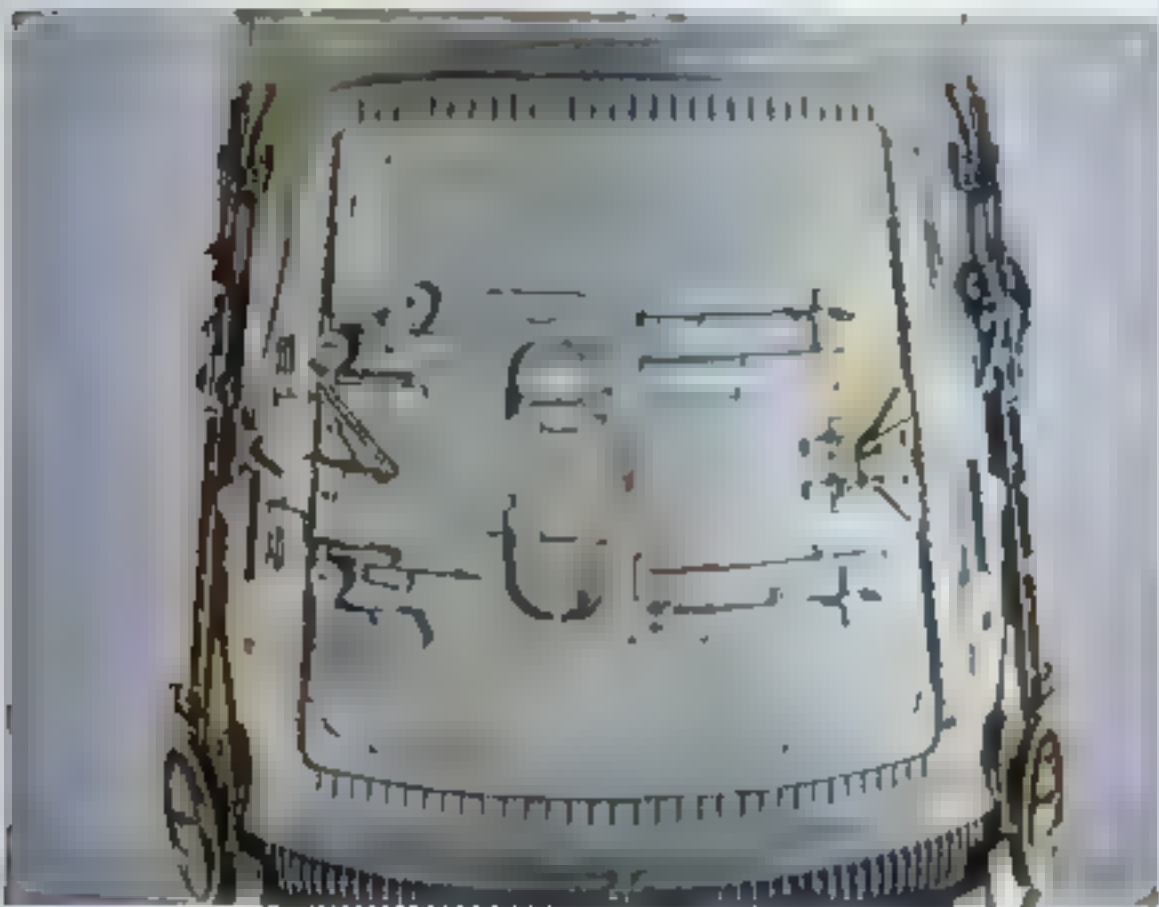
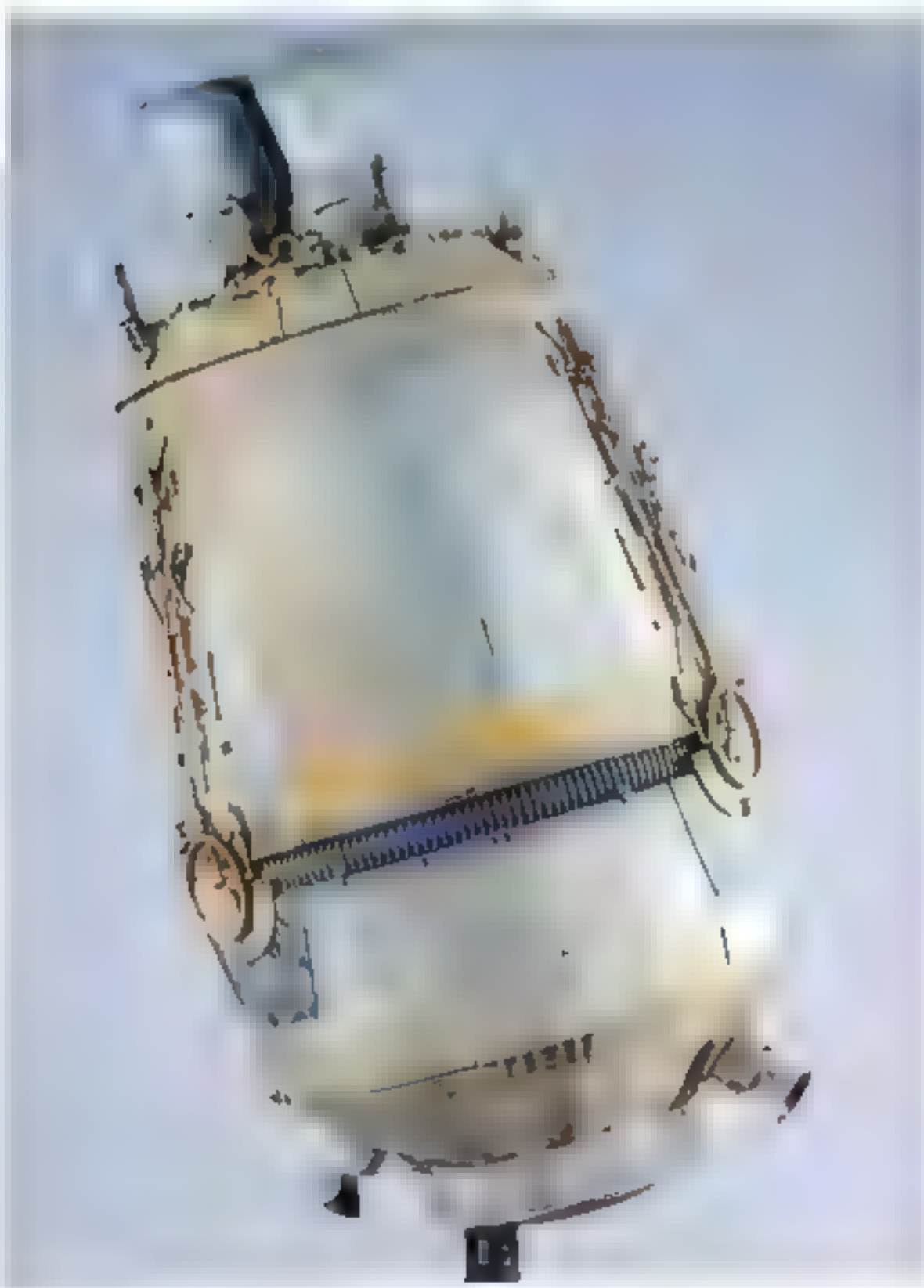
上写真は製作中の船体　右写真は現存しているミニチュアを2011年に撮影したもの　残念ながら映画製作時に撮影された下の写真と比べると　各部の細かいディテールパーツが欠損してしまっている　エピソード4　撮影時は　船体上面には細かいモールドが一切なく真っ白いままであった　上面のモールドが作られたのは　エピソード5　のときで　艦橋の上部アンテナと共に改修された

Escape Pod 脱出ポッド

ブロッケード・ランナーから射出されたクラス6脱出ポッドは、コレリアン・エンジニアリング社製の標準的な非常用小型ビークルで、同社の宇宙船に搭載されていることが多い。全長などのデータは不明（現在、設定未公表）。

R2-D2とC-3POはクラス6脱出ポッドで近くの砂漠惑星タトゥイーンに不時着した。

斜め後方から見たクラス6脱出ポッドのミニチュア。

それぞれミニチュアの上面（上左写真）と下面（上右写真）。上面にある脱出ハッチのパーツは着脱可能で、このパーツを外して撮影用支持棒に取り付ける（右ページ参照）。

本ページ　次ページ　これらの写真は現存しているミニチュアを近年撮影したもの　ご覧のように特に破損もなくきれいに残されている

ちなみに　このミニチュアの胴体部分は当時　水彩絵の具のバケツに樹脂を流し込んで成型されたとの記述が残されており　その際使われたと思われるバケツ探しを行っている熱心なモデラーも存在する

イベントなどで展示される際はディテールが豊富な側はハッチの付いている側が表側になり　ハッチのない面は見えない事が多く、本ページの4点のようにハッチがない側面の写真はとても珍しい

LIFE-SIZED MODEL

実寸大モデル

脱出ポッドは上半分だけの実寸大セットも作られ、チュニジアの砂漠に埋められて撮影された（上、左、右写真）。またモス・アイズリーの街頭シーンでは他のパーツと組み合わせて建物に置かれ、"何かの装置"（ジョージ・ルーカスはこれらを「グリーブリー」と呼んでいる）に変身している（下写真）

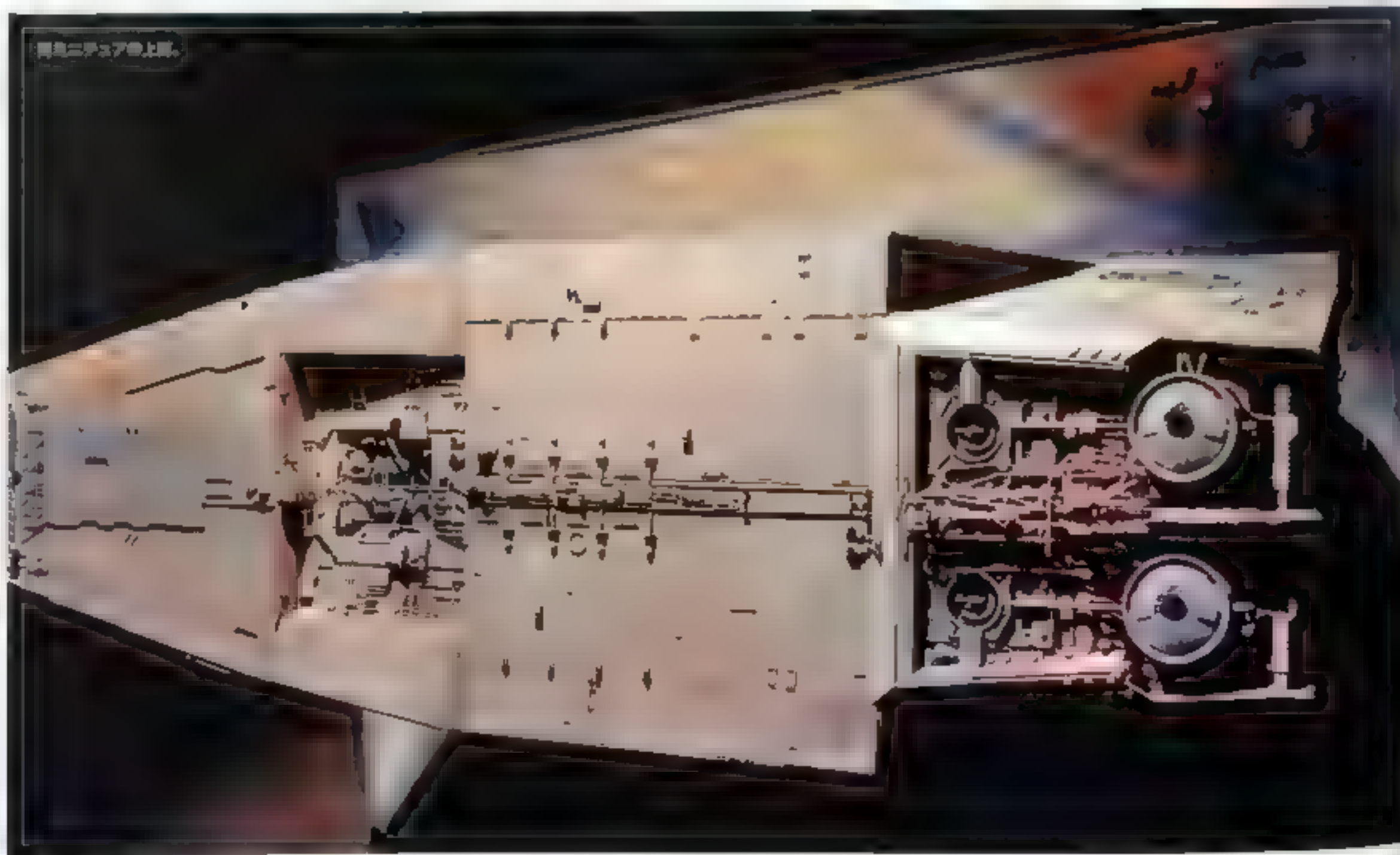
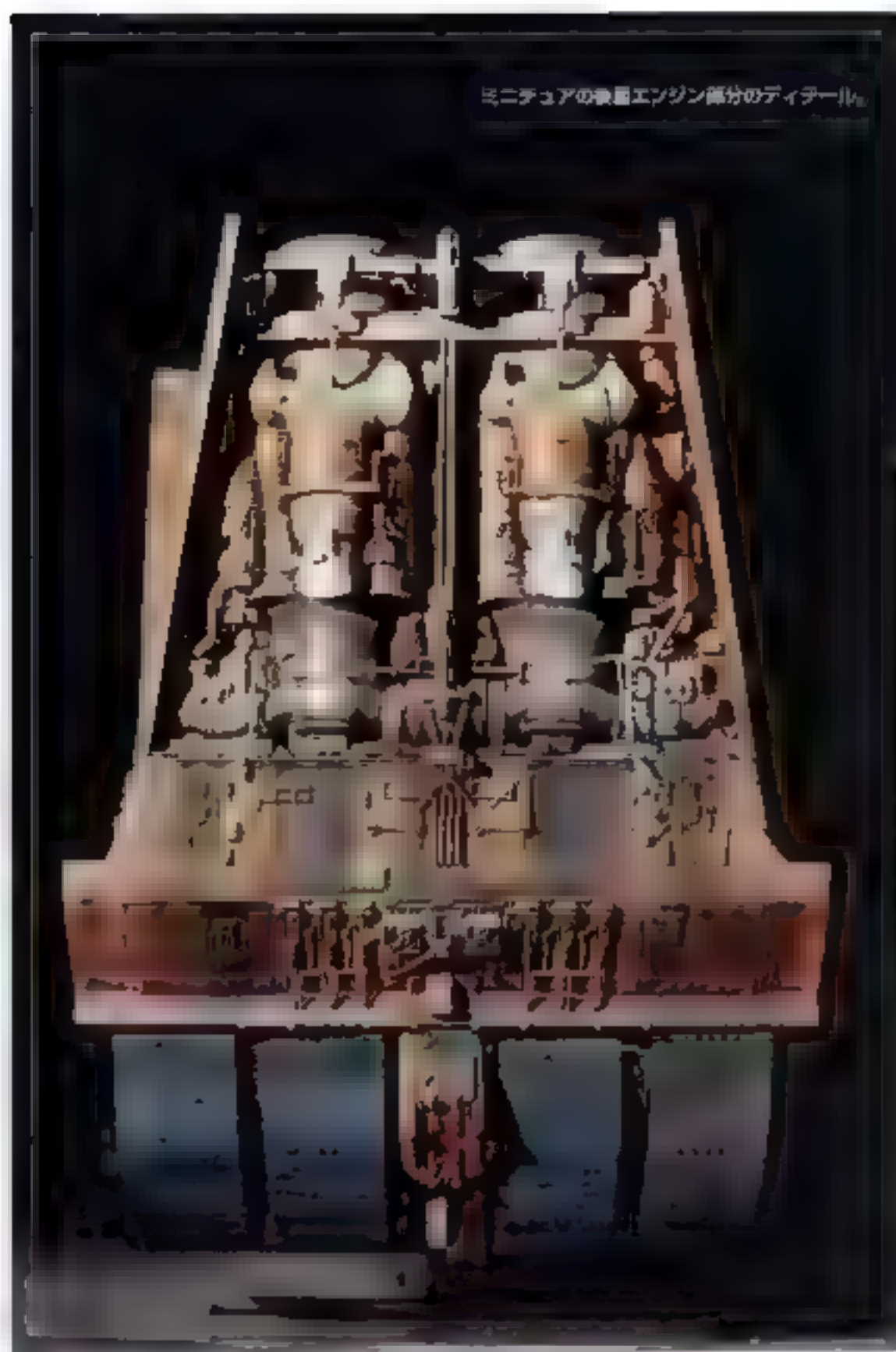
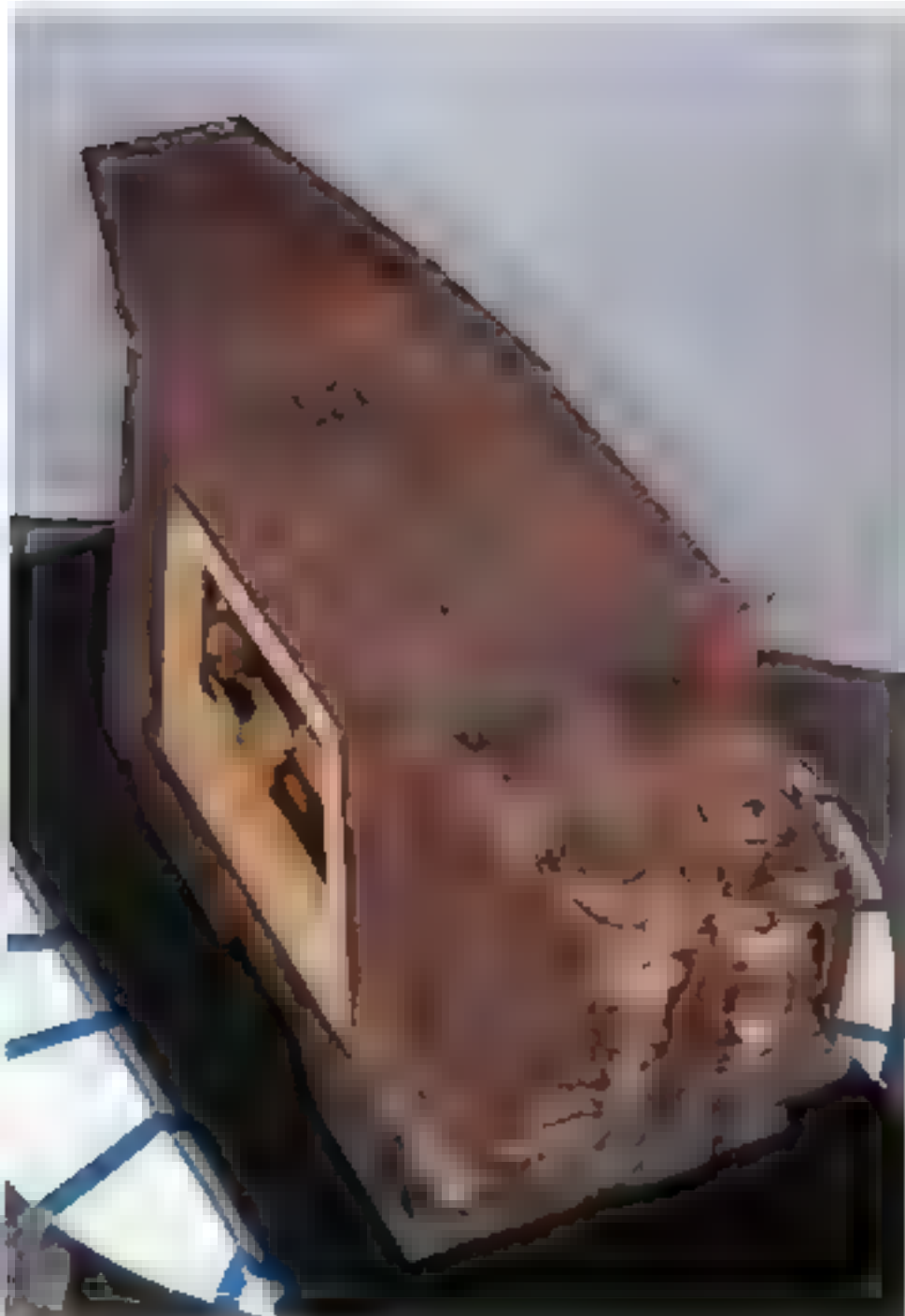
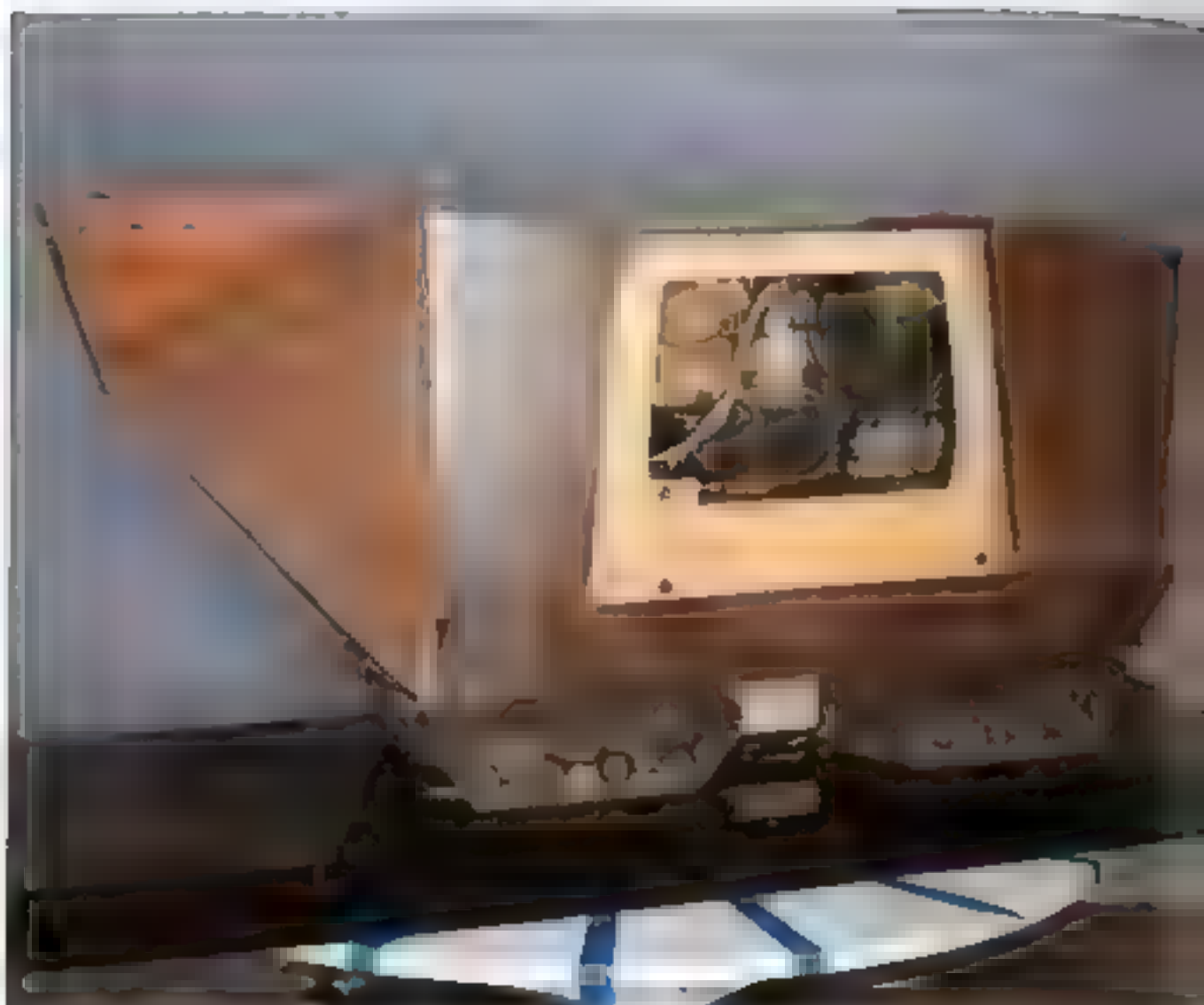
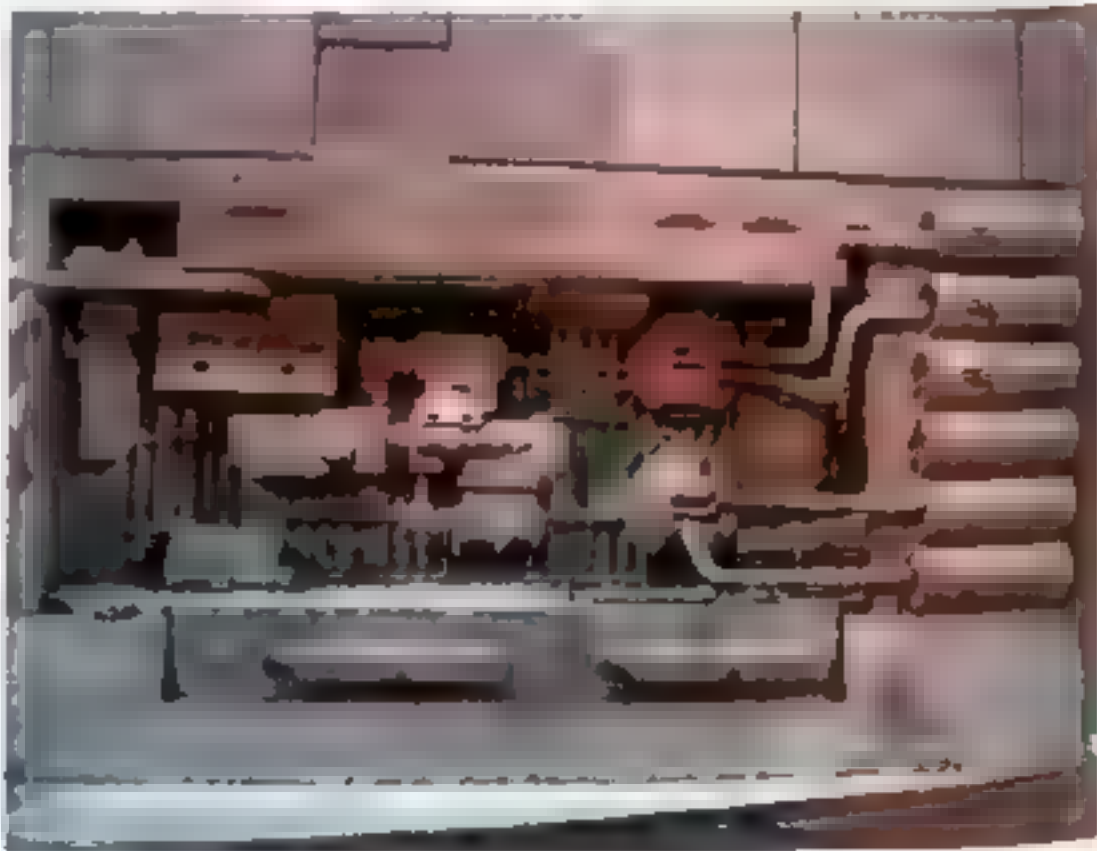
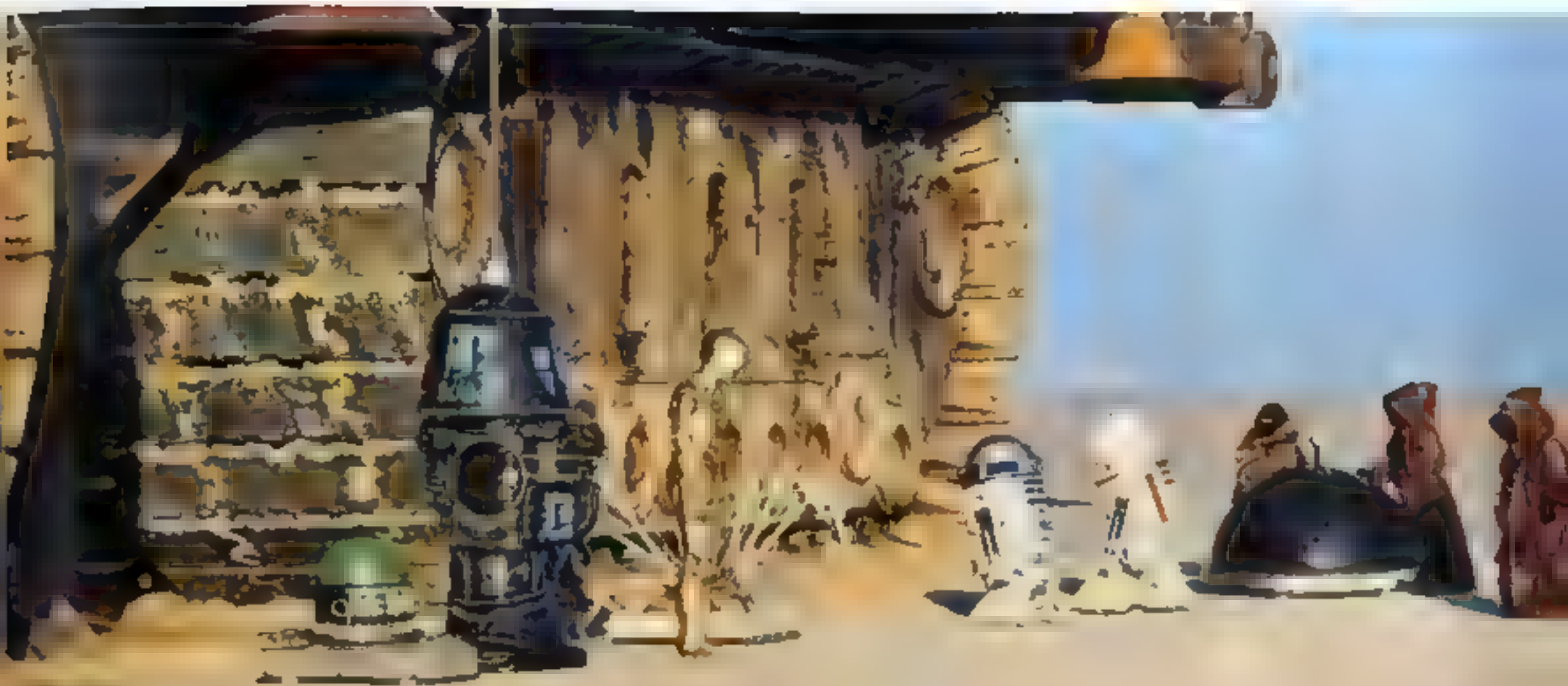
CLOSE-UP

Sandcrawler サンドクローラー

サンドクローラーは砂漠の惑星タトゥイーンに住むジャワたちの住居兼移動手段となっている巨大な要塞で、キャタピラ（クローラー）によって移動する。このビルほどの高さのある砂漠移動用ビークルには、貨物室内にドロイドやスクラップなどを吸い込むためのマグネティック吸引チューブが備わっており、全長は40メートルである。サンドクローラーは『エピソード1 ファントム・メナス』、『エピソード2 クローンの攻撃』にも、タトゥイーンのシーンで登場。後者の作品では、英国DK社「クロスセクション」シリーズで描かれた車両内部の様子がCGで再現された。

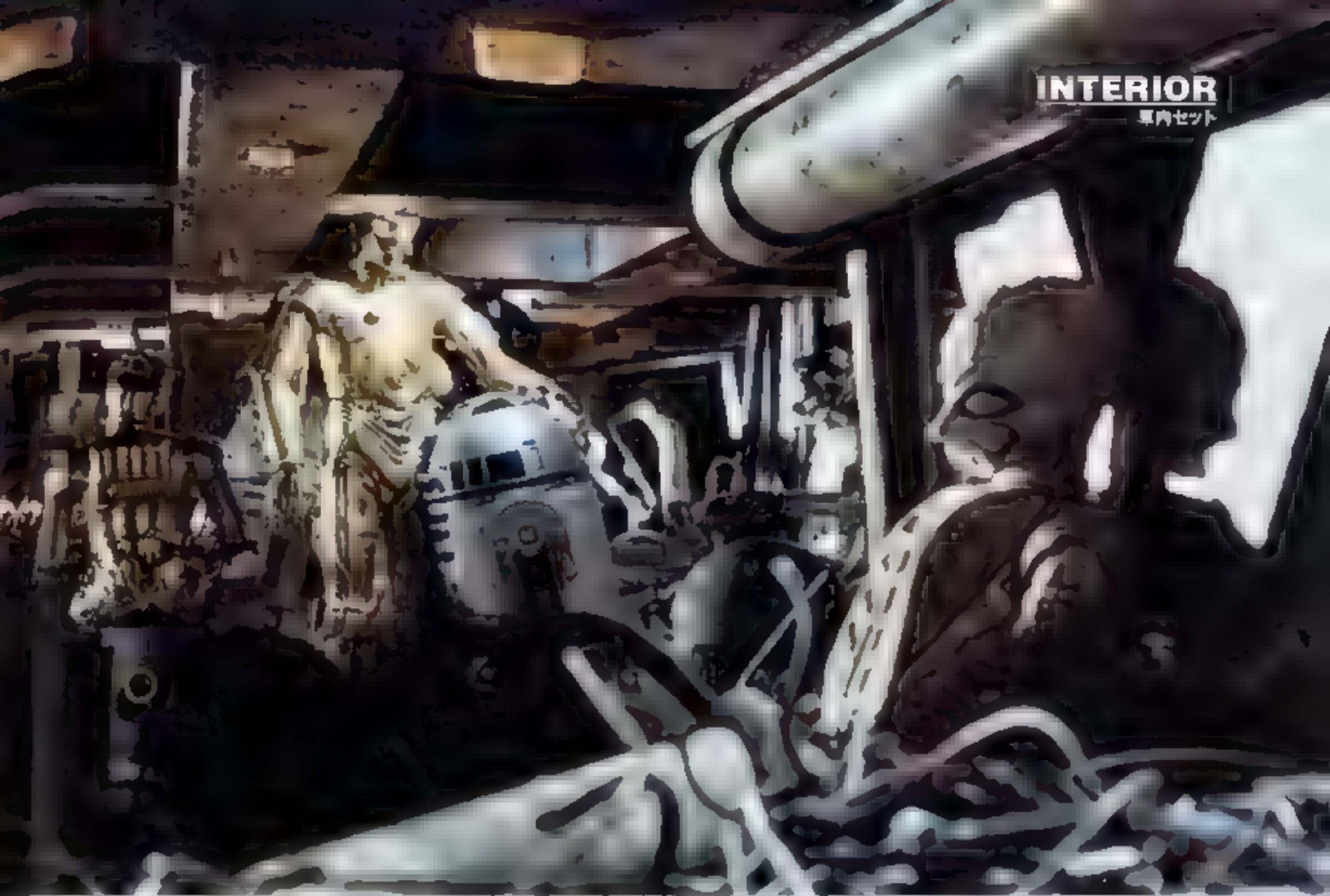
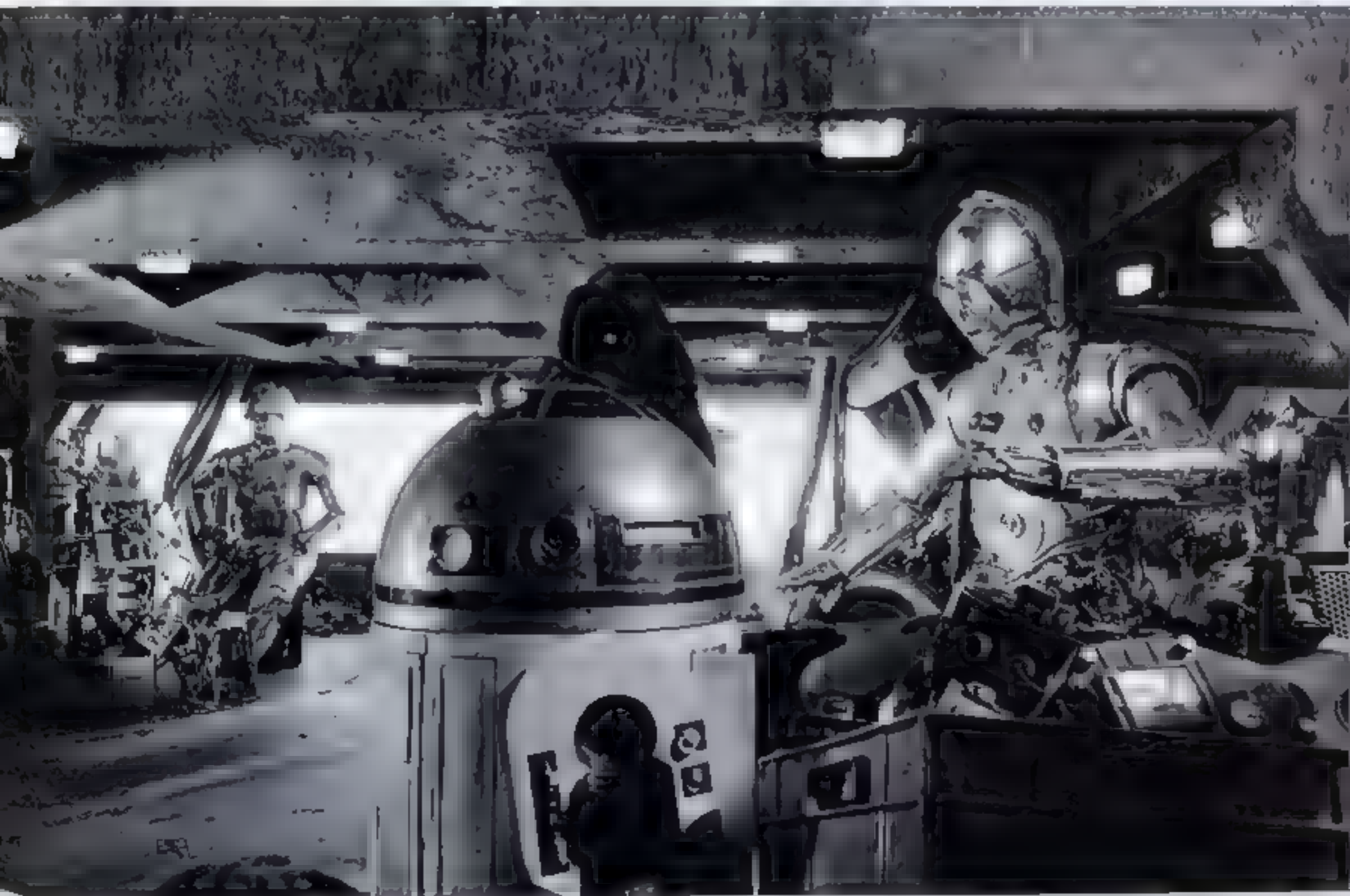
サンドクローラーのミニチュア、側面。

同ミニチュアの上部。

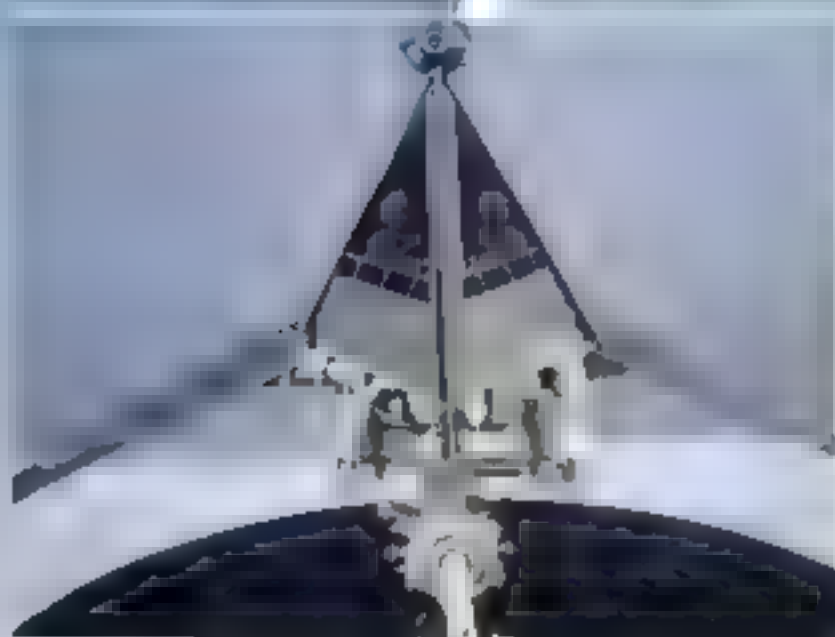
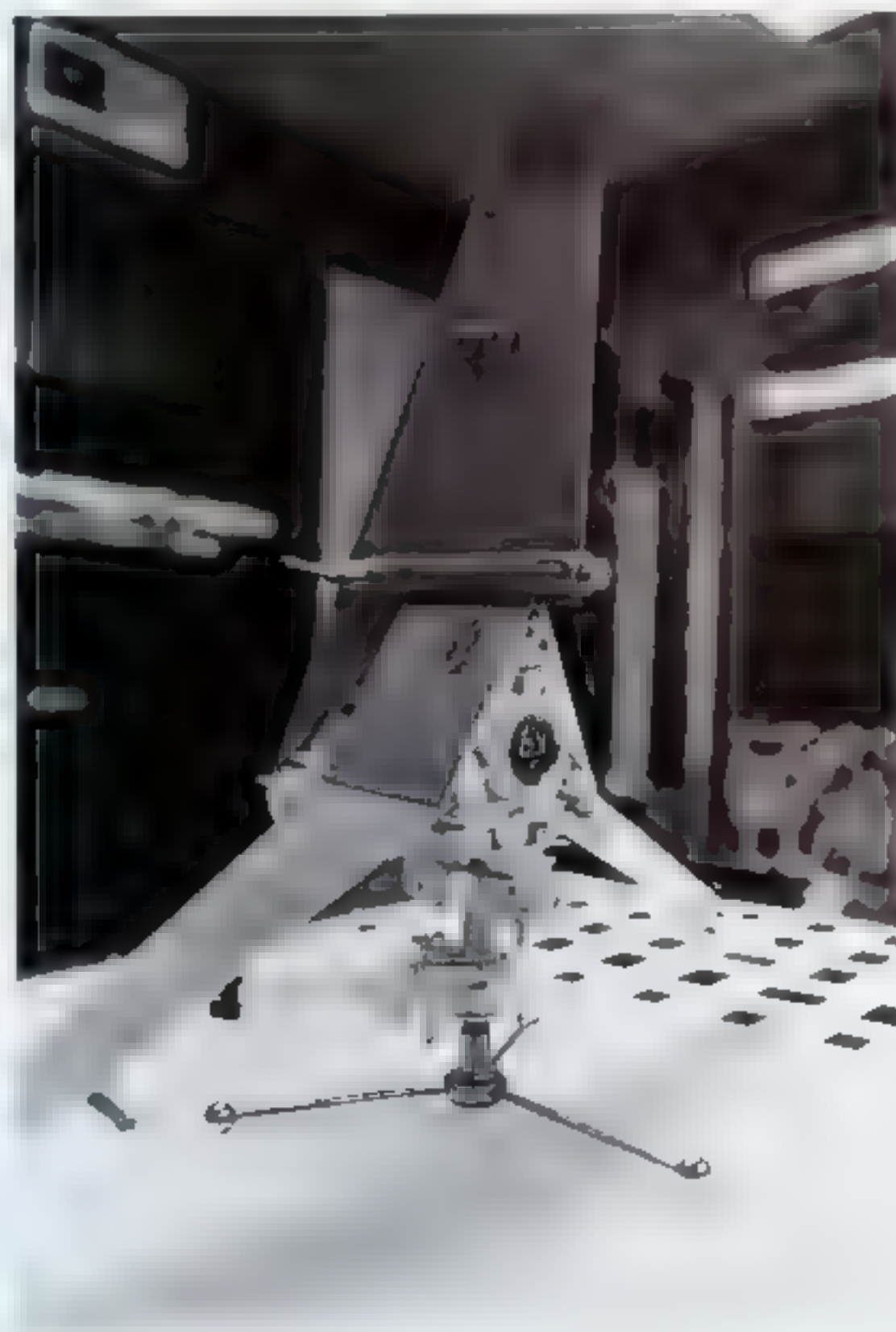
ミニチュアの後部エンジン部分のディテール。

32ページまで　ミニチュアの左側面　サンドクローラーの左側面は　ご覧のように内部のライティング機器やモーター部分のメンテナンスがしやすいように　穴が開いたままの未完成の状態で　車体の基本素材が木材であることがよくわかる

LIFE-SIZED MODEL
実寸大モデル

実寸大セットの後方には何のディテールもなかったため、ミニチュアの頭部を合成した「特別撮り」からのカット

34ページまで、チュニジアのロケで使用されたサンドクローラーの実寸大セット。R1ドロイドは自重が重かったためか、セットの上部に取り付けられた電動クレーンで、頭の上部を吊るされている（右写真）

本ページ　実寸大セットで再現されたドロイドを吸い上げる吸引チューブ　下写真は車体に格納された状態

本ページ 映像では一瞬しか映らない緑色のRA 7やCZ 3、頭部のメカが露出している後ろ姿の3PO型ドロイドなどが確認できる 貴重な内部セットの写真

T-16 Skyhopper T-16スカイホッパー

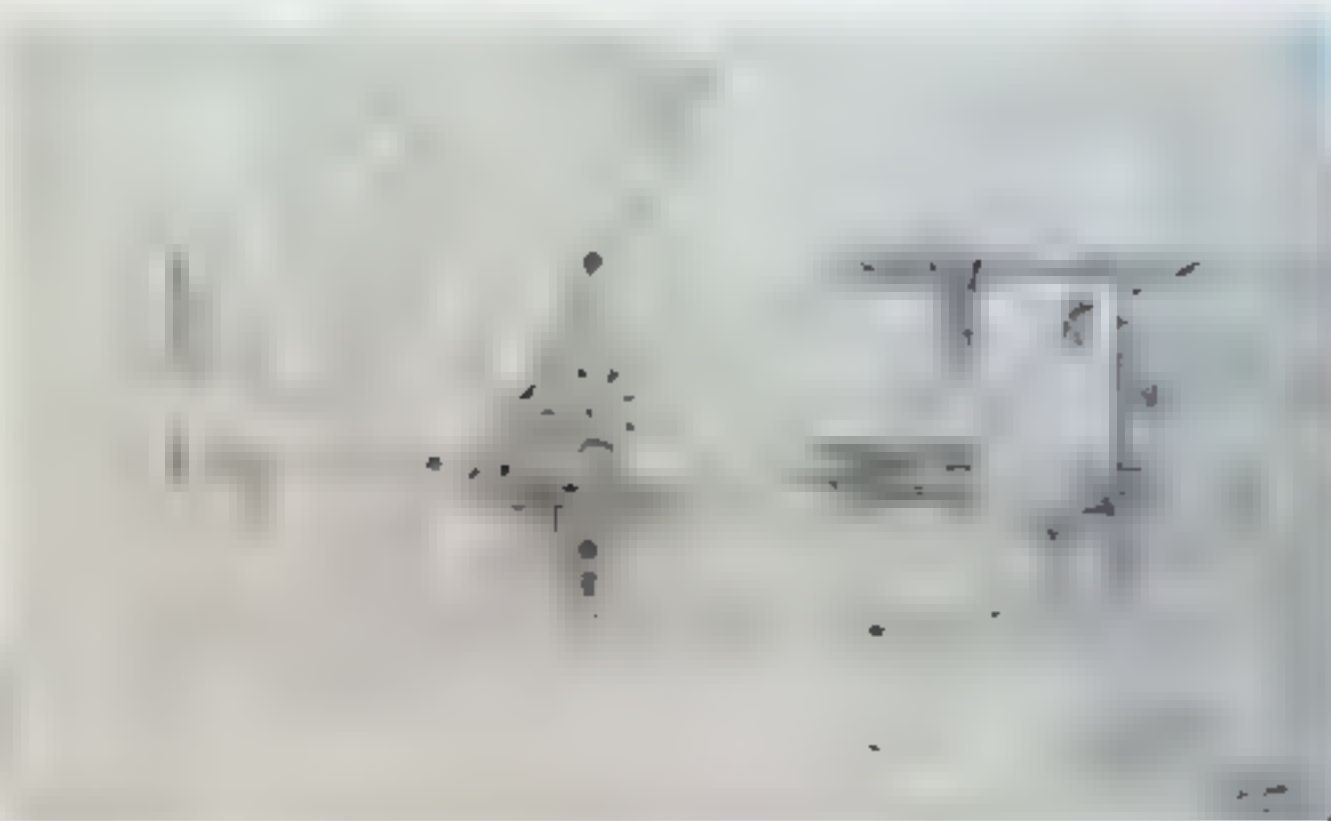
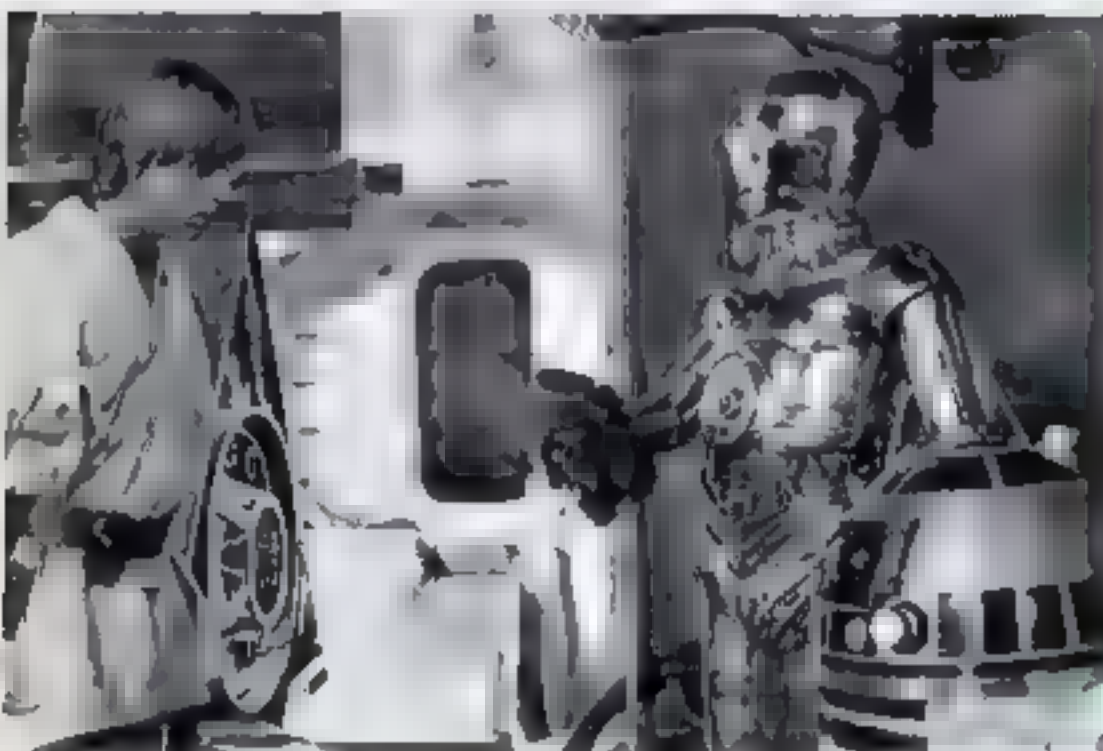
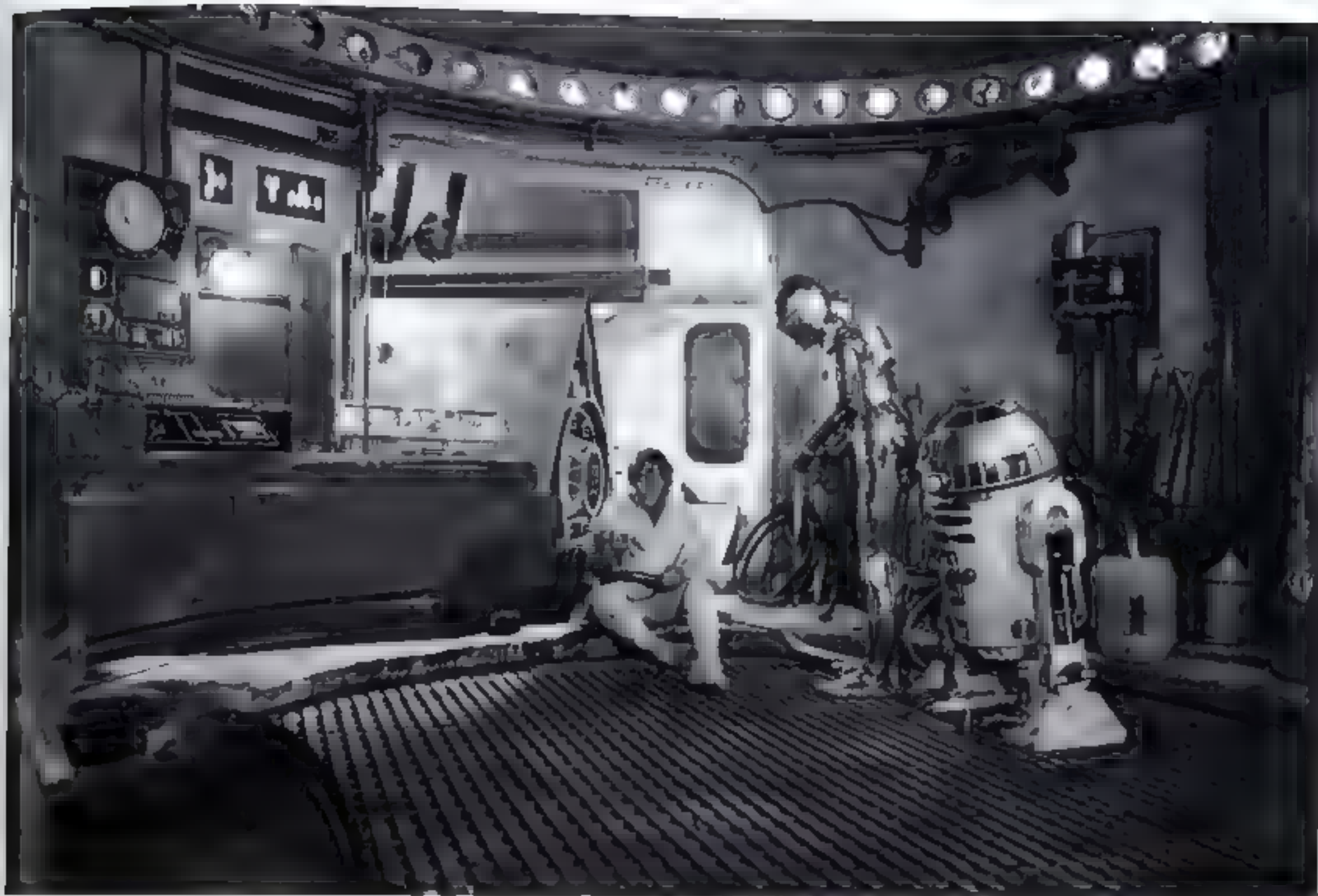
ルーク・スカイウォーカーの愛機だったT-16スカイホッパーは、T-65 Xウイング・スターファイターと操縦方法などがよく似ていることから、Xウイングの練習機として使われることもあった高性能エアスピーダーである。T-16、T-65の両機種とも製造元はインコム・コーポレーション。ルークはT-16に乗り、友人のビッグズ・ダークライターと、タトゥイーンのベガーズ渓谷で小型ウォンプ・ラットを射撃訓練の的として遊んでいた。全長10.4メートル。

左ページ・本ページ　各方向から見たミニチュア。映画製作初期に雇われたコリン・キャントウェルによって作られたプロトタイプモデルのうちのひとつである　いくつかのプロトタイプ・モデルのうち。これだけが形状を何も変更されず　ルークが手にする模型として劇中で使用された（40ページ参照

本ページ、右ページ：現存するミニチュアを2014年に撮影したもの。保存状態もよく、特に損傷した部分は見当たらないが、機体の下から前方に飛び出している銃身が左に曲がっている。本来これは機体の中心線に沿ってまっすぐに取り付けられているのが正しい姿である。

各部の細かいディテールには、当時の市販プラモデルのパーツなどが使用された。機体後ろにある大きな円形のパーツは、テープカッターの回転軸のプラスチックパーツと言われている

上写真は1995年版の『スター・ウォーズ クロニクル』では未掲載だった機体右側面。スカイホッパーは映画制作当時から写真資料が比較的多く残っているミニチュアである

フィルムに収めた時にとても見映えがよいスカイホッパーの、秀逸のデザインを、劇中で飛ばないままボツにしておくのは惜しいと考えたのか、この基本フォルムはそのままインペリアル・シャトルに引き継がれた

LIFE-SIZED MODEL

実寸大モデル

ラーズ家のガレージ外に置かれた(奥に機体の尾部が見える)スカイホッパーのセット(左ページ上より本ページ中段写真まで)。左のセット図面やミニチュアの写真を見る限り、セットはミニチュアを元に正確に拡大されて製作されたことが理解できる。上写真は(特殊撮影)で追加されたタトゥイーン上空を飛ぶスカイホッパーのシーン

X-34 Landspeeder X-34ランドスピーダー

惑星タトゥイーンでルーク・スカイウォーカーが移動時に使用していたのが、X-34ランドスピーダーである。大きさはピカイチで、ホログラフィック・ディスプレイ、地上ナビゲーション用コンピューター、険しい地形においてもスムーズで安定した走行を約束するリパルサー・カウンターバランス装置を装備したビークルだ。リパルサーリフト（反重力装置）による最高飛行高度は100センチだが、通常飛行高度は約10センチ。推進装置として3基のタービン・エンジンを搭載し、最高時速は250キロ。リパルサーフィールド発生装置ハウジングはコクピットの後方に、動力回路はコクピットの前方に設置されている。全長3.4メートル。製造元はソロスーブ・コーポレーションである。

本ページ・右ページ　実寸大で作られたX-34ランドスピーダー。この写真のモス・アイズリー宇宙港のセット撮影などに使用された。

MINIATURE MODEL

ミニチュア・モデル

本ページ・右ページ　英国で作られた実寸大モデルとは別に、合成用のミニチュア版ランドスピーダーもILMによって製作された。この見開きページの写真はすべて、現存しているミニチュアを2014年に撮影したもの。これらの写真を見る限り、元々R2-D2が載っていたはずの部分は車体の一部がはがれているので、各フィギュアはランドスピーダー本体に接着されているようだ

このミニチュアの大きさは約1メートルで、フィギュアは1/6スケールの市販フィギュアを改造したものが乗せられている。撮影は右方向からしか計画されていなかったようで、フィギュアの左半分は作り込まれていない

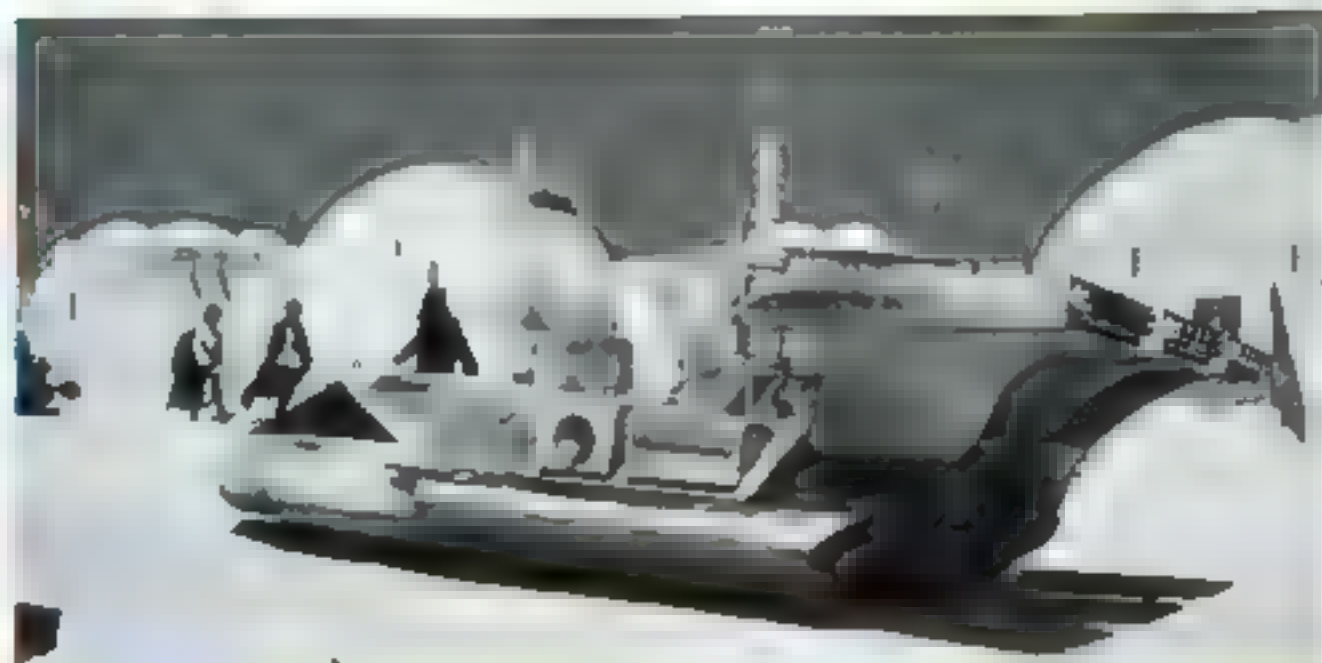
上写真、下左写真に見られるように、R2-D2の脚部底面が車輪ではなく、クローラーになっているのが大変興味深い。また、このミニチュアよりもさらにスケールの小さい遠方用のランドスピーダーも作られた（下写真）

TINY MODEL
小型モデル

V-35 Landspeeder V-35ランドスピーダー

このビークルは「V-35クーリエ」とも呼ばれ、ルーク・スカイウォーカーの育ての親、オーウェン・ラース所有のスピーダーとして、スカイホッパーと共にラース農場の地下ガレージに駐機されていた。また、1997年1月公開の〈特別篇〉では新たに追加されたロントが暴れるシーンで画面手前をV-35ランドスピーダーが横切るが、これは1976年当時に撮影された未使用フッテージを復活させたものだと思われる

ラース農場のV-35ランドスピーダー（実寸大モデル）。〈エピソード2〉でラース農場の同じ場所にCG製のV-35が合成されたことによって、オーウェン・ラースは本機を20年以上所有していることになった。なお、ラース所有の機体はモス・アイズリーを走るV-35（下右写真）と塗装が異なる。

惑星タトゥイーンのモス・アイズリー宇宙港などのシーン用に、ルークのランドスピーダー以外の車両用スピーダーが複数デザインされ実物大で作られた。1977年公開版ではあまり目立たなかったが、1997年公開の〈特別篇〉での複数のカットではデジタルで加えられたCGキャラクターと共に画面をにぎやかに彩った（上写真3点）

EPISODE II

2002年公開の〈エピソード2〉用に新たにCGモデリングされたV-35ランドスピーダー

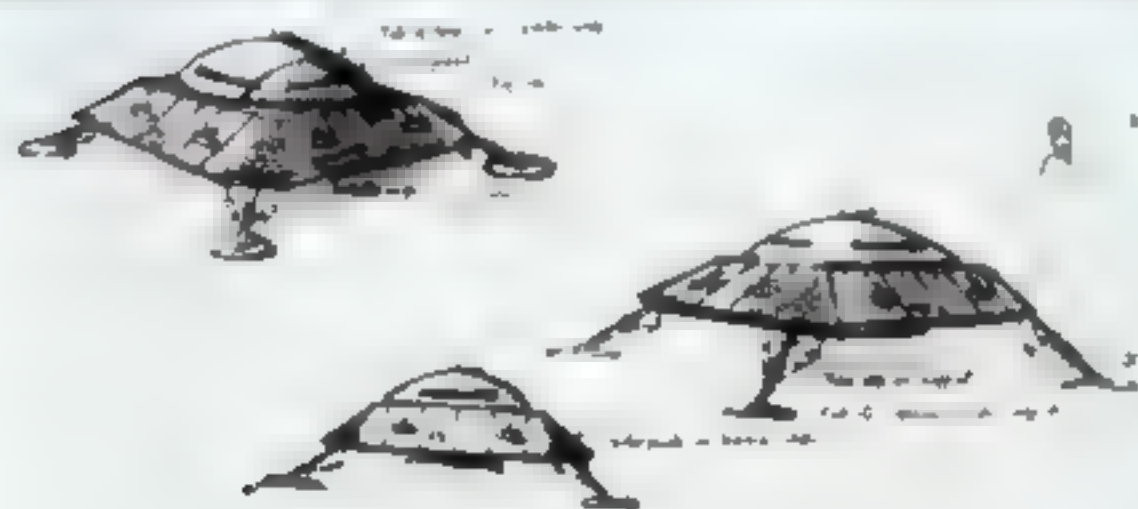
TOP VIEW

FRONT VIEW

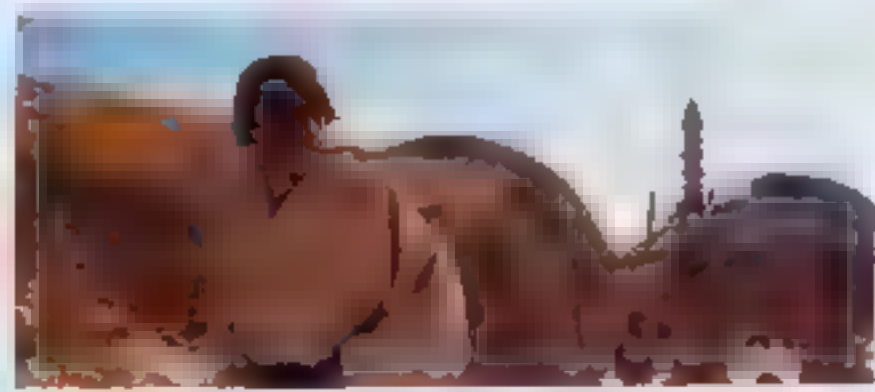
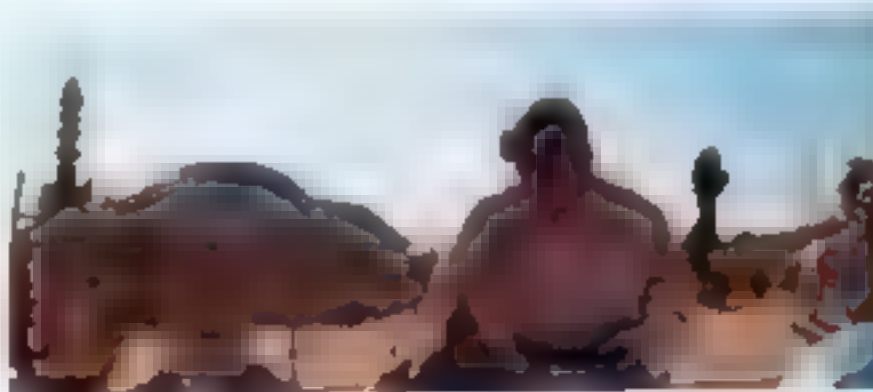
LEFT SIDE VIEW

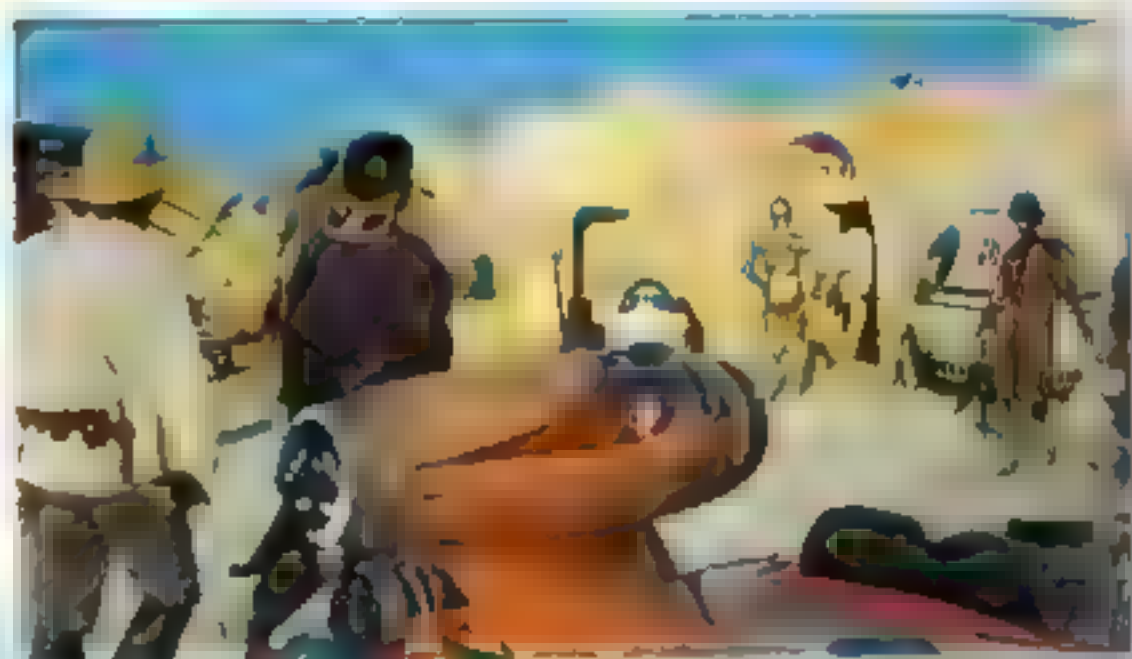
Void Spider TX-3 ヴォイド・スパイダーTX-3

蜘蛛のような8本の脚部が特徴的な遠景用スピーダーである。プリプロダクション時には「遠景のみの第3のスピーダー」としてプロダクション・デザイナーのジョン・バリーがデザインし、のちに「ヴォイド・スパイダーTX-3はヘスヒン・モーターズ社製のエア・タクシー。全長7.6メートル」と設定されたが、現在この設定は公式のものではなく“LEGENDS”扱いとなっている。

ヴォイド・スパイダーTX-3の実寸大モデル。本機は1997年発売の書籍『スター・ウォーズ ザ・ブループリント』では「The Void-Spider Land-Speeder TX-3」と紹介されていた

ジョン・バリーが1975年に描いたデザイン画。「第3のスピーダー」と題され、「『2001年宇宙の旅』のようなテクスチャー」「NASAの（月面着陸船の？）写真のような……」というメモが時代を感じさせる

TX-3の前で撮られたオビ=ワン・ケノービ役のアレック・ギネスのオフショット

ヴォイド・スパイダーTX-3が確認できる、1997年〈特別篇〉の完成画面のスクリーンショット

9000 Z001 Landspeeder 9000 Z001 ランドスピーダー

ユブリキアン・インダストリーズ社製のランドスピーダー。全長6.8メートル。ユブリキアン・インダストリーズ社は、ジャバ・ザ・ハットのセール・バージ「ケタンナ」などを製造した会社である。

上右図版は「第4のスピーダー」と題された、1975年5月12日付けの図面で、これをもとにチュニジアでのロケ用に実寸大モデルが製作された。本機は「ユブリキアン9000 Z001」とも呼ばれていたが、「Z001」は『2001年宇宙の旅』へのオマージュを表す名だと思われる

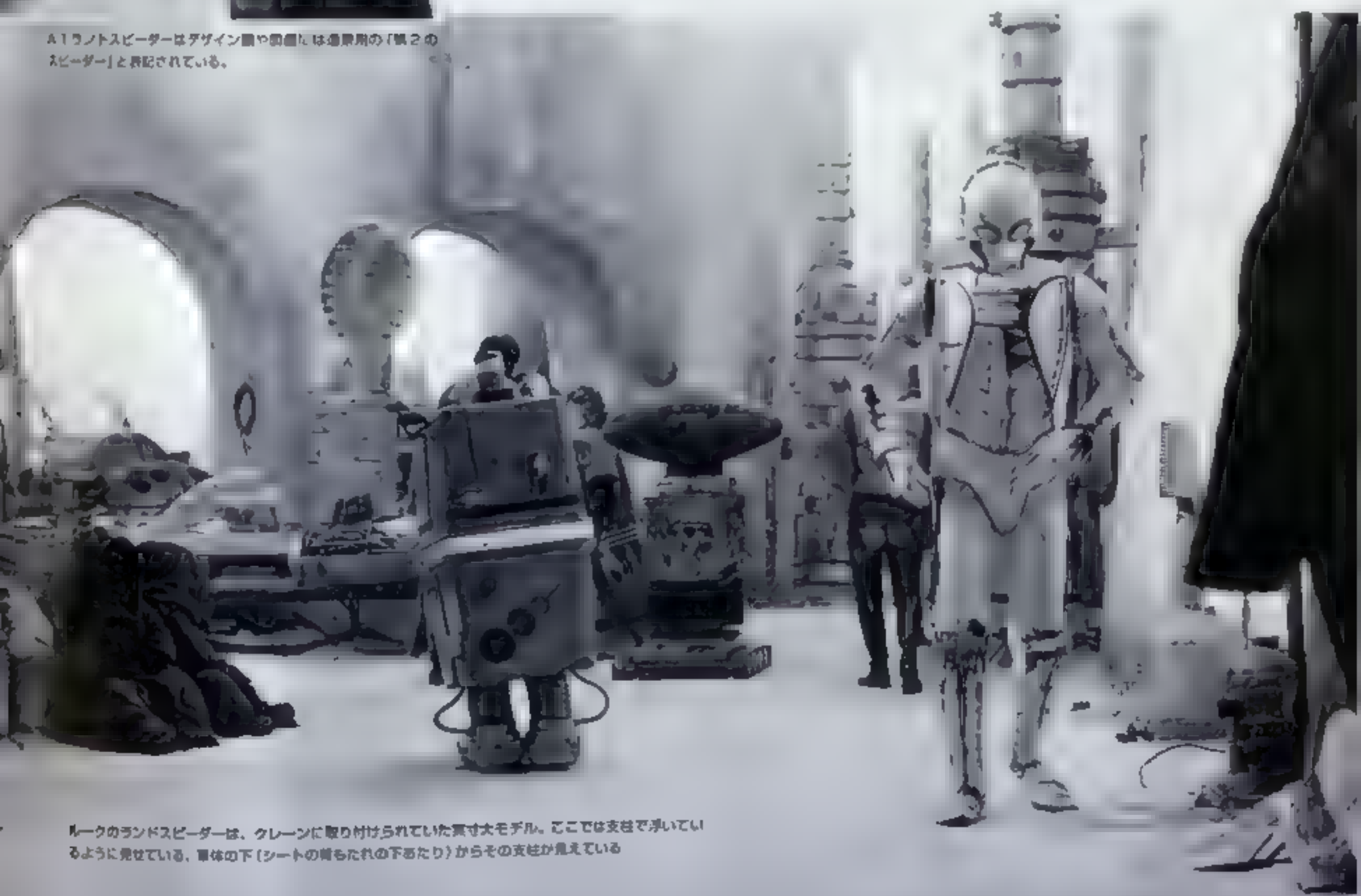
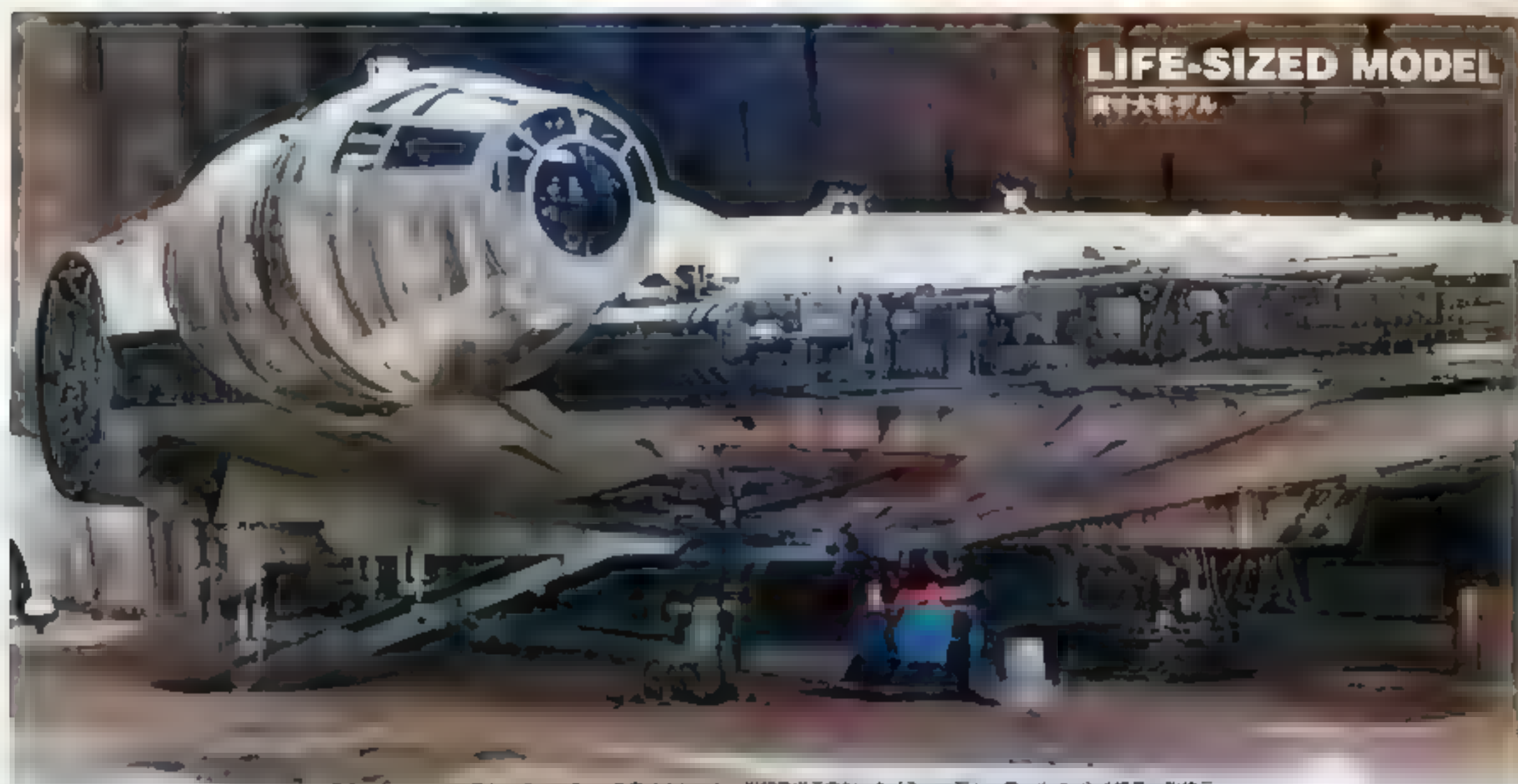
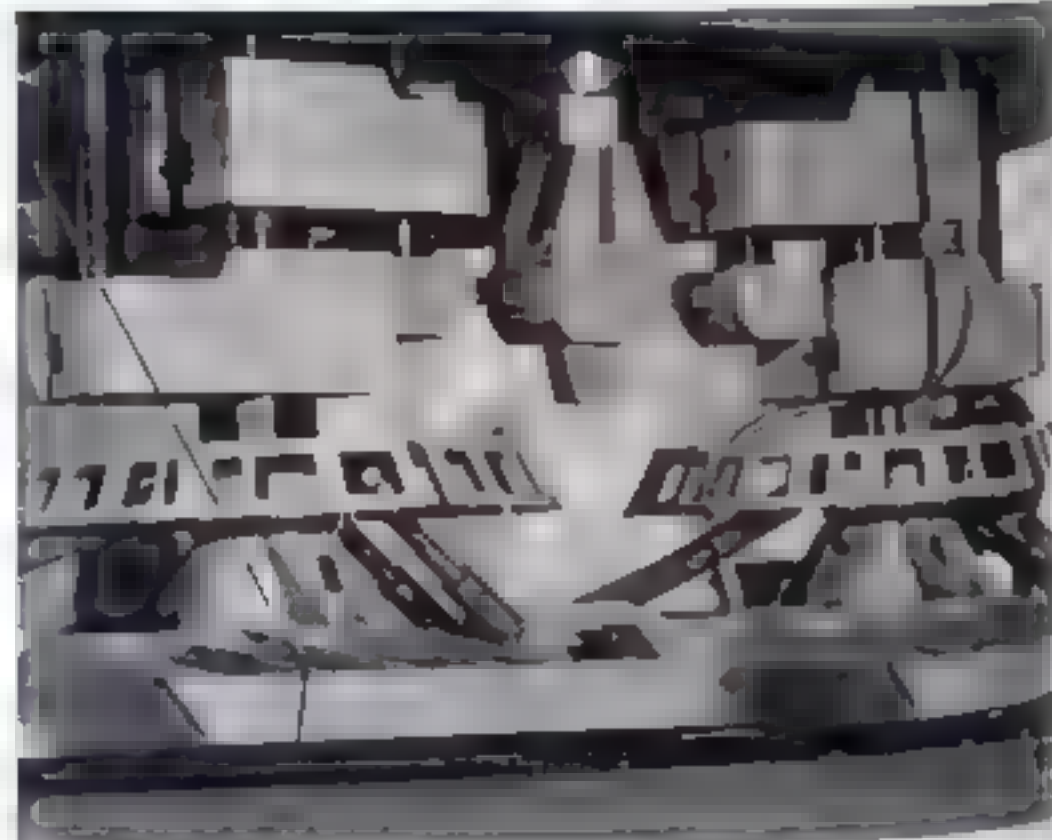
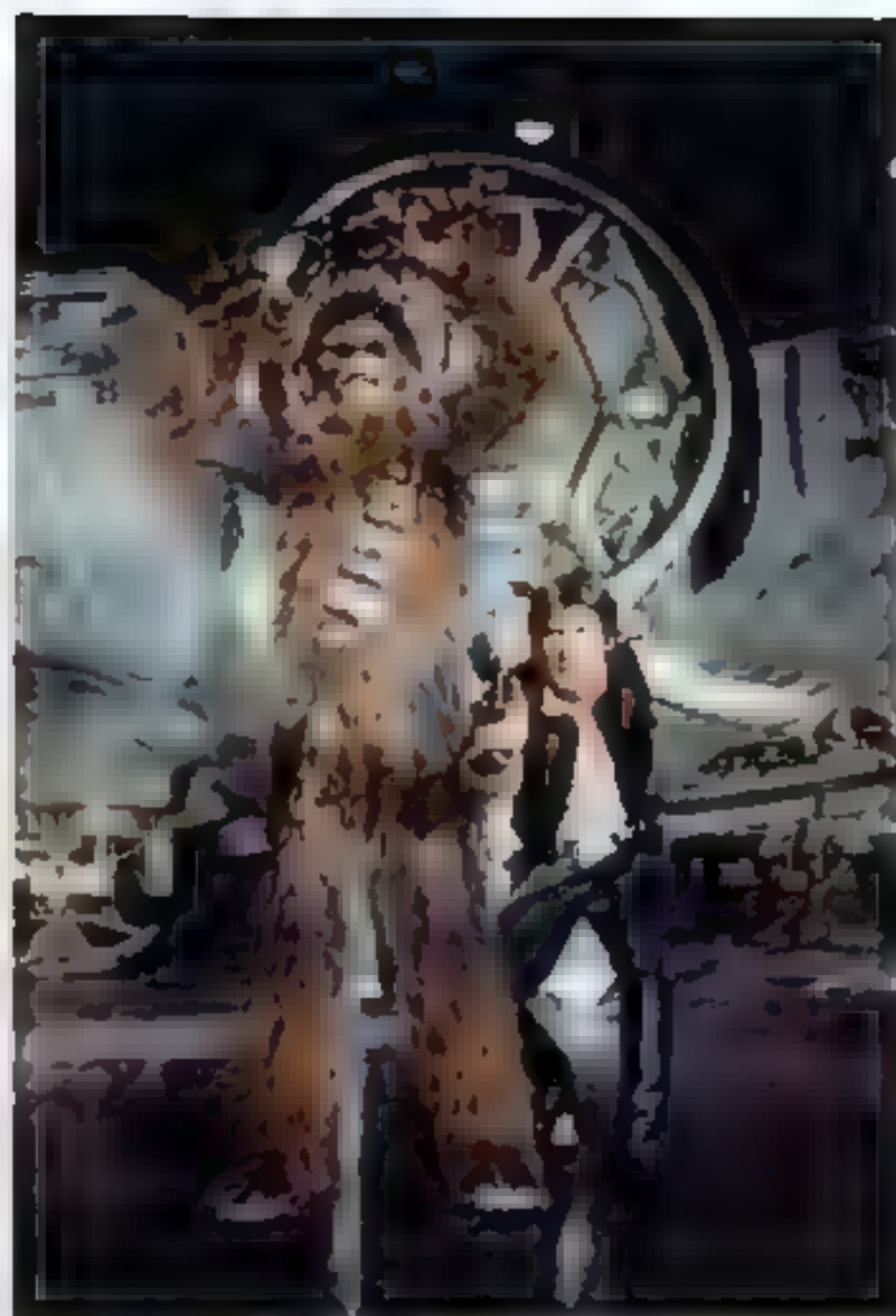
チュニジアでのスチールで、9000 Z001 ランドスピーダーとルークのランドスピーダー、その奥にA-1ランドスピーダーの実寸大モデル3台が同時に映っているという珍しい写真

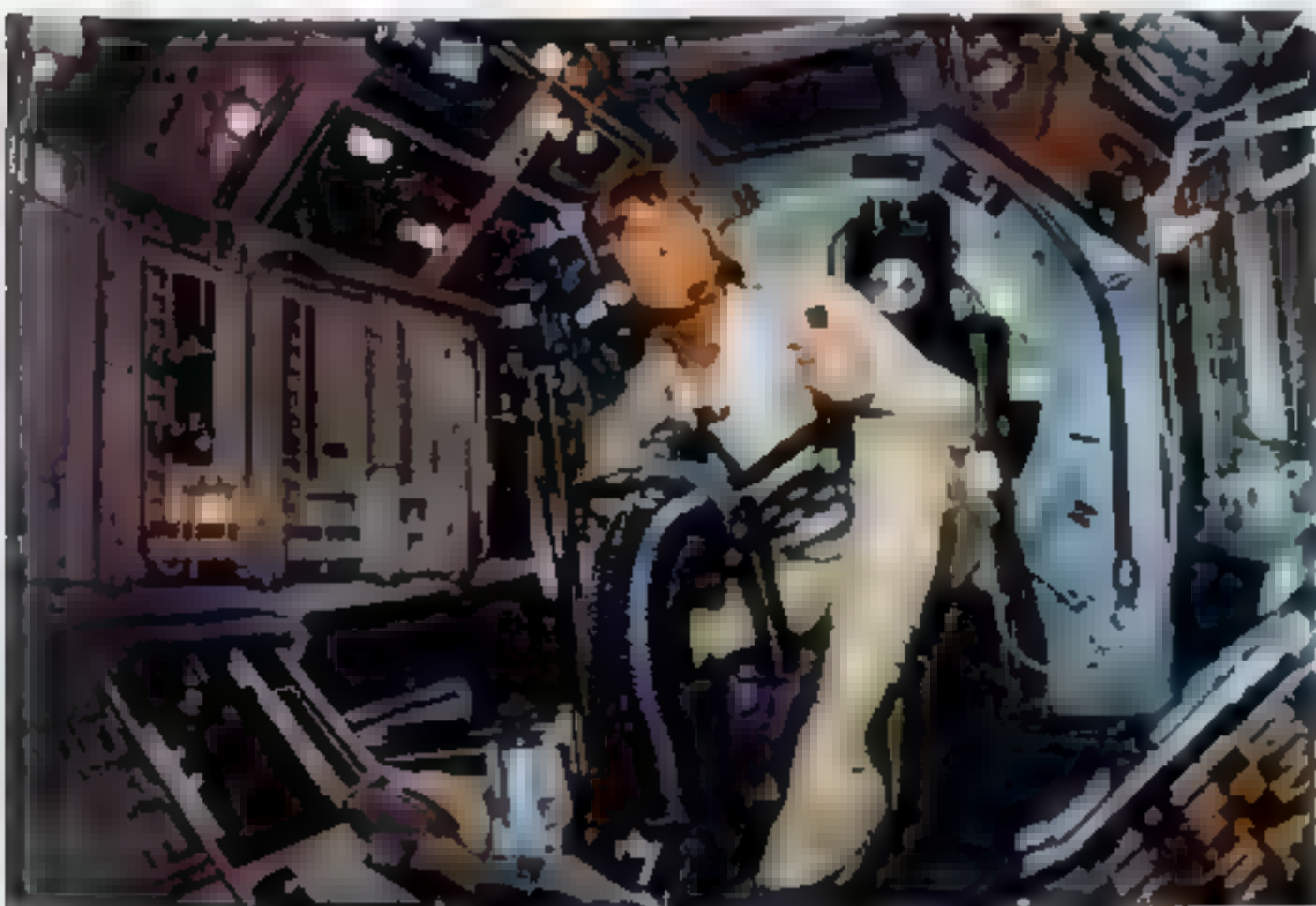
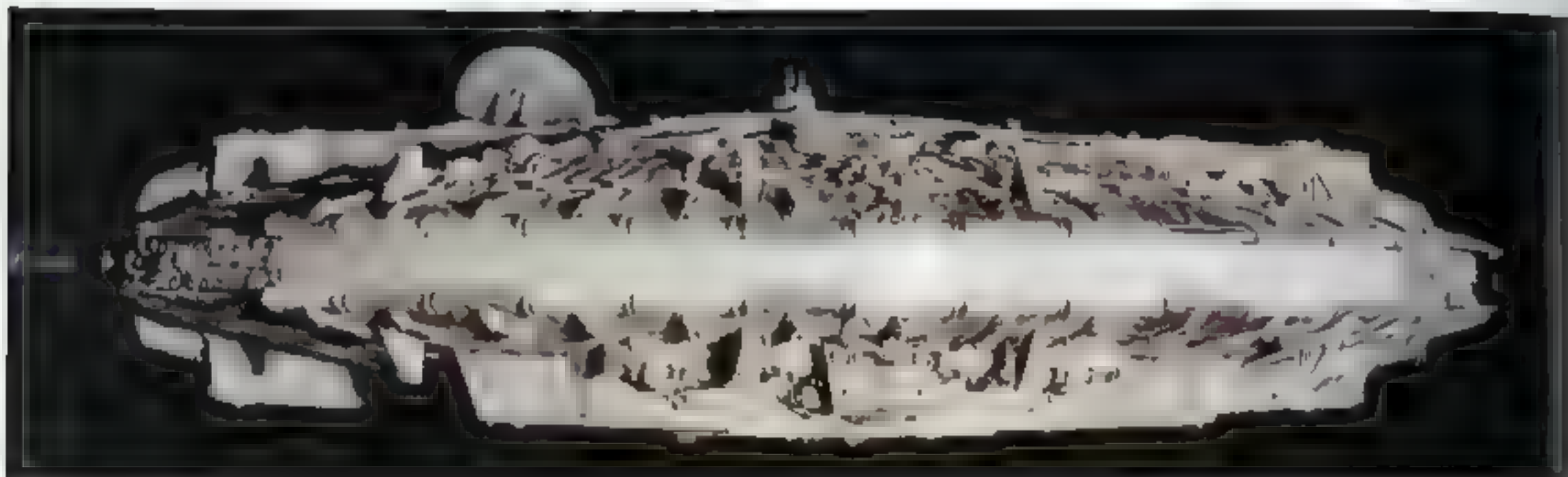
チュニジアから引き揚げてきたA-1ランドスピーダーの実寸大モデルは，独自のマーキングが塗り直されスクラップとしてセットに置かれている。コクピットのウィンドウは本来なら透明アクリルなどで作るのだが，単に青色に塗られているだけであった

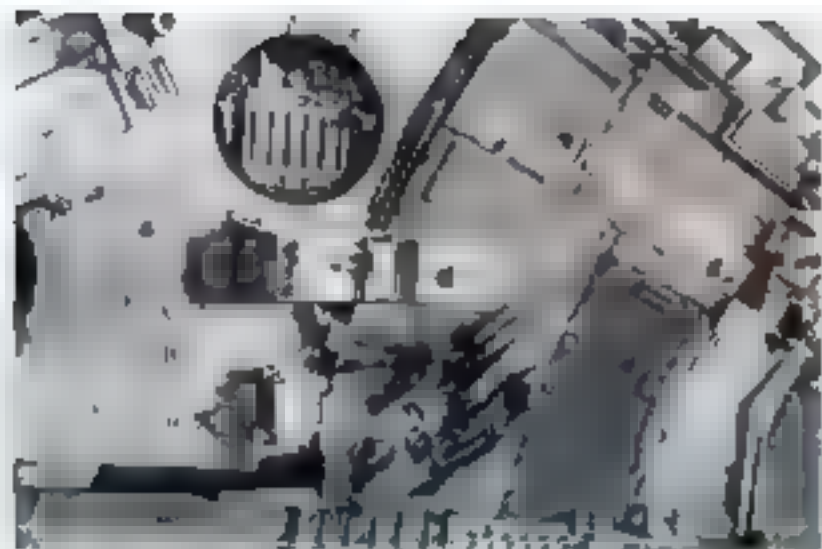
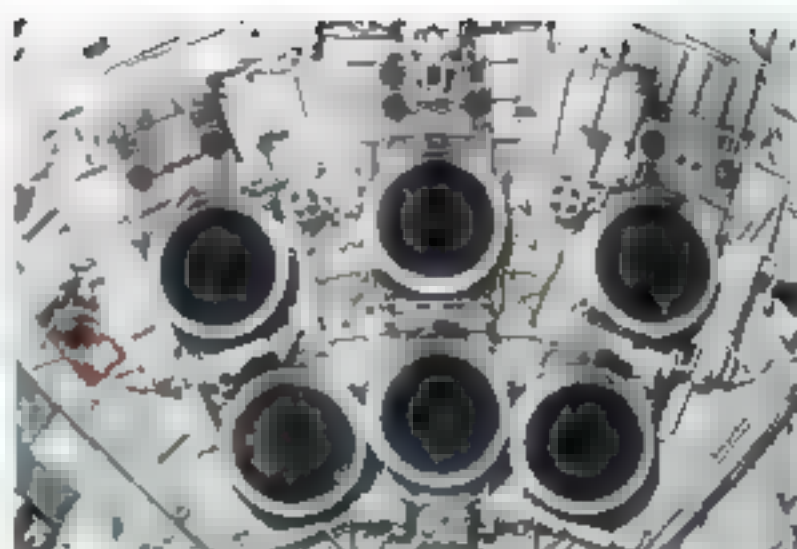
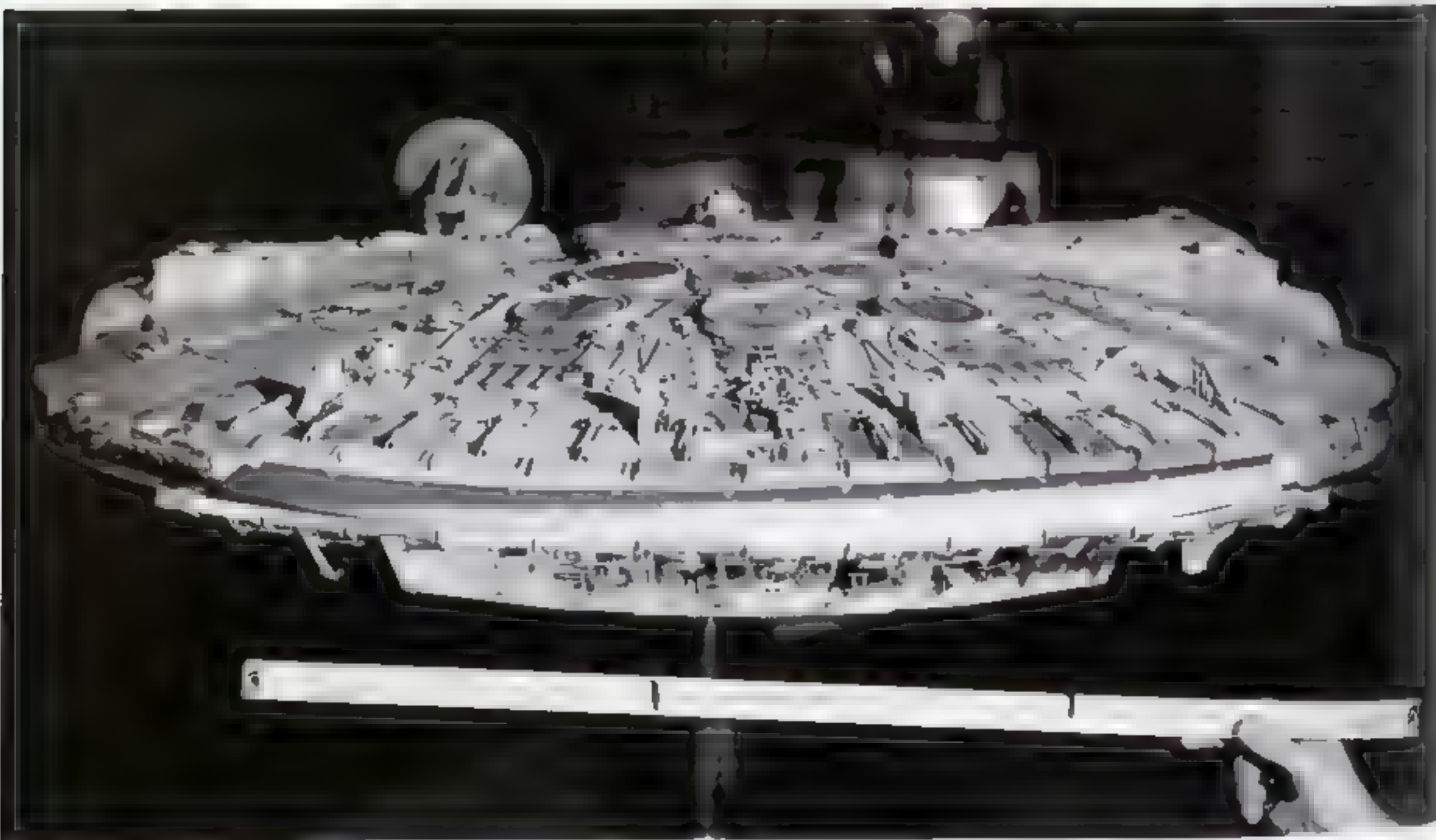
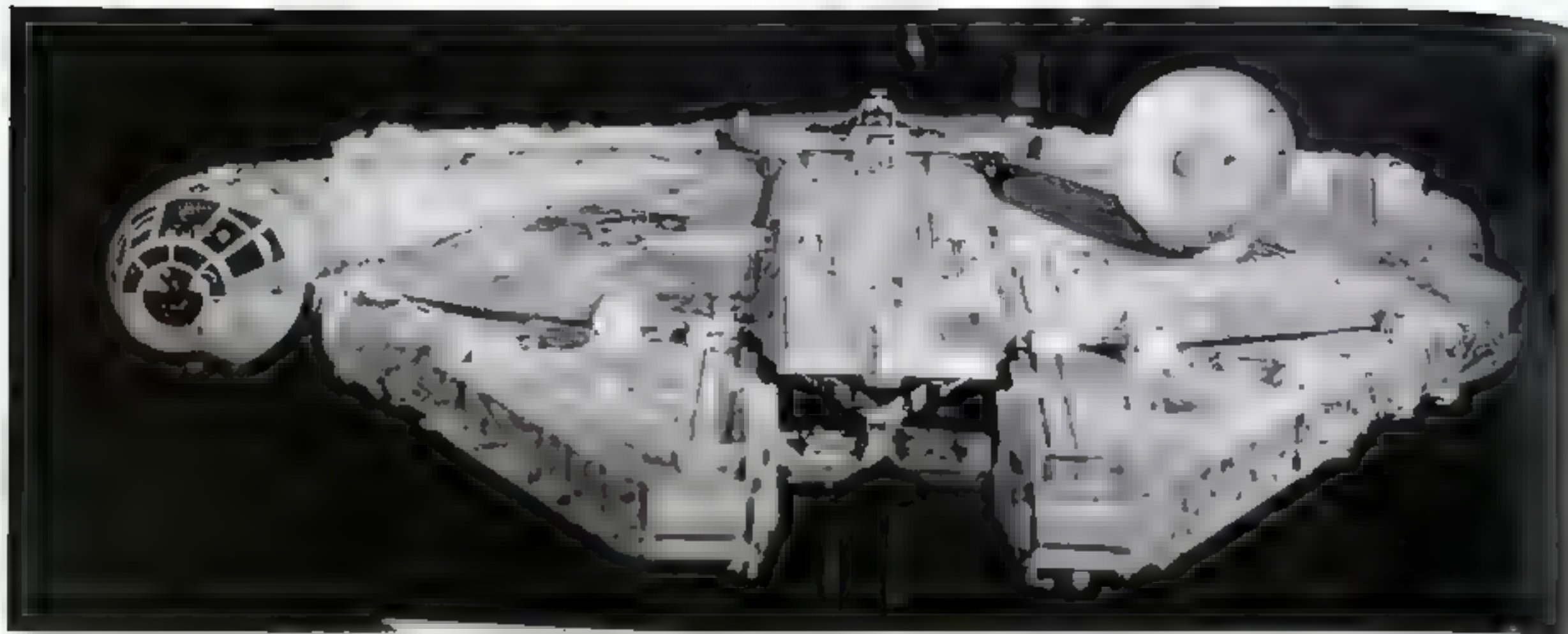
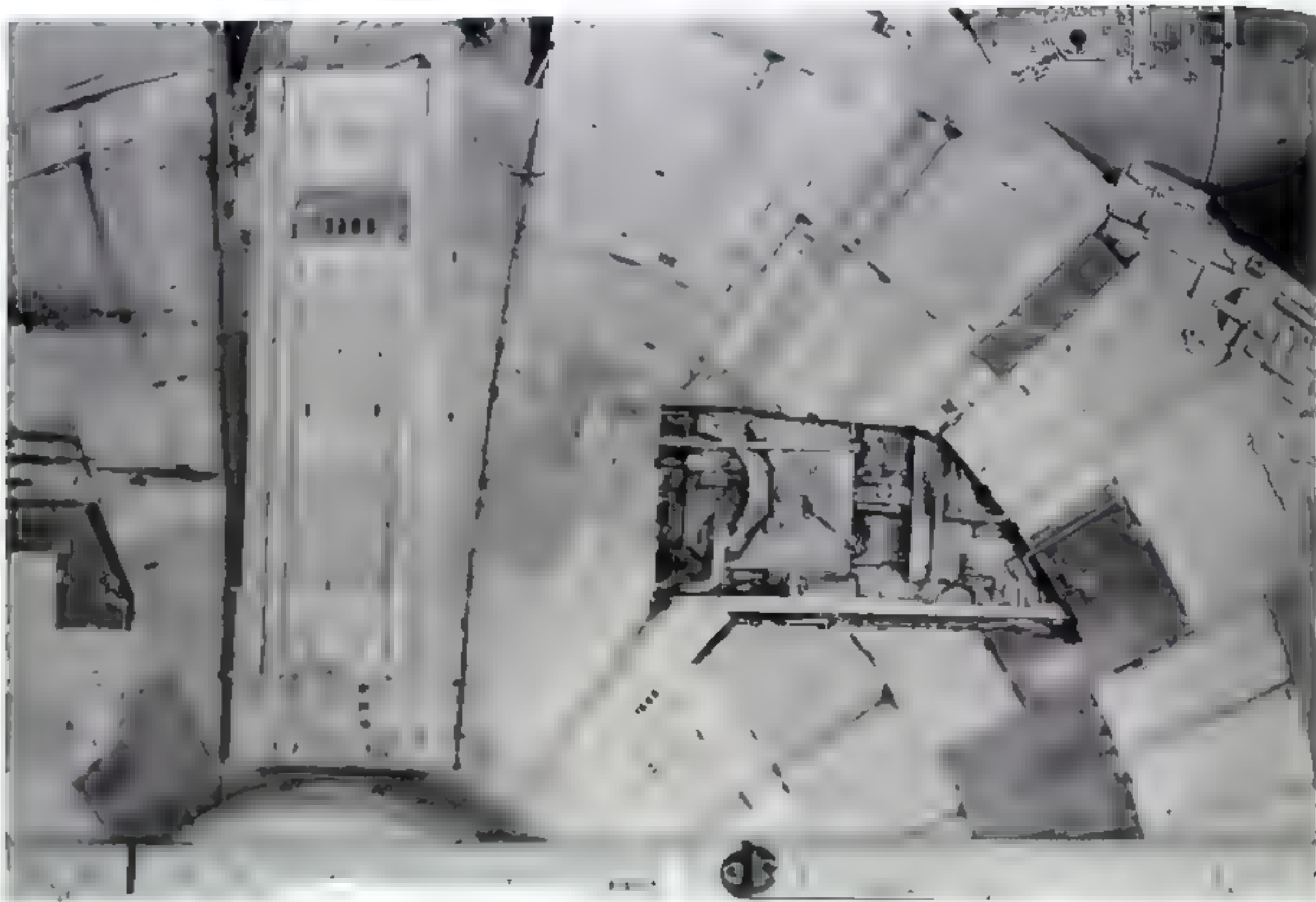
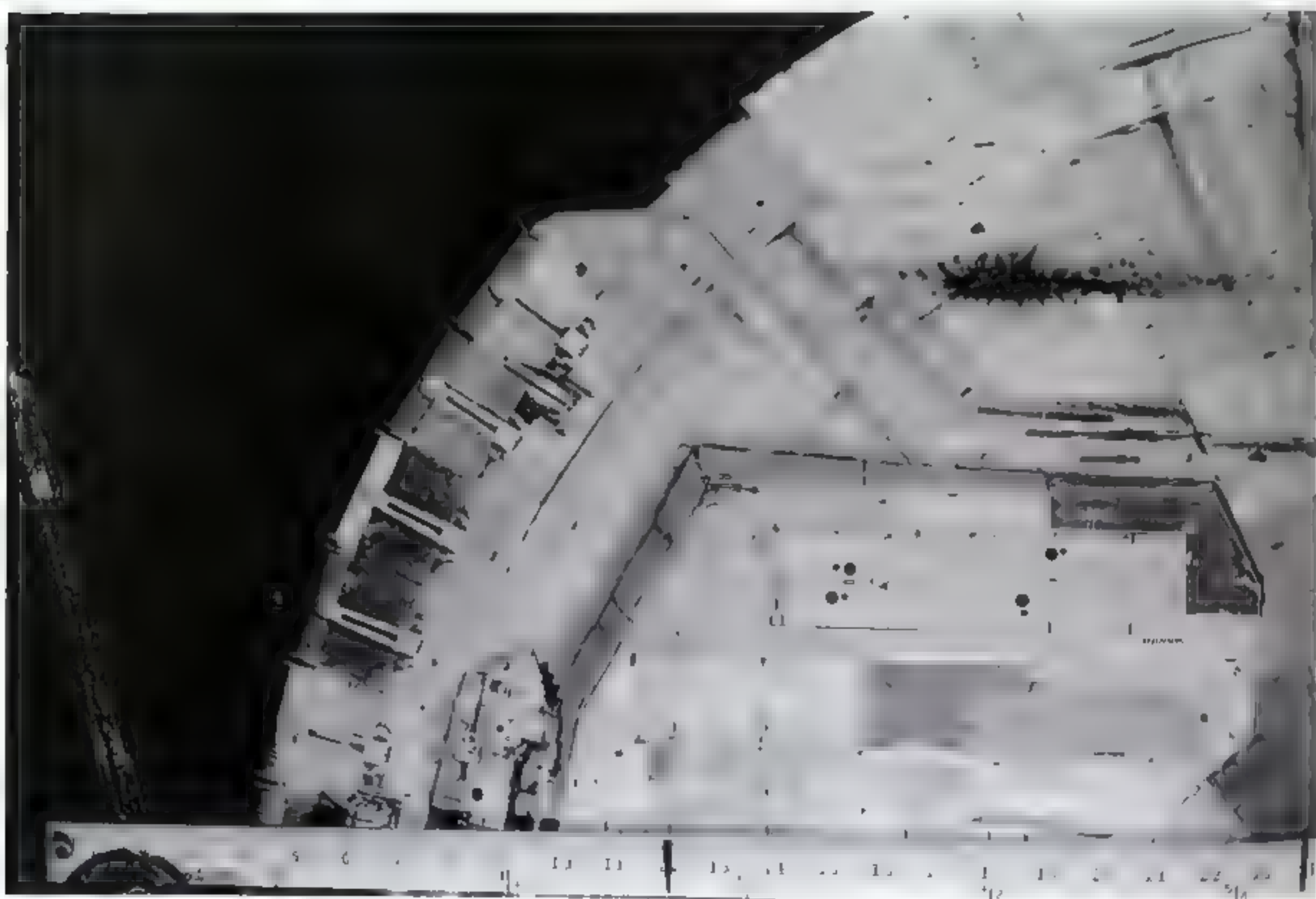
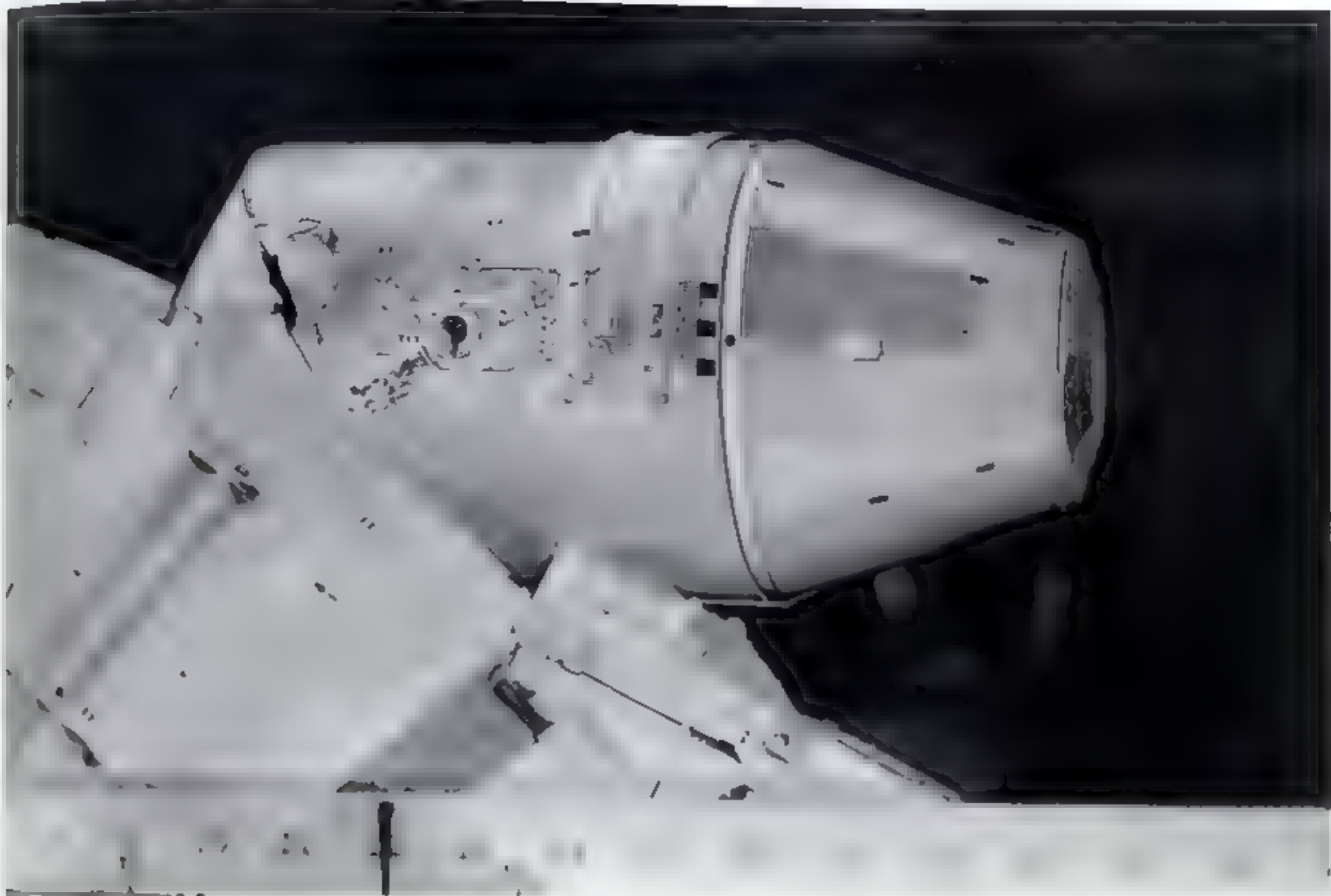
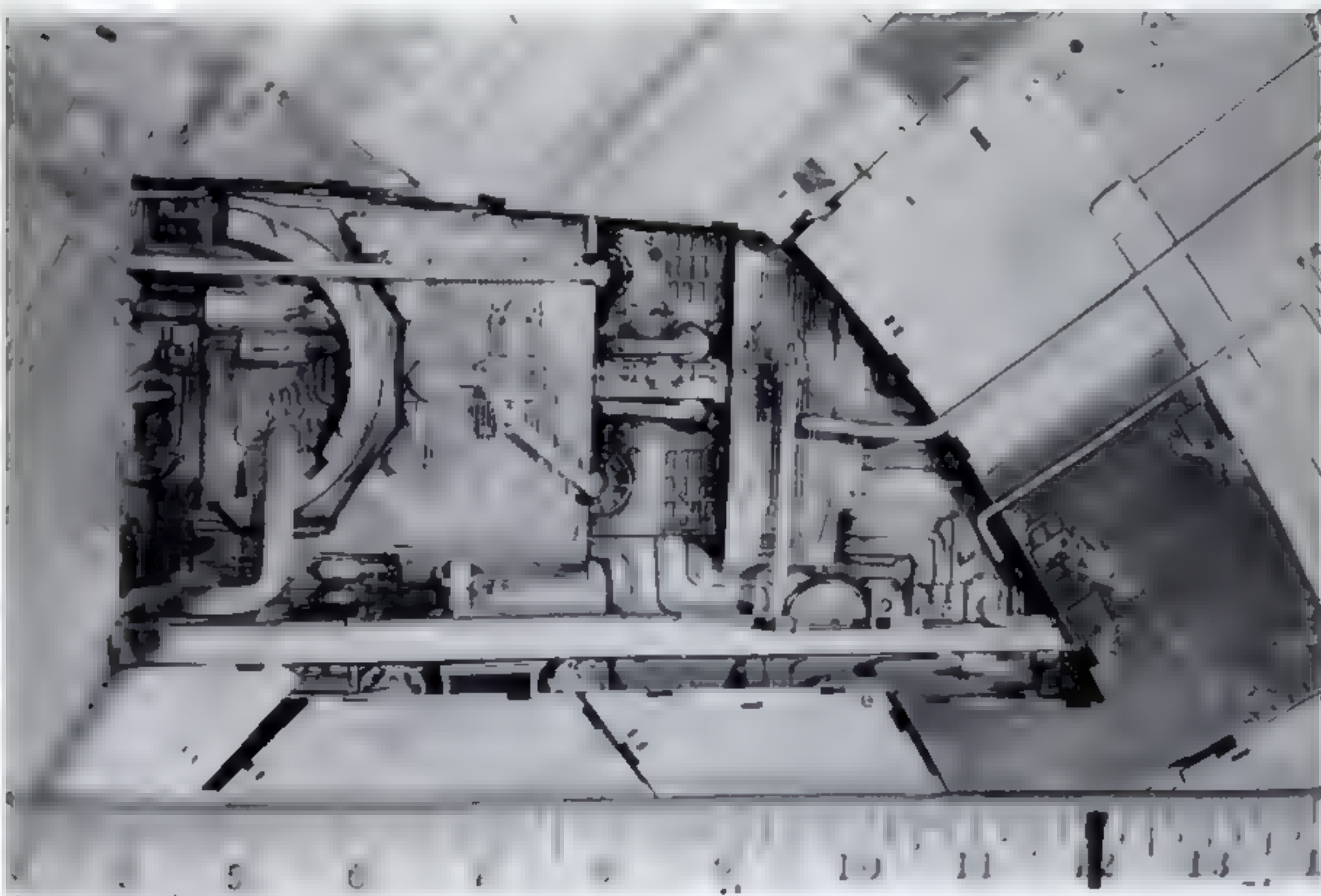
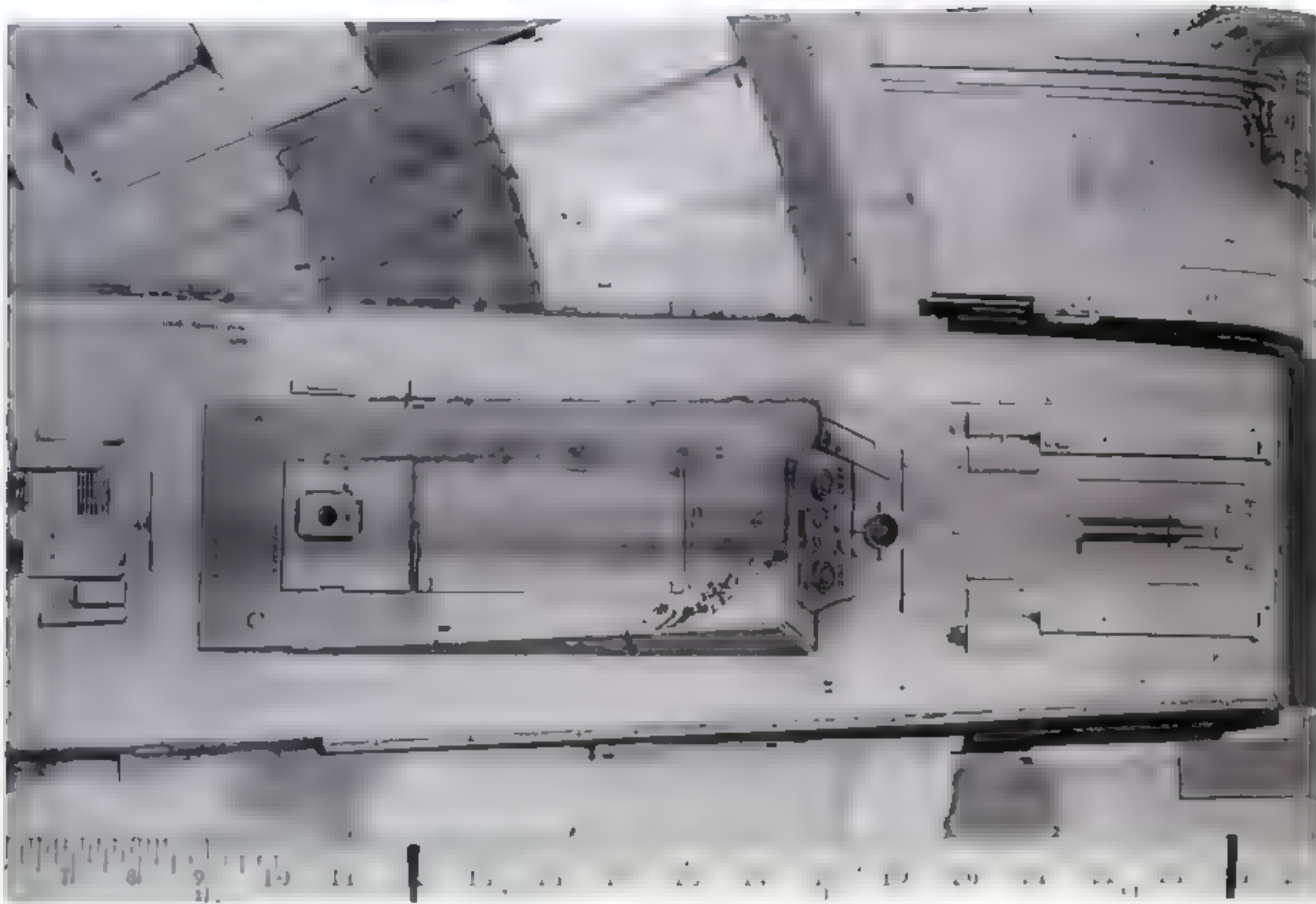
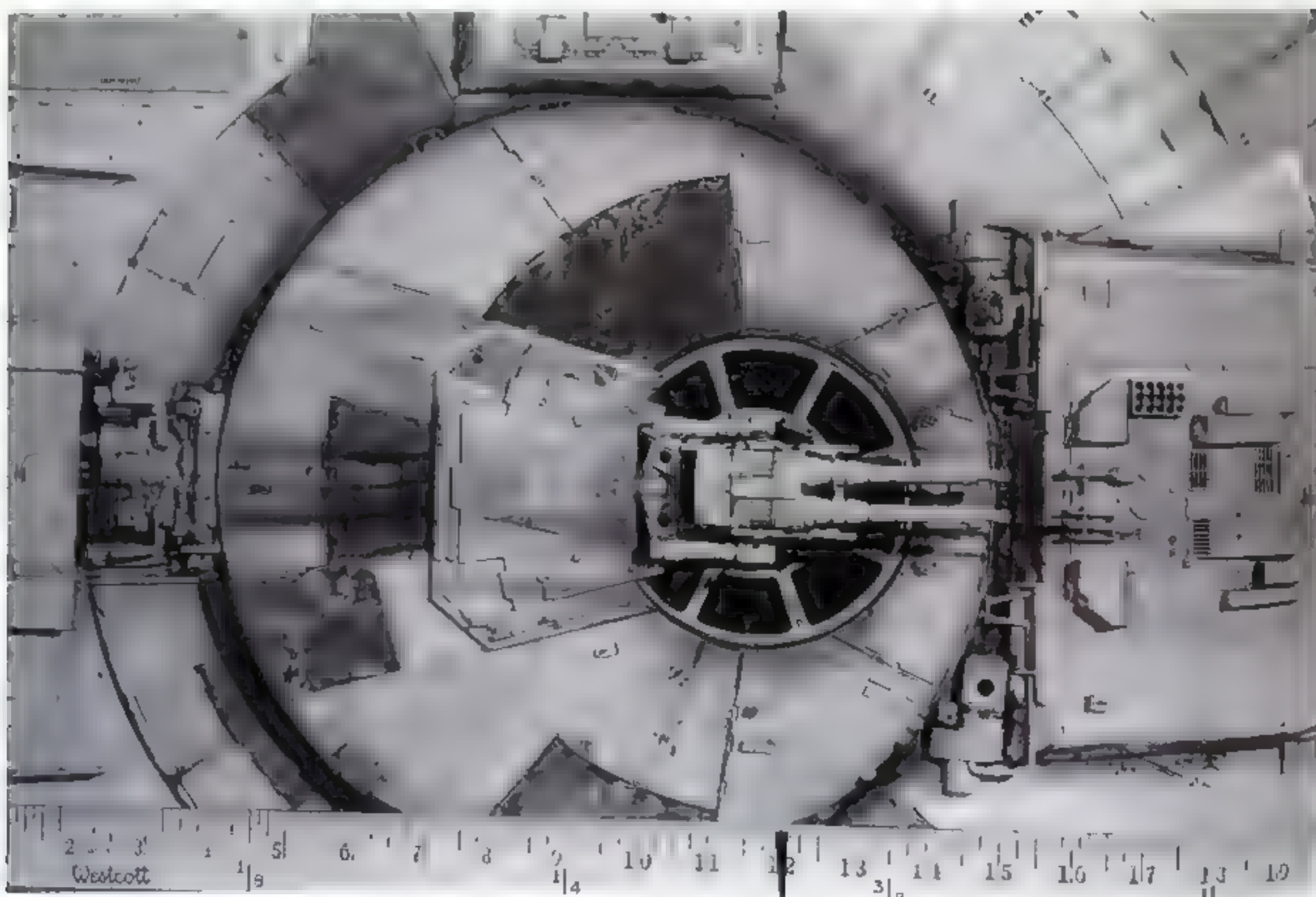
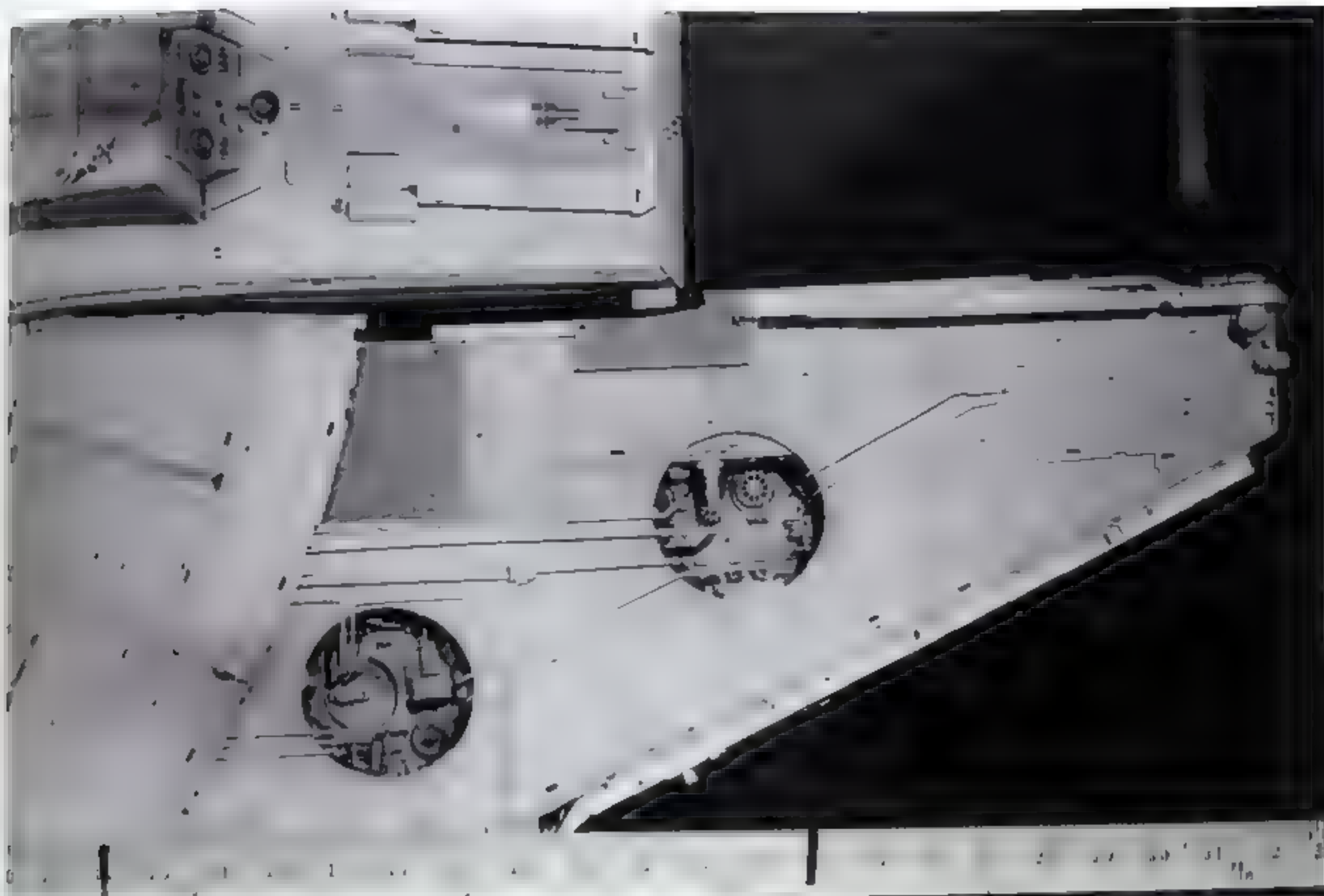
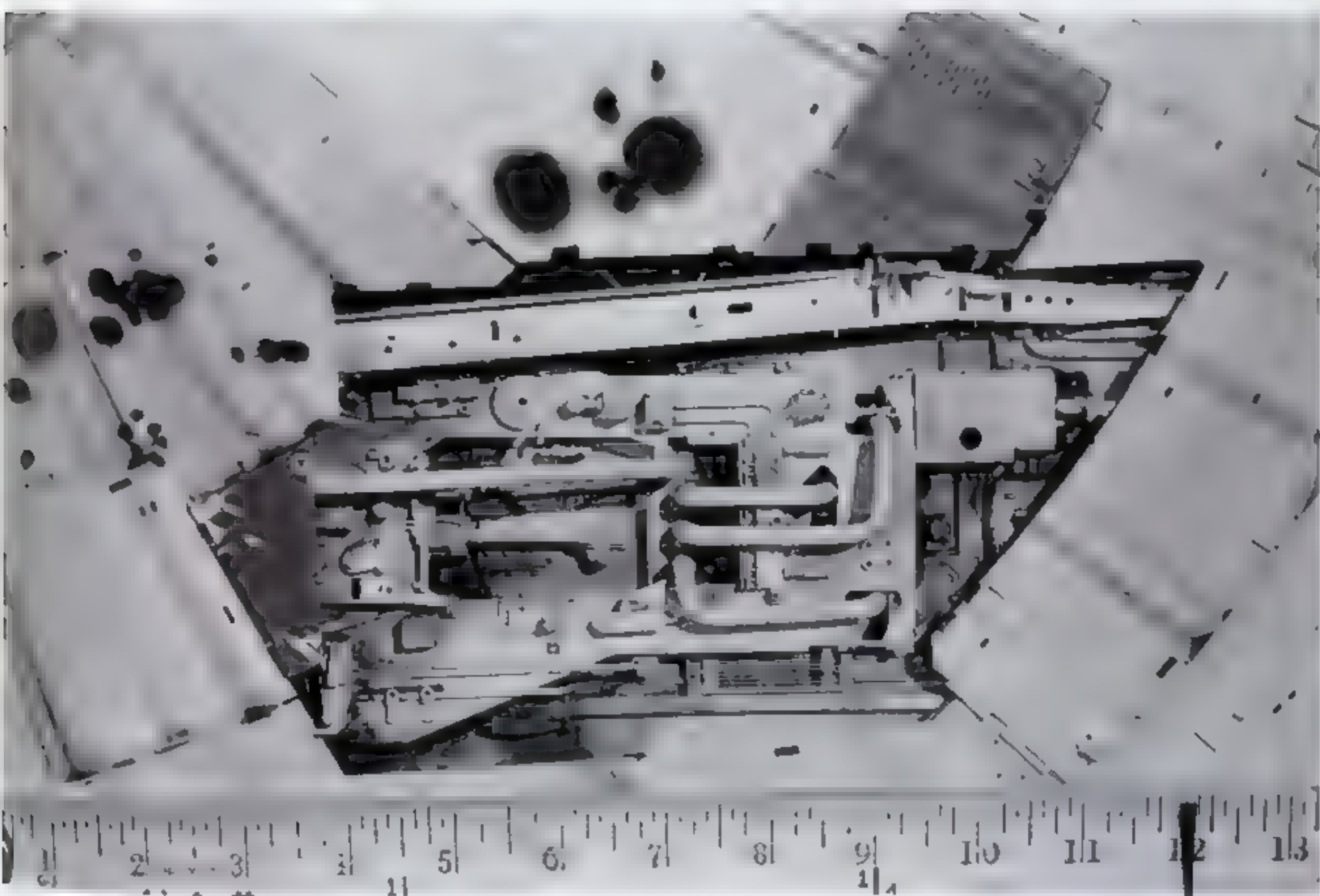
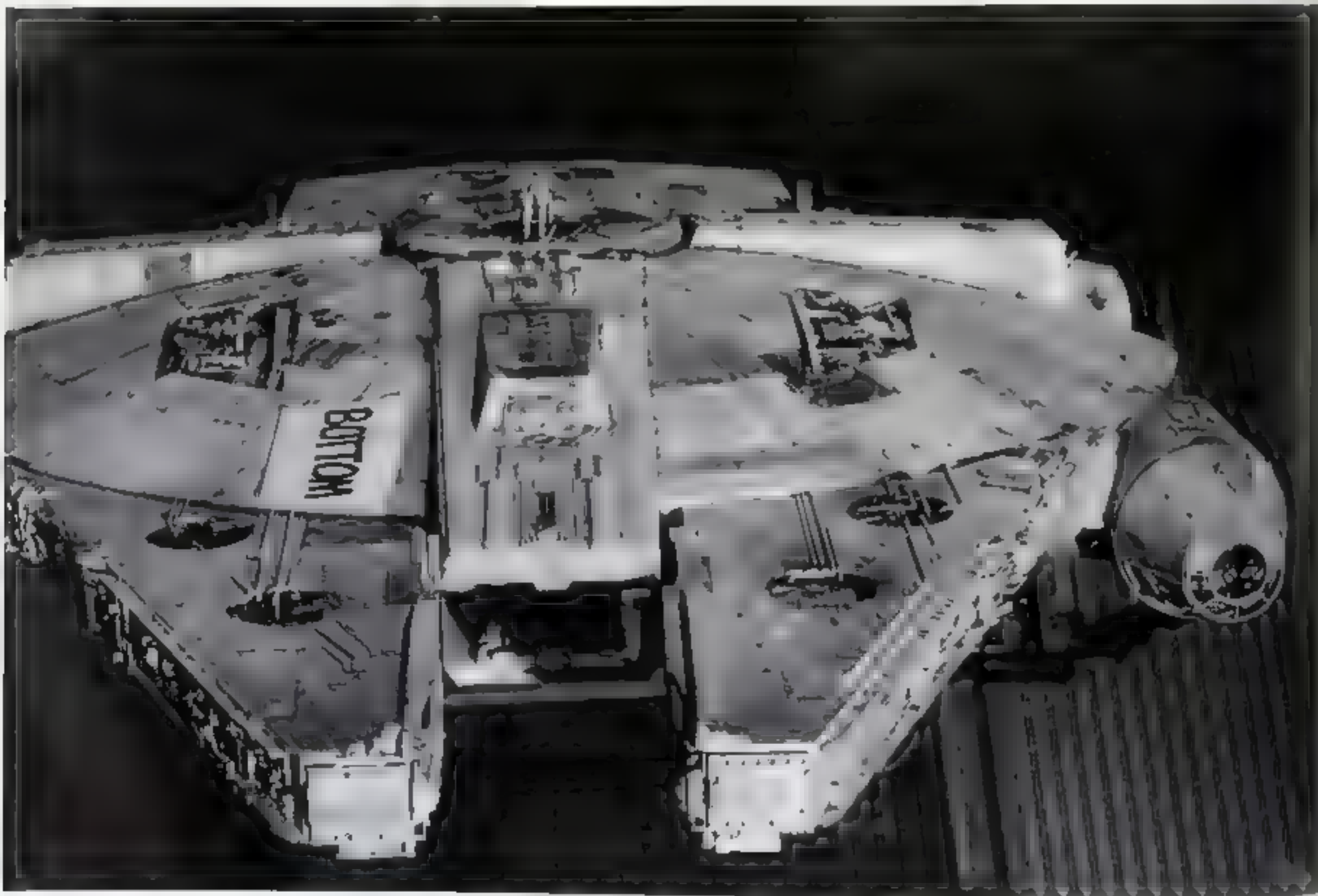
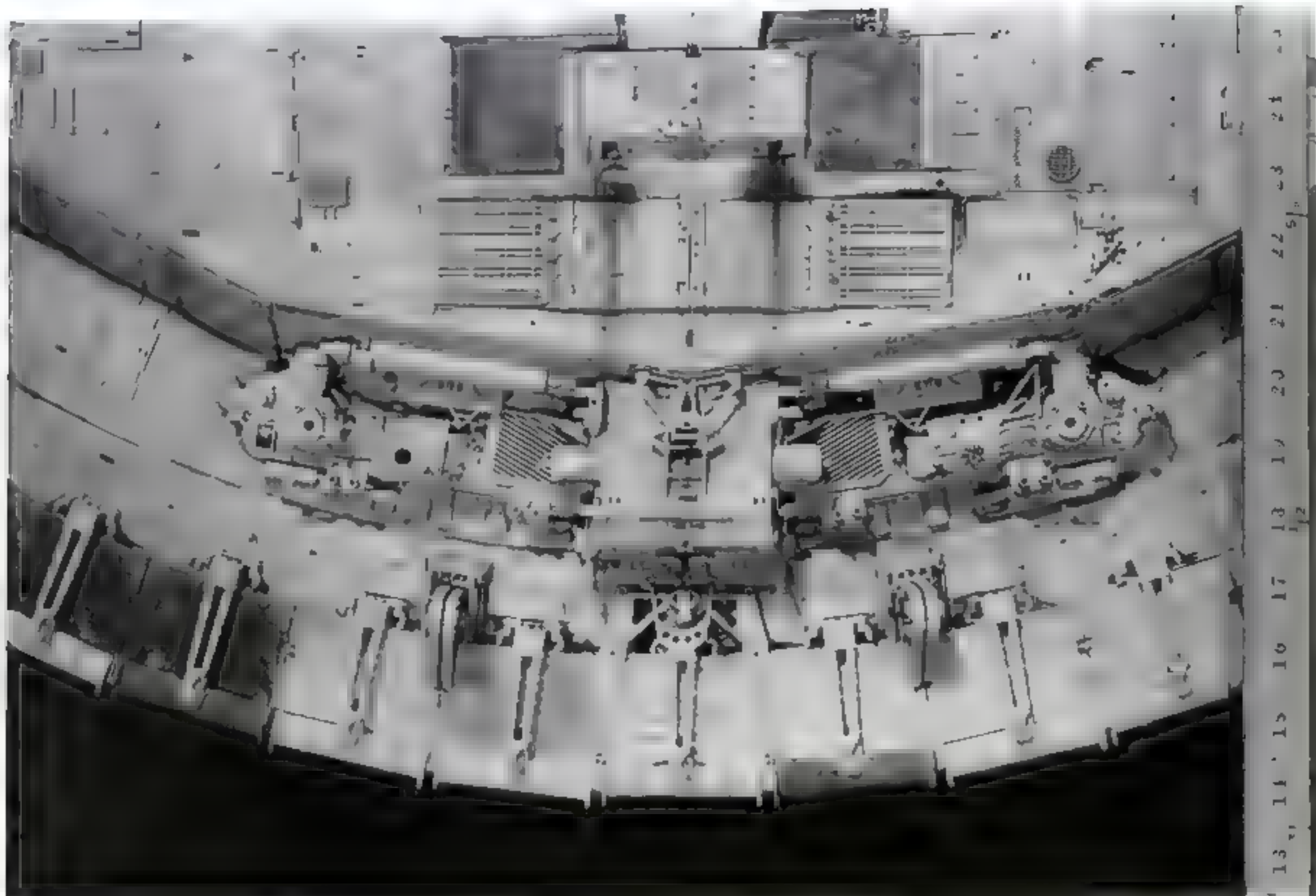
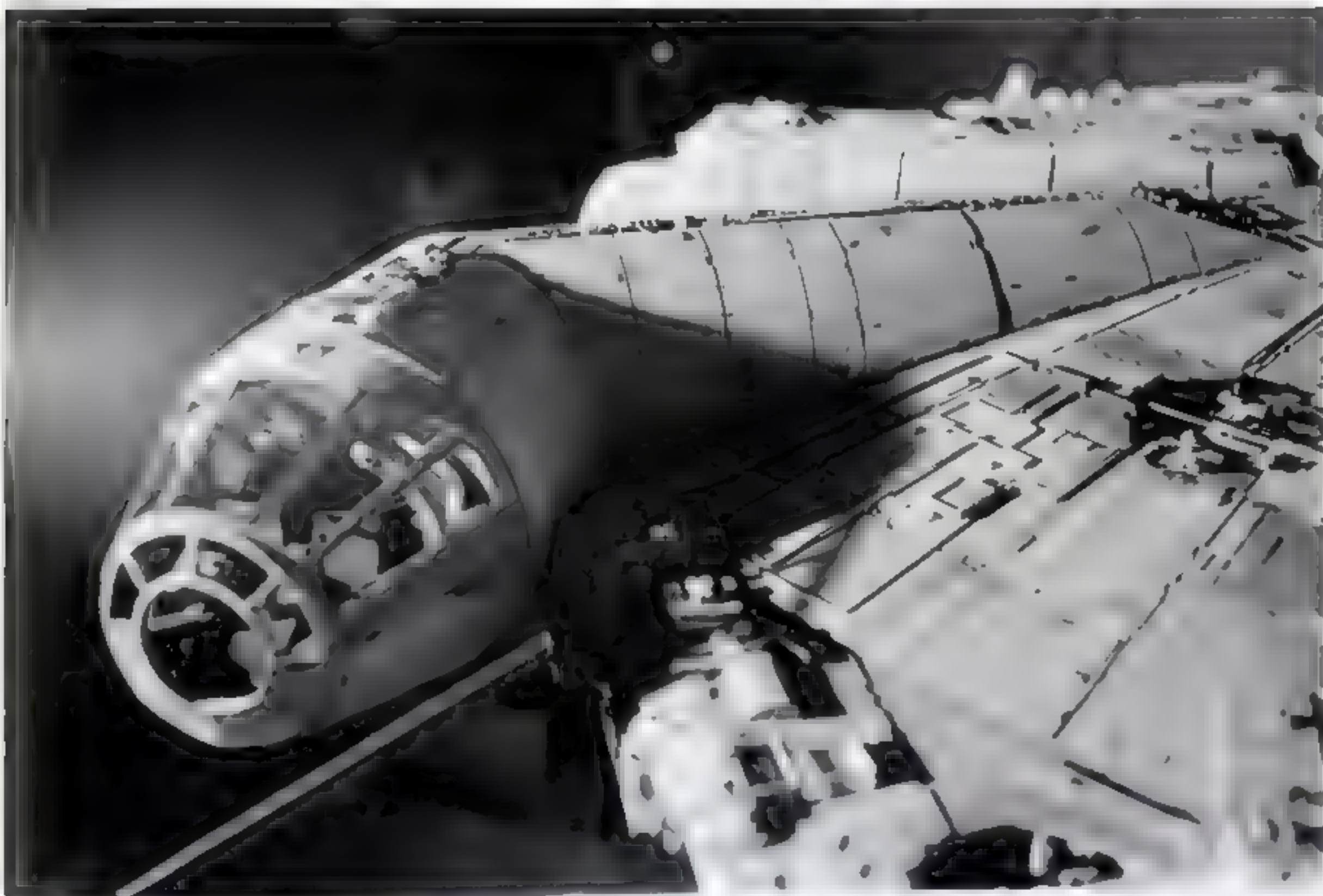
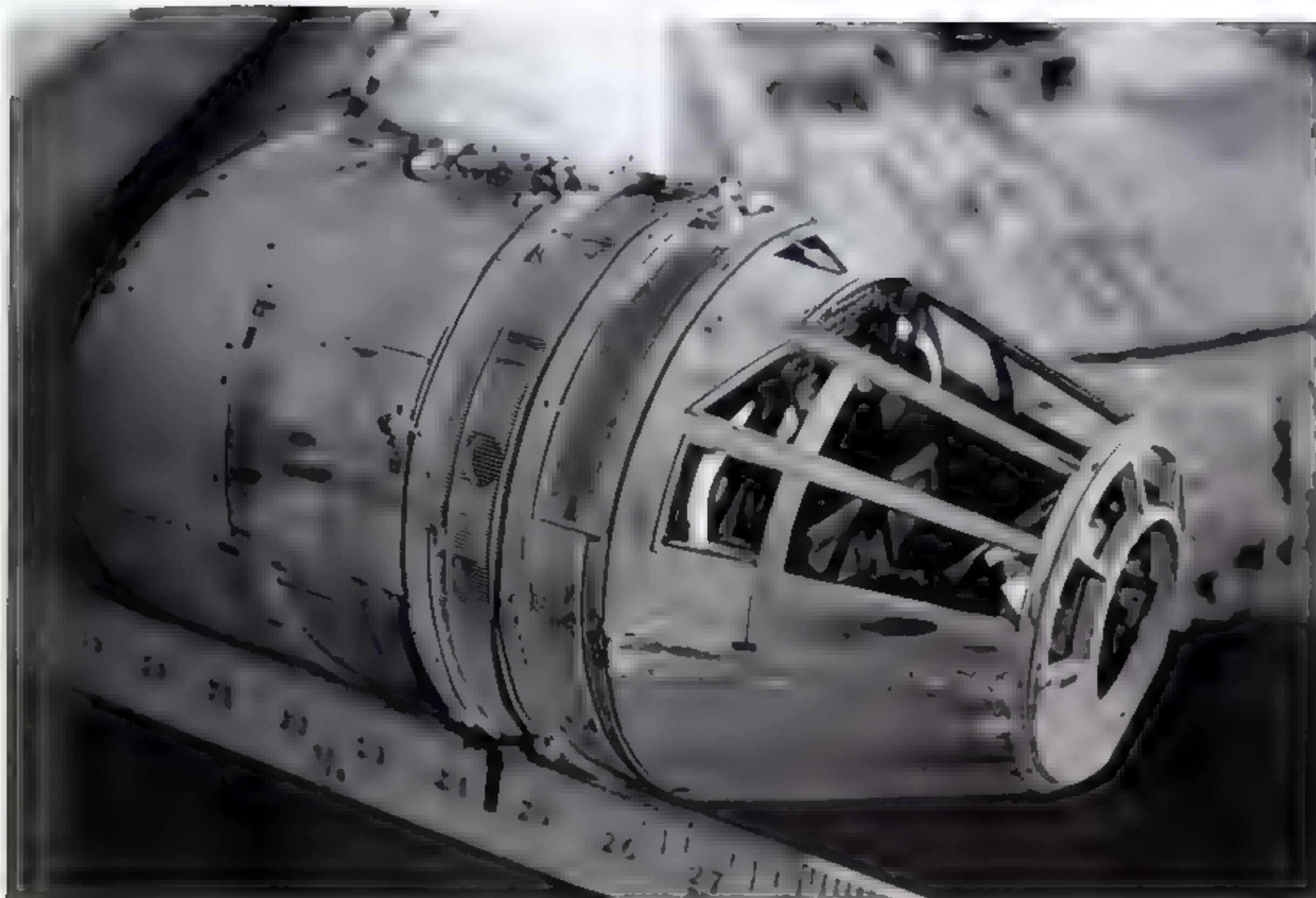
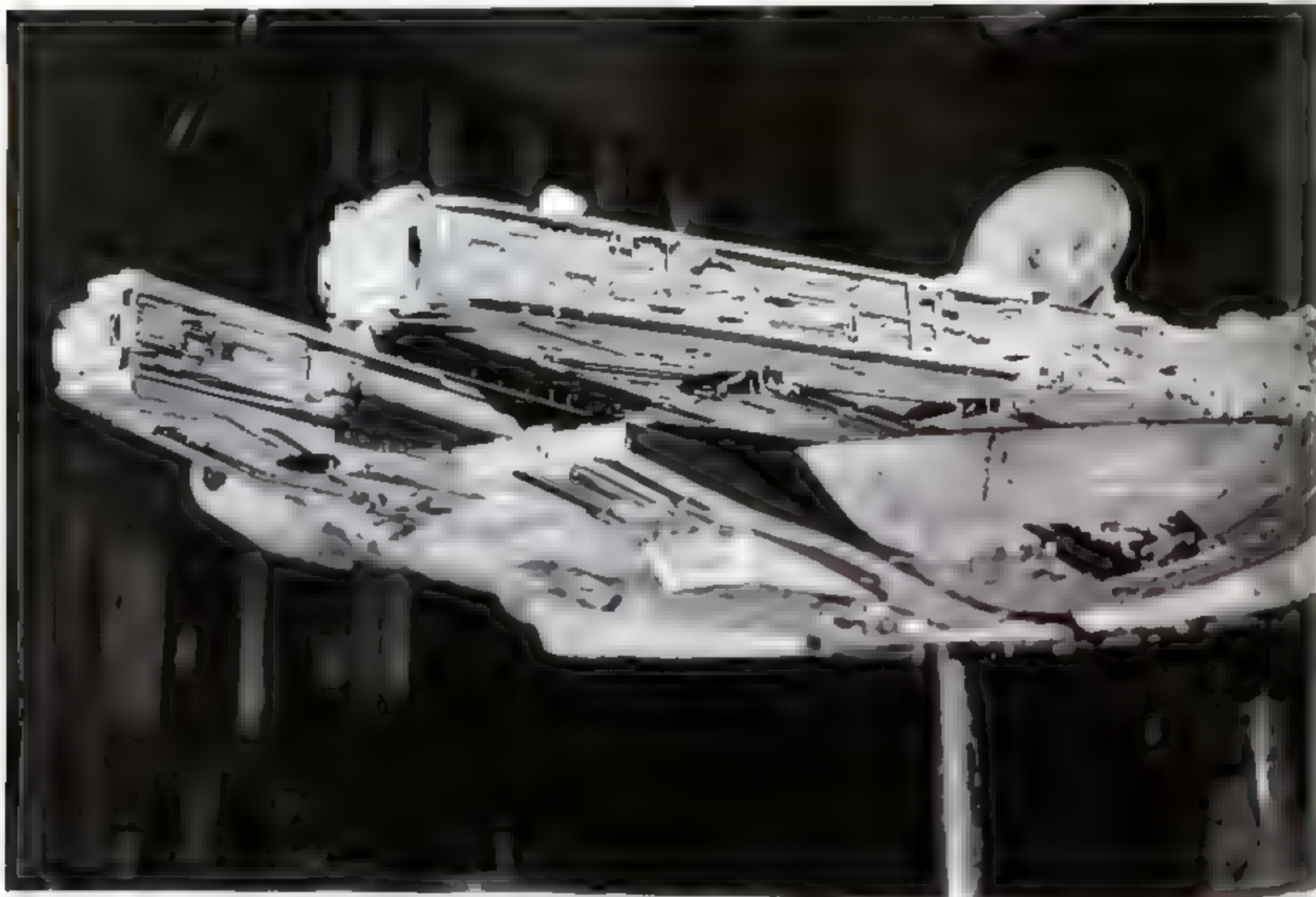
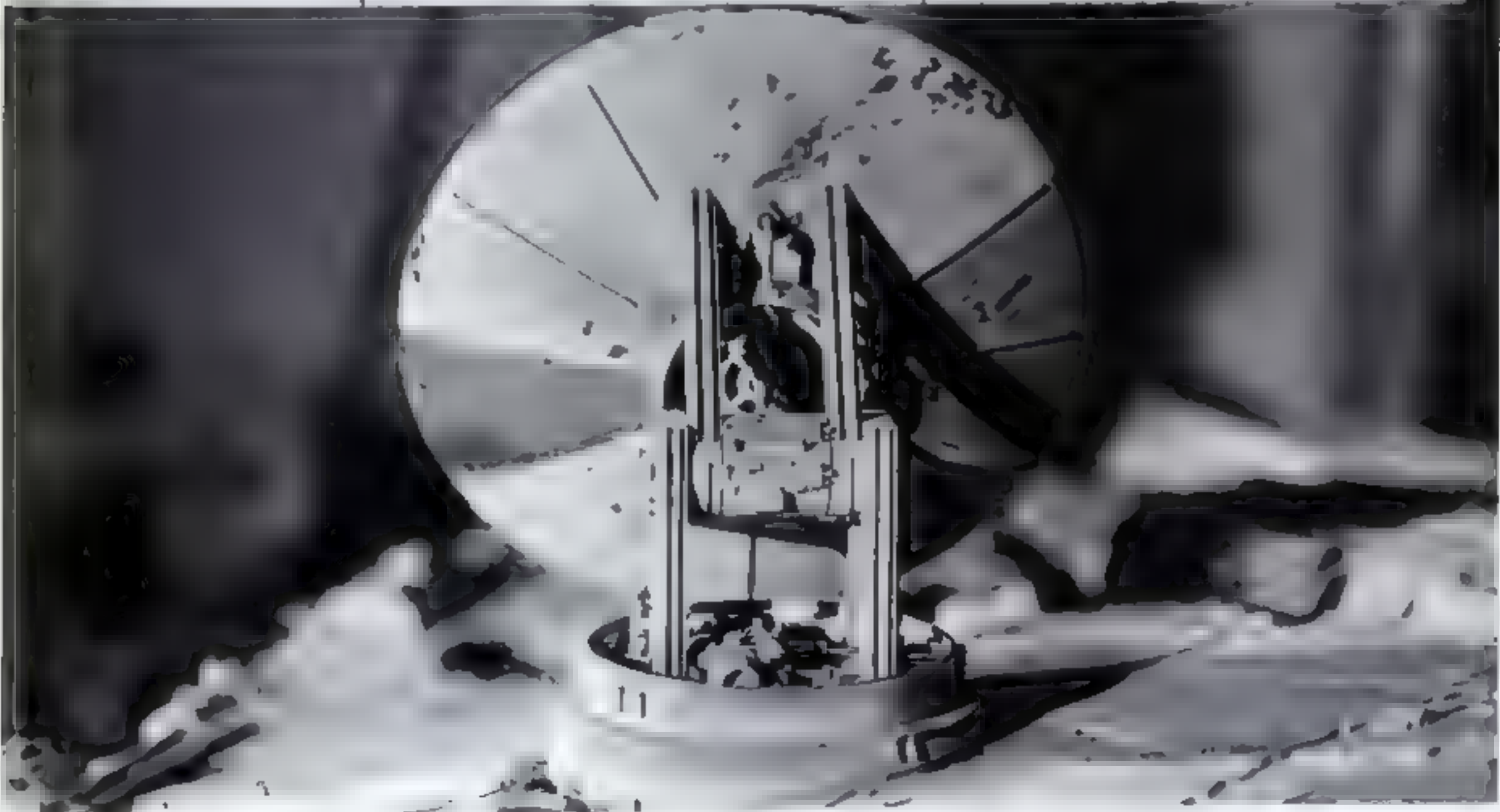
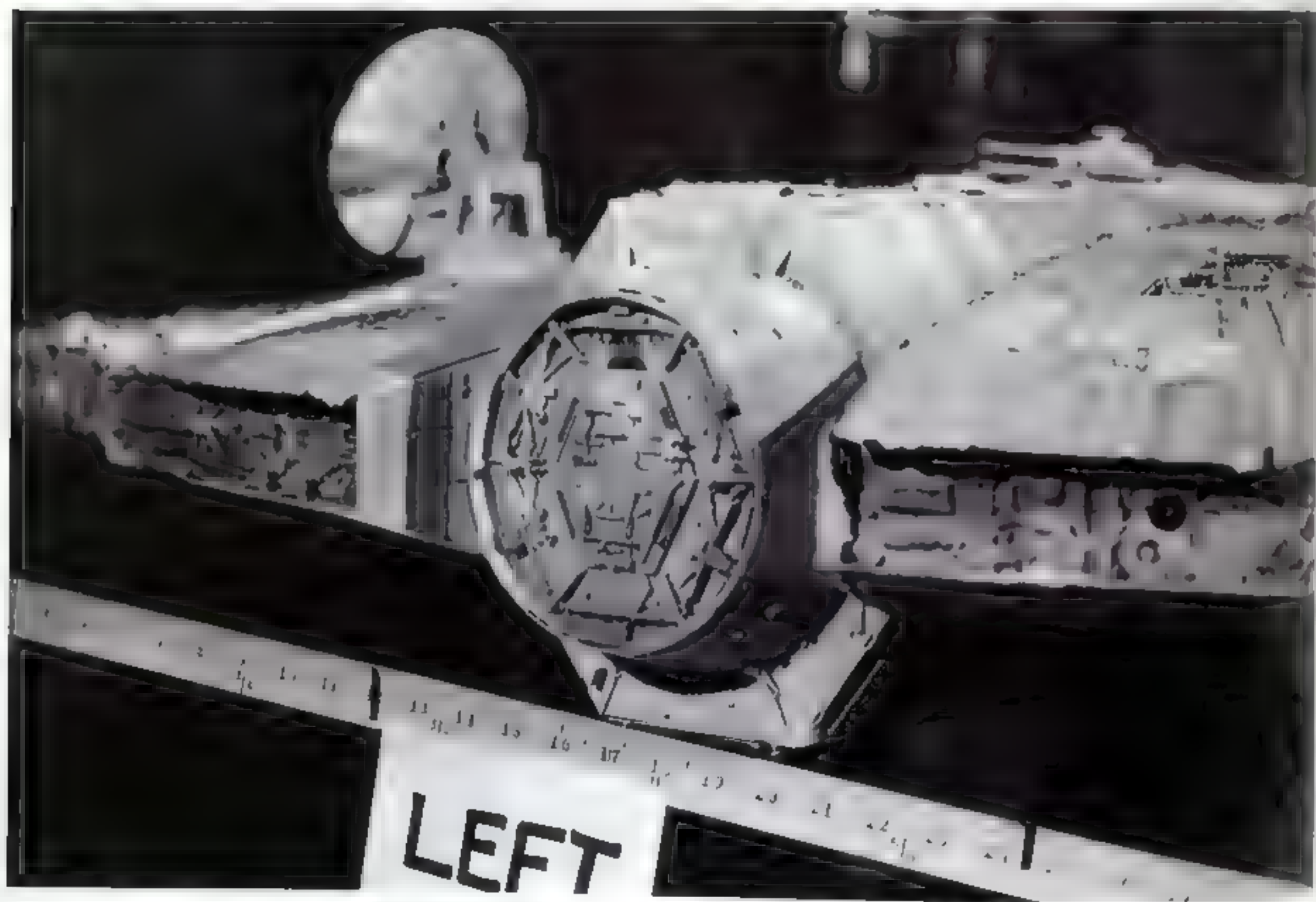
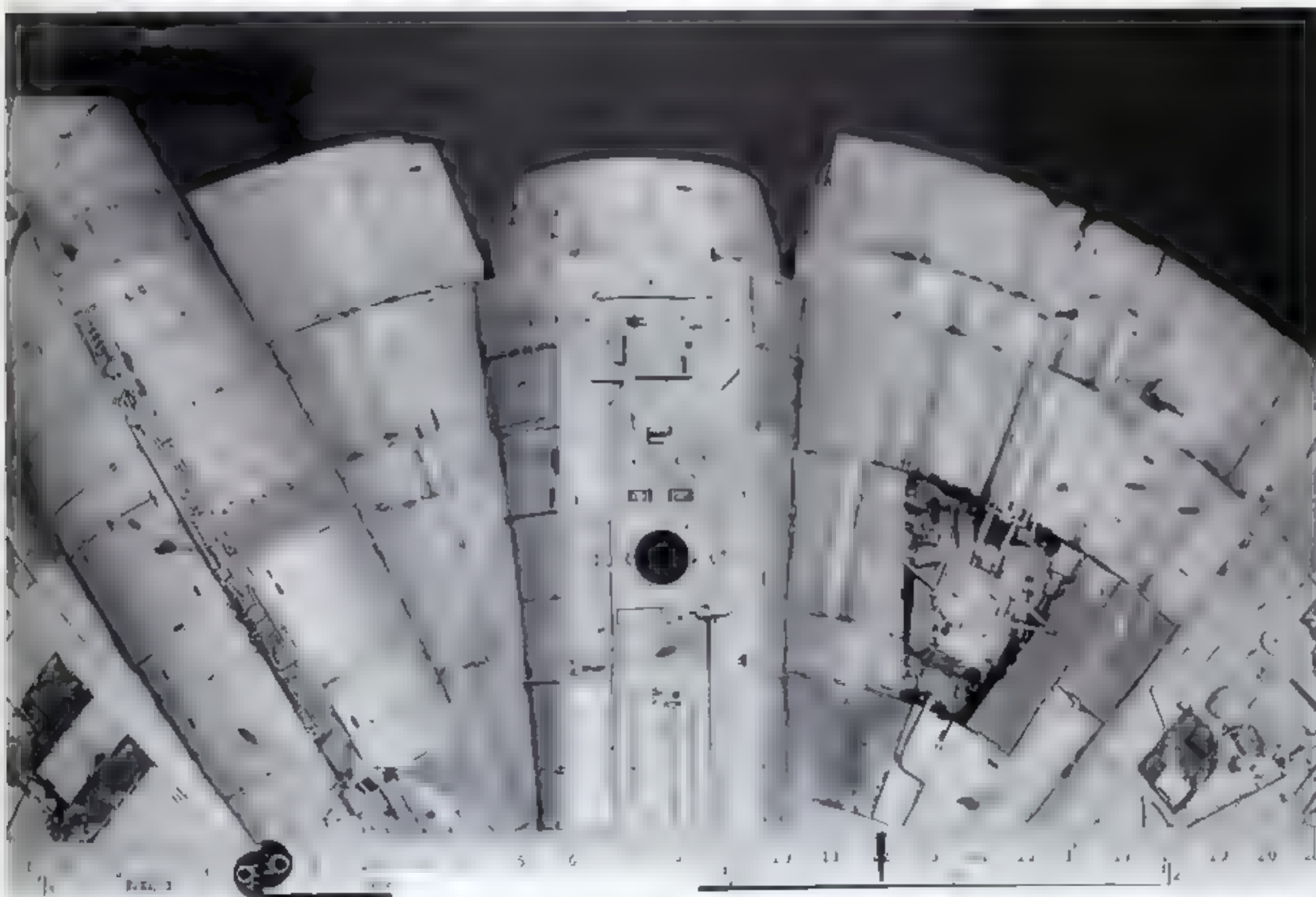
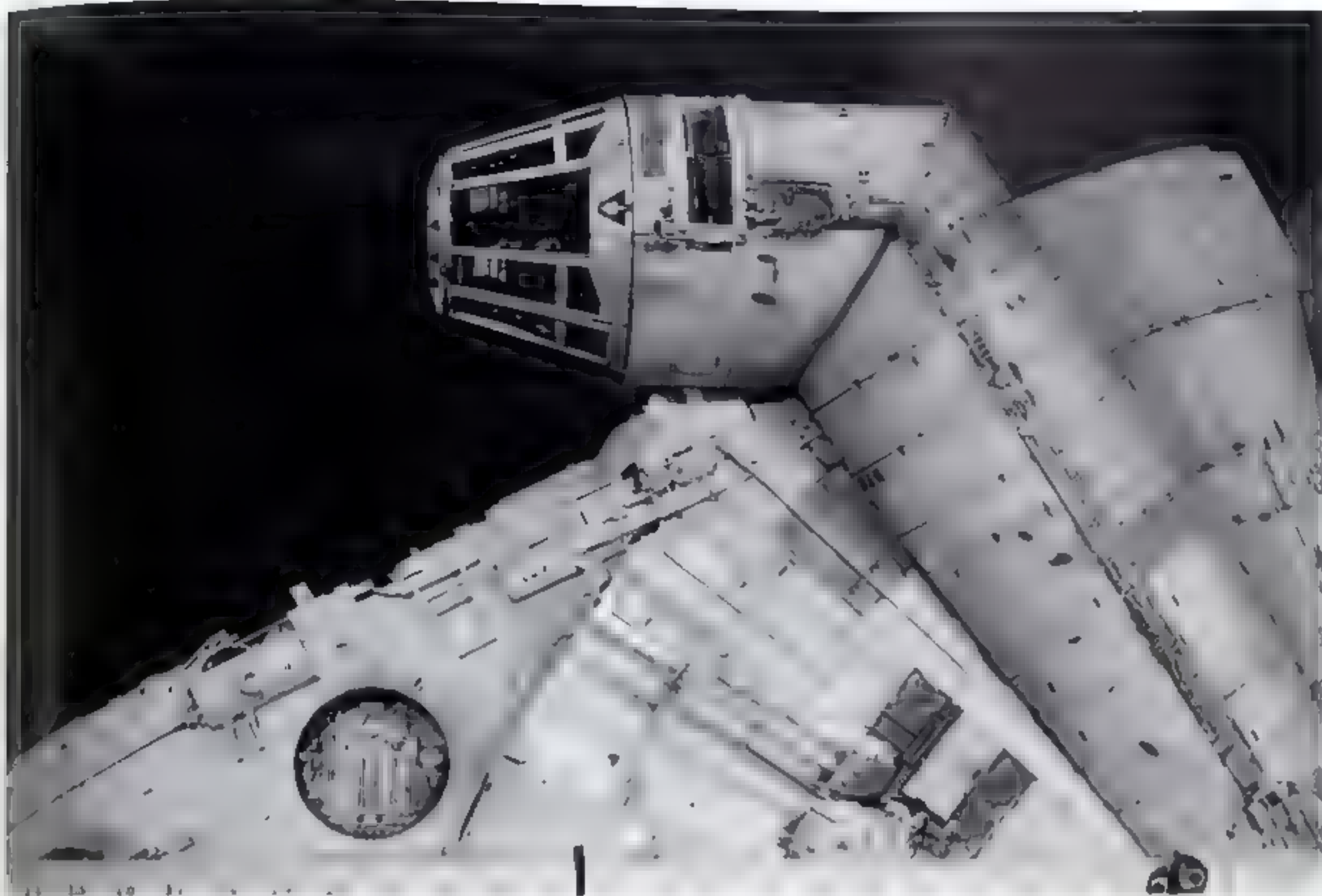
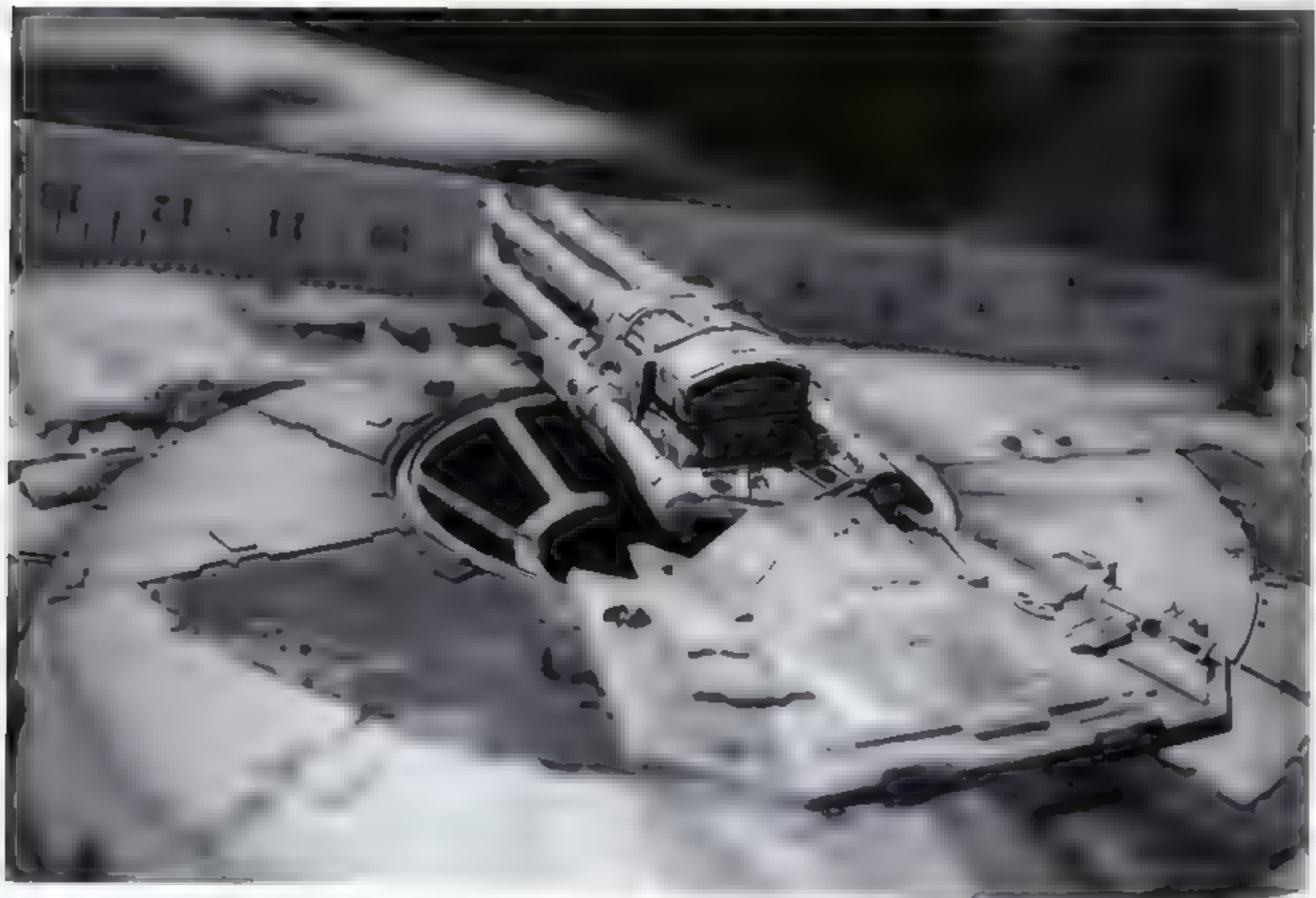
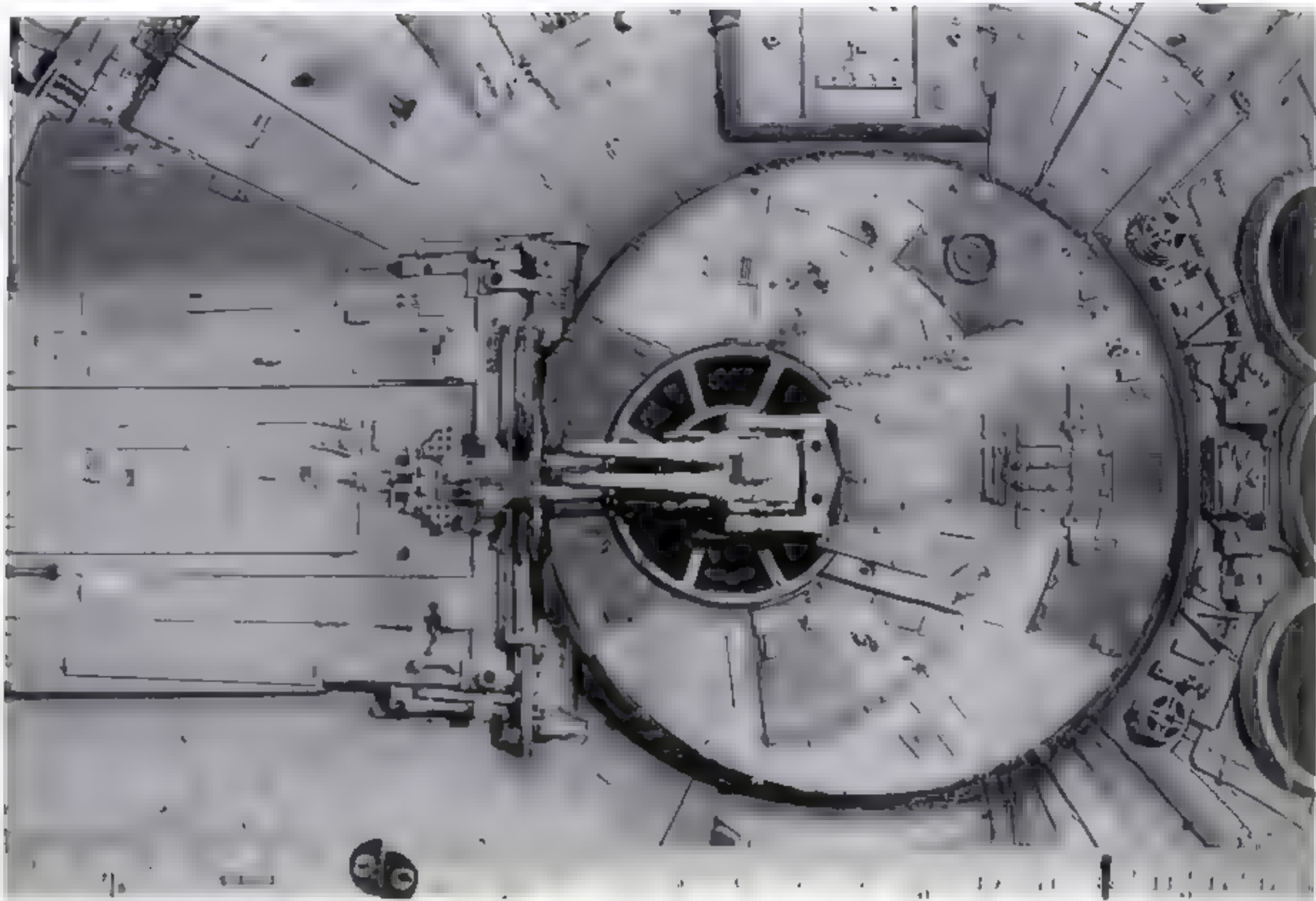
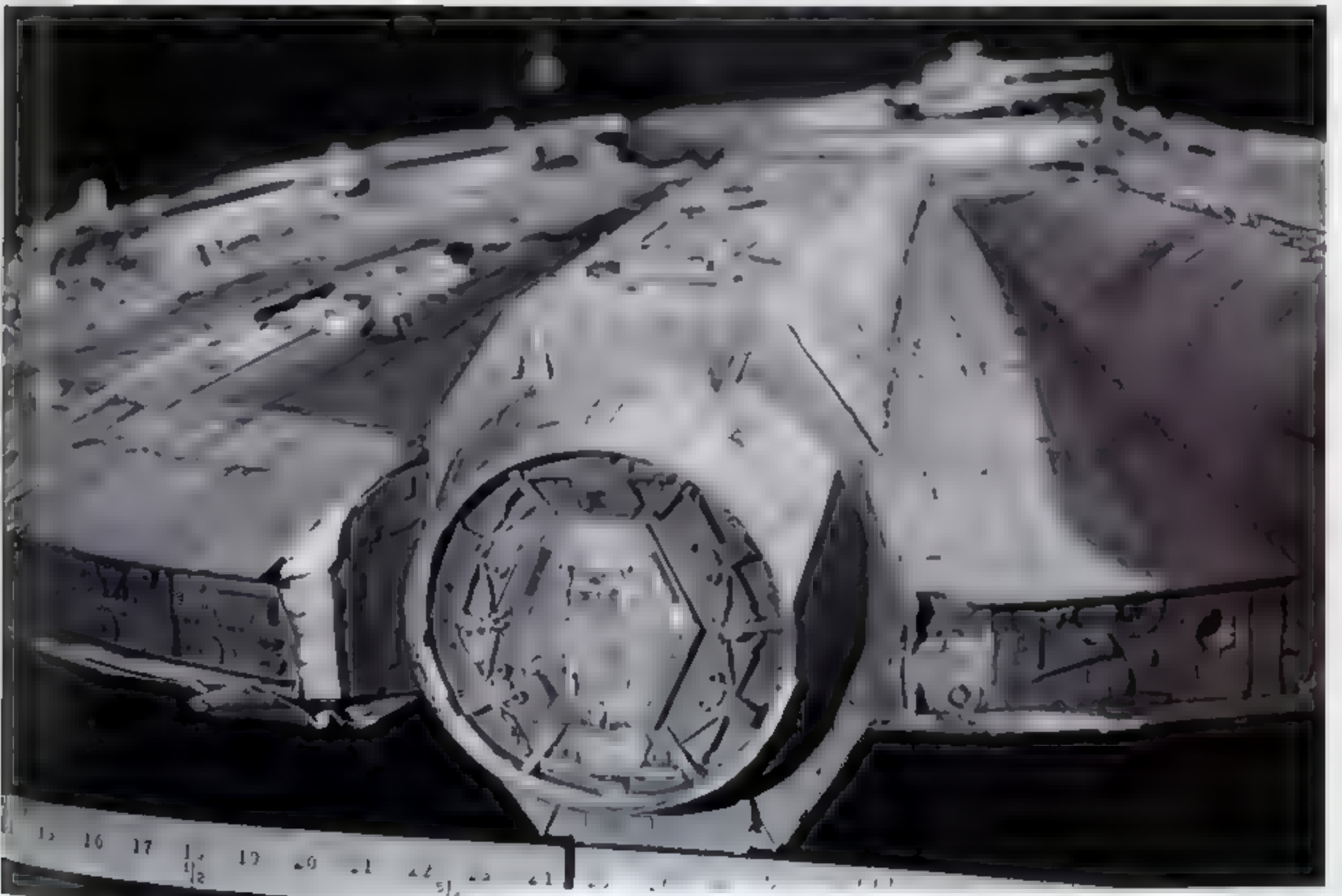
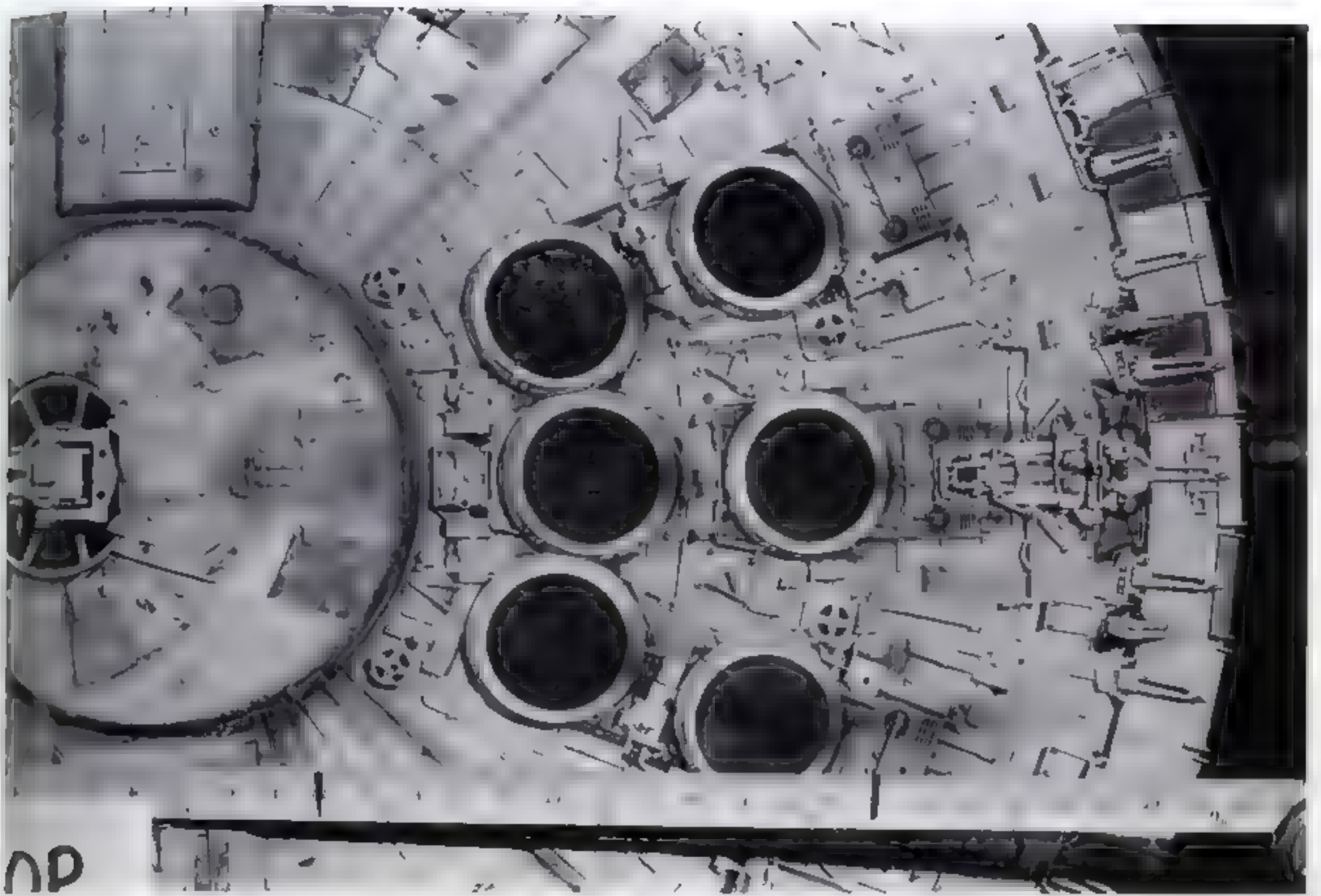
A-1 Landspeeder

A-1ランドスピーダー

本ページの写真でルークのランドスピーダーの右奥に見えるA-1ランドスピーダーは「A-1デラックス・フローター」とも呼ばれ，全長は7.1メートル。A-1ランドスピーダーは初心者向けのランドスピーダーであり，デス・スター破壊で戦死する帝国軍のタッグ将軍のファミリー作業車である。モブクェット・スウープ＆スピーダーズ社によって製造されたという設定もあった

A-1ランドスピーダーはデザイン画や脚本には撮影用の「第2のスピーダー」と表記されている。

ルークのランドスピーダーは、クレーンに取り付けられていた実寸大モデル。ここでは支柱で浮いているように見せている。車体の下（シートの背もたれの下あたり）からその支柱が見えている

INTERIOR
船内セット

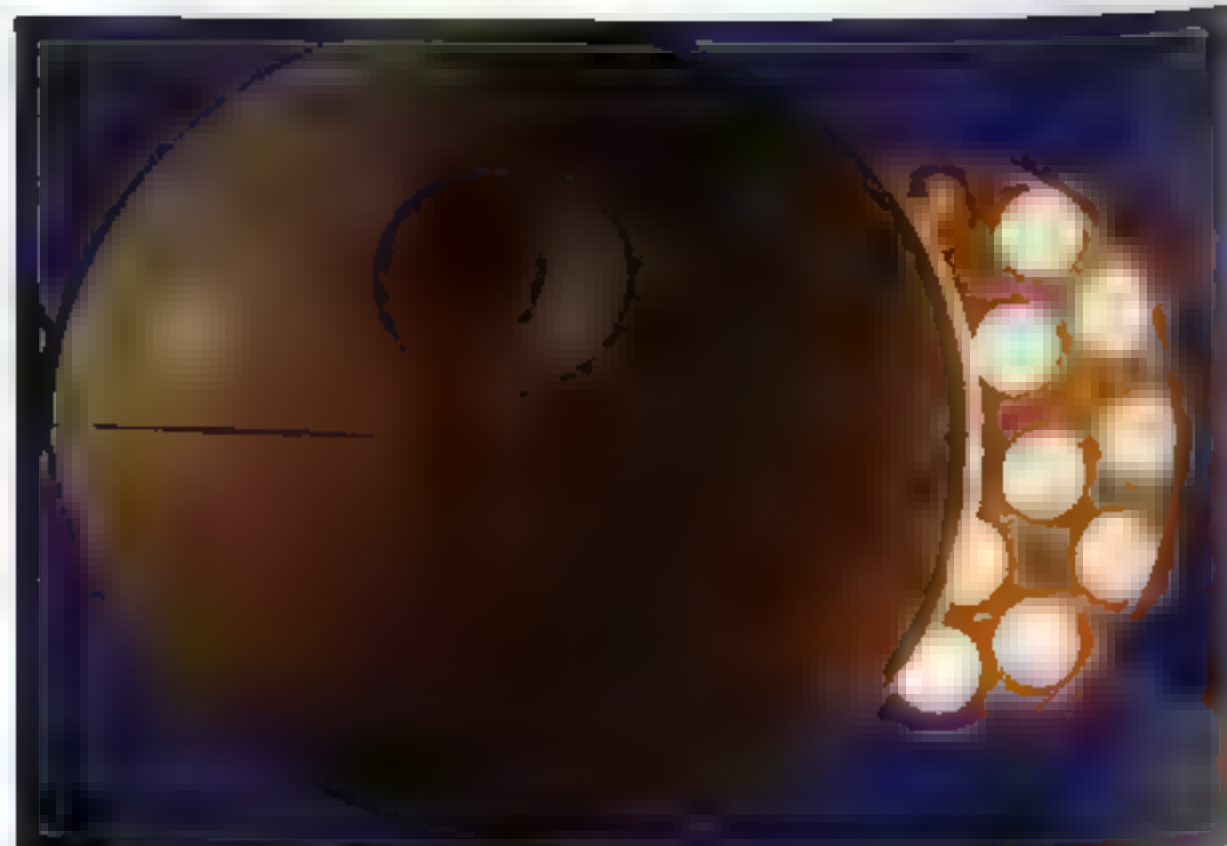
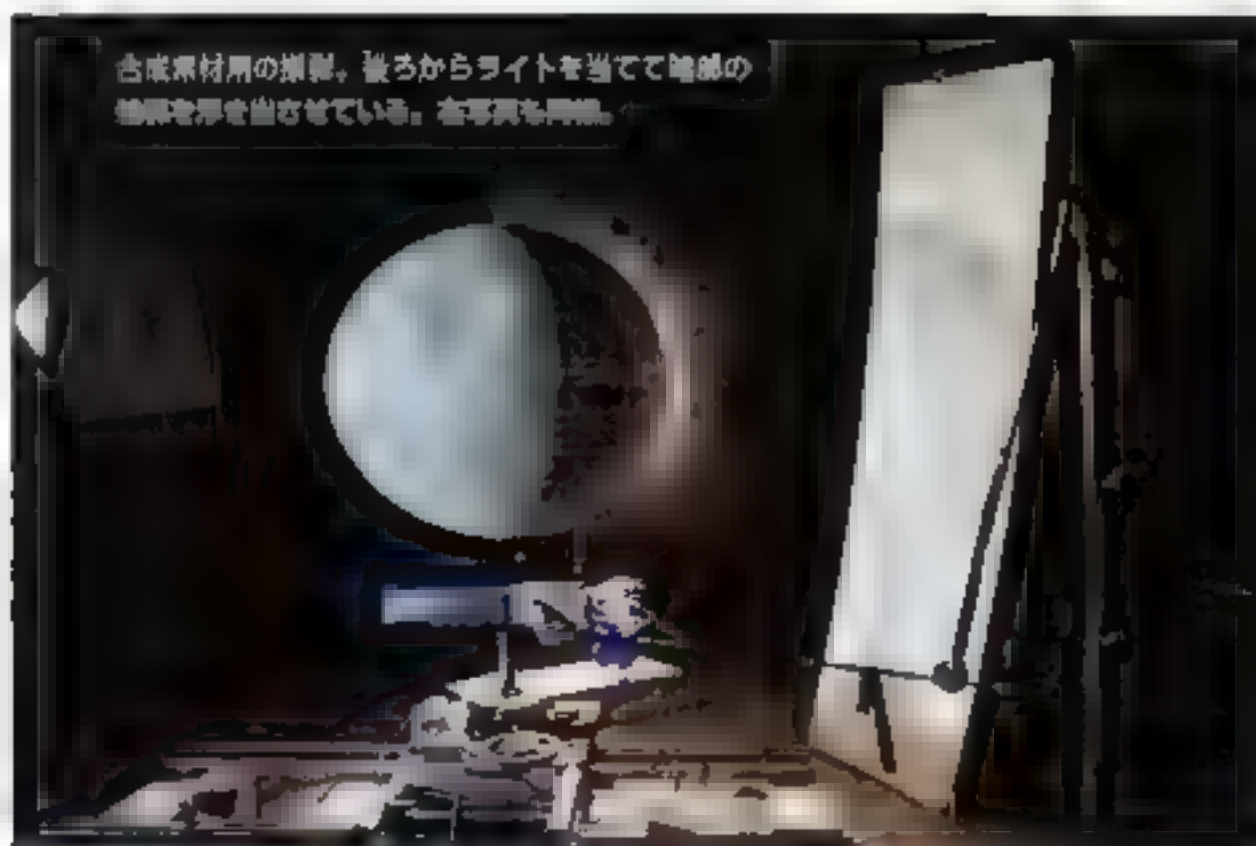
本ページ：〈ミレニアム・ファルコン〉の各内部セット。これらのセットを担当したロジャー・クリスチャンの証言によると、これらの内部の製作に当たっては廃棄された飛行機や電話交換機などのジャンクパーツを大量に買い込んで、それらのパーツを貼り付けて「使い古された宇宙船内部」を再現したとのことである。右写真の昇降口につながる長い梯子はブロッケード・ランナーのセットとして作られたものをそのまま使用しているため、ファルコンの外観から想定される内部の設定とは若干異なっている。

本ページ・次ページ：完成したばかりの、全長170センチにも及ぶ〈ミレニアム・ファルコン〉のミニチュアを各方向から撮影。本ページ上段・中段は同ミニチュアの側面・裏面。

DETAILS
ミニチュアの細部

本ページ 現在の状態では 特に多くのパーツが欠損してしまっている右側面は 本来このようにディテールが密集していた この部分には多くのプラモデルのパーツが違和感なく絶妙なセンスで貼り付けられており 〈ミレニアム・ファルコン〉の魅力を端的に表す箇所となっている 下写真の、前方下部の配管がまとめられた丸い穴部分は 展示会などでは照明が当たらずよく見えない箇所である じっくりご覧いただきたい。

本ページ　改修される前の船体下面右側前部と後部の全体写真　船体前方の左右には前記したように、のちに細部が改造されたため　開口部の大きさや周辺部分も現存するミニチュアとは異なっている．船体後部は特に変更はなく　ほぼ写真のままの形で今も残されている．

本ページ　コクピットの下面と改修前の前部右開口部のアップ写真　各ディテールには日本製のプラモデルのパーツも多く使われており（下写真の内部ディテールで一番目立つ大きなものは戦車の車体のようだ）、現在でも手に入るキットも少なくない。

本ページ　船体下面の中央部分の前端から銃座まで。前方中央部の箱状の部分は（上写真の真ん中あたり）には前脚の収納部がある設定で，ミニチュアでもそれらしく作られている。下写真に見られる下面銃座のウィンドウとブラスター　バーノは　展示の際などには支柱の妨げとなり外されてしまうので（54ページの写真参照），装着されている写真は珍しい

本ページ　船体下面の左側前方のアップ写真　右開口部同様に写真に写ることが少ない左側丸穴の内部と　下写真は改修される前の貴重な開口部の鮮明なディテール写真　やはり市販のプラモデルのパーツがディテールの一部として付け加えられている

本ページ　体感のあるディテールが密集している下面後部（上段写真）　これらは市販されている多くのプラモデルのパーツを組み合わせて表現されており　このような手法は「キットバッシング」と呼ばれている　何よりもパーツを配置するミニチュア制作者のセンスが問われる手法であり　これによりミニチュアの魅力が決まると言っても過言ではないだろう　下段写真の下面前方からのカットでは船体の丸みがよくわかる

本ページ　細かく丁寧な汚し塗装が加えられているコクピット部分のアップ写真　このコクピットの円筒部分は元々ブロッケード・ランナーに付いていたパーツを外して、この丸い船体に取り付けたものであるが　違和感なく船体ラインに馴染んでいる。

本ページ　SWモデラーのあいだではファルコンの「クチバシ」と呼ばれている機体の先端部　ジョージ　ルーカスは新たにデザインされる〈ミレニアム　ファルコン〉は丸い形にしたいと要望したのだが、単なる丸い形ではUFOのように見えてしまうので　前部にクチバシと　コクピットを横に飛び出す形で付けたと当時のスタッフが語っている

本ページ　このレーダーも、元々はブロッケード・ランナーに付いていたパーツを取り外して移植したもの。これらの写真の状態が正しいレーダーの向きと思われるが、現存するミニチュアでは円盤部が後ろに向いて前後逆にセッティングされてしまっている。

本ページ　左側面各部のアップ写真　船体左右側面の細かいパーツが多数貼り付けてある部分は、現存するミニチュアでは特に紛失パーツが多く、当時の状態を正確に再現するには記録写真を参照するしかないのが現状だ

本ページ この〈ミレニアム・ファルコン〉のミニチュアが全長約170センチと大きいのは、Xウイングや Yウイング、タイ・ファイターなどと同じスケールで作られたためである。同じスケールでミニチュアを製作しておけば、他の機体と並んで飛ぶ場合に並べて一度で撮影できるが、スケールが違うモデルだと個別に撮影して合成の際にそれぞれの大きさを合わせる手間が必要となり、余計な時間とコストがかかってしまうのだ

本ページ　完成時の上面銃座部分　現存のミニチュアでは　なぜかこの銃身パーツが上下逆に付いている　記録写真にはない銃身下面が観察できるのは嬉しいが　できれば手直しして正規の位置に戻していただきたい部分でもある

本ページ〈ミレニアム・ファルコン〉のひとつの特徴とも言えるディテールが密集した船体後部上面と右側面部
当時のミニチュア製作スタッフの中には、映画に関わったことのある者はほとんどおらず、カメラを通した場合にミニチュアの細部がどの程度写るか理解できなかったため、このミニチュアも必要以上に細部まで作り込まれる結果となった。しかしそれが現在では、ファンやモデラーにとっての大きな魅力となっているのだ

Death Star デス・スター

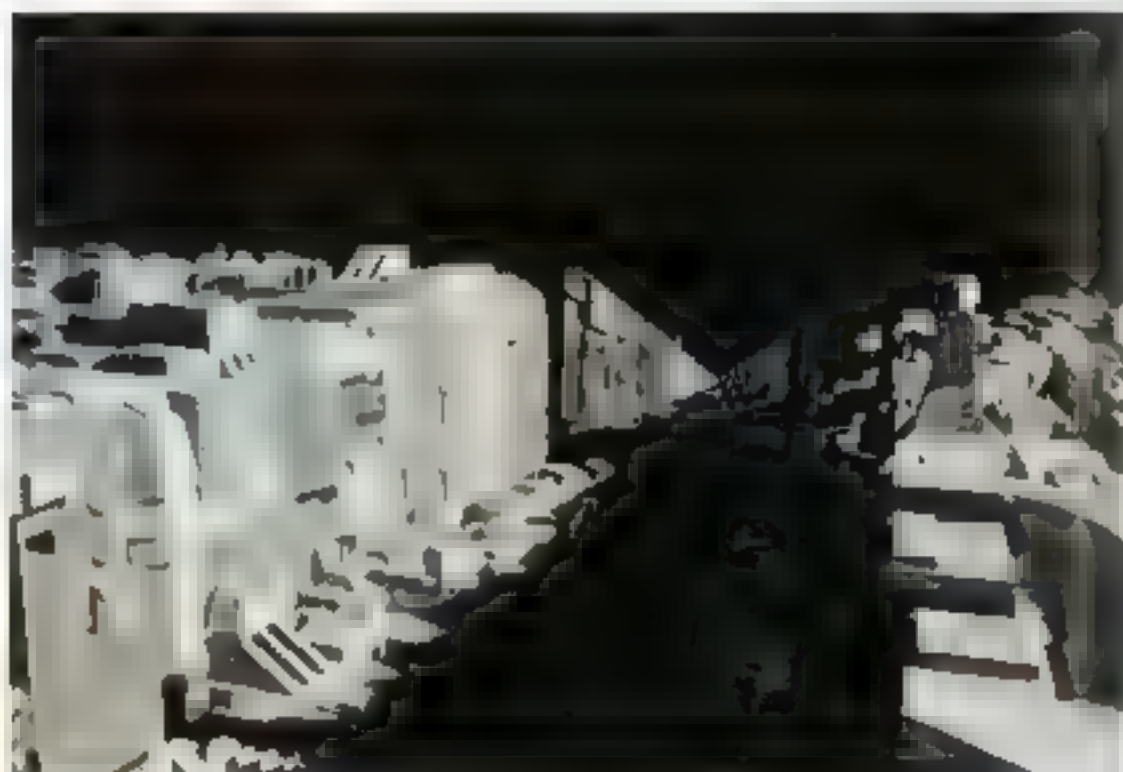
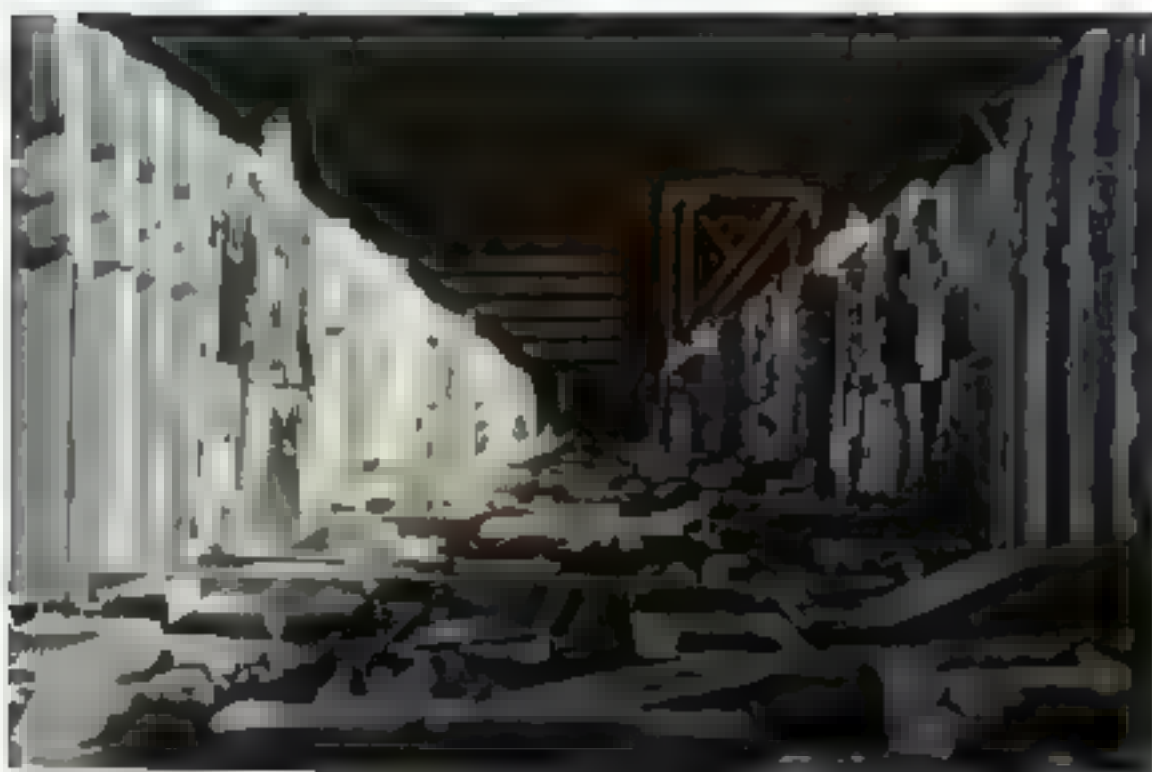
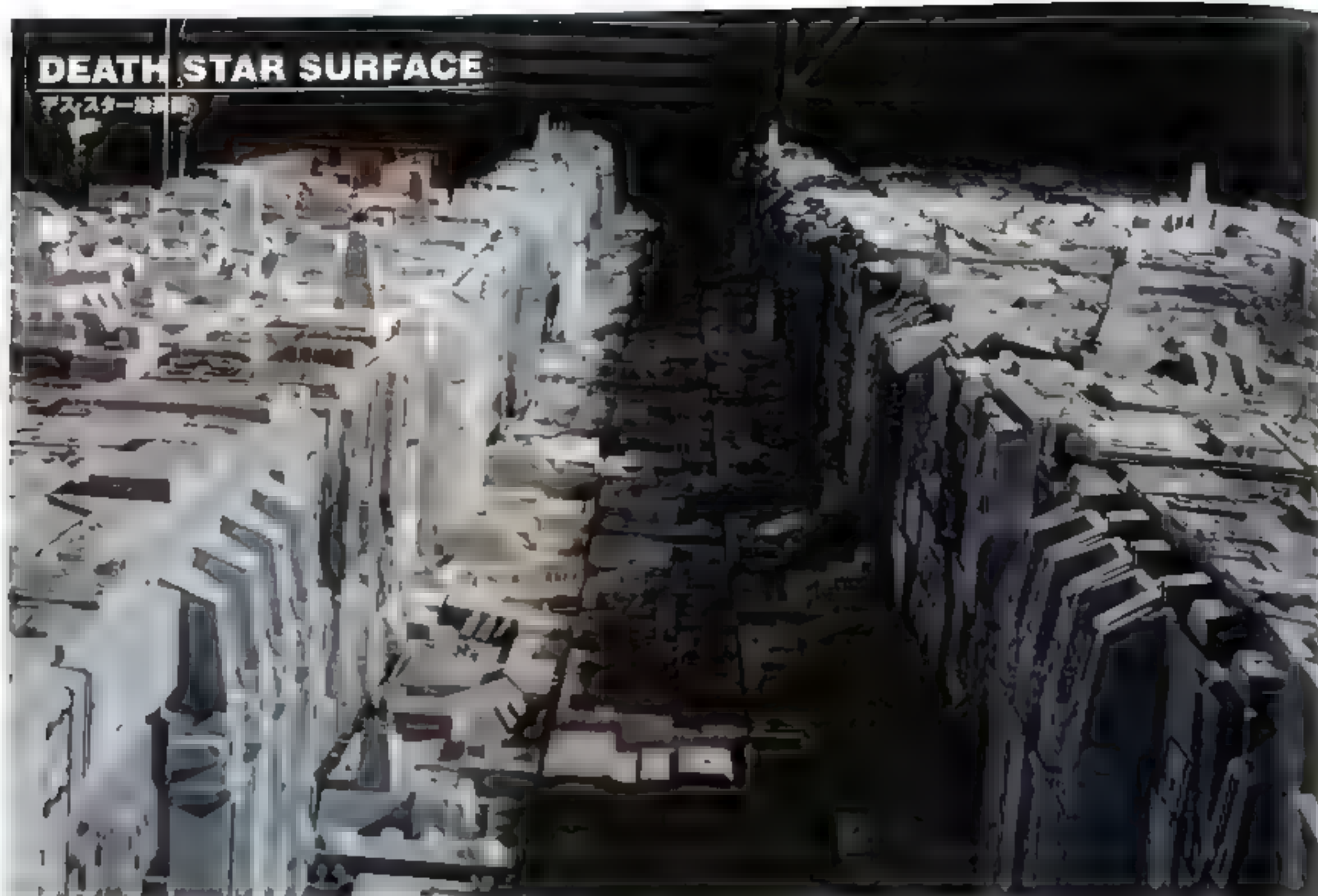
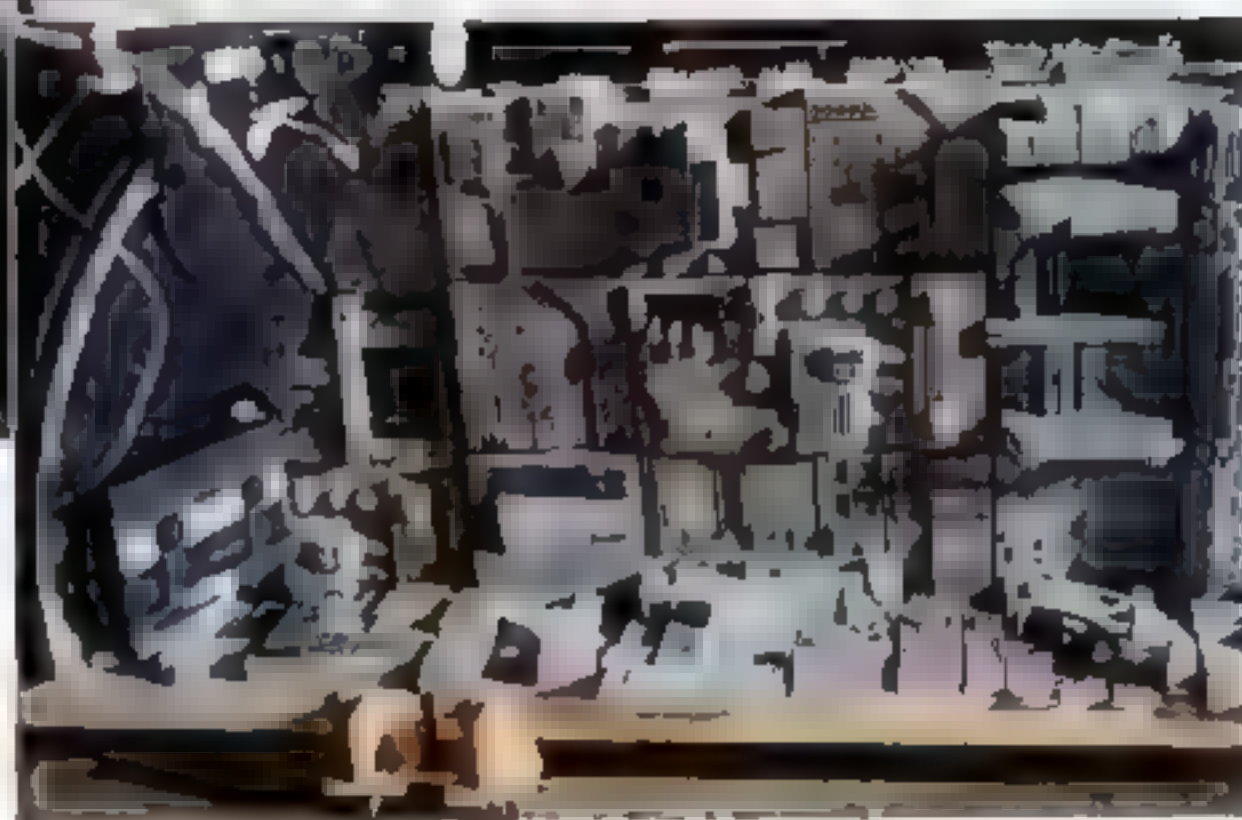
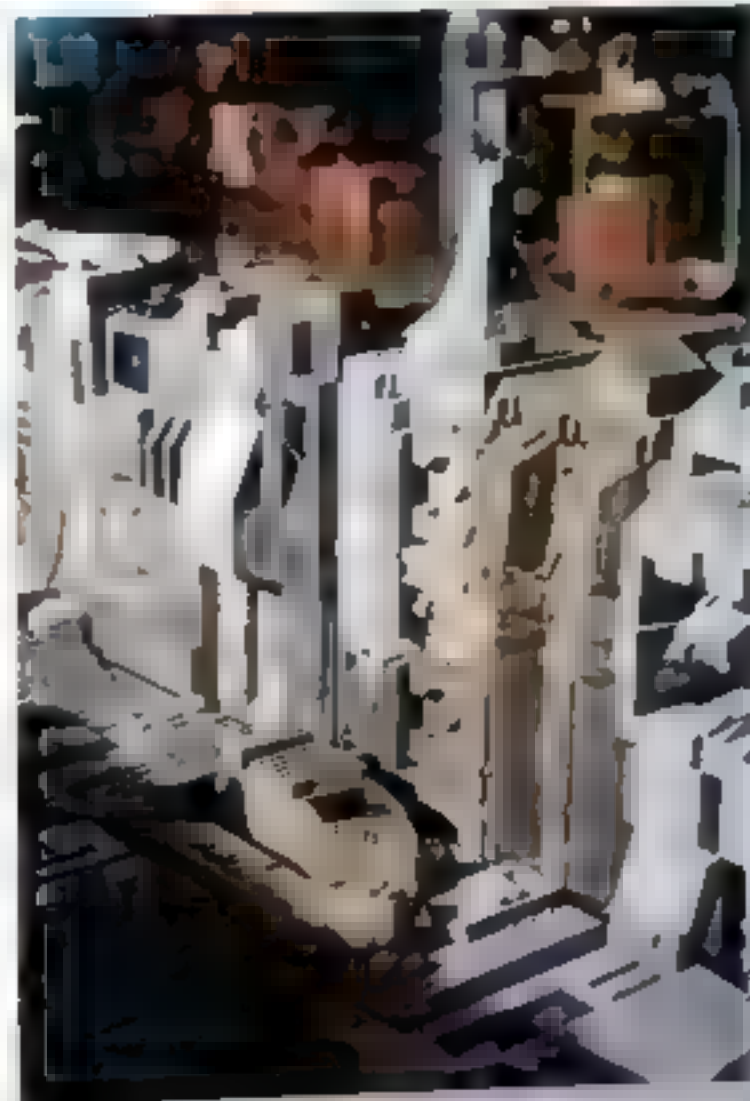
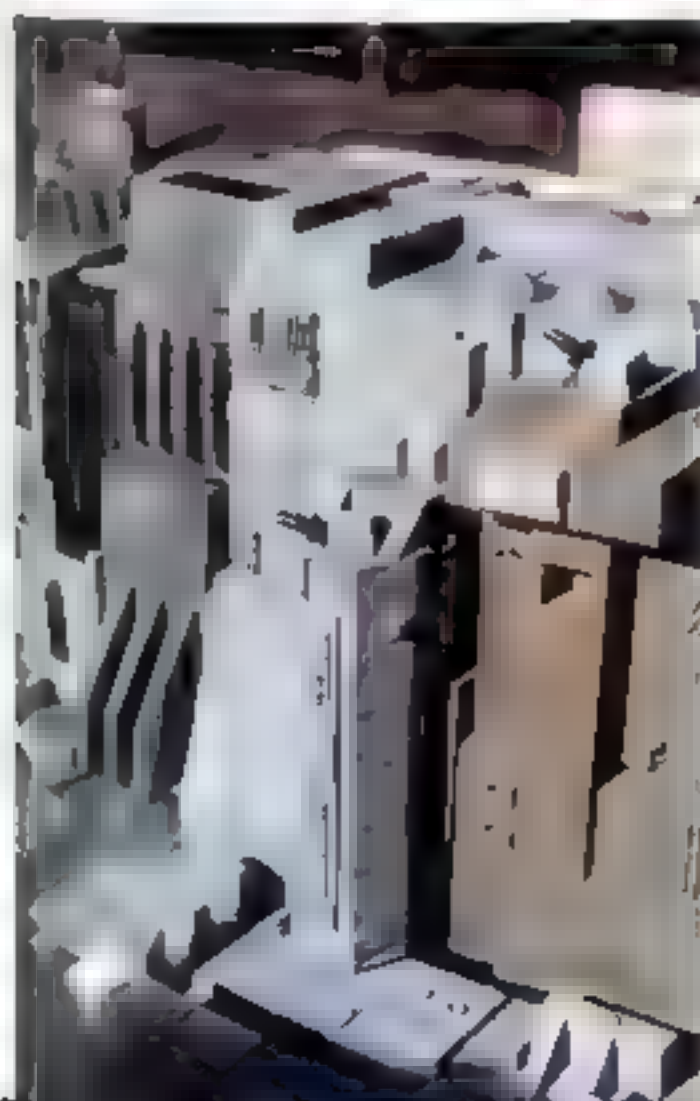
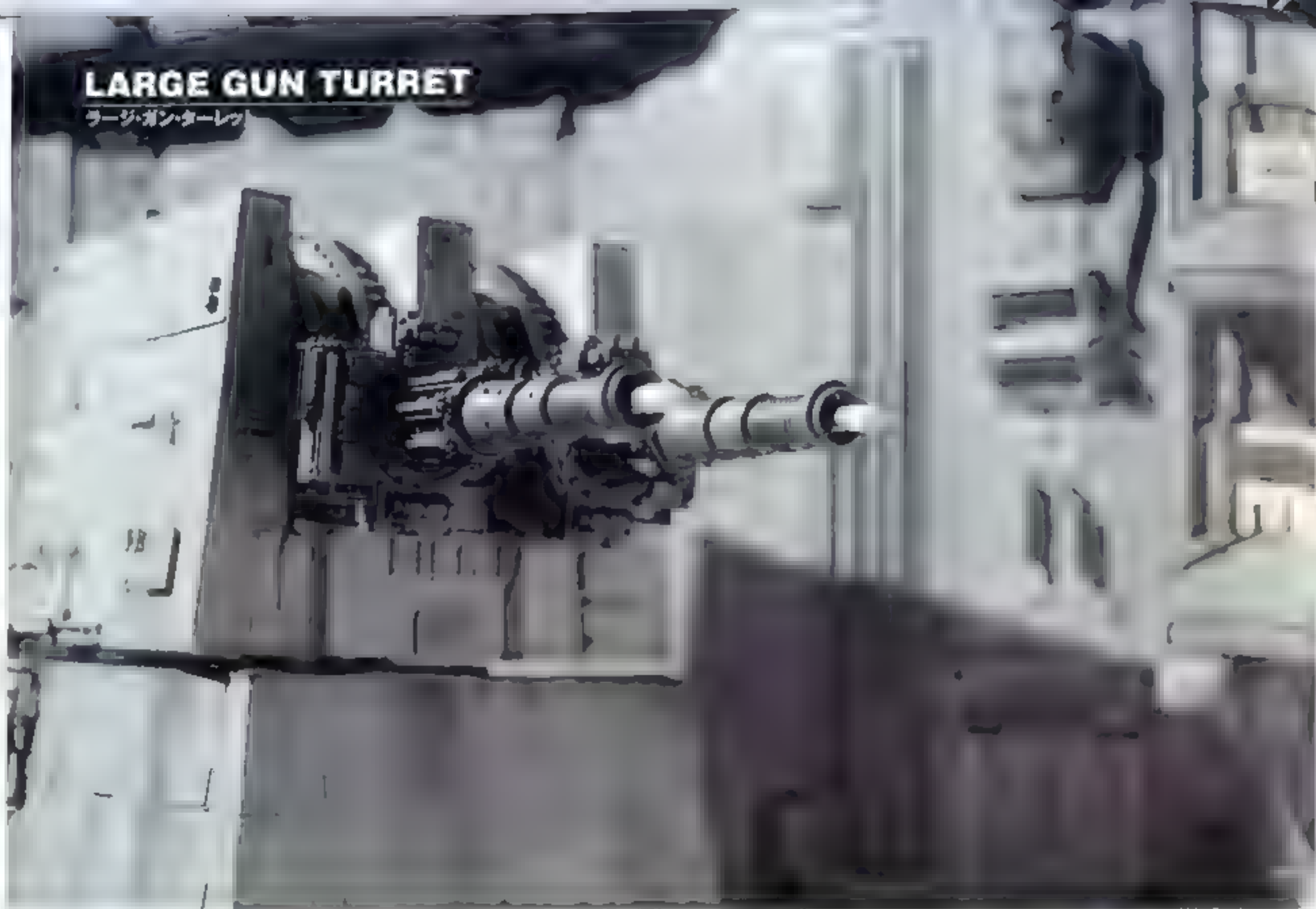
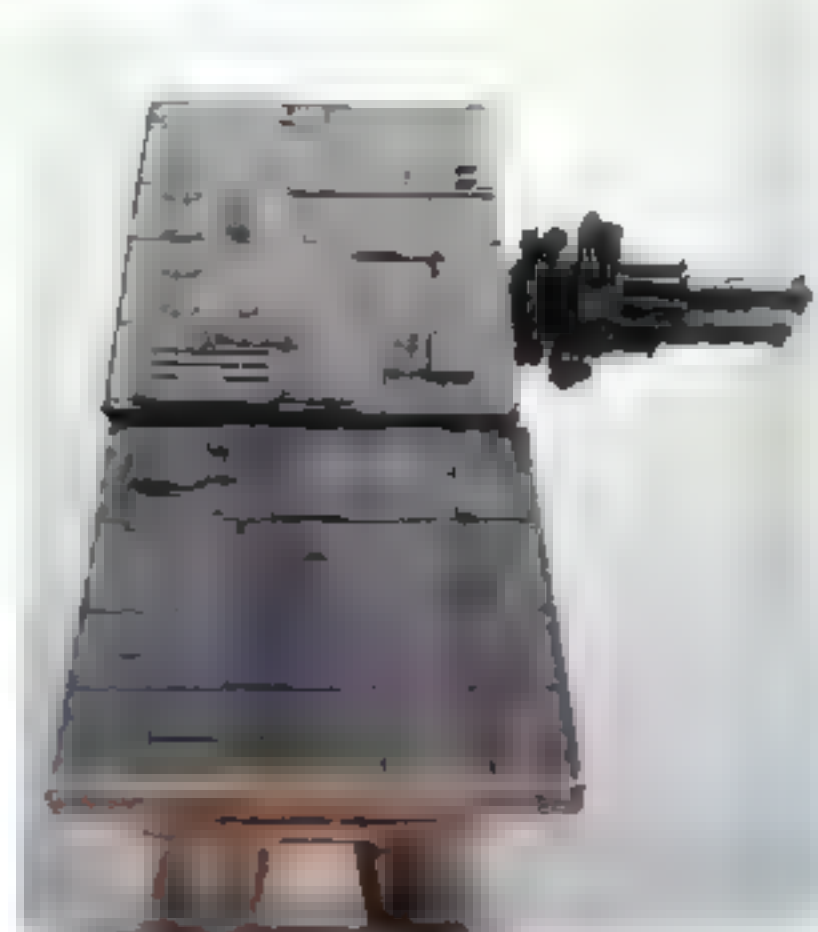
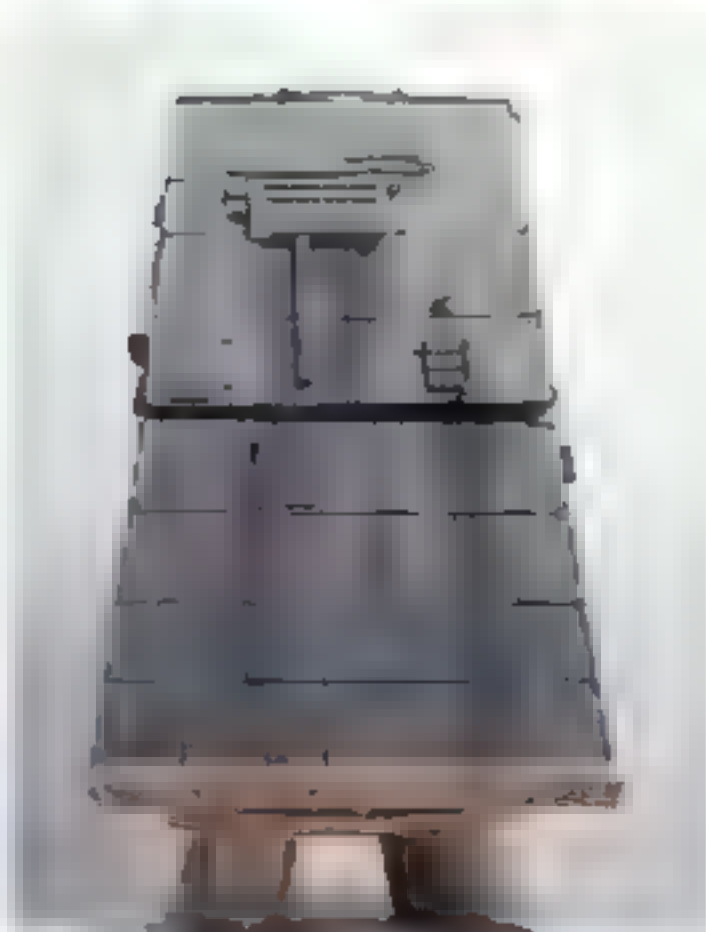
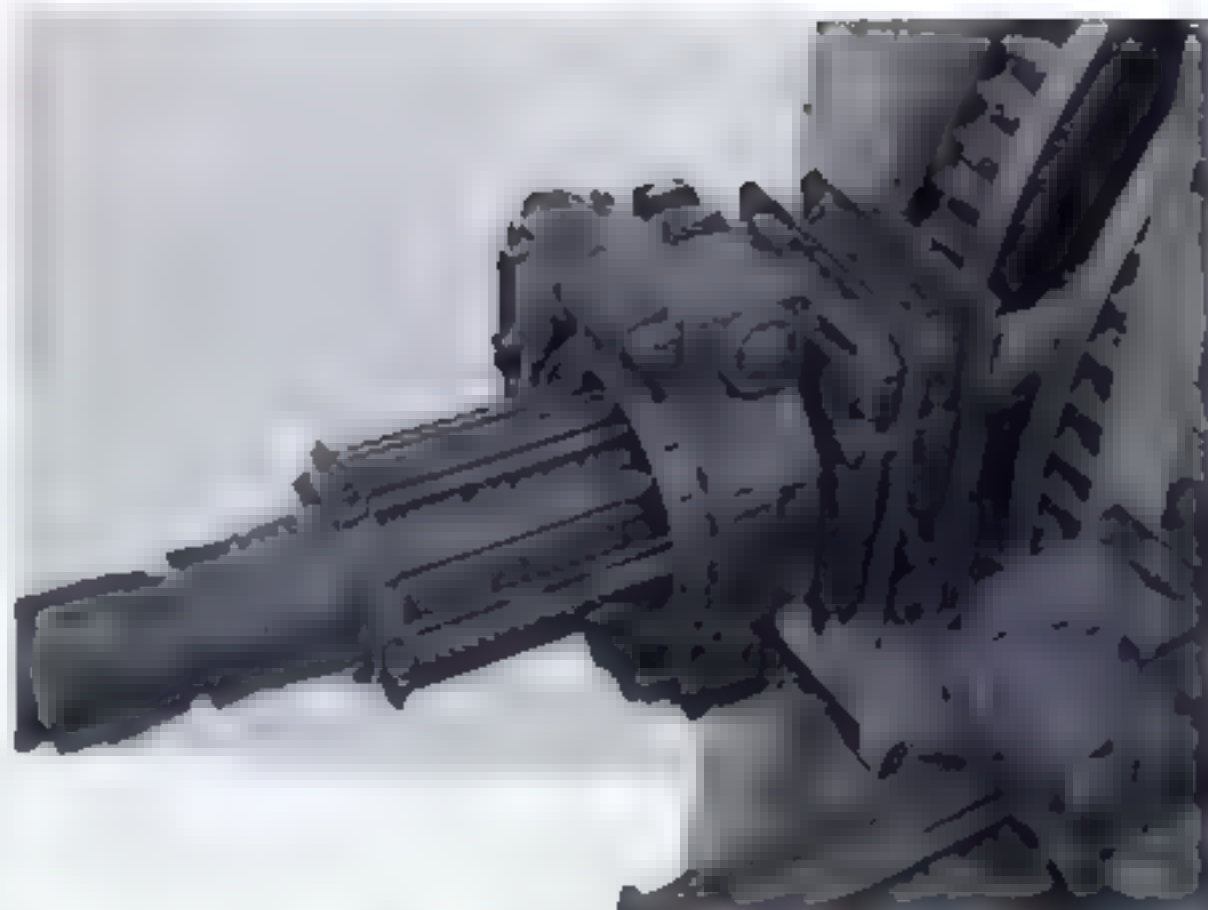
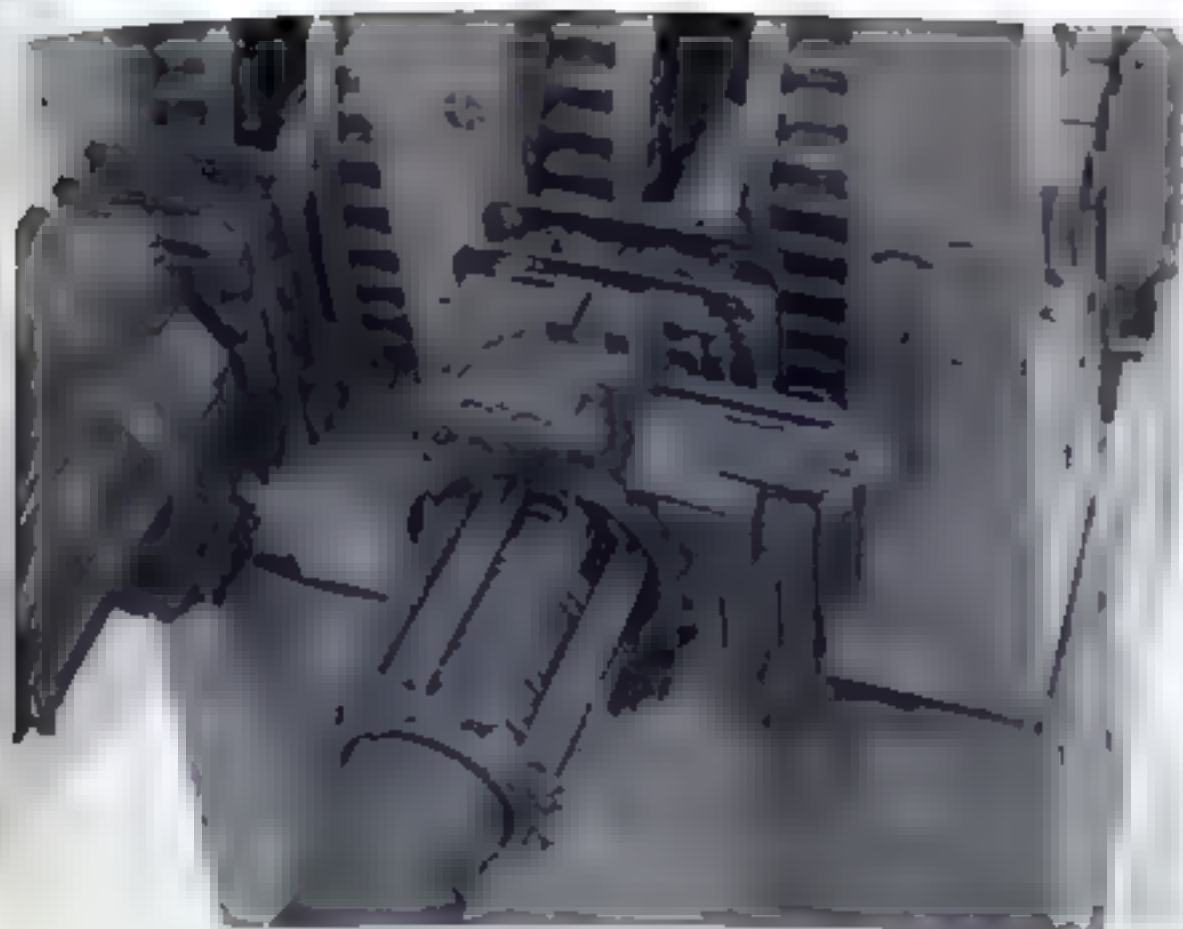
銀河帝国の最終兵器デス・スターは直径120キロという、月に匹敵する大きさの超巨大宇宙ステーションで、惑星ひとつを破壊するパワーを有していた。しかし、銀河帝国およびグランド・モフ・ターキンらの帝国軍上層部は、反乱同盟軍の不屈の闘志を見くびり過ぎていた。彼らは、この「テクノロジーが生み出した恐怖の象徴」に屈服することを決してよしとしなかったのである……

完成した直径約91センチのミニチュア。巨大感を演出する小さな光点はひとつひとつ手作業で表面の塗料をはがして[illegible]。

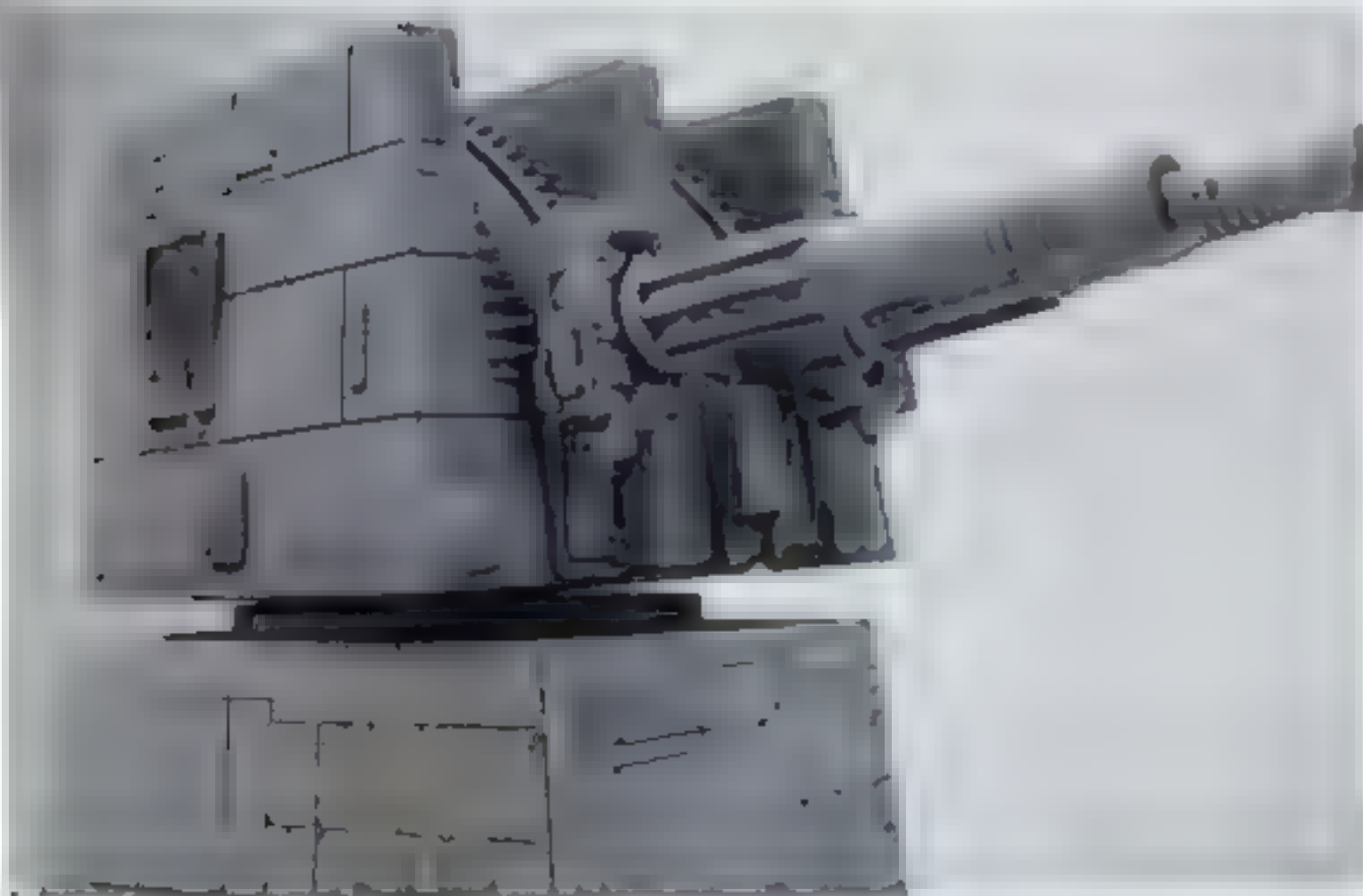
合成素材用の撮影。後ろからライトを当てて暗部の輪郭を浮き出させている。右写真も同様。

スーパーレーザーの凹みが赤道上にある初期のデス・スターのマット・ペインティング（上写真）。この描かれたデス・スターの表面には細かい穴が開いており、後ろからライトをあてると多数の光が輝いて、まるで立体物のような巨大なデス・スターに見える。右写真はコリン・キャントウェルが制作したプロトタイプのデス・スター

製作が開始されてまもない状態のデス・スターのミニチュア。遮光のためにミニチュア全体に銀色の塗料が塗られており、球体の左側に掛かっている透明なバンド状のものは、罫線を入れて塗装を施す際に使うガイドである。

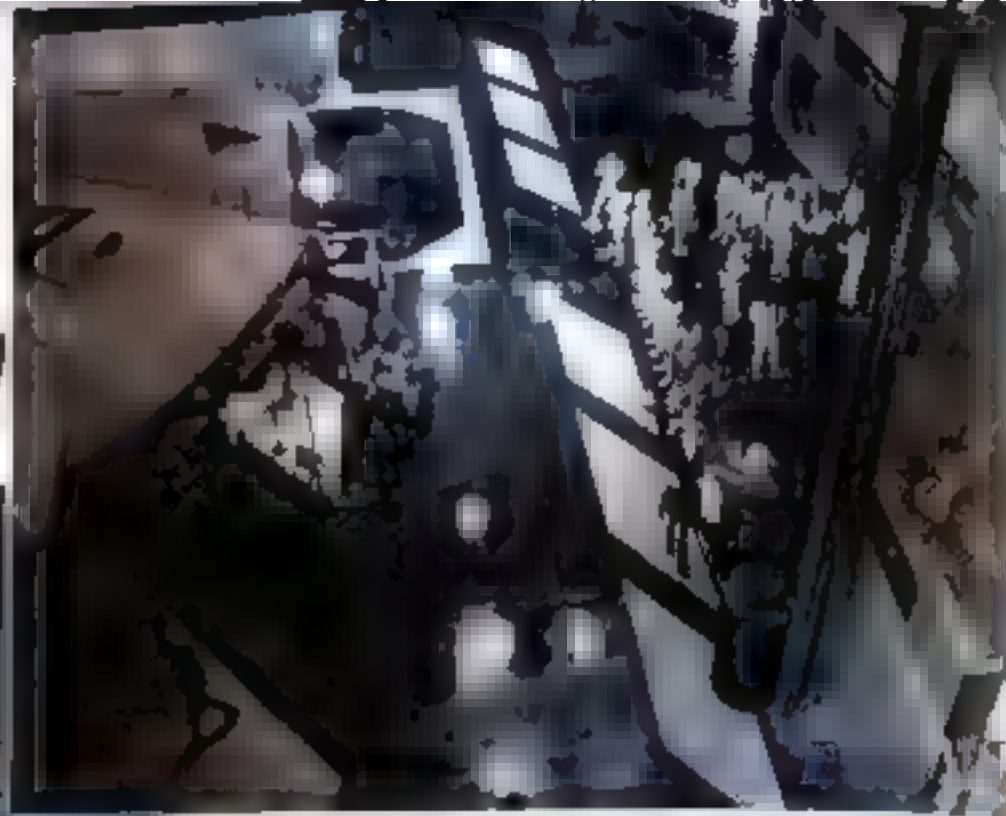
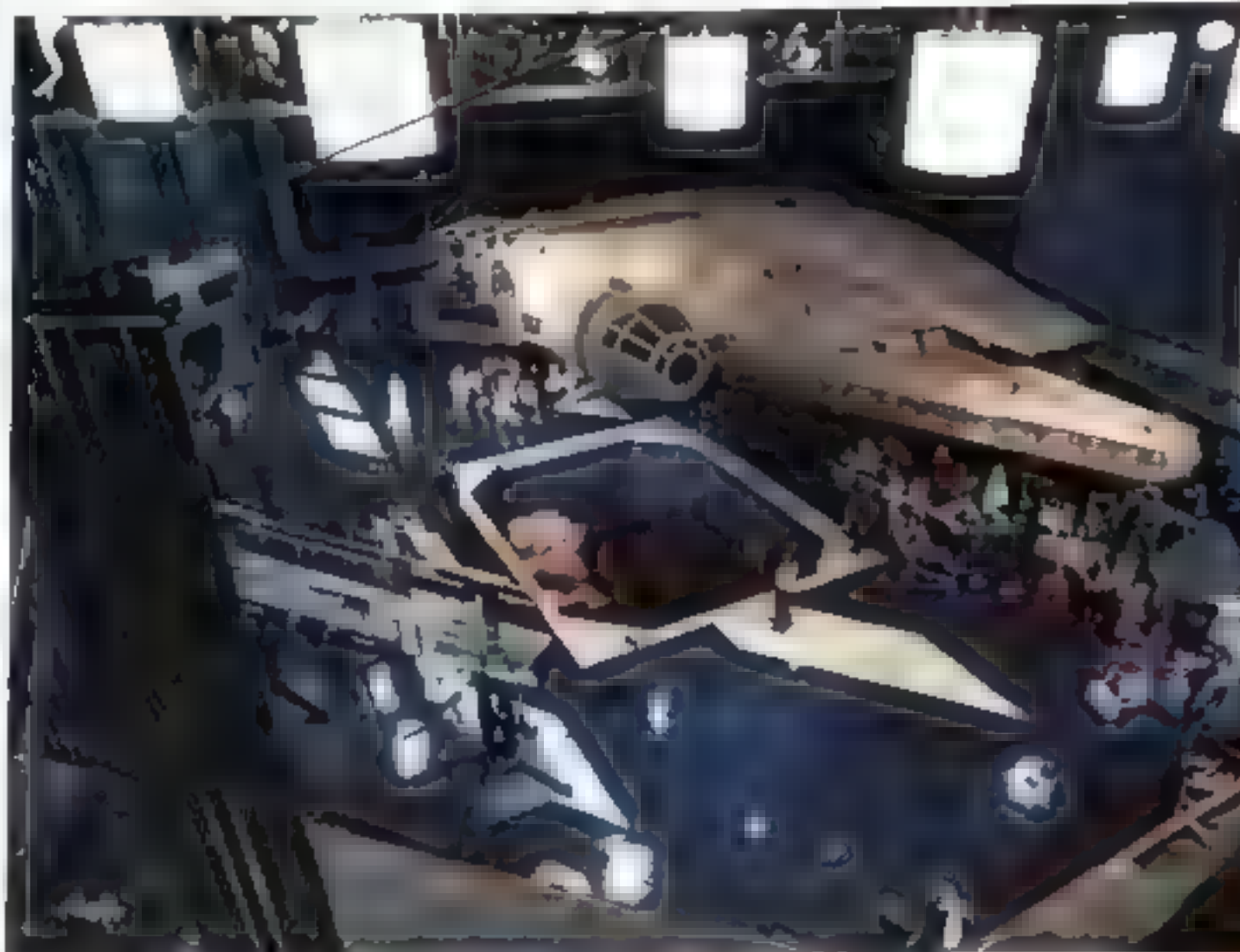
DEATH STAR SURFACE

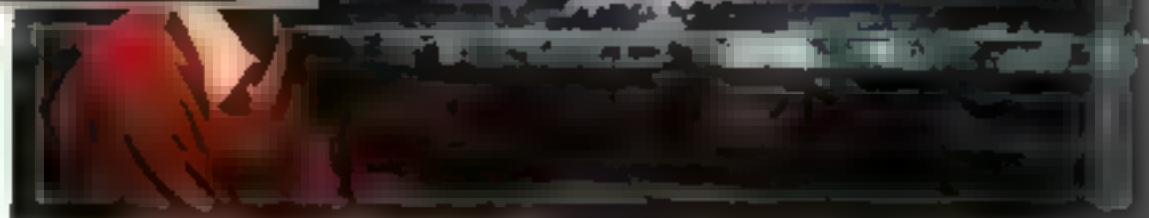
デス・スター地表面

本ページ：デス・スターの表面パーツとなる基本形は6種類作られたと推定され、さらにそれぞれの形状で大・中・小の異なる3種類の大きさでも作られたと思われる。それらがランダムに敷き詰められて地表やトレンチが作られた。トレンチの奥側は書き割り（CUTOUT）で奥行きが表現される場合もあった（2段目右写真）。デス・スターの広大な表面を再現するのにスタッフは試行錯誤を繰り返した。下段左写真では、最遠景の窓を表現するために3ミリ四方の反射テープが貼られている。

本ページ デス・スターの表面ディテール各種 一番上段の左写真は下に排熱口（左写真）があるトレンチの行き止まり部分のアップ その右の写真は行き止まり部分の全体像 複製されたベースパーツを数種類組み合わせてミニチュアが作られているのがよくわかる ミニチュアの表面には 所々にターボレーザー・タワーが建っている点も注目したい

LARGE GUN TURRET
ラージ・ガン・ターレット

本ページ・右ページ上段　ターボレーザー・タワーの最上部にあるガン・ターレットのアップ用モデル
モーターによりターレットは回転し、ライトが点灯する。銃口の先端から飛び出している白いものが発光用ライトで、これを光らせてブラスター砲発射の合成タイミングを指定する。

SMALL GUN TURRET

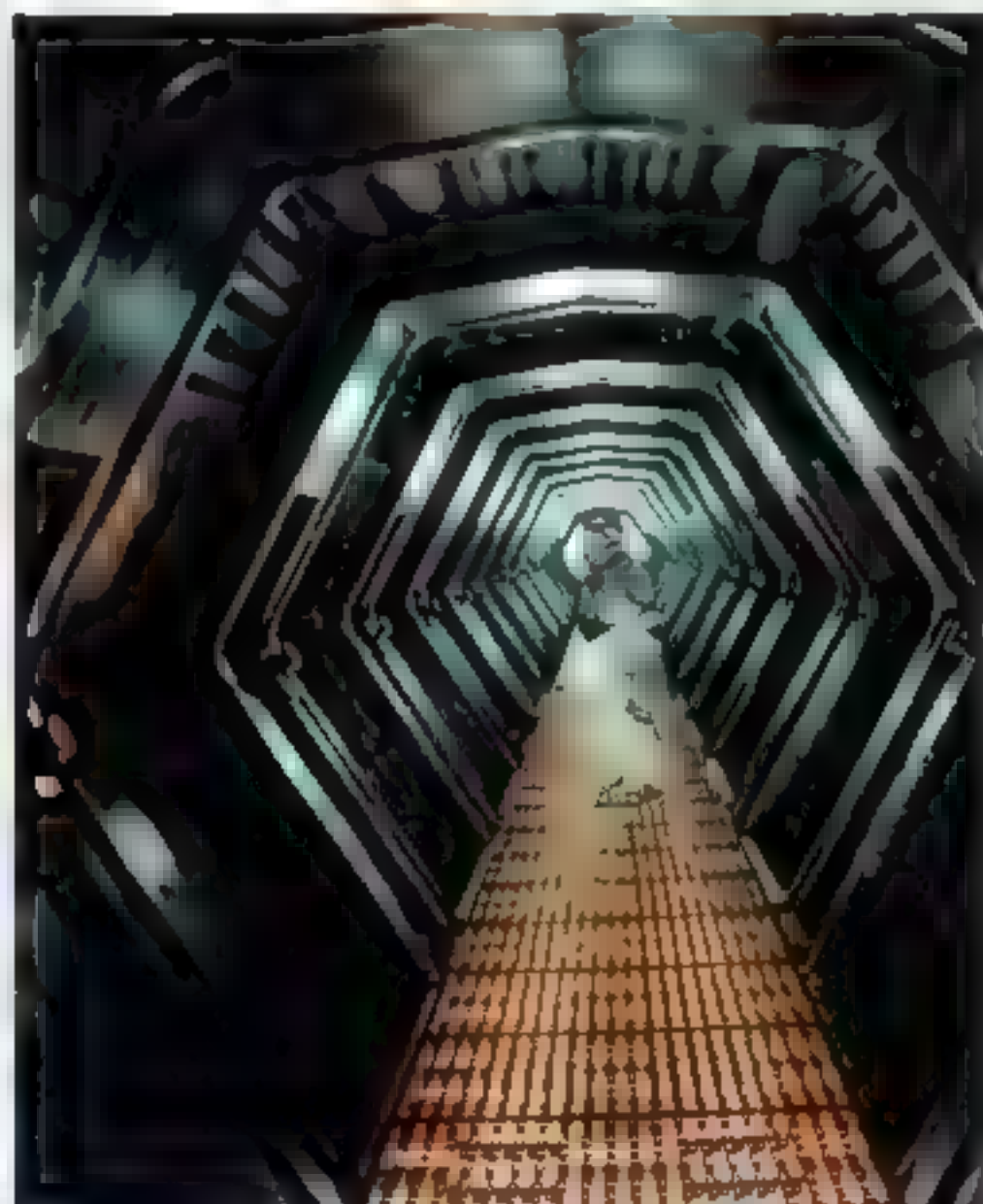
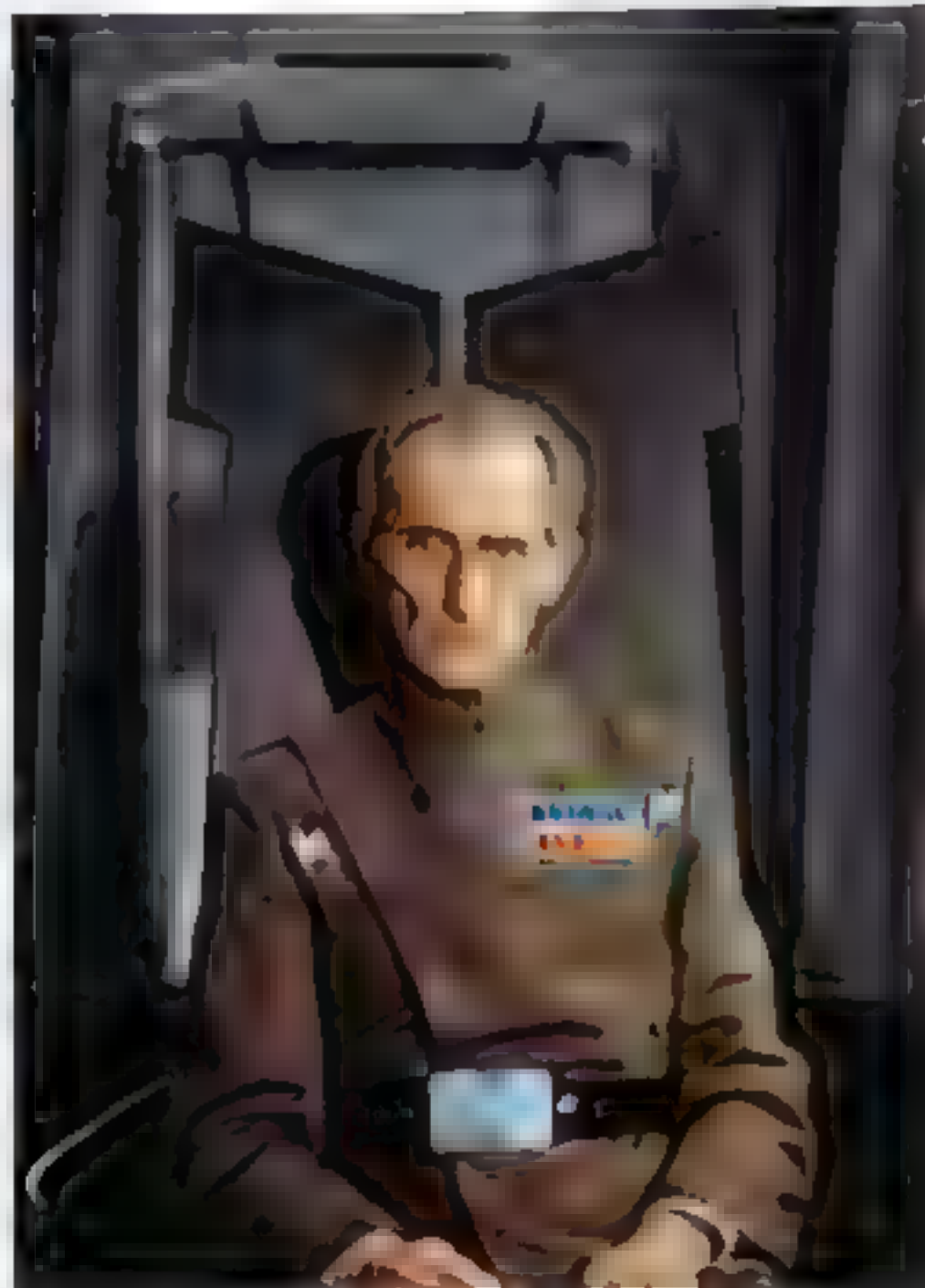
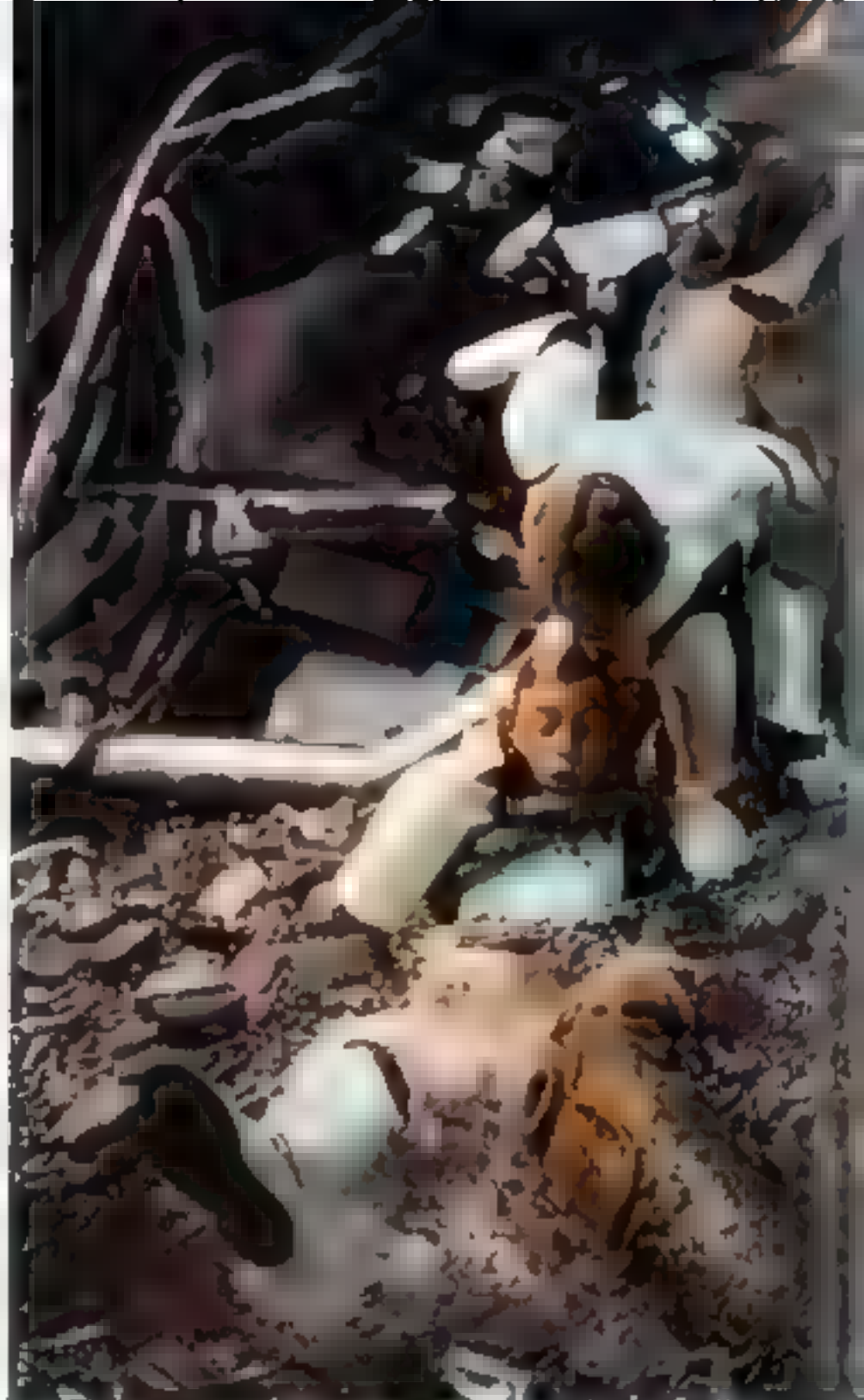
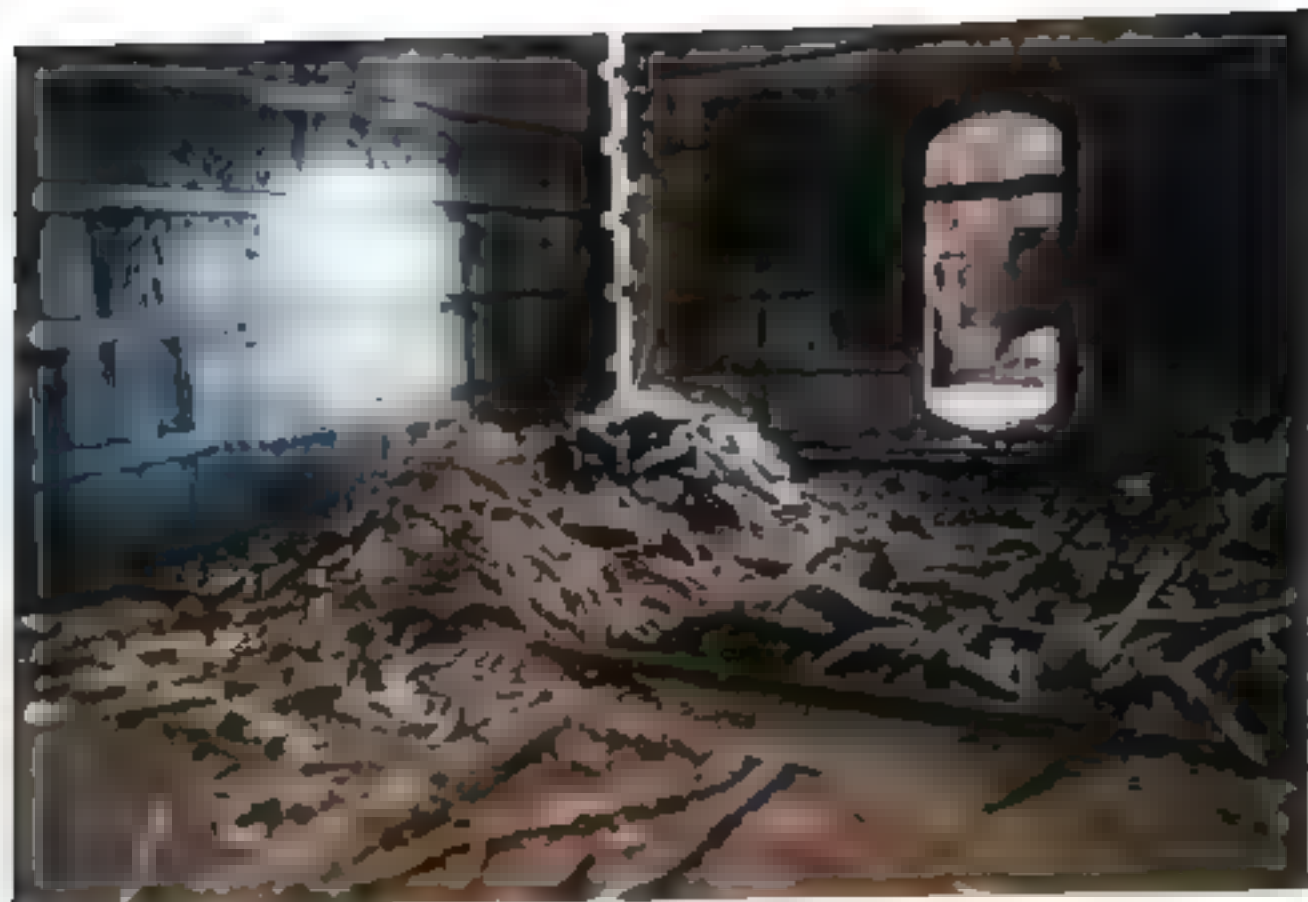
スモール·ガン·ターレット

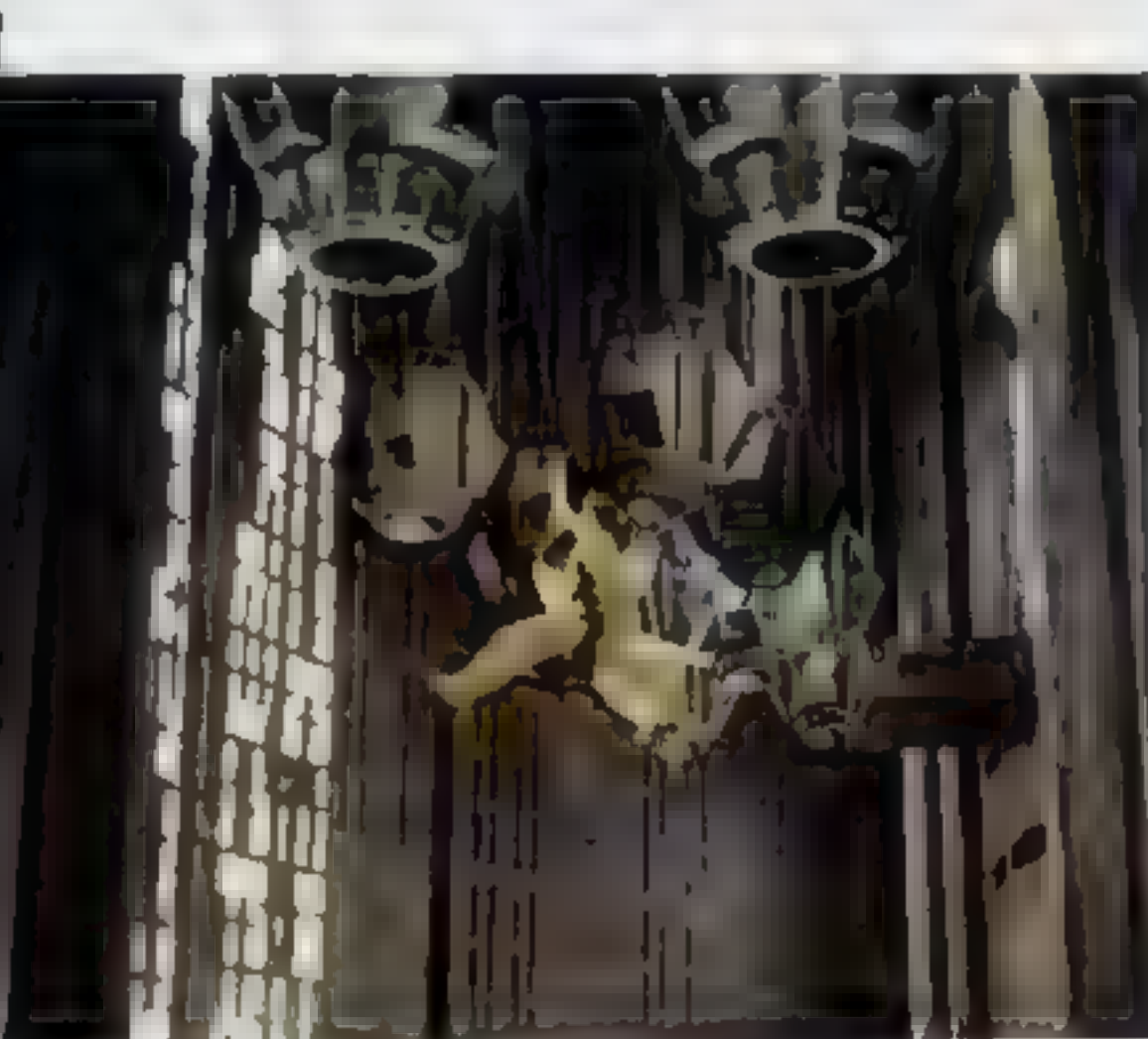
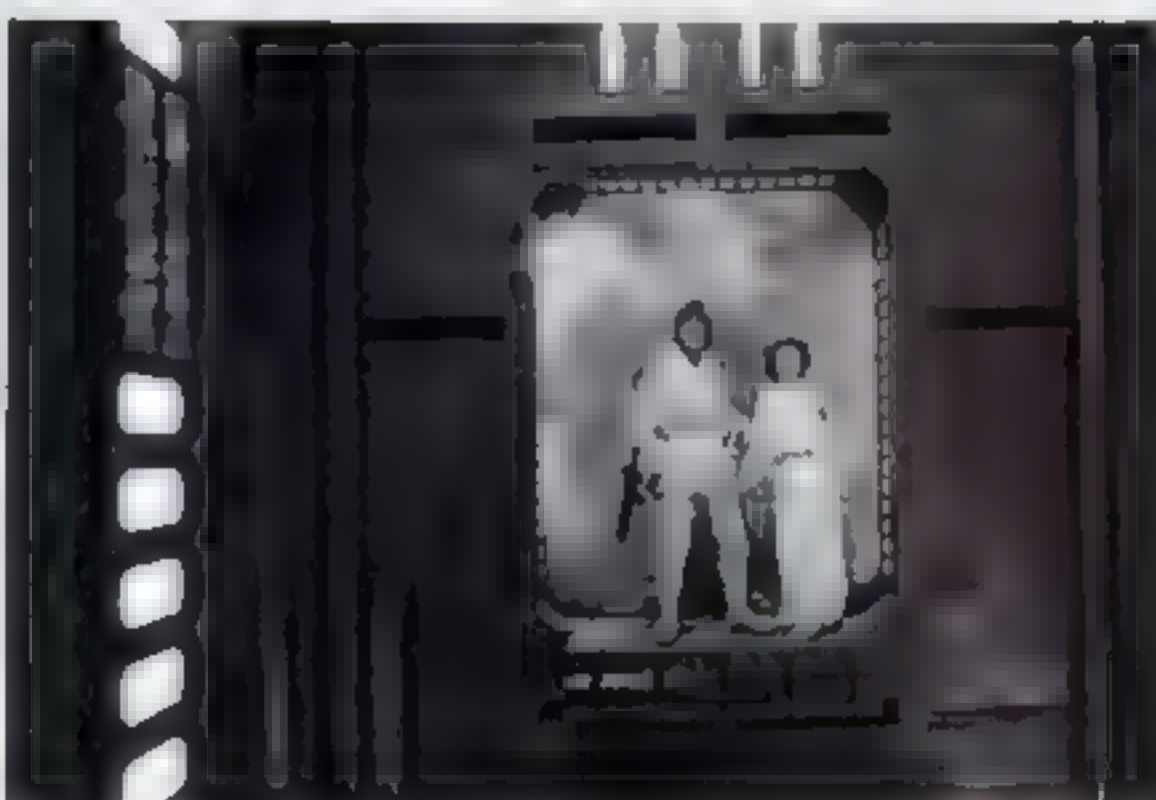
細部ディテールが若干省略されている通常用のタ　ボレーザー・タワー。ガン　ターレットは、このように高いタワーの先端に取り付けられており、デス・スターの表面には多数のターボレーザー・タワーが防御のために建てられている

INTERIOR
デス・スター内部セット

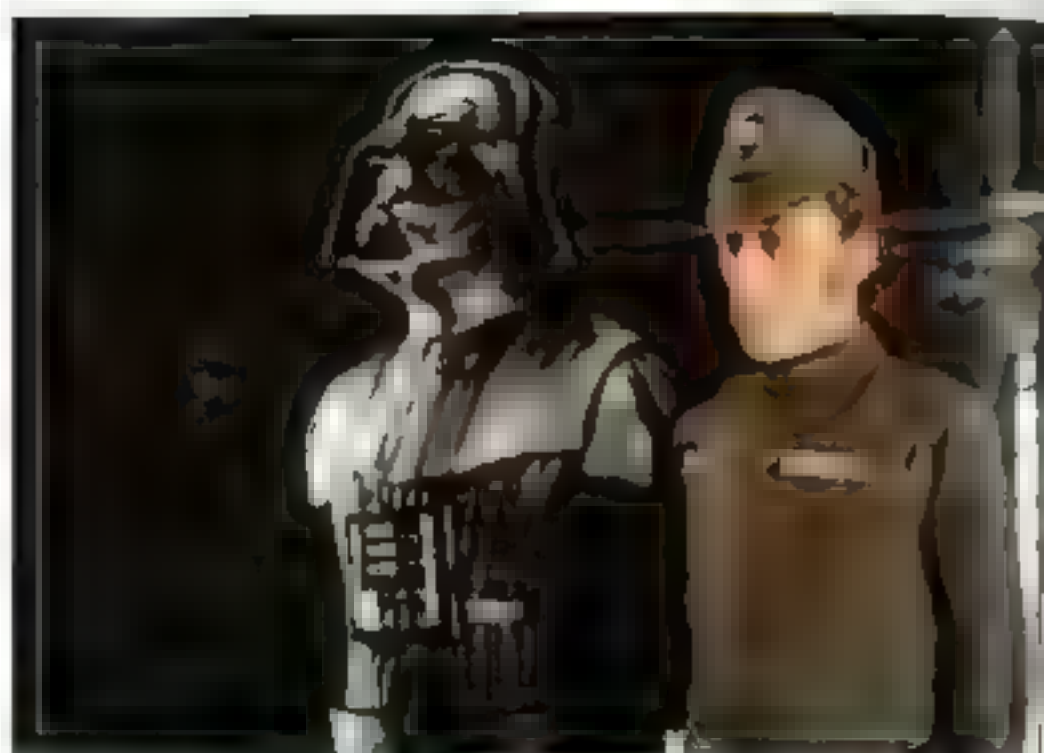
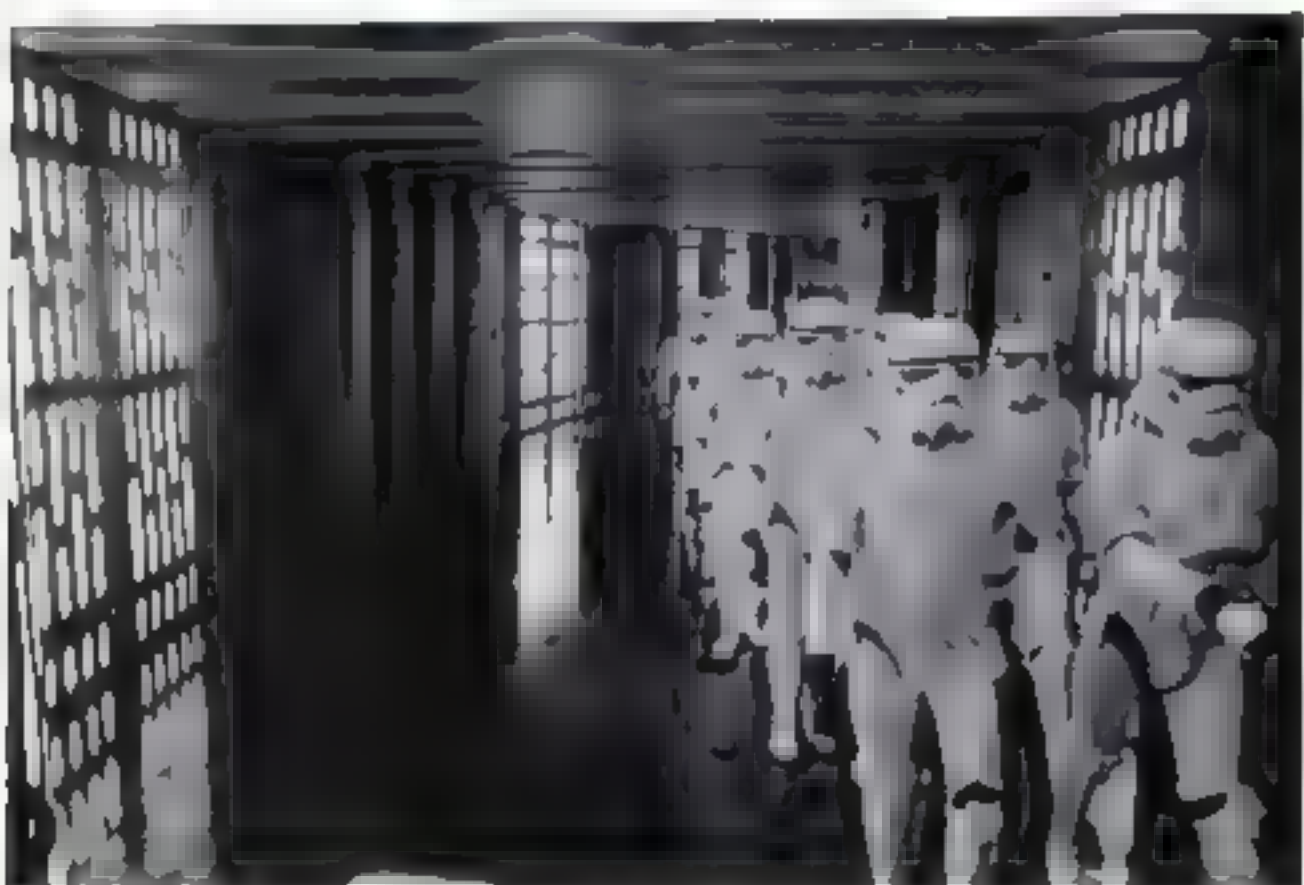
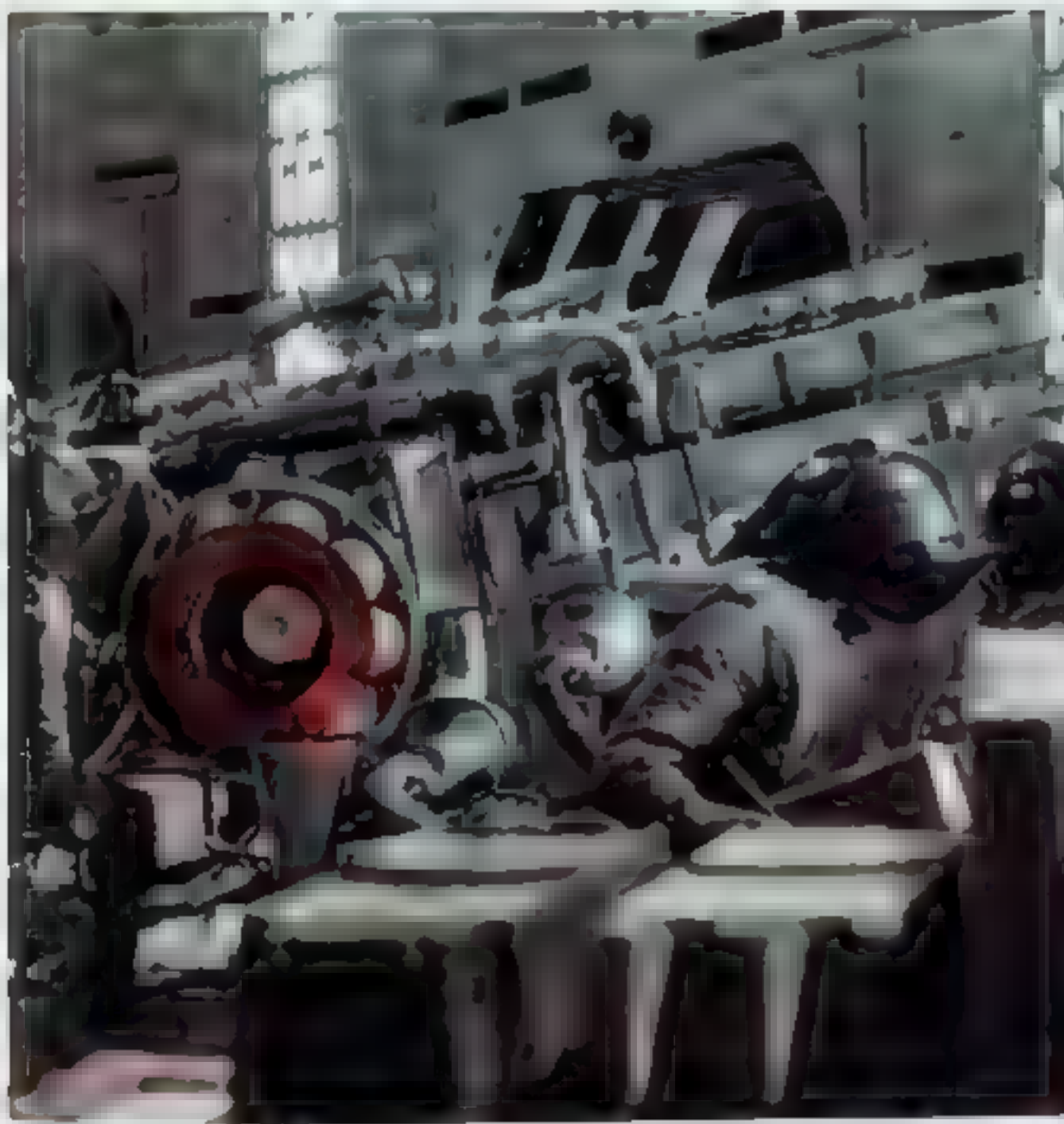
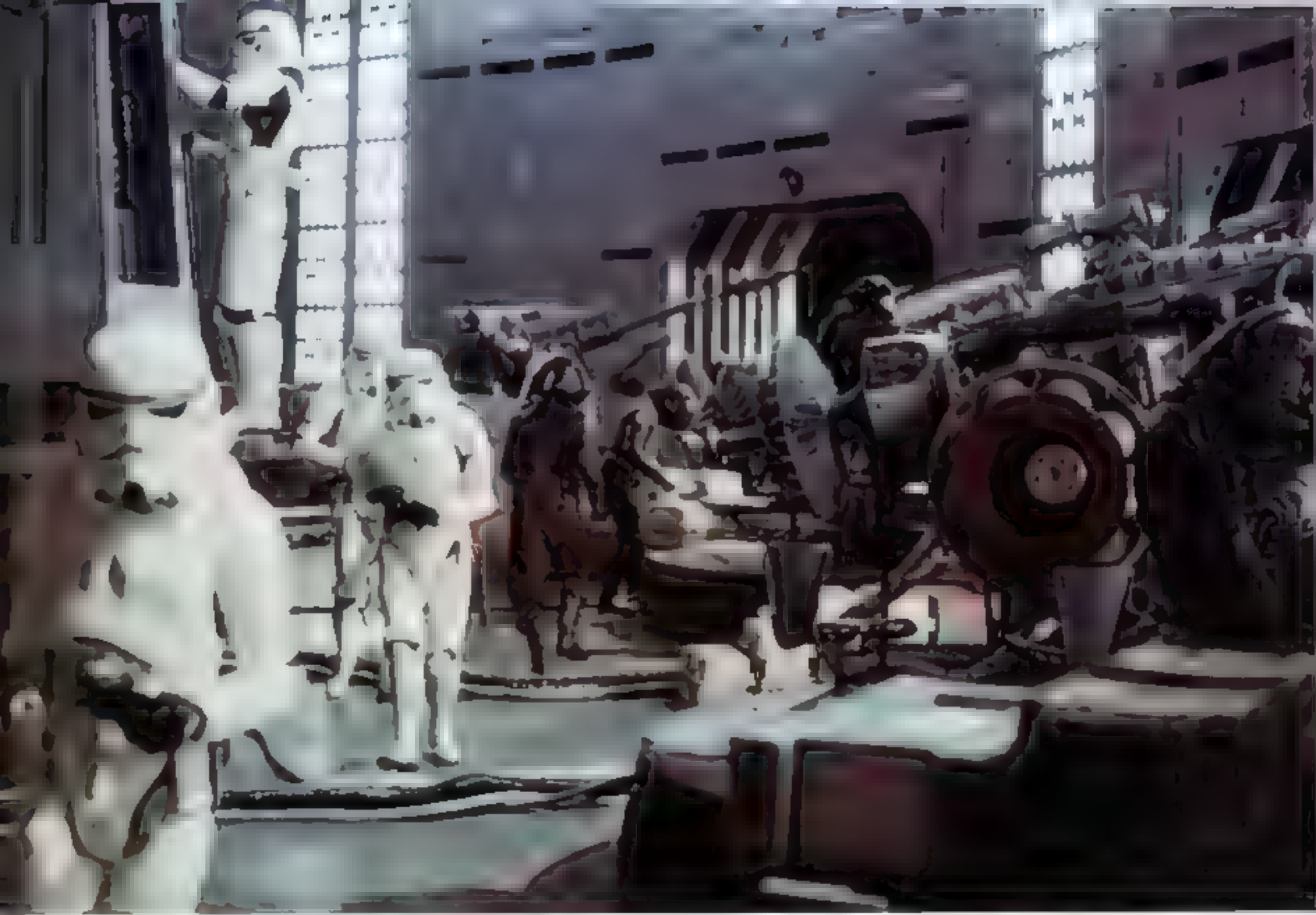
下：デス・スターのドッキング・ベイ。よく見ると床に塗装されたマーキングは、セットに奥行き感を出すためパースが付いている

右：ドッキング・ベイを真横から見た珍しい写真

右：ドッキング・ベイのマット・ペインティング。現在の修正された完成映像では、ファルコンが『エピソード5』のときに作られた中型モデルのミニチュアの写真に置き換わっており、下に描かれている矢じりのマーキングがひとつから2つに増えている

下左・下右：ドッキングベイの各装備。壁面の一部には内部に通じる通路も作られていた

上左写真はドッキング・ベイの管制室のセットで、上右写真は黒いRA-7が歩いている廊下のセット。このシーンはマット・ペインティングと組み合わせて完成映像となった

本ページ：黒とグレーで統一されたデス・スターの会議室、およびそこで各司令官に指示を出すグランドモフ・ターキン（下右写真）

上左　上右　ダイアノーガが棲むゴミ捨て場　このシーンの左右から迫る壁は人力で動かされていた

下　トラクター　ビーム制御装置のセット　床面はこの後マットペインティングで消されて　深淵が加わり高所の情景に変わる。

上段2点　デス・スター内を進むオビ＝ワン・ケノービ

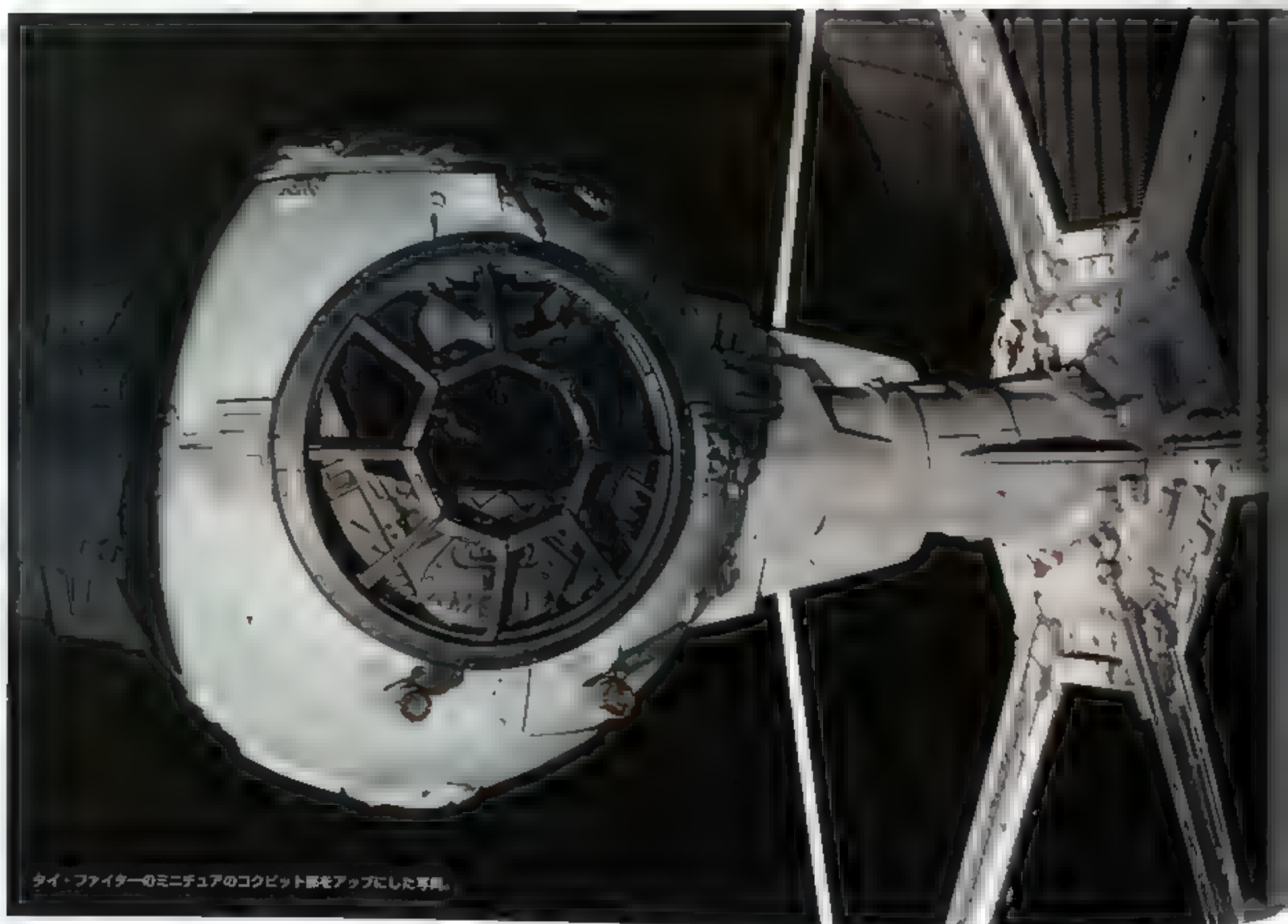
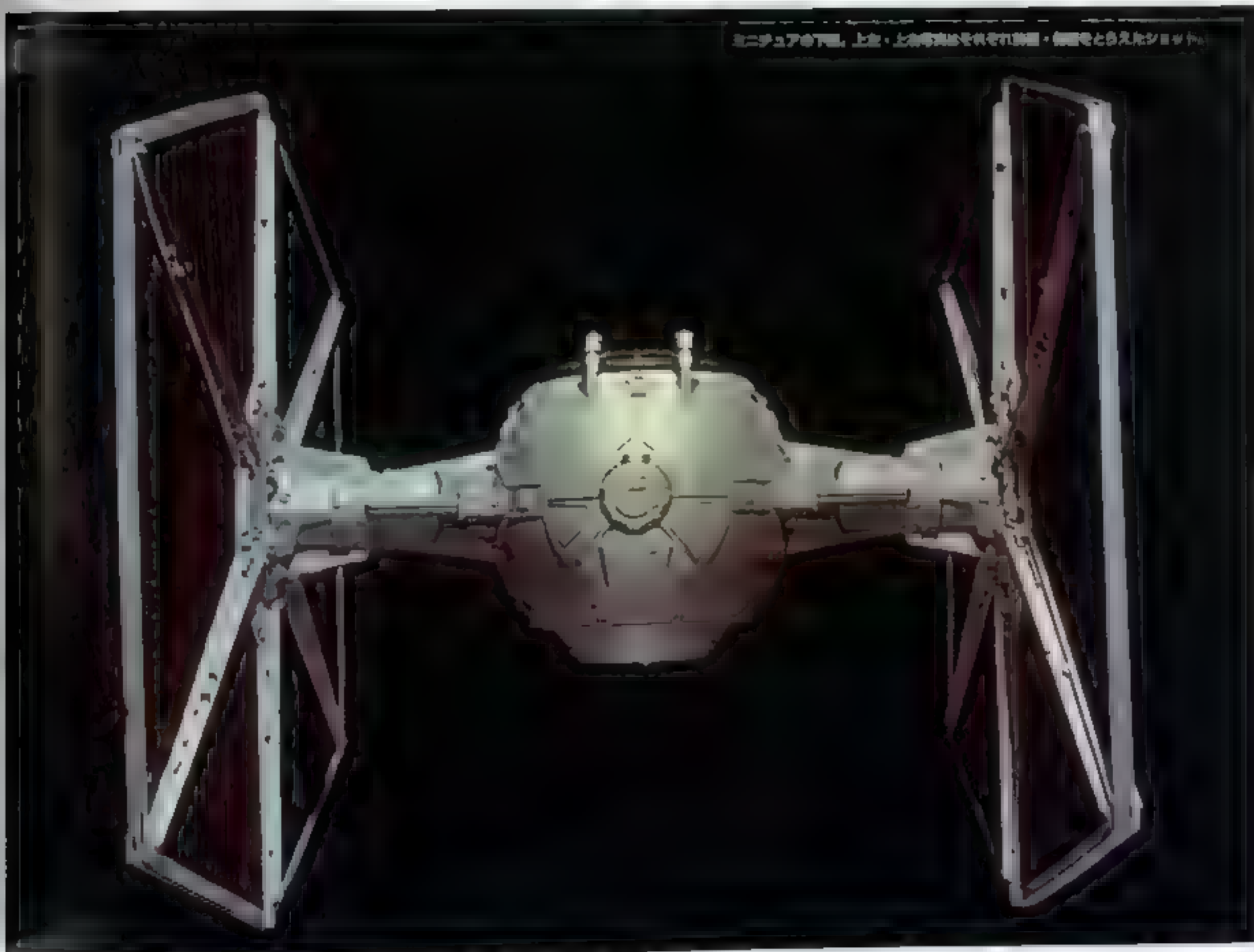
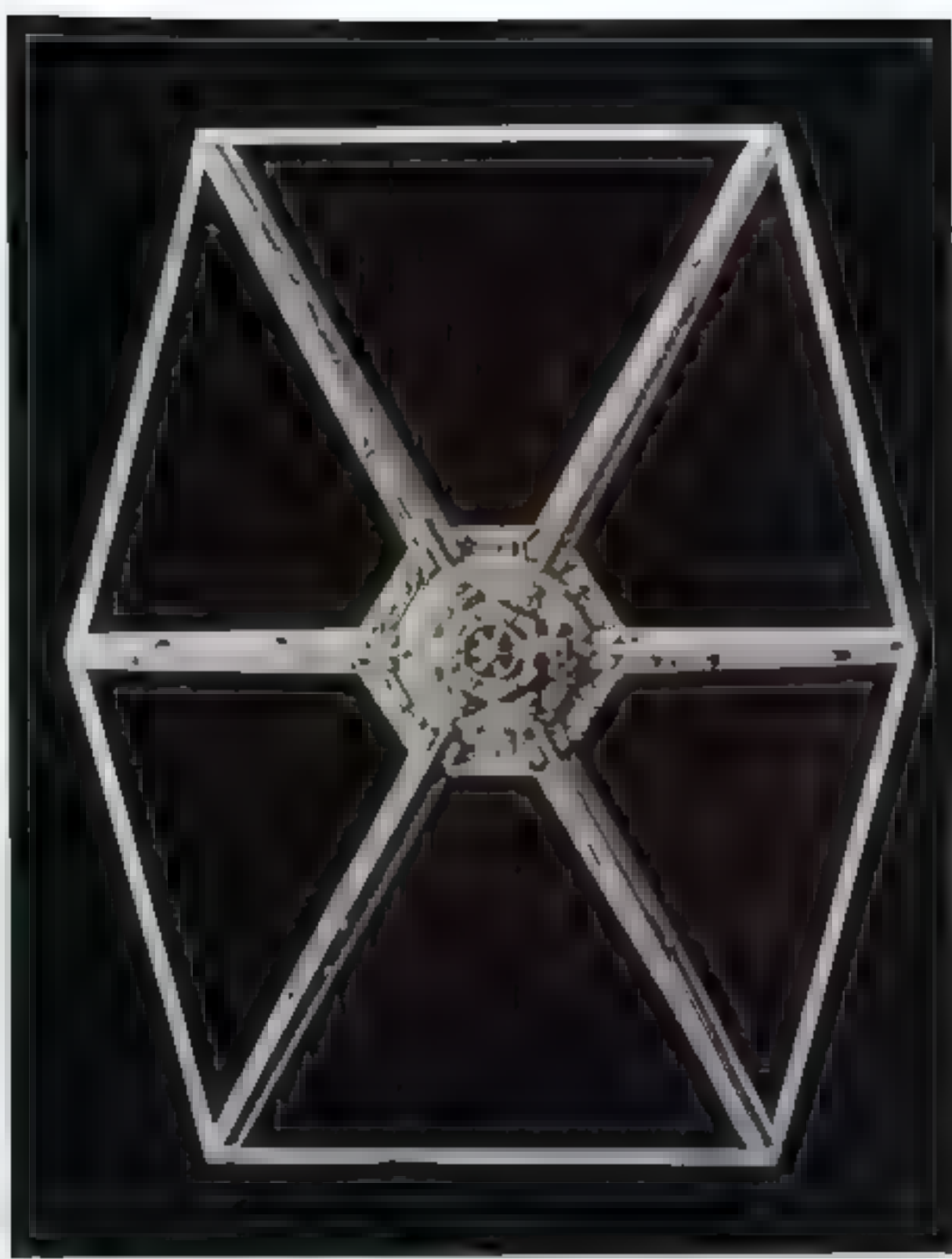
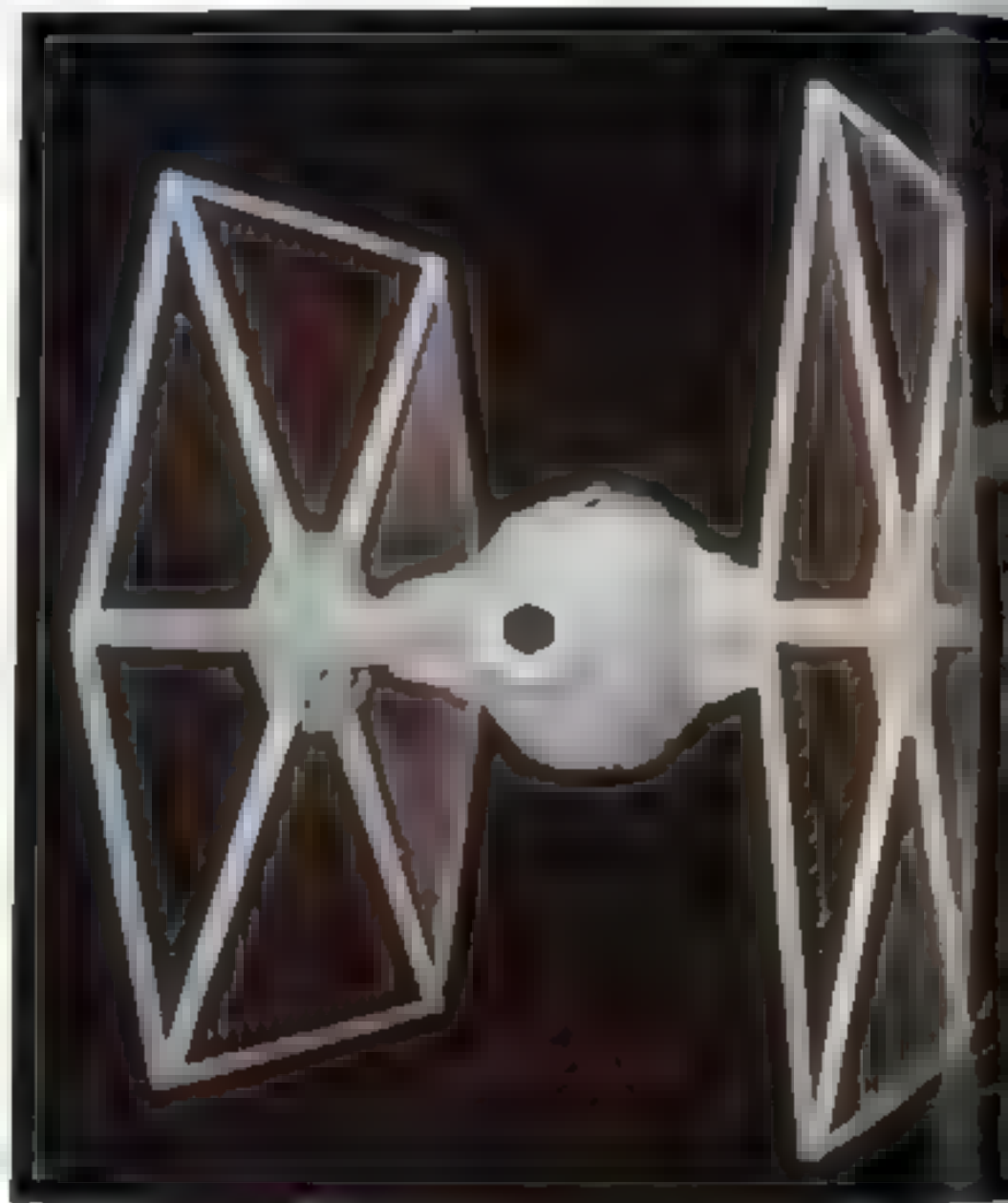
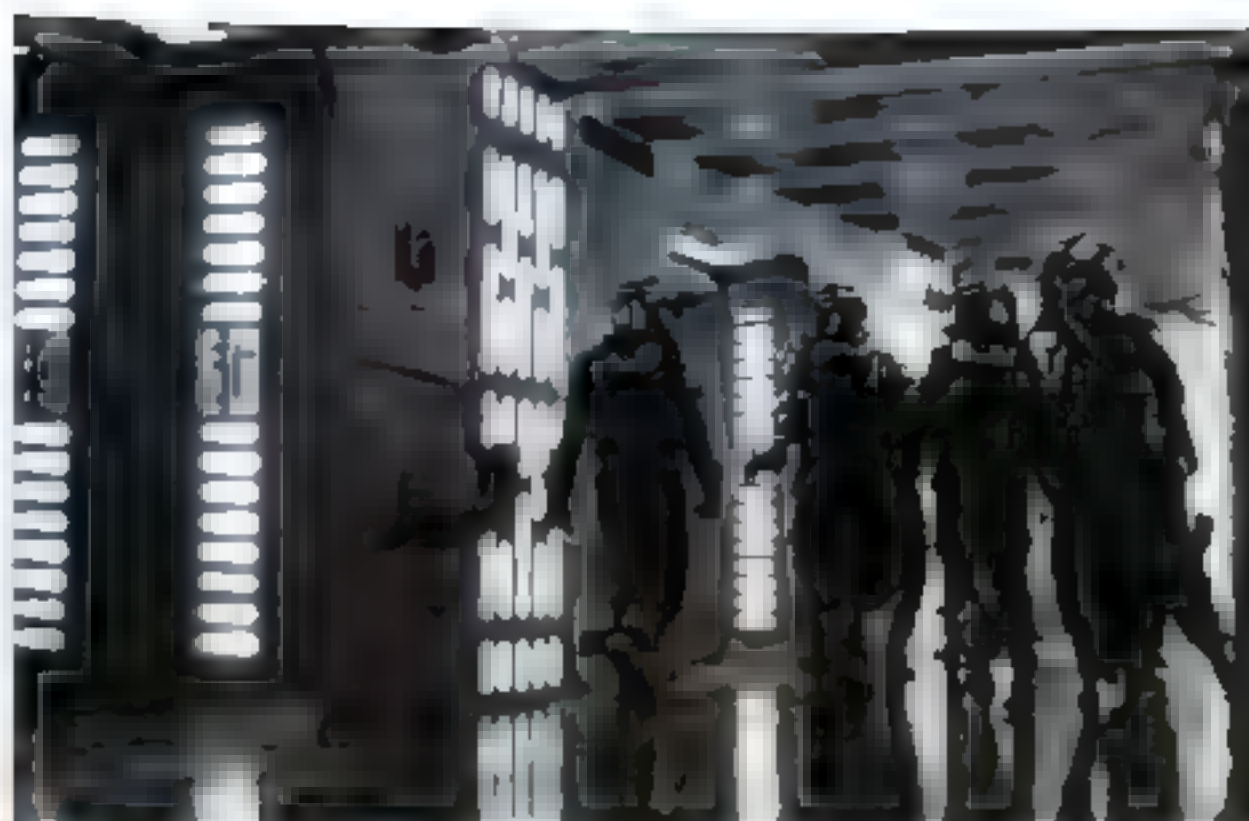
中段2点（左・上）ルークとレイアが飛び越える空溝のセットは、前ページのトラクター・ビーム制御装置の間に作られた。左写真の天井からぶら下がっている皿状の何かの装置（グリーブリー）はブロッケード・ランナーでレイアが隠れていた部屋内にも使われていた

本ページ　デス・スター内部各所におけるスチール　上段左写真は完成作品からはカットされたシーンで銃を隠し中尉をよそおい帝国軍兵士とすれ違うルーク達　デス・スターの内装は　観客が暗いイメージを連想する黒やグレーの色調に統一されて作られた

LASER CANNON

レーザー・キャノン

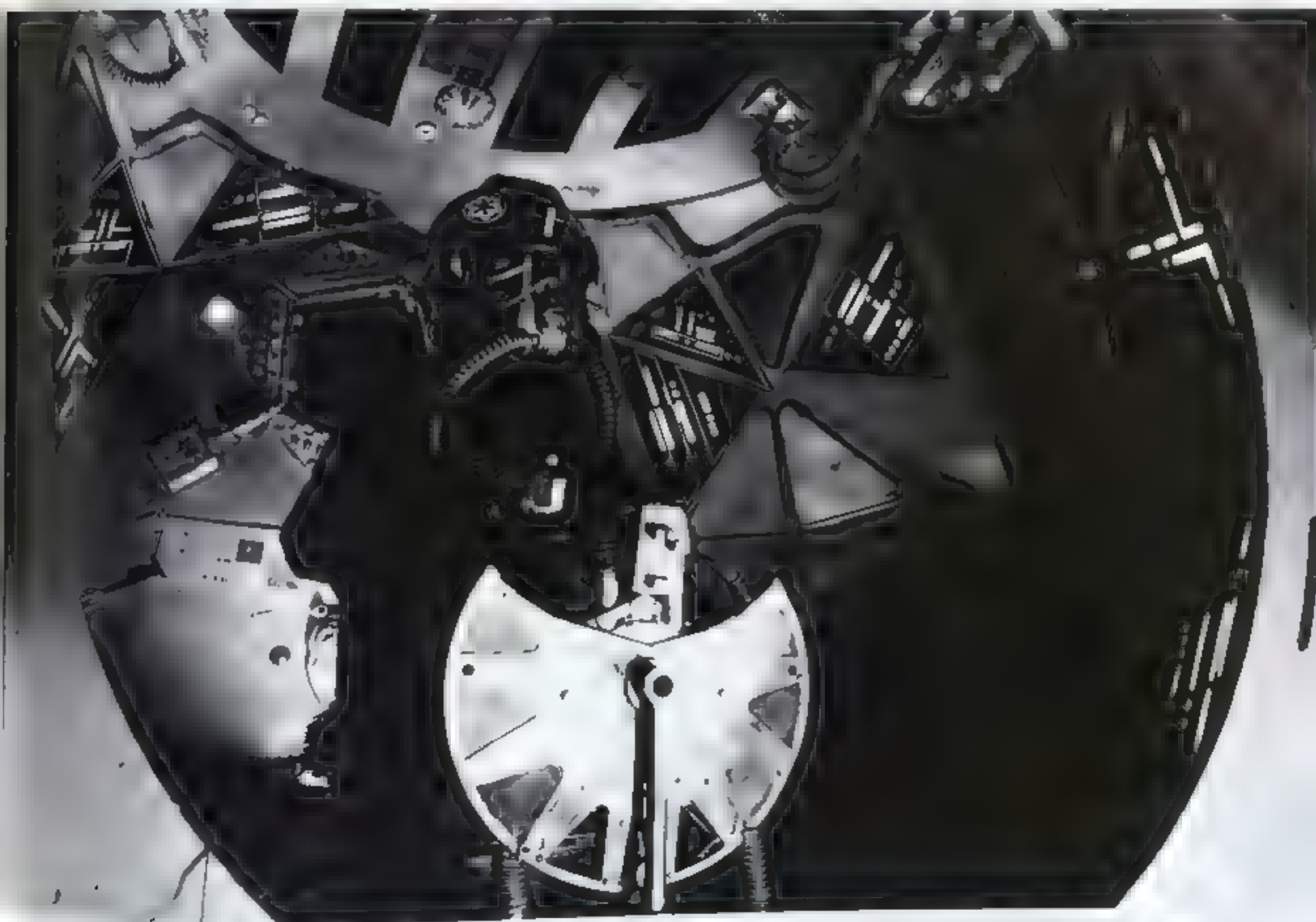
本ページ デス・スター内部に設置されたレーザー キャノンとそれを操作するインペリアル ガンナー 実はよく見ると手前の1門だけは細かく作られたセットで 後方にある2門のレーザー キャノンは書き割りであった セット デザイナーのロジャー クリスチャンの証言によると このレーザー キャノンも廃品を利用して作られたセットのひとつだという

TIE Fighter タイ・ファイター

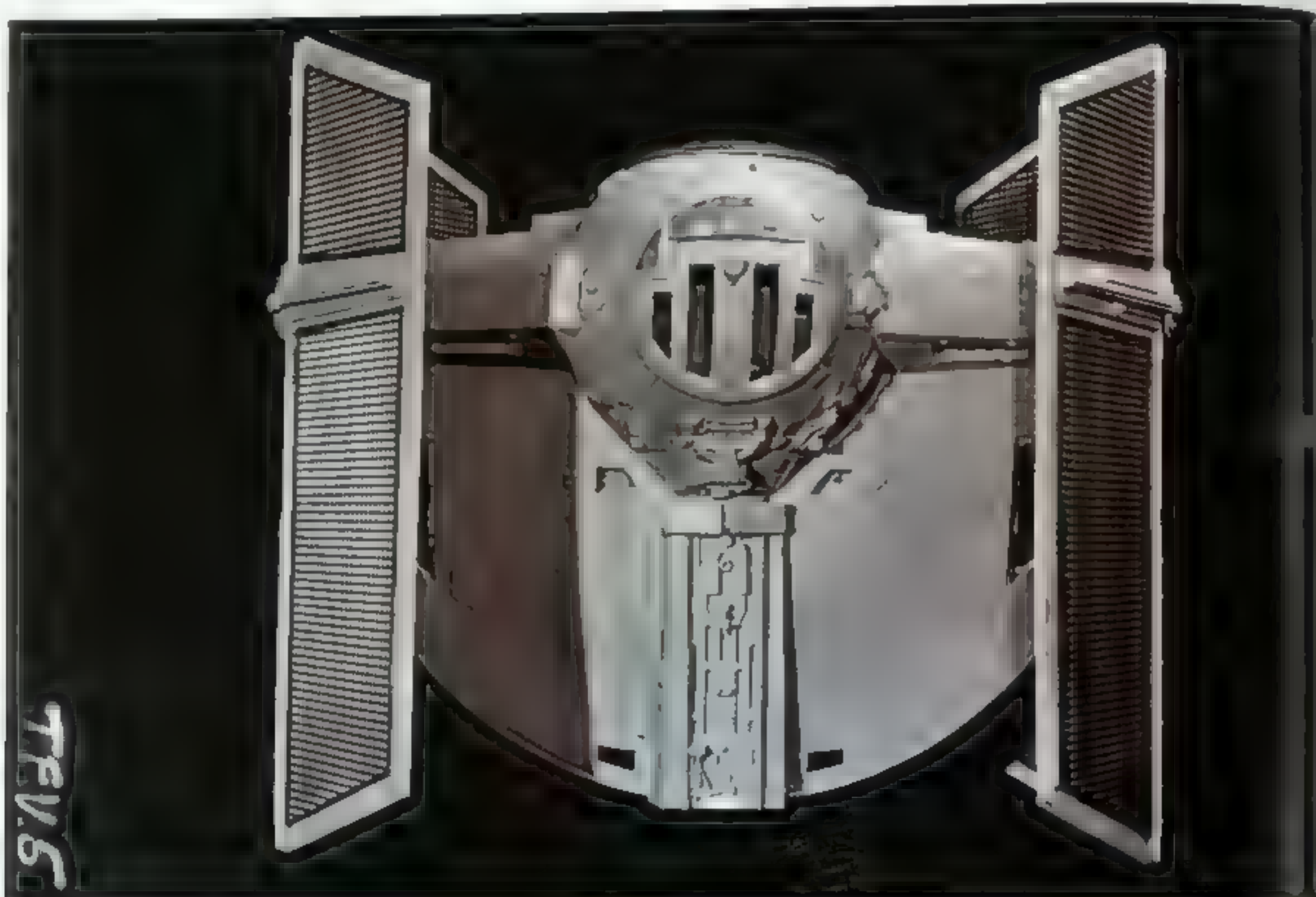
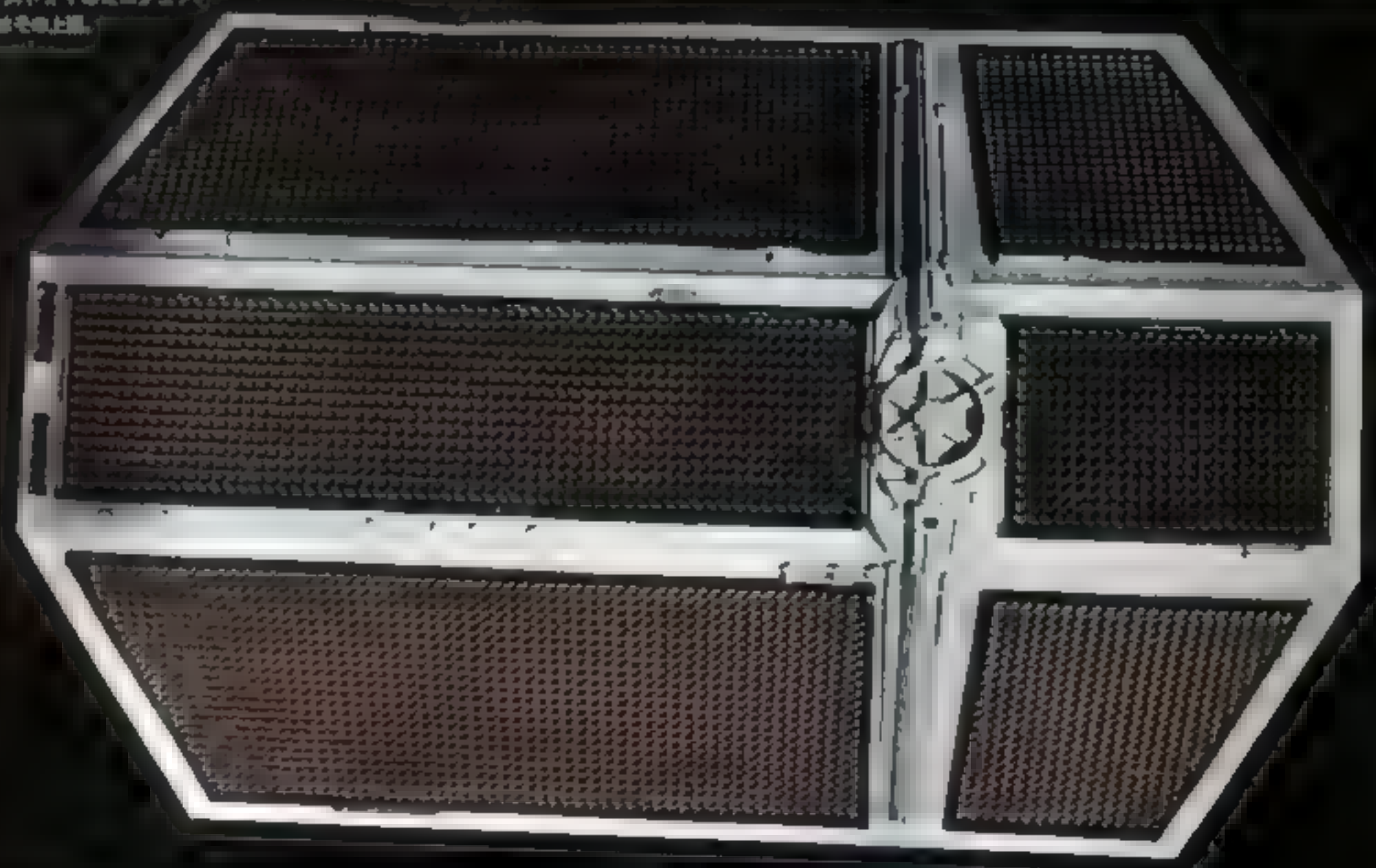
帝国艦隊の象徴的存在であるタイ・ファイターは、軽量化の目的で基本的にはハイパードライブを搭載せず、パイロットは生命維持装置を装着して乗り込む。とても印象的な怪物の咆哮のようなタイ・ファイターのエンジン音は、聞いたものすべてを恐怖に震え上がらせた。製造元はサイナー・フリート・システムズで、型式名はTIE/lnスターファイターとなっている。全長8.99メートル。

本ページ、右ページ、この見開きページのタイ・ファイターはアップ用の「ヒーロー」タイプのミニチュアと思われ、機体の各部に細かいマーキング（一部には市販プラモデルのデカールが流用されている）が施されている。ILMのモデル・メーカーであるローン・ピーターソンの証言によると、機体色はタイ・ファイターの色として指定されたブルーグレイで塗られていたが、劇中でのタイ・ファイターの色が真っ白に見えるのは、ブルースクリーンを使用する合成の都合で、撮影時にライトが強めに当てられていたためではないかと推測される。

タイ・ファイターのミニチュアのコクピット部をアップにした写真。

ミニチュアの下面。上左・上右写真はそれぞれ前面・側面をとらえたショット。

タイ・ファイターの機体色は試行錯誤の末に決定されたようで、初期にはピンクで塗られたものまでカメラ・テストされていた。残っている記録写真でも、明らかに劇中とは異なった色やマーキングのものもあり（上段左写真など）、まだまだ研究の余地はありそうだ。『エピソード4』のタイ・ファイターのミニチュア製作においては、六角形の翼（ソーラー・パネル）の放射状の枠は各辺ごとに8本バラバラのパーツであったが、この製作工程は手間が掛かるため、『エピソード5』では枠が一体成型された（右写真）

TIE FIGHTER PILOT

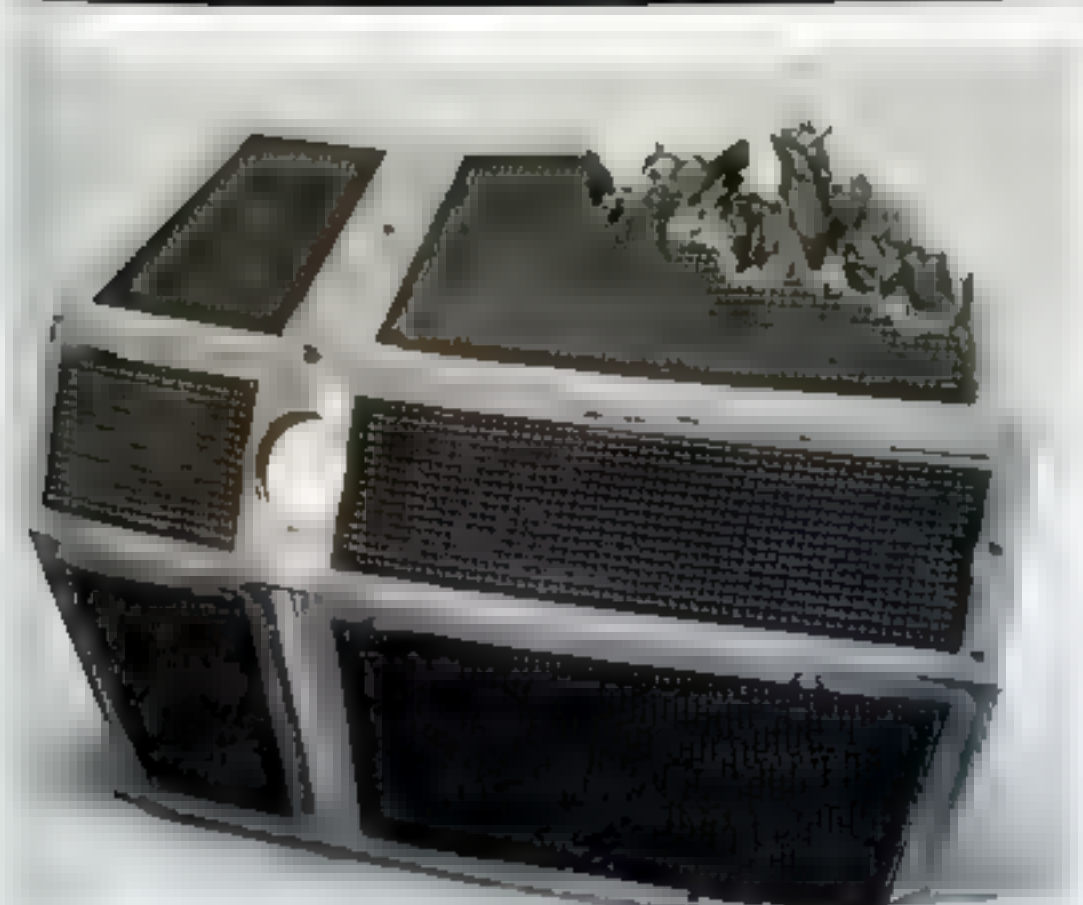
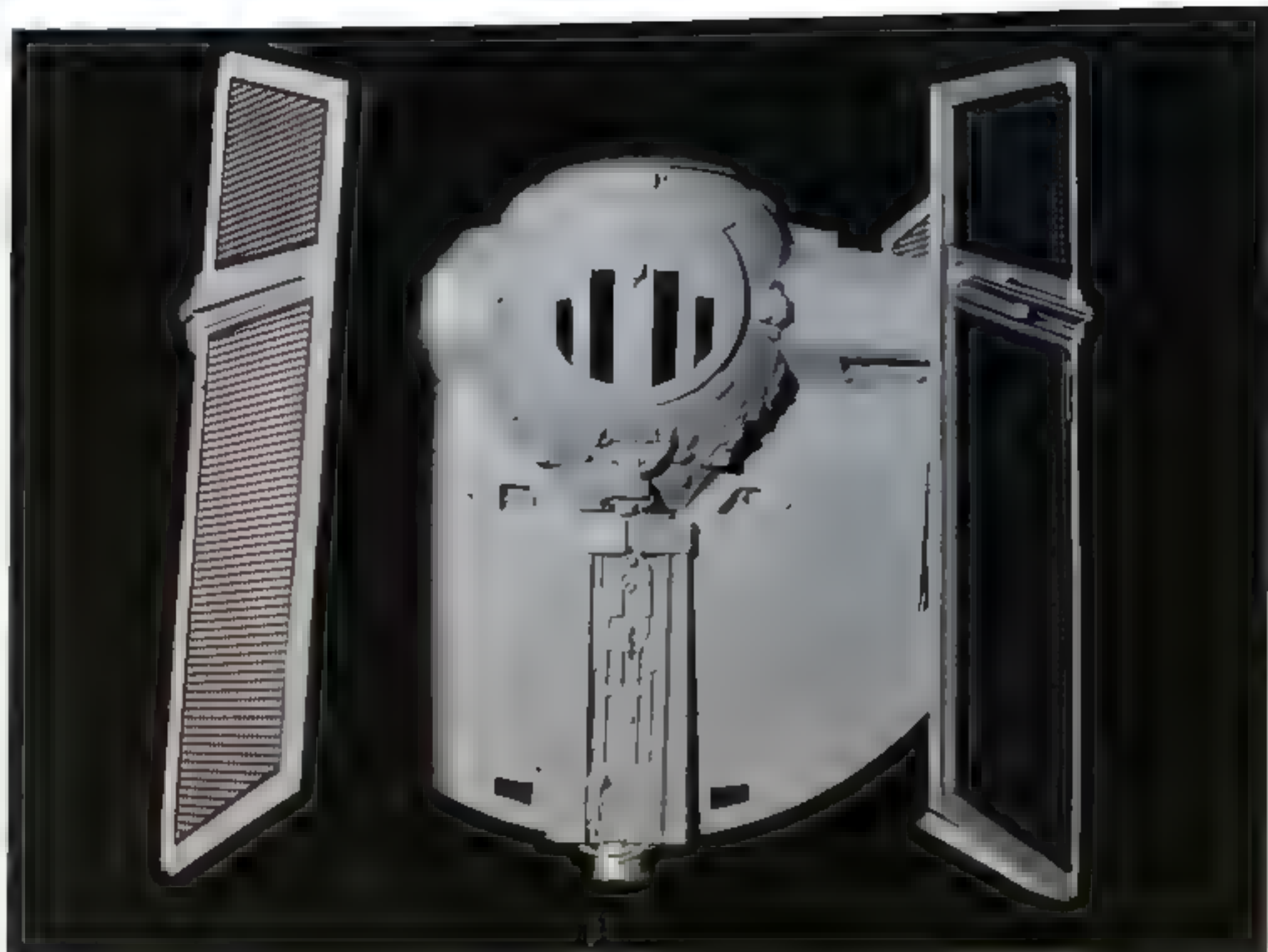
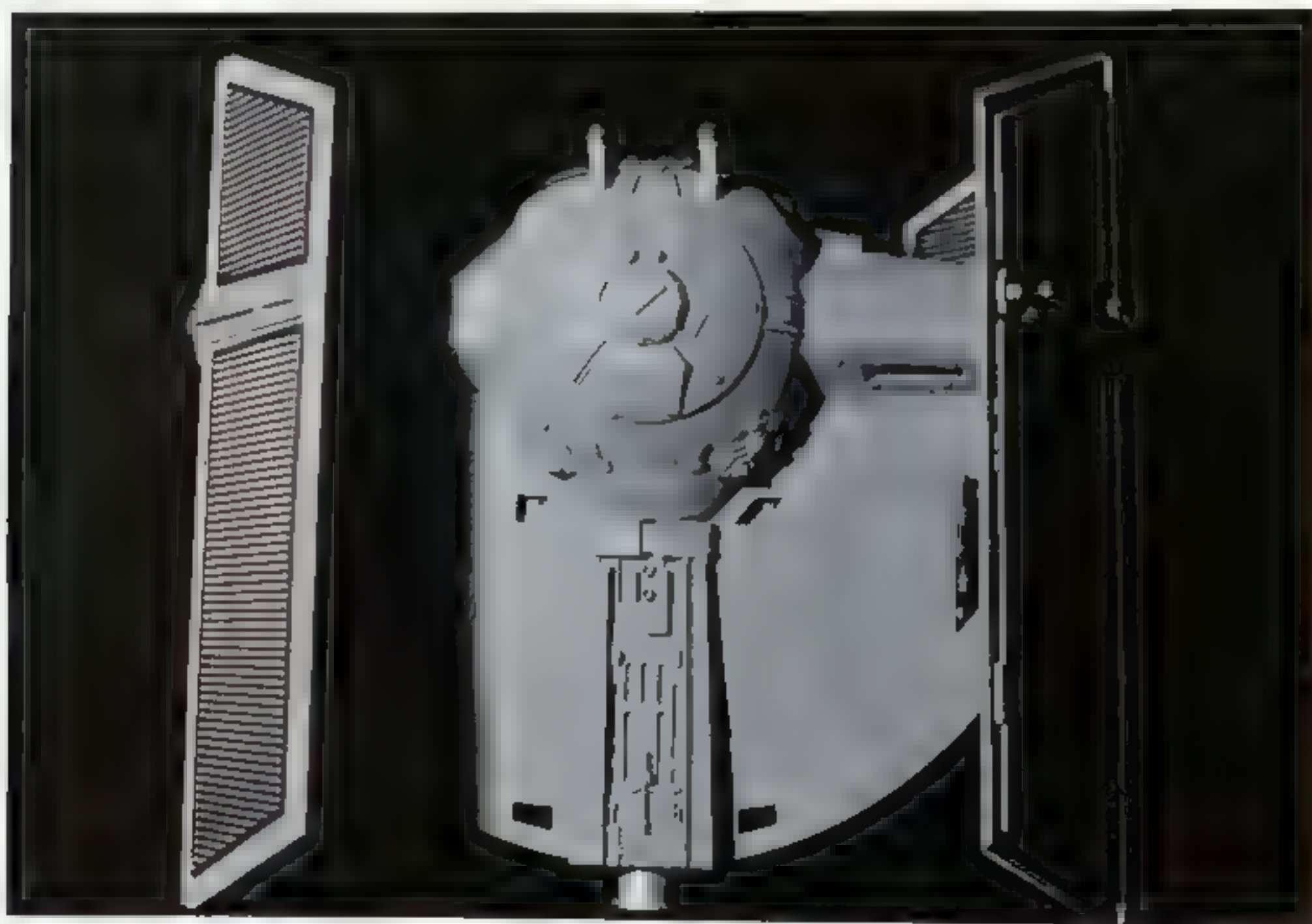
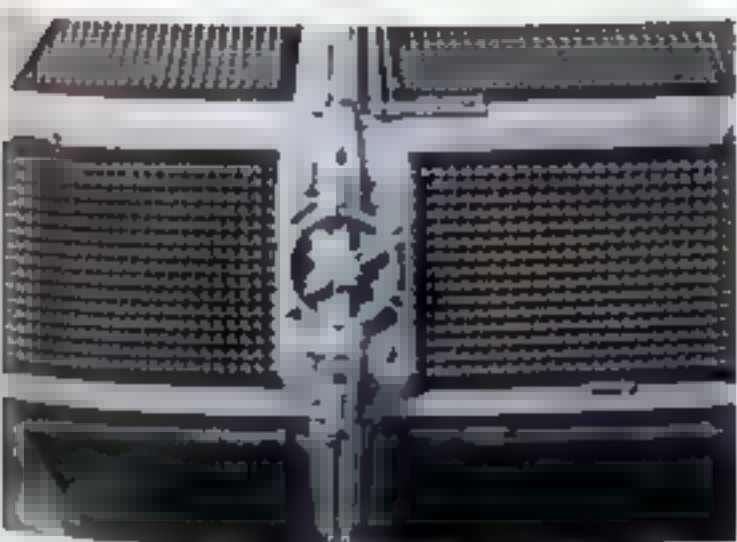
タイ・ファイター・パイロット

本ページ：コクピット内のミニチュア（上左写真）および役者が演じるタイ・ファイター・パイロット。タイ・ファイターを操縦するタイ・ファイター・パイロットは、黒いフライトスーツに身を包み、胸部に生命維持装置を取り付けた特殊なアーマーとヘルメットを装着している。劇中ではほとんど活躍シーンのなかったタイ・ファイター・パイロットであるが、セットには12人分のコスチュームが用意されていた。上写真はデス・スター内を駆け回るタイ・ファイター・パイロット達。左写真は『エピソード6』からのシーンであるが、これは新たに撮影されたカットではなく、『エピソード4』の使い回しフィルムである。『エピソード4』で使われた生命維持装置は左側面下側から背中にかけてホースが付いている。

TIE Advanced x1 タイ・アドバンストx1

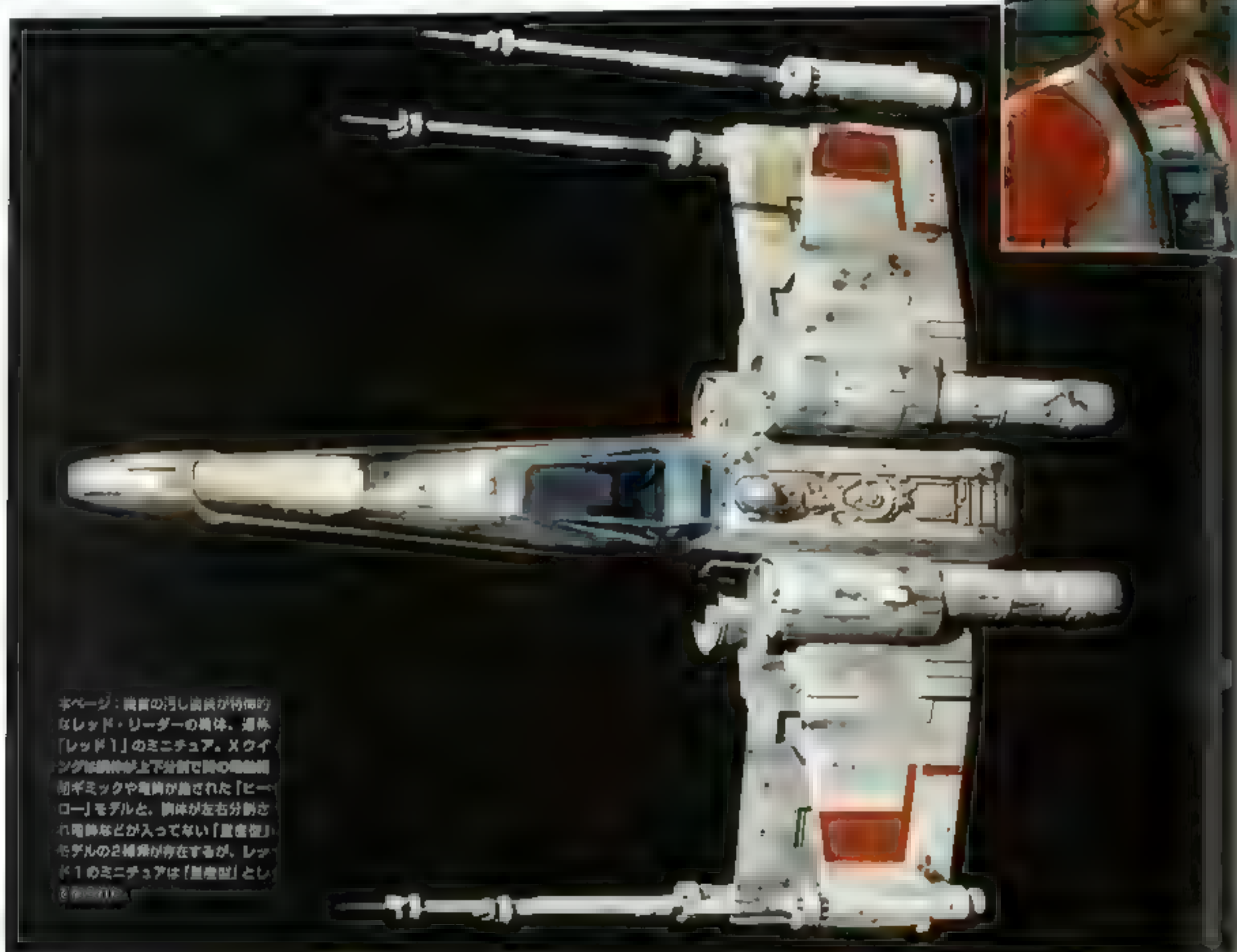
ダース・ベイダーみずからが搭乗した戦闘機、タイ・アドバンストx1は、ヤヴィンの戦いにおいて帝国軍のブラック中隊を率いて出撃した。本機は通常型のタイ・ファイターと比べ、はるかに高速でかつ重武装の機体となっている。重ツイン・ブラスター砲を両翼基部に据え、副装としてクラスター・ミサイルを装備する。また、多くのタイ・ファイター系の機体とは異なり、ハイパードライブと偏向シールド発生装置を備えている。さらには、より高性能のソーラーイオン化反応炉とより強力な船殻を有している。全長9.2メートル

タイ・アドバンストx1のミニチュア。側面図、上写真はその上面。

上2点 左2点 前方 後方から見たミニチュア

当初 ダース ベイダーが乗るタイ ファイターは 一般型と同じ機体を色だけ変えて登場させる予定だった しかし、ジョージ ルーカス監督が「映画を見ている観客が どれにダース ベイダーが乗っているのか ひと目で分かる機体が欲しい」と要望を出し 急きょデザインされたのが タイ アドバンストx1であった デザイン画は手のひらサイズの小さなもの1点しか描かれず それのみを参考にして撮影用ミニチュアが作られた

下写真はコクピットに収まるダース ベイダー コクピットのセットはひとつしか用意できなかったため このセットは一般型タイ ファイターの外観に合わせて作られていた そのため背面にはタイ アドバンストx1にはない六角形のビューポートが後方にある。下左写真はダメージ表現が施されたミニチュアの片側

本ページ上2点、右ページ上2点　機体の基本造型は終了しているが、細部の塗り分けがまだ行われていない、完成直前のミニチュア。それぞれ順に上部、下部、前面、右側面である。タイ・アドバンストx1のミニチュアは、一般型タイ・ファイターのミニチュアを改造して作られており、翼はより速い機体に見えるようにタイ・ファイターに比べ長さを詰めてさらに角度を付けて立体的にデザインされた

左ページおよび本ページ下3点：これらは現存するミニチュアを2011年に撮影した写真。やはり年月が経っているため、損傷個所も見受けられるが、現在（2016年）は修復されてイベントなどで展示されている

X-wing Starfighter Red Leader

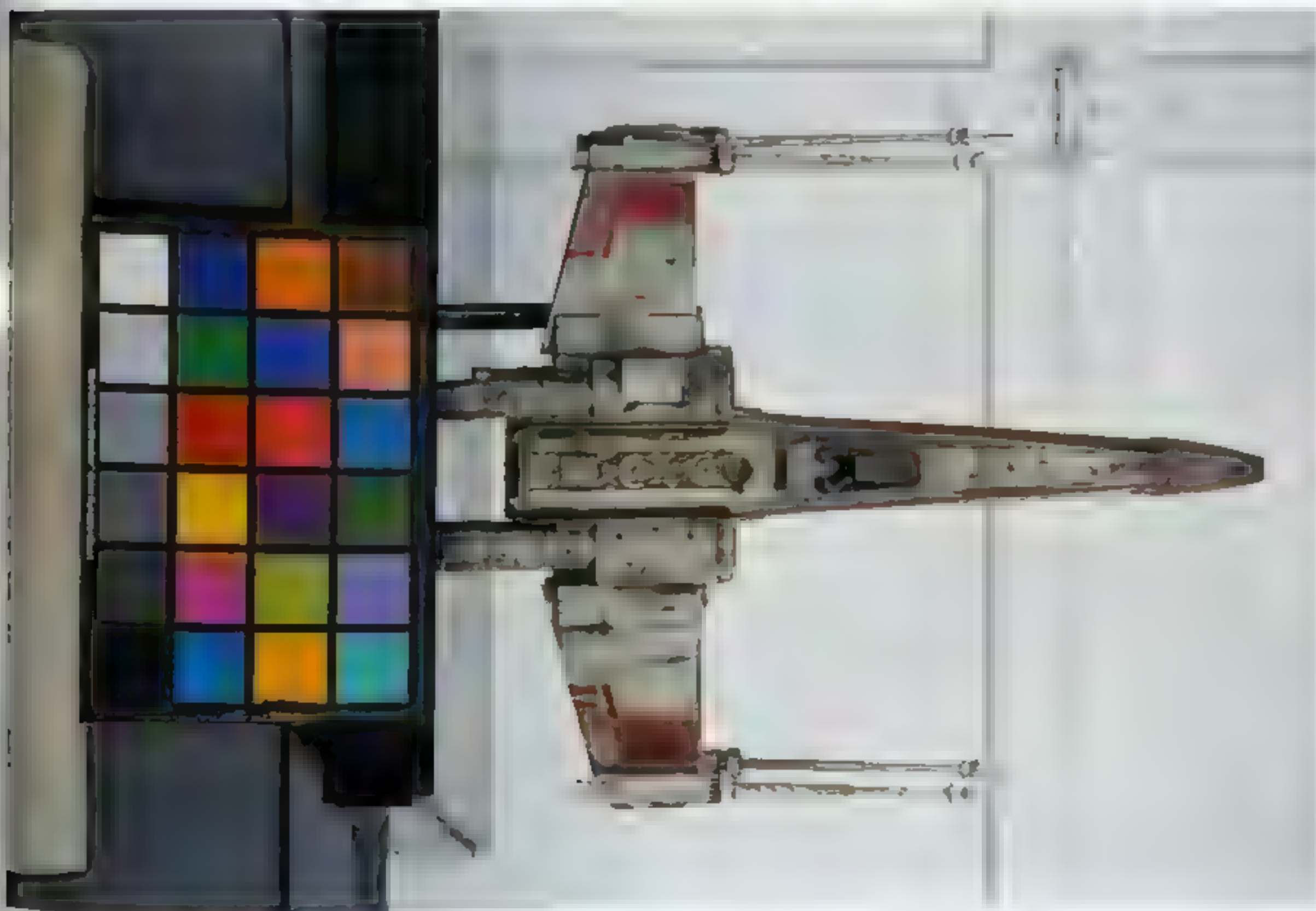
Xウイング・スターファイター
レッド・リーダー

ヤヴィンの戦いに参加した反乱同盟軍のXウイング部隊のうち、レッド中隊を率いるガーヴェン・ドレイス（右写真）が搭乗した隊長機。デス・スターの排熱口を最初に攻撃するが失敗し、ダース・ベイダーのタイ・アドバンストx1に撃墜された。Xウイングは、機体の外に広がるSフォイルと呼ばれる4枚の翼が特徴的な、4つのレーザー砲とプロトン魚雷で武装した単座式の宇宙戦闘機で、ナビ役のアストロメク・ドロイドを1体搭載する

本ページ：機首の汚し塗装が特徴的なレッド・リーダーの機体、通称「レッド1」のミニチュア。Xウイングは胴体が上下分割で翼の開閉ギミックや電飾が施された「ヒーロー」モデルと、胴体が左右分割され電飾などが入ってない「量産型」モデルの2種類が存在するが、レッド1のミニチュアは「量産型」として[illegible]

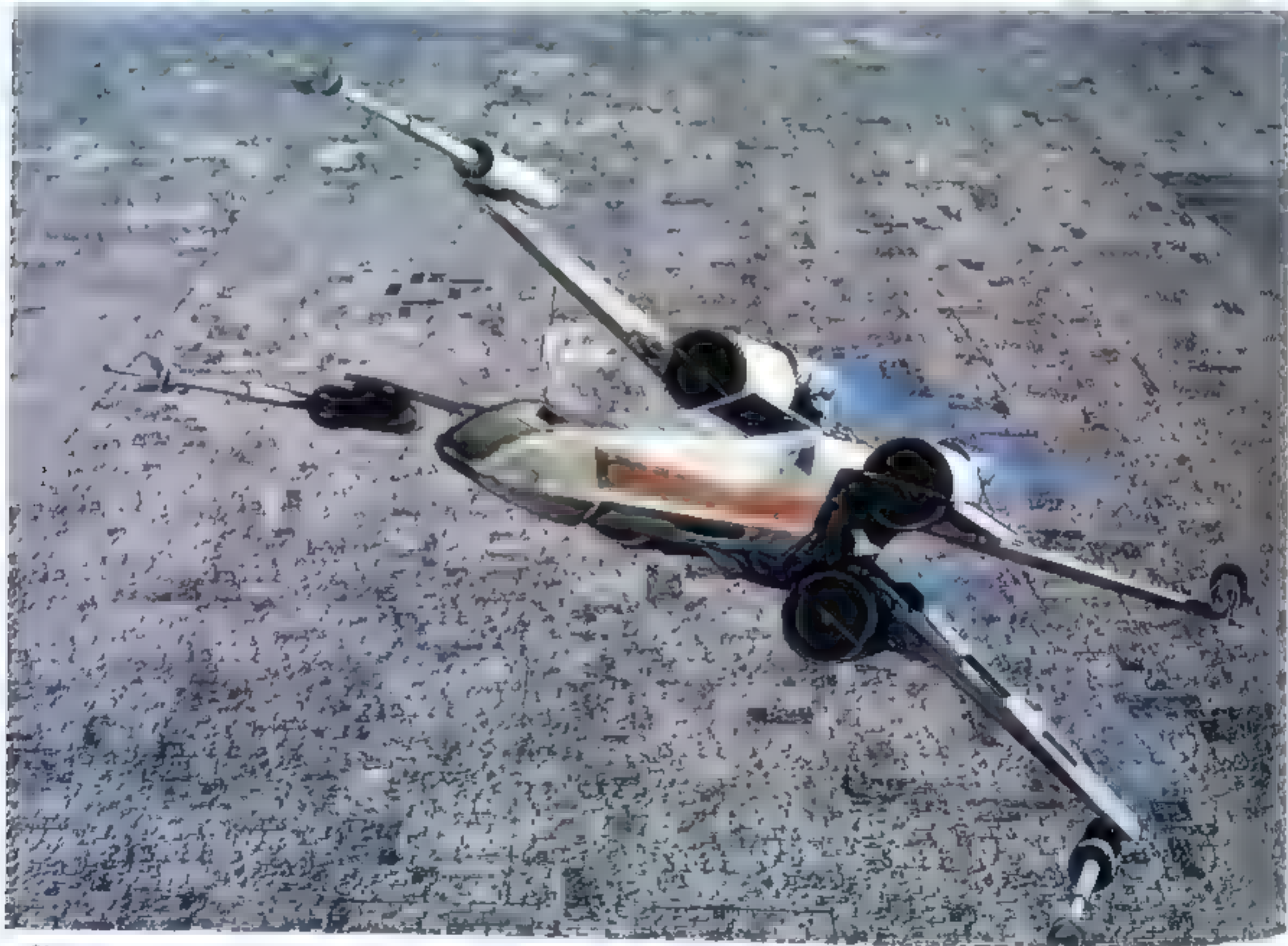
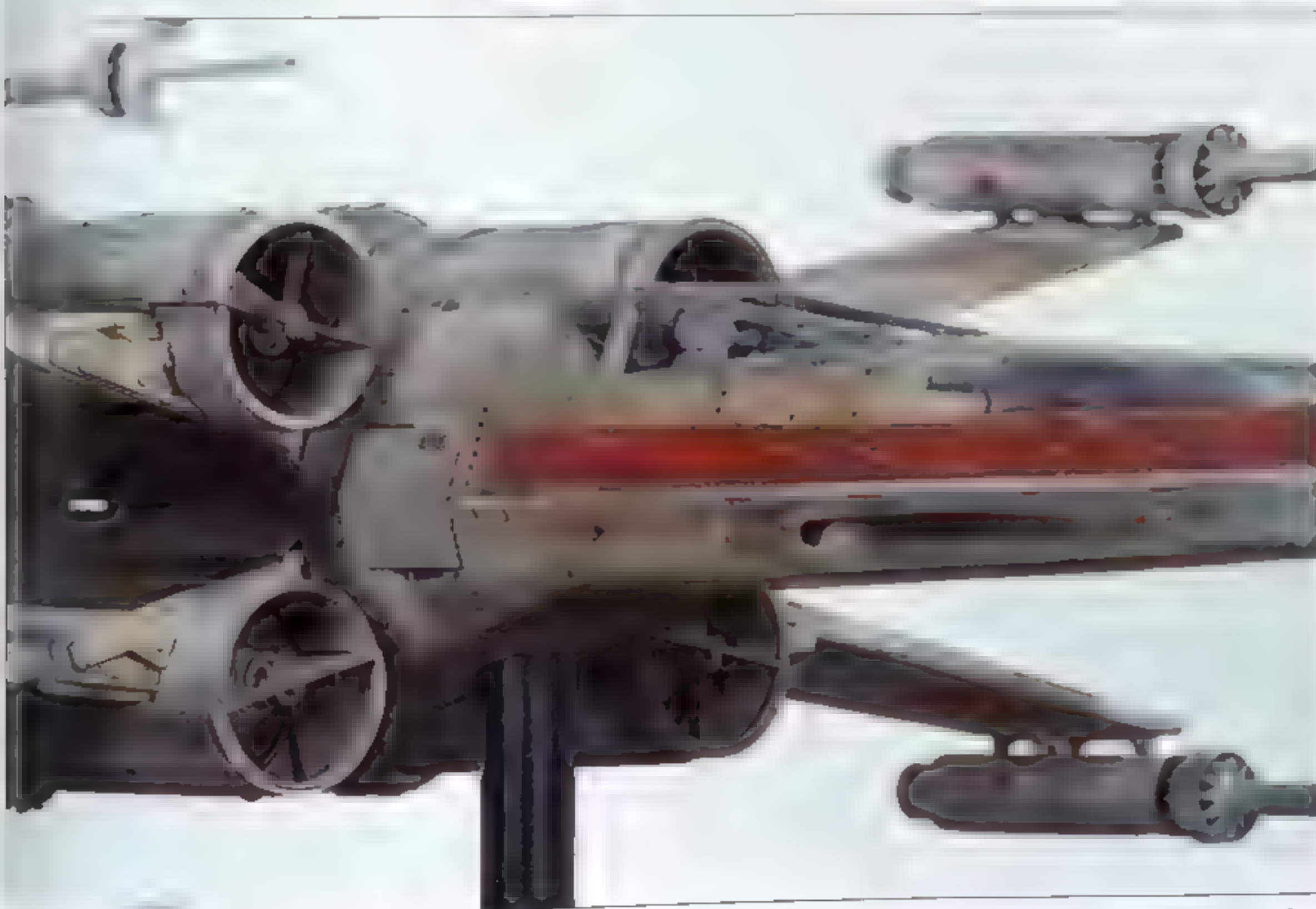
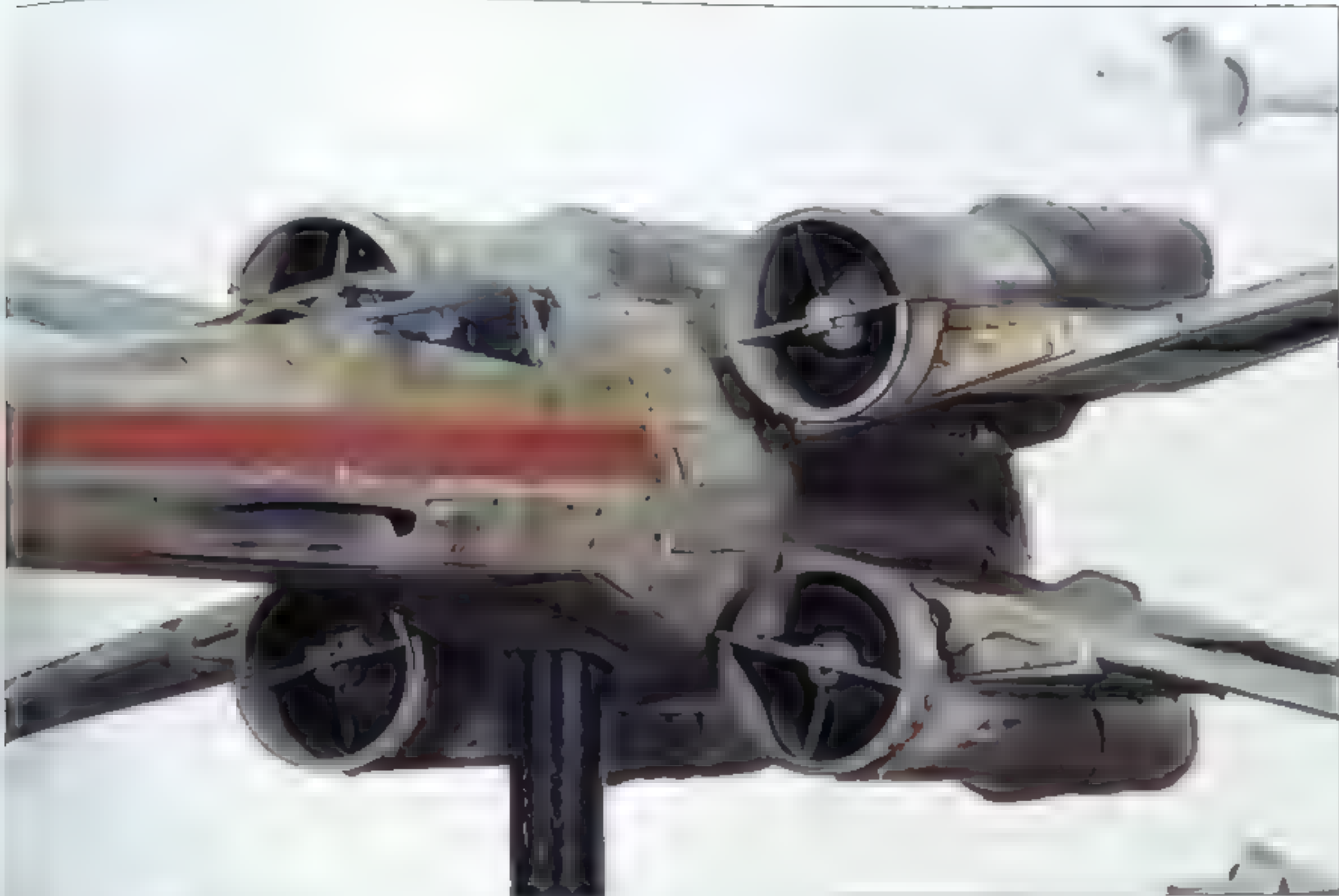
Xウイングの正式な機種名は「インコム T-65B Xウイング・スペース・スペリオリティ・ファイター」で、製造元はインコム・コーポレーション。全長は12.5メートル。

レッド5を下に見ながら飛ぶレッド1。この時[illegible]ているのは頭部が黒いアストロメク・ドロイド。背景に黒いベルベット地が掛けられているので、後ろ側からの撮影シーンだと思われる。

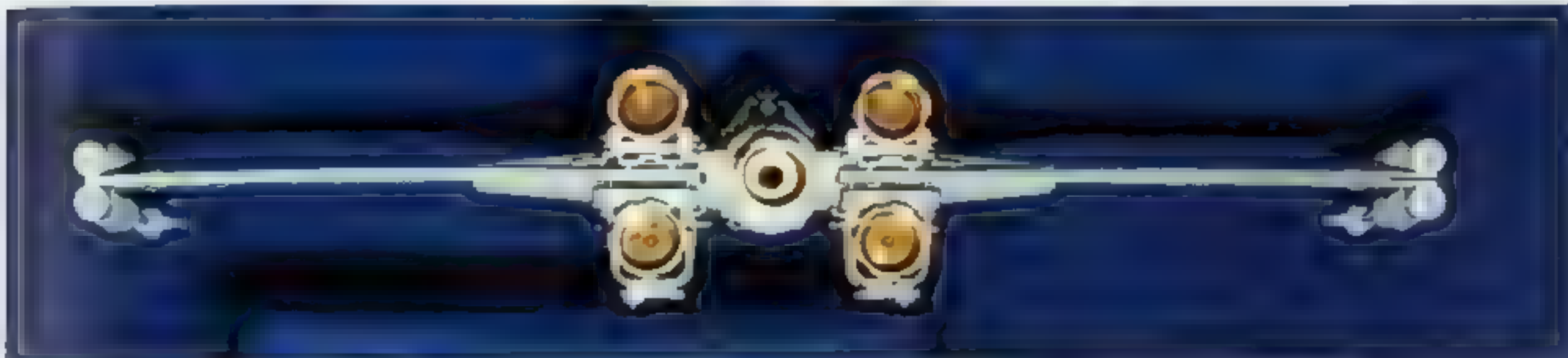
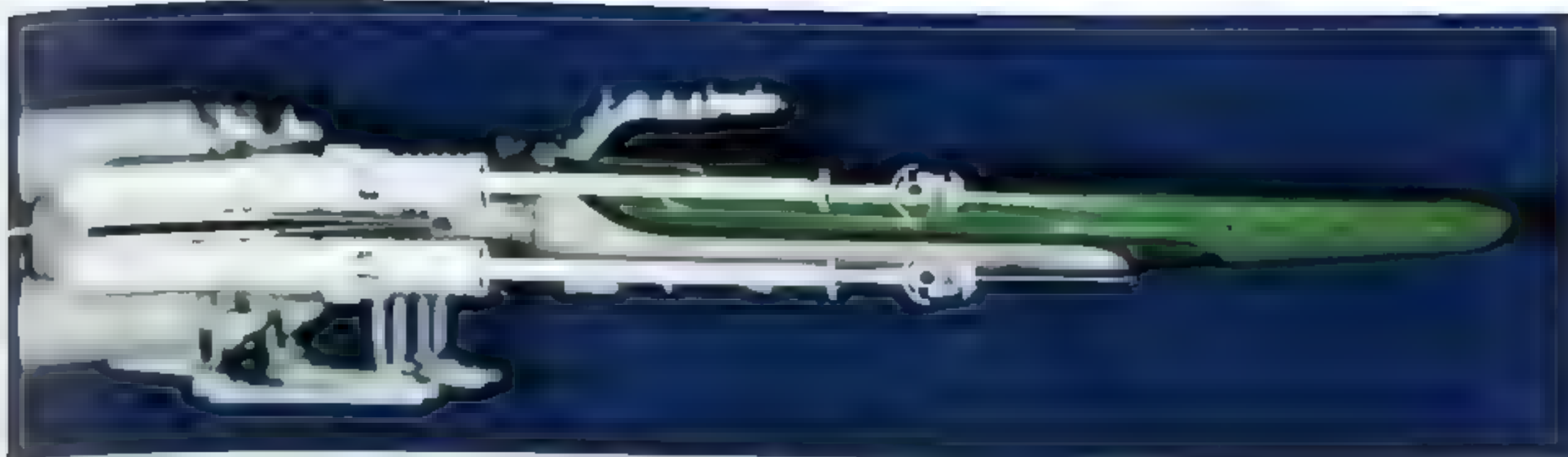
ILMにてグレーの機体色を塗装した劇中の「量産型」モデル。この他赤いマーキングと汚し塗装が施される。

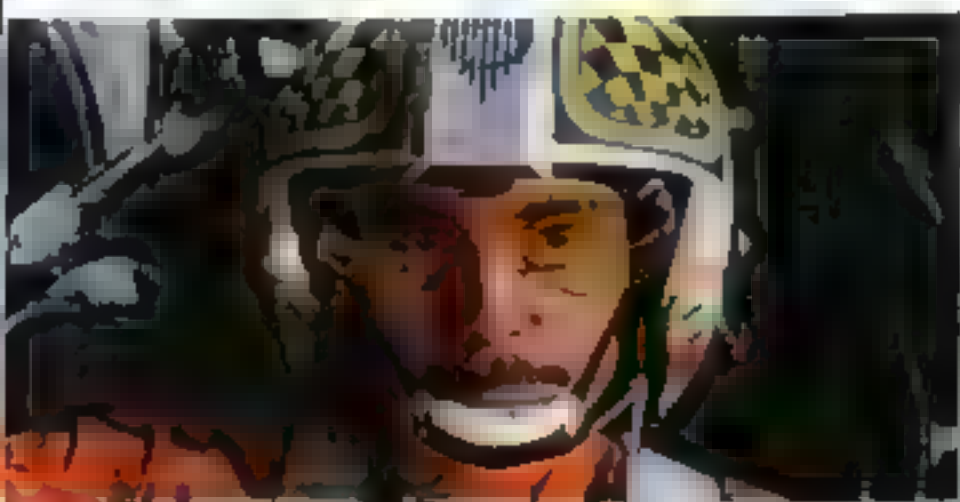
本ページ 前ページと同じく レッド2のミニチュアを各方向からとらえた写真 一番上の写真も1977年の映画公開当時 宣伝用として最も早く 多くの媒体で使われたXウイングのミニチュア写真のひとつ 日本で当時公開されたXウイングの写真は この写真と前ページにある写真の2点だけであった このレッド2のミニチュアはブルー（111ページ参照）を塗り替えたものであり 機体の各部に細かいマーキングが最も多く入れられている そのため 一番見映えがよいと判断され 宣伝用には主人公 ルークの乗るレッド5ではなく このレッド2の写真が使われたのではないか と推測される

本ページ　現存するレッド2のミニチュアを、VFXスーパーバイザーのジョン・ノールが2013年9月12日に撮影した写真。
若干の退色が見られ、補修がなされているが、ほぼ撮影時の原型を留めている。

上　前ページと同様、現存するものを2013年に撮影したレッド2のミニチュアの胴体後部写真。後部中央にある金色に光っている部分は取り外し可能なパーツで、取り外すと支柱の差し込み口が現れる。この金色のパーツは映画撮影当時の写真を見る限り、レッド2に本来使われたものではないようだ

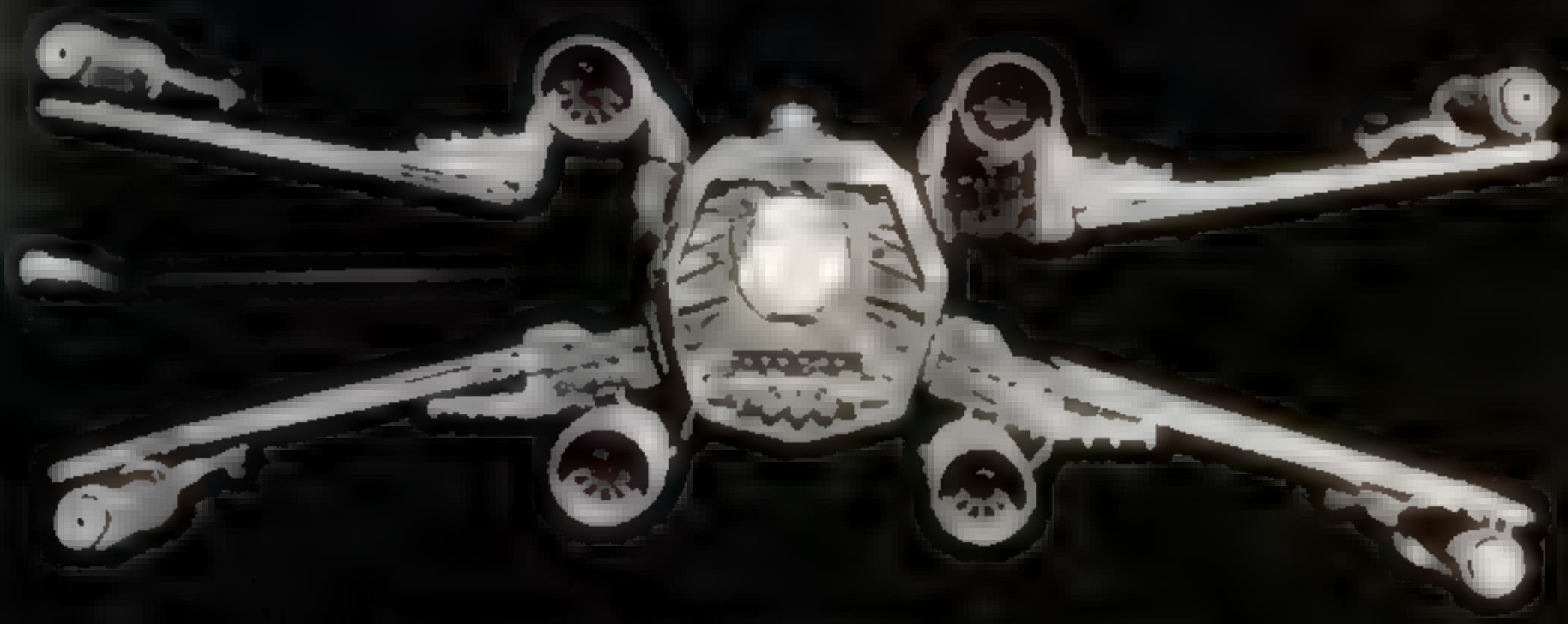
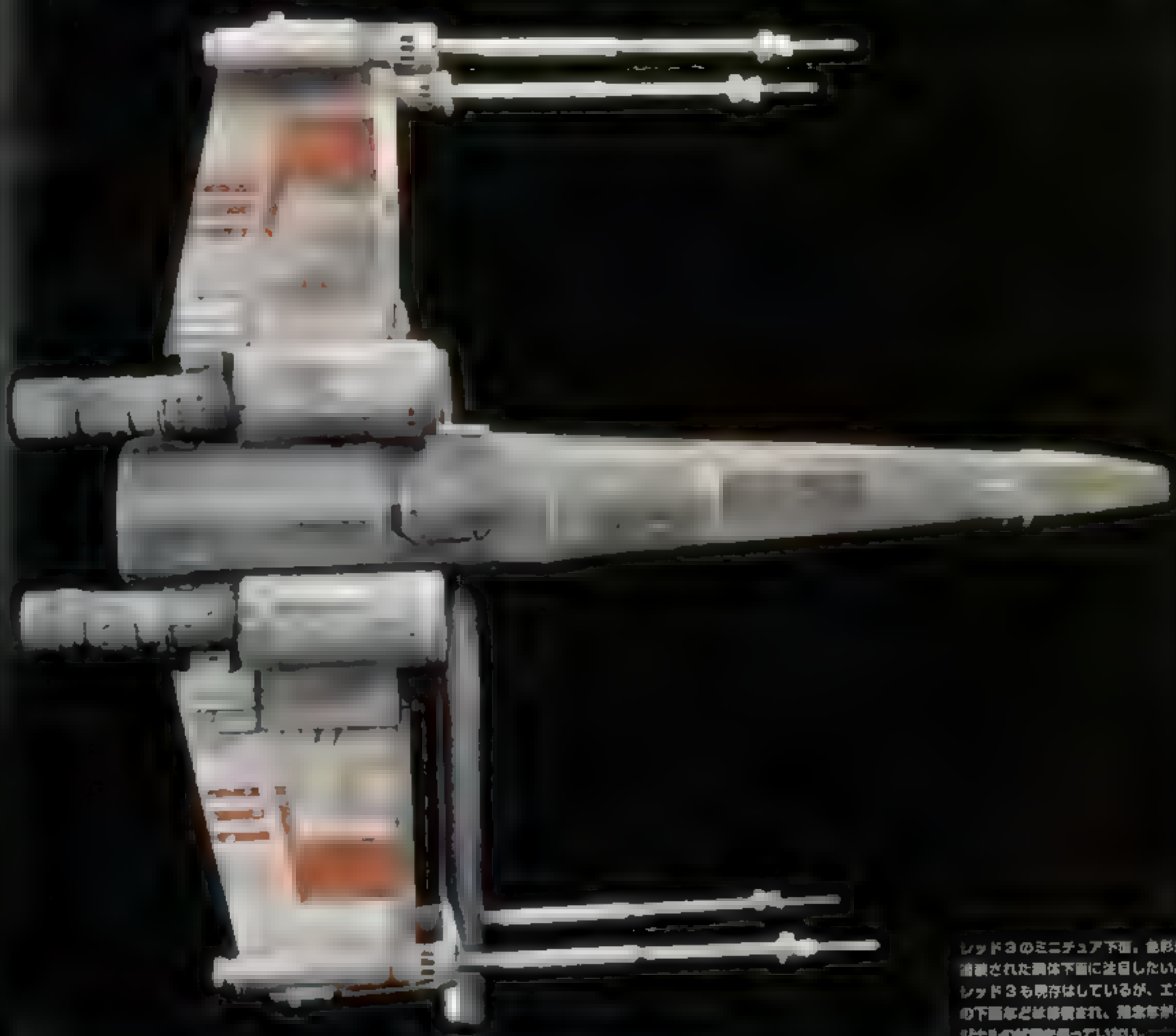
下　映画公開当時の有名な宣伝用合成写真

本ページ ILMを代表するジョン・ノールならではの撮影アングル。2013年9月12日撮影
2016年末公開の『ローグワン スター・ウォーズ・ストーリー』は彼が原案を務めている

本写真 上2点 現存するショット2の右側面アップ 多少退色しているが 細部まで高度な技術で仕上げられたミニチュアは もはや美術品級と言える 上左写真では胴体後部のエッジライン下側がくびれているのがよくわかる また本写真では 胴体の赤いラインの下にある胴体上下の中心ラインが機首に向かって伸び、そのまま上に跳ね上がって続いている点にも注目したい。

X-wing Prototype Model Xウイングのプロトタイプ・モデル

コリン・キャントウェルが製作したXウイングのプロトタイプ・モデル ジョージ・ルーカス監督が提示したXウイングのコンセプトである ドラッグ・スター（直線で最高速だけを争う、細長い車体をもつ特殊なレースカー）に翼を付けた戦闘機 に沿ったデザインの初期案である

左ページ下段、本ページ：プロトタイプ・モデルの各方向からのカット。ルーカスのコンセプトそのままに、このモデルは緑色の部分に市販されていたトラック・スターの模型のボディパーツを流用し、そこに自作したエンジンと翼を付けて急造したものであった

X-wing Starfighter Red 3 Xウイング・スターファイター・レッド3

ルークの旧友で兄貴分的な存在だったタトゥイーン出身のビッグズ・ダークライター（上写真）がパイロットを務めるXウイング・スターファイター　レッド3はダース・ベイダーのタイ・アドバンストx1に撃墜された

Xウイングの美しい流線型のボディ形状がわかるレッド3のミニチュア側面ショット。レッド3のミニチュアは機首や翼の開閉用にモーターが組み込まれた、胴体が上下分割式の「ヒーロー」モデルである。

映画公開当時刊行された『フェイマス・スペース・シップ（Famous Spaceships of Fact and Fantasy）』誌によると、「電飾が組み込まれたモデルはコクピット内の計器類もLEDで発光するように作られた」と記されているが、計器類が光っているXウイングの写真は出版物にはまだ掲載されていない。

レッド３のミニチュア後面。４つのエンジン内部の様子から、電球が組み込まれていることがよくわかる。噴射口には赤いセロファンが使われているようだ。胴体後面中央にある支柱隠しのカバーが金色であることから、現存するレッド２に付いている同じパーツは本来はレッド３のものだったと推測することもできる（[illegible]ページ参照）。

レッド３のミニチュア下面。色彩豊かに塗装された胴体下面に注目したい。このレッド３も現存はしているが、エンジンの下面などは修復され、残念ながらオリジナルの状態を保っていない。

左後方から（上写真）と、翼が閉じている状態のレッド3のミニチュア。当時の雑誌「フェイマス・スペース・シップ」には、モーターと照明が組み込まれたXウイングは3機製作されたと有り、その内訳はレッド3、レッド5、残り1機は不明である。

LIFE-SIZED MODEL

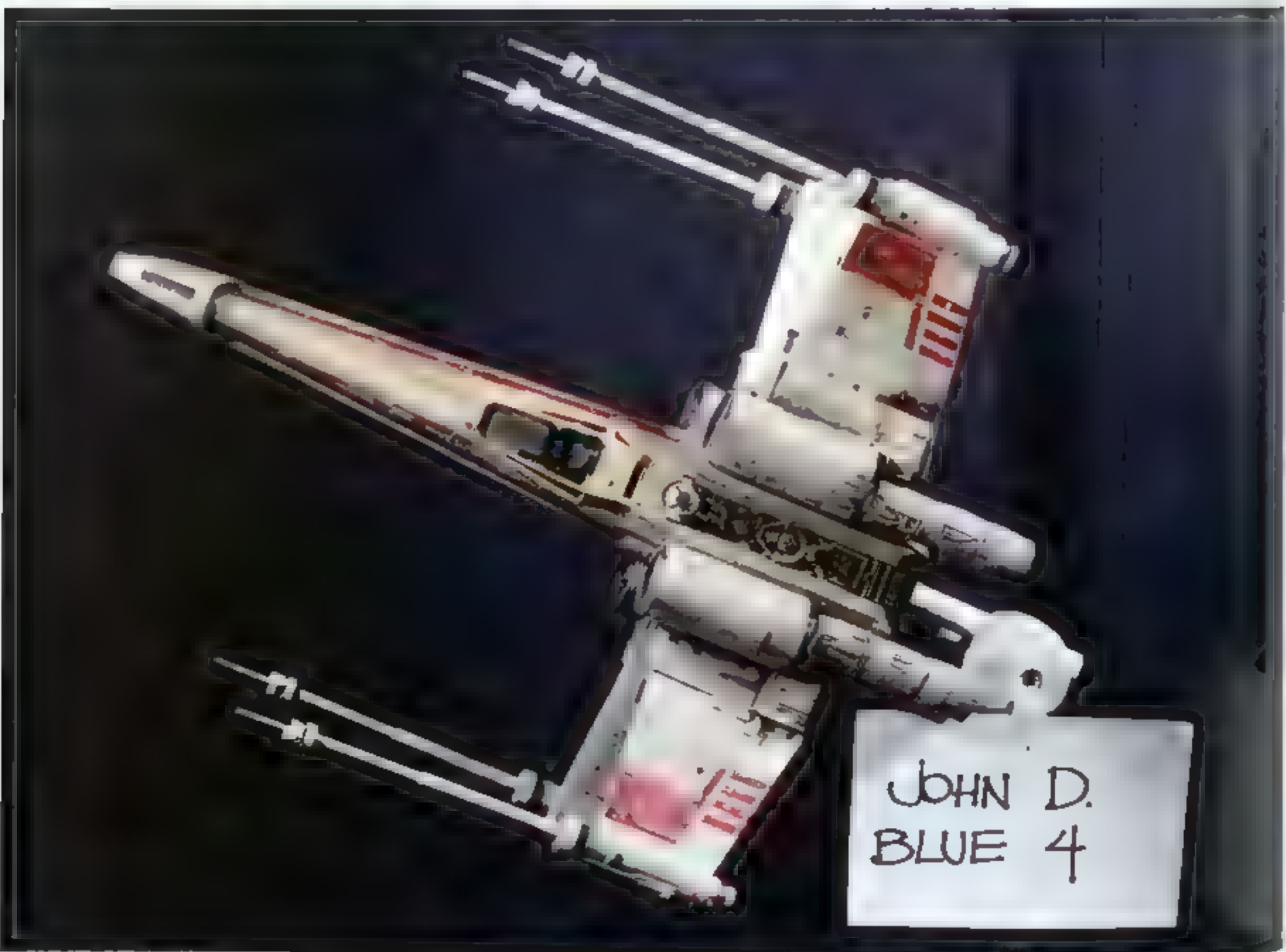
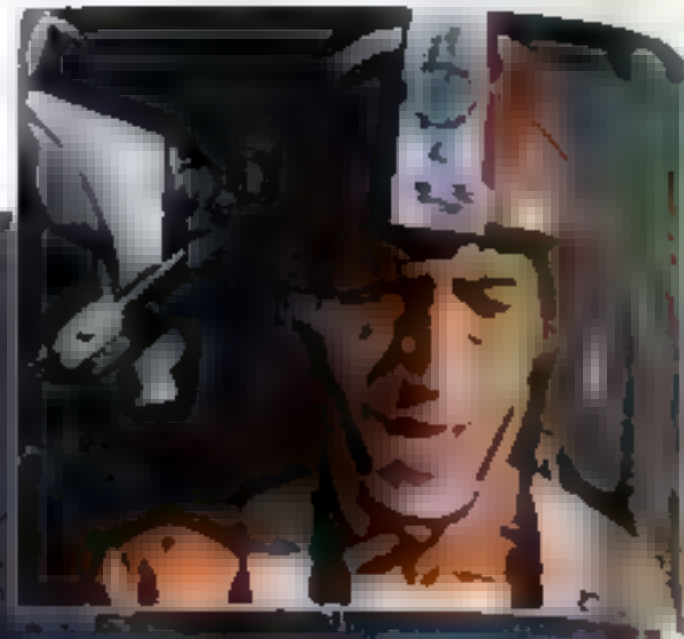
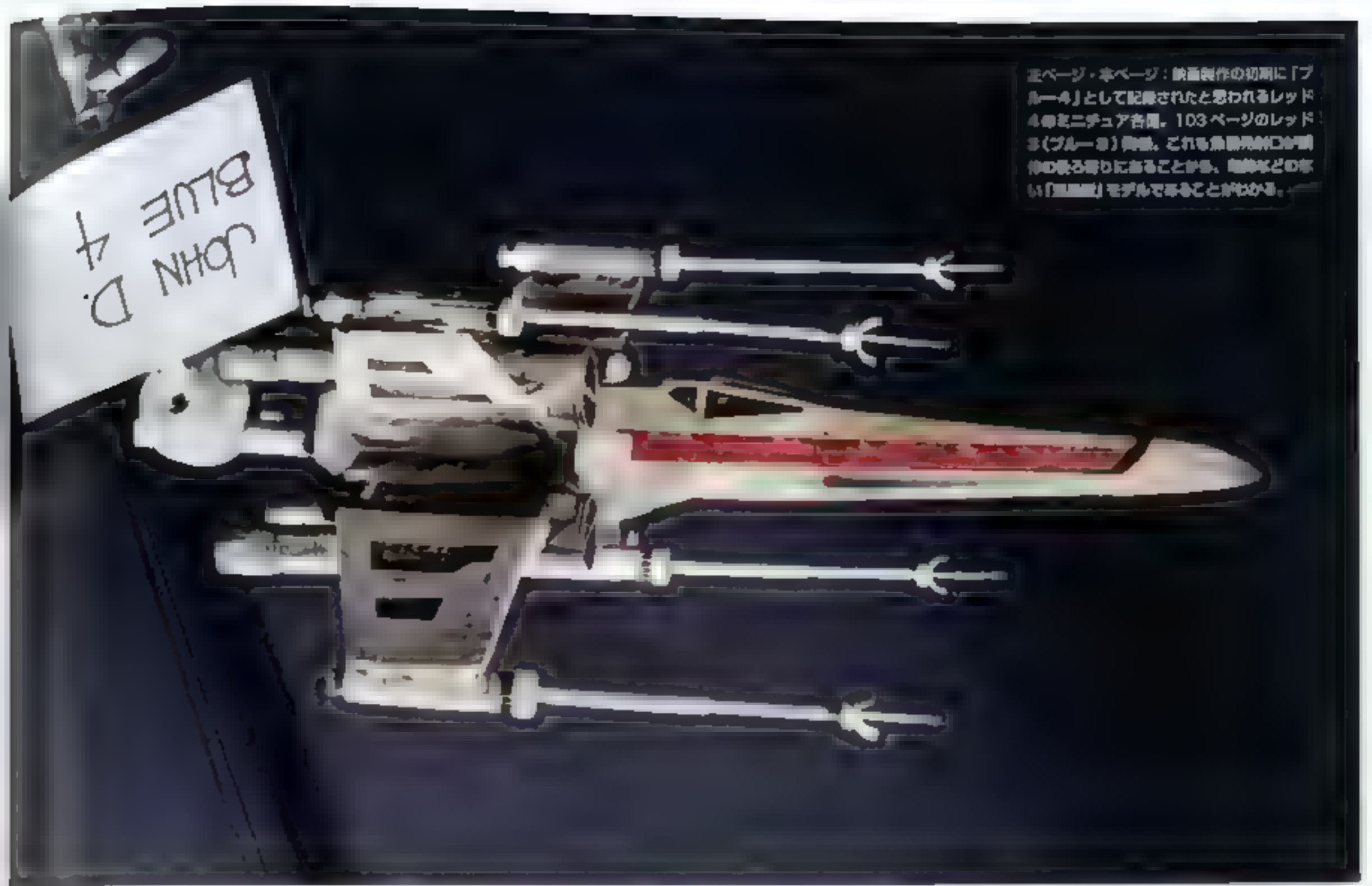
実寸大モデル

レッド1の実寸大モデル。このスチールはヤヴィン基地でレッド3のパイロット、ビッグス・ダークライターとルークが再会したシーンである。このシーンは劇中ではカットされてしまったが、『エピソード4』がBlu-ray化されたときに初めて映像ソフトに収録され、日の目を見た。

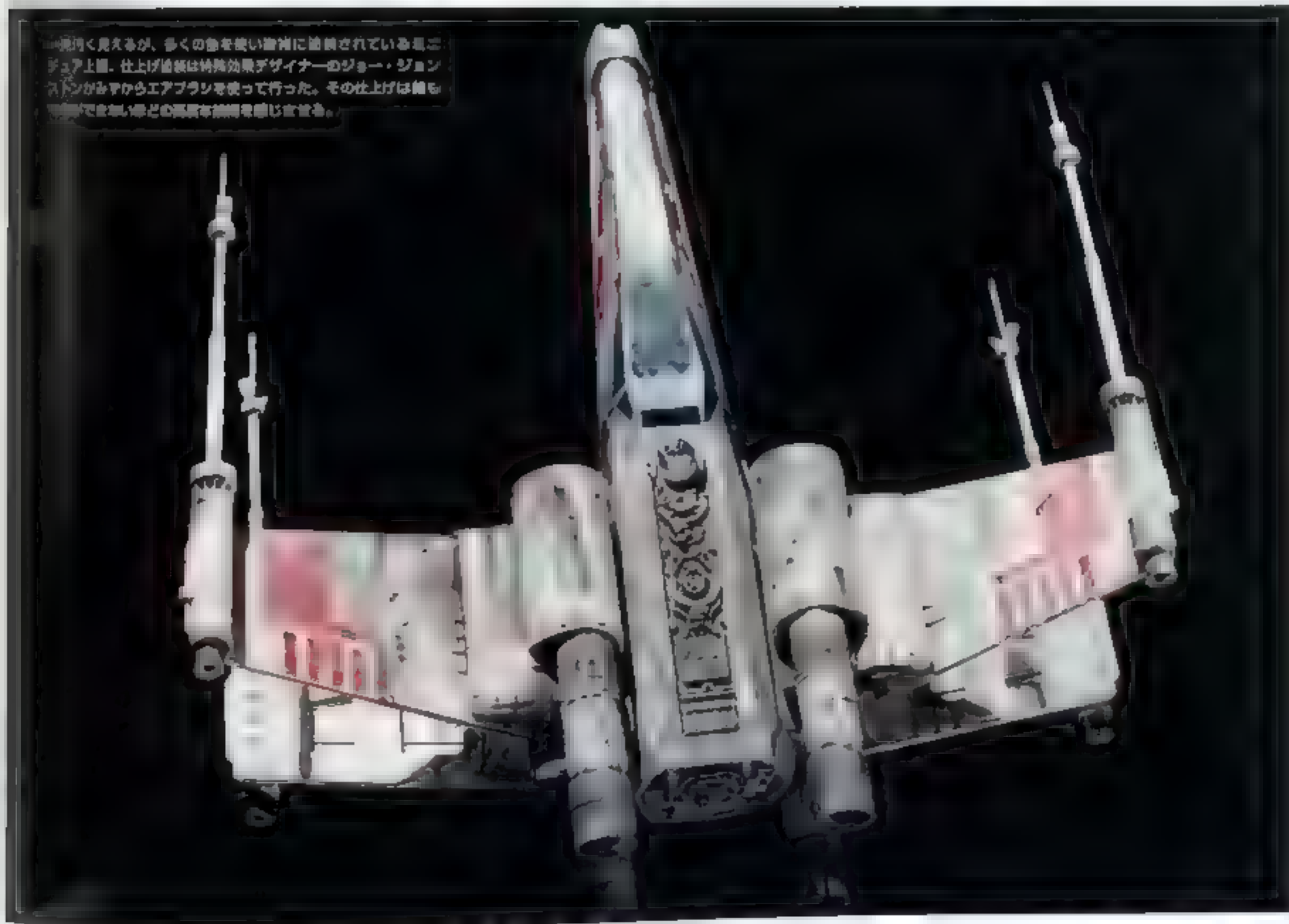
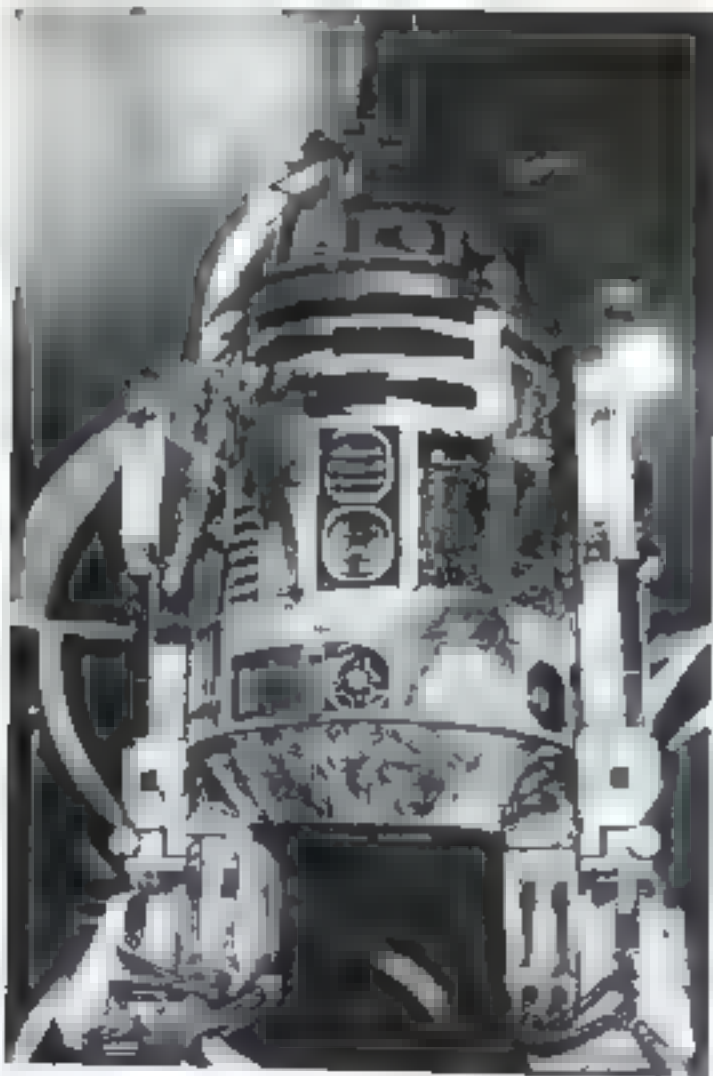
X-wing Starfighter Red 4 Xウイング・スターファイター・レッド4

ジョン・D・ブラノン（右写真）が乗り込んだXウイング・スターファイター〈レッド4〉はヤヴィンの戦いにおいて、最初に帝国軍のタイ・ファイターの攻撃で撃墜されてしまう。ジョン・Dの名は当初から存在したが、ルーカスフィルムがディズニー傘下になって以降、「ブラノン」というファミリーネームが与えられた

JOHN D.
BLUE 4

JOHN D.
BLUE 4

左ページ・本ページ：映画製作の初期に「ブルー4」として記録されたと思われるレッド4のミニチュア各面。103ページのレッド3（ブルー3）同様、これも[illegible]の後ろ寄りにあることから、[illegible]などの古い「第1世代」モデルであることがわかる。

このミニチュアは特に下面の汚し塗装が激しい。103ページの「ブルー3」もそうだが、製作初期段階とはいえ、実際に赤い線のバーがあるにもかかわらず「ブルー」と表記されているのはいささか腑に落ちない。ぜひとも当時のスタッフに聞いてみたいところである。

X-wing Starfighter Red 5 Xウイング・スターファイター・レッド5

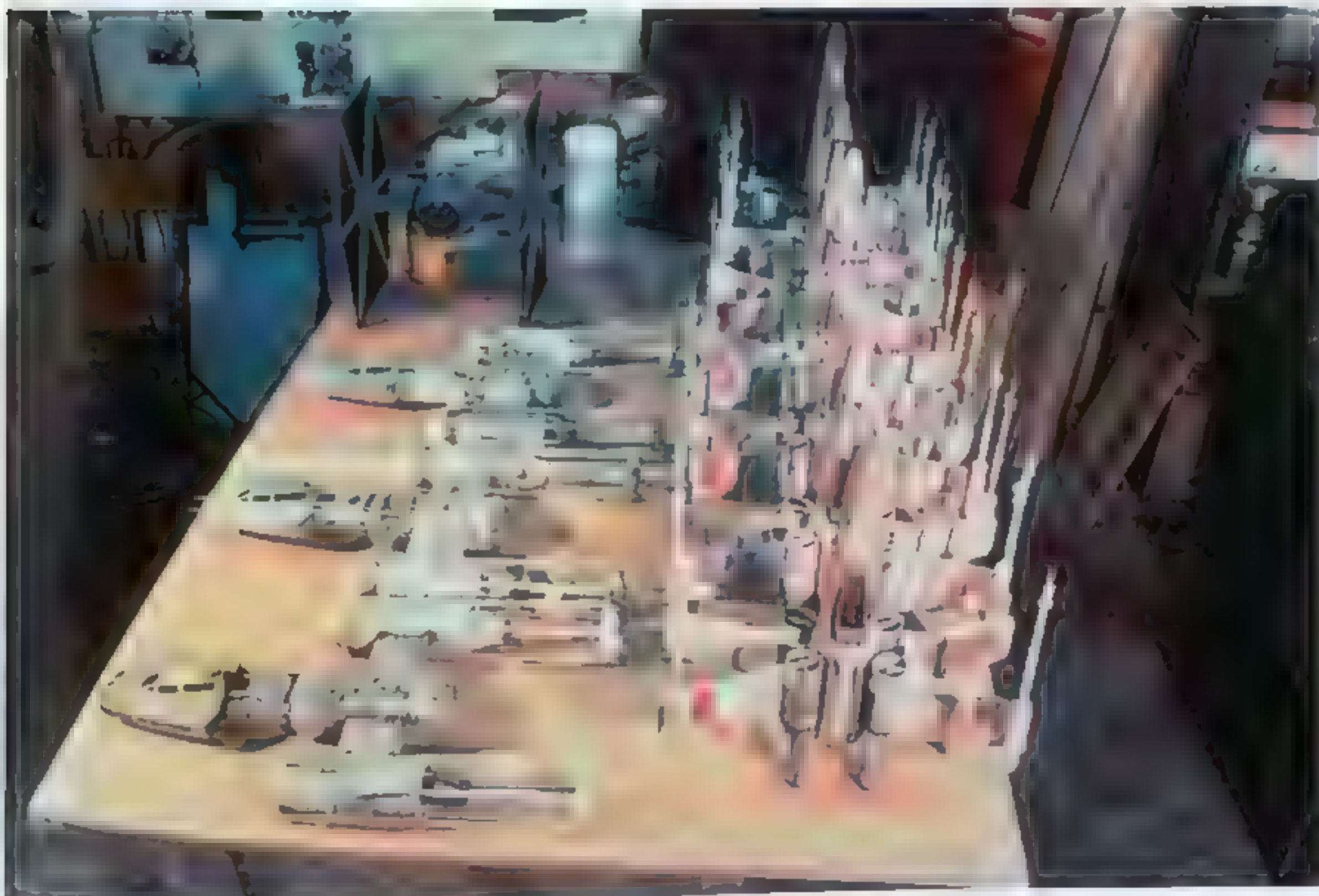
タトゥイーン出身のルーク・スカイウォーカー（右写真）がパイロットを務めるXウイング・スターファイター・レッド5はデス・スターの排熱口にプロトン魚雷を撃ち込むことに成功し、無事生還した主人公のビークルでありながら、プロップの写真記録は他のXウイングと比べて少ない

上写真の劇中シーンではレッド5の右側面が確認できる。なぜかレッド5が2機いる（左側と右側）のはご愛敬と言ったところ。胴体の一番後方まであるはずの赤い帯が、汚し塗装でもはや消えかけている。

左写真2点はヤヴィン4基地に帰還した際の損傷した状態のR2-D2。右写真はパイロット姿のルーク全身像。

X-wing Starfighter Red 6　Xウイング・スターファイター・レッド6

ベスティーンIV出身のジェック・ポーキンス（右写真）がパイロットを務めるXウイング・スターファイター・レッド6は、デス・スターのターボレーザーによる砲撃の犠牲となり、宇宙の藻屑となった

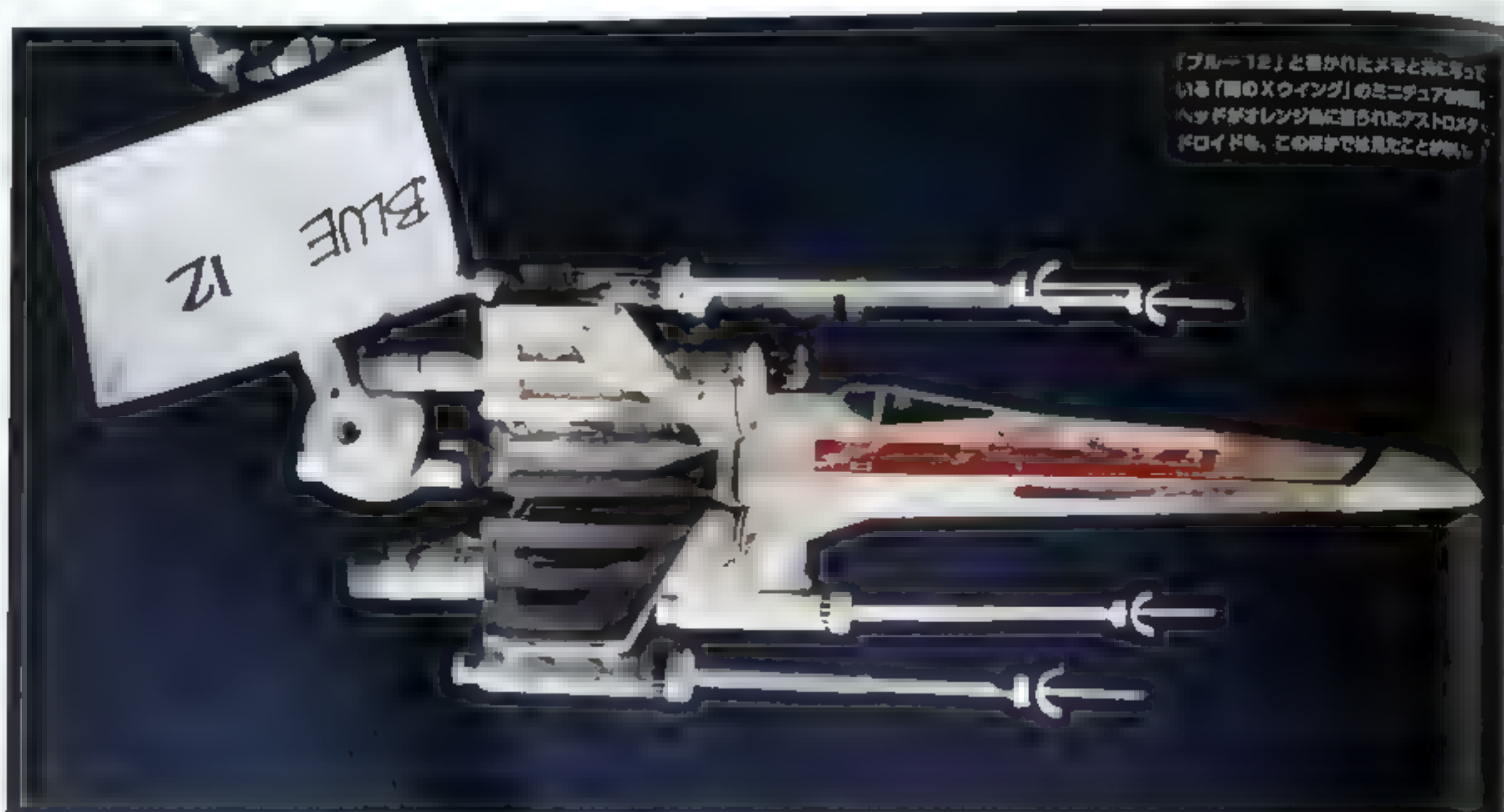
赤色塗装後、マスキングをはがす前の状態。よく見ると赤いマーキングが6本あるのがわかる

完成したXウイングやYウイングのミニチュアたち。Xウイングは手前からレッド3、レッド1、レッド5、レッド1、レッド4、レッド12、1機不明の7機が確認できる。ほかにも撃墜シーン用に火薬を仕込んだ撮影モデルが用意された

X-wing Starfighter Red 12

Xウイング・スターファイター・レッド

レッド中隊の各機体を識別する翼のマーキングの赤いバーの数から「レッド12」だとわかるが、この機体のパイロット名はまだ設定されていない

「ブルー12」と書かれたメモと共に写っている「謎のXウイング」のミニチュア側面。ヘッドがオレンジ色に塗られたアストロメク・ドロイドも、このほかでは見たことが無い。

ミニチュアの下面。主翼には、確かに12本のバーが描かれている。残念ながら「レッド12（ブルー12）」に関しては、現在この2点の写真しか発見されておらず、その詳細や、機体上面がどうなっているかなどは一切不明である。

X-wing Blue Squadron Xウイング・ブルー中隊

エピソード4の映画製作が始まり、Xウイングの実寸大セットを作るため元となるモデルを撮影スタジオのある英国に送る必要が生じた。その際に送られたのがこのミニチュアである。ミニチュアの写真の中で1機だけブルーのマーキングであることから、これが最初に完成したXウイングと思われる。

Xウイング・ブルー中隊の名が最初に発表されたのは、1977年の映画公開の約半年前にあたる、1976年11月12日に米国バランタイン・ブックスより刊行された小説「Star Wars: From the Adventures of Luke Skywalker」だった（上写真）。当時無名だった映画の認知を高めるための企画のひとつであり、映画公開前のマーベル・コミックス版もそれに続いた。ジョージ・ルーカス著と謳っているが、実際はルーカス監督が書いた撮影台本を元に、当時新進気鋭の若手SF作家だったアラン・ディーン・フォスターがゴーストライターとして小説にしたもので、[illegible]

この「ブルー中隊」のミニチュアはその後塗装し直されて前章で紹介したレッド2となったため、「ブルー2」とも呼ばれているが、機体名が主翼に描かれたバーの数で決められる原則に従って、本書ではこの機体を「ブルー1」と呼称したい。

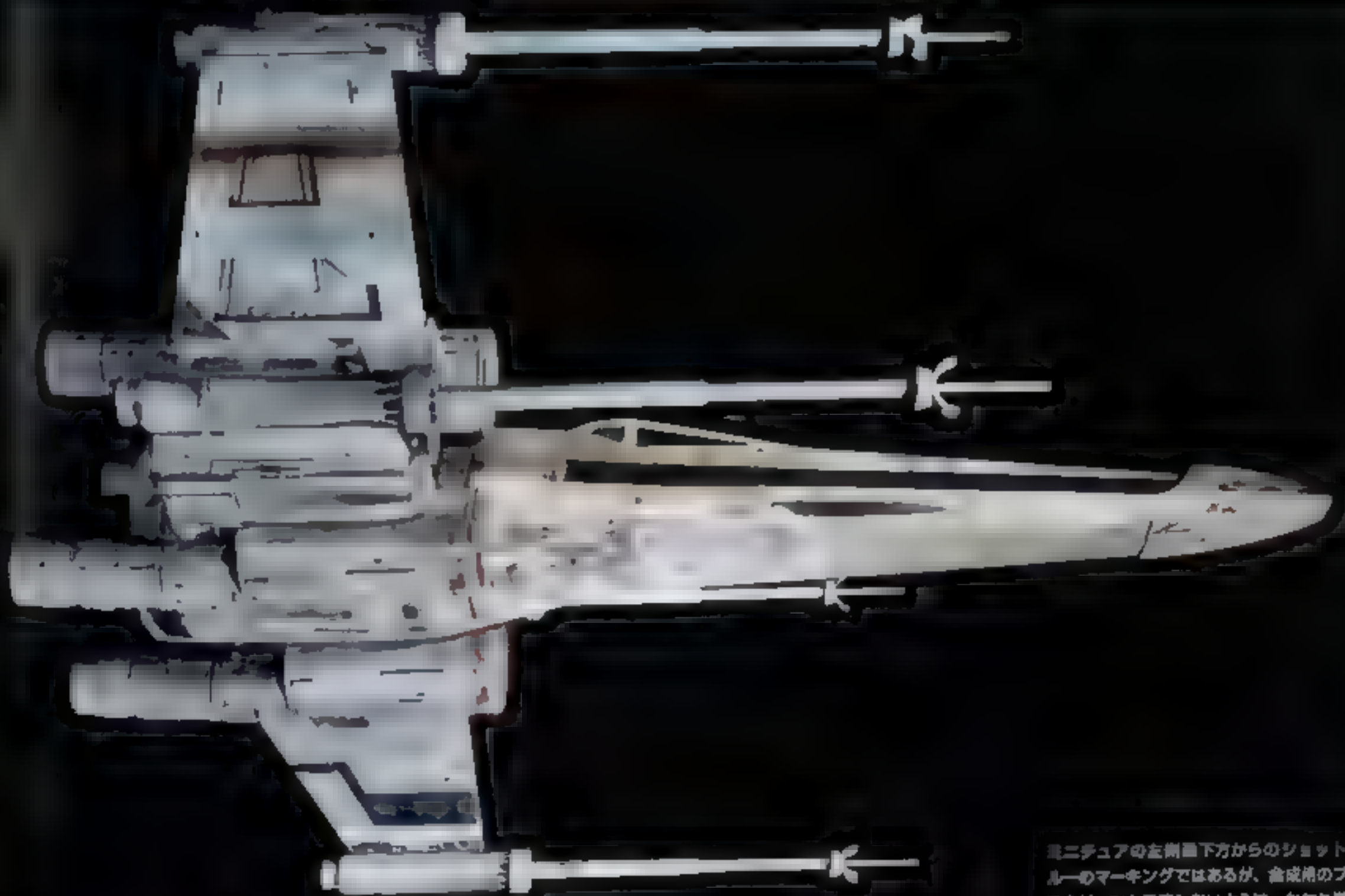
ノベライゼーションの日本版は、まず1977年12月に「スター・ウォーズ ルーク・スカイウォーカーの冒険」という書名のハードカバー書籍として、角川書店から刊行。画像はその文庫版。

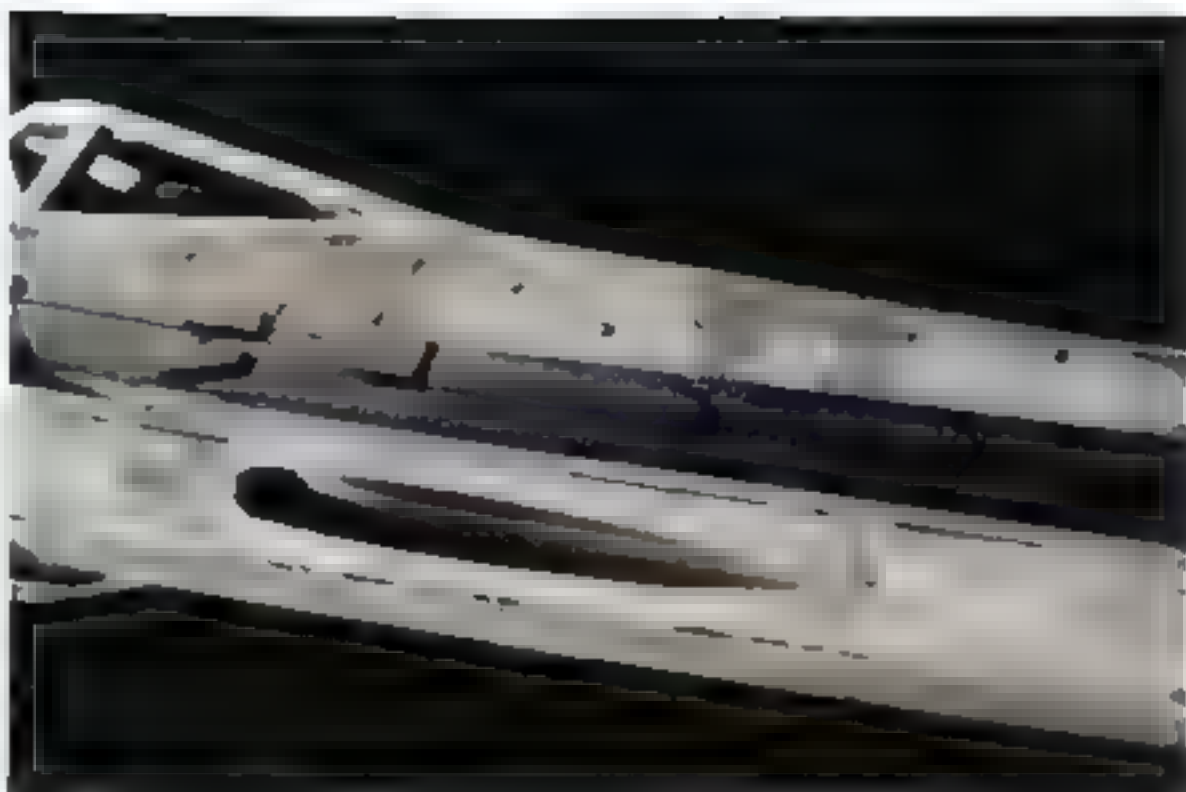
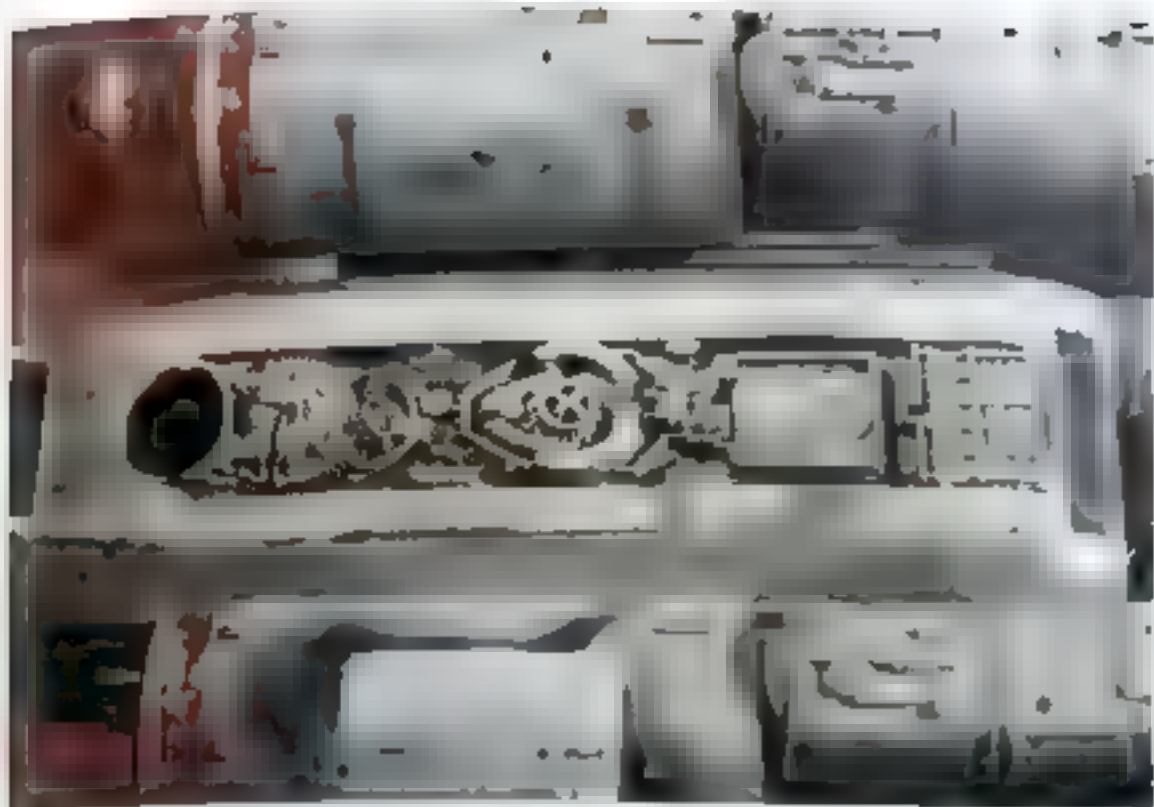
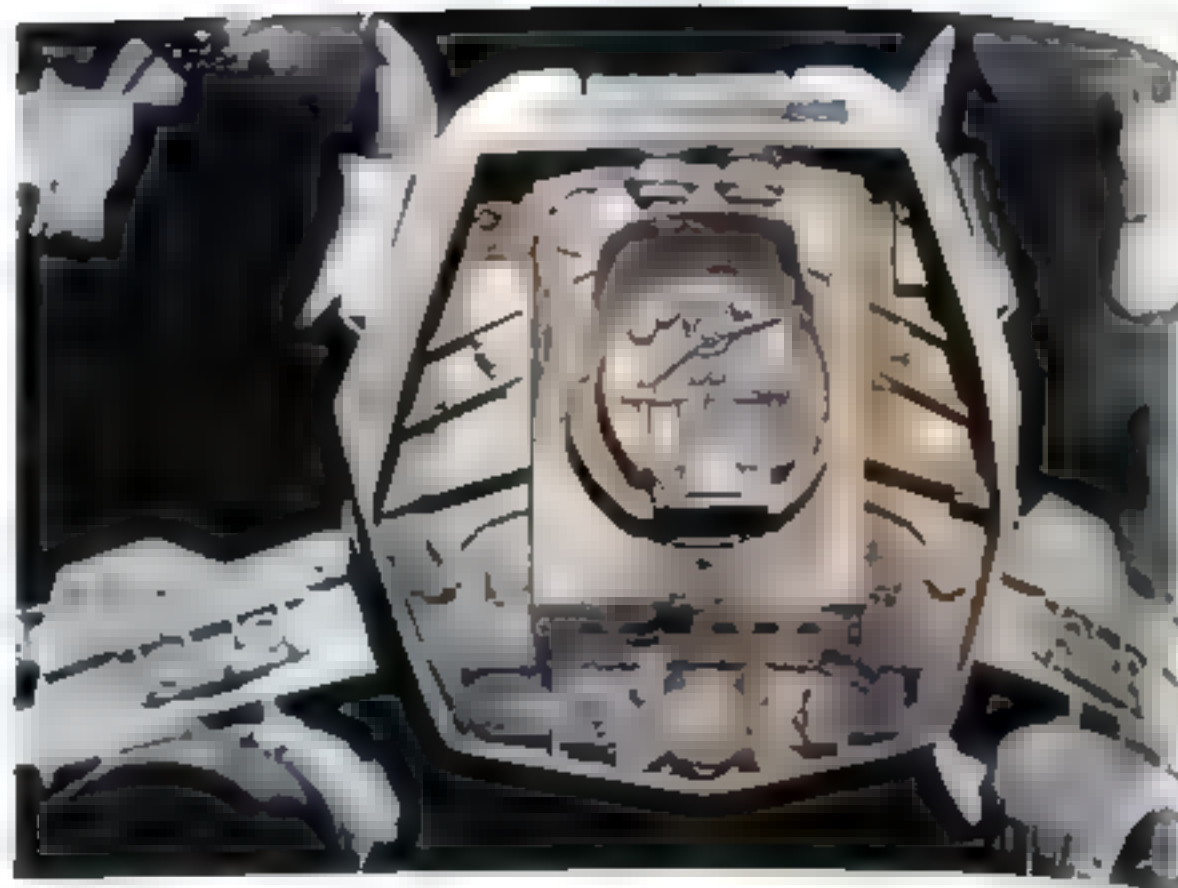
日本国版ノベライゼーションは1978年夏の日本公開に合わせ、SEITOが描いたポスターアートを表紙とした文庫版も刊行された

フル チュアの下面

チュアの左前方からのショット

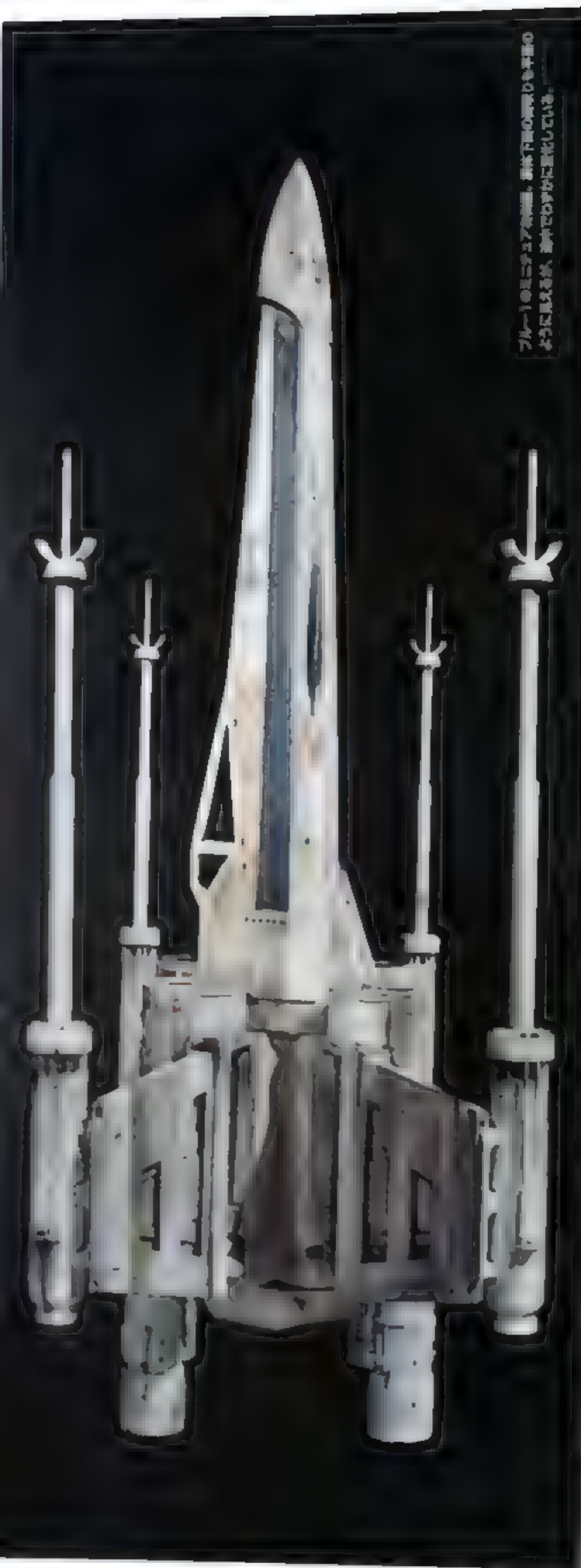
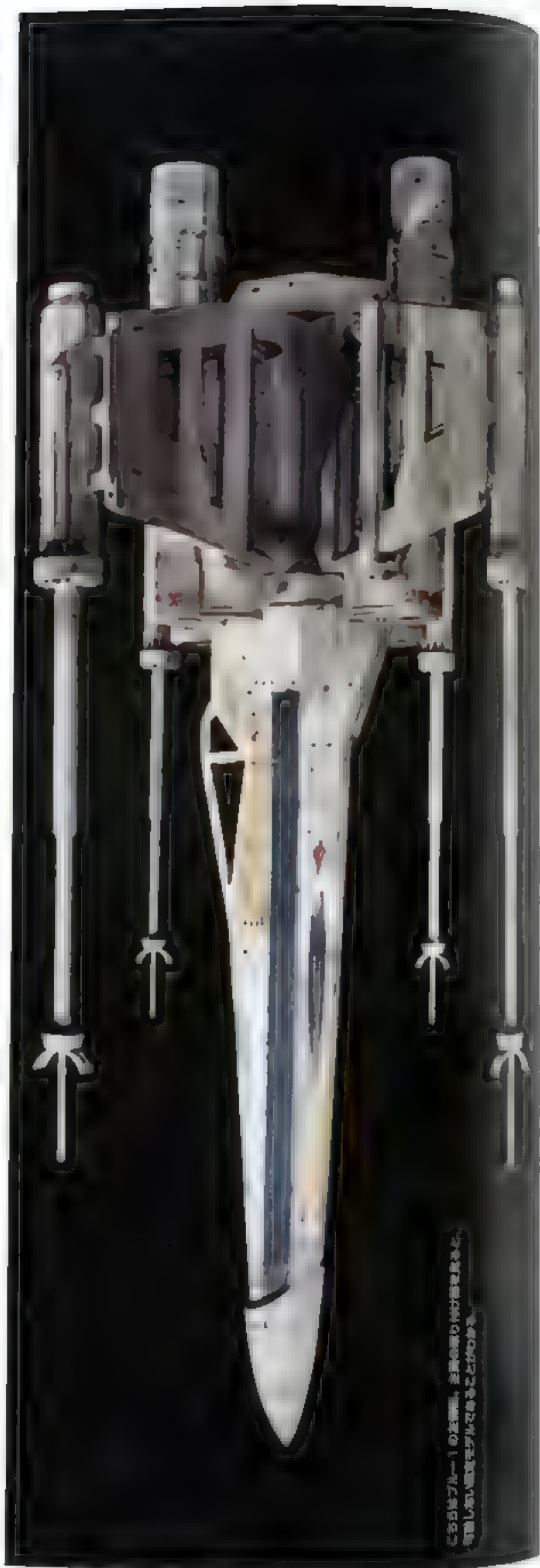
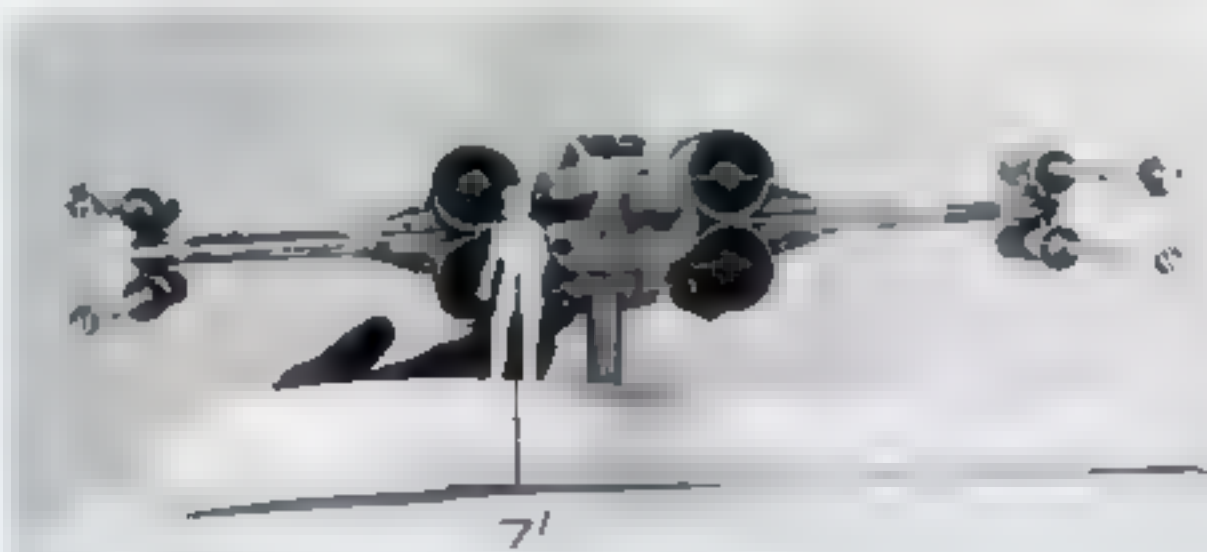
ブルー1号機ミニチュア右側面上方から。このミニチュアはコクピット内が未完成である。これは、まだ人と対比した場合のXウイングの大きさを決めかねている段階で作られたモデルではないかと想像される（設定段階では9メートルほどの小型機として考えられていた）。

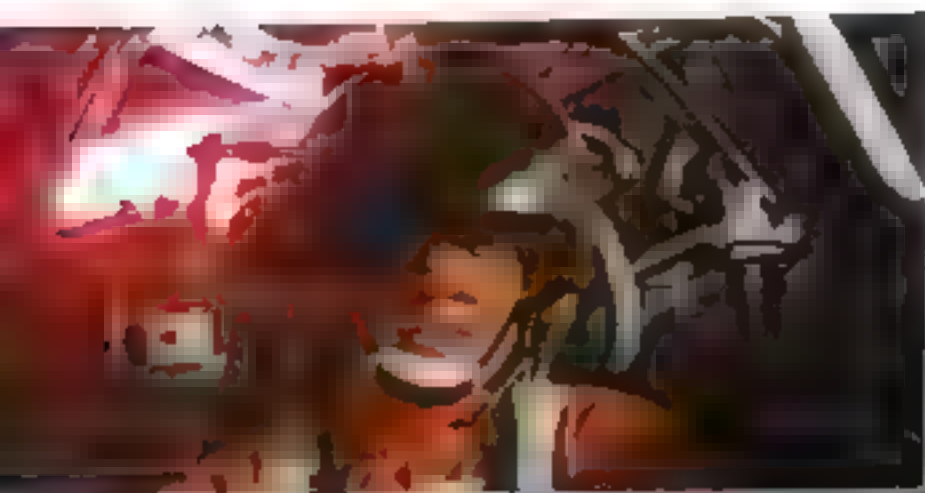
ミニチュアの左側面下方からのショット。ブルーのマーキングではあるが、合成用のブルースクリーンと干渉しないように、かなり黒に近い色味で塗装されている。

ブルー1のミニチュア、左前方からのショット。Xウイングのマーキングは最終的には赤色に変更され、「ブルー中隊」は「レッド中隊」と呼称が変わった。この変更を受けて、Yウイングは当初は赤色のマーキングだったが、黄色に変更された。

ミニチュアの左側面上方より。機体の細部をよく見ると、細かい注意書き（コーションマーク）などのマーキングが多数入っていることがわかる。驚くべきことに、実寸大モデルにもこれらのマーキングがすべて記入されていた。

ブルー1の機首部のアップ写真（上左・上右写真）と斜め前方からのショット。帯の色がブルーからレッドに変わり、機体に多少新たな色が重ねられた程度で、細かいマーキングなども変更なくレッド2となった。写真ではわかりにくいが、Xウイングの機首の面取りが平面から徐々に曲面へと変わっていく、とても複雑なラインで構成されている。

市販の模型パーツをセンスよく組み合わせて違和感なく再現されたブルー1のミニチュア後部。それを覆う胴体側面も、とても複雑な面構成で作られている。

ミニチュアの下面を左方向から見る。機体の各部にはよく見ると四角い小さな黒いマーキングが多数描かれている。このマーキングは、ミニチュアを撮影した際の巨大感を出す演出でひと役買っており、Xウイング以外にもYウイングや、ミレニアム・ファルコンにも施されている。また、胴体を水平に走る中心ラインが、機首のノーズ・コーンのラインときれいにつながっていることがわかる

ブルー1のエンジン部などの各部アップ写真。このブルー1のミニチュアはワンオフの試作タイプとも言えるXウイングであり、このあと量産されるレッド5などのミニチュアはこのブルー1の細部をさらに補正して作られているため、細部のモールドなどが一部異なっている。

ブルー1の美しいプロポーションを正面からとらえた一枚。コクピット先端から機首に伸びるラインが徐々に曲線に変わってゆく（機首の先端からコクピットに向かうラインはその逆）微妙な形状がわかるだろうか。

このページの白黒写真は実寸大モデルを作る際に、最初の打診用としてILMから英国に送られたブルー１の写真である。よく見るとなぜか人の身長が７フィート（２１メートル）だったり、コクピットのパイロットがやたらと大きかったりと、ちぐはぐな部分が見受けられる

Y-wing Starfighter Gold Leader Yウイング・スターファイター ゴールド・リーダー

BTL Yウイング・スターファイターはクローン大戦時から使われている古い機種で、歴史が[illegible]ぶん改良されつつ多くの機体型式が作られた。製造元はコーンセイヤー・マニュファクチャ[illegible]グ。全長16メートル。ゴールド・リーダー機はヤヴィンの戦いでYウイング・ゴールド中隊を率[illegible]たジョン"ダッチ"ヴァンダー大尉が乗る隊長機。デス・スター上空でダース・ベイダーのタイ・アドバンストx1に撃墜された。

クローン大戦中に[illegible]が使用していた宇宙戦闘機BTL-B Yウイング・スターファイターは機体やエンジン部分も[illegible]ており、全長23.4メートルであった。

よく見るとスタッフのお遊びとして、機首の先端にタイ・ファイターのキルマークがひとつ描かれているゴールド・リーダー機のミニチュア。下写真は撮影の準備をするデニス・ミューレン。

ゴールド・リーダー機のミニチュアは、機首の一部が外れて、前から支持棒のパイプが差し込めることがこの写真でわかった。これまで研究者の間では、横と後ろにある支持棒の取り付け穴は判明していたが、前からの支持棒を取り付ける穴はないものと思われていたのだ。

撮影中のものかもしれない。合成用のブルーバックを背景に撮影されたゴールド・リーダー機。搭載されているアストロメク・ドロイドは、なぜか写真によってすべて異なっている。

Y-wing Starfighter Gold 2

Yウイング・スターファイター・ゴールド2

オンダロン出身のデックス・タイリー（右写真）がパイロットを務めるYウイング・スターファイター。彼はゴールド中隊隊長機のウイングマンを務めたが、ダース・ベイダーのタイ・アドバンストx1に撃墜された。デックスは2015年刊行の「アルティメット・スター・ウォーズ」で初めてフルネームの設定を与えられた。

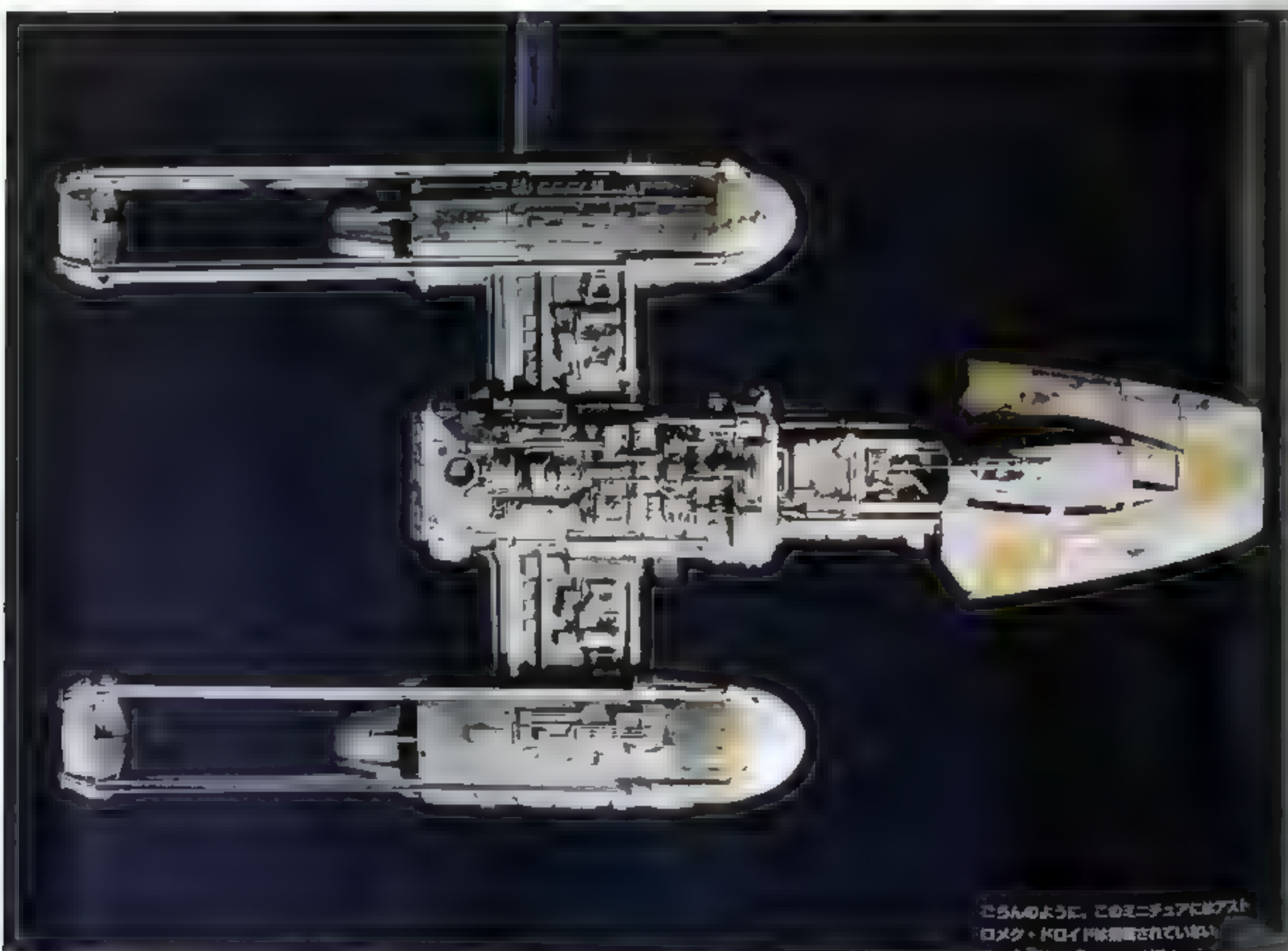
本ページ：ゴールド2のミニチュアを各方向からとらえた写真。操縦部にある配管用のパイプの多くが長く伸びている点が特徴である。エンジン部に青いセロファンが貼られてい[illegible]

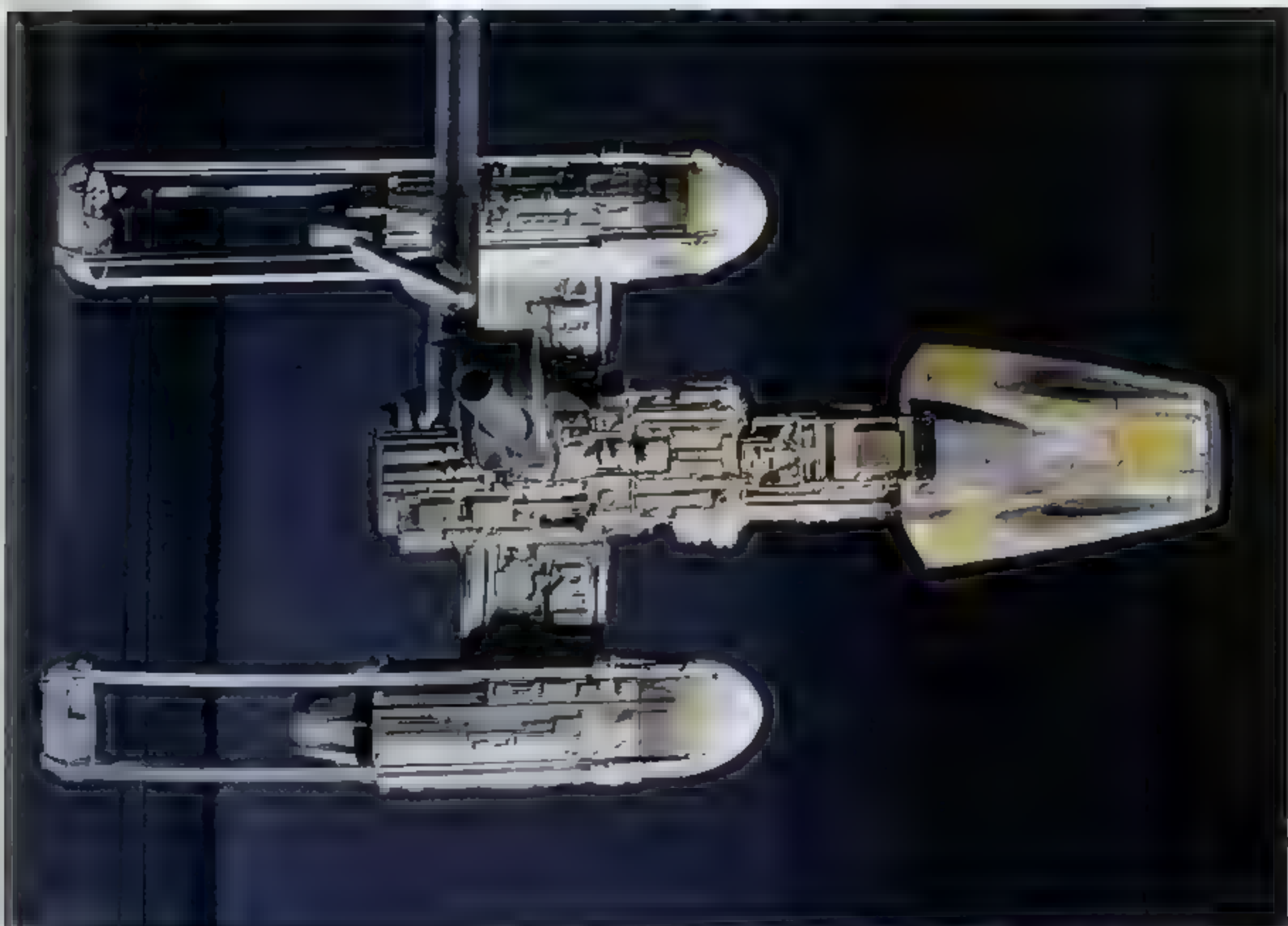
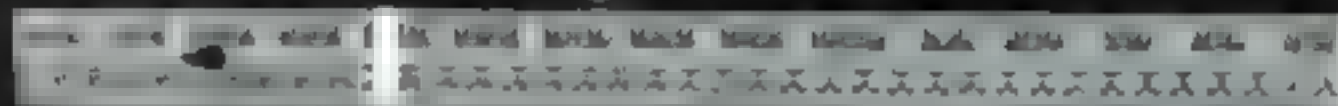
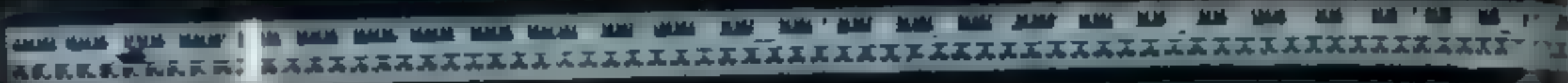
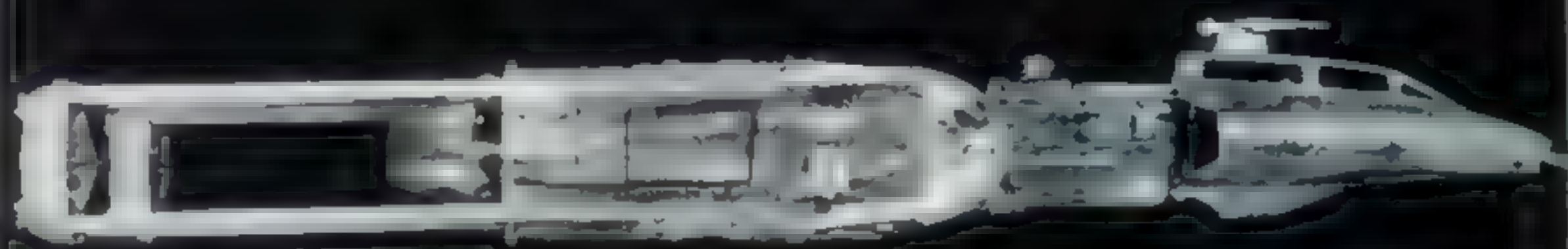
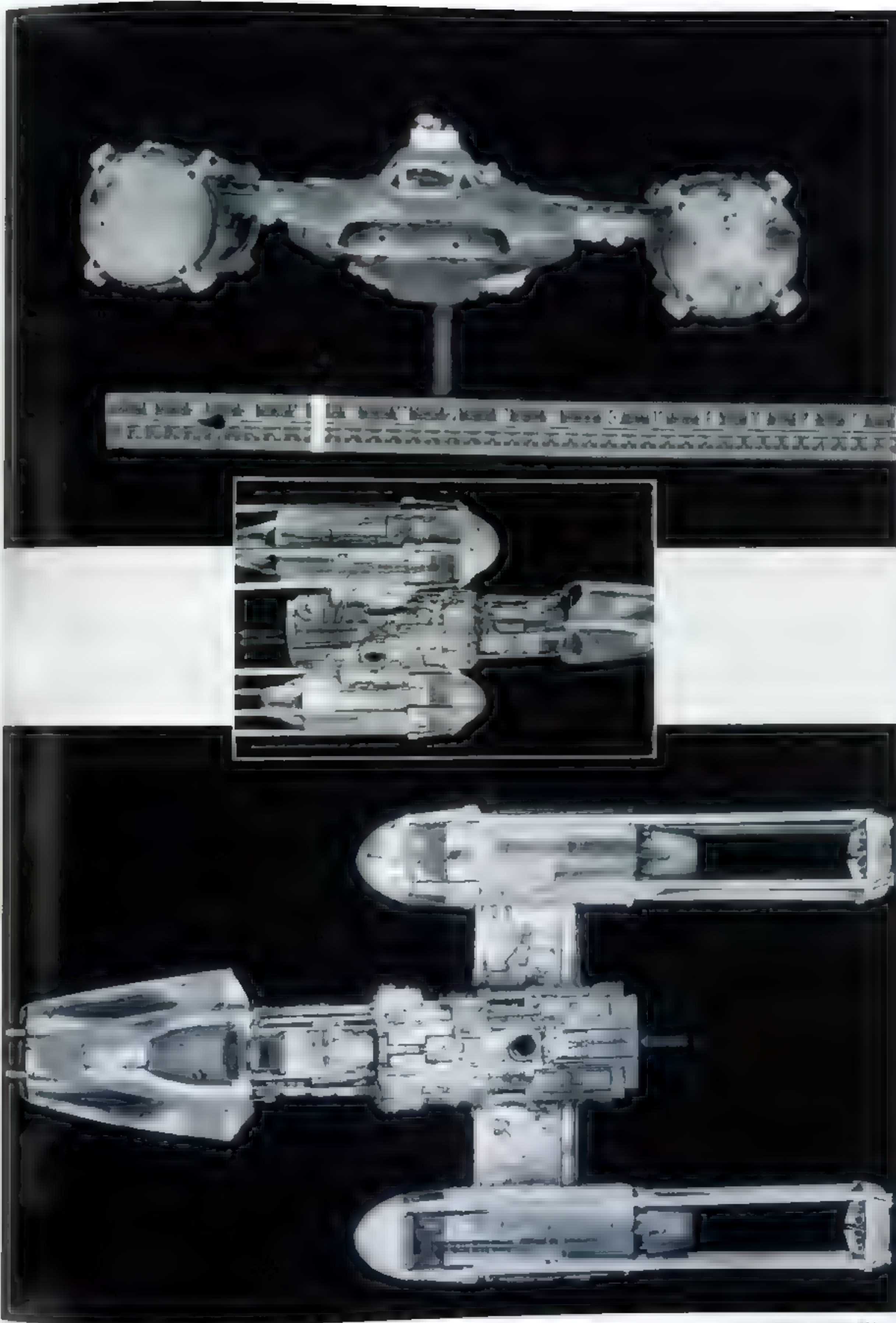
このゴールド2のミニチュアはアップ用のYウイングで、写真をよく見ると機首の下部に凹部が有り、122ページの写真と同様に機首の一部が外れて後から支持棒を差し込む構造になっていると思われる。

エンジンノズル内に薄赤いセロファンが貼られており、照明が施されていることがわかる。またアップ用ミニチュアのためか、この機体は上下に走るパイプが細かく塗り分けられている。

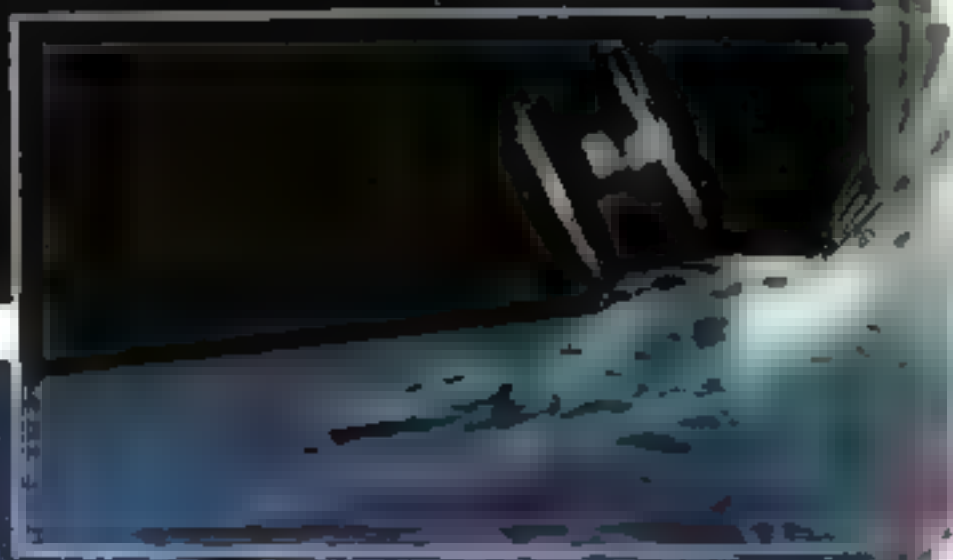
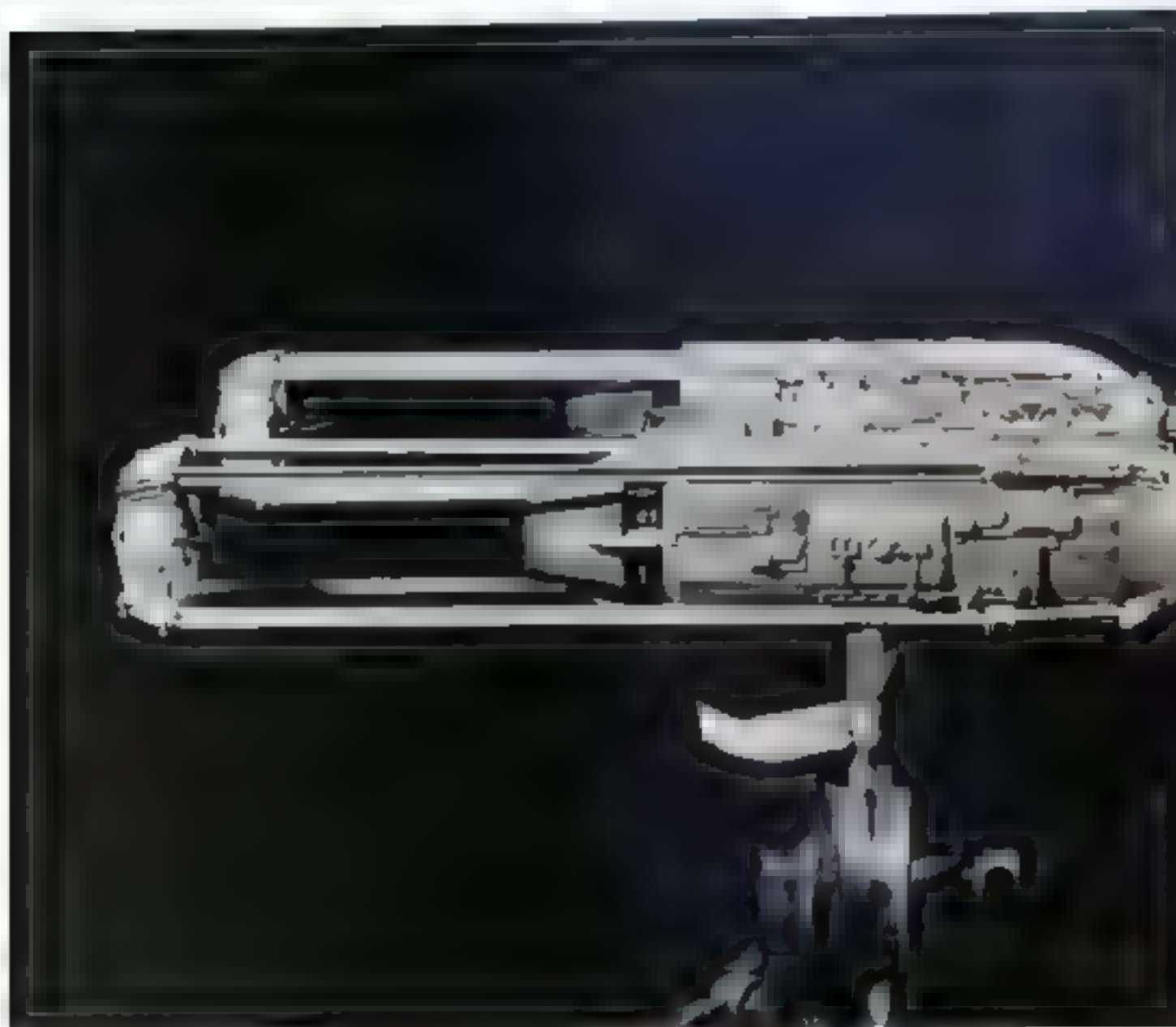
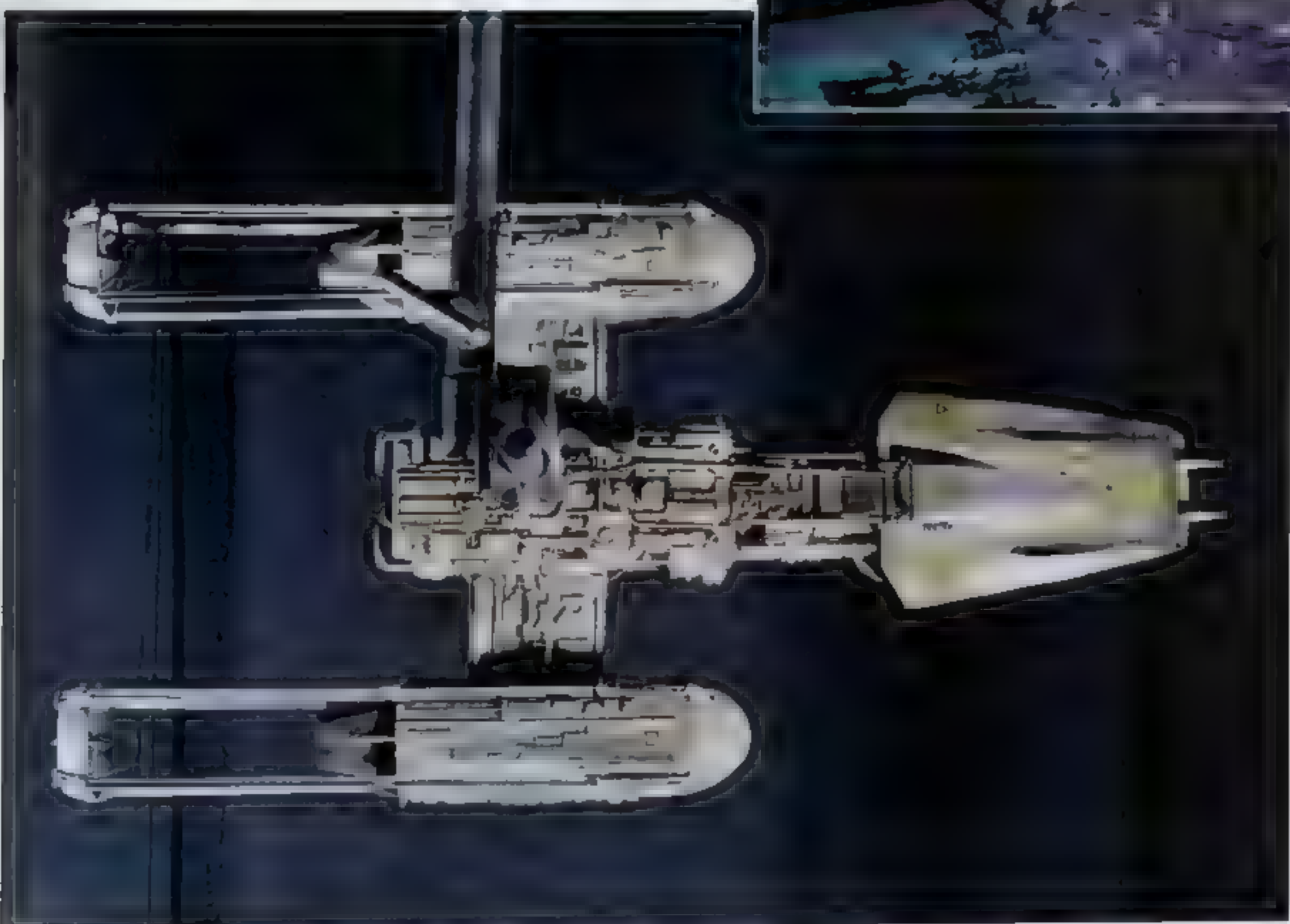
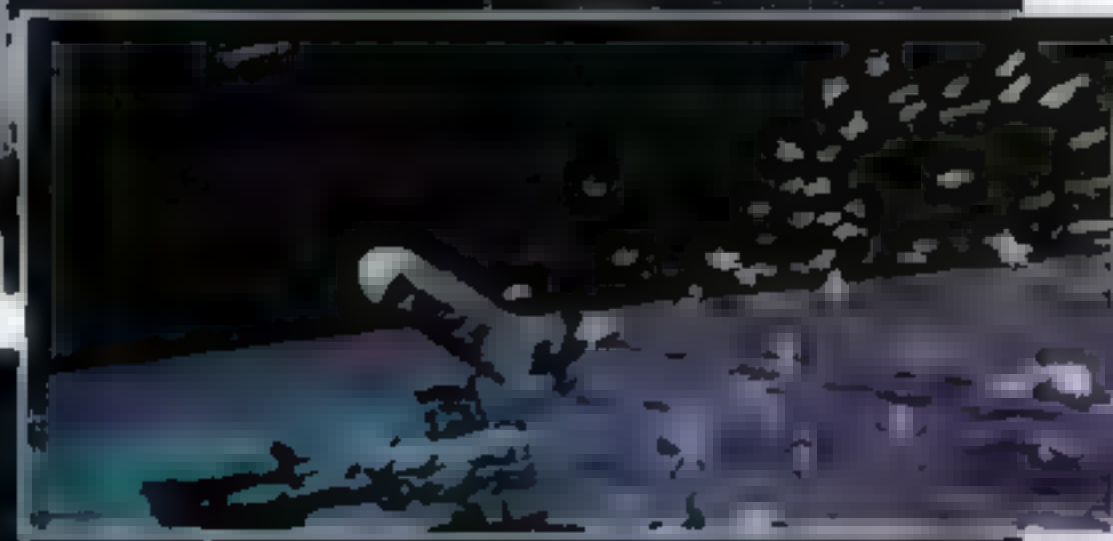
Y-wing Starfighter Gold 3 Yウイング・スターファイター、ゴールド3

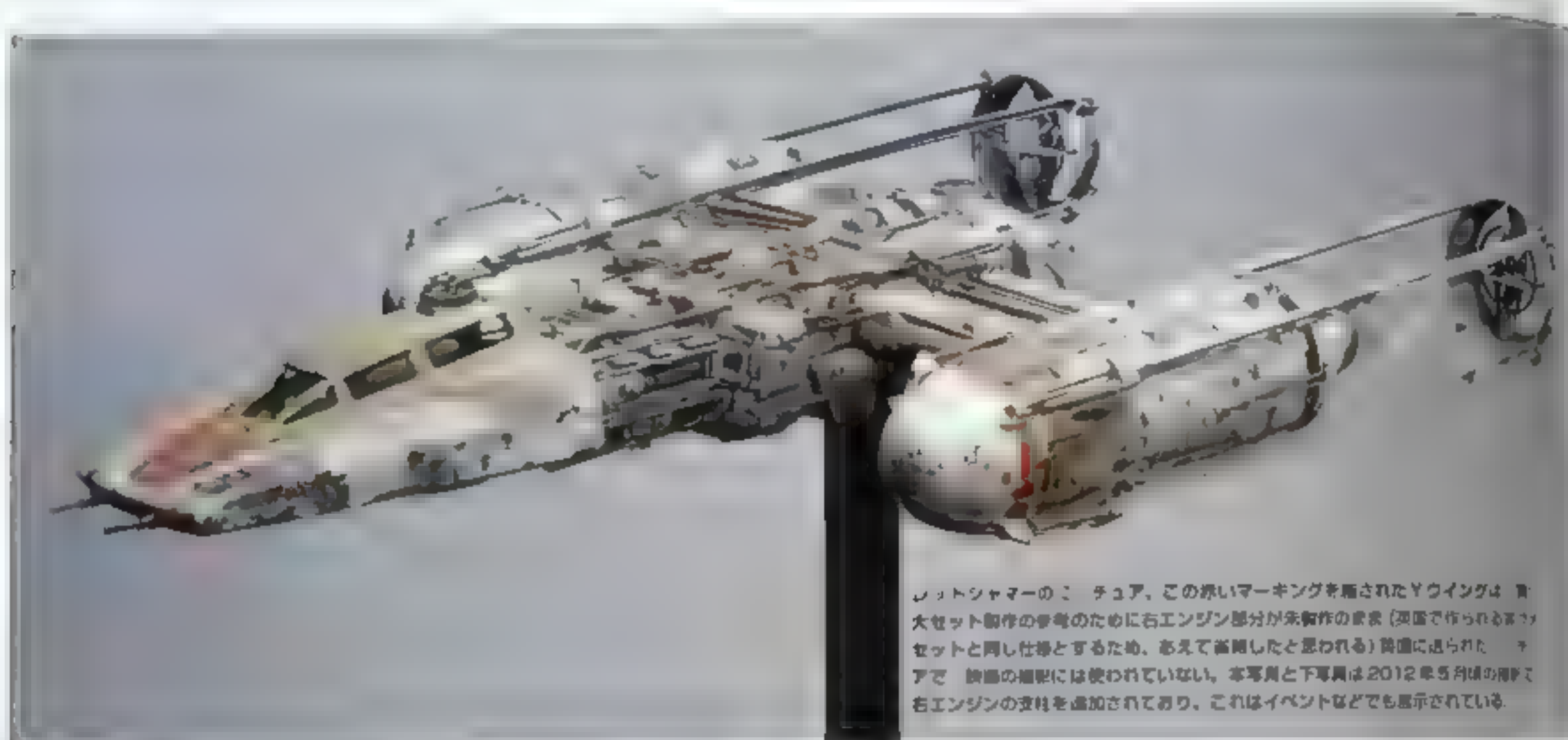
Yウイング・スターファイターのゴールド3に搭乗したパイロットの名はいまだ設定されていない。現在（2016年）ではLEGENDSと区分される2014年4月以前の旧設定では、ヤヴィンの戦いにおいて、Yウイングのゴールド中隊で唯一撃墜をまぬかれ、デス・スター攻撃から生還したのYウイング・スターファイターは、キーアン・ファーランダーのゴールド7だとされていた。

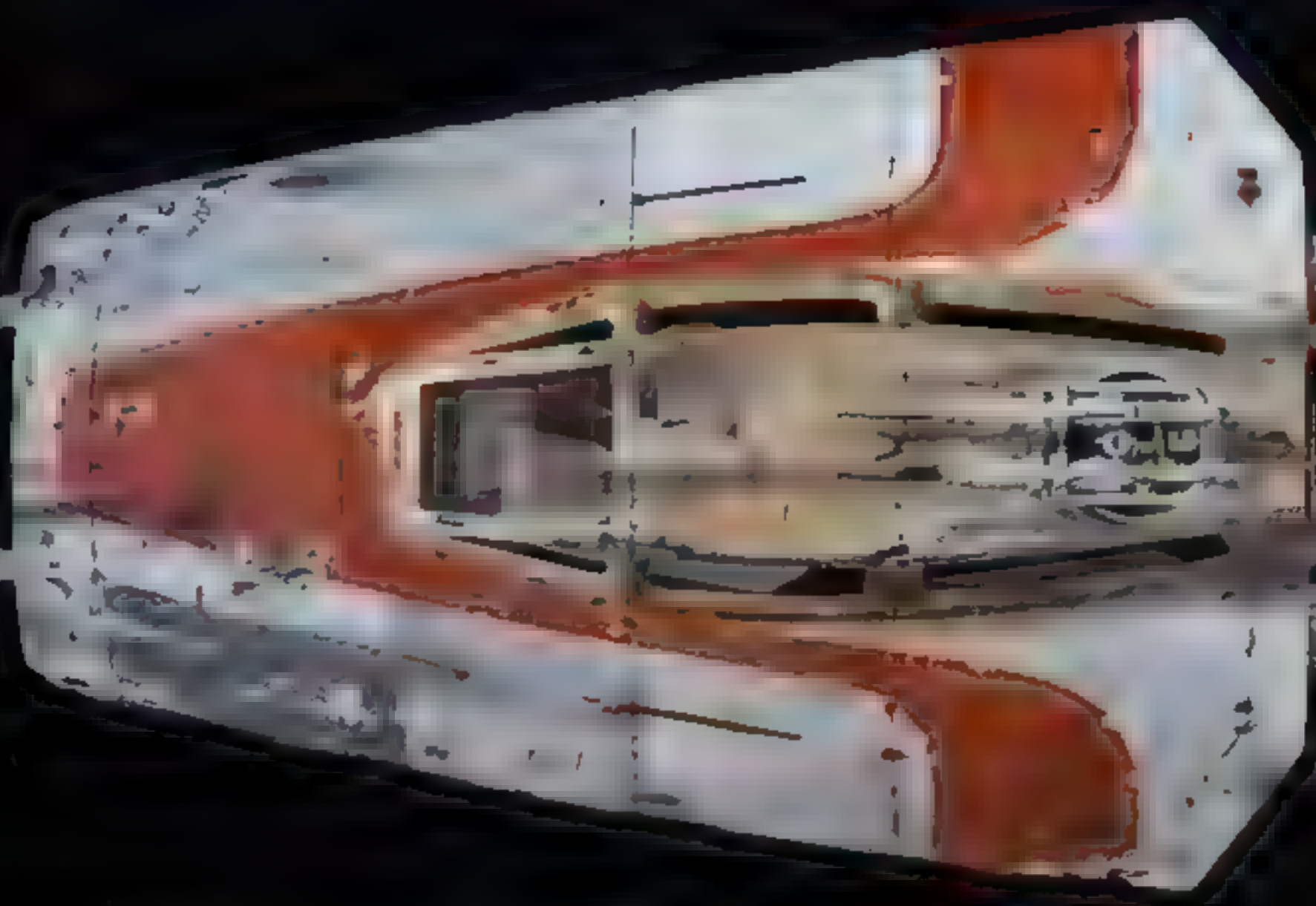
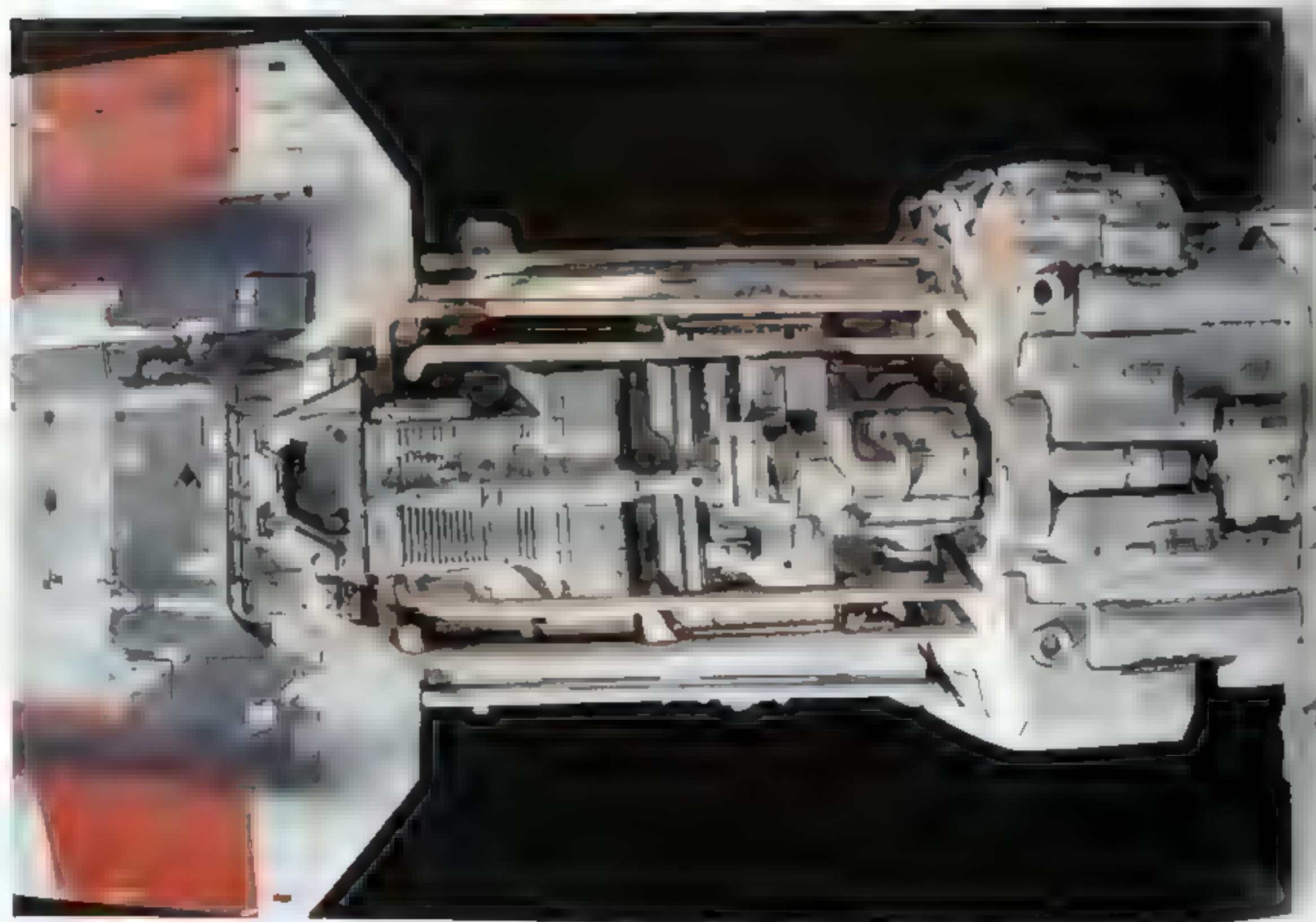
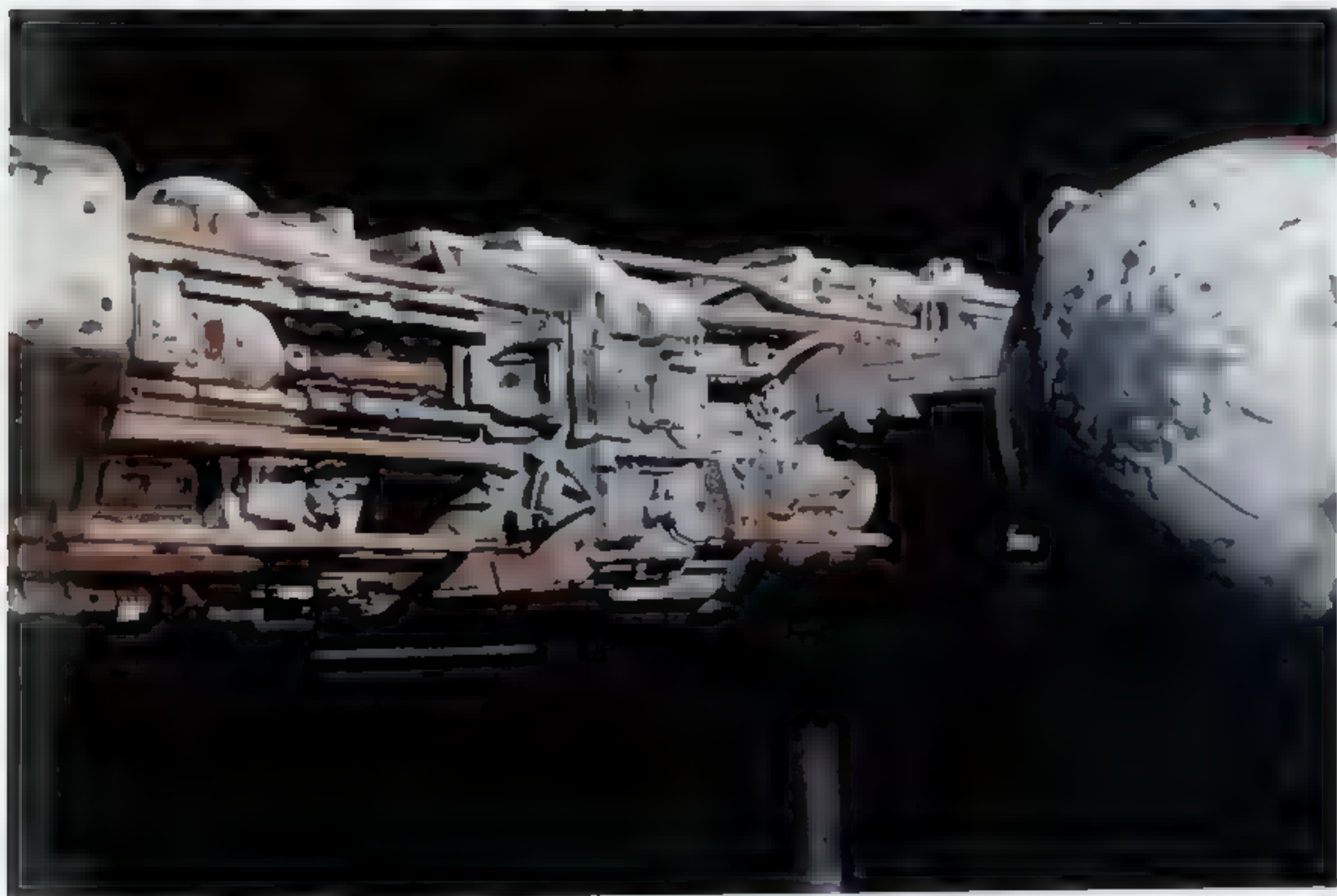
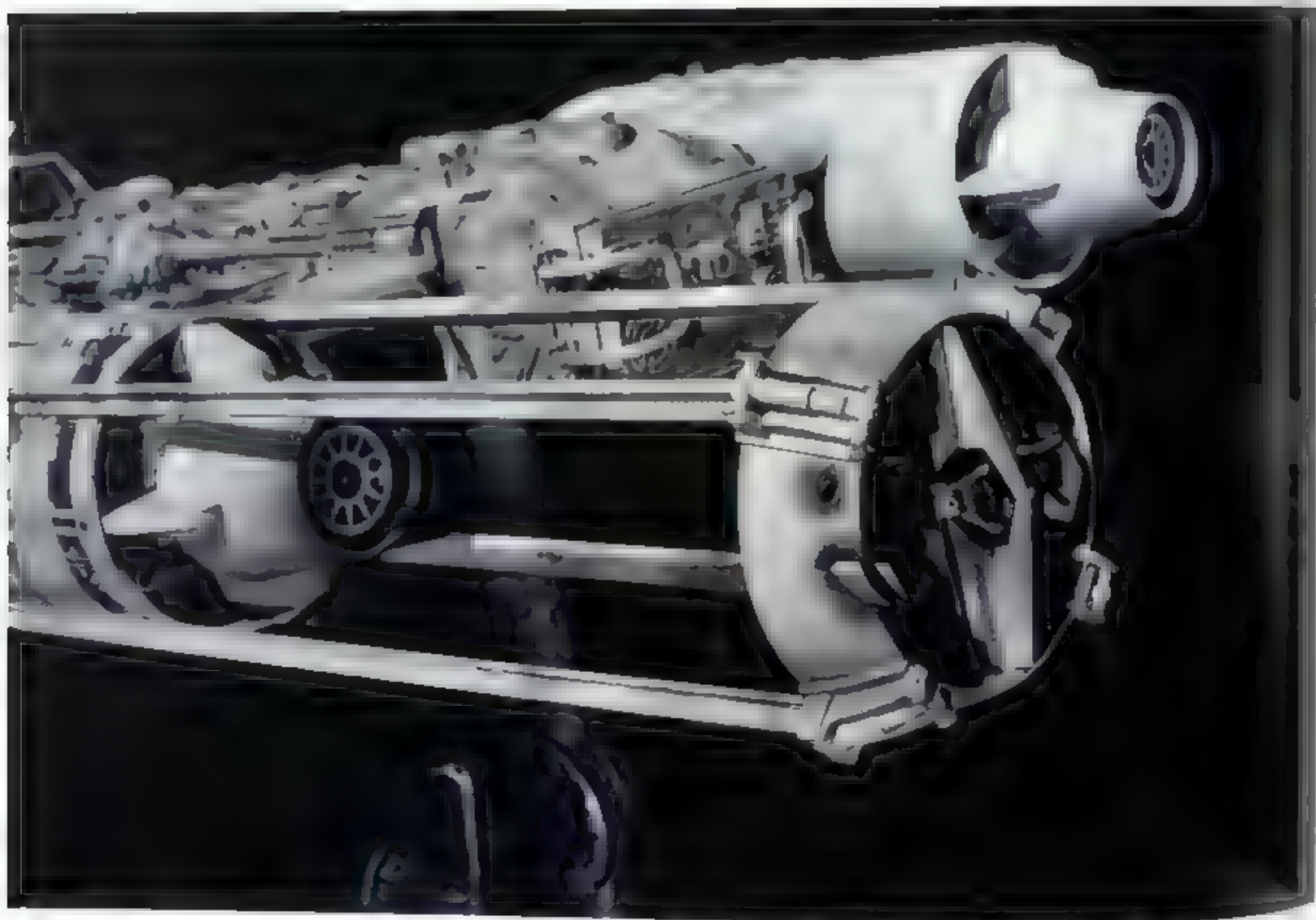
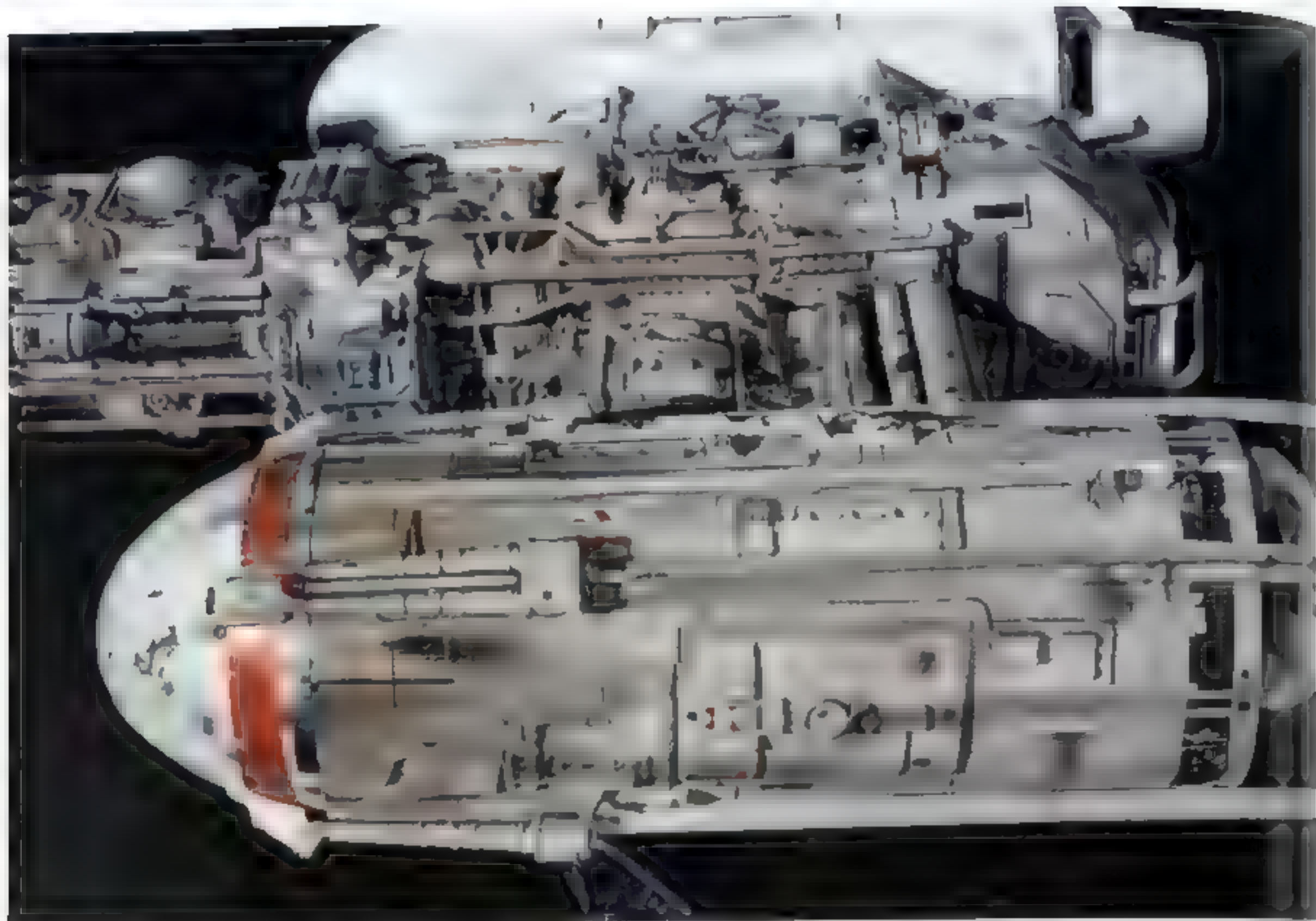
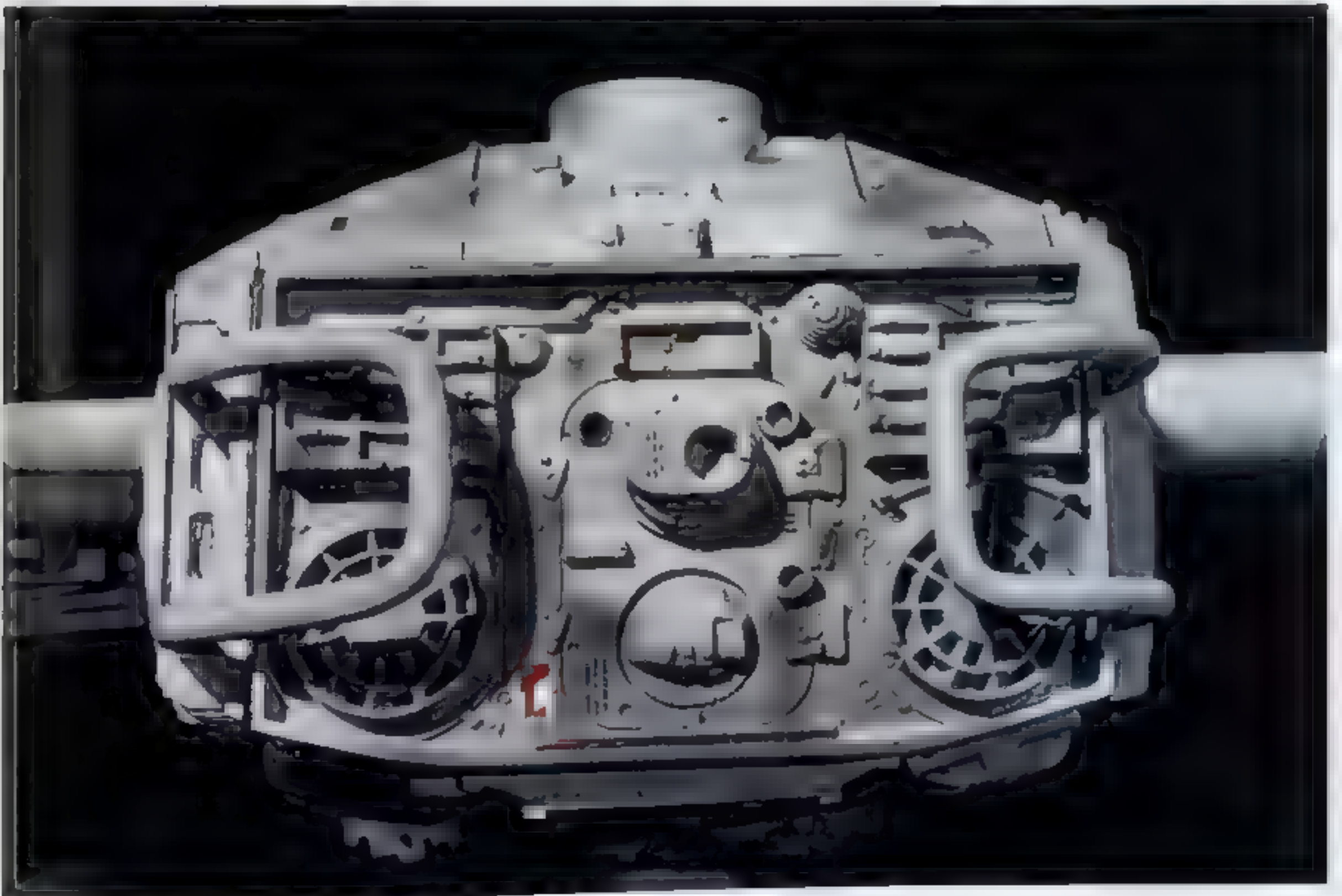
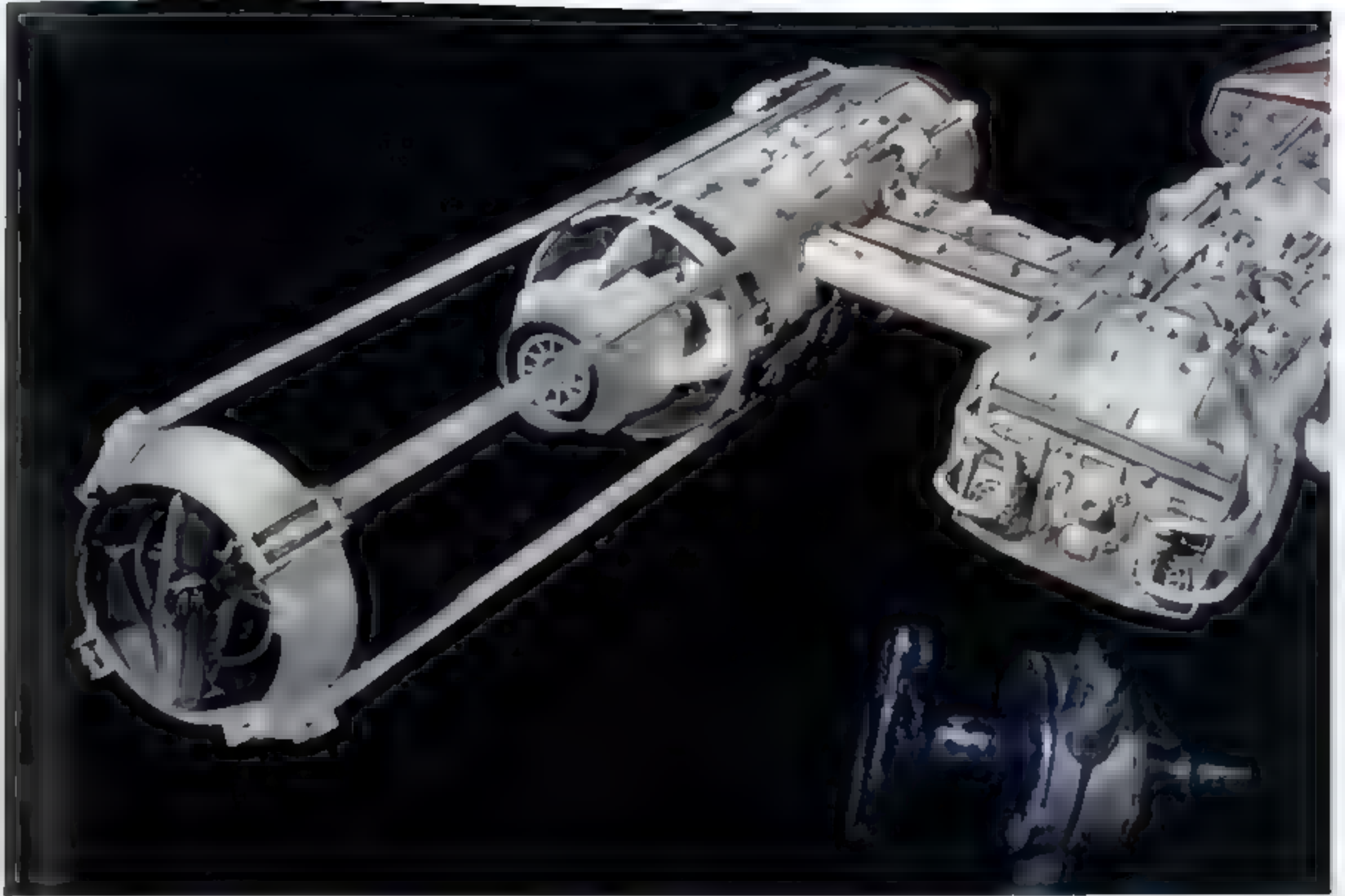
このゴールド3は劇中には登場しておらず、[illegible]ていたと思われる。

ご覧のように、このミニチュアにはアストロメク・ドロイドは搭載されていない。

本来はYウイングの機首先端に装備されるはずの2門のレーザー砲が、ゴールド3には最初から無い。他の機体に比べ塗装仕上げも荒く、胴体部の配管数も少ないため、これは撮影用のモデルだった可能性がある

本ページ・右ページ：ゴールド3のミニチュアを定規と共にとらえた写真。のちに「エピソード6」の撮影時に再び使用されるYウイングだが、ILMに残っていたYウイングのミニチュアはこのゴールド3のみだったようで、もともと[illegible]かった部分にグニャグニャと曲がった部分を足し、側面にレーザー砲を2門追加して撮影に使われた。

Y-wing Starfighter Gold 5

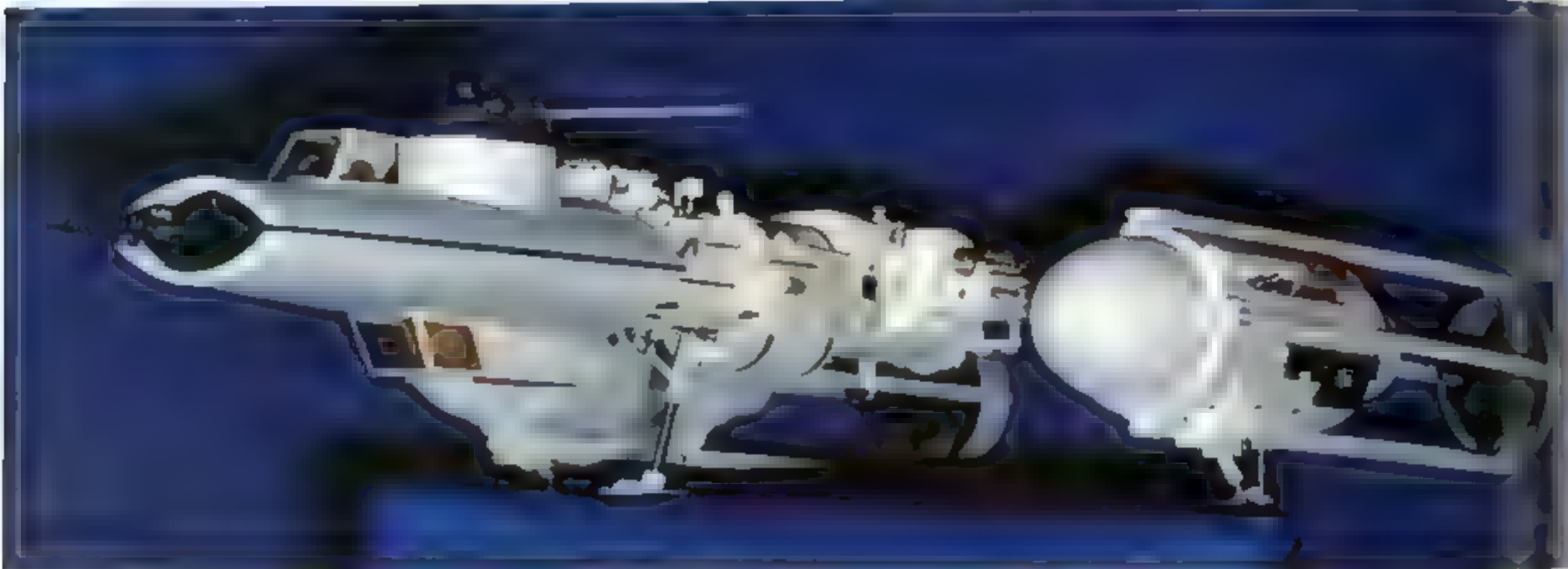
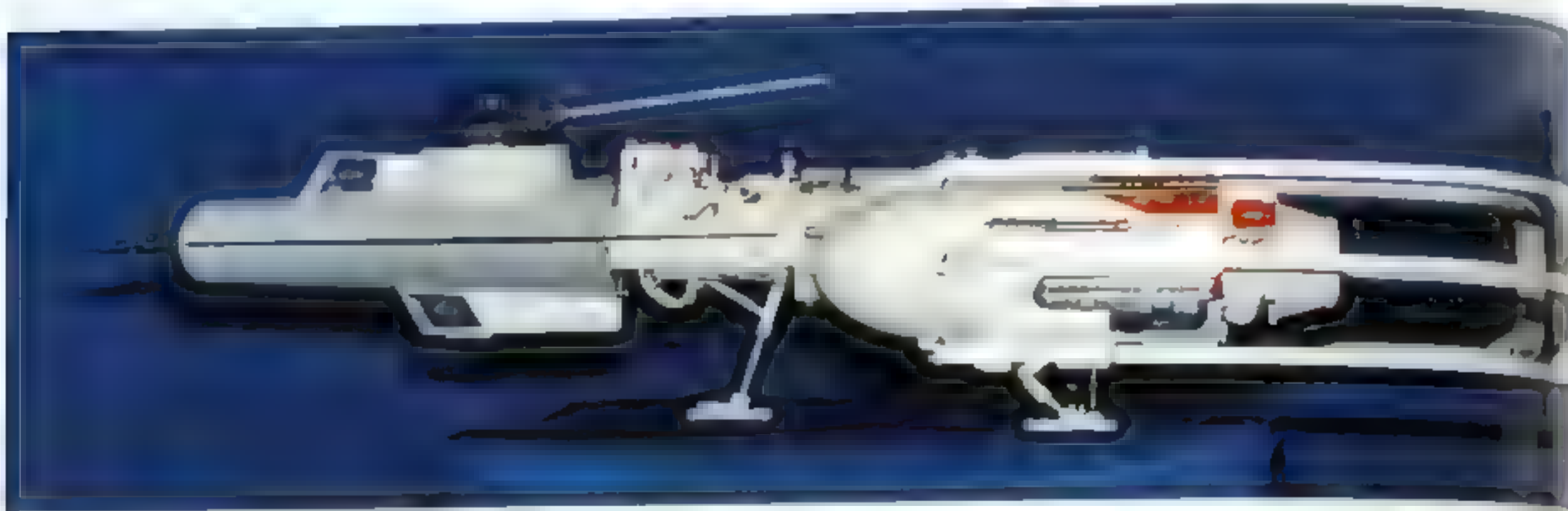
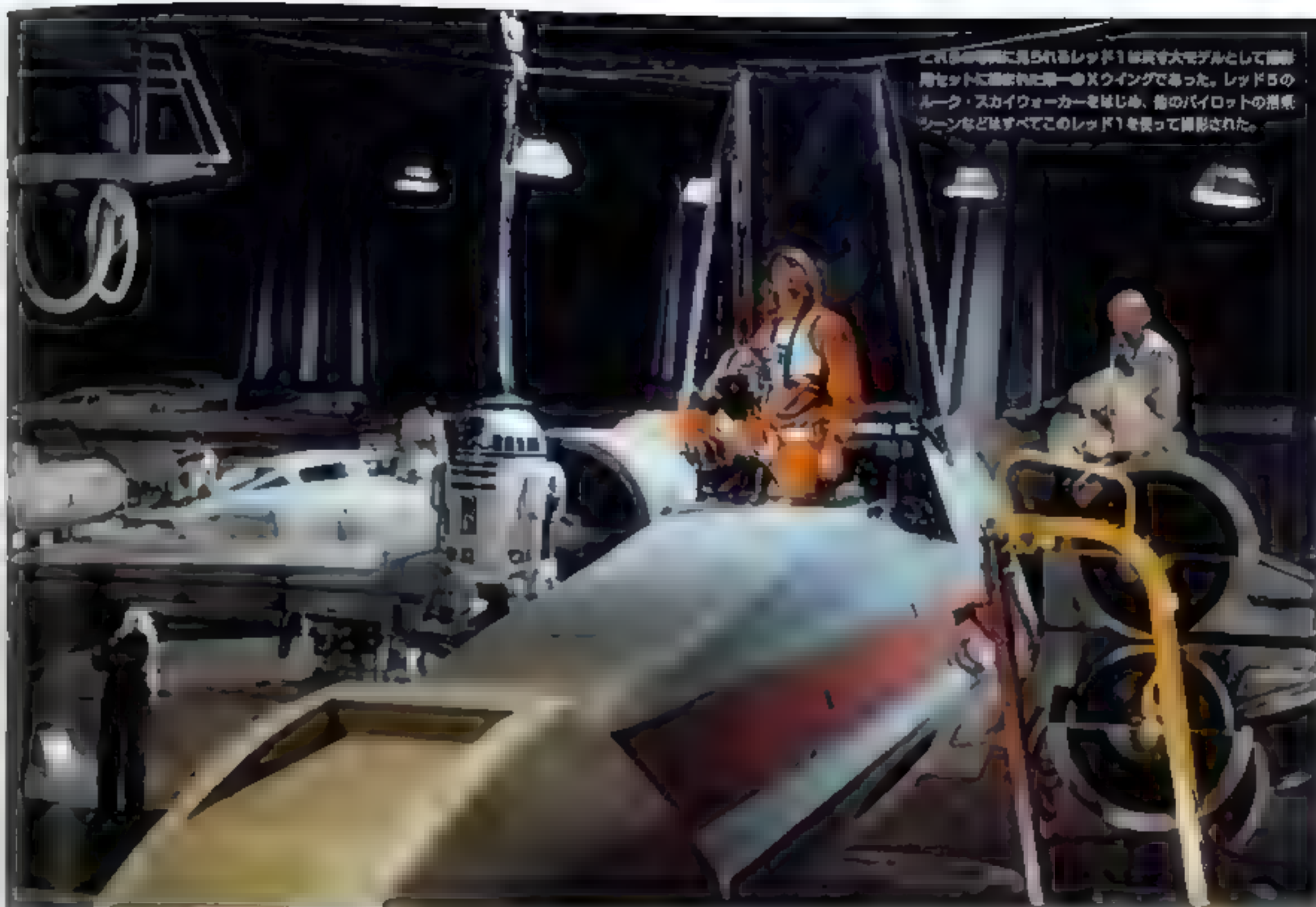
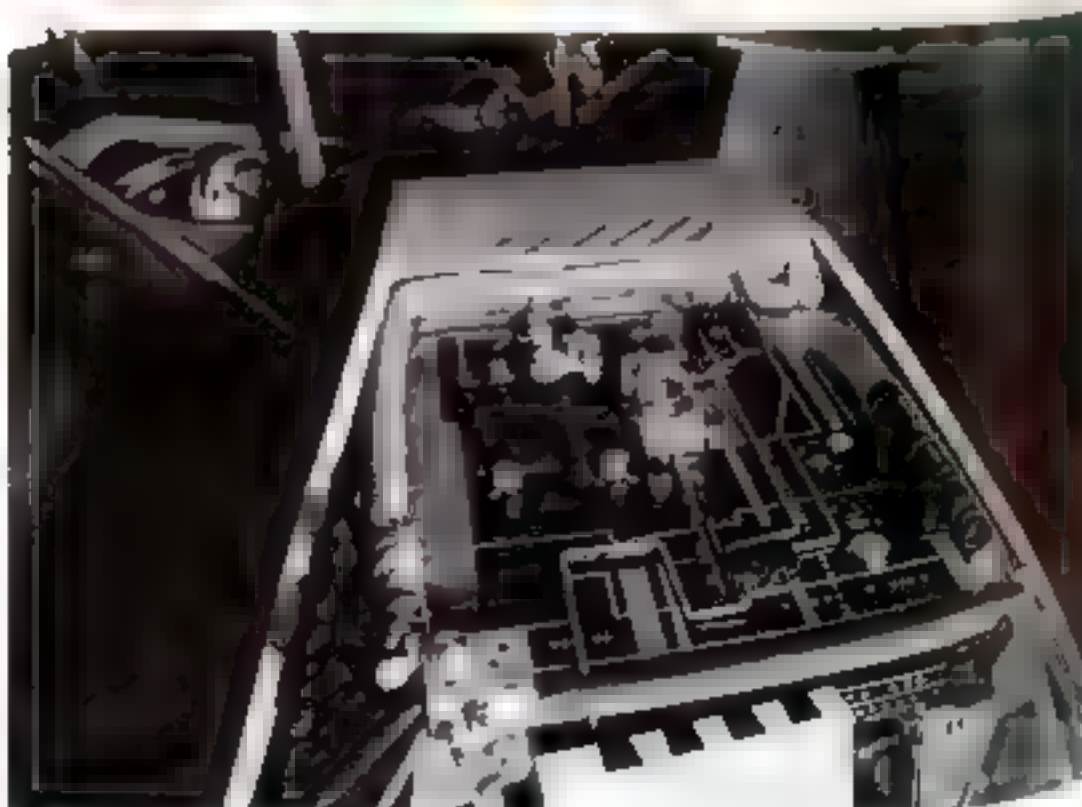
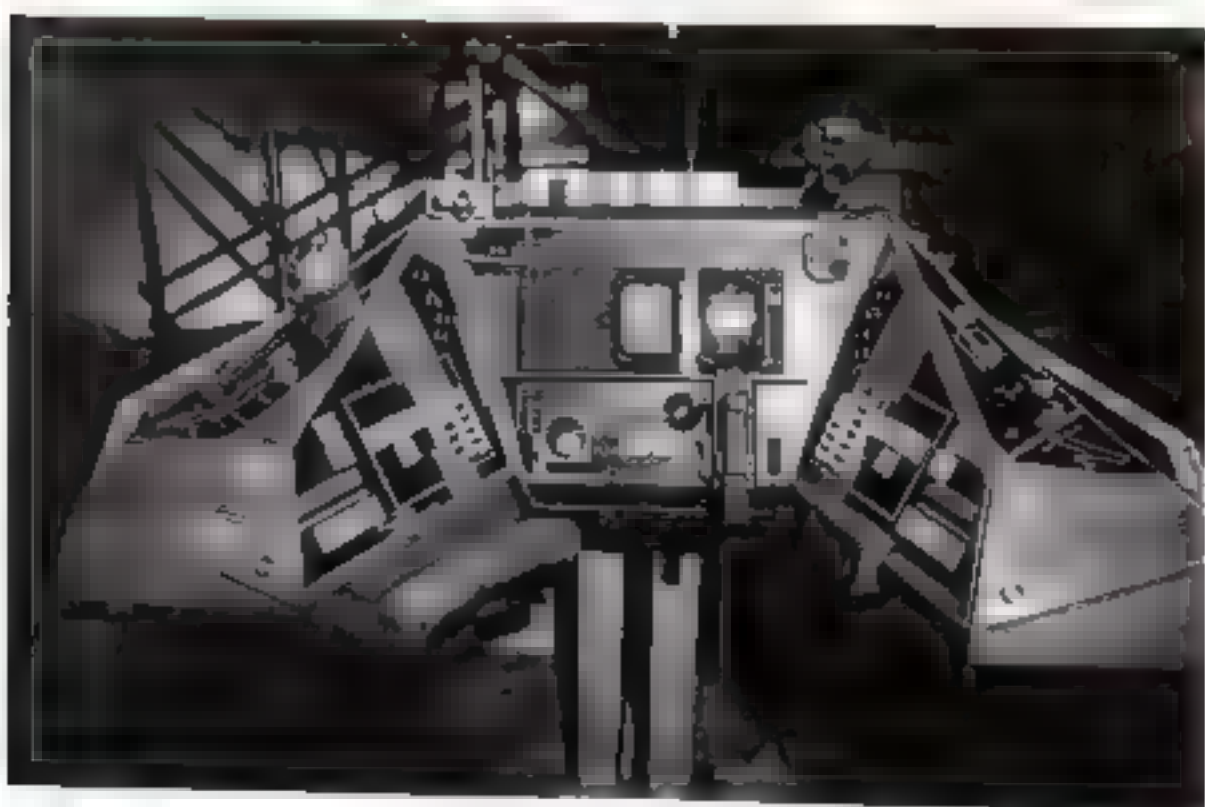
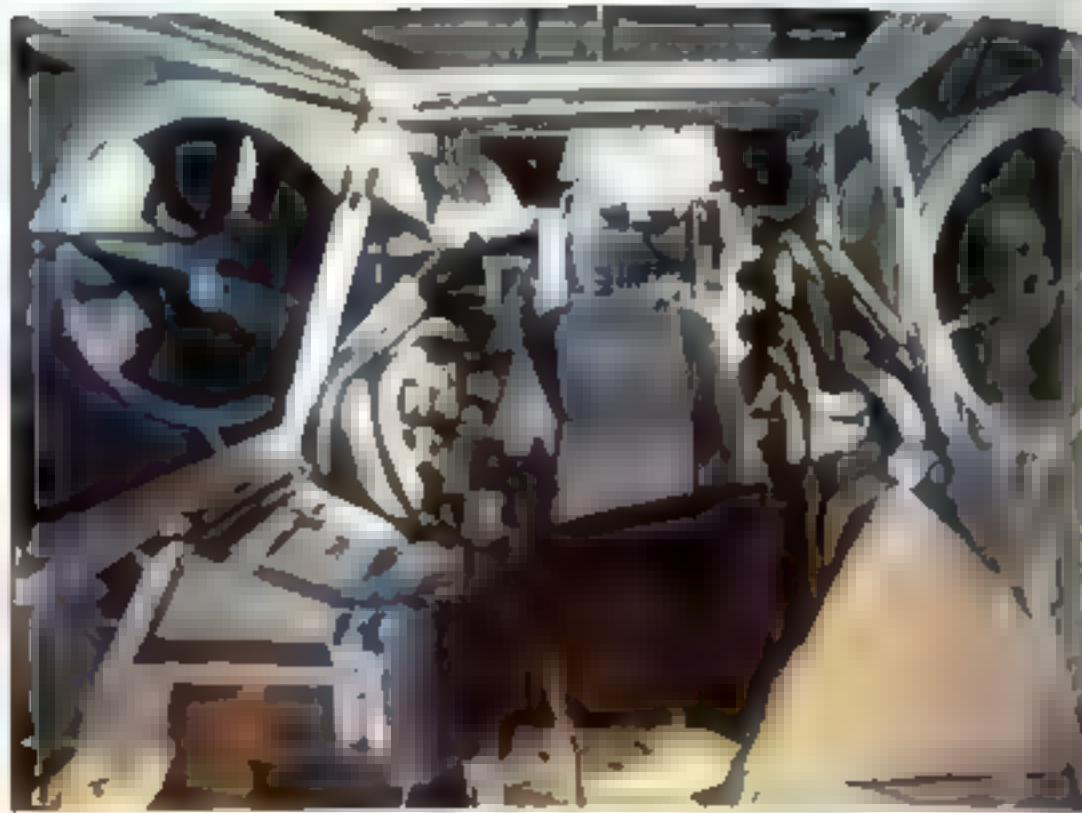
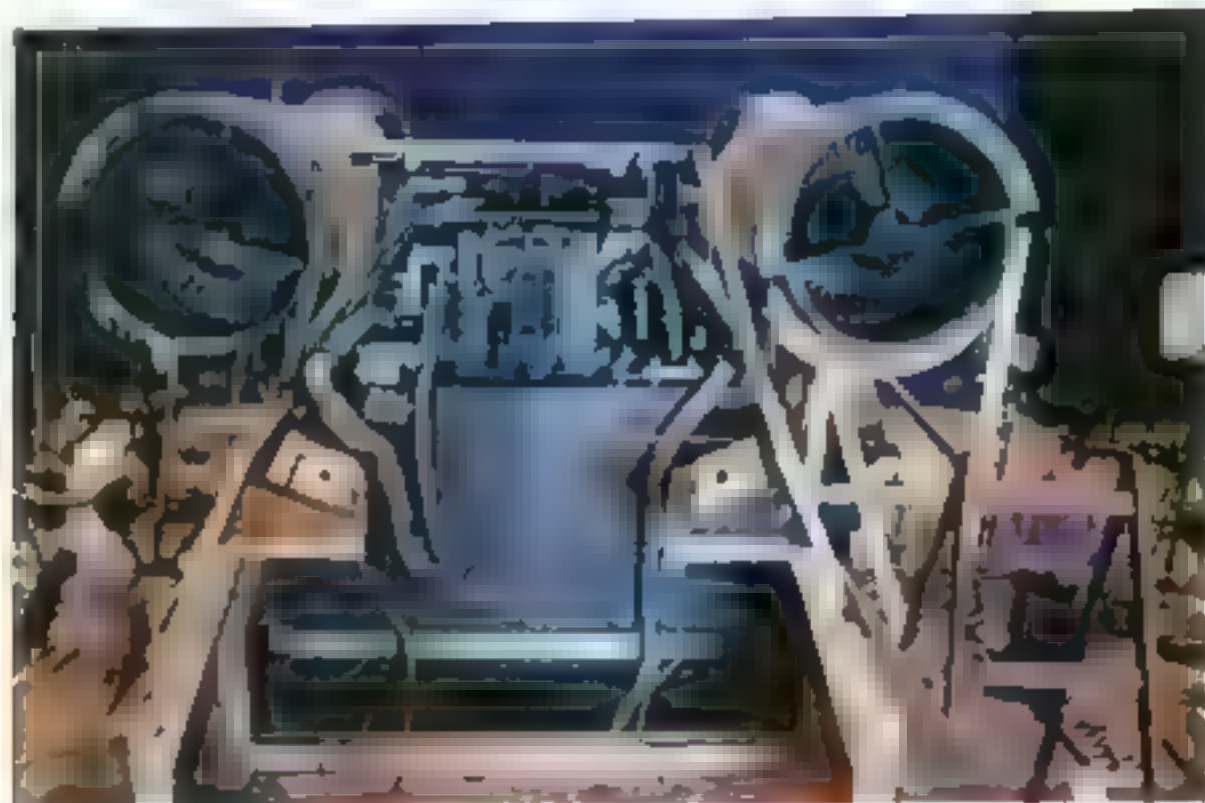
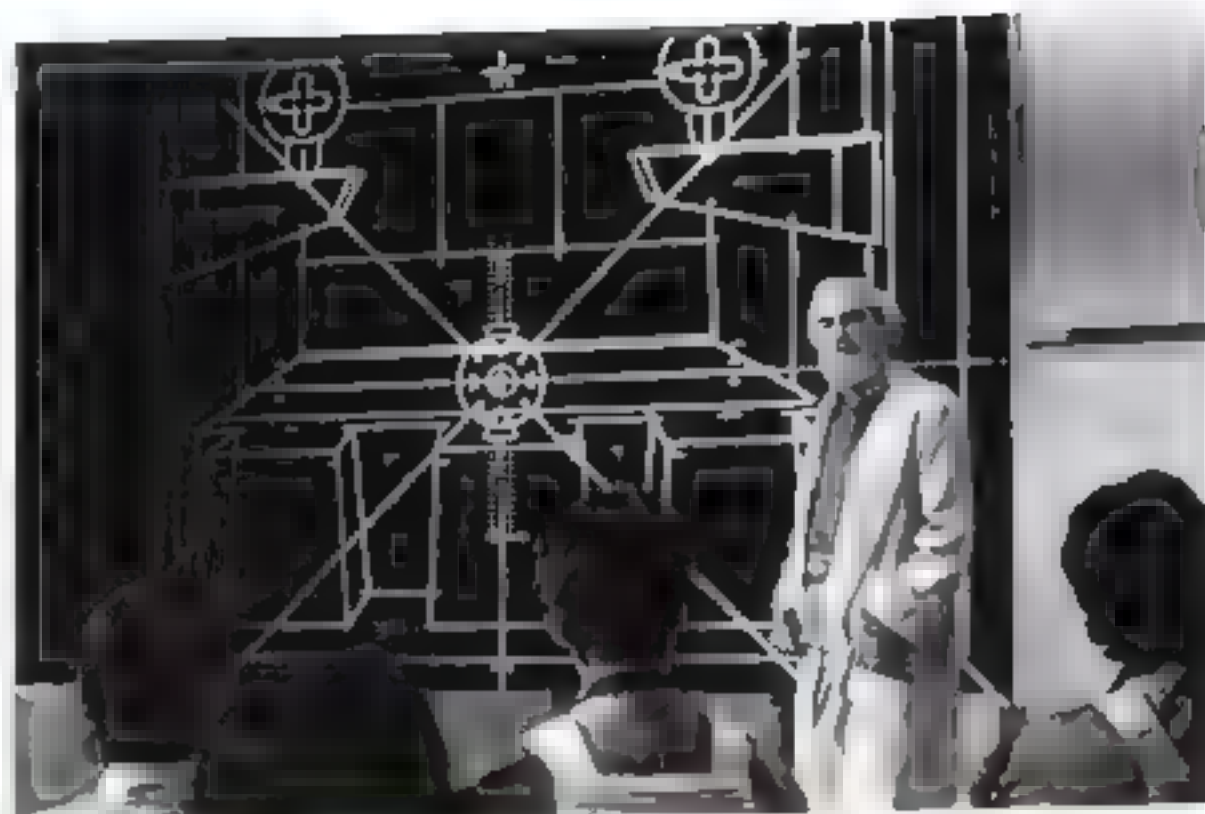
Yウイング・スターファイター・ゴールド5

ダントゥイン出身のデイヴィシュ"ポップス"クレイル（右写真）がパイロットを務めるYウイング・スターファイター。ダース・ベイダーのタイ・アドバンストx1に撃墜された

左ページ 本ページ ゴールド中隊の他の機体と異なり 機首の後面左右の外側に胴体からのパイプが追加されているゴールド5のミニチュア これは劇中で最後に撃墜されてしまう撮影用のミニチュアで 今まで出版物ではあまり紹介されたことがなかった

Y-wing Red Jammer Yウイング・レッドジャマー

最終的にはレッド中隊となるYウイングの部隊が「ブルー中隊」と設定されていた段階では、Yウイングはゴールド中隊ではなく「レッド中隊」と設定されていた。赤いマーキングのYウイングのミニチュアは1機が完成し、実寸大セット作りの参考用に、英国でセットを建造中であった美術部に送られた。そのため、このミニチュアは初期設定の赤いカラーリングのまま、スカイウォーカー・ランチのアーカイブに現存している。

レッドジャマーのミニチュア。この赤いマーキングを施されたYウイングは、実大セット制作の参考のために右エンジン部分が未制作のまま（英国で作られる実寸大セットと同じ仕様とするため、あえて省略したと思われる）英国に送られたミニチュアで、映画の撮影には使われていない。本写真と下写真は2012年5月頃の撮影で、右エンジンの資料を追加されており、これはイベントなどでも展示されている。

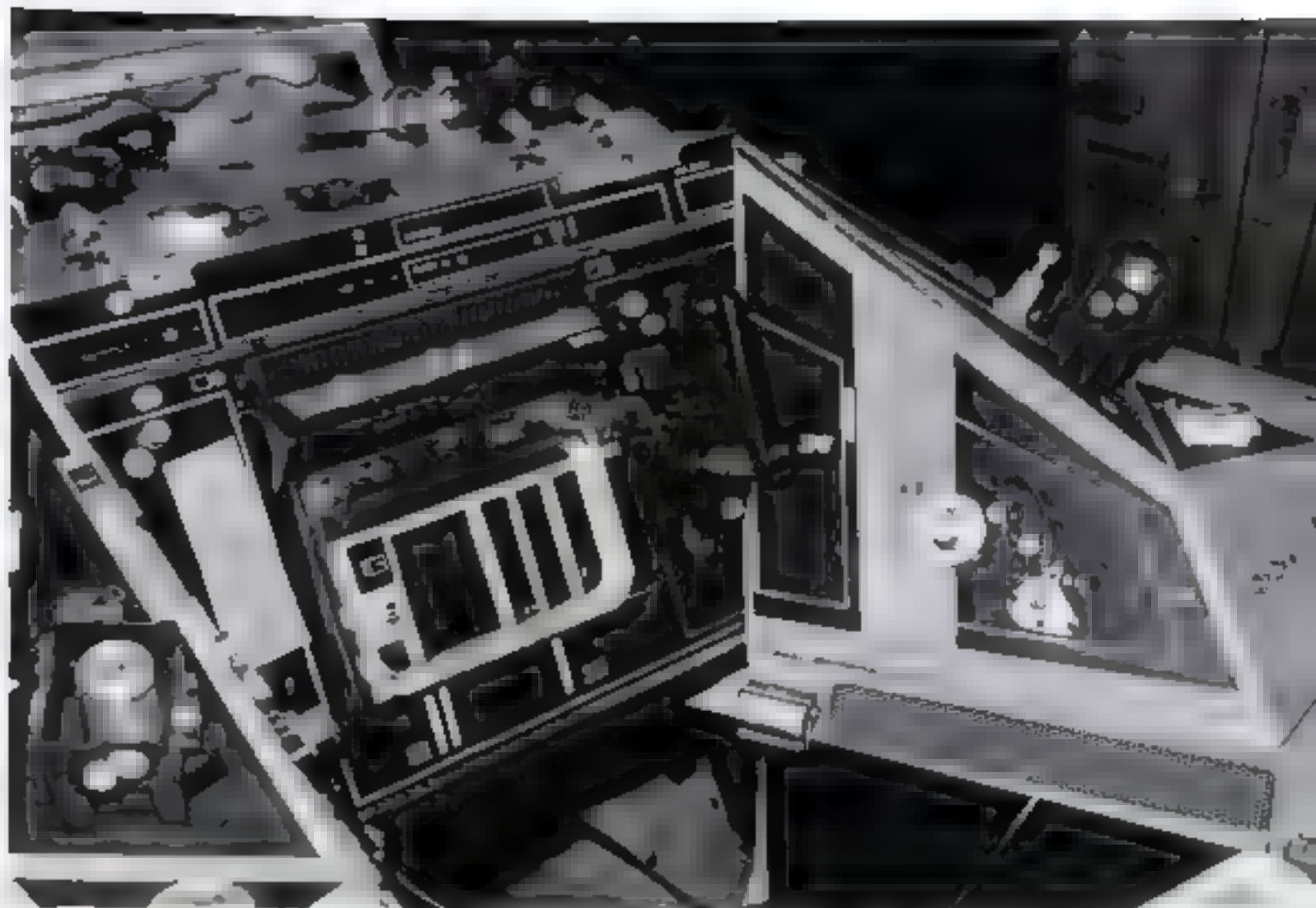
下左、下右：2011年8月頃撮影されたレッドジャマーの写真

本ページ：2005年5月頃に撮影されたレッドジャマーの雄姿。

左ページ 本ページ ミニチュア各部のアップ写真で 完成当時の丁寧に汚し塗装が施された状態がよくわかる

左ページ／本ページ：各部のアップ写真の続き。この右側のエンジン支柱がないミニチュアの写真は英国へ送られた時の状態で、英国から返還されたあとすぐに右側のエンジン支柱が追加された。そのためその後に作られた「量産モデル」のゴールド3やゴールド5とも細部の一部が異なっている。

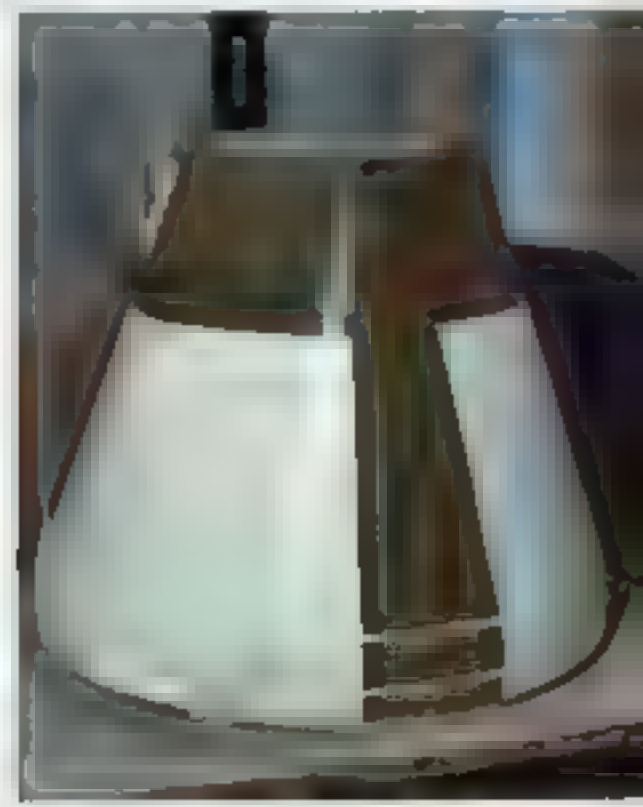
Y-wing Prototype Model Yウイングのプロトタイプ・モデル

「2001年宇宙の旅」などの実績を買われて、映画製作初期に多くのプロトタイプ・モデルを製作したコリン・キャントウェルによって作られたプロトタイプ・Yウイング　ほぼこの形状のまま、ラルフ・マクォーリーが描いた反乱同盟軍基地のコンセプト・アートに登場している

これらの写真に見られるレッド1は実寸大モデルとして撮影用セットに置かれた唯一のXウイングであった。レッド5のルーク・スカイウォーカーをはじめ、他のパイロットの搭乗シーンなどはすべてこのレッド1を使って撮影された。

LIFE-SIZED COCKPIT & OTHERS

実寸大コクピットほか

本ページ 実寸大セット各種 最上段左写真は、デス・スターの放熱口の位置を説明するシャン・ドトゥナ将軍，その右はYウイングのコクピット 2段目の写真2点はXウイングのコクピット後方部分で 下4点はXウイングのコクピット前方部分 スターファイターのコクピットは前方と後方でセットが別々に作られていた

Xウイングのコクピット後方に座るアストロメク・ドロイドの頭部は、パイロットごとに交換して撮影された。劇中ショットでは写らないが、R4ユニットもXウイングに搭載されていた（上段写真）。下段写真はXウイングに搭載される緑色のR2ユニット

前ページのセットとは計器盤が異なるXウイング前方部のセット。計器盤のアップのシーンではこちらが使われていた。

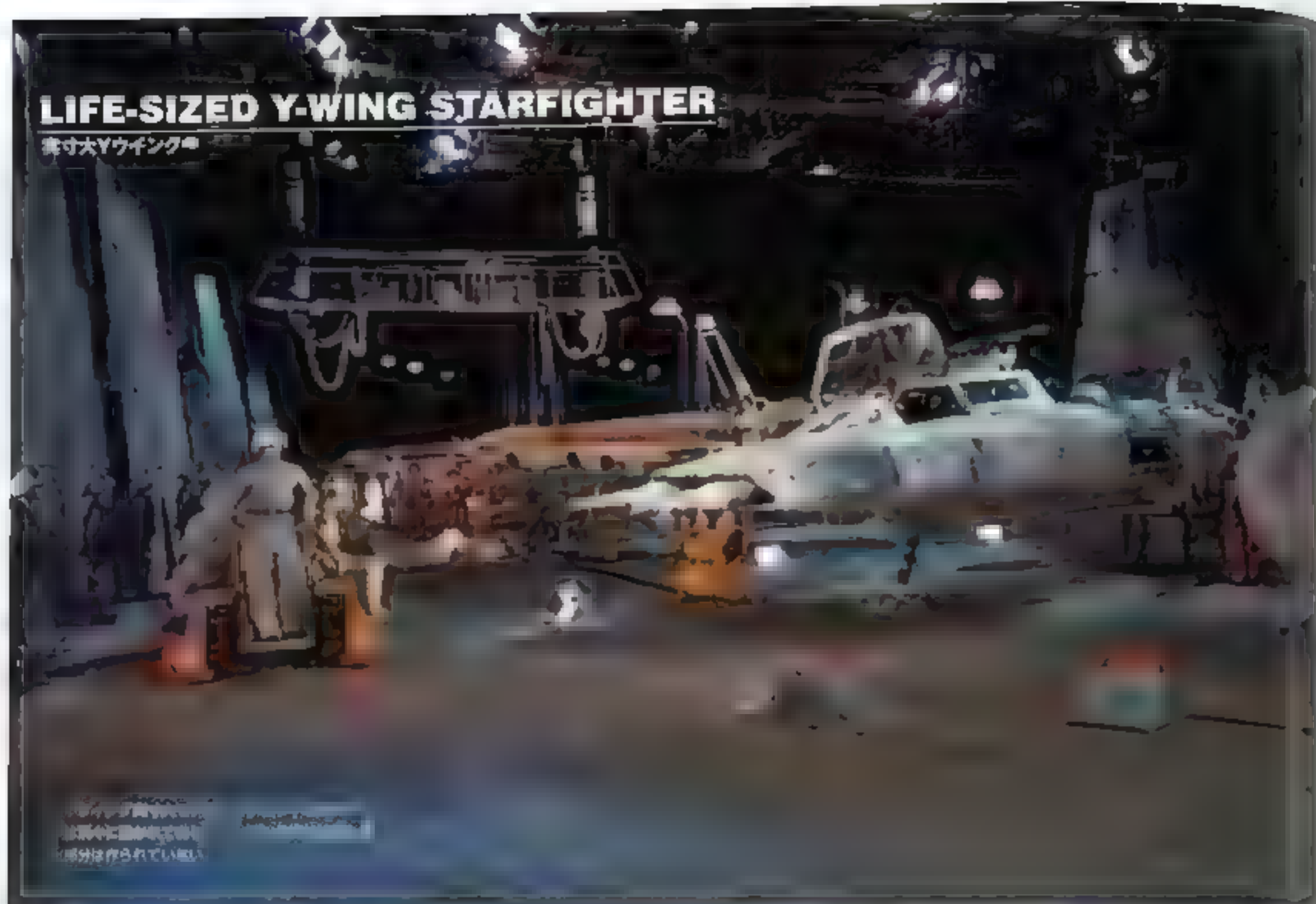
レッド・リーダーのアストロメク・ドロイドとして使われた赤いR5ユニットのヘッド。このヘッドは赤いボディを付けて、デス・スター内にいるドロイドとしても使われた

上のXウイングや、ブロッケード・ランナーのセットでも使われた円錐の断面が六角形の頭部形状をしたR4ユニット。

FRP樹脂で製作されたR2ユニットの頭部。

ビッグズの機体に搭載されたR2ユニットの頭部。この頭部もFRPで作られ、どれも同じ箇所にへこみがある

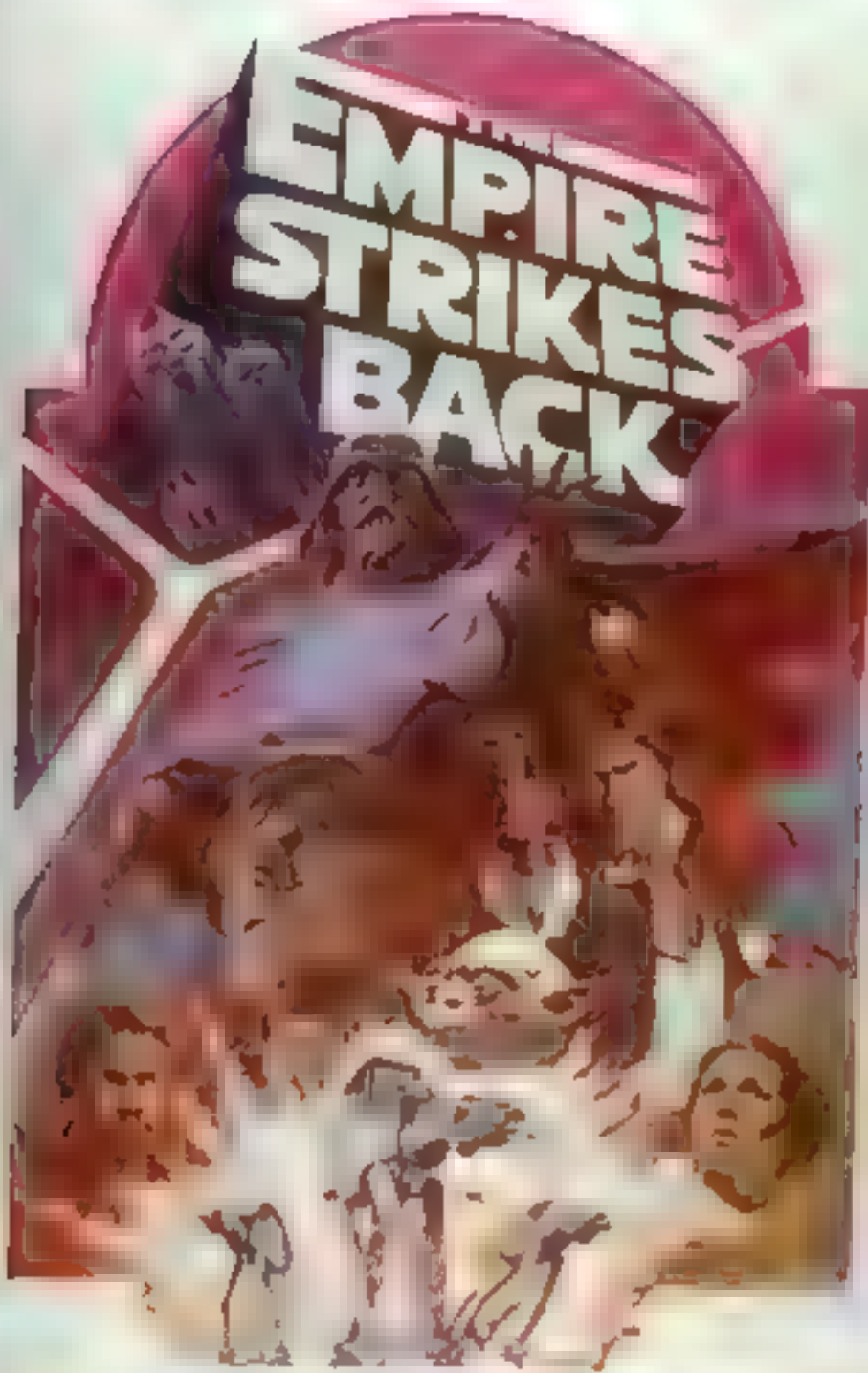
Xウイングのセットに収まるビッグズ・ダークライタとR2ユニット。R2ユニットが左写真とは異なる。

LIFE-SIZED Y-WING STARFIGHTER

実寸大Yウイング

報酬を受け取り、基地を立ち去ろうとしているハン・ソロと、その後ろにあるYウイング。ご覧のようにコクピット・セットの右側面の前部は作られていない。上段写真とは違うR2ユニットが配置されている。

MEDAL CEREMONY

勲章授与式

本ページ：戦いが終わりハン・ソロとルークにメダルが授与された授与式。C-3POとR2-D2もピカピカに磨き直されて参加した。実際にセットに入った俳優の人数は中段左写真のように少ないが、この後マット・ペインティングの加工が施され、大規模な授与式シーンが完成した

EPISODE V
THE EMPIRE STRIKES BACK

エピソード5
帝国の逆襲

It is a dark time for the Rebellion. Although the Death Star has been destroyed,
Imperial troops have driven the Rebel forces from their hidden base and pursued them across the galaxy.
Evading the dreaded Imperial Starfleet, a group of freedom fighters led by Luke Skywalker has established
a new secret base on the remote ice world of Hoth.
The evil lord Darth Vader, obsessed with finding young Skywalker, has dispatched
thousands of remote probes into the far reaches of space....

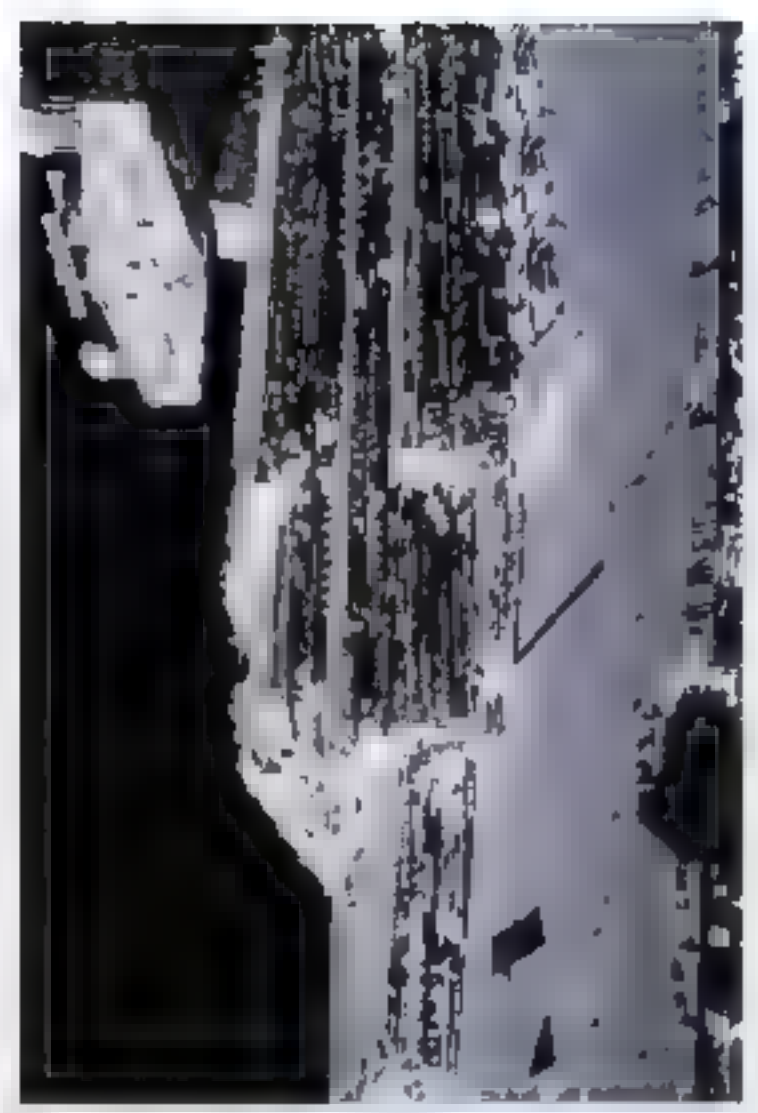
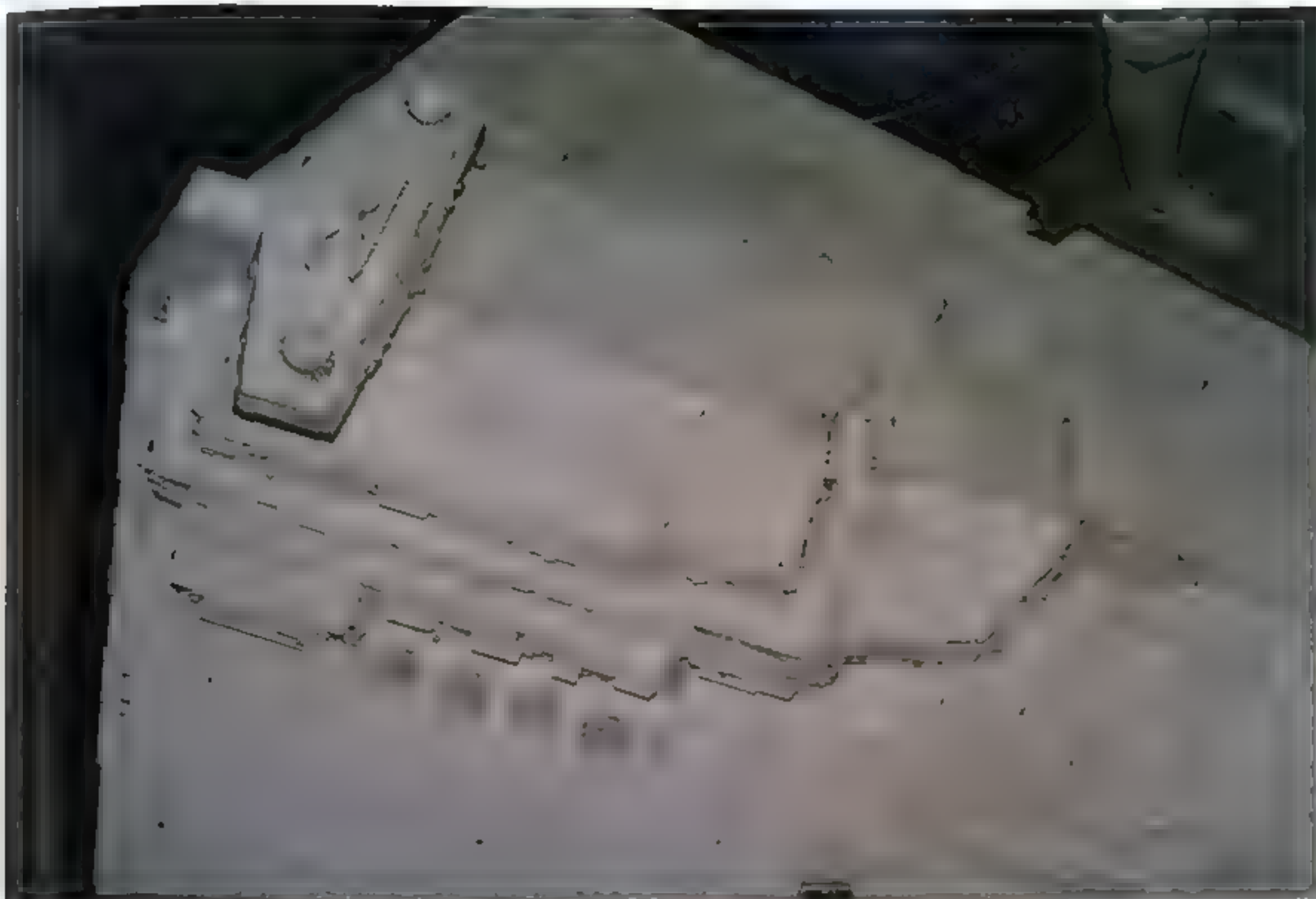
1980年、『帝国の逆襲』のオープニング・クロールで「EPISODE V」という文字が刻まれ、これは以降の全劇作品にも踏襲されるようになった。2014年以降の「CANON（正史）」の設定では、本作は映画公開時期と同様に前作の3年後の物語であることに変化はないが、反乱同盟がエコー基地を設営するまでの動き、ダース・ベイダーがルークの存在を知る経緯といった、30数年の間に発表されたスピンオフ作品からの設定はリセットされ、それらの「再設定」は2014年以降の小説やコミックに準じることになった。

本作では、ILMのリチャード・エドランドと特撮技術の雄、ブライアン・ジョンソンの指揮のもとで新たなる映像マジックが創造された。ミニチュアを作る技術や素材も発達し、光ファイバーの導入は宇宙船を巨大に見せるのに貢献した。また、このあと『ドラゴンスレイヤー』（1981年）で高い評価を得る「ゴーモーション・アニメ」の手法は雪原を走るトーントーンの撮影で試されていた。

Imperial Star Destroyer インペリアル・スター・デストロイヤー

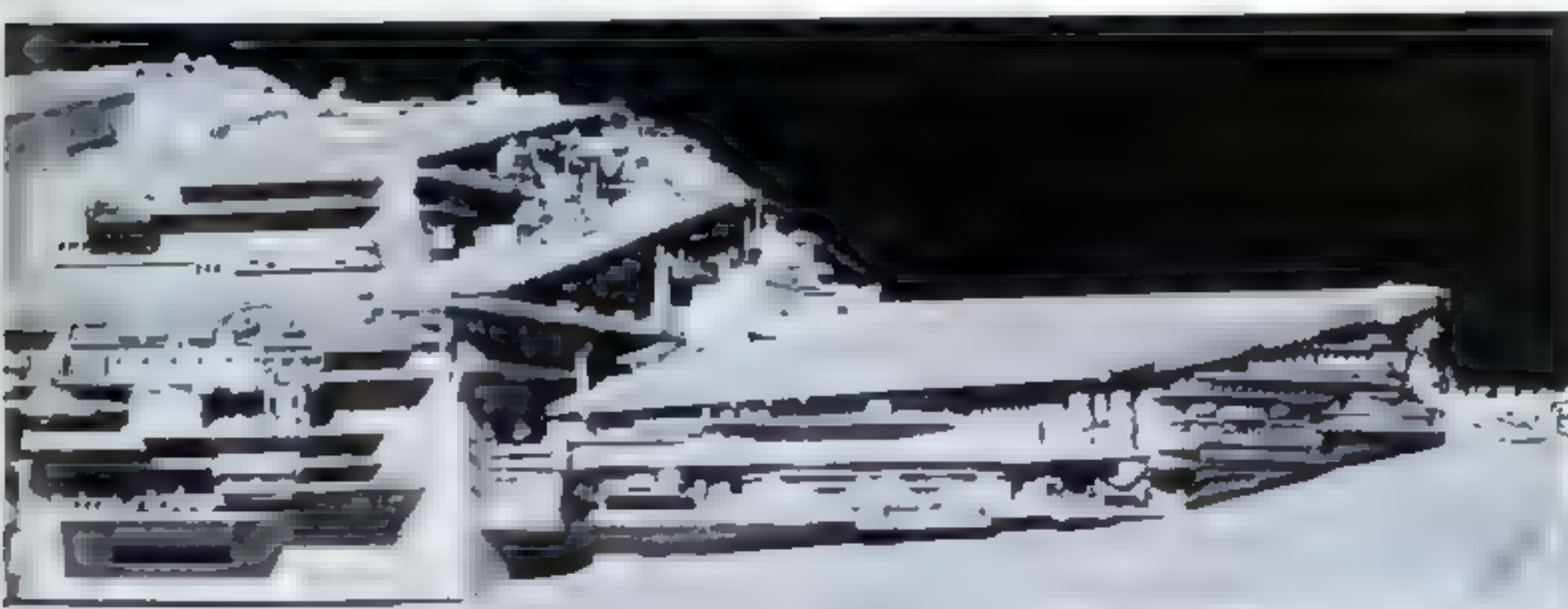
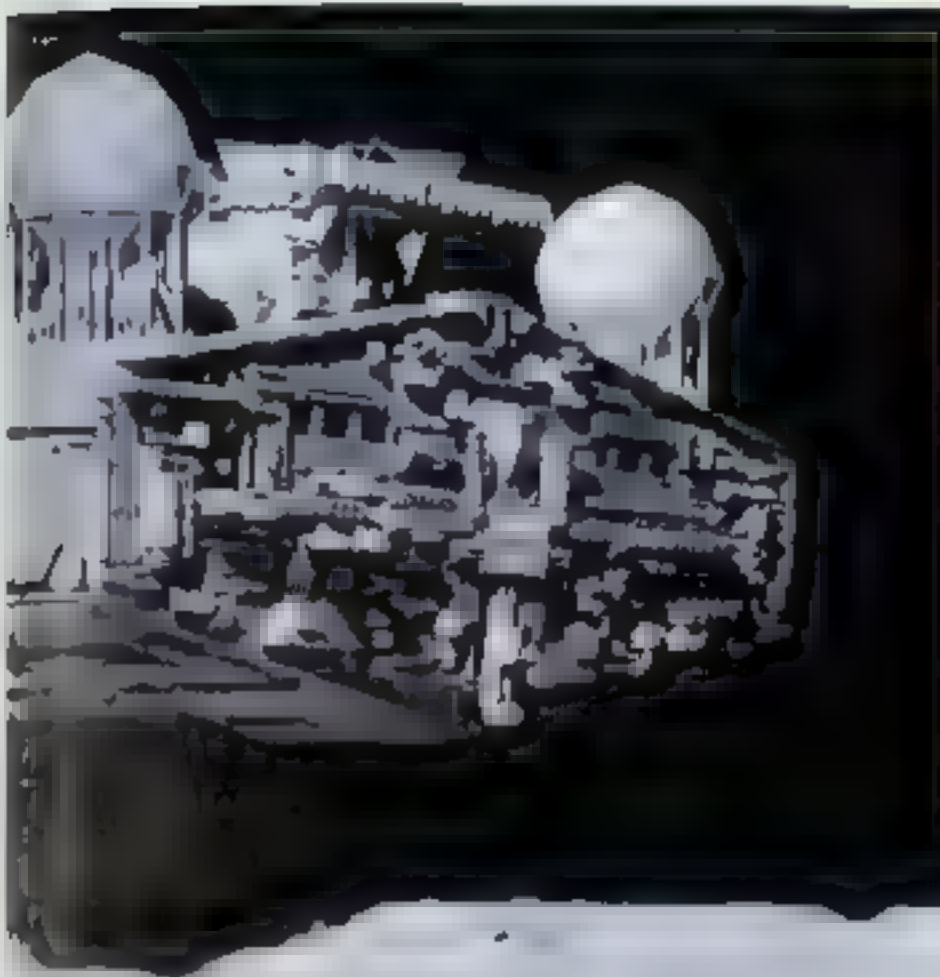
3年前、銀河帝国軍はヤヴィンの戦いで敗れたものの、その圧倒的な武力で反乱同盟軍を追い詰めていた。反乱同盟軍は秘密基地を転々としていたが、帝国はハイパースペース探査機を使って、その場所を割り出そうとしていた。この作戦において帝国軍が運用したインペリアル級スター・デストロイヤーIIは旧タイプと同様、全長1600メートル、製造元はクワット・ドライブ・ヤードであった。

1995年版『スター・ウォーズ・クロニクル』136ページに大きく掲載した写真と同アングルであるが、微妙に照明が異なる。

『エピソード5』用に、インペリアル・スター・デストロイヤーの撮影用ミニチュアは、前作の90センチの約3倍近い全長259センチの大きさで精巧に作られ、細かいディテールが加えられた。光ファイバー(光学繊維)による窓の光も前作を凌ぐカラフルなものになっていた。

『エイリアン』の仕事を終え、『エピソード5』のILMで本仕事に参加したブライアン・ジョンソン。ブライアンは本作でリチャード・エドランドと共にSFXスーパーバイザーを務めているが、彼が過去手がけていた『エイリアン』や『スペース1999』の特撮の作風を感じたというファンも少なくない。

上　艦橋部分を上から撮影した珍しい写真

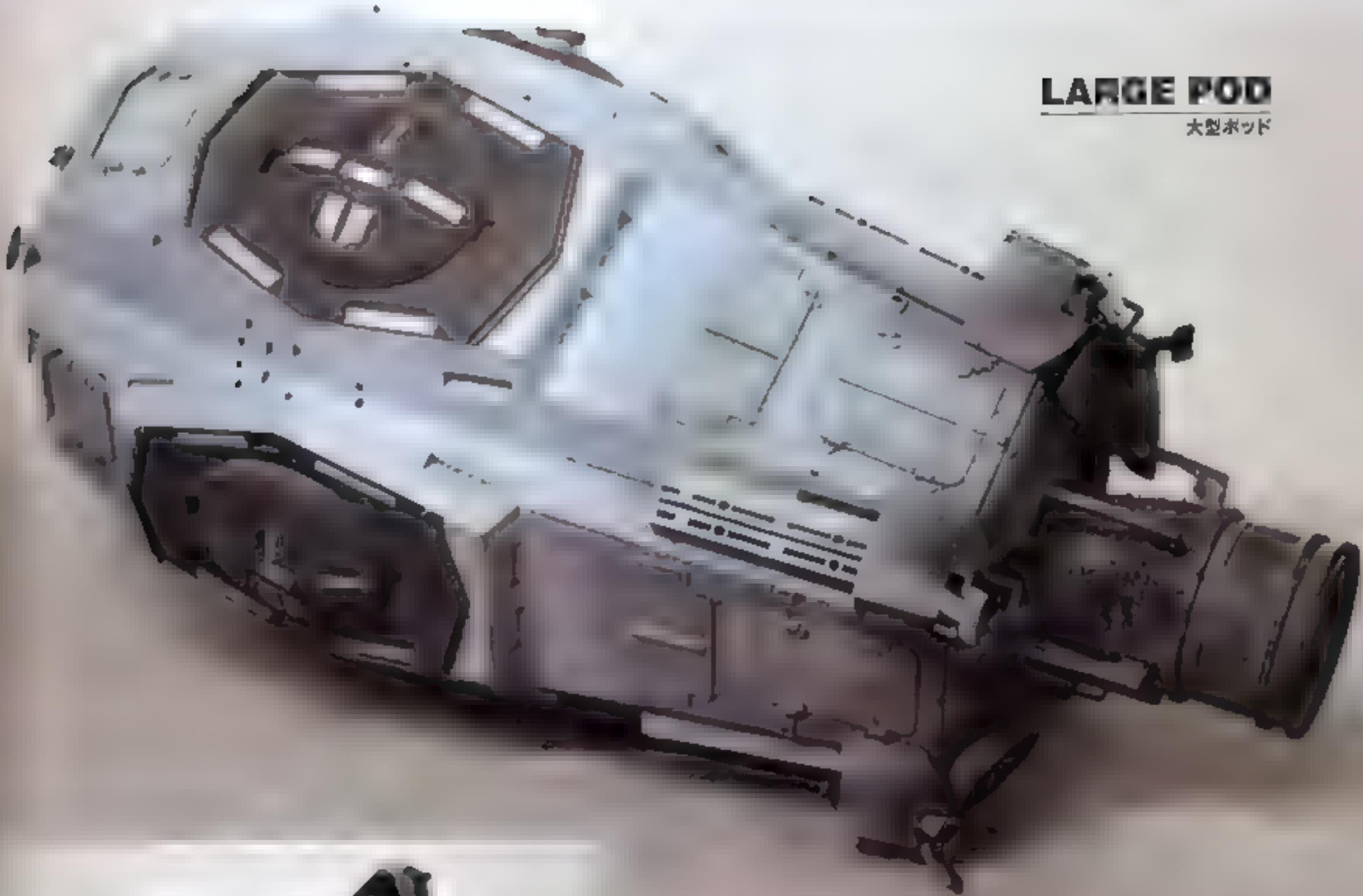
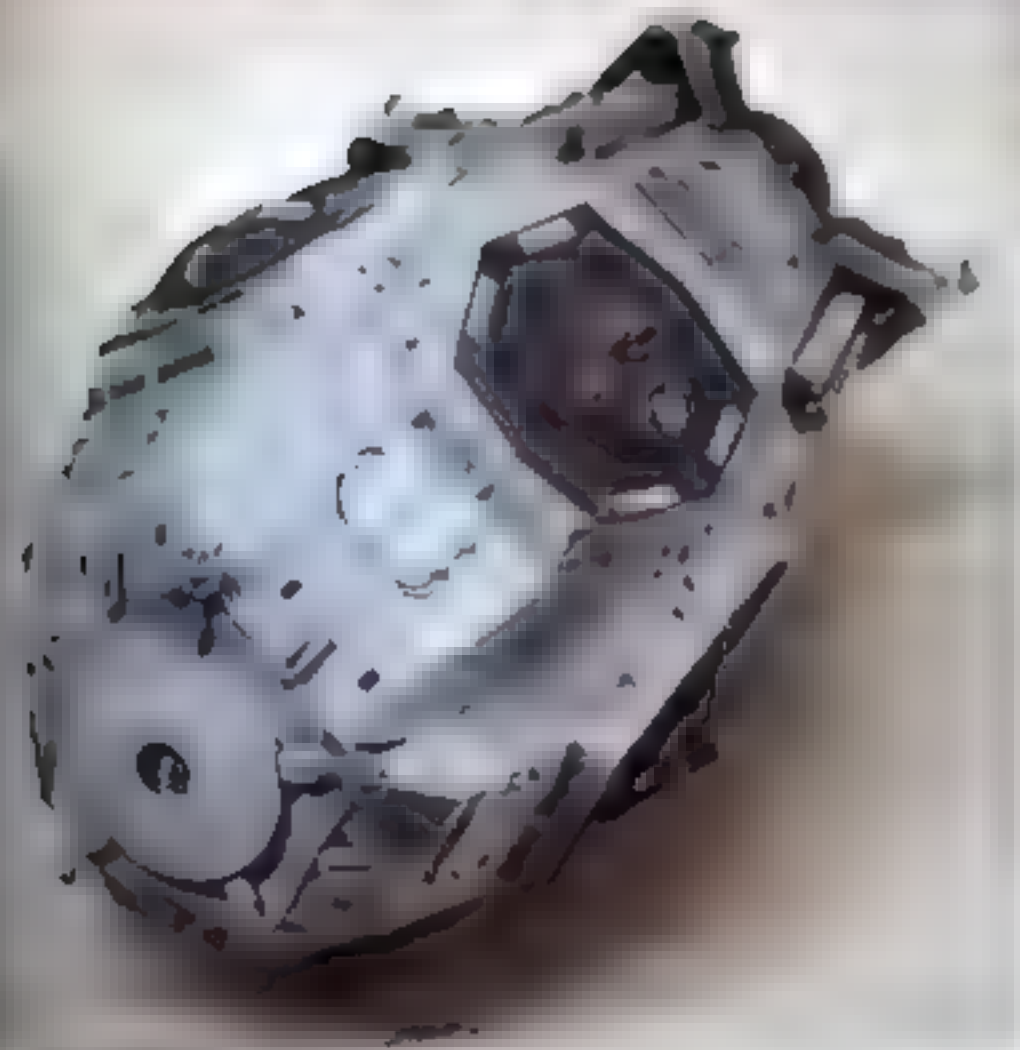
下　この写真は1995年版　クロニクル　にも掲載したものだが　本書の制作過程で大きく掲載できる写真が入手できたので　今回はノートリミングで掲載上部のドーム状のシールド　ジェネレーターにはさまれた構造物は　前作から形状が変わったのではなく　後ろに倒されただけだった

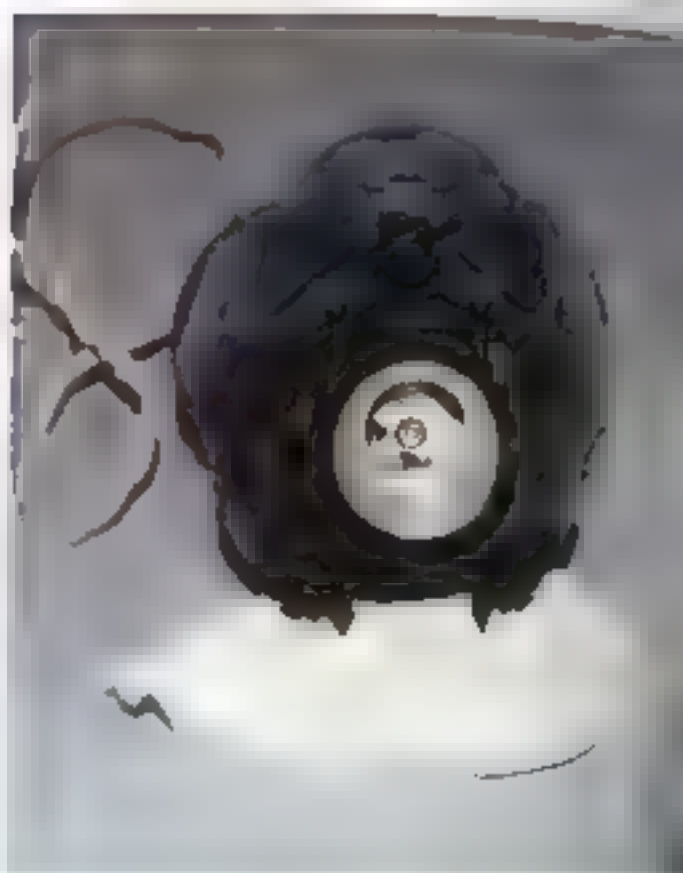
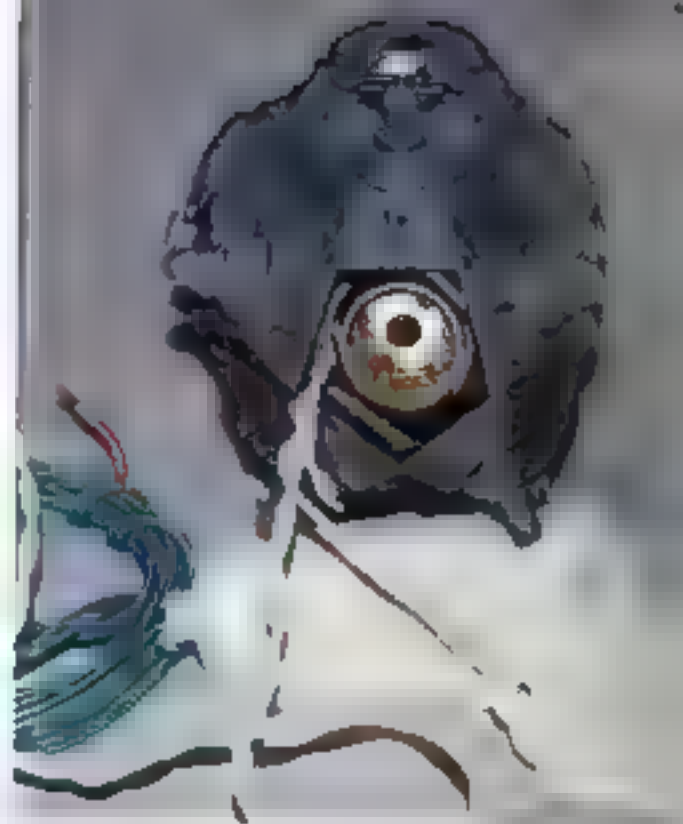
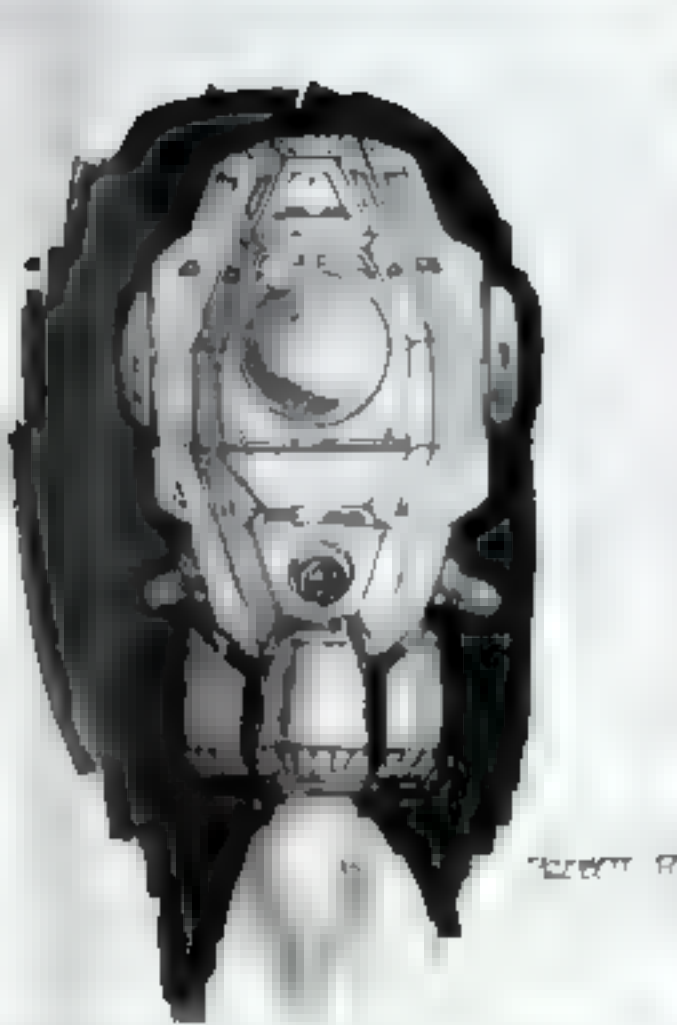
上左・上右：制作途中のミニチュア内部。白い糸のように見えるのは光ファイバーで、照明や計器を再現させるために数千本を手作業で取り付けていった。これらのファイバーを光らせるために強力なライトを仕込んだのだが、内部に熱が発生してしまい、ライトを冷やすために強力な冷却ファンも組み込まねばならなくなった。

右 遠景用に全長30センチほどの小型の真鍮製のミニチュアも作られた。これは〈エグゼクター〉のミニチュアと一緒に撮影するためでもあった。〈エグゼクター〉のミニチュアは282センチだが、これはその1/9ほどの大きさであり、モデラーのローン・ピーターソン曰く「8桁以上で、撮影当時の縮尺の設定と同じ」だったとのこと。真鍮製なのは内部に仕込んだ光ファイバーを発光させるライトの高熱に耐えられるようにするためである

Probot Hyperspace Pod プロボット用ハイパースペース・ポッド

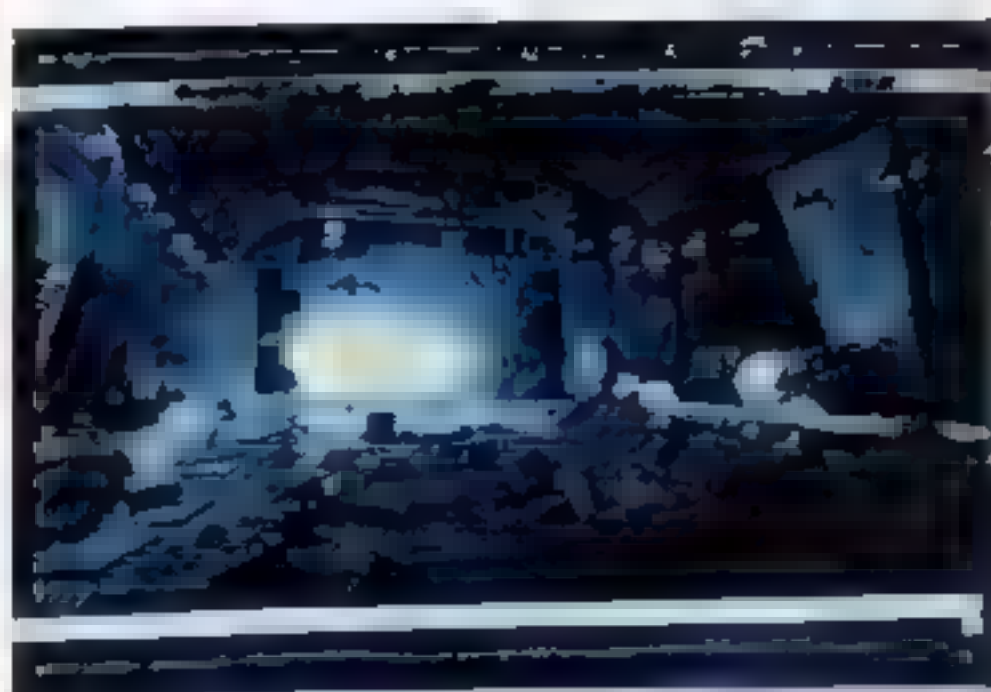
反乱同盟軍の秘密基地を探し出すため、帝国軍はプローブ（探査）・ドロイド、通称プロボットを銀河各地に放った。プロボットを運ぶカプセルはハイパースペース航行が可能なポッドであり、銀河中の生物が生息可能な星々を探査していた。全長は1メートル。製造元はプロボットと同様、アラキッド・インダストリーズ。

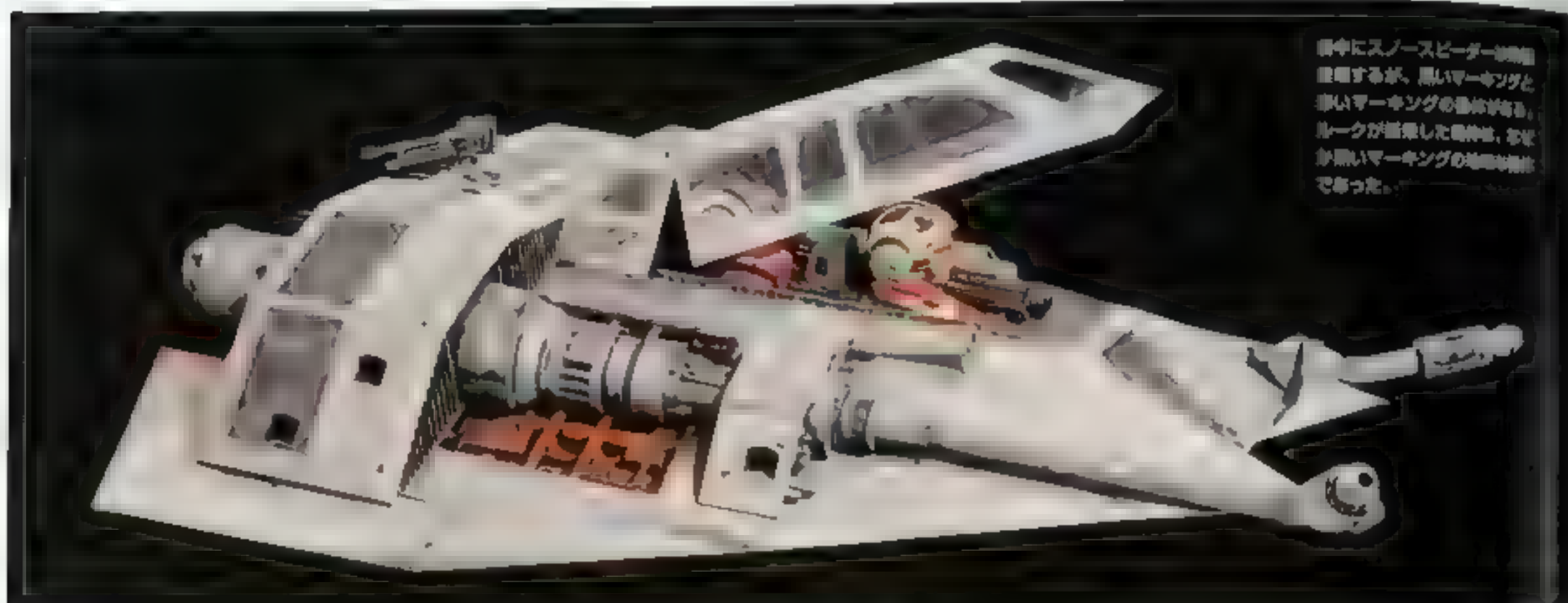
プロボット用ハイパースペース・ポッドは氷の惑星ホスにも到達し、プロボットは探査活動を開始した。

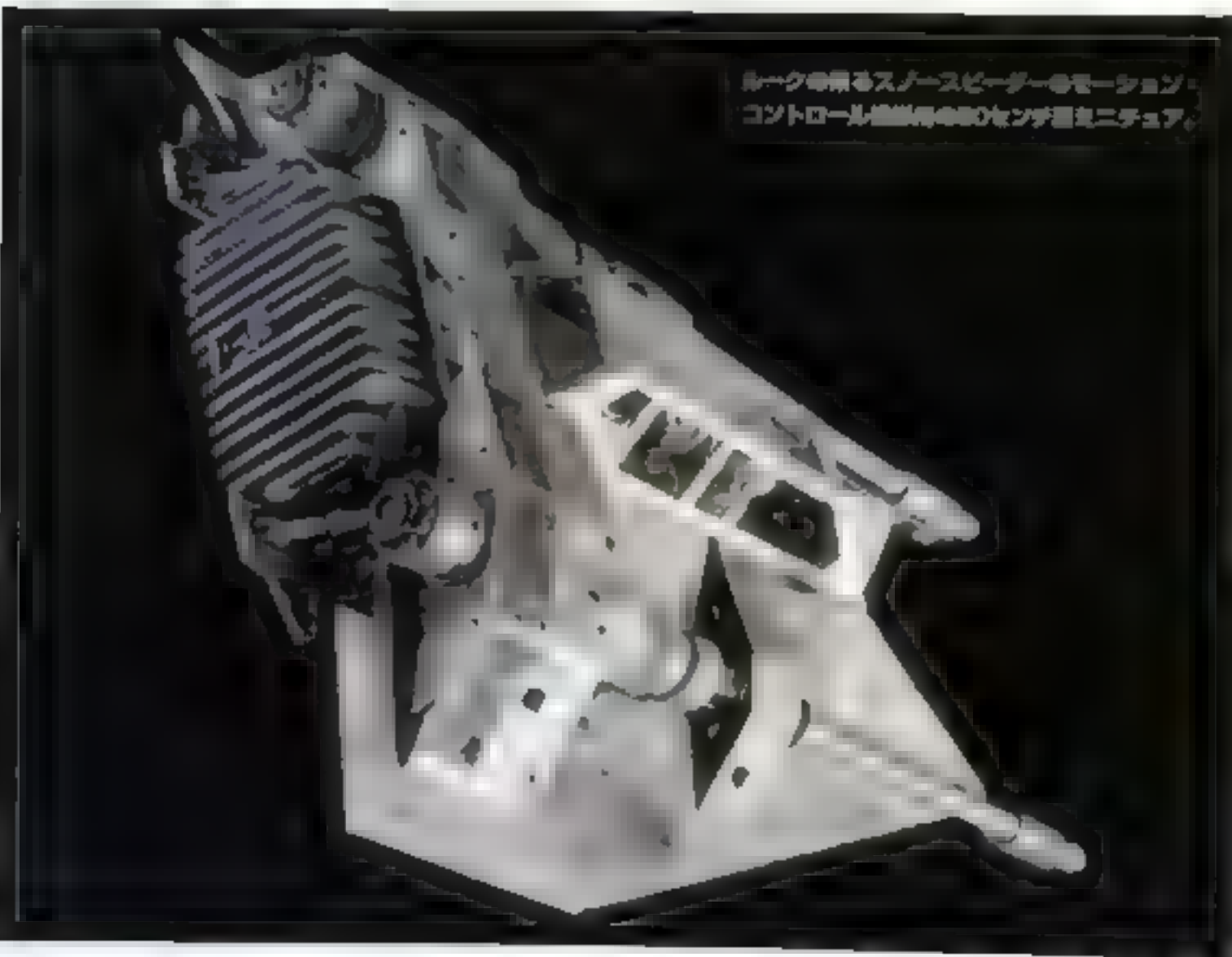
LARGE POD
大型ポッド

本作の　ィメーメヘース　ポッドの
　チュア。この　チュアは2種ある
うちのサイズの大きい方である

ポッドは形の違うものが大小2種類制作されて使用された。実はこのミニチュアは第二次大戦時のドイツ軍装甲車の模型を使って制作されており，5台分の車体上部を5角形に貼り合わせてポッドの基本形が作られた。小さい方は噴射口が光る電飾が施されている

SMALL POD
小型ポッド

本写真、右4点　右ページ　小型ポッドのミニチュアを各面から見る。各面はすべて同じ構造で作られており，このミニチュアは驚いたことに全パーツが市販の模型パーツで構成されている。右ページ中段左はポッドのデザイン画

Hoth Echo Base ホスのエコー基地

ヤヴィンの戦いの後、帝国軍宇宙艦隊の攻撃から逃れたルーク・スカイウォーカーや、プリンセス・レイア・オーガナ率いる反乱同盟軍の勇士たちは、銀河の僻方、アウター・リムのアノート・セクターに属する、氷の惑星ホスの洞窟を利用して秘密基地を設営した。彼らはさらに洞窟を拡張工事し、対大気圏外はイオン砲やシールドで、大気圏内はスノースピーダー部隊でエコー基地を防備した。しかし、帝国軍のプローブドロイドの到来を知らされたカーリスト・ライカン将軍は、エコー基地の放棄を決定し、即時避難を命じた。

本ページ、右ページ：ホスのエコー基地のセットには、ミレニアム・ファルコンやルークのXウィングに加えて、スノースピーダーの実寸大モデルもセッティングされた

Snowspeeder スノースピーダー

反乱同盟軍は惑星ホスに設営した基地において、T-47エアスピーダーをスノースピーダーに改造して運用していた。ホスは同軍空中機が飛行不能となるほどの極限的寒冷地だったが、多少の手間はかかったものの、反乱同盟軍の技術者は知恵を絞り、この問題を克服した。スノースピーダーの主な用途はパトロールや秘密基地の防衛などであった。パイロット1名と後方を向いた砲手1名の2人乗りとなっており、機体前部にレーザー砲を、機体後部に頑強な牽引ケーブル付きハープーン・ガンを装備していた。全長5.3メートル。

劇中にスノースピーダーは[illegible]登場するが、黒いマーキングと赤いマーキングの機体がある。ルークが搭乗した機体は、なぜか黒いマーキングの[illegible]であった。

上写真とこの写真は、ローグ・リーダーであるルークのスノースピーダーの78センチ模型ミニチュア。内蔵されたステッピング・モーターでパイロットの[illegible]する。

ルークの乗るスノースピーダーのモーションコントロール撮影用の80センチ模型ミニチュア。

スノースピーダーのパイロットと砲手のフィギュアは取り外し可能である

TOP VIEW

18 3/8

9 7/8"

5 1/4"

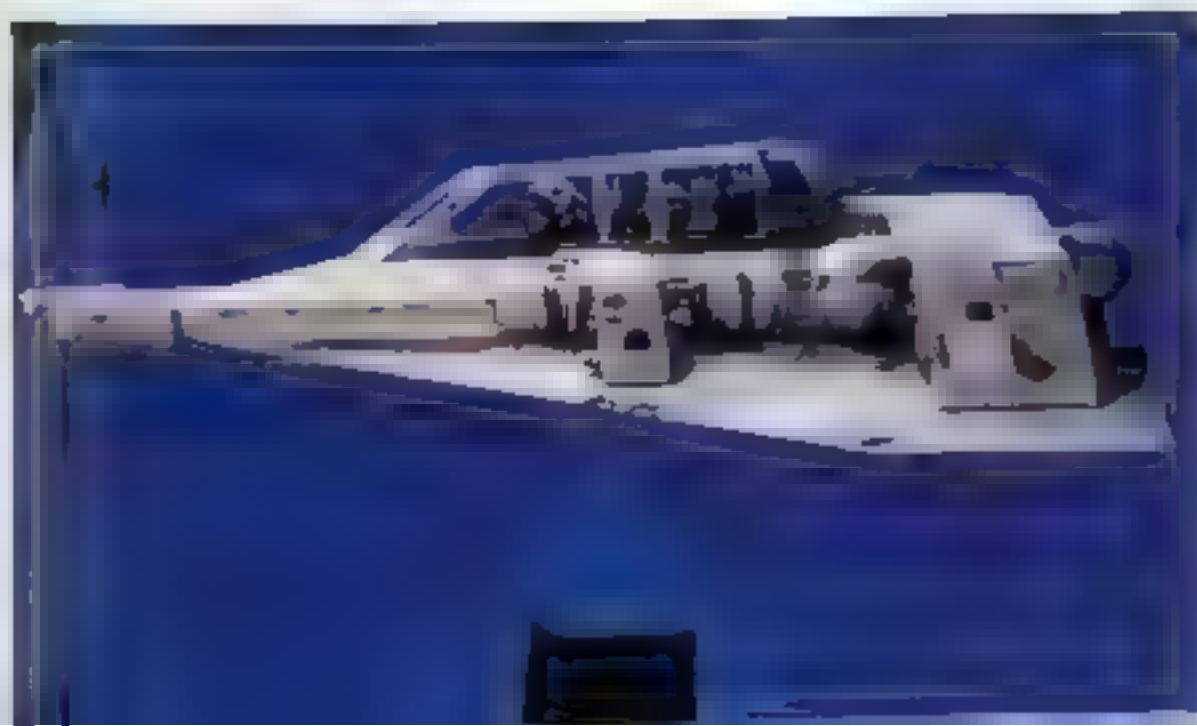
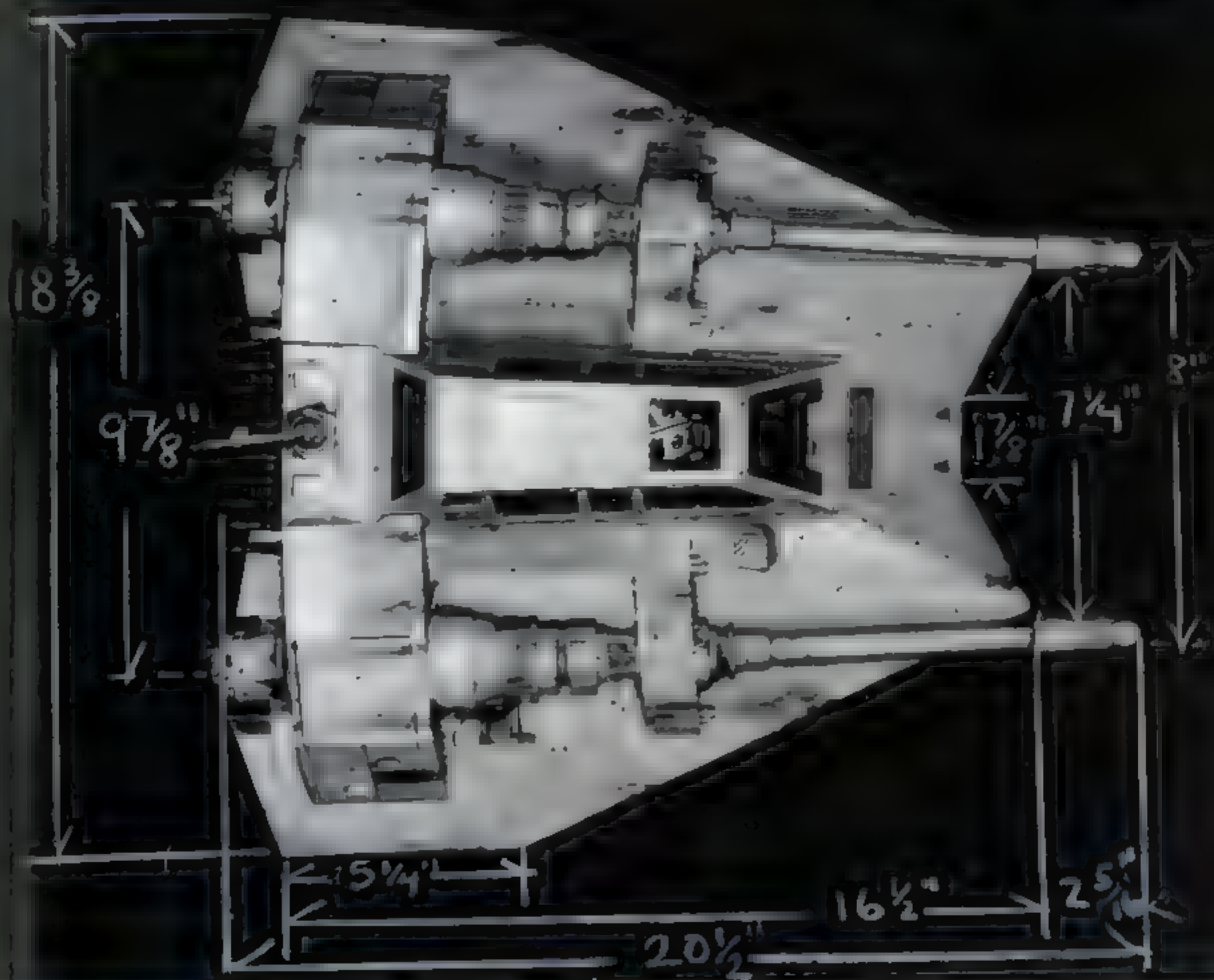
16 1/2"

2 5/16

20 1/2"

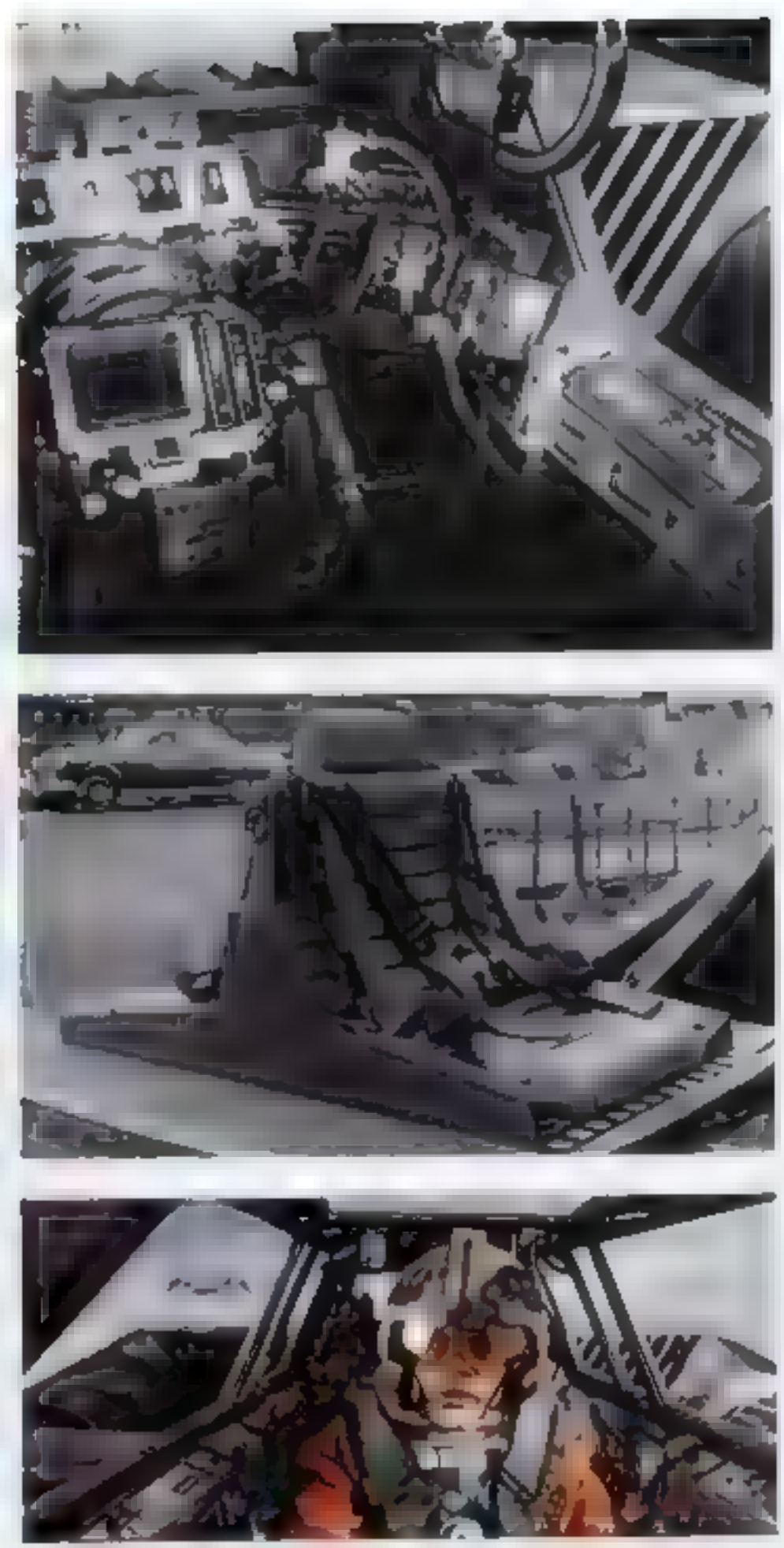
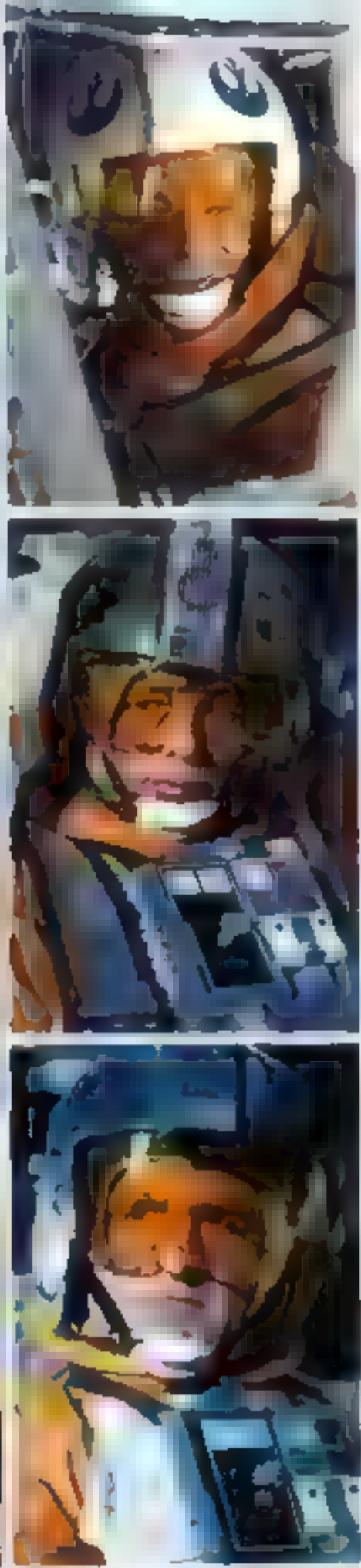
8"

7 1/4"

1 7/8"

上　ミニチュアの各部分の寸法が書き込まれた貴重なモノクロ写真

下　形状確認用のペーパーモデルと雪山のセットとのモノクロ写真

左2点　ブルーバックで撮影するためにセッティングされたスノースピーダーのミニチュア

左ページ　本ページ　スノースピーダーの実寸大モデルとローグ・リーダーのルーク・スカイウォーカーをはじめとする　ローグ中隊のパイロットや砲手の面々　スノースピーダーの実寸大モデルは6機作られた

Laser Cannon レーザーキャノン

エコー基地に配備されたレーザーキャノン、別名キャノン・スレッドは、氷の惑星ホスにおける反乱同盟軍の数少ない地上兵器だった

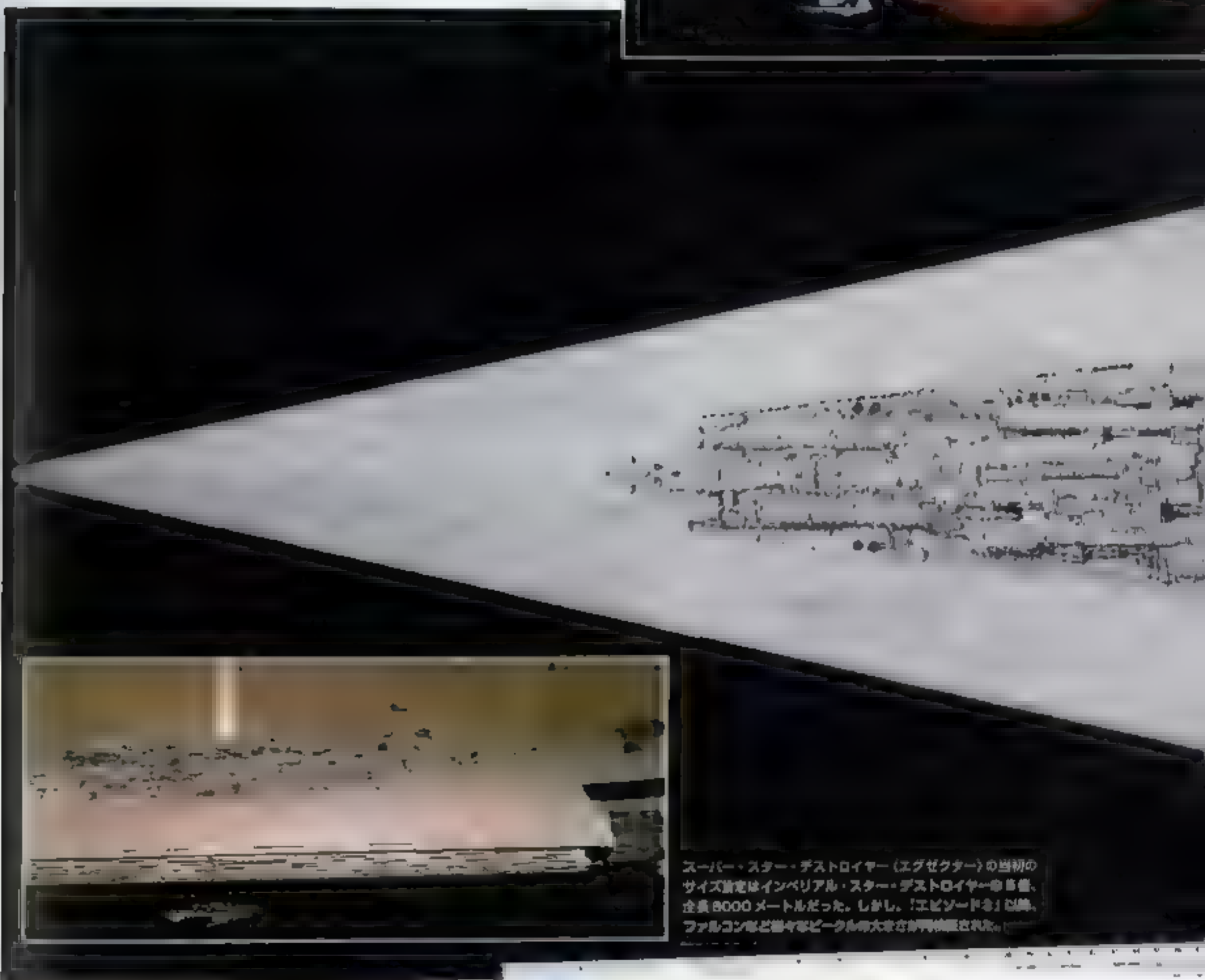
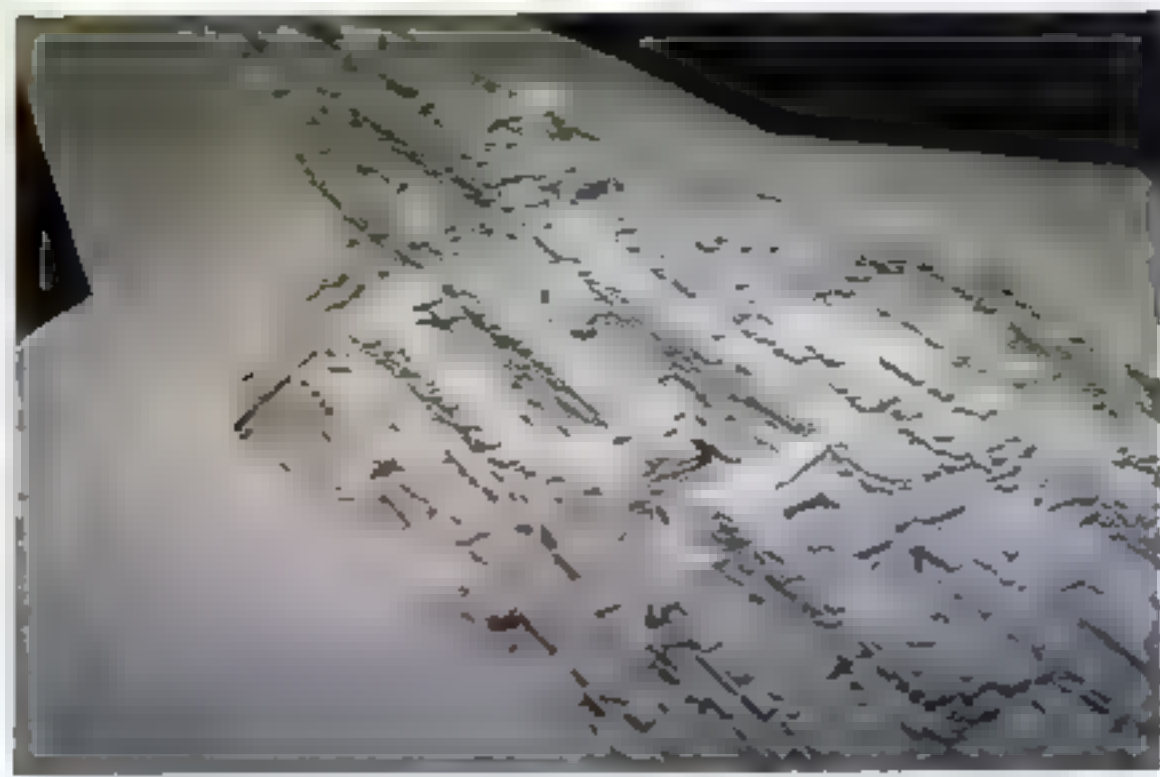
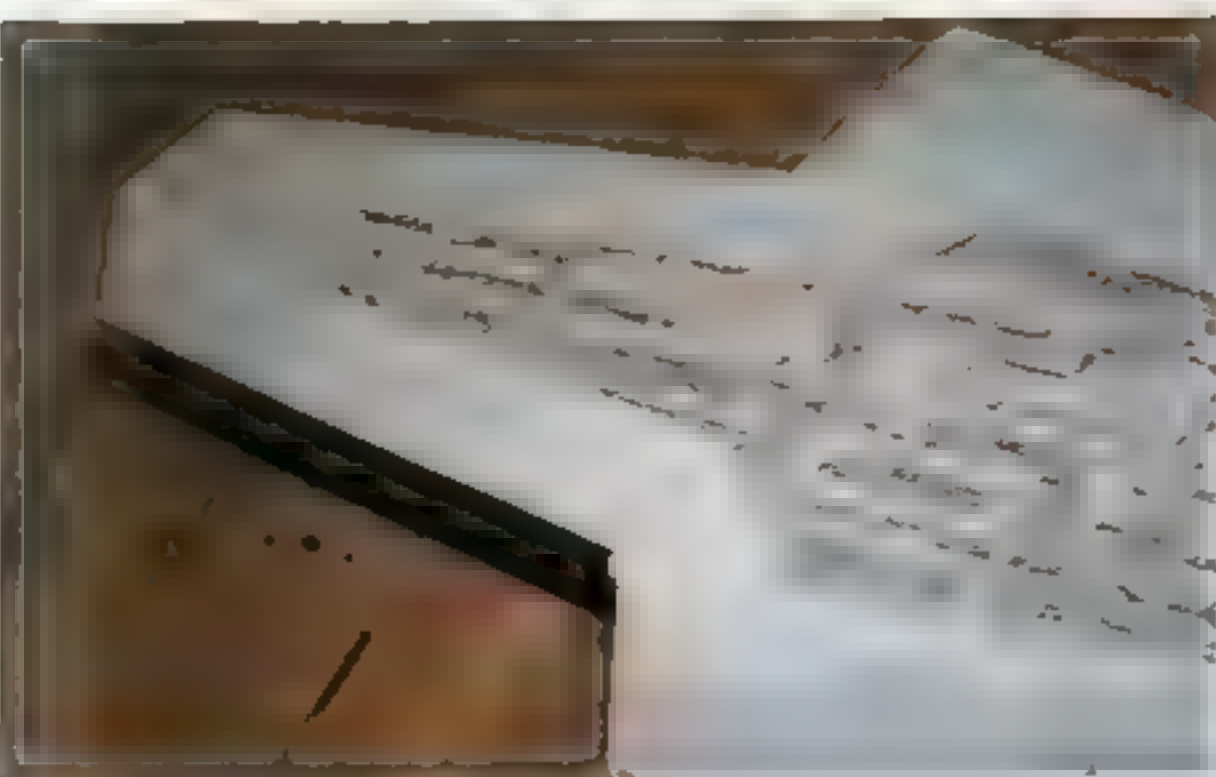
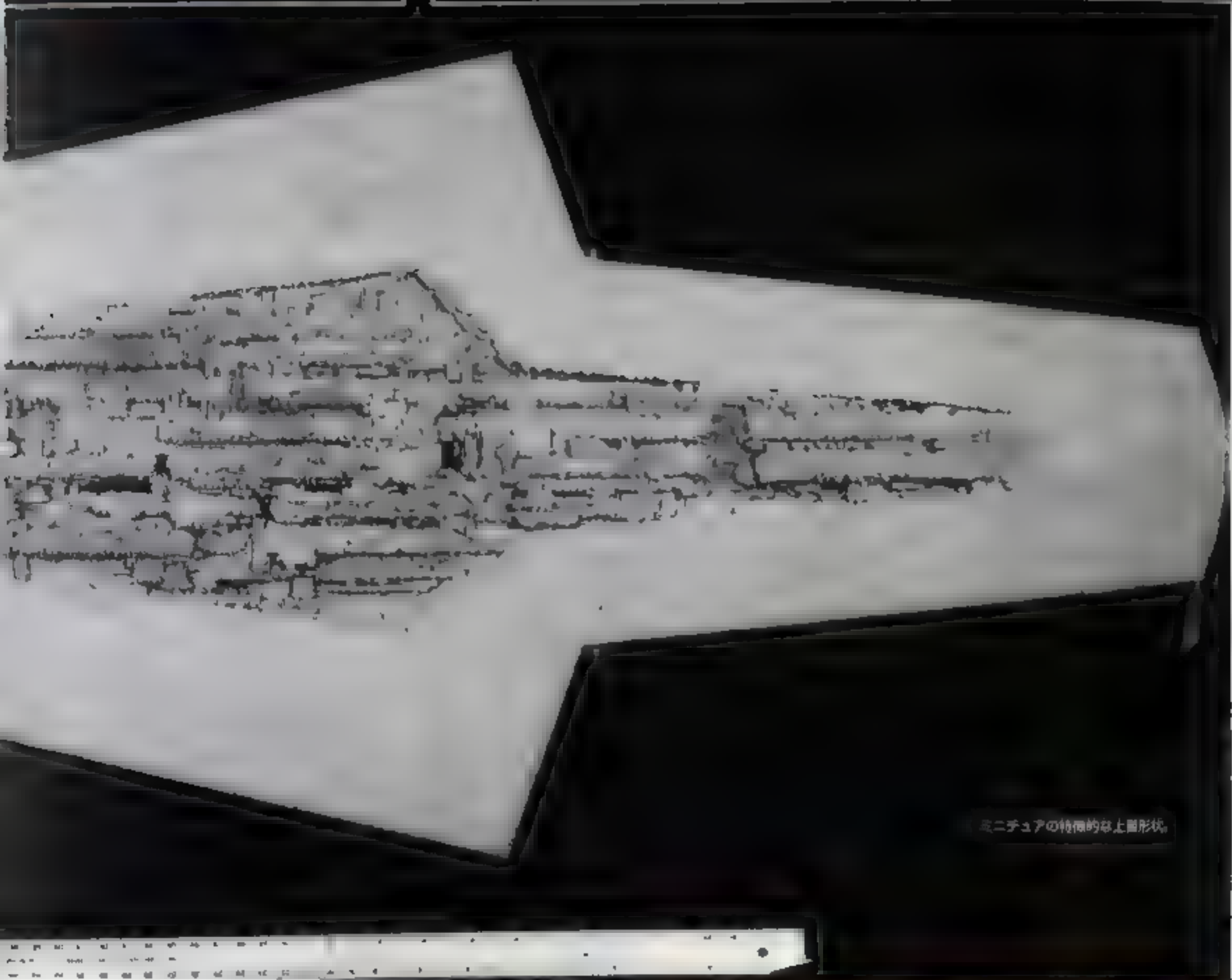
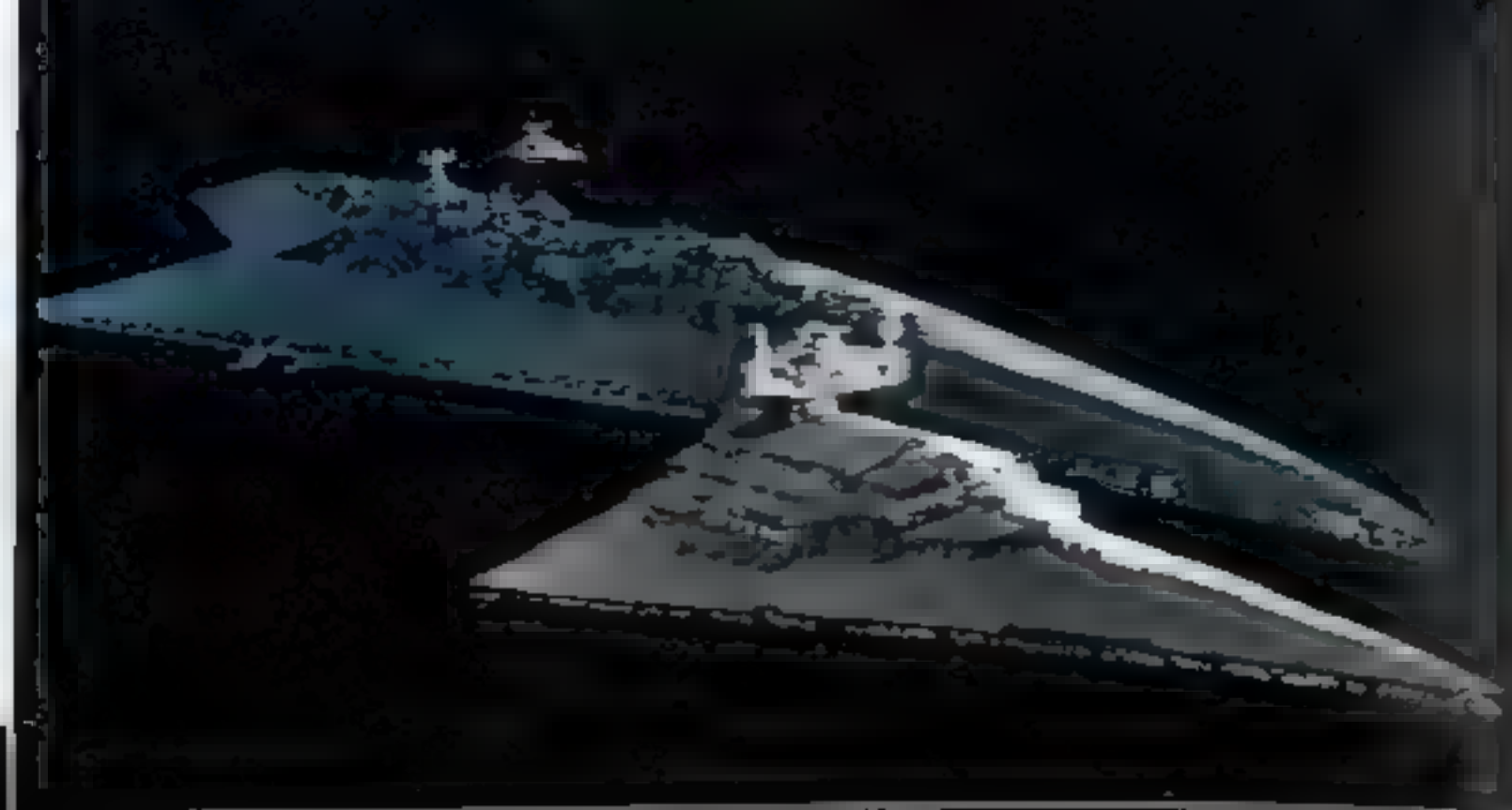
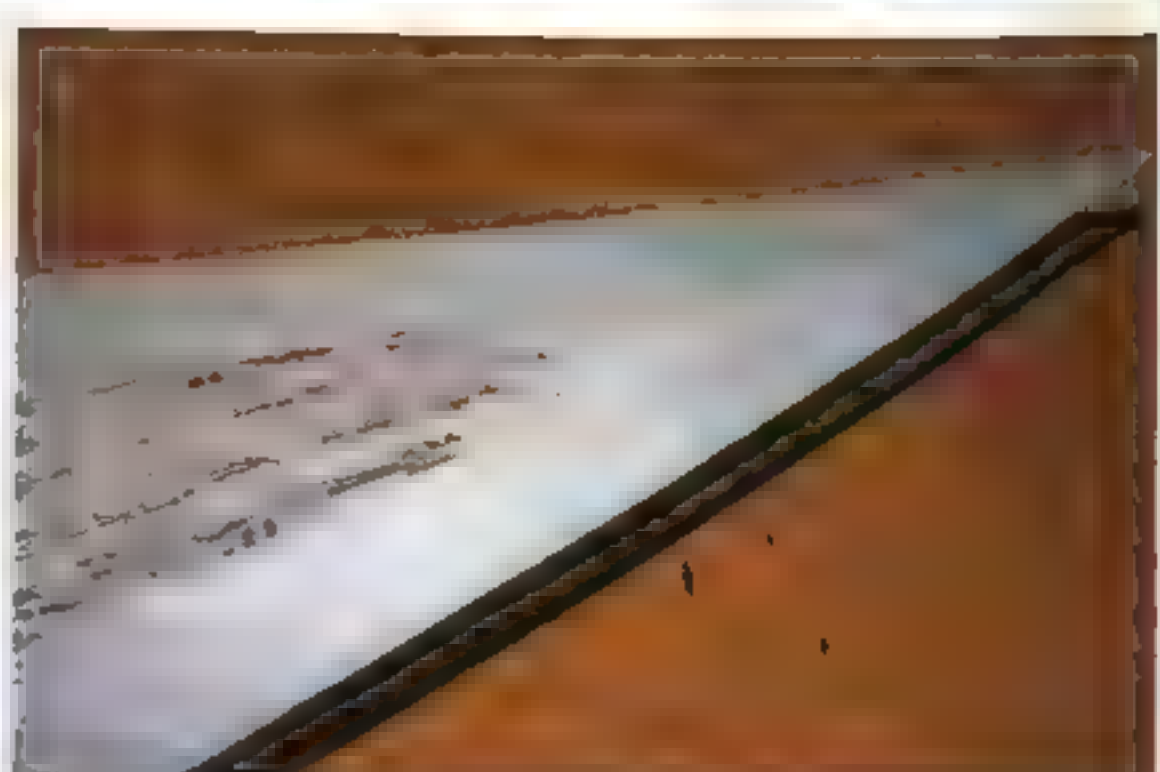
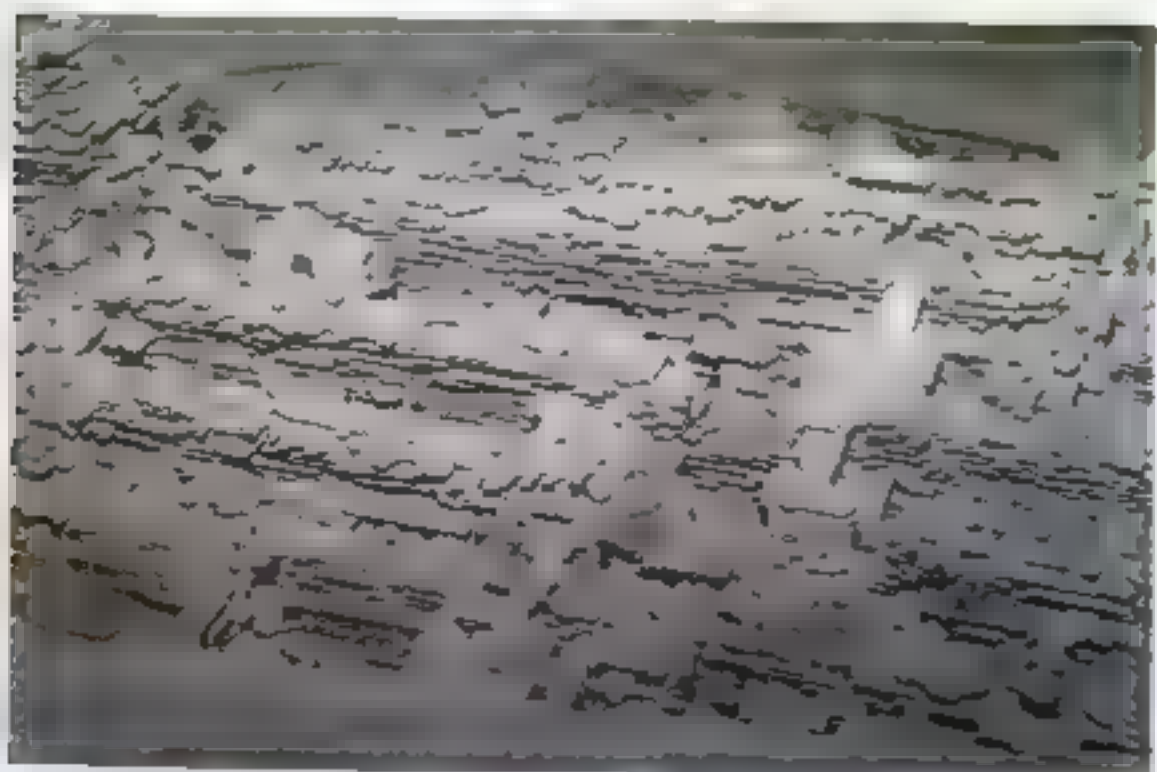
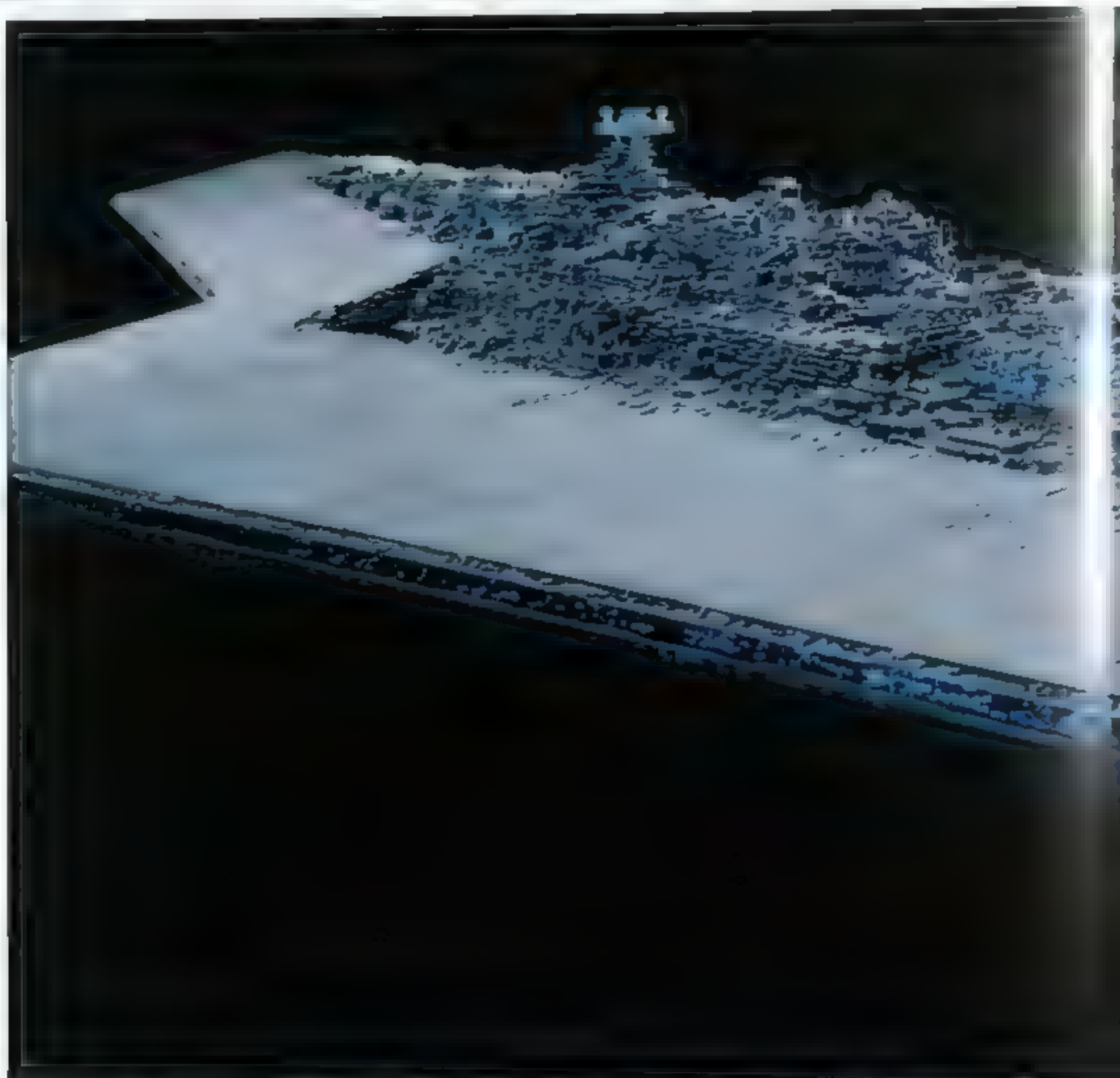
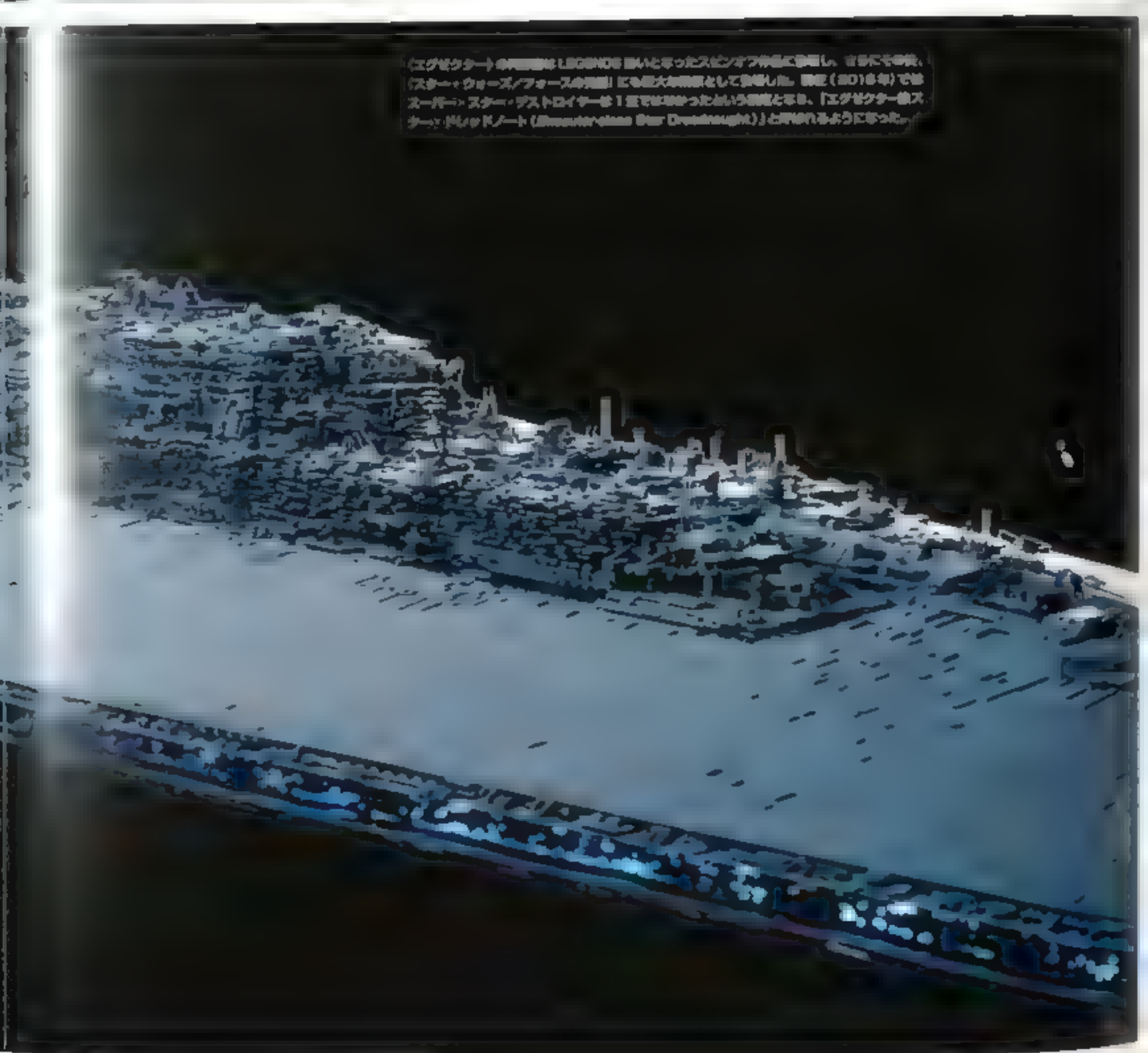
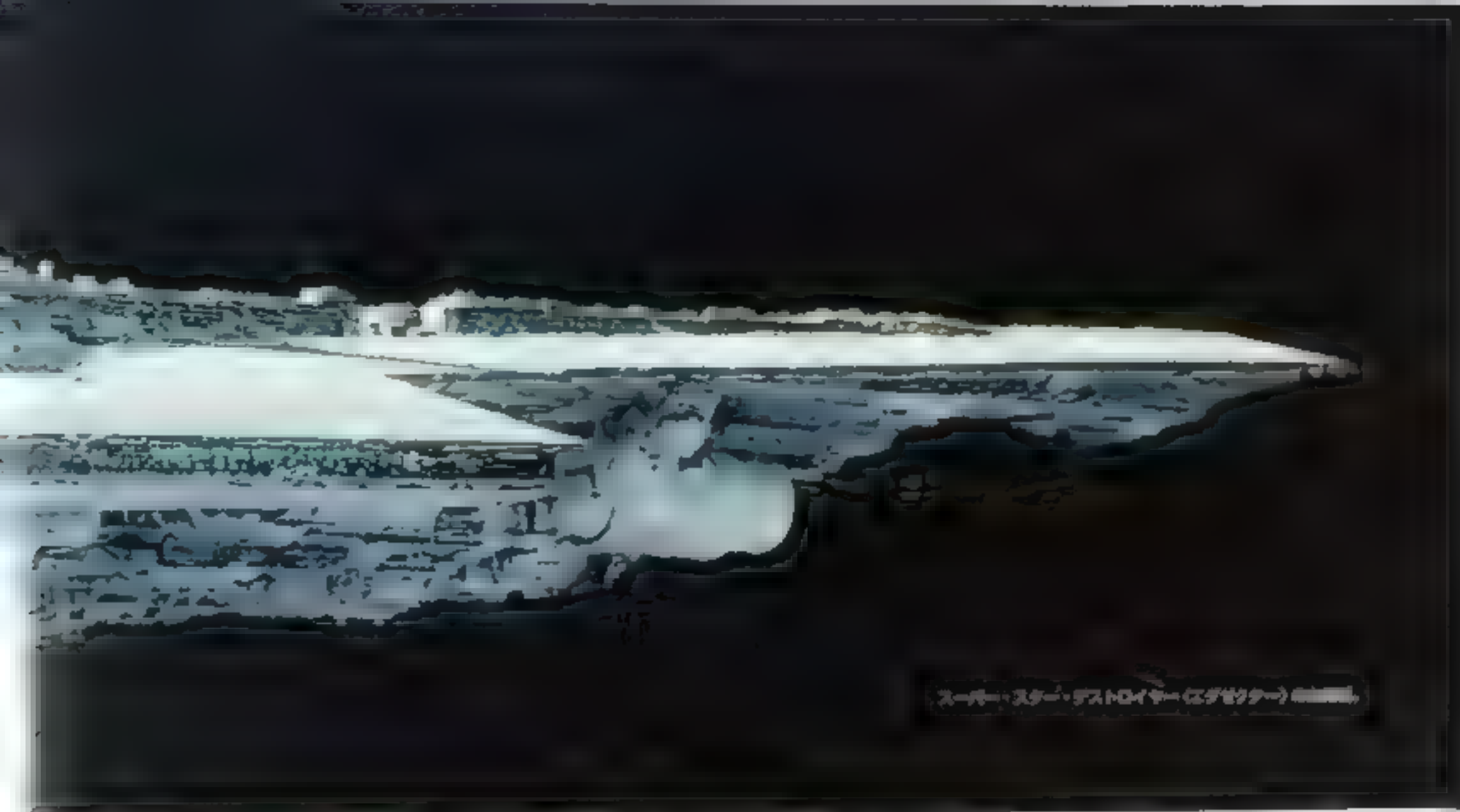
上段右 ノルウェーの雪上での貴重なショット

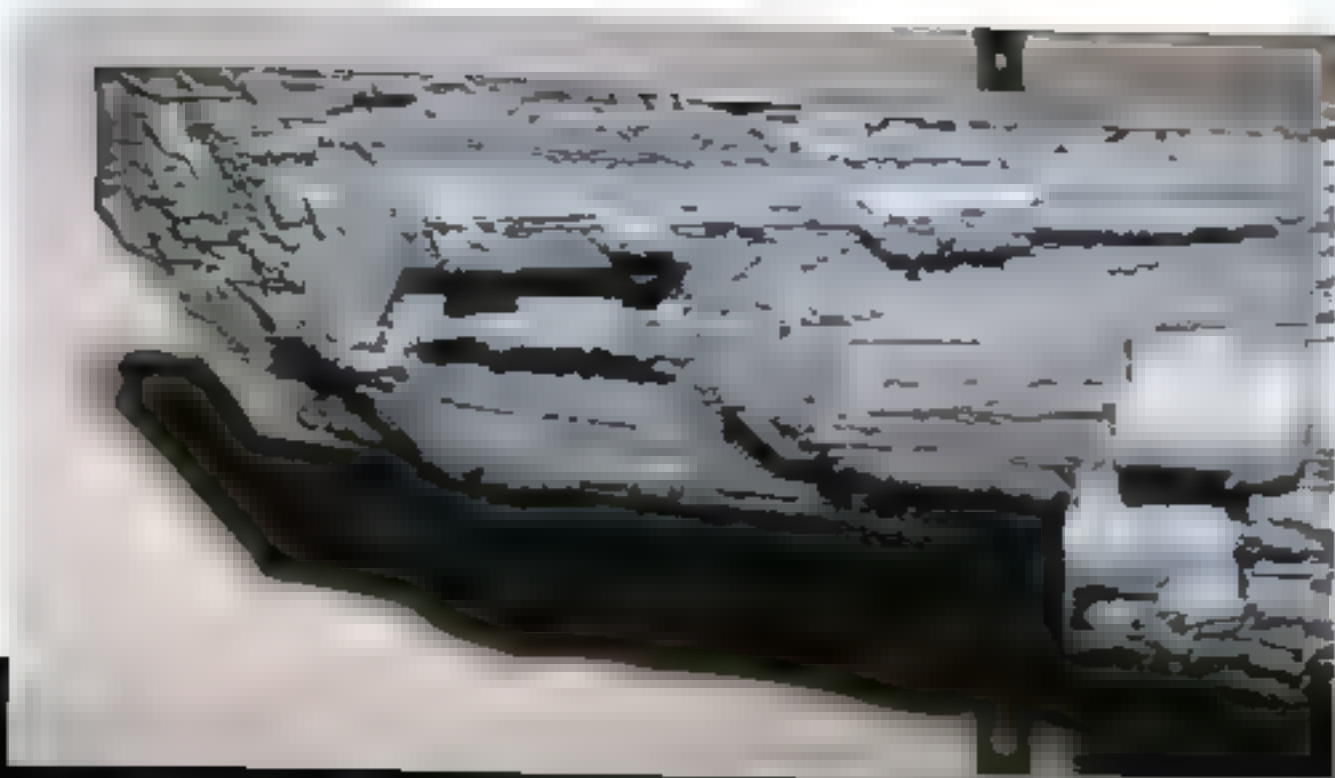
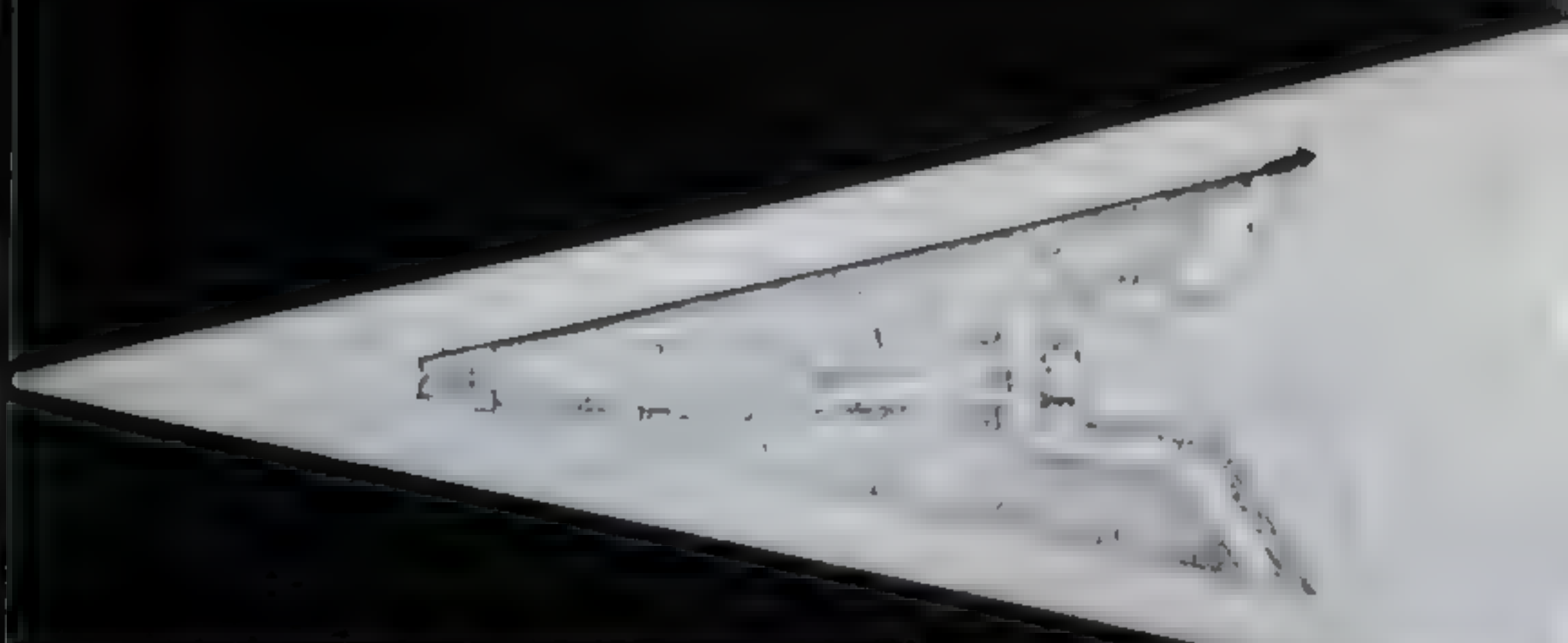
上左 完成画面の左側にレーザーキャノンの姿が[illegible]。

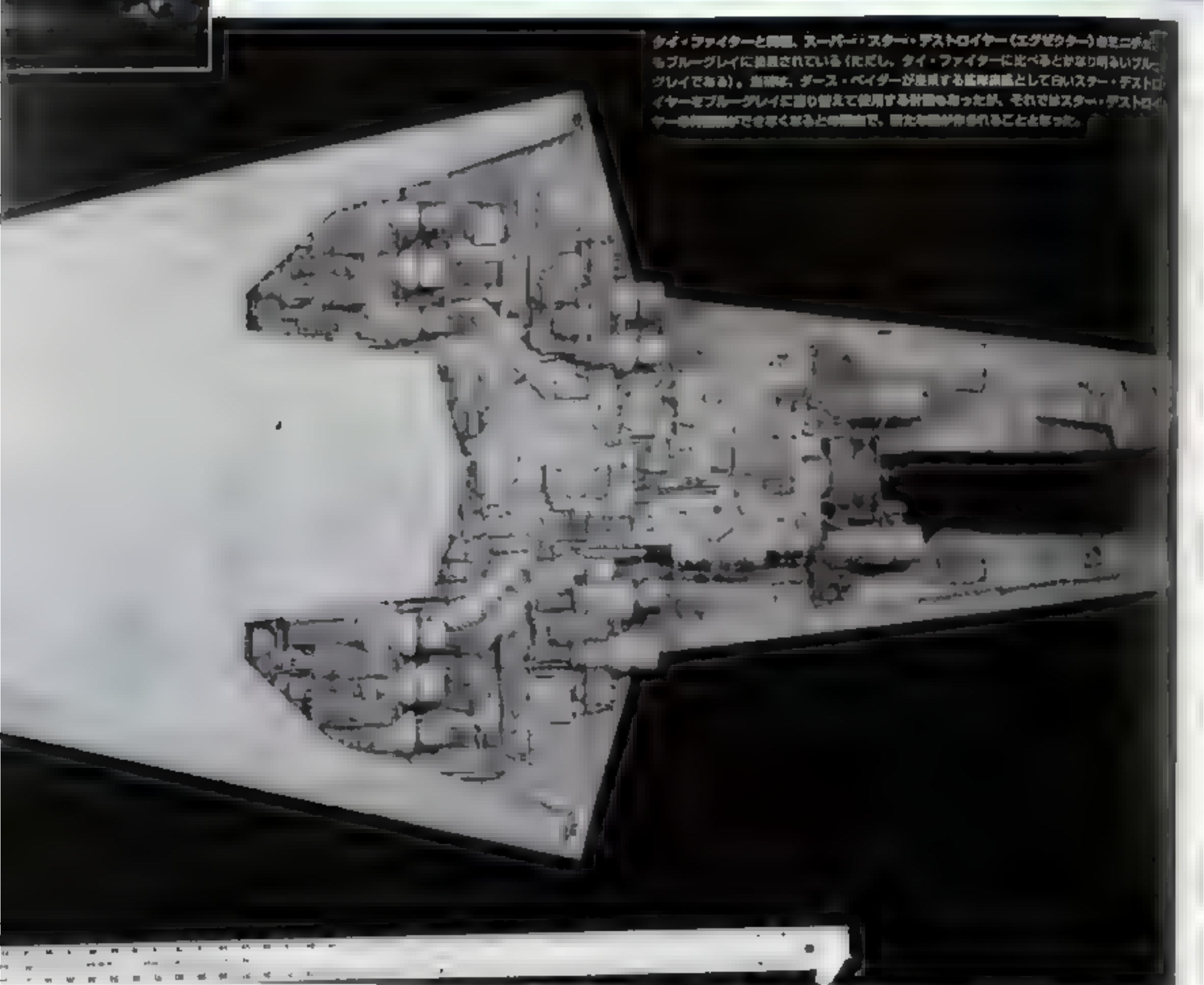
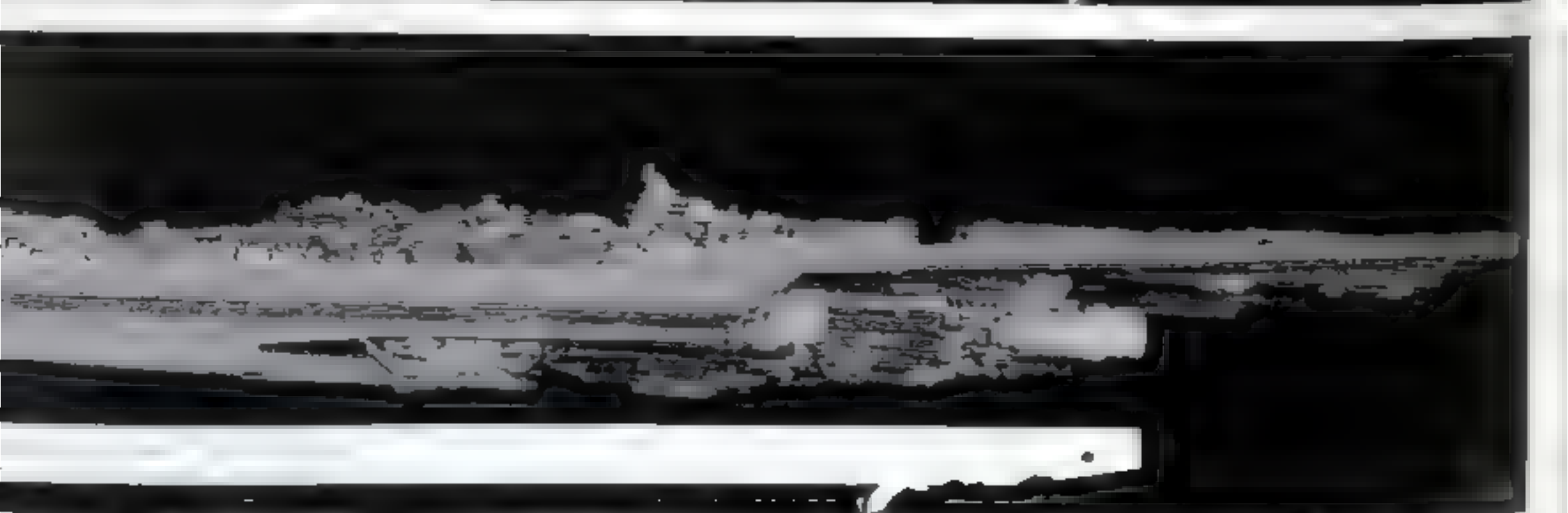
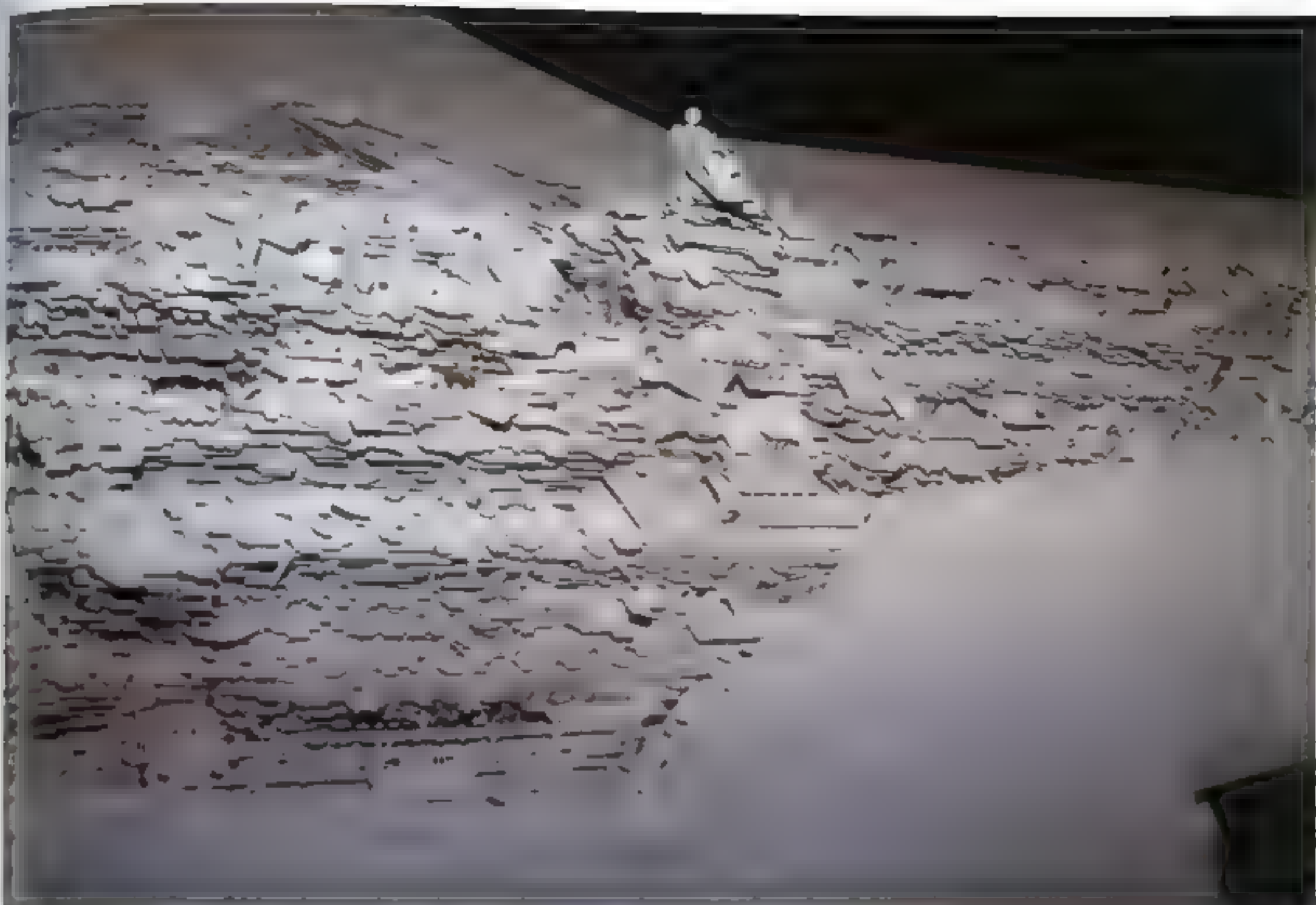
上2点 ルーク・スカイウォーカーが砲座に座ってキャノンを操作している宣伝用写真

「キャノン・スレッド(CANNON SLED - PROP)」と書かれた図面には「© 1978 Chapter III Productions Ltd.」「EPISODE II」とスタンプが押されている[illegible]。

Executor エグゼクター

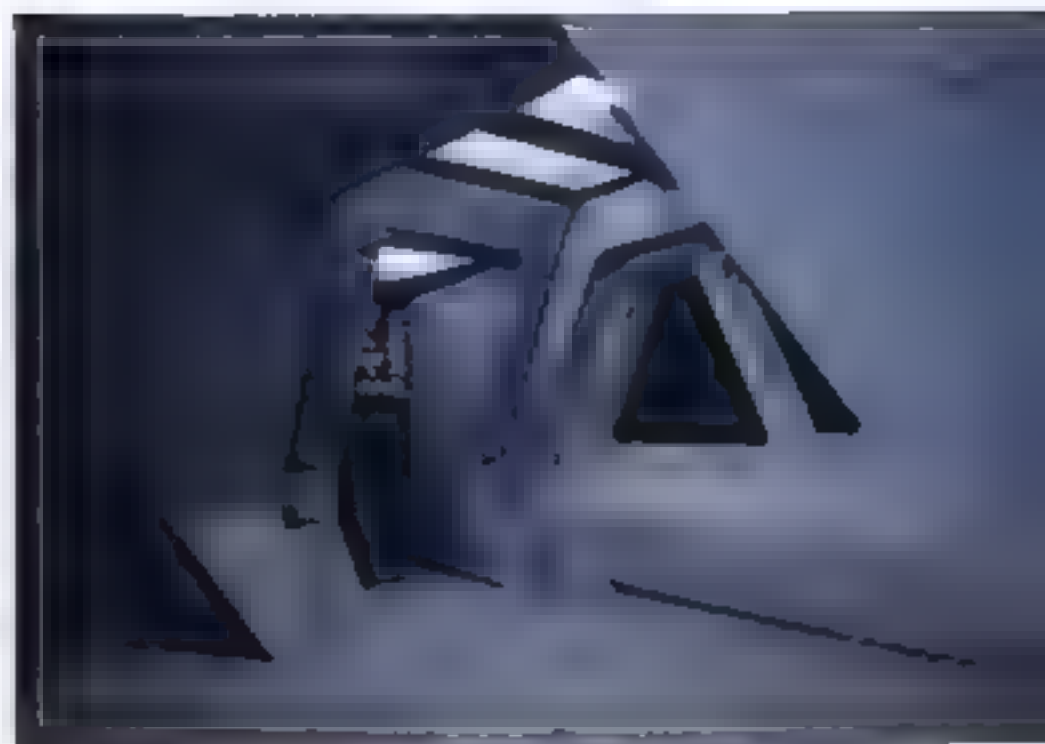
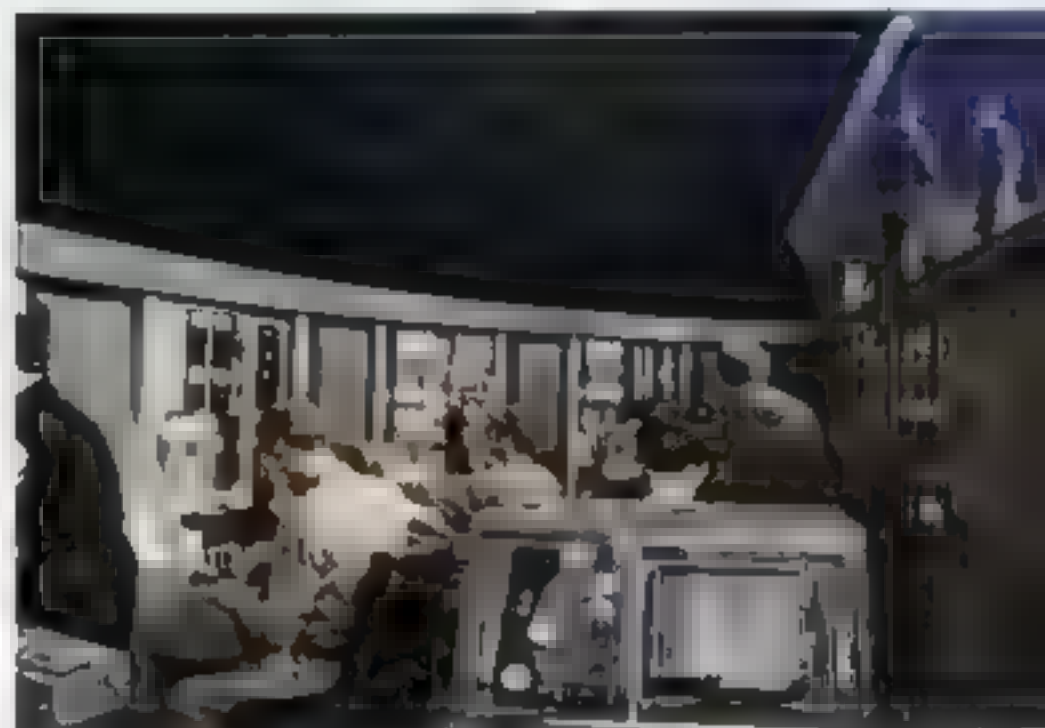
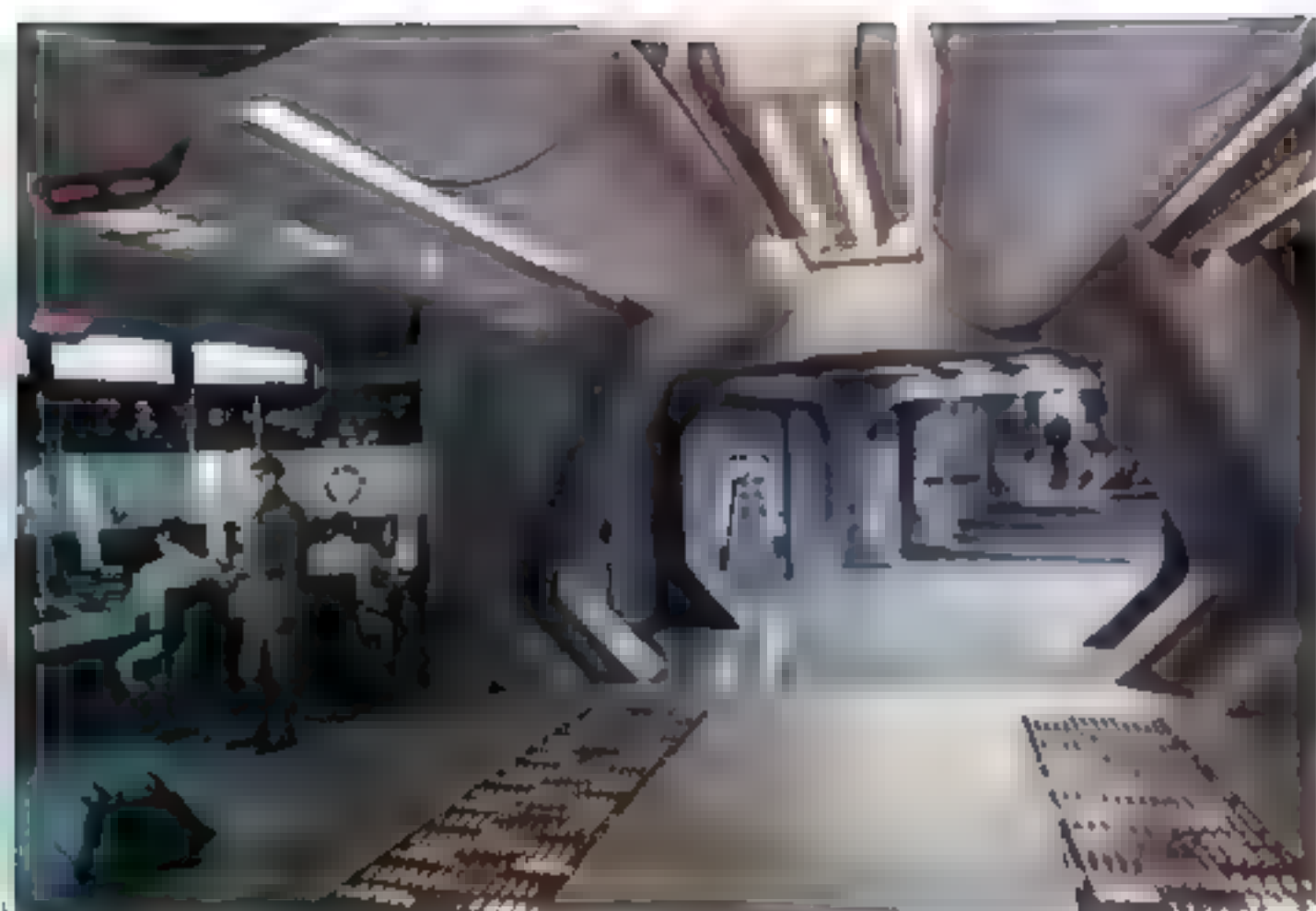
ダース・ベイダーが座乗するスーパー級スター・デストロイヤーの〈エグゼクター〉(エグゼキューター)は、デス・スコードロンを率いて、ホス星系に近づいた。ハイパースペースを抜けるのを反乱軍に察知された罪により、ベイダーはオッゼル提督をフォースで処刑したのち、ピエット艦長が提督に昇進し、本艦の指揮を引き継いだ。製造元は、インペリアル級スター・デストロイヤーと同様、クワット・ドライブ・ヤード。全長19000メートル。

スーパー・スター・デストロイヤー〈エグゼクター〉の当初のサイズ設定はインペリアル・スター・デストロイヤーの5倍、全長8000メートルだった。しかし、『エピソード5』以降、ファルコンなど様々なビークルの大きさが再検証された。

ミニチュアの特徴的な上面形状。

〈エグゼクター〉の同型艦はLEGENDS扱いとなったスピンオフ作品に登場し、さらにその後、『スター・ウォーズ/フォースの覚醒』にも巨大な残骸として登場した。現在（2016年）では、スーパー・スター・デストロイヤーは1隻ではなかったという設定となり、「エグゼクター級スター・ドレッドノート（Executor-class Star Dreadnought）」と呼ばれるようになった。

スーパー・スター・デストロイヤー〈エグゼクター〉の[illegible]

船体の構造物は凹凸にカットできる工具をスタッフが自作し、薄いプラスチック断を切り出して何層にも積み上げて作られた。さらに市販の艦船プラモデルのパーツを大量に貼り付けてディテールが作り込まれた。

スーパー・スター・デストロイヤー〈エグゼクター〉の下部と、上写真2点は下部エンジン部分のディテール。

当時のモノクロ写真の圧縮原稿を1980年当時のゼロックスでコピーした写真資料。〈エグゼクター〉の後面をとらえている。

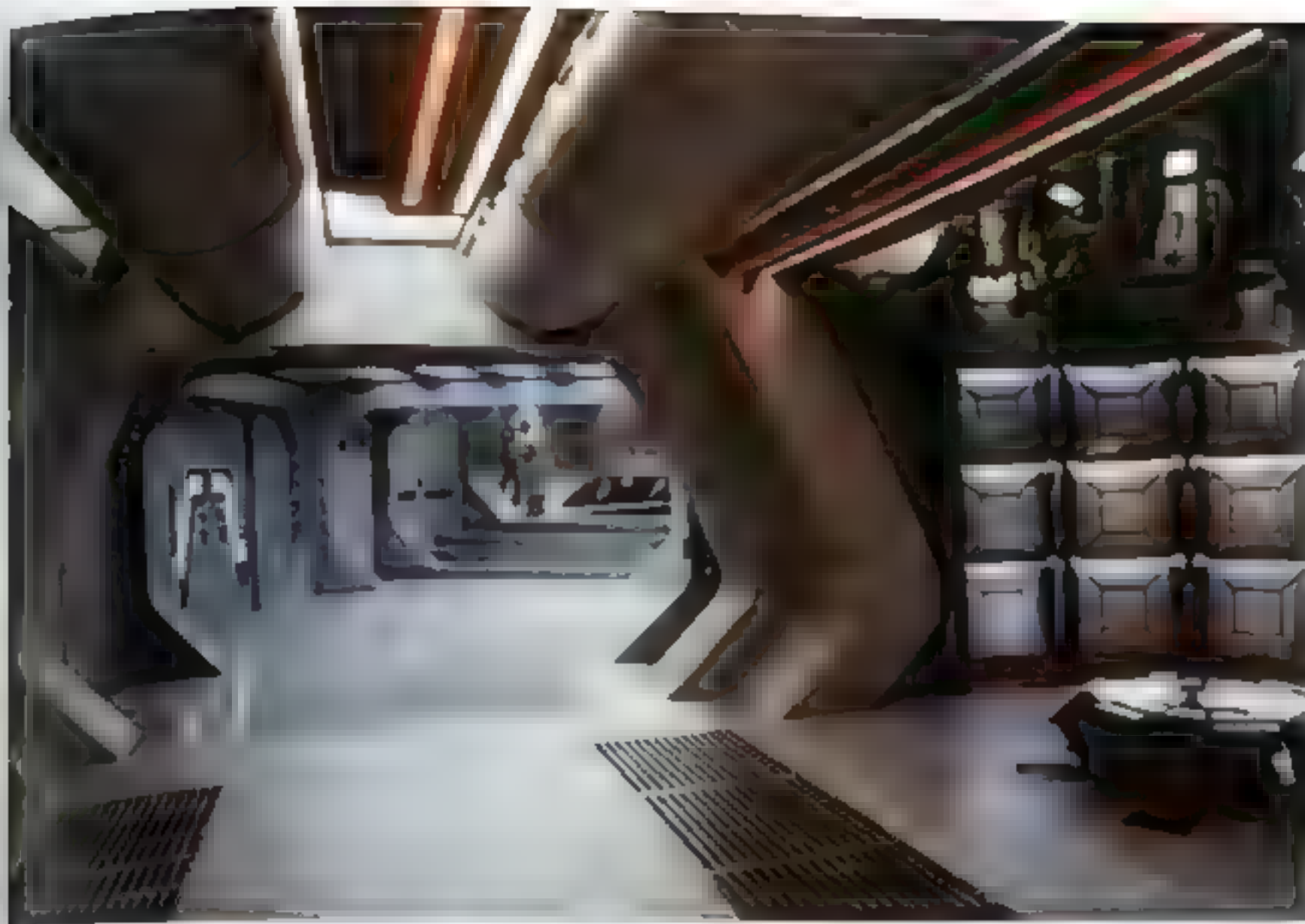
ミニチュアの全景、別ショット。

上 スーパー・スター・デストロイヤー〈エグゼクター〉のミニチュアの艦橋周りのディテール
艦橋自体はインペリアル・スター・デストロイヤーと全く同じである

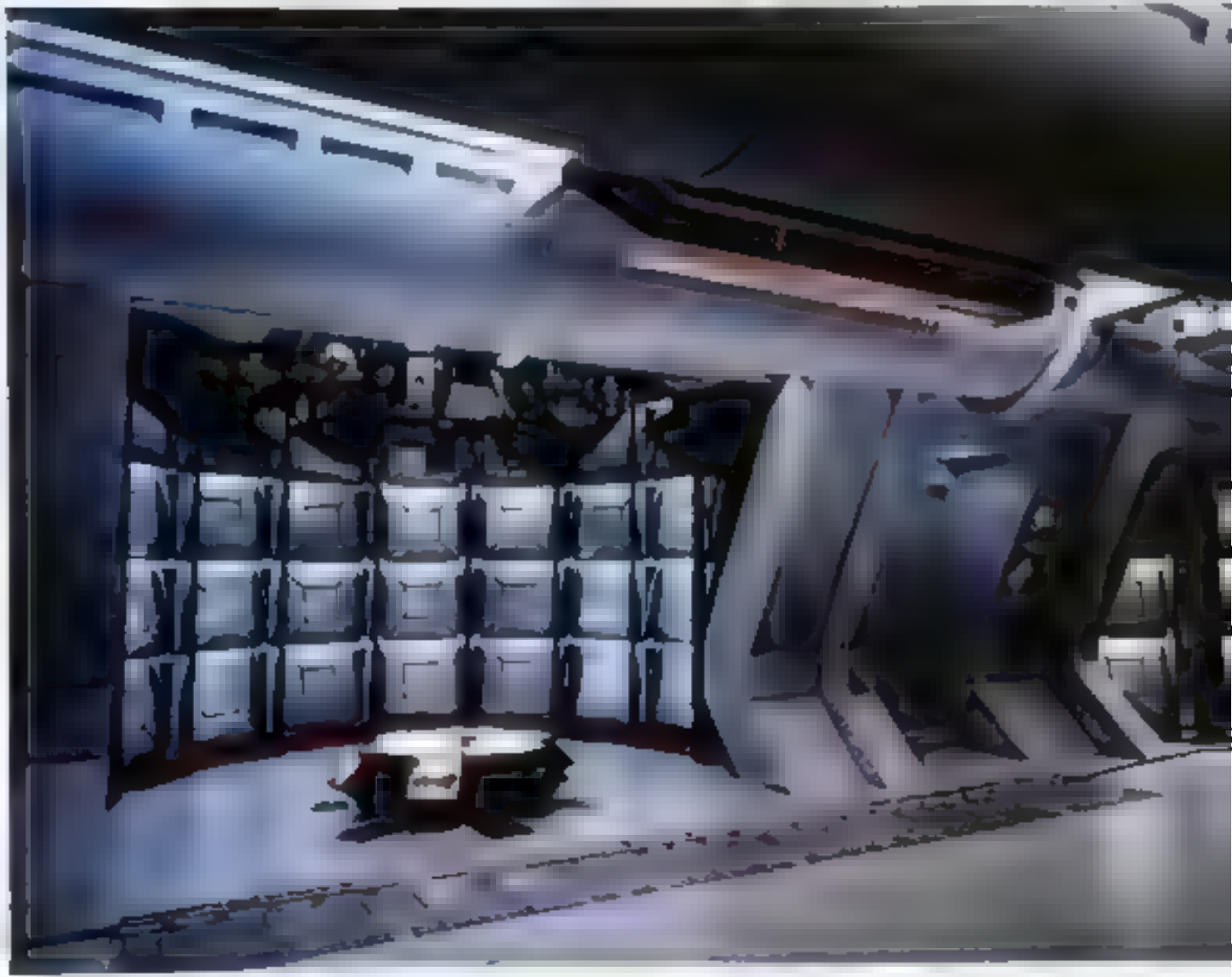
下 ミニチュアの下面の巨大エンジン部分

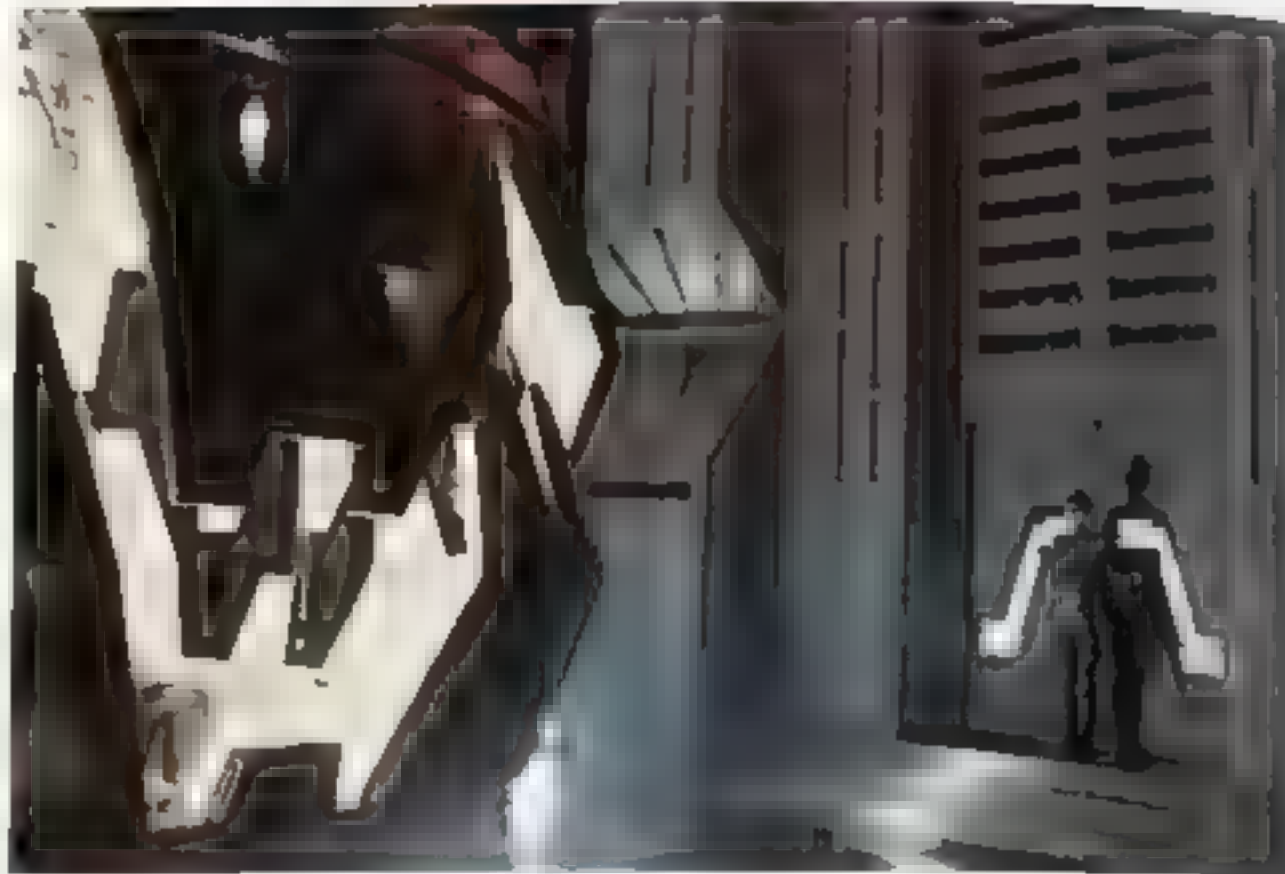
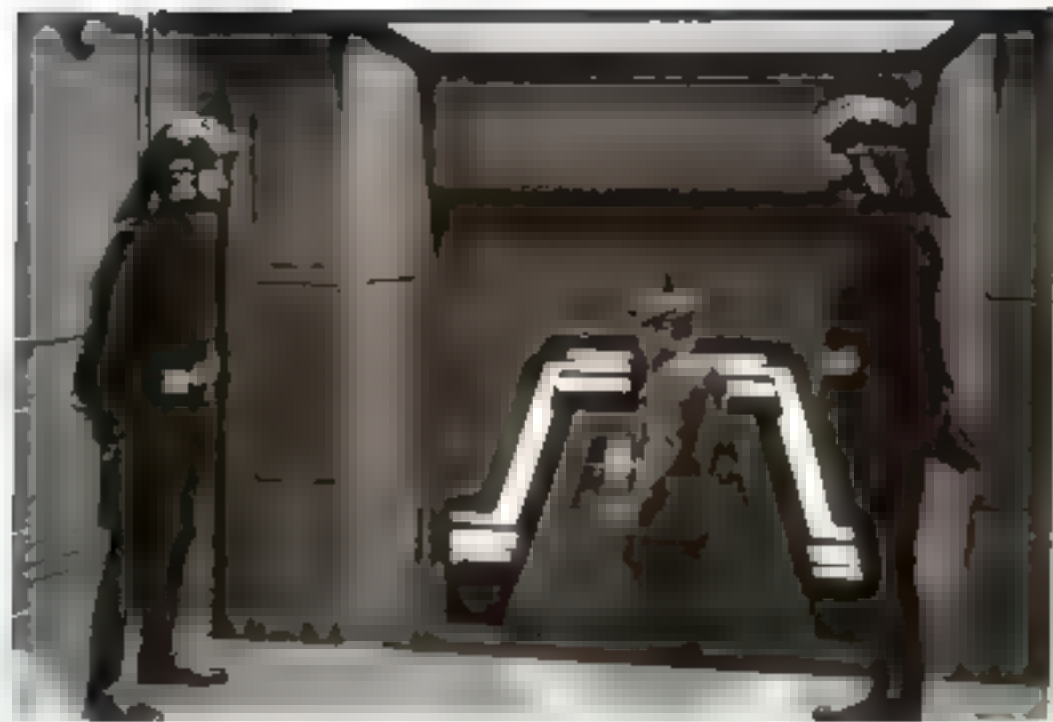
スーパー スター デストロイヤー〈エグゼクター〉の艦橋の床面はくり抜かれており
そこから見える下層のコントロール ルームでは一般兵が作業を行っている

〈エグゼクター〉の艦橋にはボバ フェットをはじめ悪名高きバウンティ ハンタ （賞金稼ぎ）が集結した
左よりテンガー IG-88 ボバ フェット ボスク 4-LOM、ザッカス

上３点　艦橋に通じる通路側面に設置された計器類（一番上段の写真では奥が艦橋）。ここでプロボットからの不審な画像を受け取り、帝国軍は艦隊の進路をホスに向けることになる。

上　艦橋へと続く階段の途中にセットされたIG-88。このドロイドの頭部は、飛行機のジェットエンジンのタービンパーツを流用して作られた

下　〈エグゼクター〉の廊下のセットの奥を背景に撮影された、ダース・ベイダー

本ページ 〈エグゼクター〉艦内通路の反対側にある幾何学模様の内装が並ぶ区画。具体的に何の用途で使われる区画なのかは劇中では不明。下写真を見ると後ろにも同じ区画があるようだ

下左写真はニーダ艦長を咎めるダース・ベイダーだが、劇中にこういうシーンはなく、宣伝用スチールと思われる

通路に並んで指揮官の指示を待つ帝国軍兵士たち。

この写真は通路のどこで撮影されたか特定しづらい。ダース・ベイダーと兵士のショット。

本ページ、右ページ　スーパー・スター・デストロイヤー（エグゼクター）艦内にあるダース・ベイダーの瞑想室と、そこに設置された瞑想ポッド

上左　瞑想室の入り口（外側）のセット

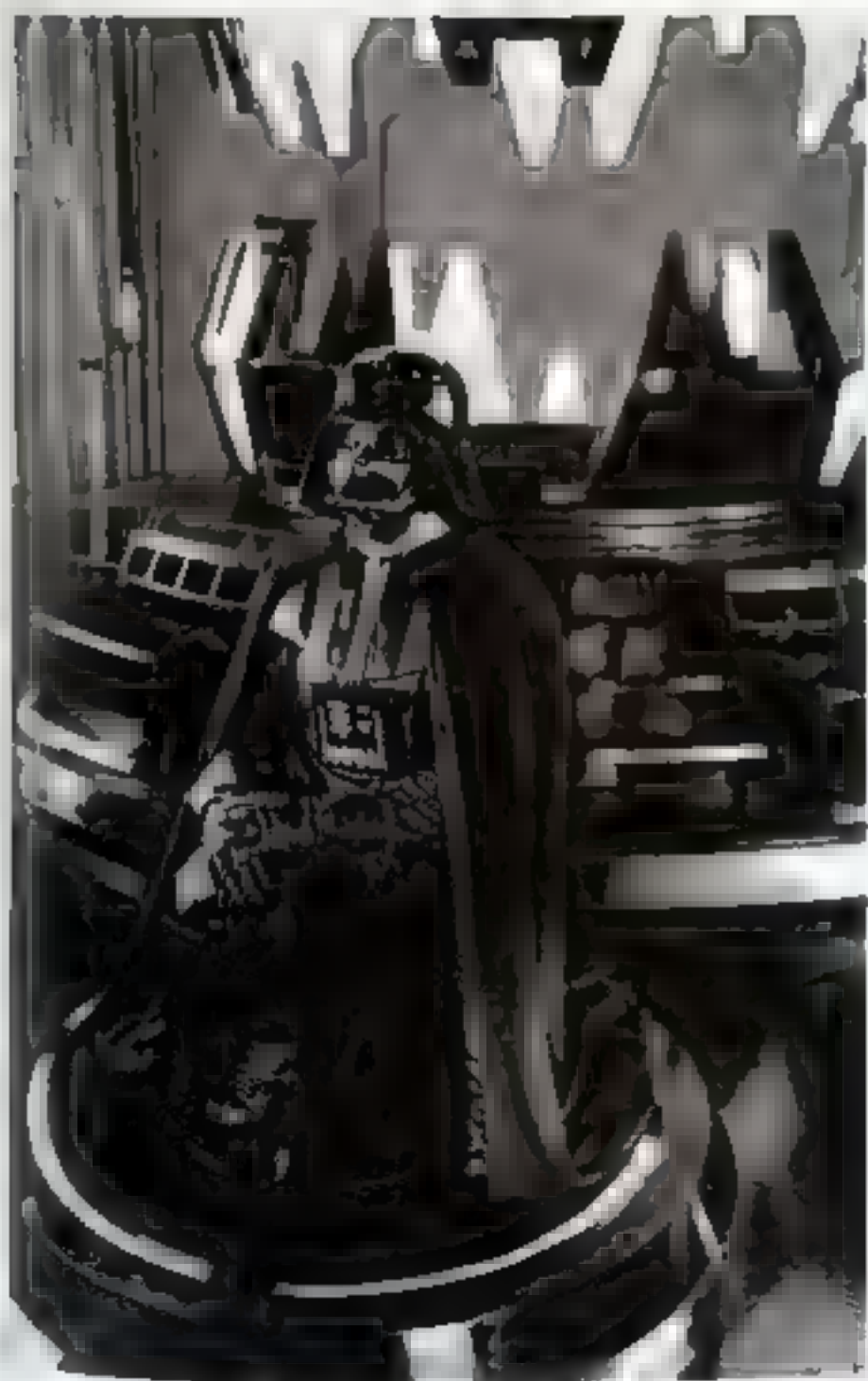
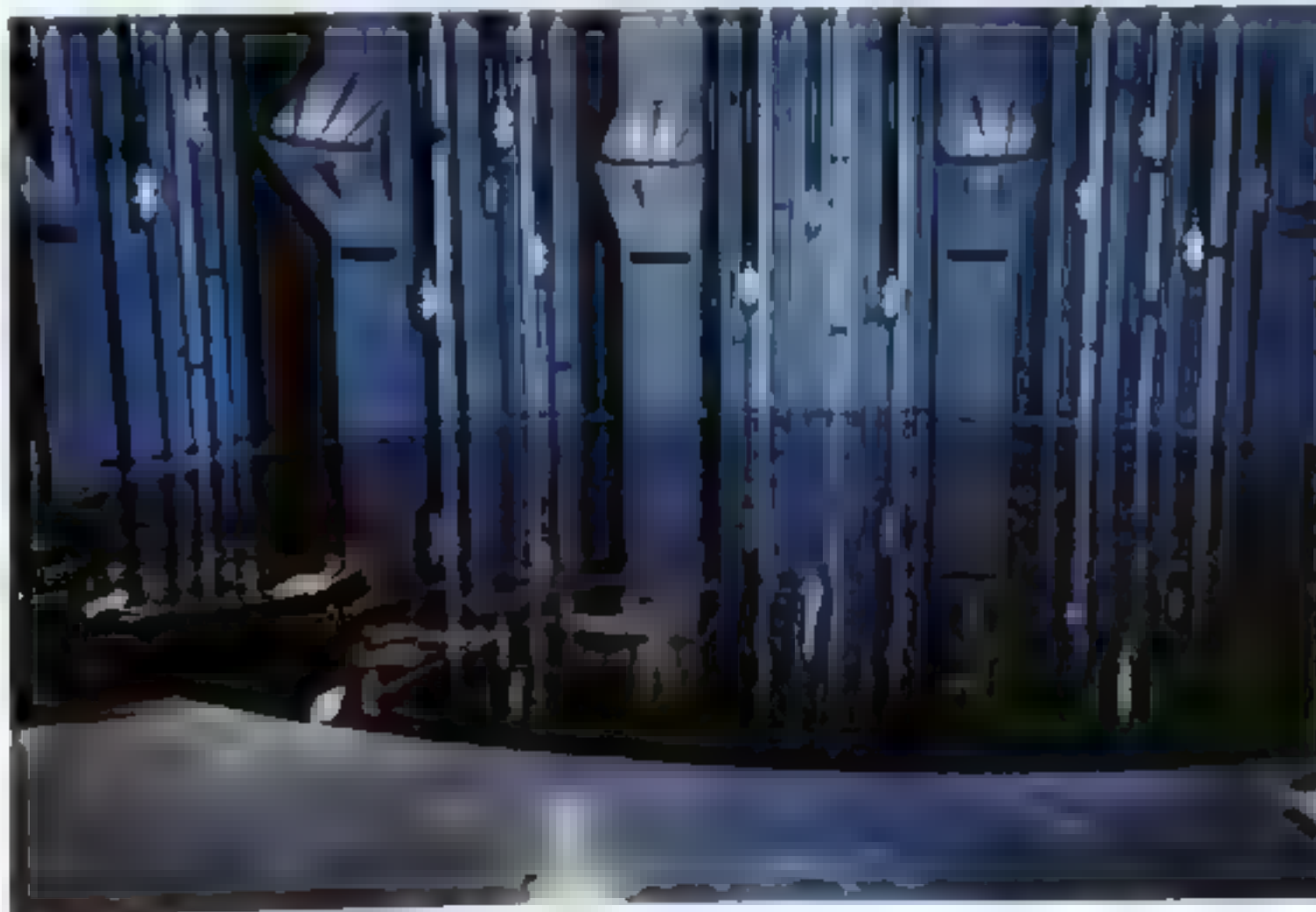
左　瞑想室のセットのコンセプト・モデル

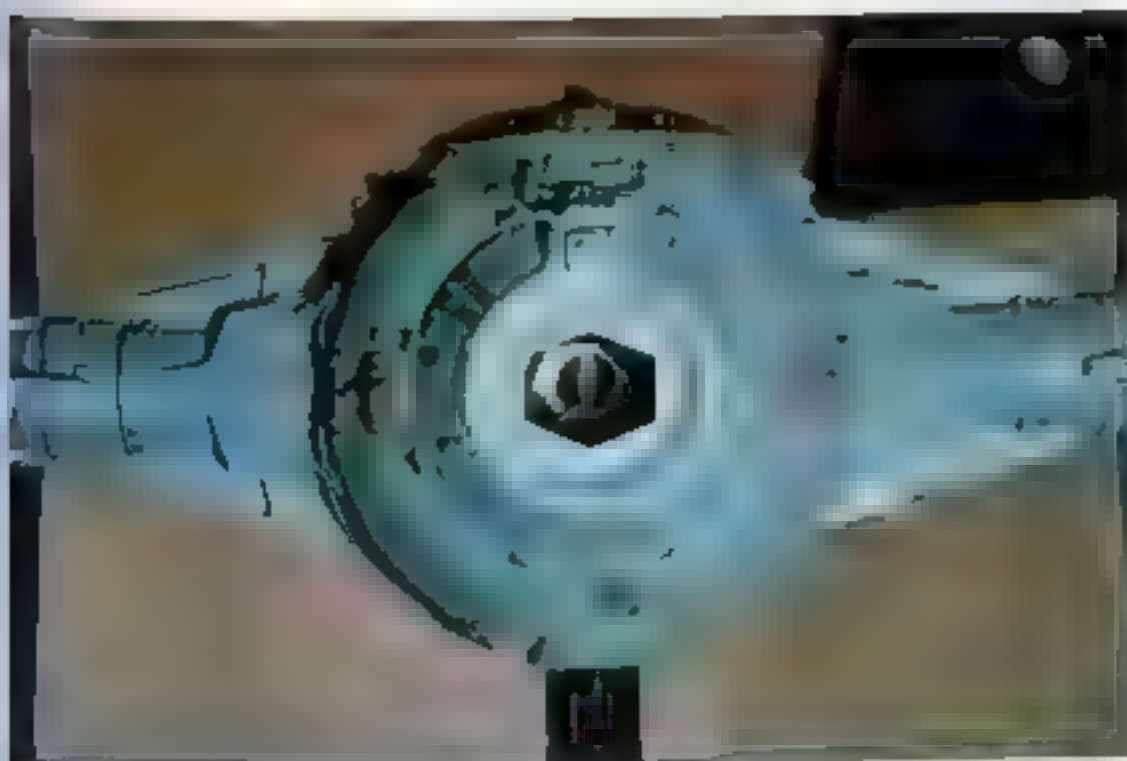
上右　ダース・ベイダーの瞑想室内のセットに入るヴィアース将軍

右　部下の報告を受けるために瞑想をやめ、ヘルメットを装着中のダース・ベイダー

下　ダース・ベイダーの後頭部。カラー写真で見るとメイクアップとはいえ、傷痕は生々しい

下右　瞑想ポッド内のダース・ベイダー

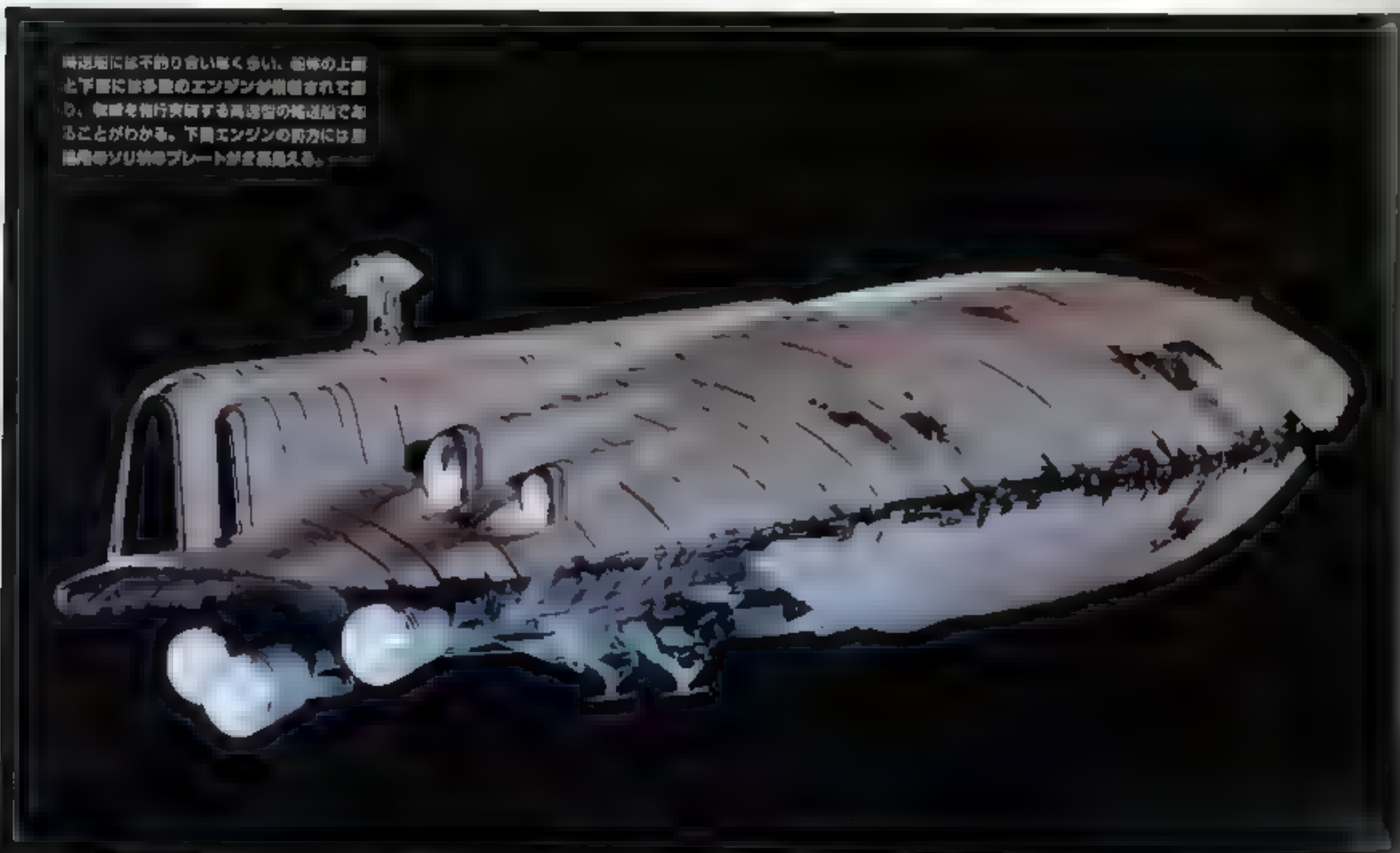
上2点 左 ダース ベイダーの瞑想ポット（この名称は書籍 スター ウォーズ ザ ブループリント より）を各方向からとらえた写真 左の別冊写真では 瞑想ポットの内側や細部が鮮明に写っている この楕円状ポットのアイデアはプロダクション デザイナーのノーマン レイノルズのよるもので なかなかダース ベイダーにふさわしいポットの形状が決まらなかったという

左写真は瞑想ポットのすぐ横にあるホログラム ポットでひざまずくダース ベイダー しかし劇中では下写真のように 瞑想ポットはなく 広い[illegible][illegible]のホログラム ポットのみが置かれていた

TIE Fighter タイ・ファイター

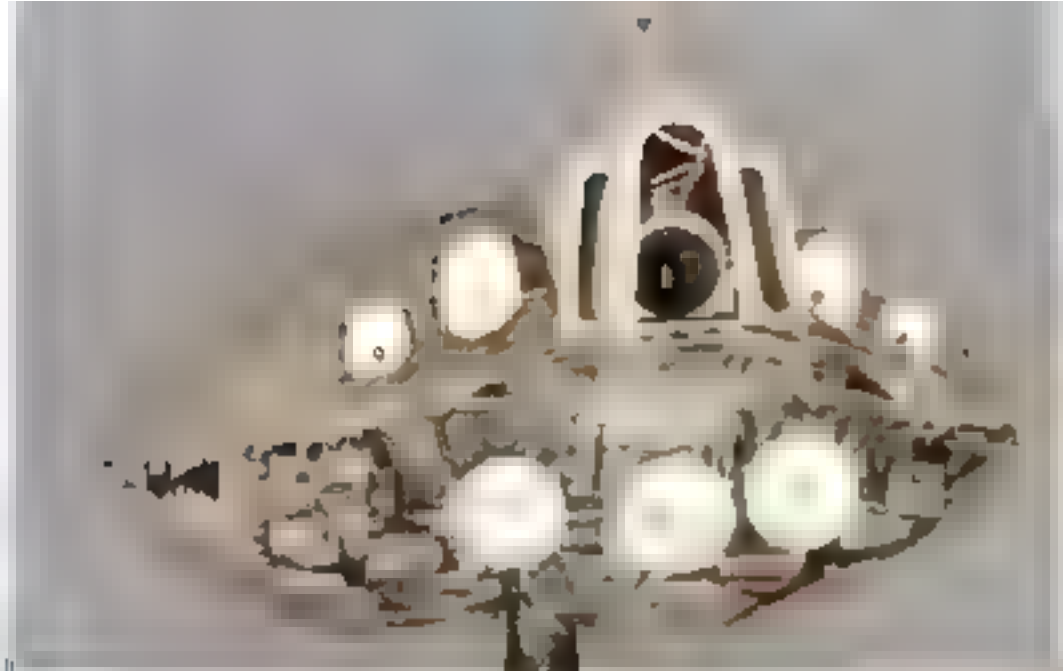
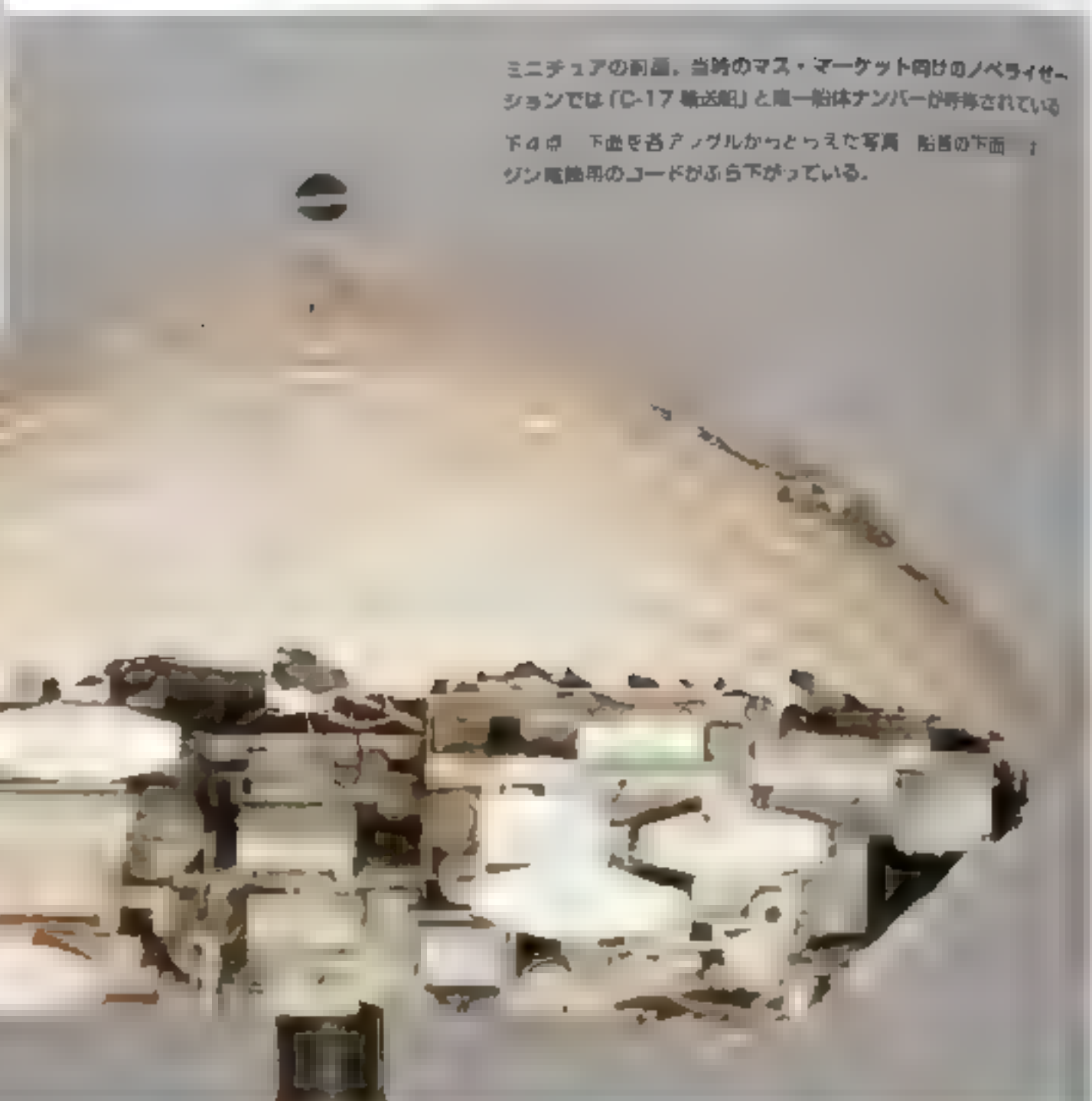
この銀河帝国の象徴ともいえるタイ・ファイターは、以[illegible]タイ・ボマーや両翼の先端が尖った形状のタイ・インターセプターなど、続いて生み出されたタイ・シリーズの原型となった。このサイナー・フリート・システムズ製の宇宙戦闘機は、銀河帝国の恐怖による支配を象徴するために無数に製造され、インペリアル・スター・デストロイヤーの艦載機として運用されたほか、銀河各地の基地に配備された

Rebel Transport レベル・トランスポート

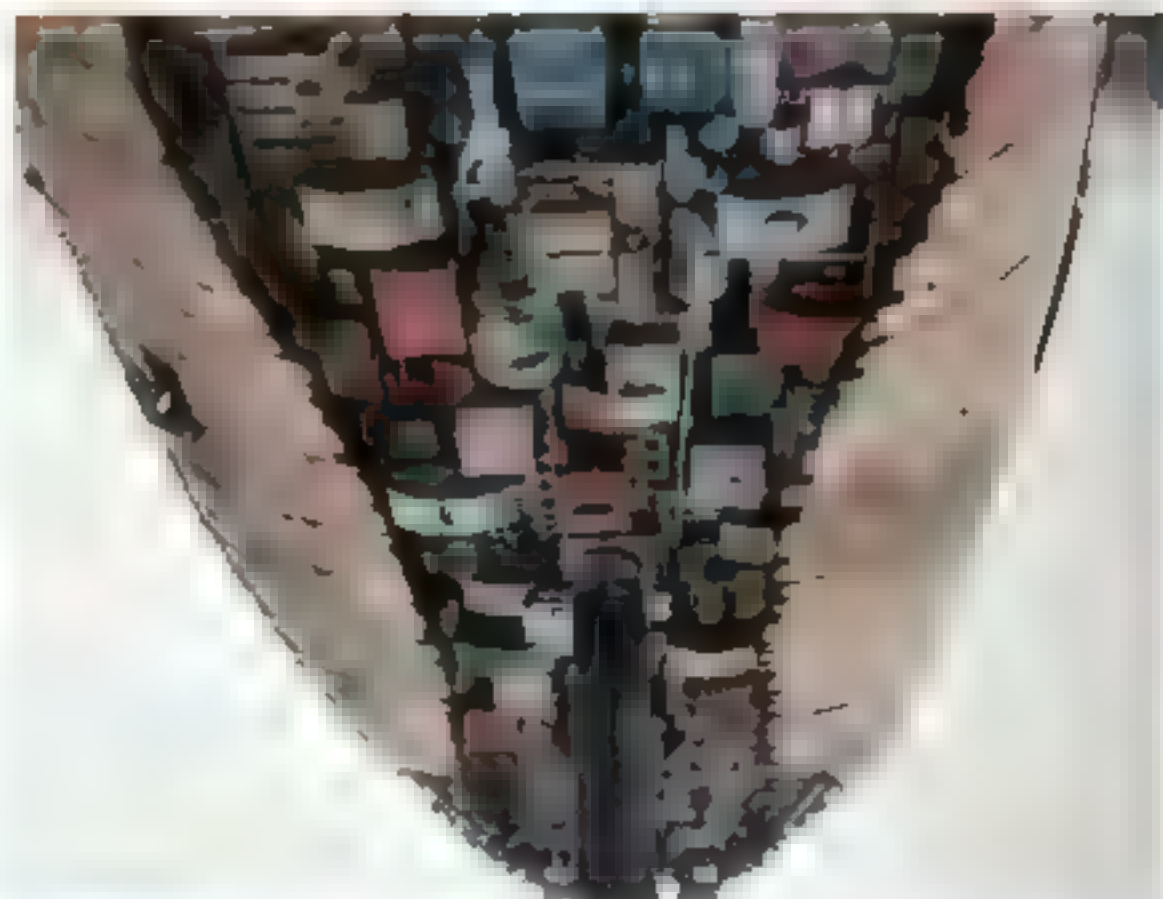
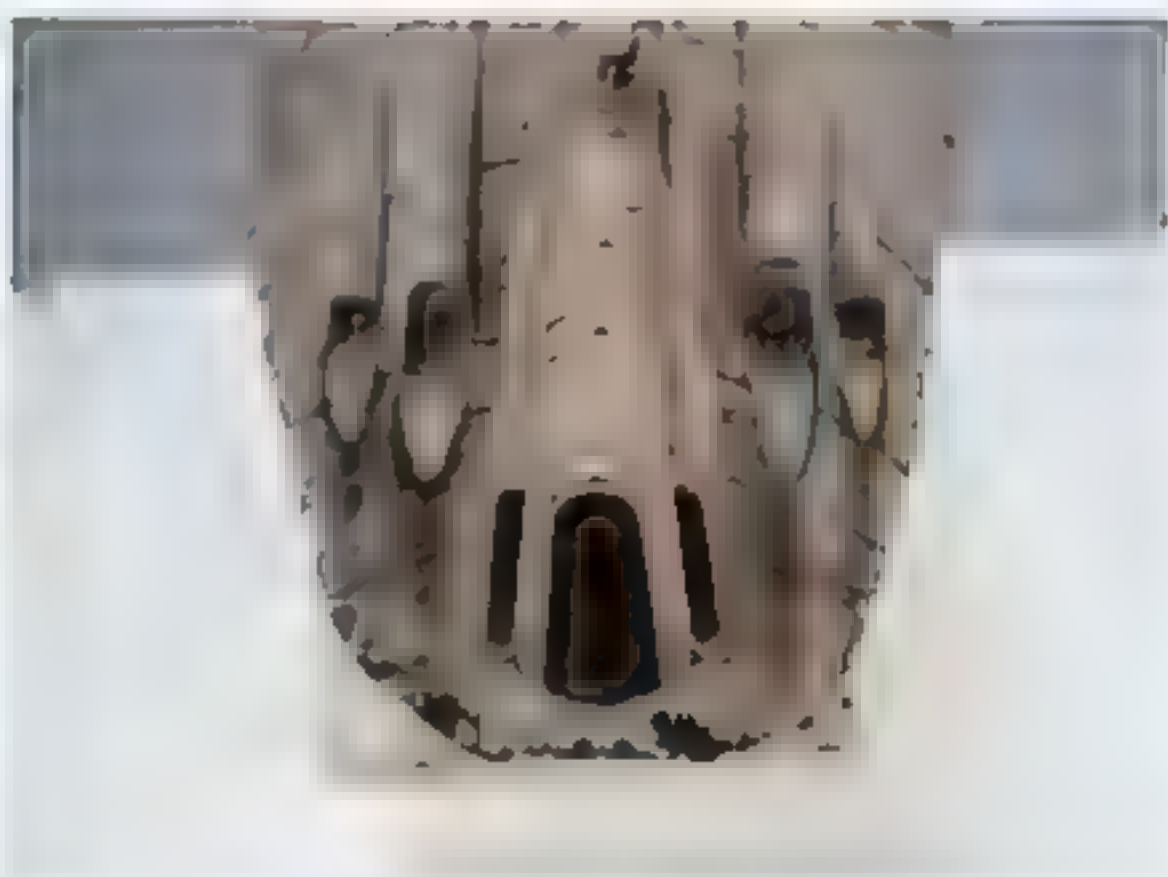
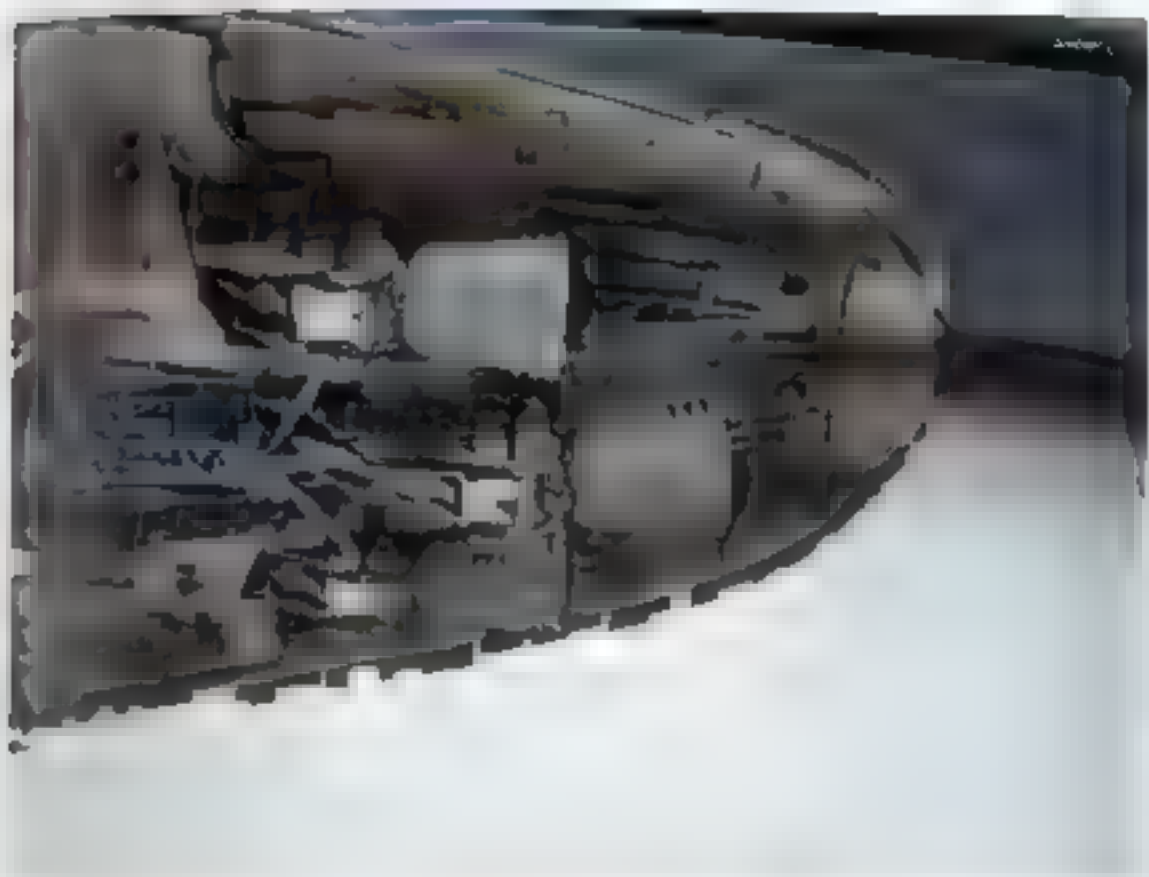
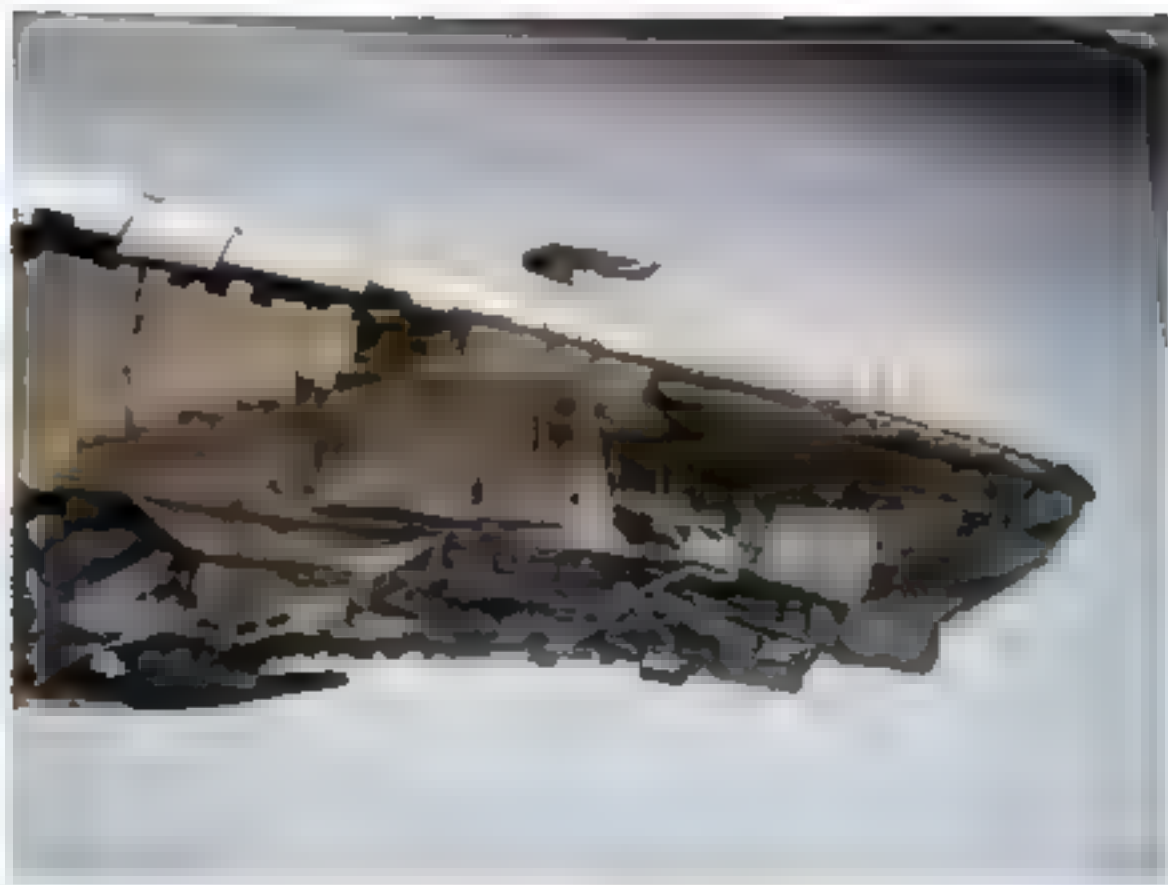
反乱同盟軍が多数所有する全長90メートルのGR-75中型輸送船。製造元はギャロフリー・ヤード社である。この輸送船は惑星ホスにも数隻停泊していたが、帝国軍の奇襲により強行脱出することとなった。ホスを最後に飛び立ったのは同型船"ブライト・ホープ"で、反乱同盟軍の要人を乗せての脱出に成功した。船体はほぼすべてが強化パネルで覆われ、上部に突き出た防護シールド発生装置と共に、内部に積載したコンテナを守る構造となっている。GR-75中型輸送船は1年後のエンドアの戦いにも数隻参戦した。

スタッフ間で通称「ツナ・シップ」と呼ばれていたレベル・トランスポートのミニチュア。

輸送船には不釣り合いなくらい、船体の上部と下部には多数のエンジンが搭載されており、戦場を強行突破する高速型の輸送船であることがわかる。下部エンジンの前方には着陸用のソリ状のプレートが垣間見える。

RIGHT SIDE VIEW
TOP VIEW

レベル・トランスポートの下部。全面にわたって多くのコンテナが取り付けられている。

191ページまで、2014年に撮影されたレベル・トランスポートの写真各種。本ページの写真は舷部の塗装が行われていない船体の左側面である。右側面に比べれば、かなり塗り分けや汚し塗装が少ないことが見て取れる

左 [illegible]チュアの斜め後面 エンジン部分の配列がよくわかる

ミニチュアの前面。当時のマス・マーケット向けのノベライゼーションでは「C-17 輸送船」と同一船体ナンバーが呼称されている

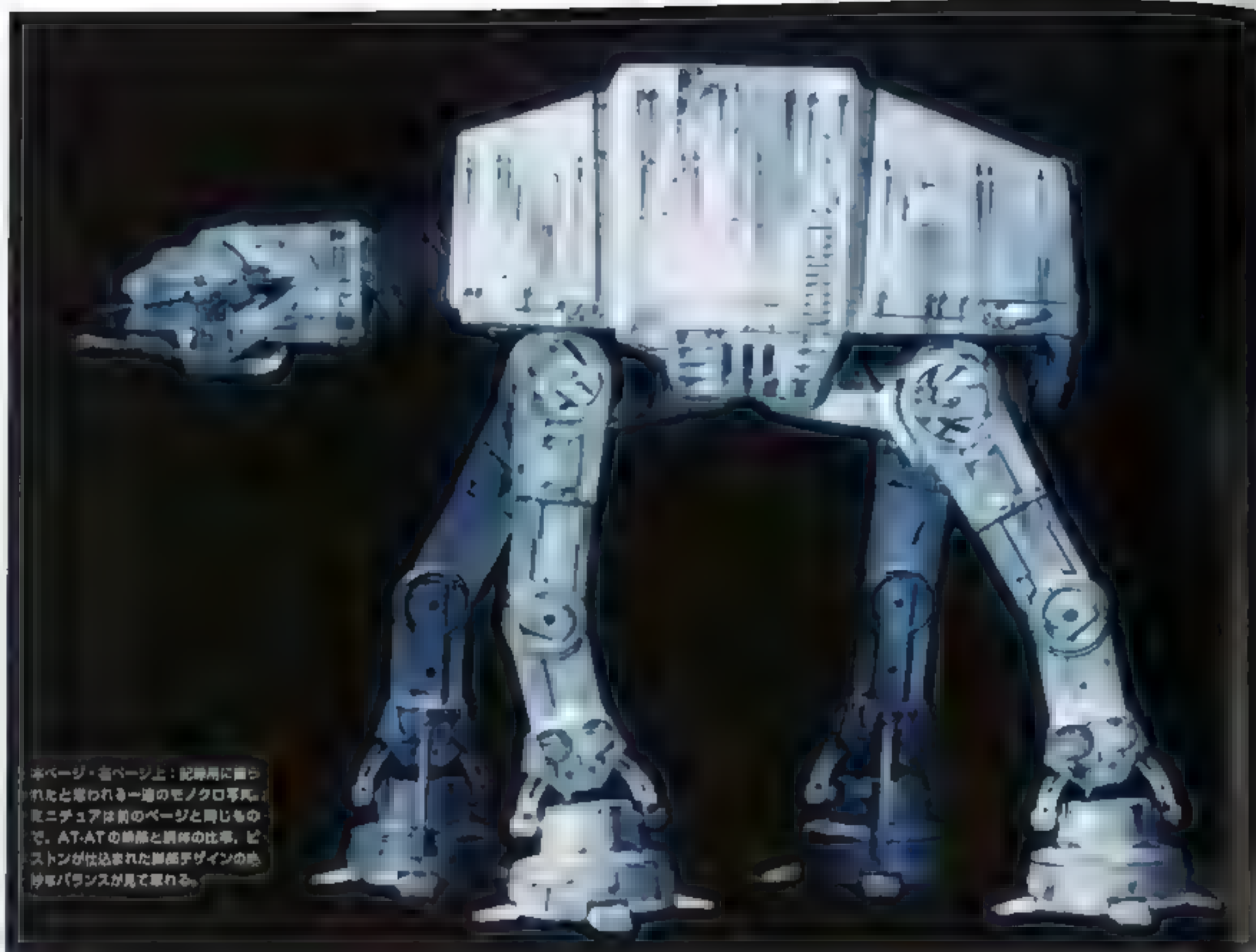
下4点 下面を各アングルからとらえた写真 船首の下面[illegible]ジン電飾用のコードがぶら下がっている。

AT-AT (All Terrain Armored Transport)

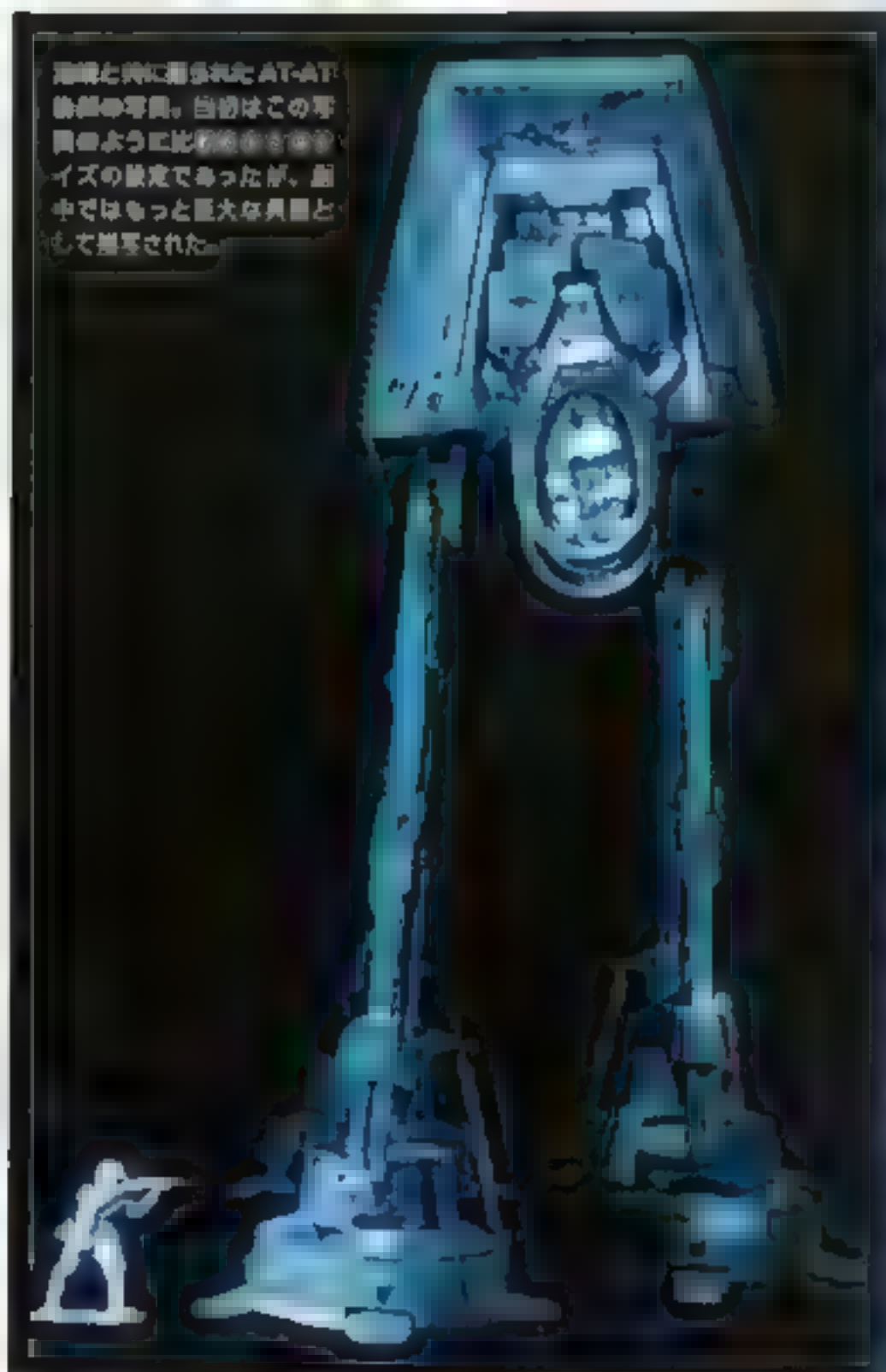
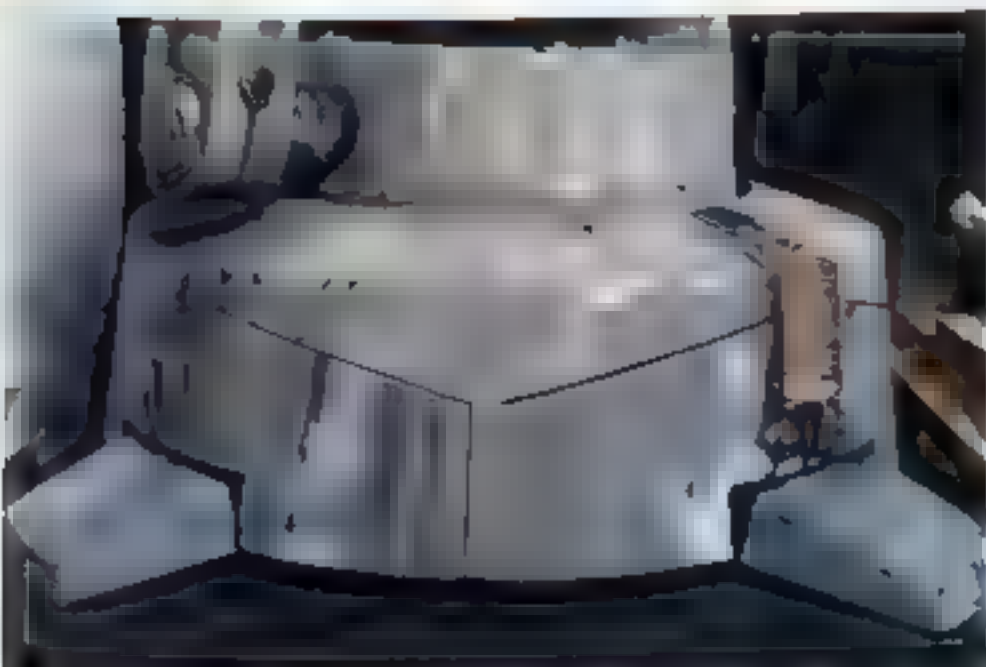
AT-AT（全地形対応装甲トランスポート）

全地形対応装甲トランスポート、別名AT-ATウォーカーは帝国地上軍が使用した4脚式の輸送および戦闘用ビークルである。4脚時の全高は22.5メートルという巨大さで、さらに耐ブラスター装甲板の装備により、高い防御力を持つ。このビークルの巨大さは戦術的効果に寄与しただけでなく、敵に対する心理的効果においても大きな役割を果たした。製造元はクワット・ドライブ・ヤード

巨大体躯を思わせるAT-ATウォーカーは、実際に[illegible]で[illegible]を撮影し、その映像を元にストップ・モーション・アニメーション（コマ撮りアニメ）で撮影された。

左ページから195ページまで：これらのブルーバックで撮影された一連の写真は、映画公開前にAT-ATの宣伝用写真として使われ、ファンにとっては見慣れたものではあるが、当時各メディアに掲載された写真はピントがボケており、ここまで鮮明ではなかった。

胴体下部のディテールが鮮明に映し出された珍しい写真。腹部の丸いエンジン部分の右上にコードが配してある細かい作りにも注目したい。

本ページ・右ページ上：記録用に撮られたと思われる一連のモノクロ写真。ミニチュアは前のページと同じもので、AT-ATの胴部と脚部の比率、ピストンが仕込まれた脚部デザインの絶妙なバランスが見て取れる。

AT-ATの上面。人物との対比用に兵士の人形が脇に置いてある。一見すると頭部や胴体は平面で構成されているかのように見えるが、実は緩やかな曲面であることがこの写真から判別できる。

兵士と共に撮影されたAT-AT脚部の写真。当初はこの写真のように比較的小さなサイズの設定であったが、劇中ではもっと巨大な兵器として描写された。

AT-AT DRIVER

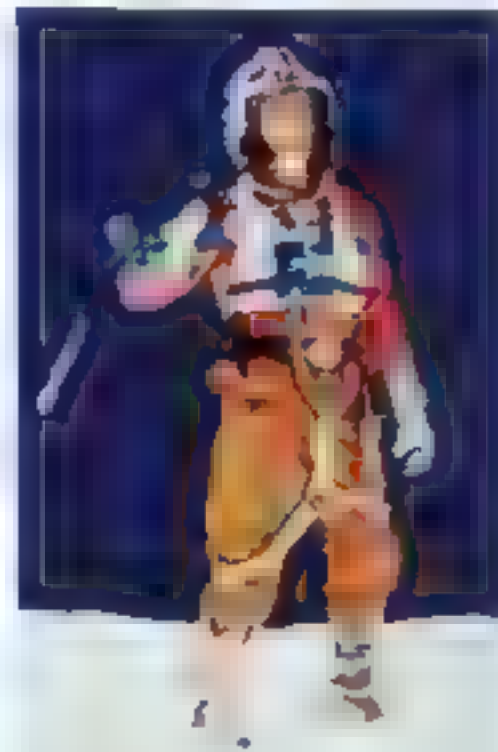
AT-ATドライバー

上4点　AT-ATドライバー

左　下　AT-ATに乗った際のヴィアーズ将軍

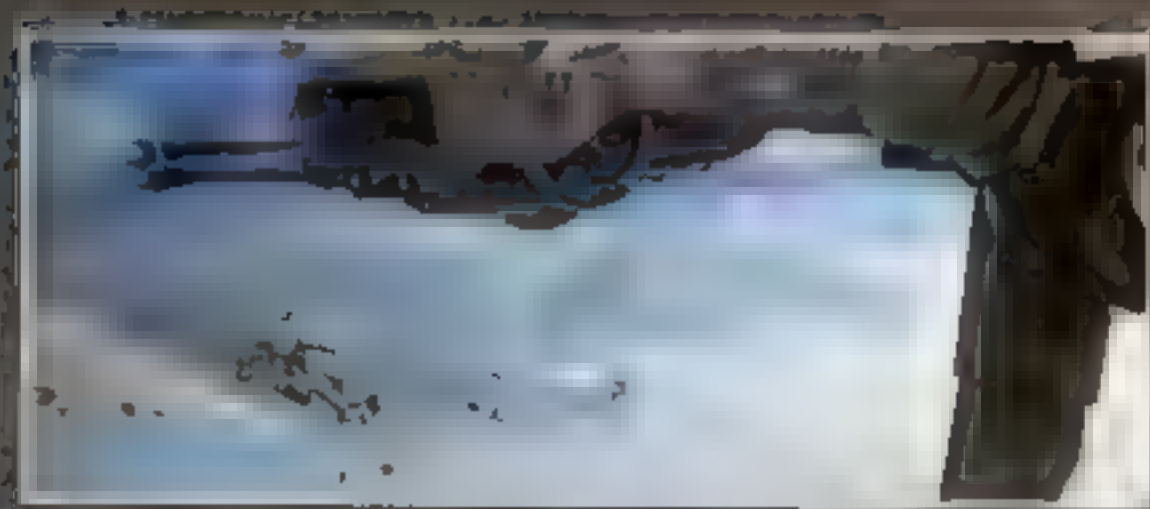
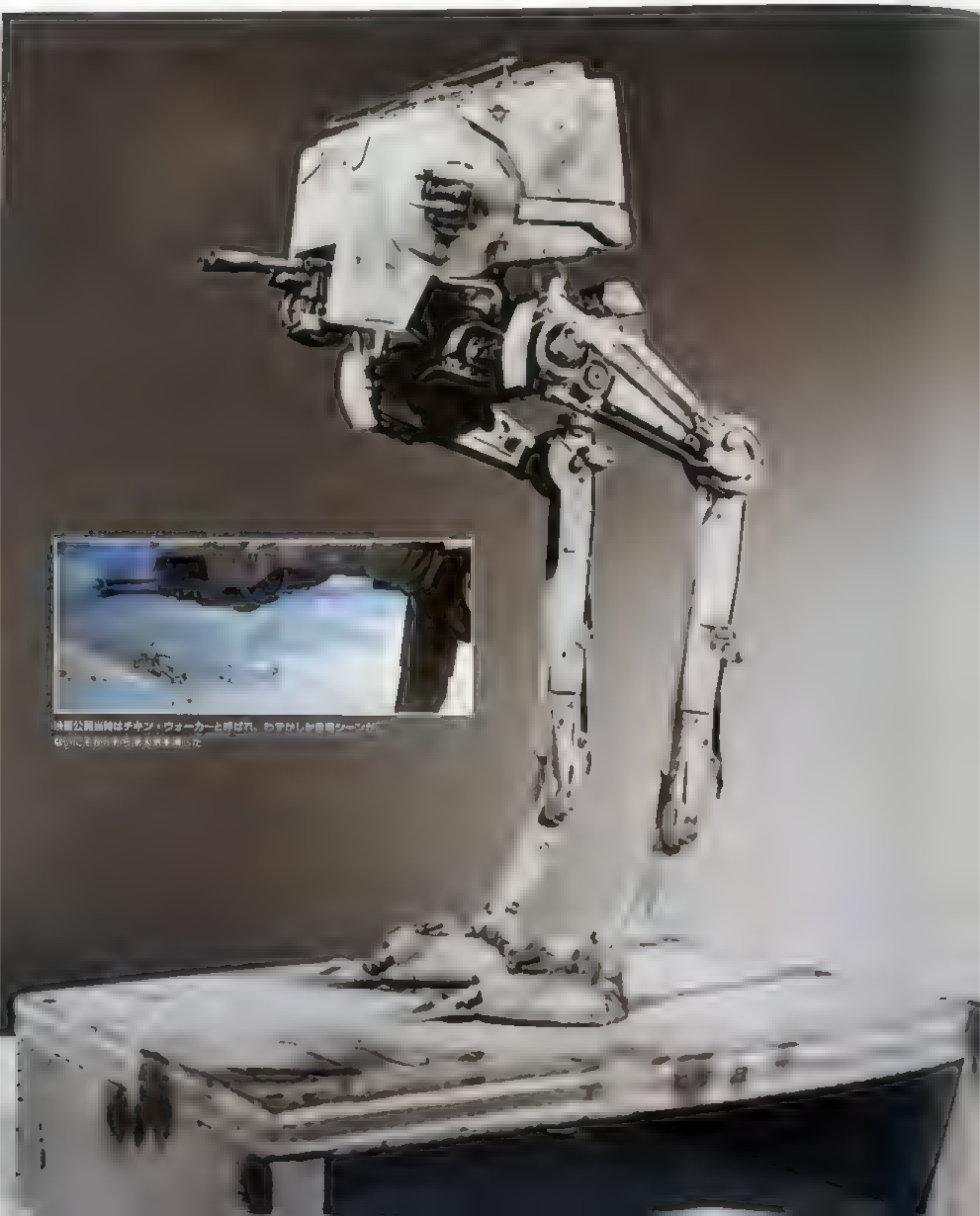
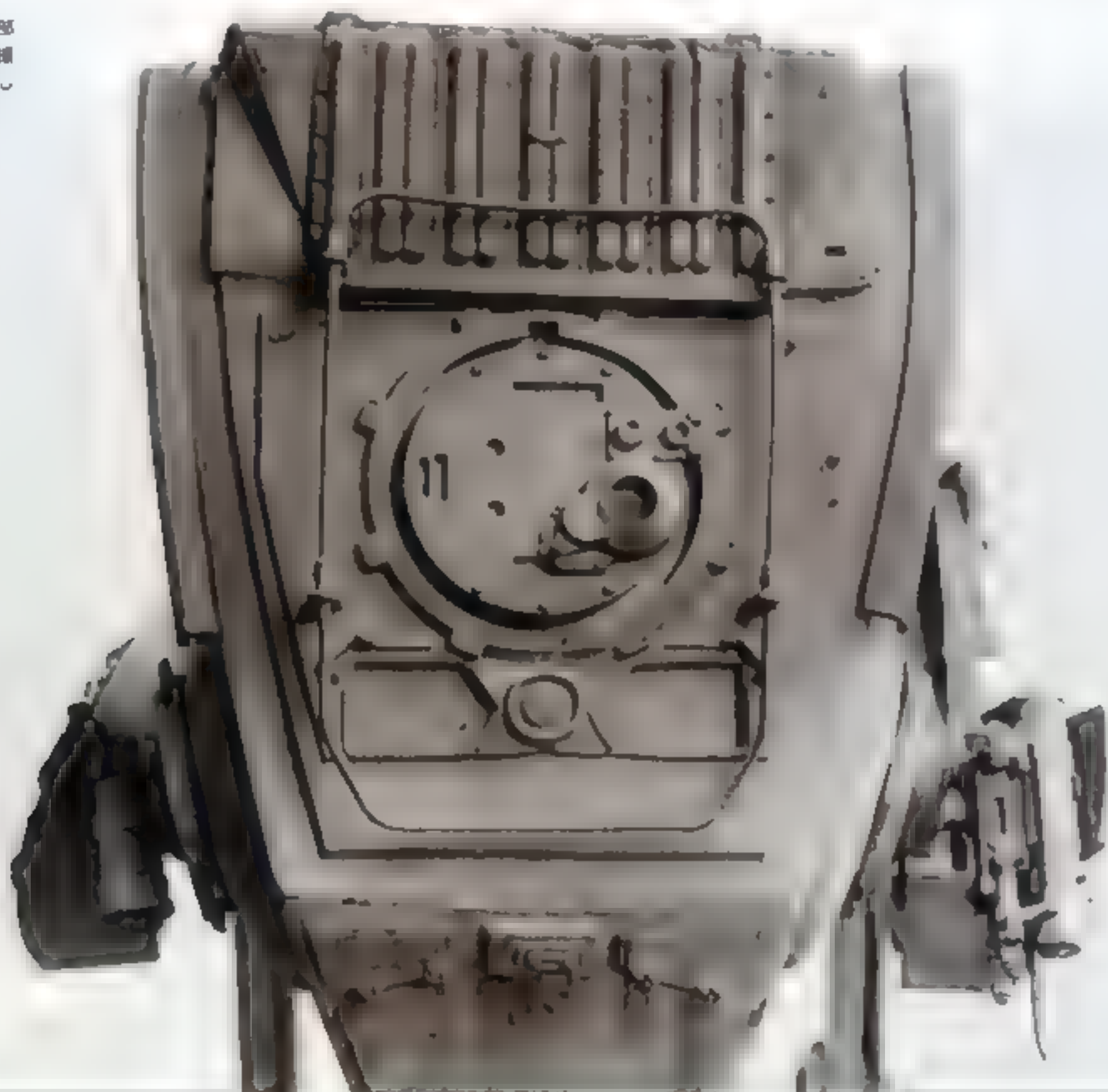
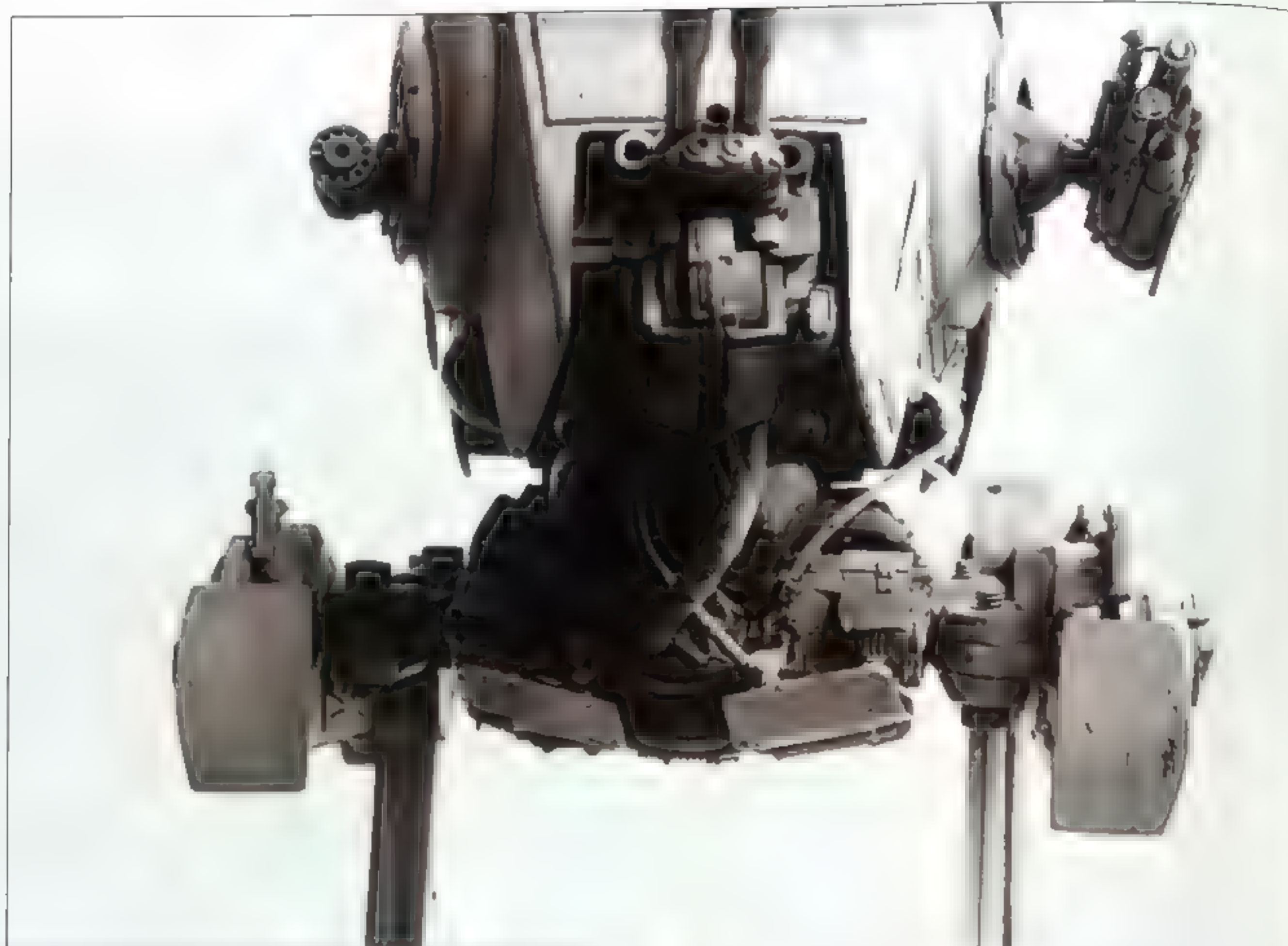
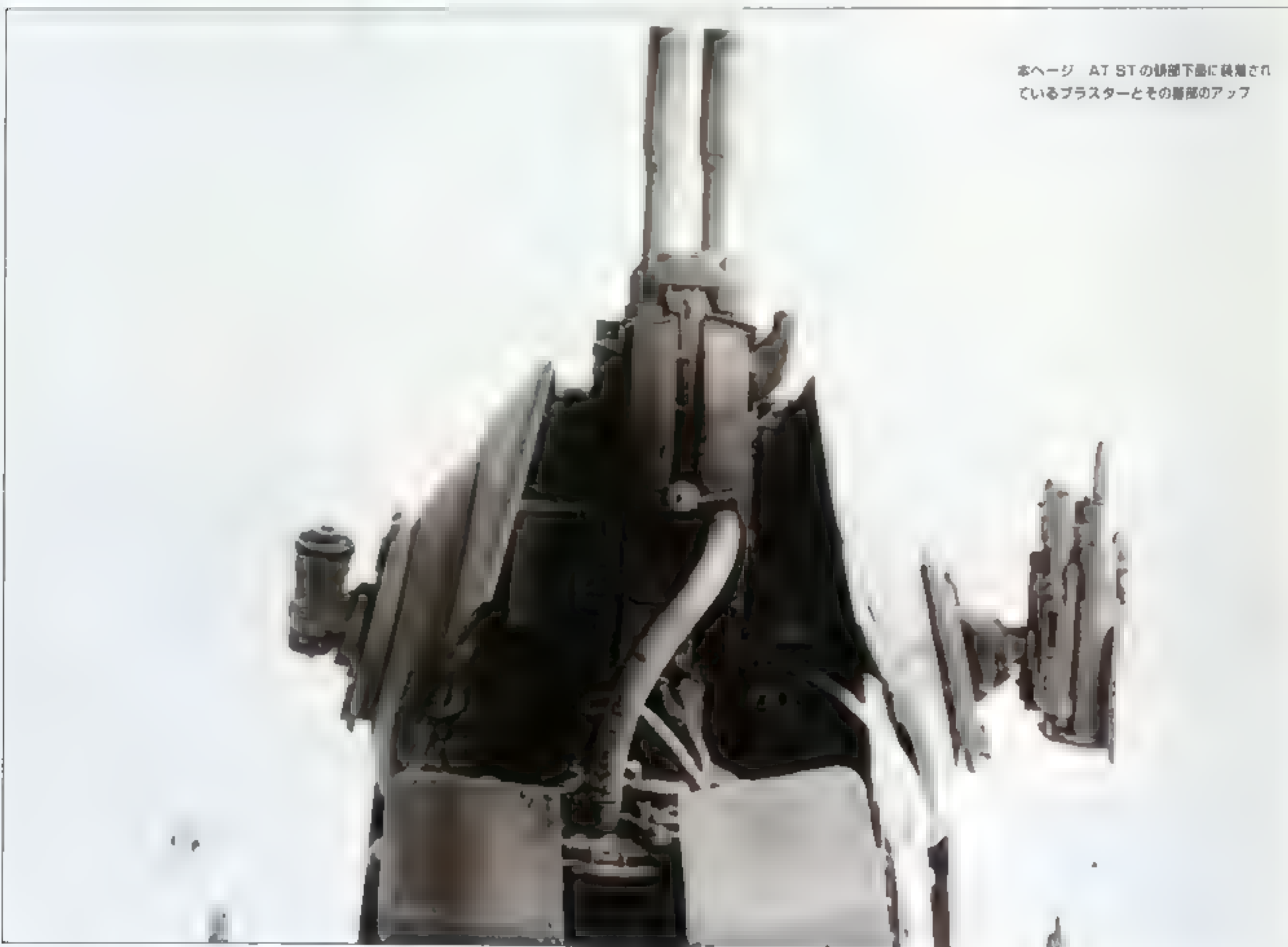
ヴィアーズ将軍と同乗しているAT-ATドライバーのコスチュームは写真のタイプであるが、別のAT-ATを操るドライバーはヘルメットの後部に赤いラインが入っている。ヴィアーズ将軍が被っているヘルメットは同形のものを『エピソード6』でAT-STドライバーが使用している。

LUKE ATTACKING AN AT-AT

AT-ATを攻撃するルーク

本ページ：スノースピーダーから脱出し、右手にグラップリング・フック、左手に手榴弾を手にしてAT-ATを破壊したルーク・スカイウォーカー。劇中で手榴弾はスノースピーダーのコクピット両脇に装備されており、グラップリング・フックはコクピットの前の方から取り出した（下写真）。下段写真は実寸大AT-ATの胴体部のセットと、ぶら下がって撮影の準備をするマーク・ハミルとスタッフ

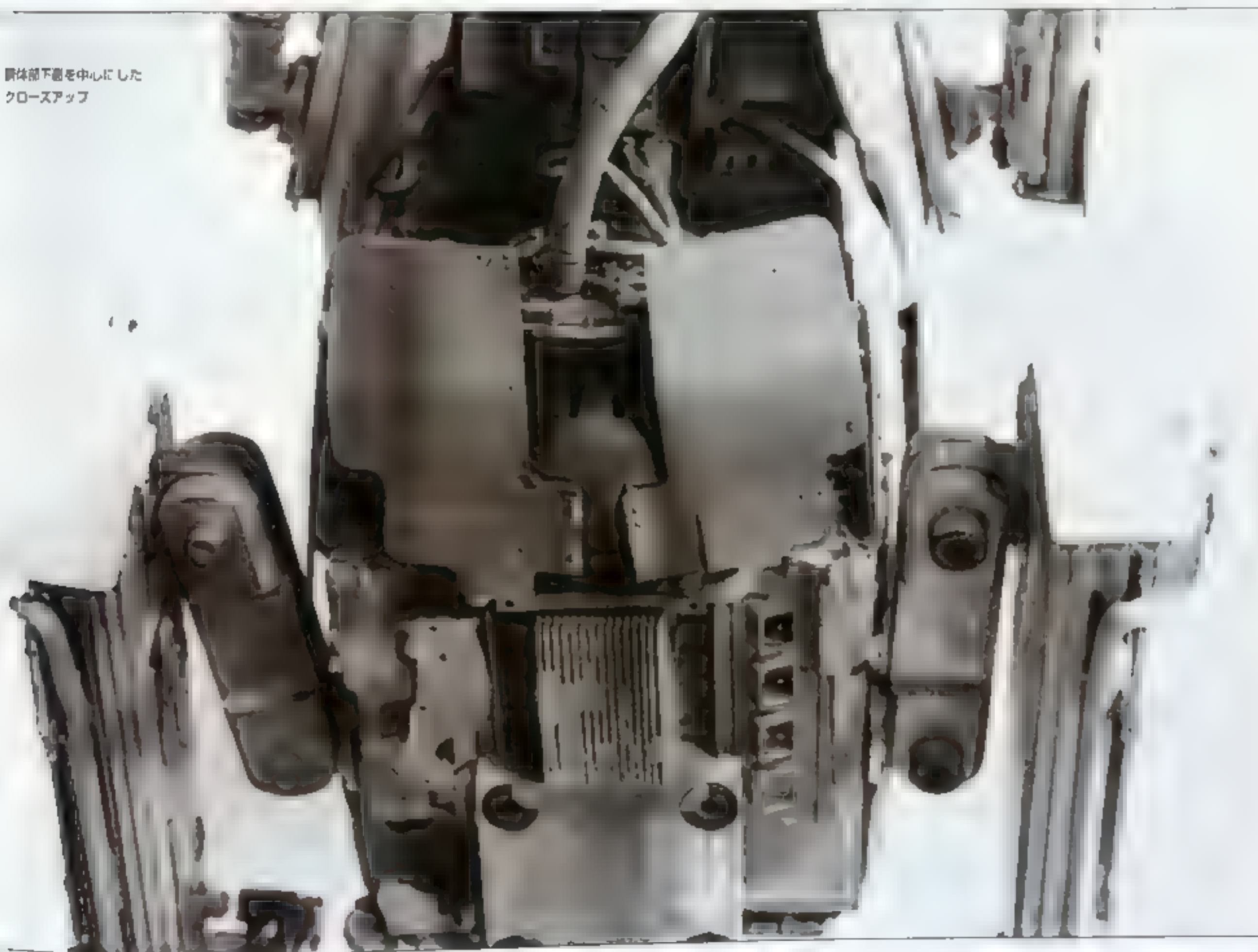
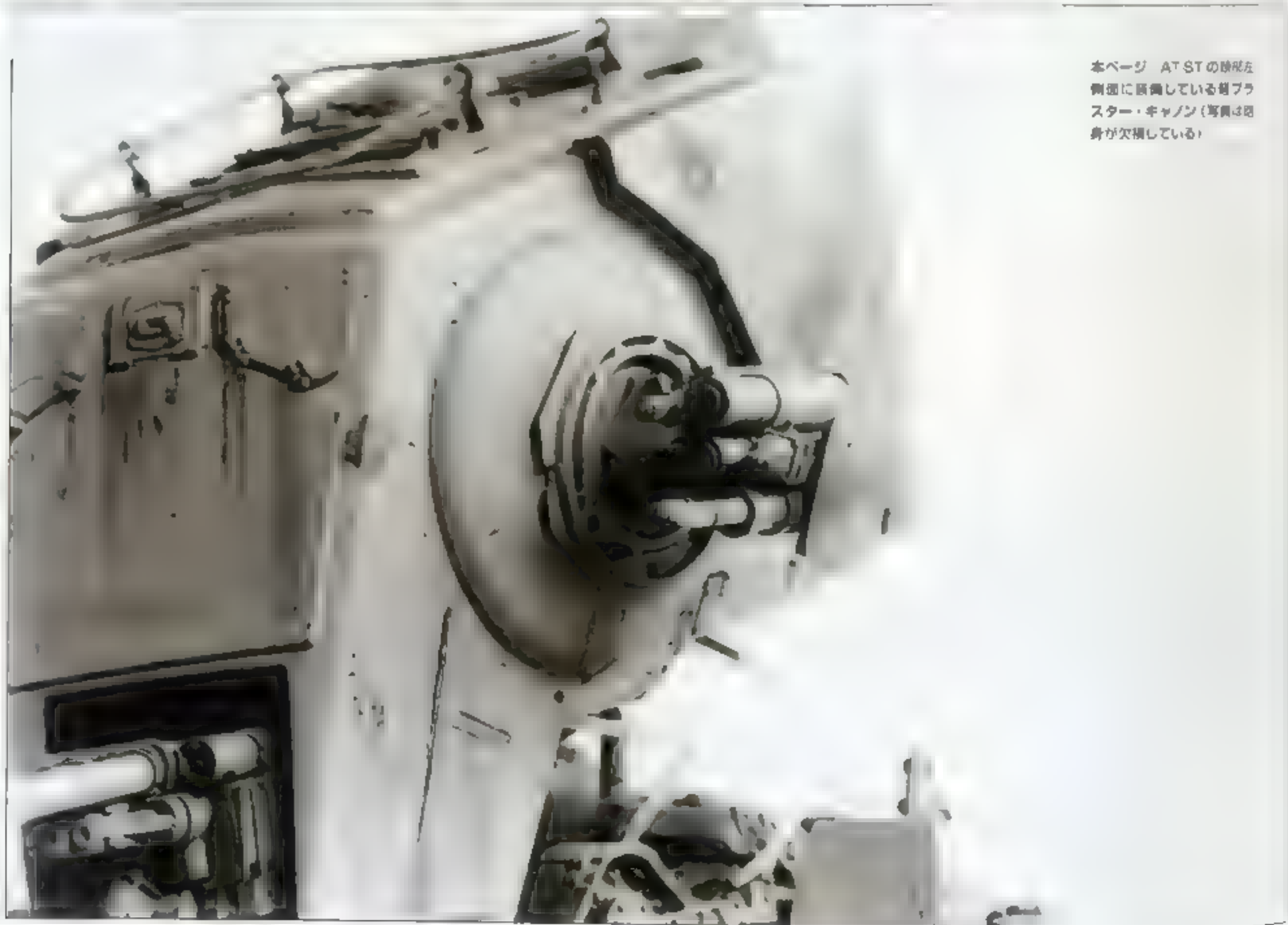
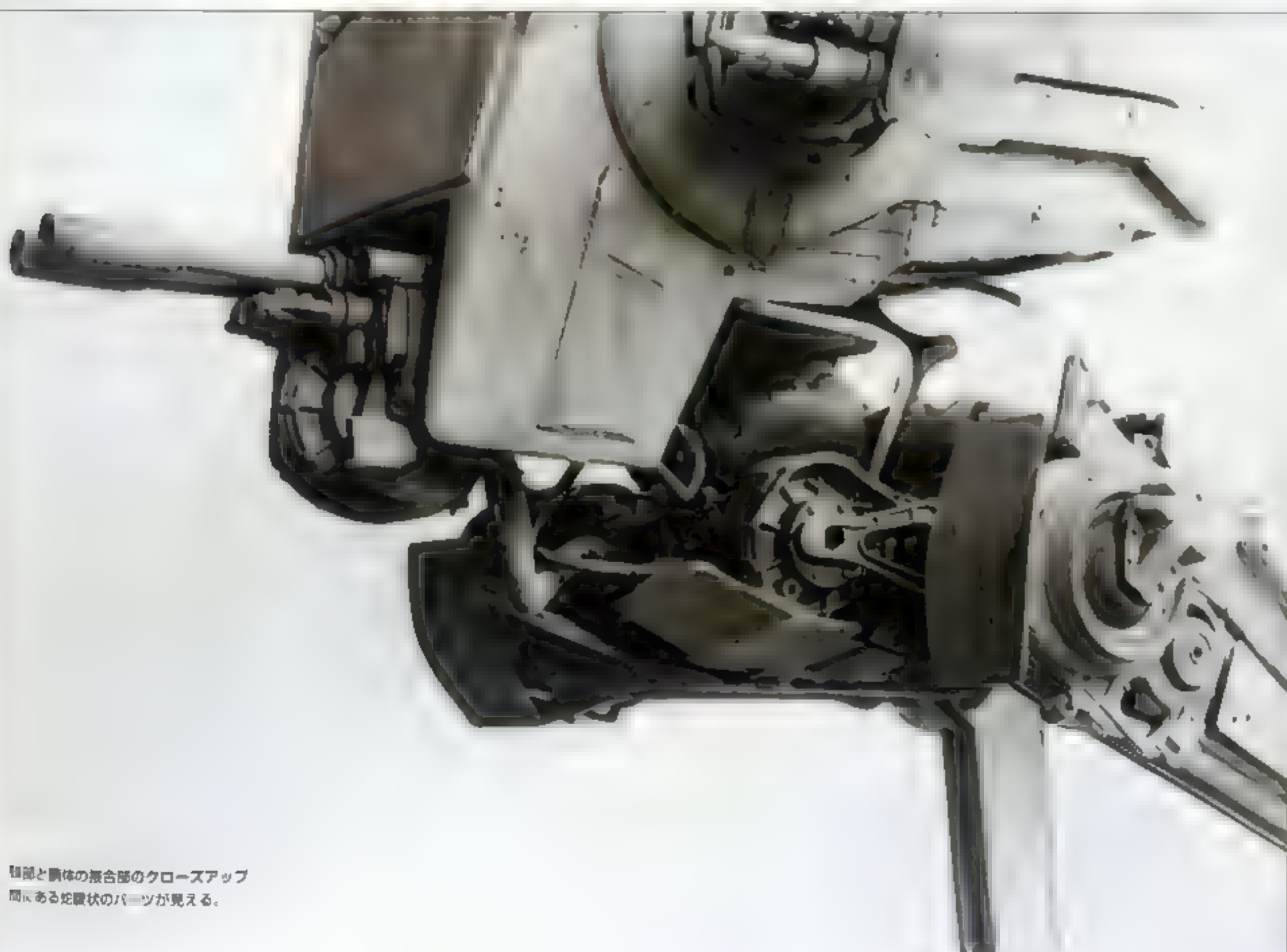
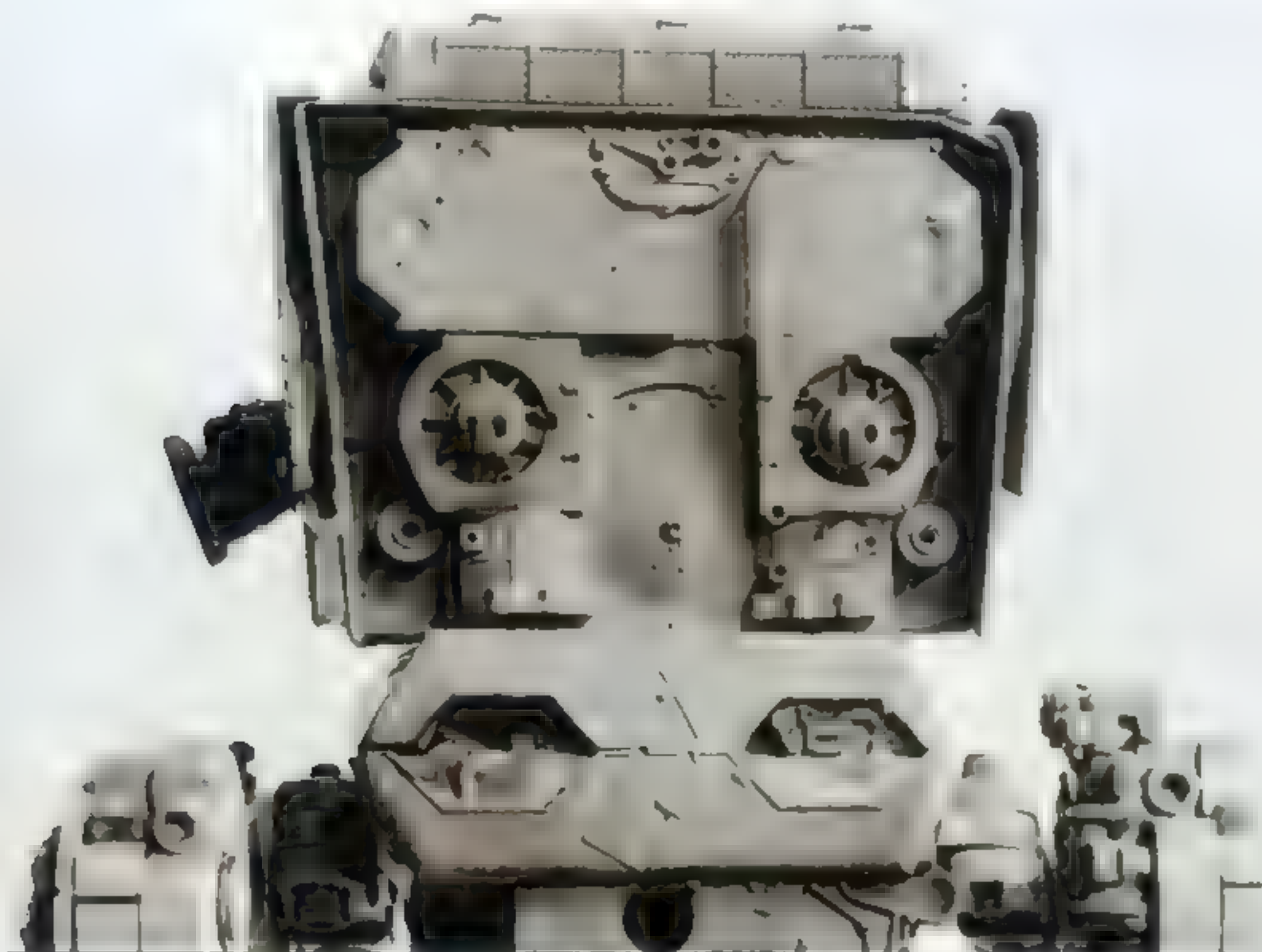
AT-ST (All Terrain Scout Transport)

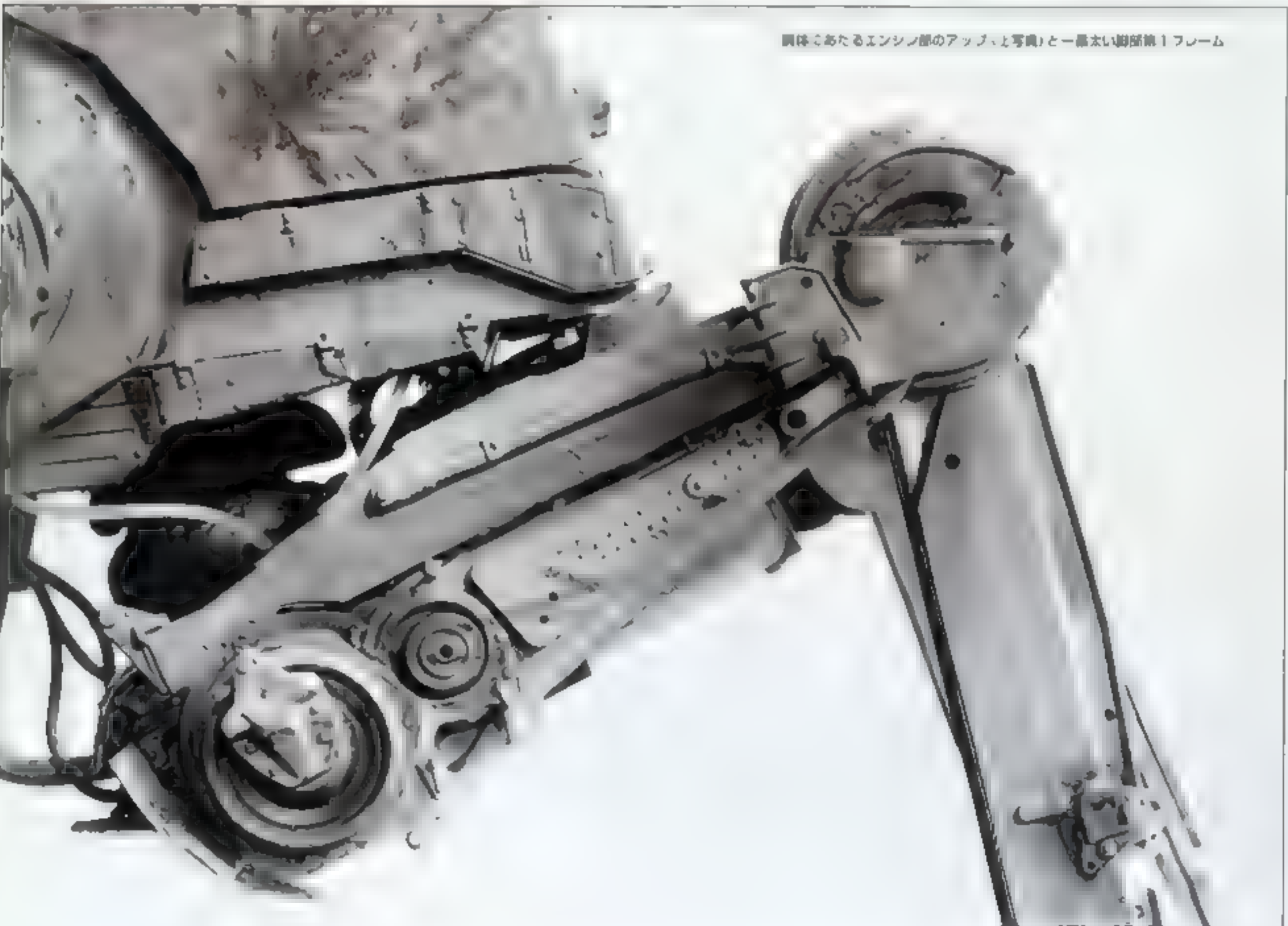
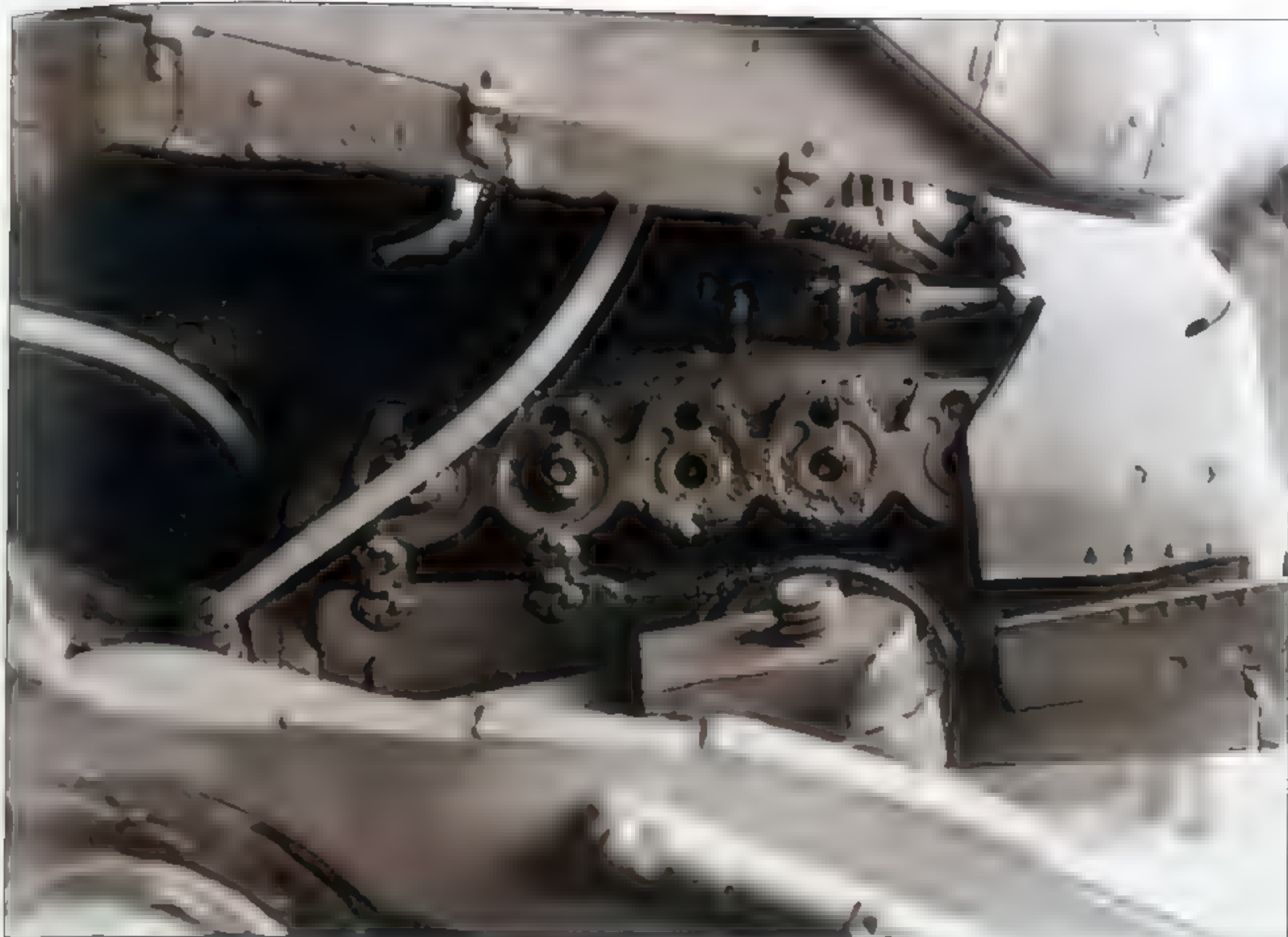
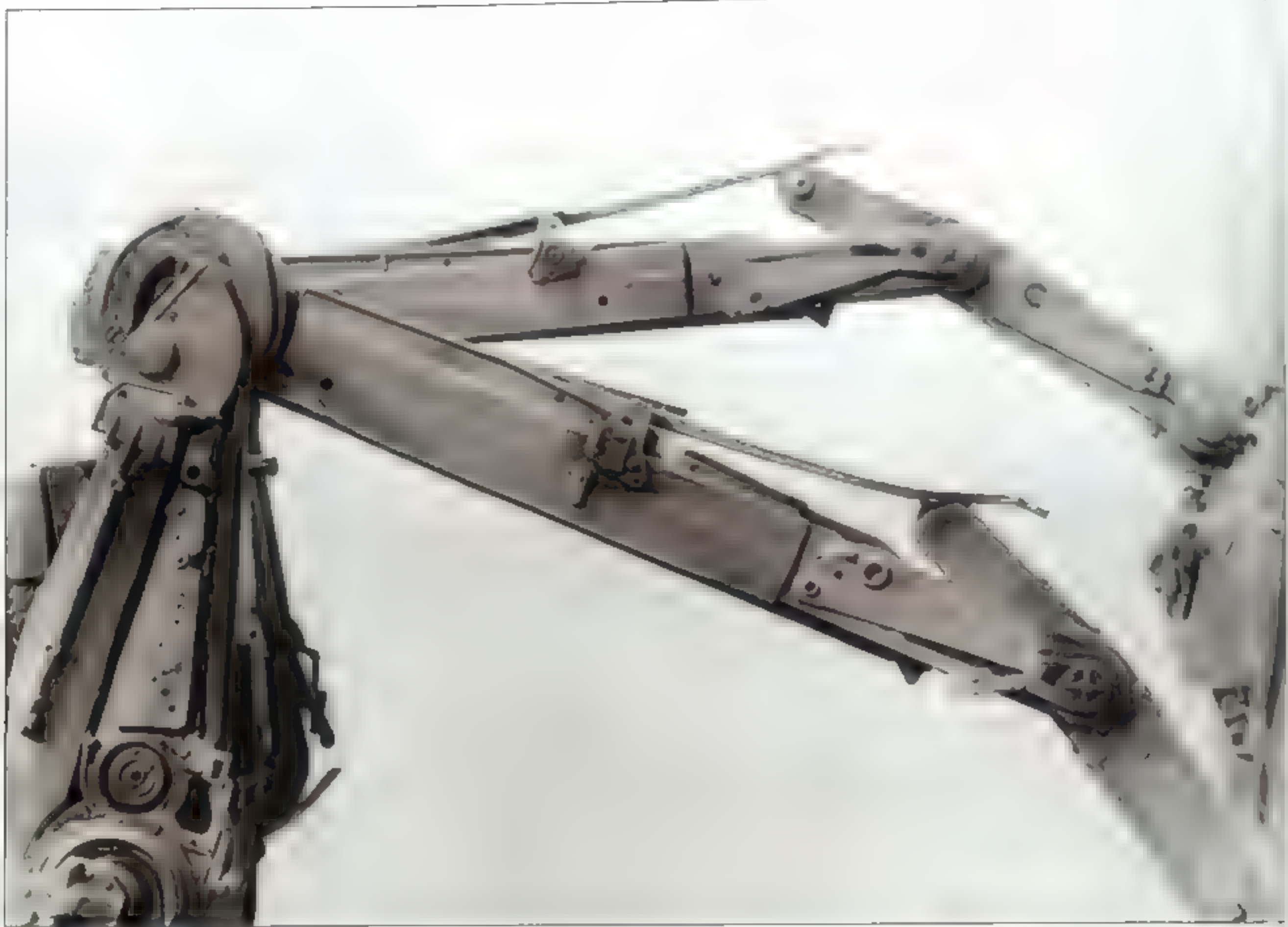
AT-ST（全地形対応偵察トランスポート）

全地形対応偵察トランスポートことAT-STウォーカーは、AT-ATと比べると威嚇的要素は少ないが、ホスの戦いやエンドアの戦いで活躍した。この2人乗りで2脚歩行のトランスポートはスカウト（偵察用）・ウォーカーとも呼ばれる。AT-STはAT-ATに随伴することが多く、巨大なボディのAT-ATの脚をかいくぐろうとする敵の歩兵を掃討する役目を果たした。製造元はクワット・ドライブ・ヤード。

映画公開当時はチキン・ウォーカーと呼ばれ、わずかしか登場シーンがなかったにもかかわらず大人気を博した

本ページ ミニチュアの頭部上面と正面 これらの写真撮影のあと 頭部表か手直しされて撮影に使われた

本ページ　AT-STの頭部下部に装着されているブラスターとその基部のアップ

AT-STの頭部右側面を下方からとらえたショット。

胴体部下面を中心にした
クローズアップ

本ページ　AT-STの頭部左側面に装備している軽ブラスター・キャノン（写真は砲身が欠損している）

AT-STの頭部後面

脚部と胴体の接合部のクローズアップ
間にある蛇腹状のパーツが見える。

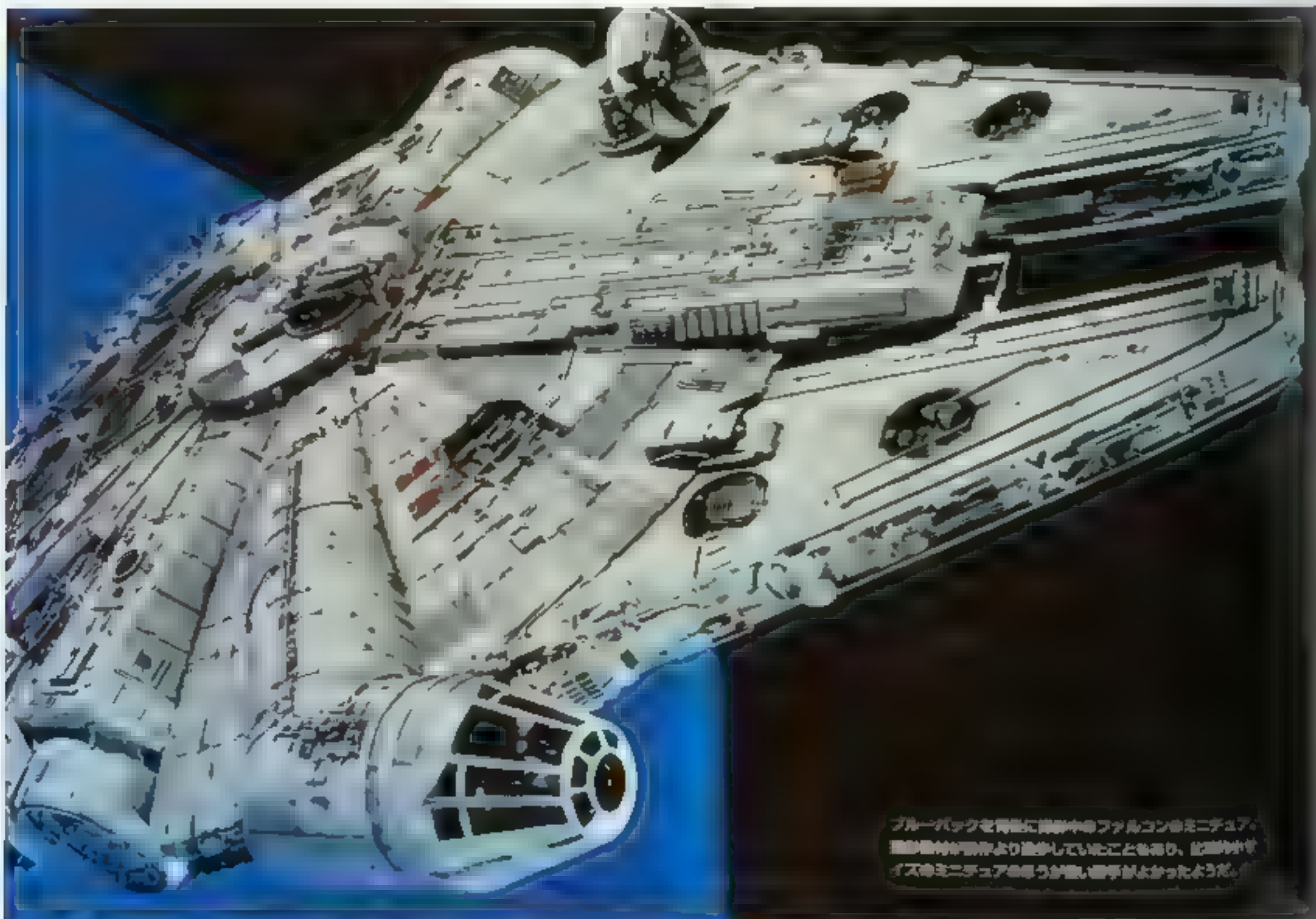
本ページ　未完成の頭部と脚部右側面。このAT-STも片面仕上げのミニチュアであった。1980年にバランタインブックスから発売された『帝国の逆襲 スケッチブック』に掲載されたジョー・ジョンストンの解説によると、ドライバーは1名と書かれている（そのため明確に2人乗りだった『エピソード6』版より頭部は小さい？）。

胴体にあたるエンジン部のアップ（上写真）と一番太い脚部第1フレーム

本ページ　脚部第2フレーム（上写真）と第3フレーム。
「エピソード6」に登場したAT-STはこの両フレームの長さが短く、そのため操縦部までの高さが低くなっている。

本ページ，AT-STの足首。この足首全体のパーツは，旧MPC社製タイ・アドバンストx1のパーツをほとんど加工せず流用していることは，熱心なSWモデラー間では有名な話

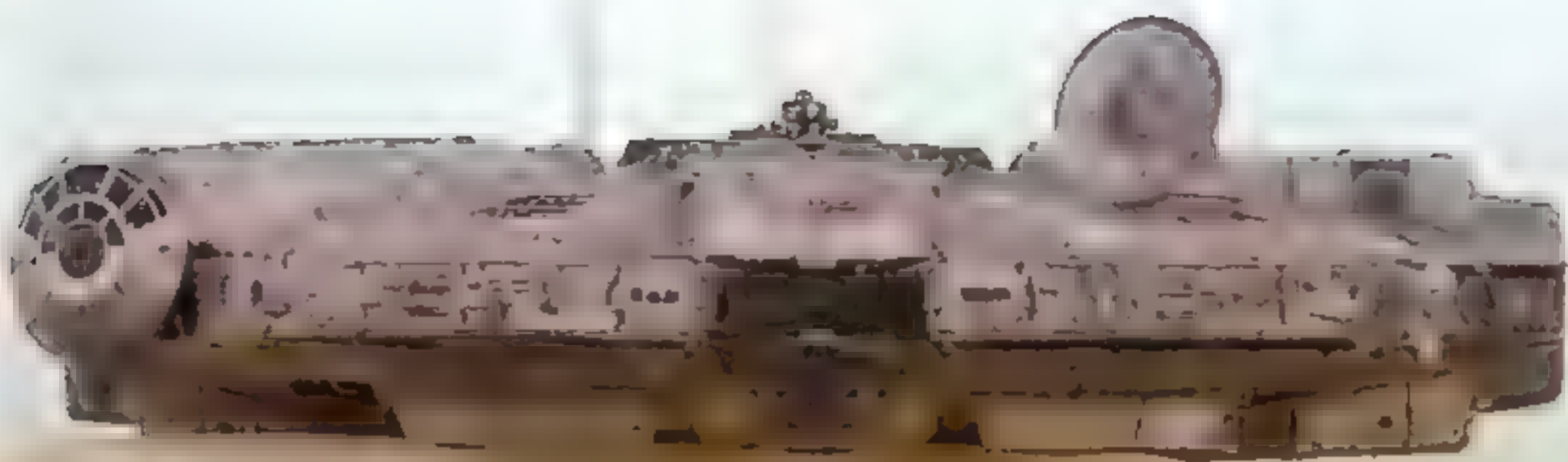
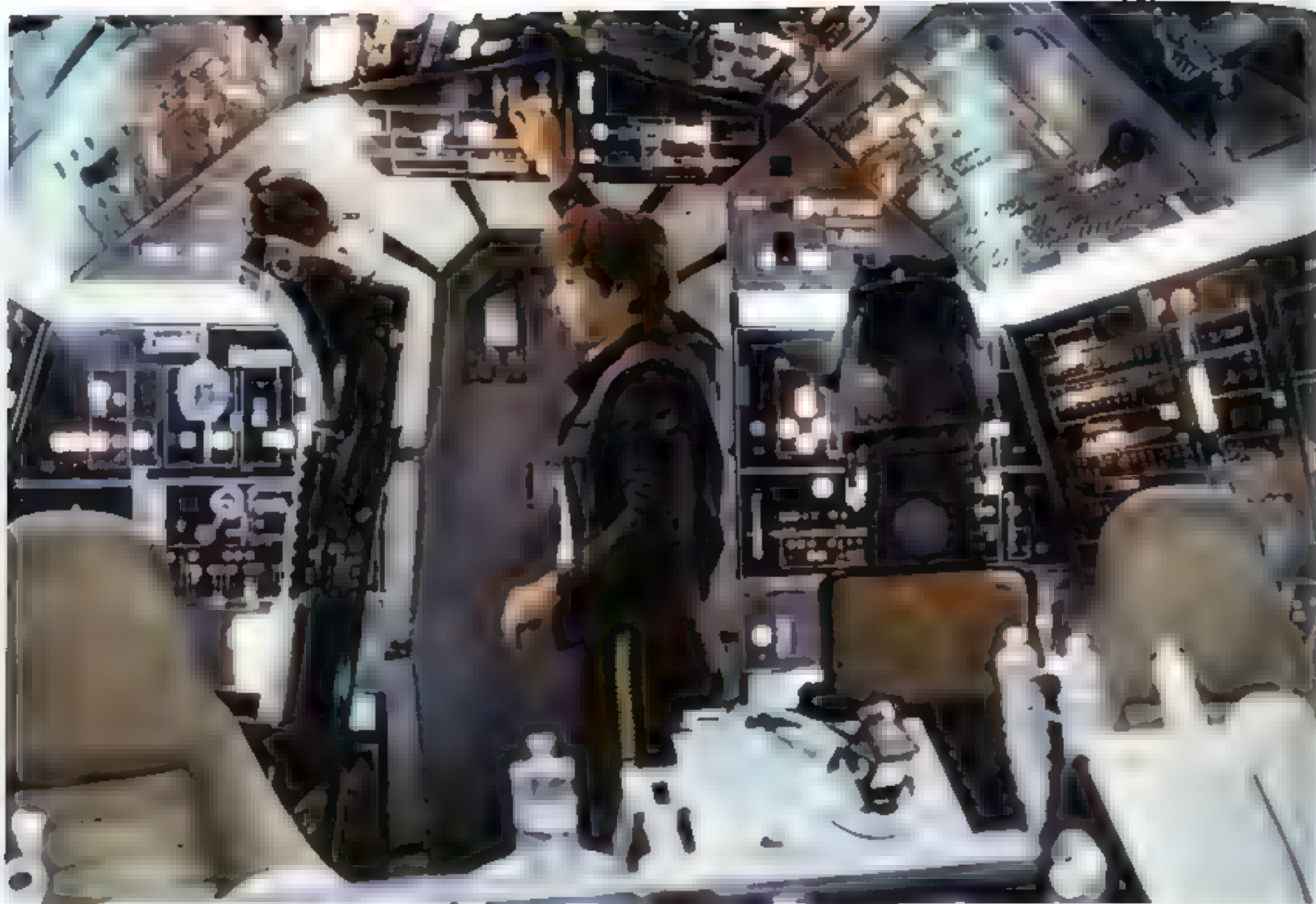
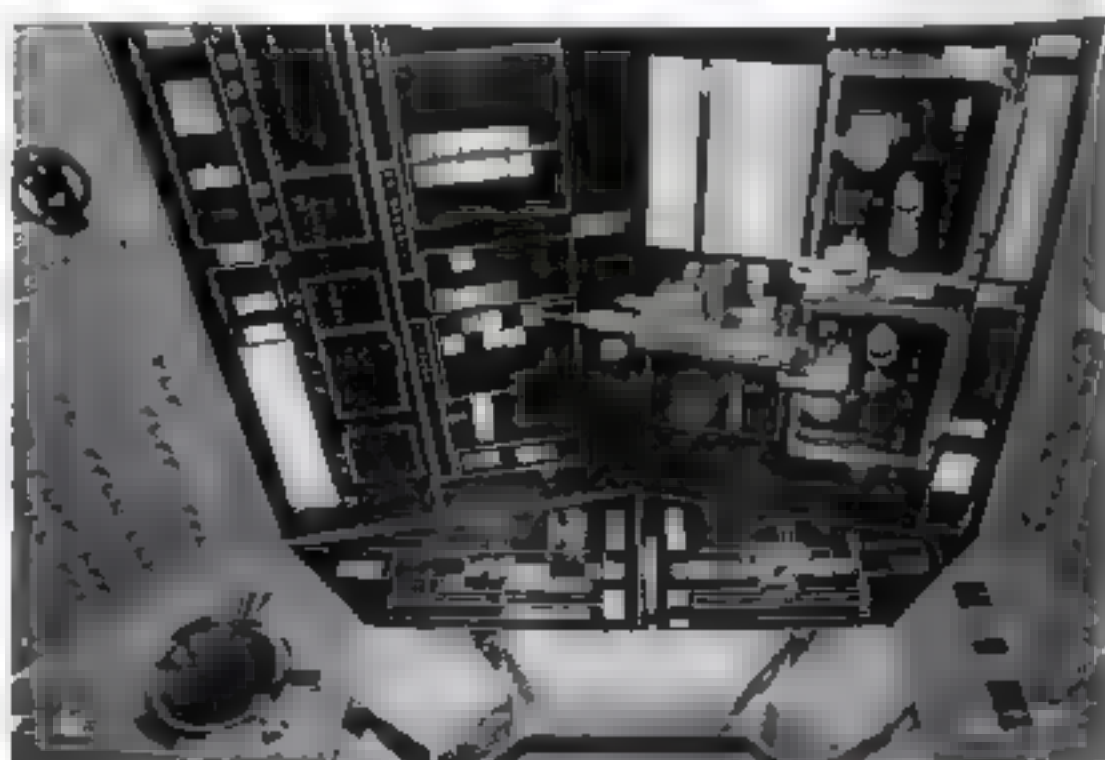
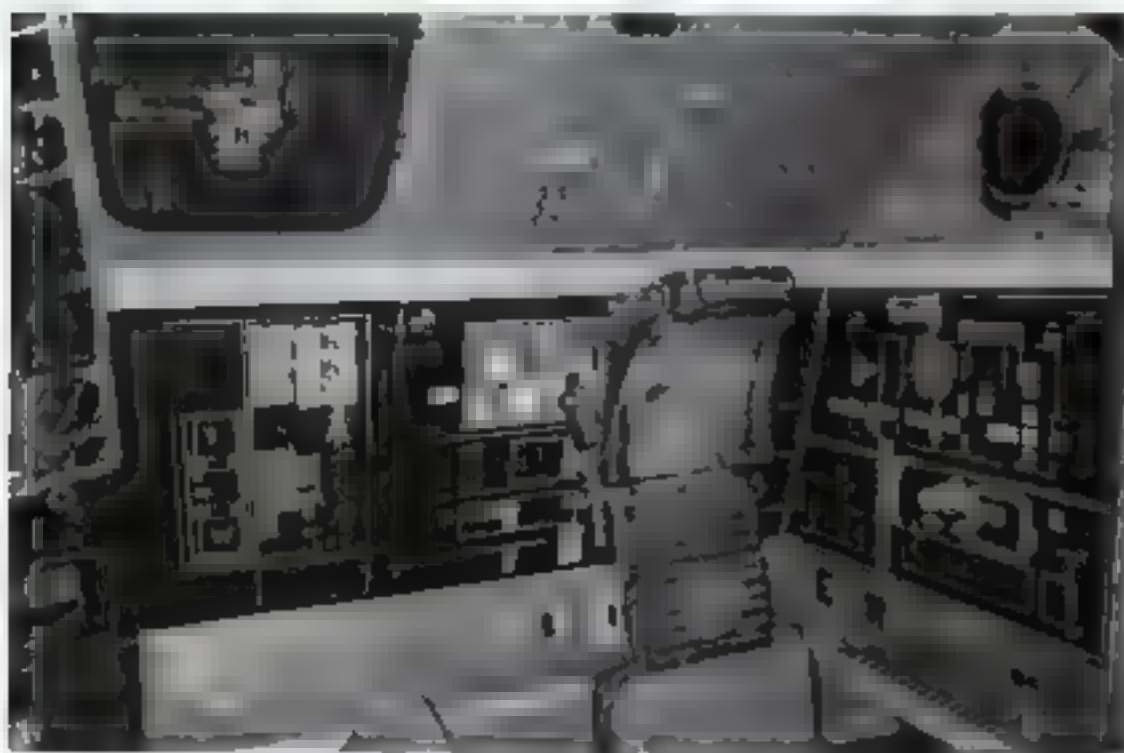
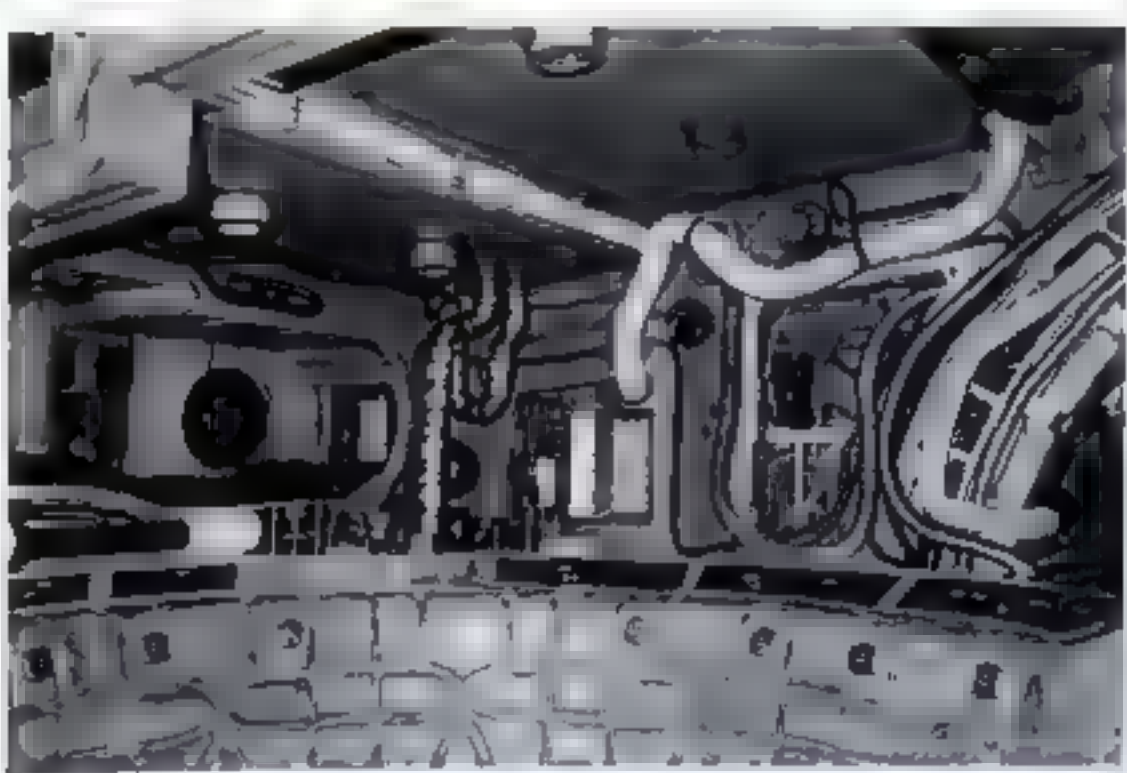
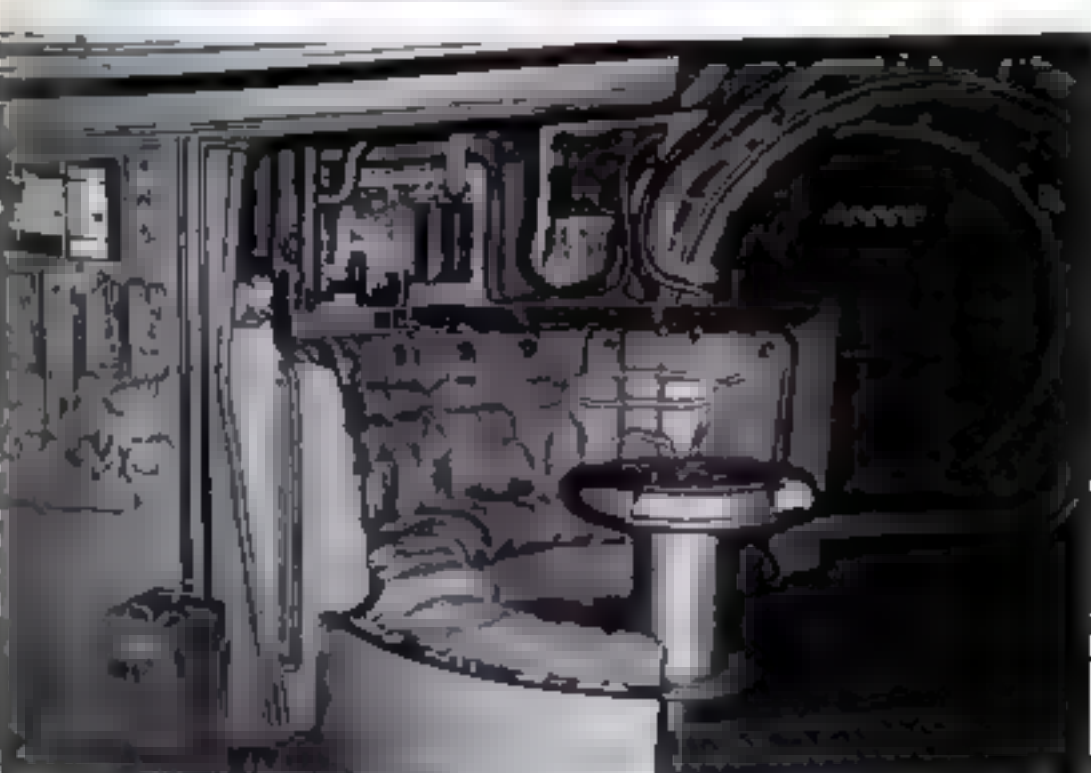
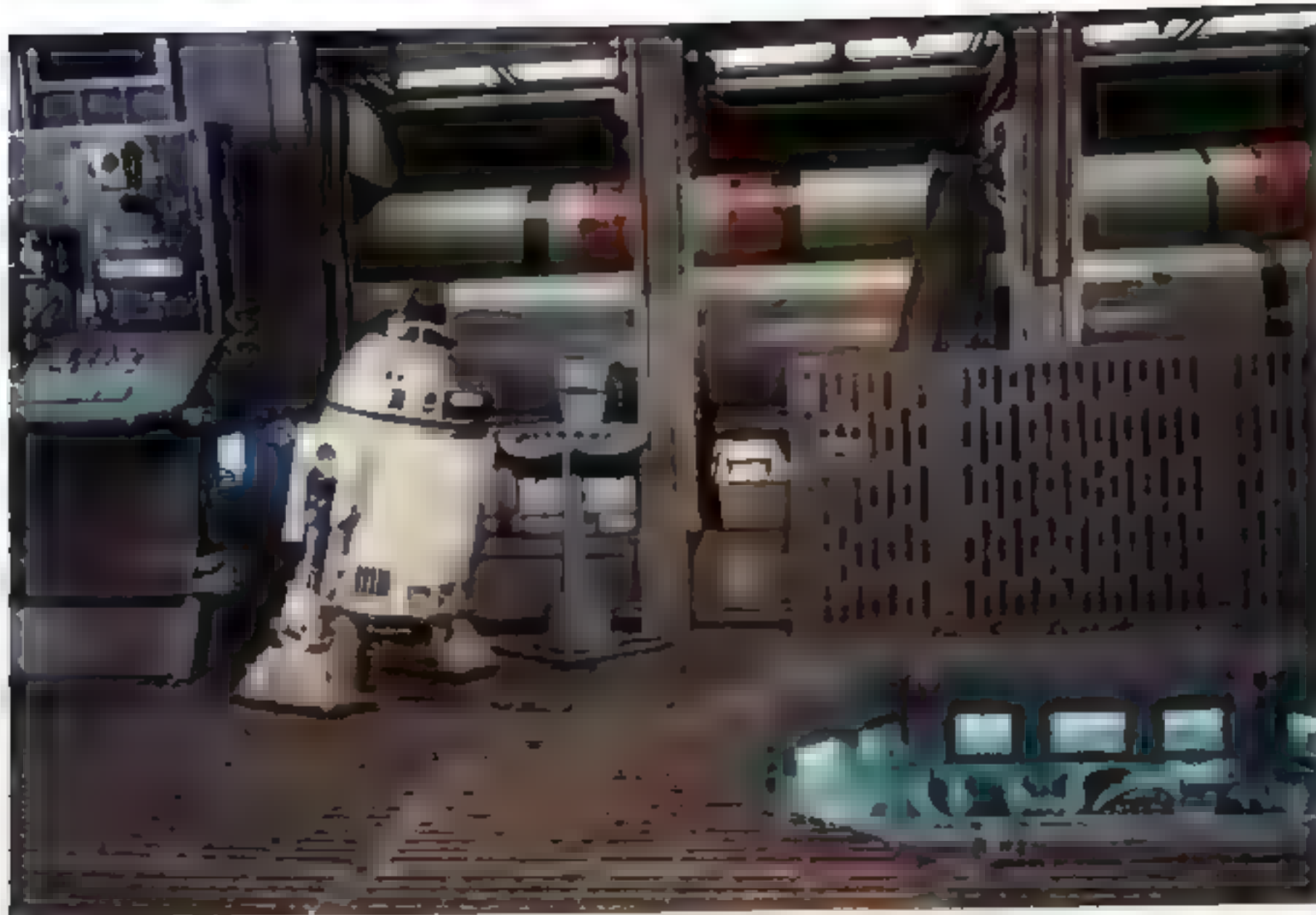
Millennium Falcon ミレニアム・ファルコン

プリンセス・レイアとC-3POを乗せて、ハン・ソロ船長と副操縦士のチューバッカはミレニアム・ファルコンでエコー基地から脱出した。ミレニアム・ファルコンはコレリアンYT-1300軽貨物船を大幅に改造した銀河最速のポンコツ船だが、長年にわたって歴代オーナーたちがこの船に特殊な改造を施し続けてきた結果、スピードやシールドなどの性能強化は著しいを超えて明らかに違法というレベルにまで達している。これらの追加装備により、再調整されたハイパードライブは頻繁に故障し、惑星ホスから脱出する際も超光速航行はできなかった。ハン・ソロは何とか帝国の追撃を振り切り、ファルコンの前の持ち主だった旧友ランド・カルリジアンの元に向かった。

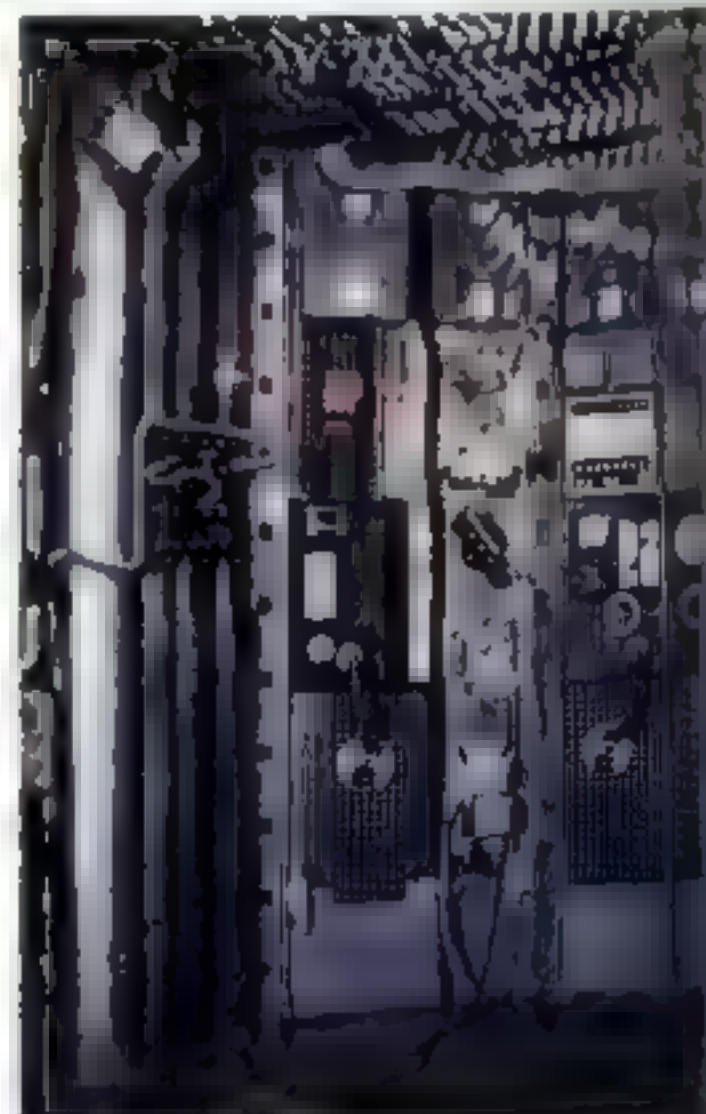
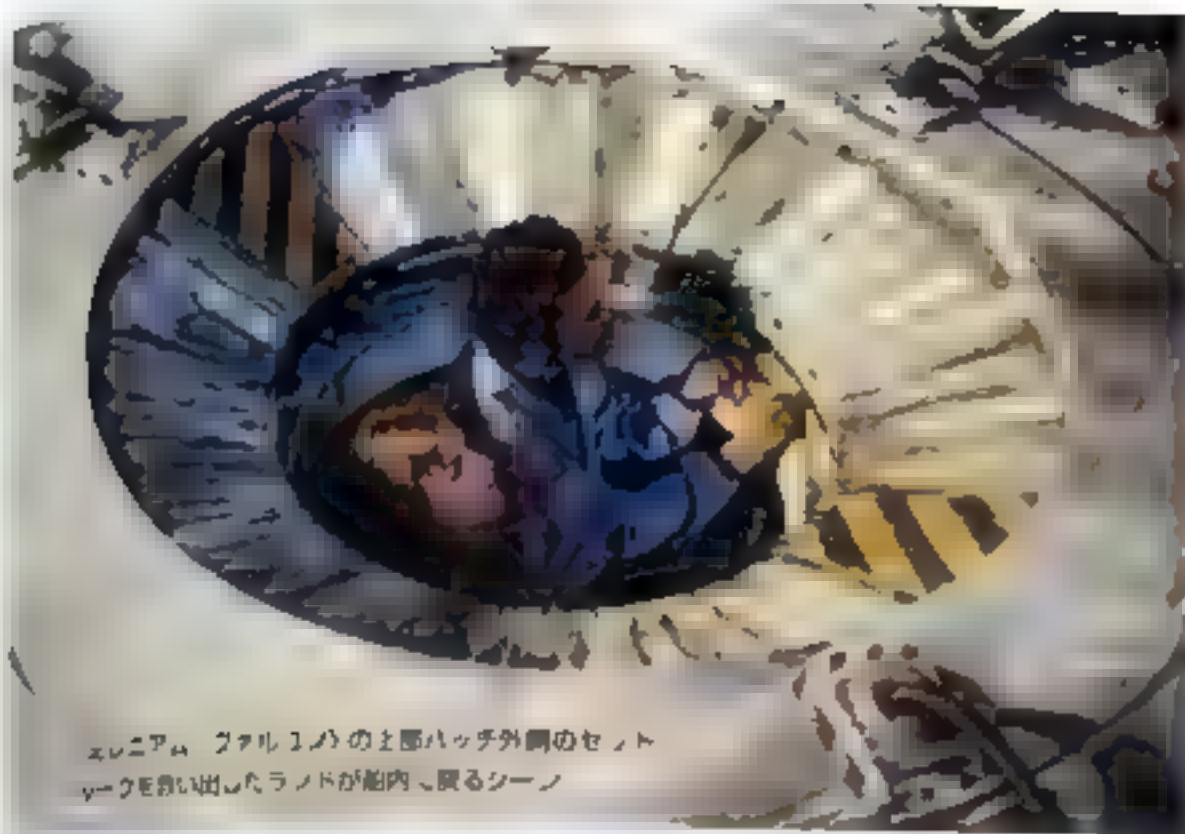
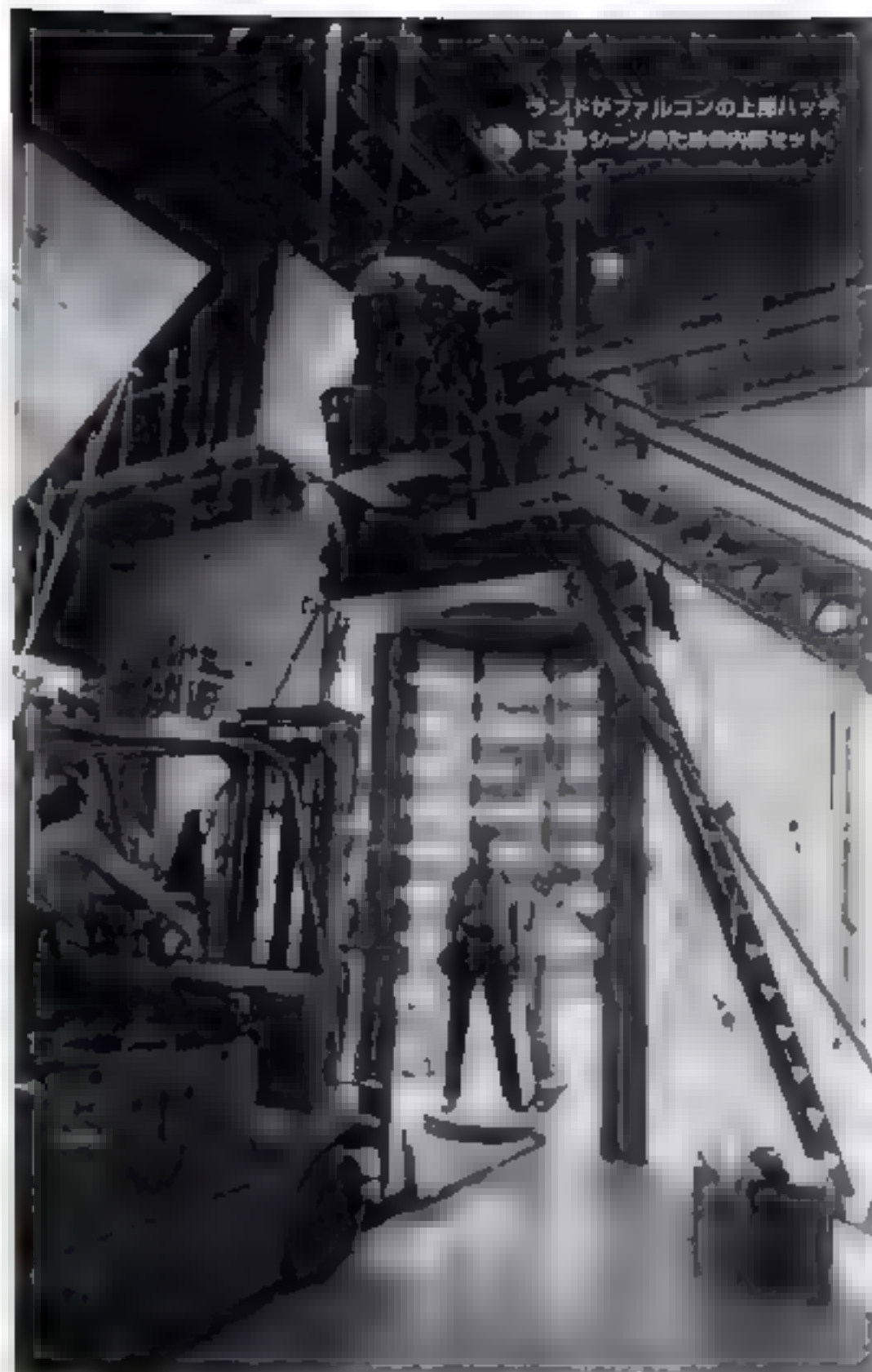
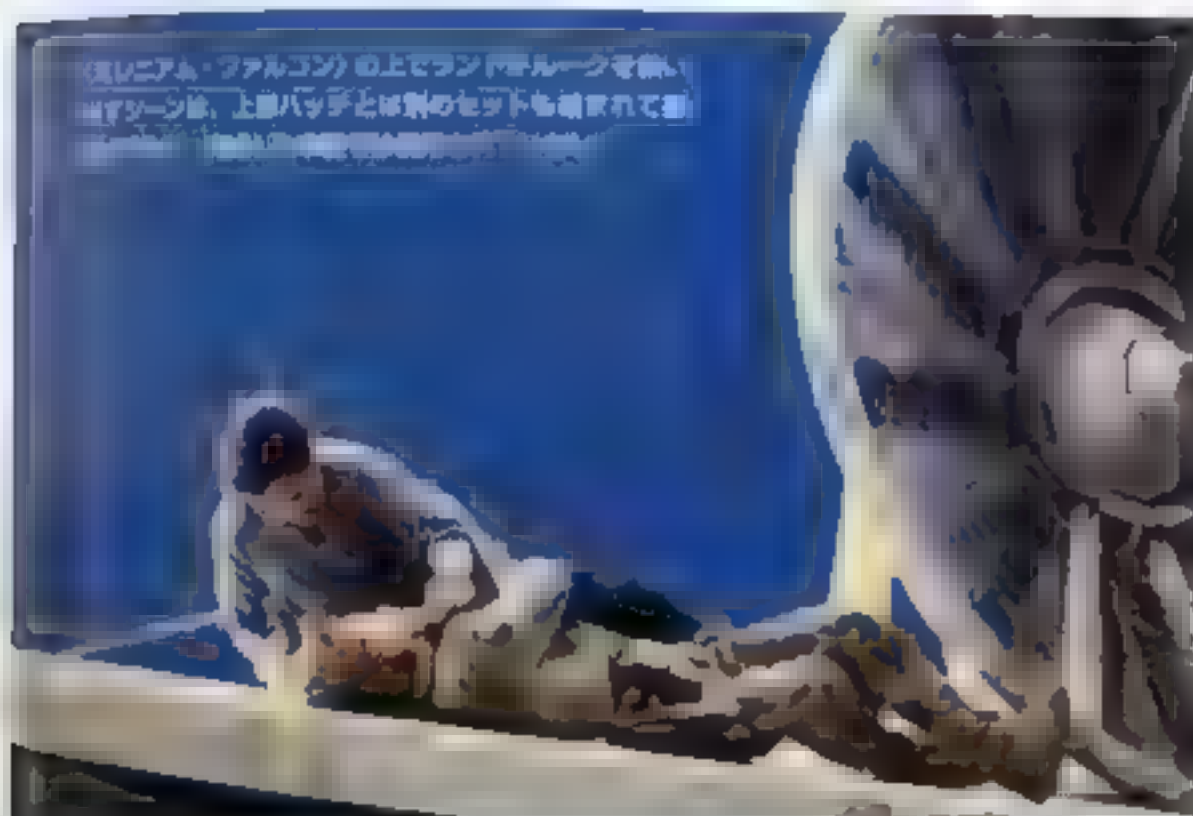
ミニチュアを側面から見た貴重なショット。劇中のファルコンのミニチュアがあまりに大きすぎたため、本作用に約半分の大きさで作り直された。

ブルーバックを背景に撮影中のファルコンのミニチュア。撮影技術が前作より進歩していたこともあり、比較的小サイズのミニチュアのほうが扱い勝手がよかったようだ。

ブルーバック撮影中のファルコン。あとでブルーバックと一緒に消す青い支柱に取り付けられているのがよくわかる。

上側の反対側から撮影された〈ミレニアム・ファルコン〉の下部。

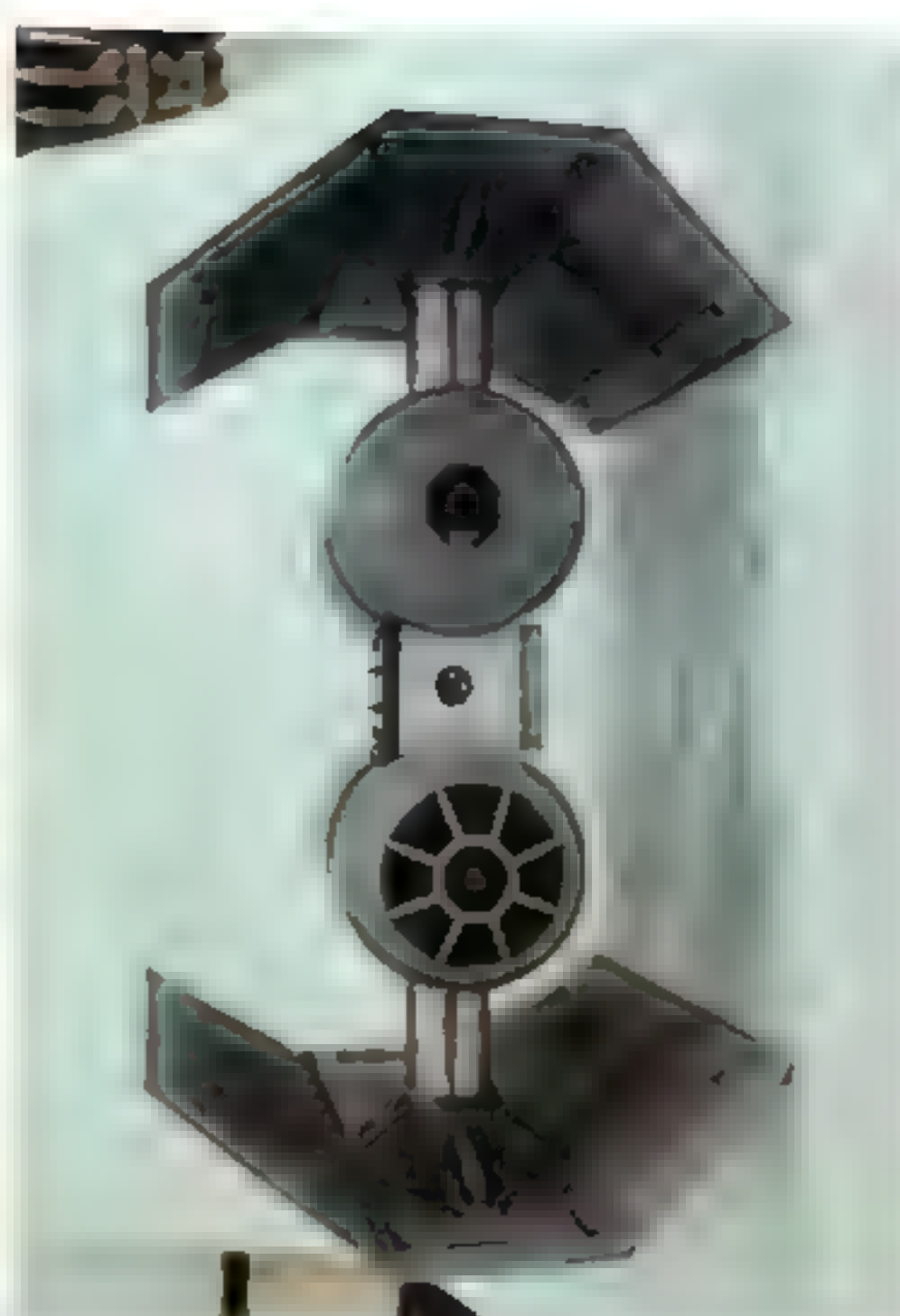
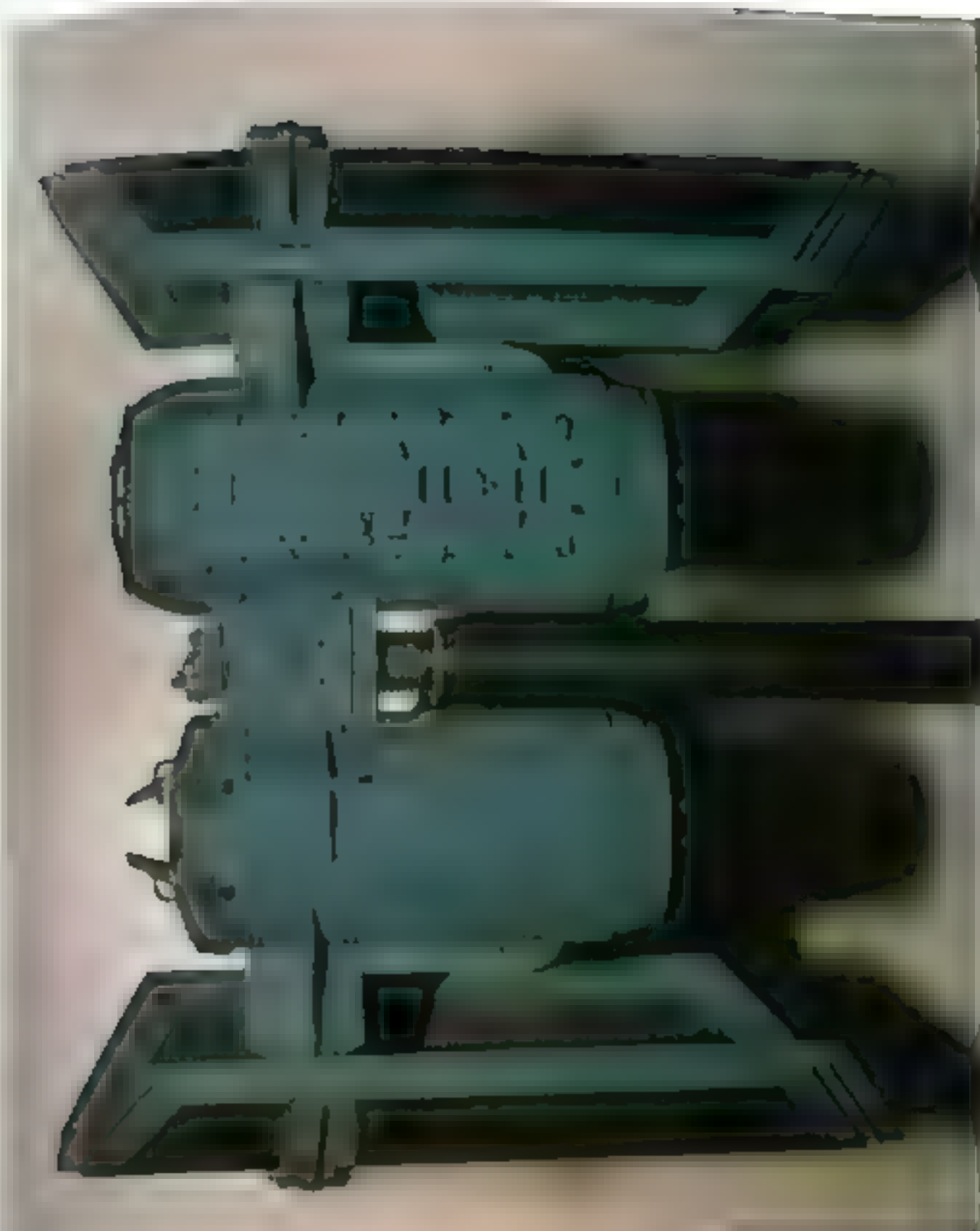
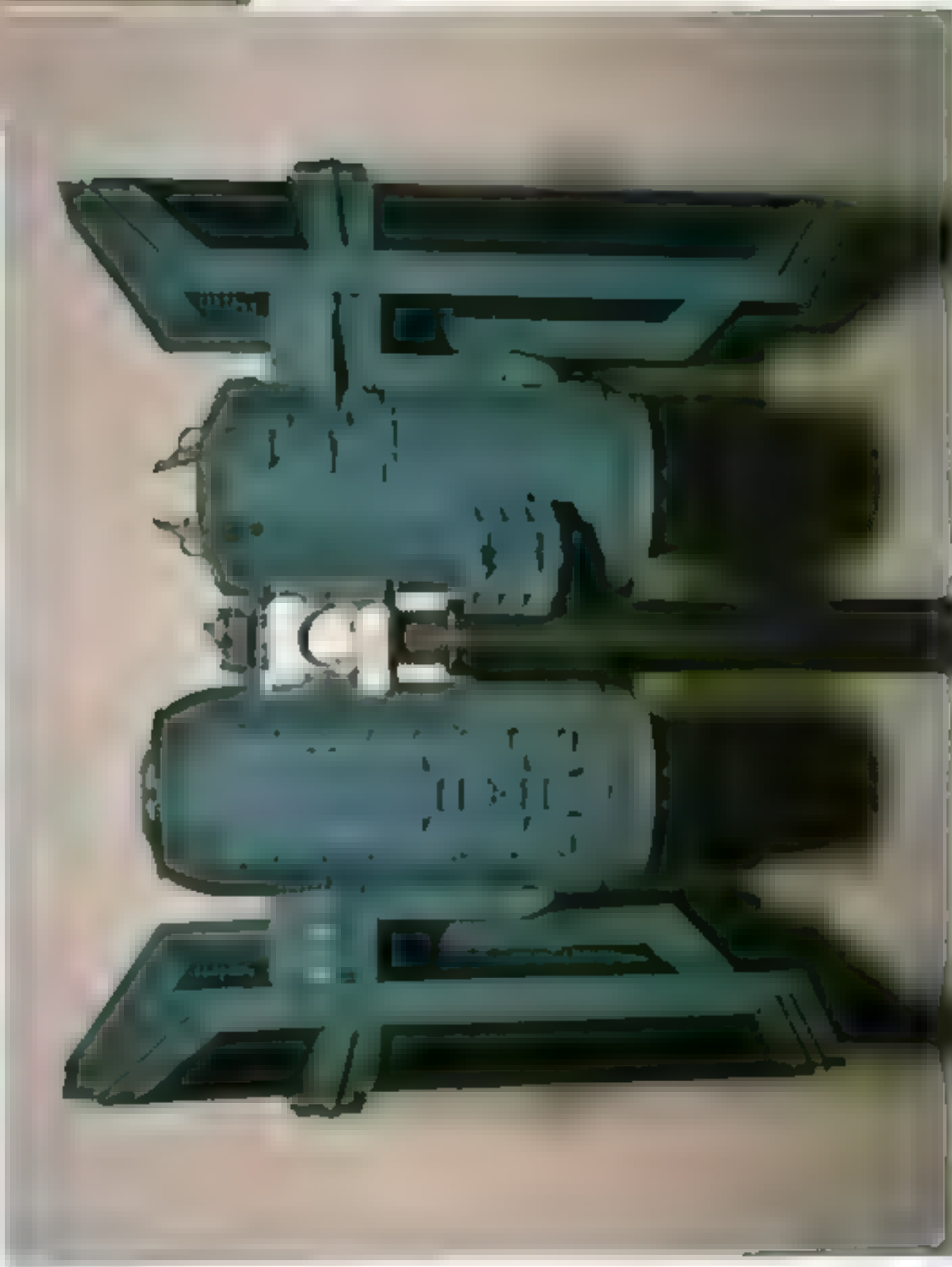
本ページ、右ページ、これらは近年撮影されたものである。普段ミニチュアは展示用のベースに固定されており、特に下面がここまで鮮明に見えている写真は珍しい。

218ページまで 〈ミレニアム・ファルコン〉はコクピットのセットも本作のために新たに作り直され、若干フロアー部分が前後に長くなっている。下写真4点は各方角から撮ったコクピットの計画図

ミレニアム・ファルコン内部のセット。上写真の左側が船の前方に当たる。前方にも後方と同じように円状の構造物がある（中段左写真）。パッセンジャー・シートも新たに作り直したものが使われた（下段写真2点）

本ページ：こちらはミレニアム・ファルコン内部セットの後方区画。後方の壁面にも太い筒状の構造物が2本通っている

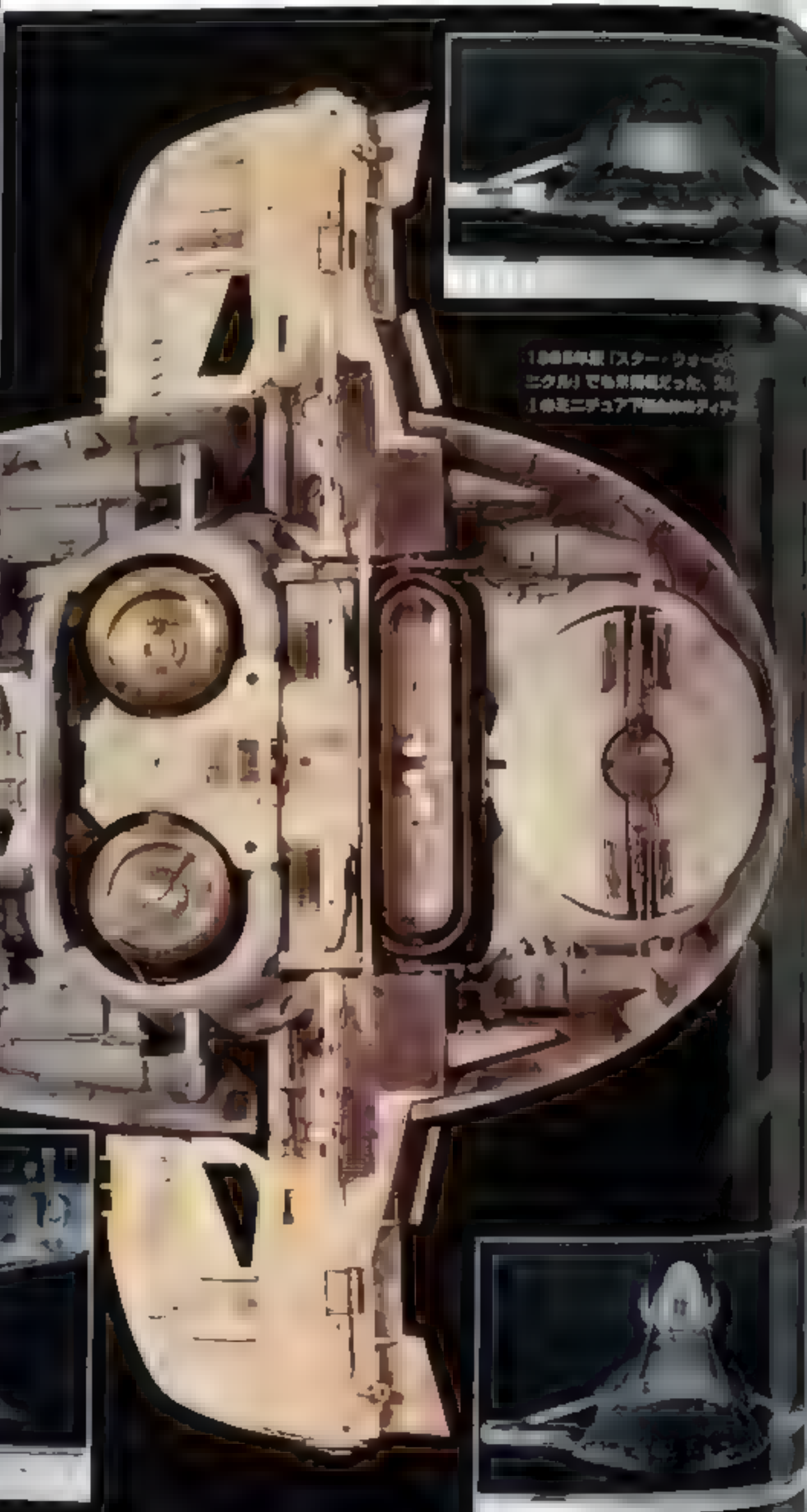
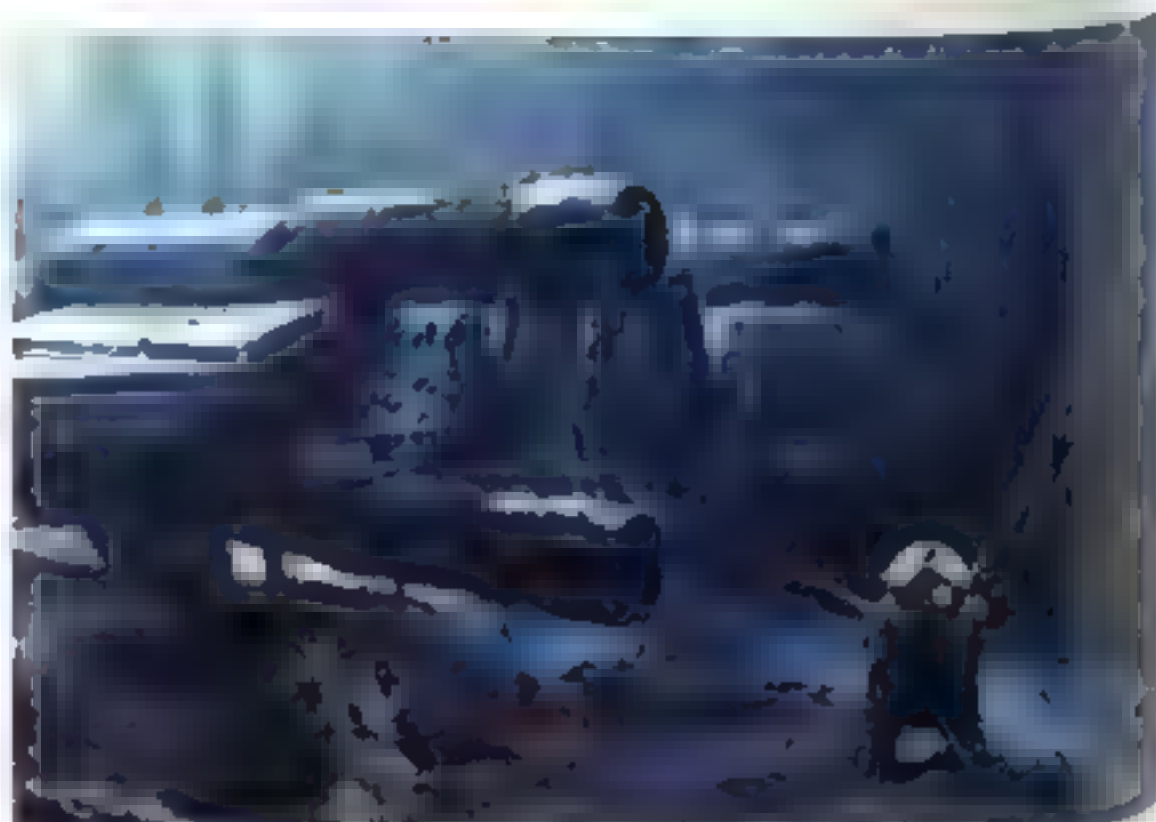
ハン・ソロ、レイアとチューバッカはファルコンに乗りエコー基地から脱出したが

ハン・ソロはハイパードライブの起動に失敗し、[illegible]を殴ってまでして再起動させようとした

ハン・ソロがレイアに迫った小部屋の全景。この小部屋はフロアーの左側後方にある

TIE Bomber タイ・ボマー

銀河帝国軍のタイ・ボマーは大型目標の破壊や精密爆撃に使用されたタイ・シリーズの爆撃機である。双胴型の特異な形状で、敵パイロットからはたびたび「デュース」（同じものの2個続き）と揶揄されるようになった。タイ・ボマーはその大きなボディがネックとなり、他のタイ・シリーズに比べ、速度も機動性も極端に劣るものとなっている。全長7.8メートル。

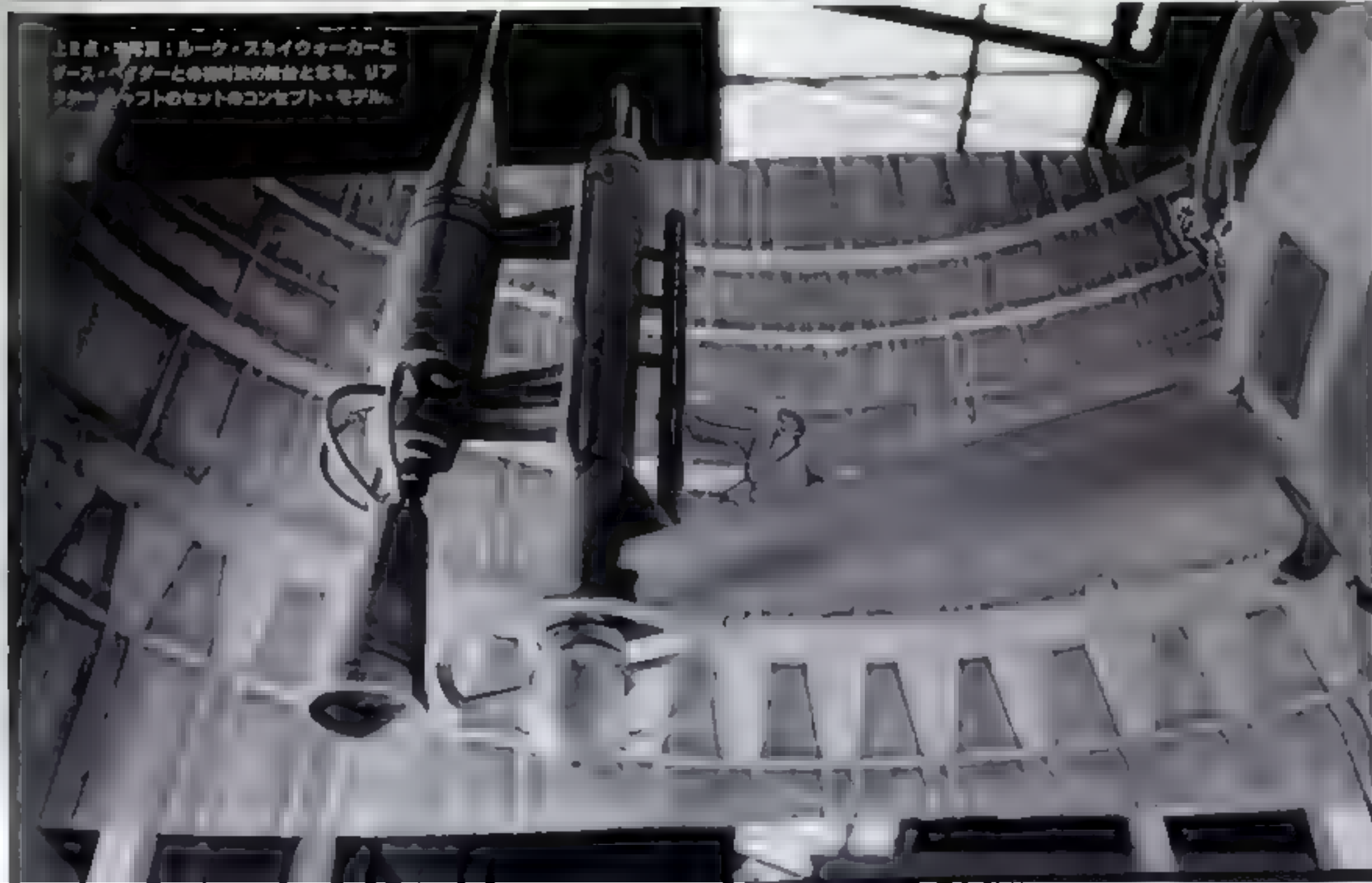
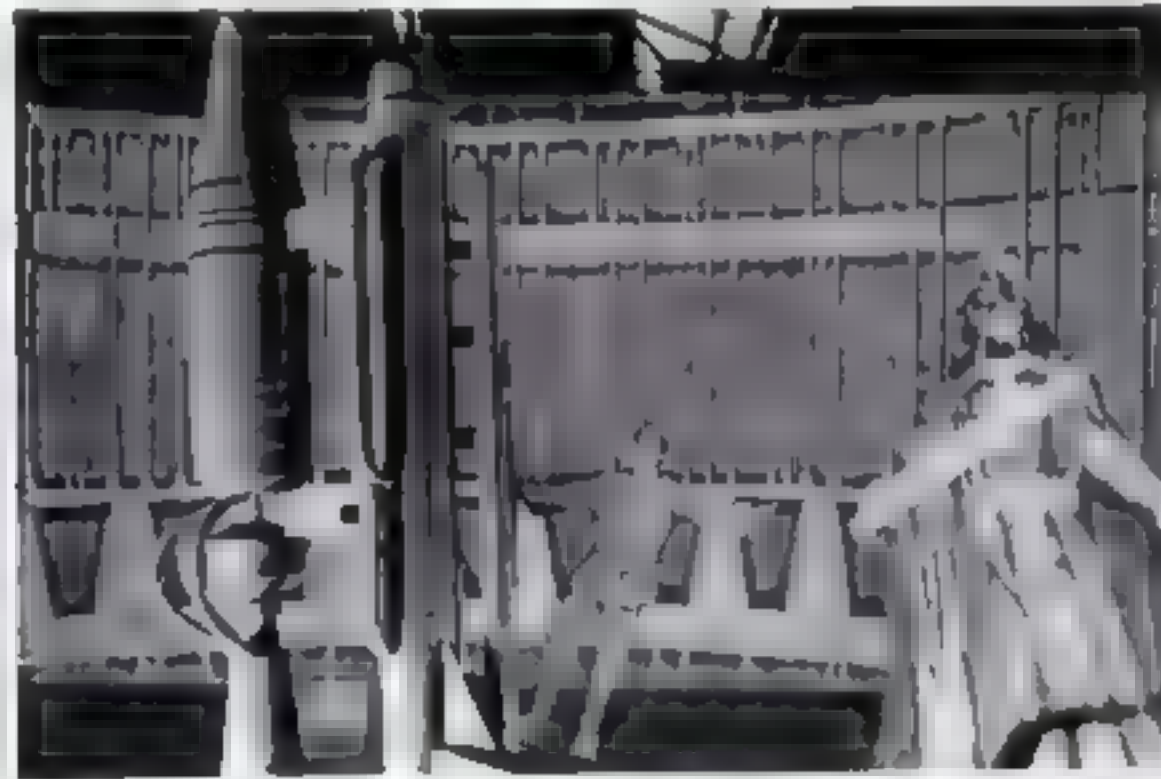
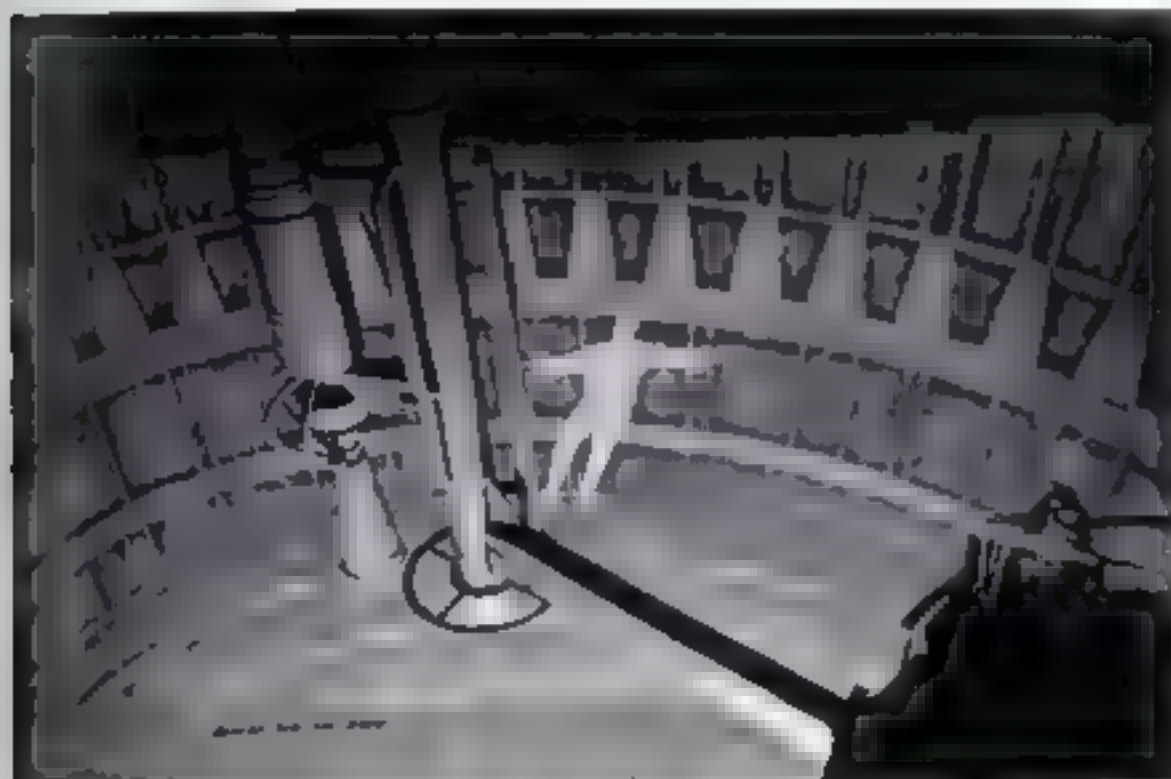
撮影用にモノクロで塗られたタイ・ボマーの前面。ミニチュアの胴体部分の直径は約50.8ミリで、各ディテールは市販プラモデルのパーツを貼り付けて表現されている。

ミニチュアを後方からとらえた写真。プラモデルのパーツをうまく組み合わせて作られた主翼内側のディテールや、胴体部に施されたモールド等が鮮明に見える。

上写真はミニチュア制作途中の写真で、主翼の取り付けには金属パイプが使われている。左および下3点の写真は1990年代に撮影されたものだが、まだオリジナルに近い保存状態が保たれている

Slave I スレーヴI

スレーヴIはマンダロアの装甲服に身を包んだバウンティ・ハンター、ボバ・フェットが使用したことで銀河に名を馳せた宇宙船。クワット・システムズ・エンジニアリングが製造したファイヤスプレイ31級パトロール攻撃艇の改造型で、全長21.5メートル

左上から時計回りに上面、前面、後面、左側面の各アングルの写真

Cloud City クラウド・シティ

ハン・ソロは昔のギャンブル仲間ランド・カルリシアンが執政官をやっているという雲の惑星ベスピンのクラウド・シティにやってきた。しかし、ボバ・フェットからの情報を入手したダース・ベイダー率いる帝国軍もクラウド・シティに……

ハン・ソロやレイアをもてなす高級ホテルのような部屋のセットの初期コンセプト・モデル。

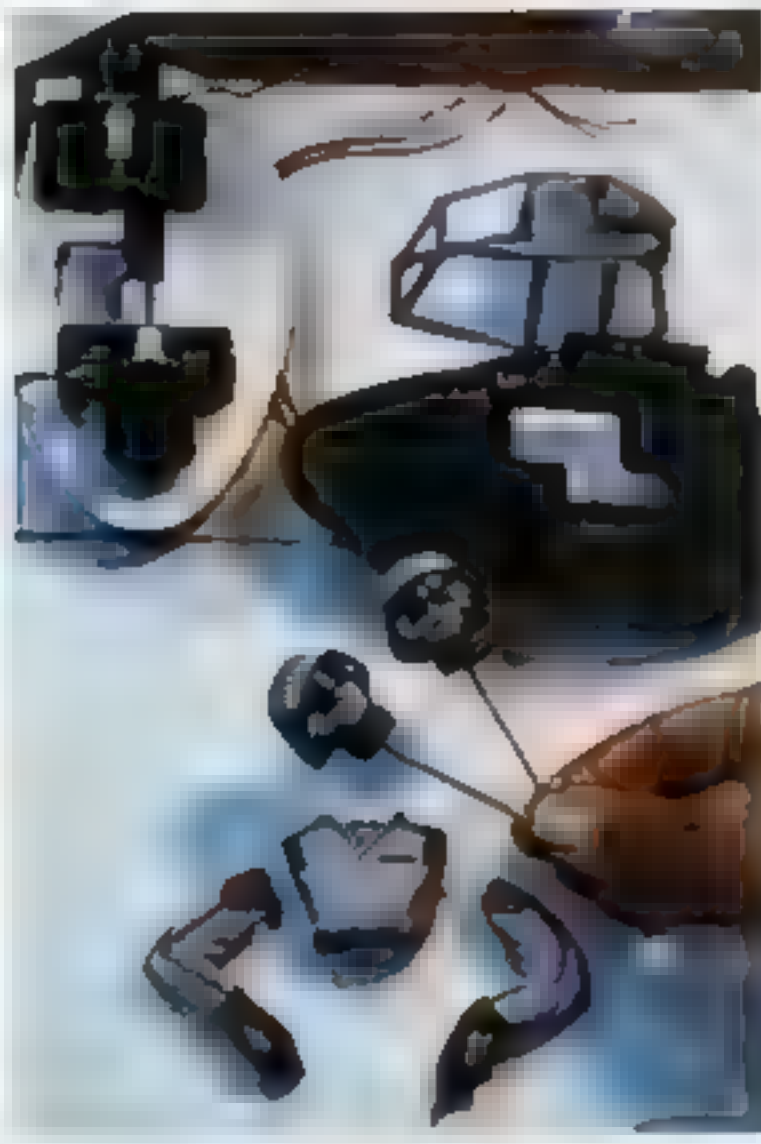
ハン・ソロの鉄人形が置かれている、カーボン冷凍室のセットの初期コンセプト・モデル。

上2点・左頁：ルーク・スカイウォーカーとダース・ベイダーとの対決の舞台となる、リアクター・シャフトのセットのコンセプト・モデル。

Cloud Car クラウド・カー

クラウド・カーは、ガス惑星ベスピンのクラウド・シティにあるベスピン・モーターズが製造する大気圏内専用の、宇宙空間を飛行する能力は持っていないリパルサークラフトである。その双胴の形状から「ツイン・ポッド・クラウド・カー」とも呼ばれる。また、ポッドにブラスター砲が装備されていることが多く、ベスピンの空の治安を守る任務に使用されている。全長7メートル。

クラウド・カーのミニチュア右側面。『スター・ウォーズ』に登場するビークルとして珍しく流線形のボディを持ったクラウド・シティのパトロール機。登場シーンはわずかであるが、個性的な機体として見る者に印象を残す。[illegible]

ミニチュアの正面。右ページ中段左写真は背面である。一見すると機体色はオレンジ1色に見えるが、よく見るとオレンジ系の3色で塗り分けられていることがわかる。当初は機体を青色にする案もあったが、ブルーバックでの合成に不都合が生じるためオレンジ色となった。

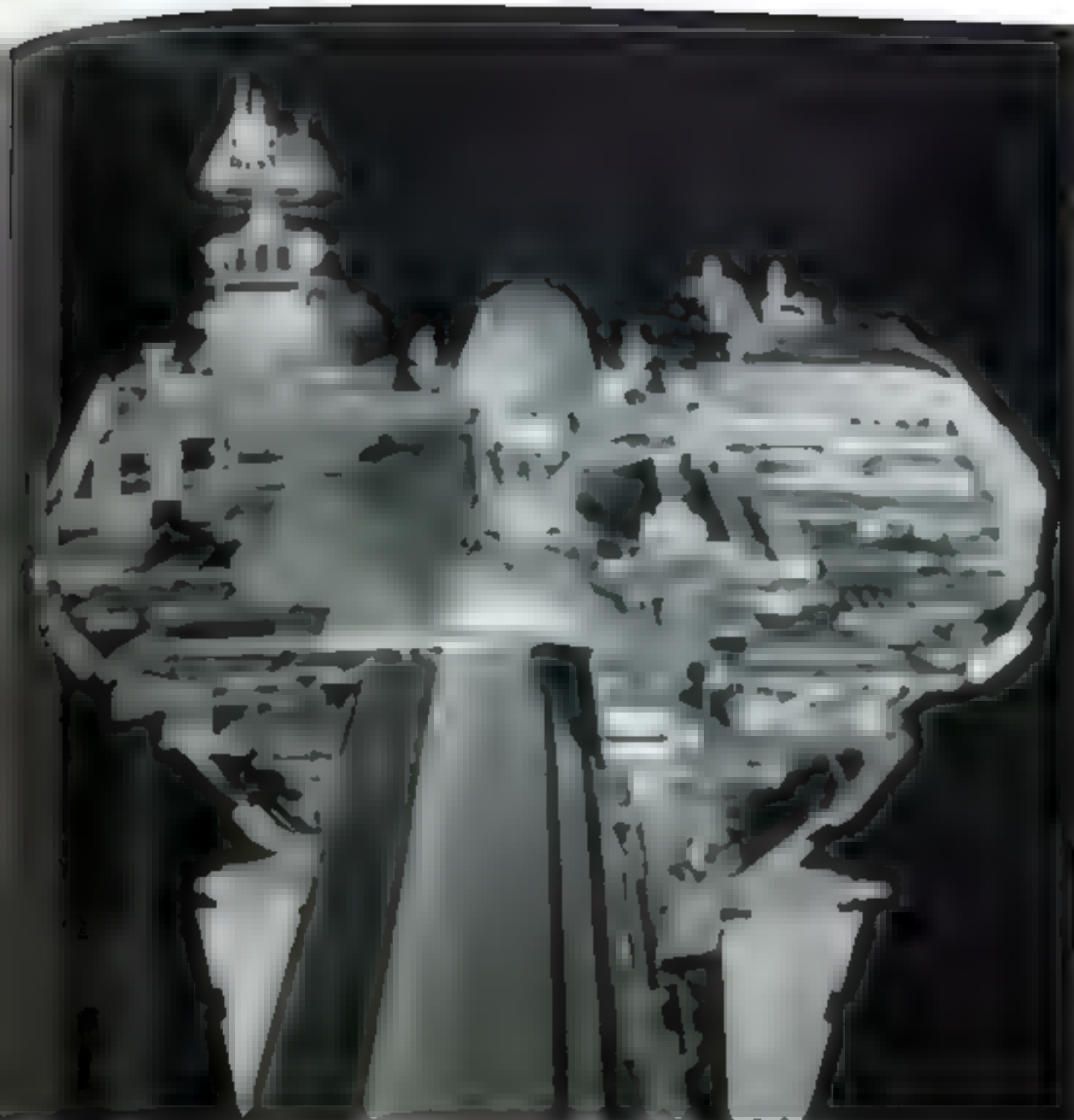
円形の機体を２つ並べて繋いで飛ばすというアイデアは現実にも古くからあり、かつて第二次大戦時にドイツが飛行機で実験したデザインであった。ほかのアイデア・スケッチを見る限り、「２人乗りの機体」ということは最初から決まっていたようだ。

中段右写真を見るとミ　チュアの内部にはギアが組み込まれており　これによりパイロットの首が動く構造になっていた　乗員のフライト　スーノの全身像は作られていないが　左図のようにイラストだけは描かれている

EF76 Nebulon-B Escort Frigate

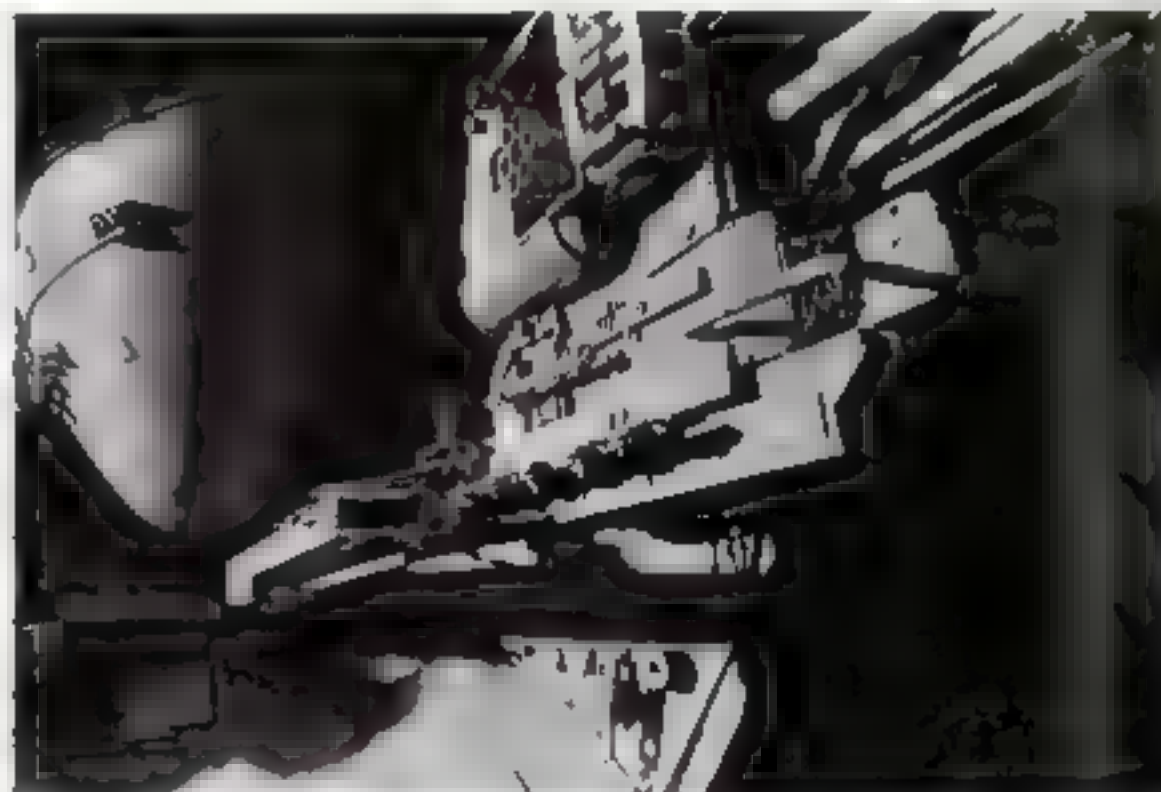
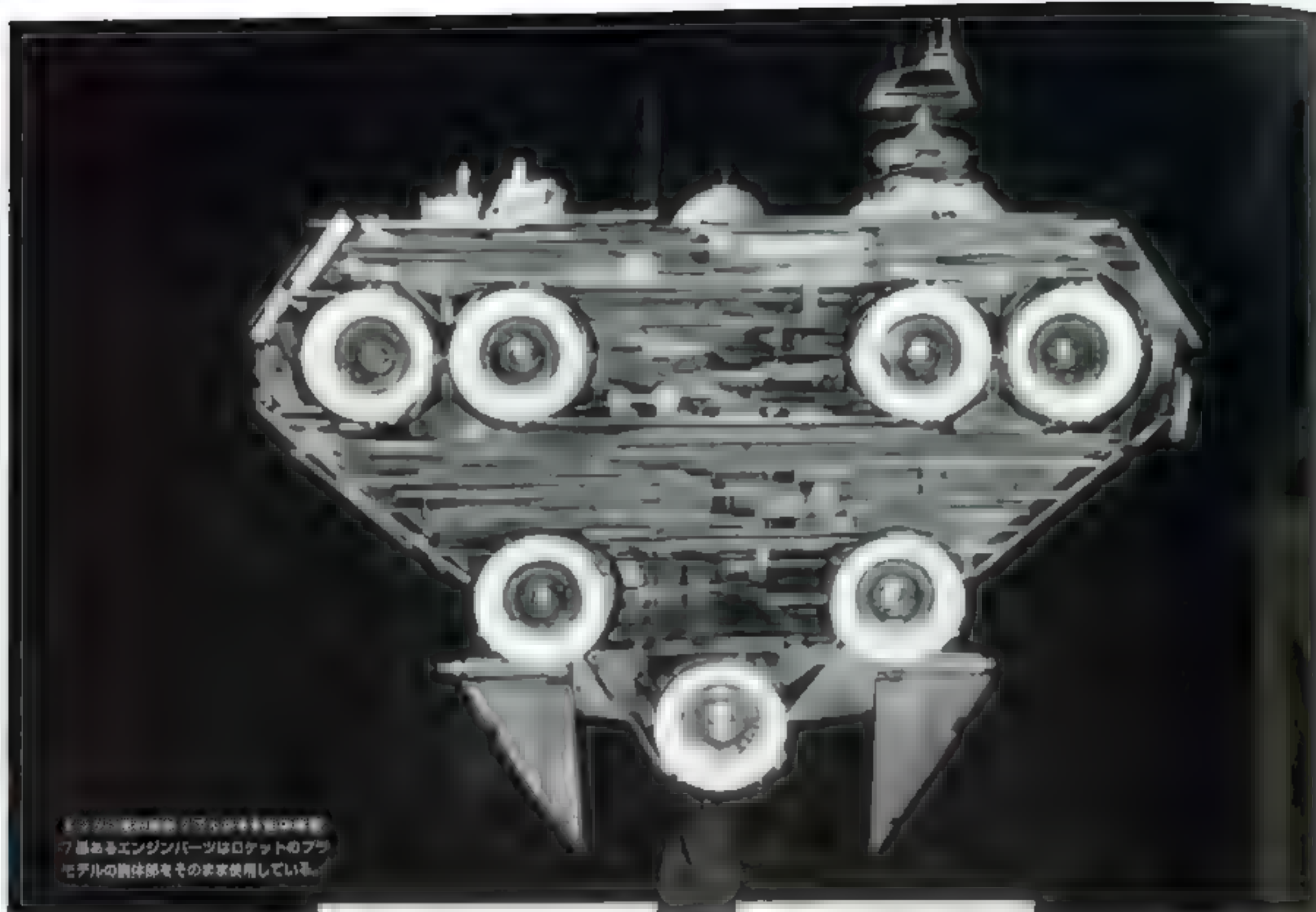
EF76ネビュロンB・エスコート・フリゲート

本来は帝国宇宙軍のためにクワット・ドライブ・ヤードが製造したEF76ネビュロンB・エスコート・フリゲート。この艦の本来の役目は反乱同盟軍の攻撃から帝国の大型艦船を護衛することだったが、皮肉にも反乱同盟軍が拿捕して自軍の艦として使用する場合が多かった。また、『エピソード5』の映画本編最後に登場するネビュロンBのように「病院船」としても使用されていた。全長300メートル。

劇中ではこのアングルの前方からカメラがゆっくりと移動して、停泊している〈ミレニアム・ファルコン〉を映し出すシーンがある。そのカットは劇場公開時には無く、すでに映画公開から2週間も経ったあとに「ファルコンの位置がわかりづらいので、追加撮影したい」とジョージ・ルーカスが言い出したため、公開中に追加されたものだった。当時のスタッフはルーカスが冗談を言っているものと思ったが、そのシーンは実際に追加され、背景の星とファルコンとの位置関係がわかりやすくなった。なお、近年ようやくこの病院船は〈リデンプション〉と命名された。

記録用にミニチュアの船体全体を写したモノクロ写真。デザインのモチーフはボート用の小型船外モーターである。誰も思いつかないその着想によって、この素晴らしい独特のデザインが生まれた。

上2点　エンジン部前面を上下からとらえた写真。巨大感を演出するため階層を多く作り　そこに市販のプラモデルから切り取られた窓や船外構造物をはめ込んで作られている

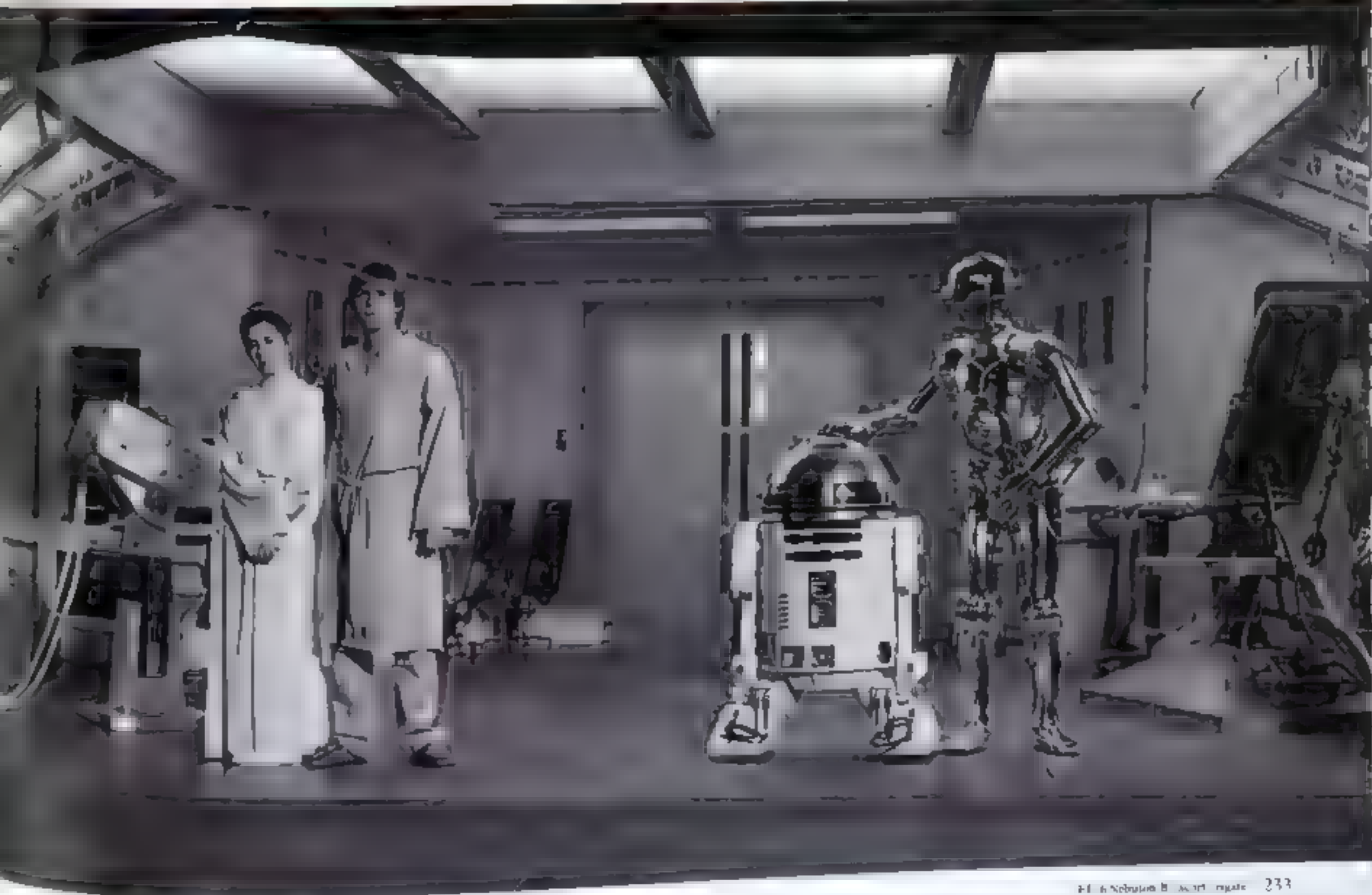
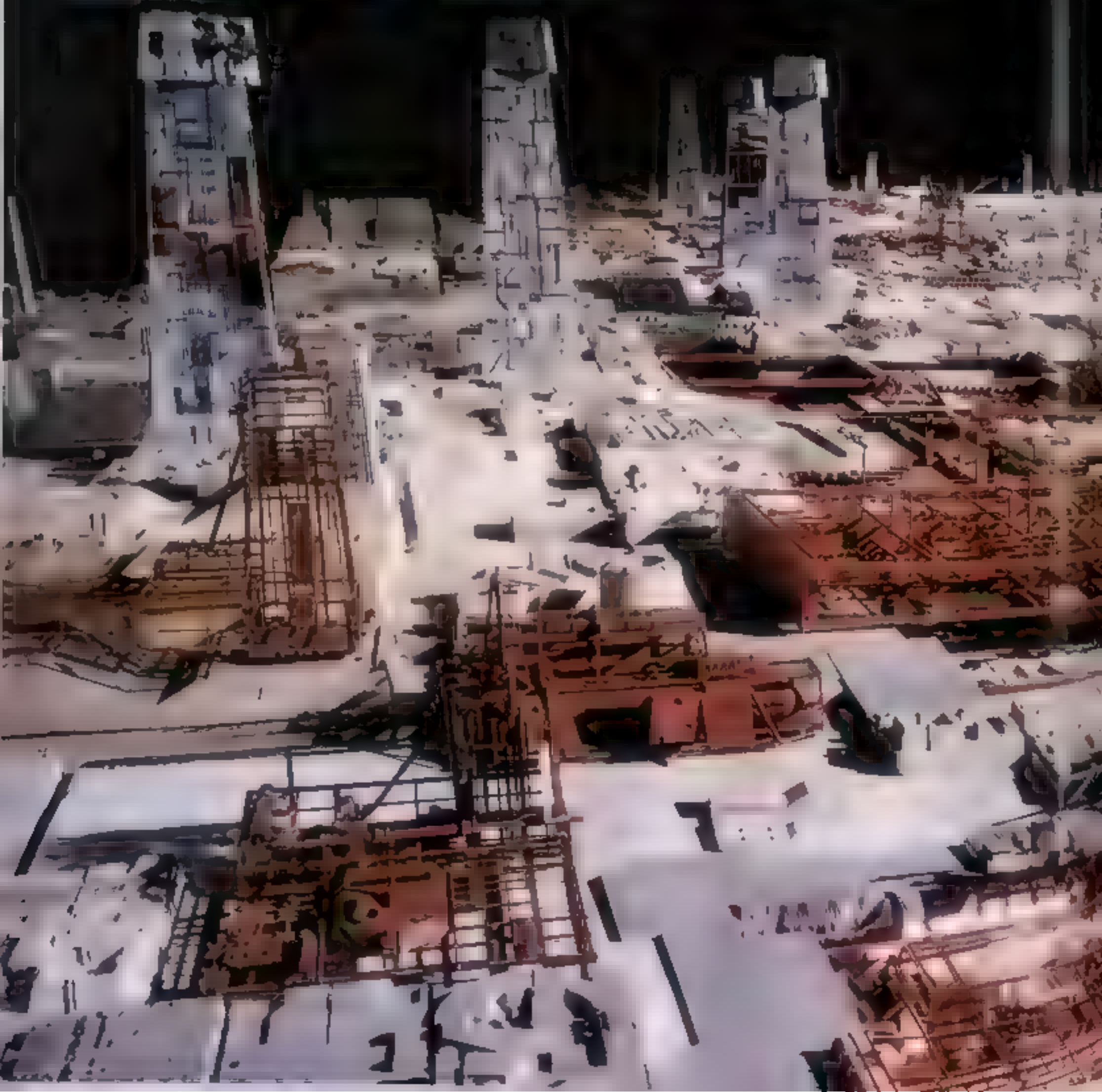
下　船首の先端を正面からとらえた写真　この部分は主に飛行機や艦船プラモデルのパーツを使ってミニチュアが作られている　向かって左側の船体右側面はこの時点では作られていない

[illegible]
7基あるエンジンパーツはロケットのプラモデルの胴体部をそのまま使用している。

CLOSE-UP MODEL
アップ用モデル

上4点　部分的に作られたアップ用モデルで　劇中では右ページの[illegible]部分に合成され使われた

本ページ：病院船内にある医療室の各セット写真。この医療室のセットでは、エコー基地にあった作戦室のイスや医療室機器、器具の一部などが組み替えられて使われている

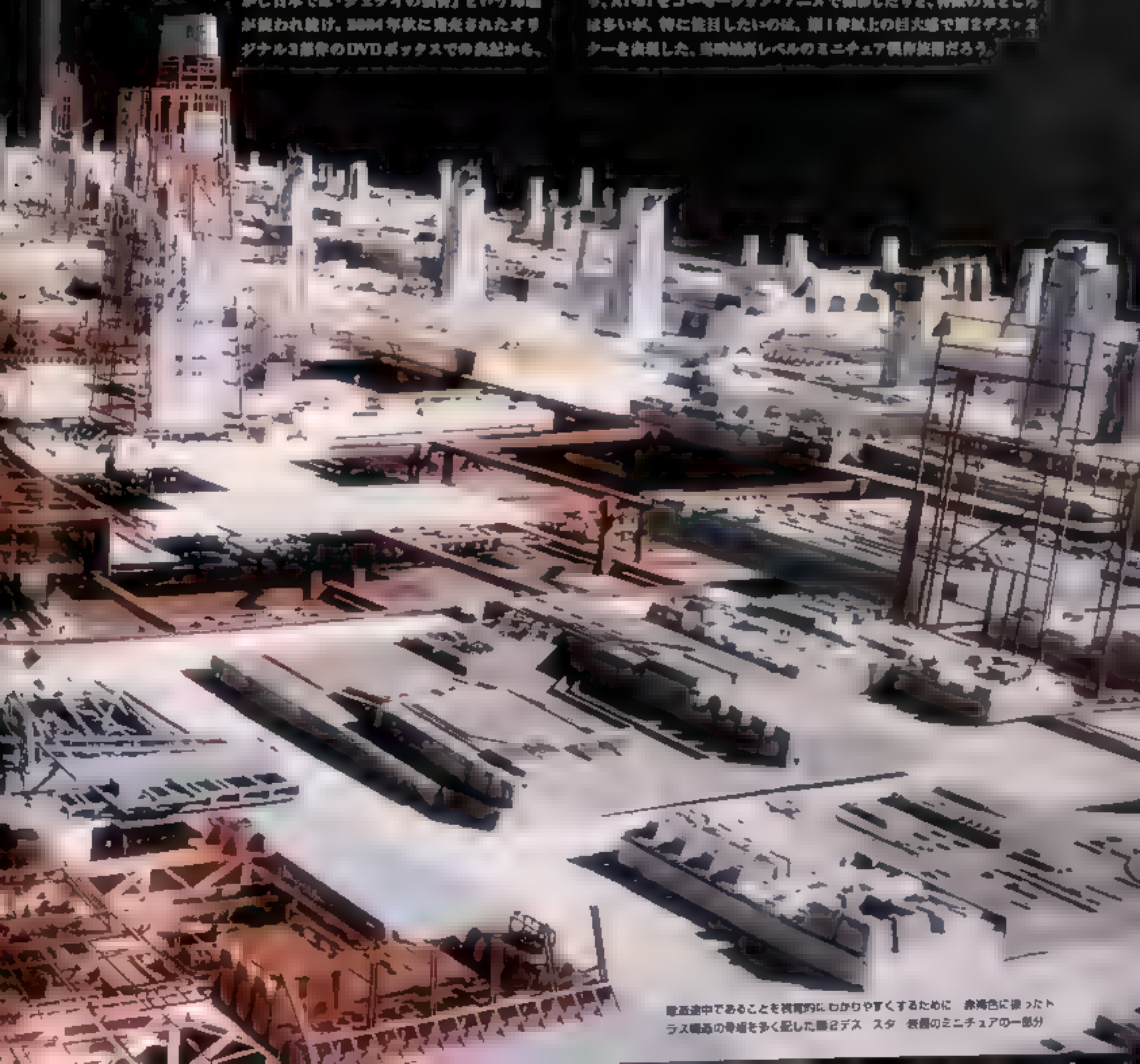
MEDICAL BAY

医療室セット

EPISODE VI
RETURN OF THE JEDI

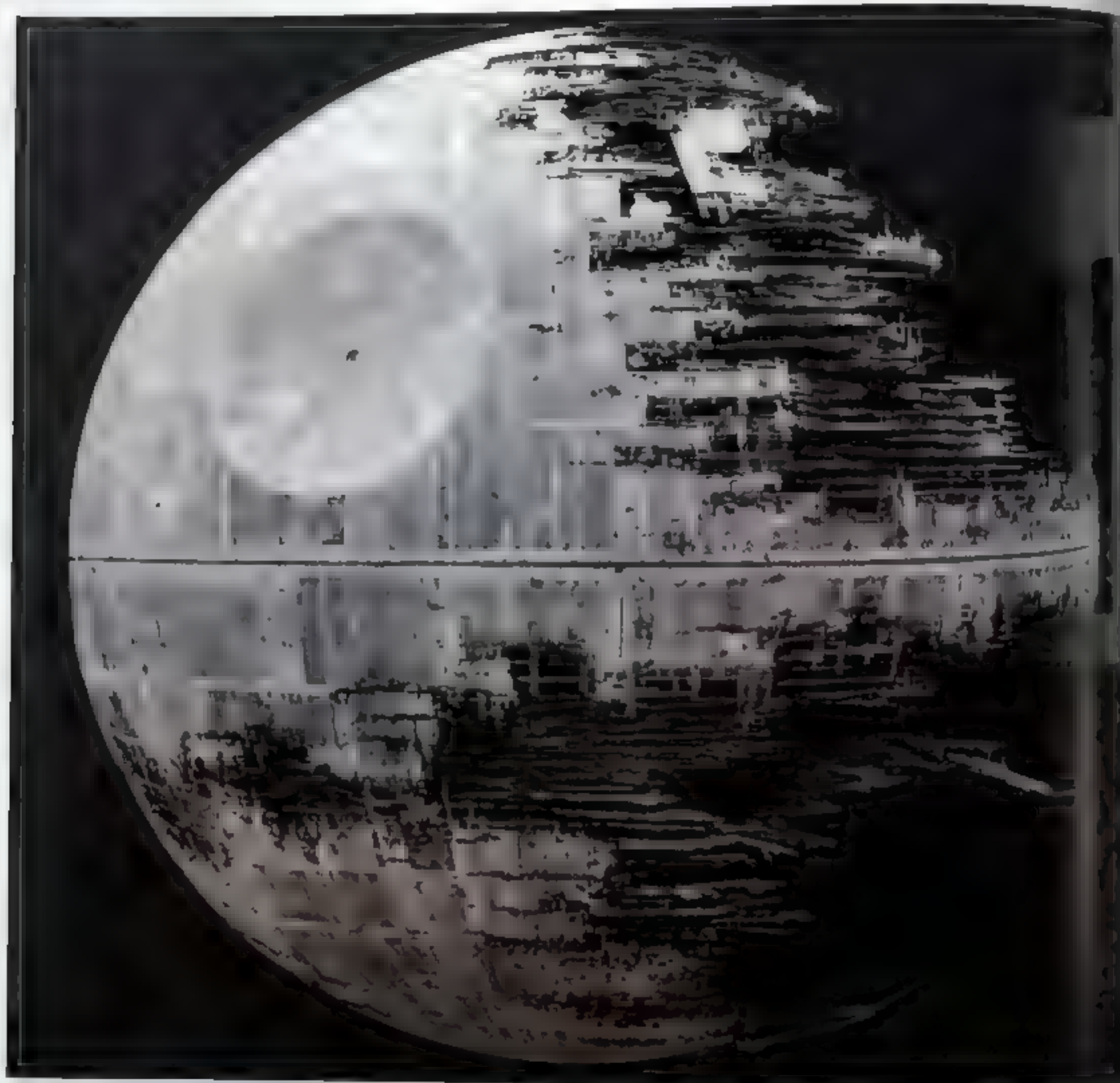
エピソード6
ジェダイの帰還

Luke Skywalker has returned to his home planet of Tatooine in an attempt to rescue his friend Han Solo from the clutches of the vile gangster Jabba the Hutt.
Little does Luke know that the GALACTIC EMPIRE has secretly begun construction on a new armored space station even more powerful than the first dreaded Death Star.
When completed, this ultimate weapon will spell certain doom for the small band of rebels struggling to restore freedom to the galaxy....

「『スター・ウォーズ』の続編製作決定！　その題名は『帝国の逆襲』と『ジェダイの復讐』――」という発表がなされた時期から1983年初頭まで、映画第3作目の題名は世界的に「REVENGE OF THE JEDI（ジェダイの復讐）」とされていた。しかし、ジェダイに"復讐"という言葉はふさわしくないなどの理由で、1983年5月の映画公開の数か月前に「RETURN OF THE JEDI（ジェダイの帰還）」に変更された。しかし日本では「ジェダイの復讐」という邦題が使われ続け、2004年秋に発売されたオリジナル3部作のDVDボックスでの表記から、やっと「ジェダイの帰還」という邦題に落ち着いた。

本作では、ILMは3班体制で膨大な特撮シーンをこなした。リチャード・エドランドは砂漠の惑星タトゥイーン、デニス・ミューレンは森林惑星エンドア、ケン・ラルストンは第2デス・スターの宇宙戦のシークエンスの特撮をスーパーバイズした。スピーダー・バイクが高速で走行するのを表現するために、森の中をステディカムで低速度撮影したり、AT-STをゴー・モーション・アニメで撮影したりと、特撮の見どころは多いが、特に注目したいのは、第1作以上の巨大感で第2デス・スターを表現した、当時最高レベルのミニチュア製作技術だろう。

建造途中であることを視覚的にわかりやすくするために、赤褐色に塗ったトラス構造の骨組を多く配した第2デス・スター表面のミニチュアの一部分

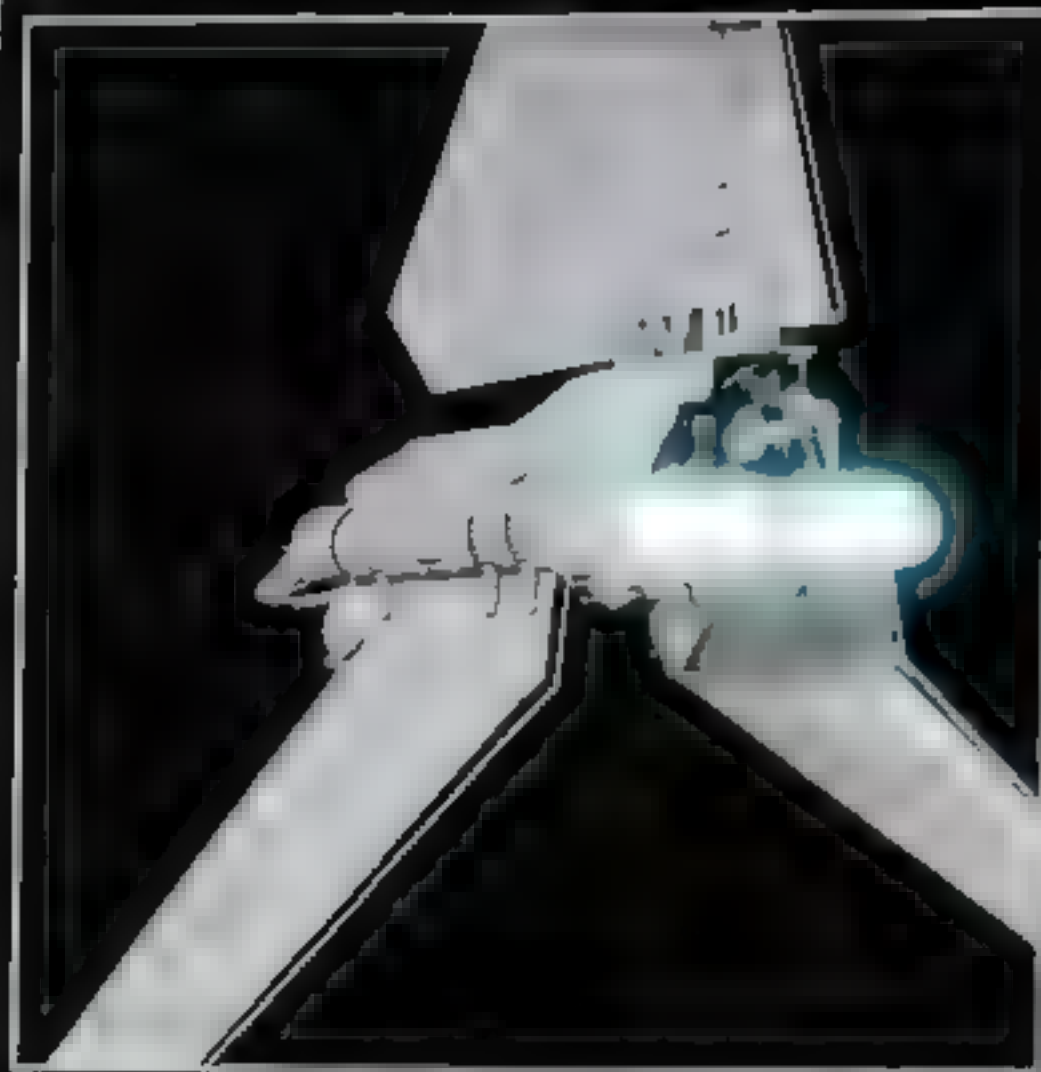
Death Star II 第2デス・スター

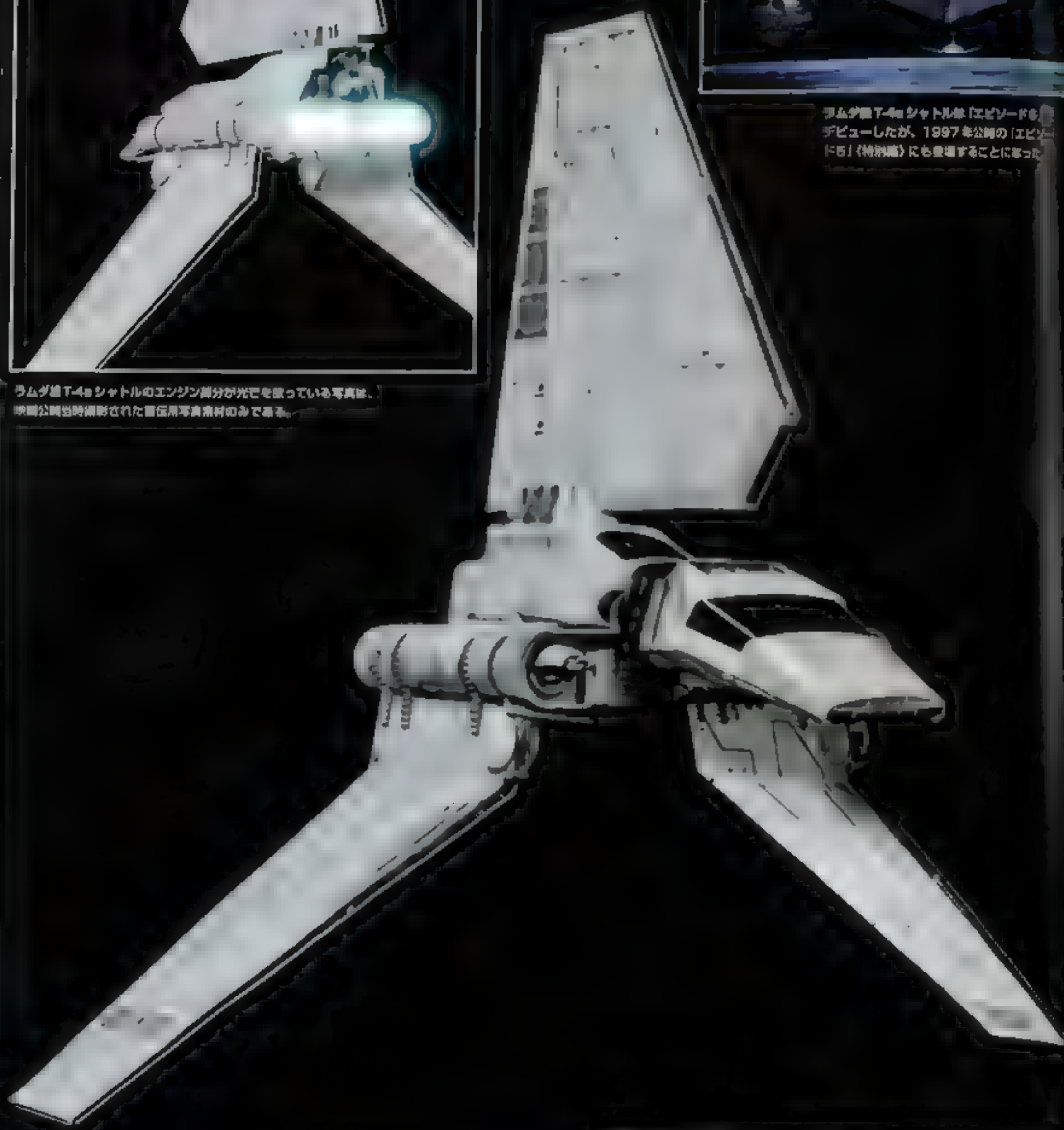
反乱同盟軍を根絶するべく、帝国軍はエンドア近傍に恐るべき第2デス・スターの建造を開始していた。計画には遅れが生じており、第2デス・スターは全体の半分程しか完成していなかったため、皇帝自身が進捗状況の視察に訪れることになった。直径160キロ超。

左ページ上の完成版ミニチュアに至る過程で、建造途中の空洞部分の範囲や位置が何度か変更されている。左ページ下２点の写真と上[illegible]中段階のもので、完成品と比べると細かい部分が異なっている。

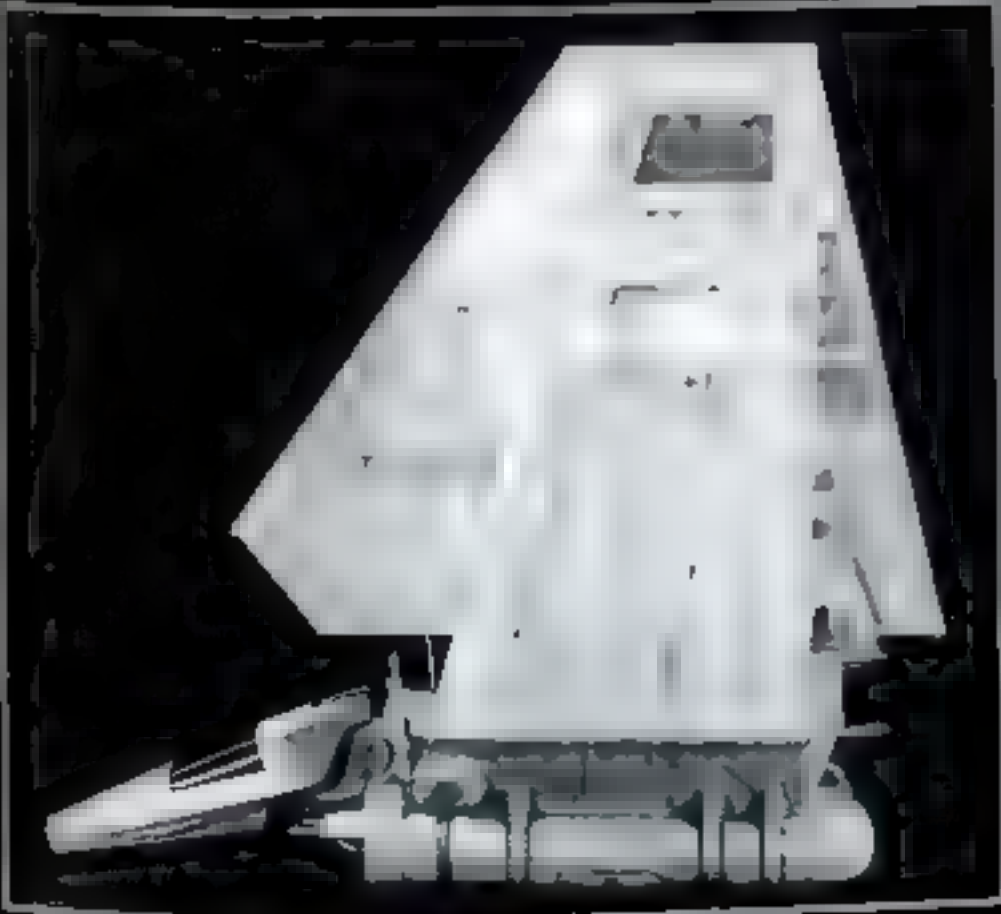
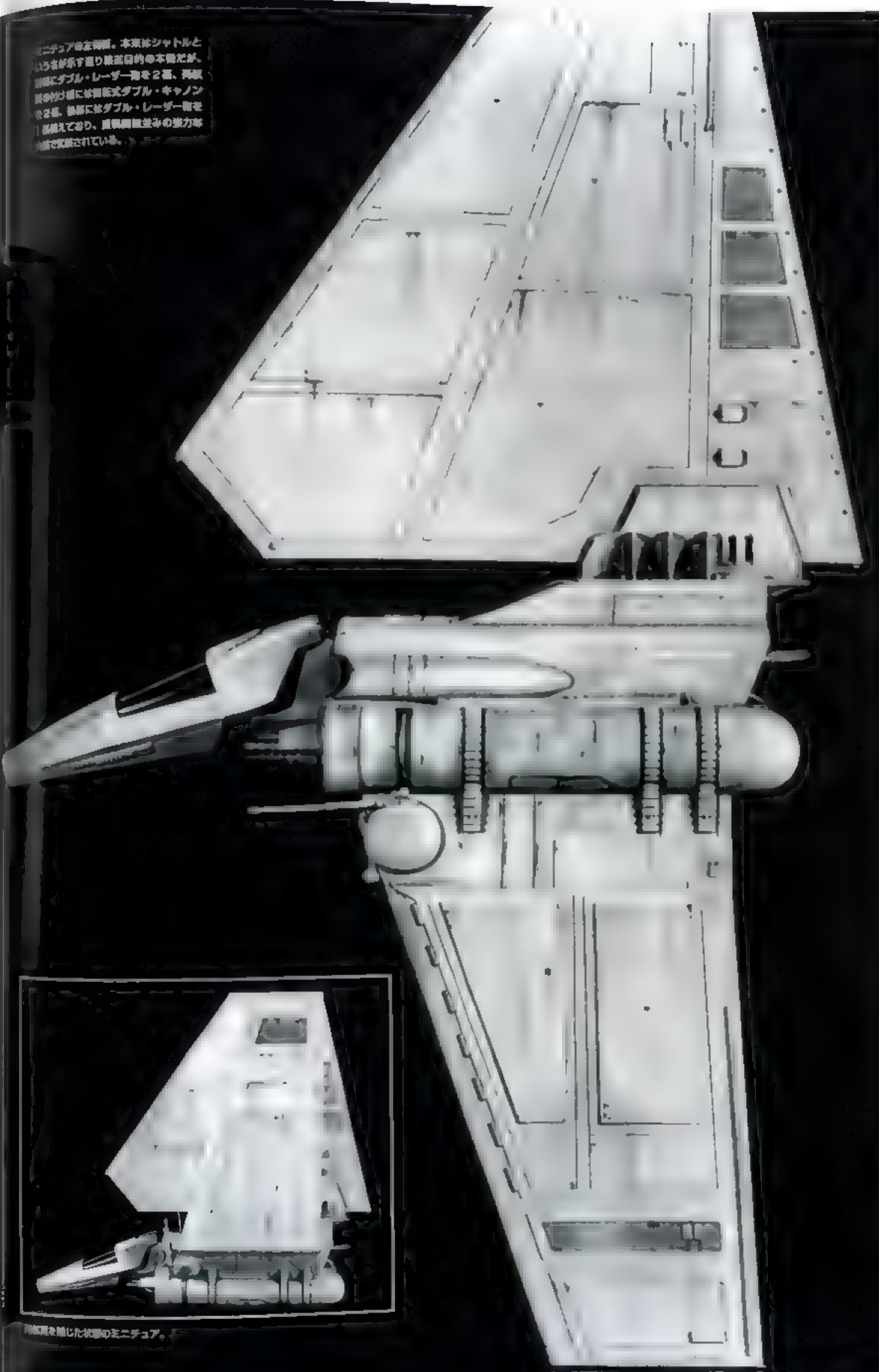
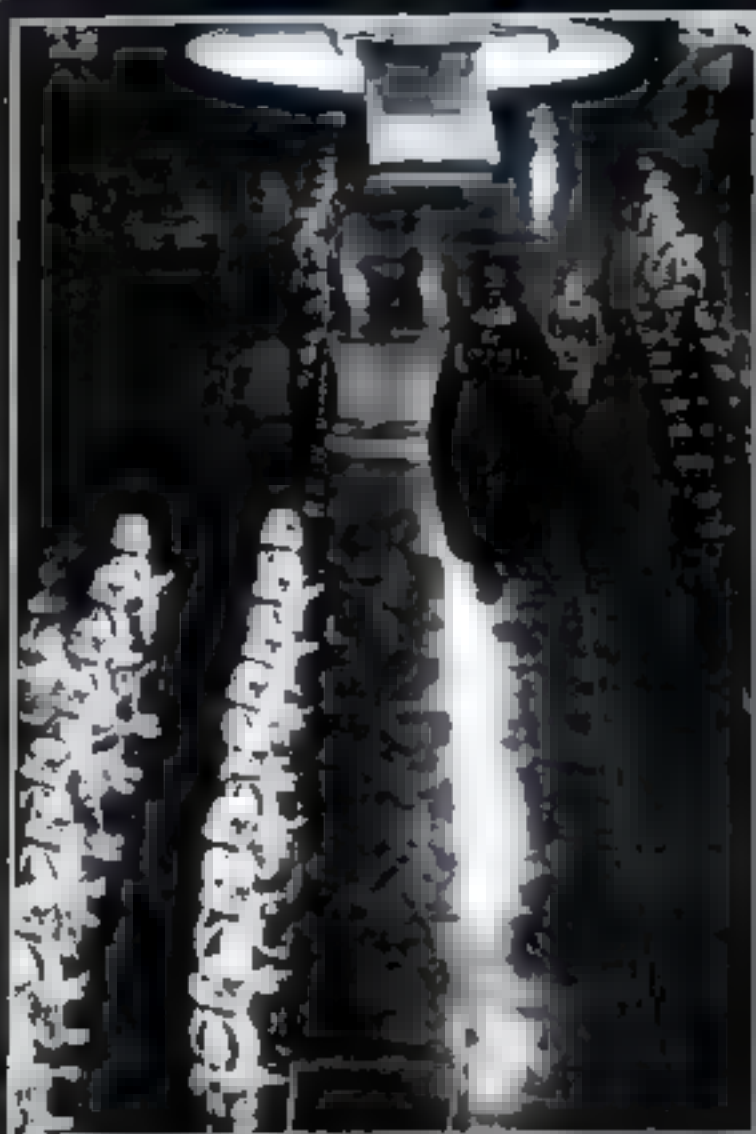
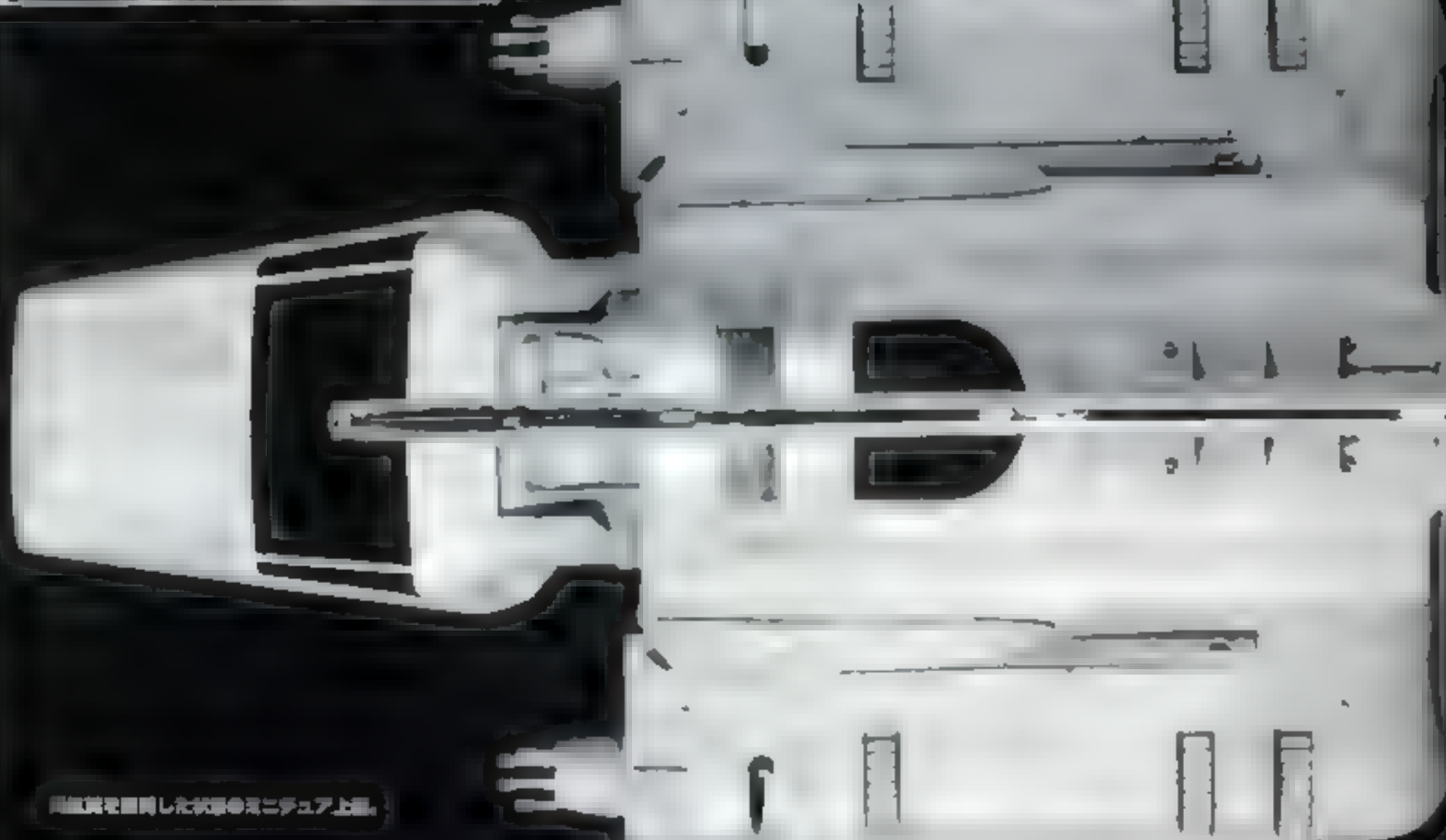
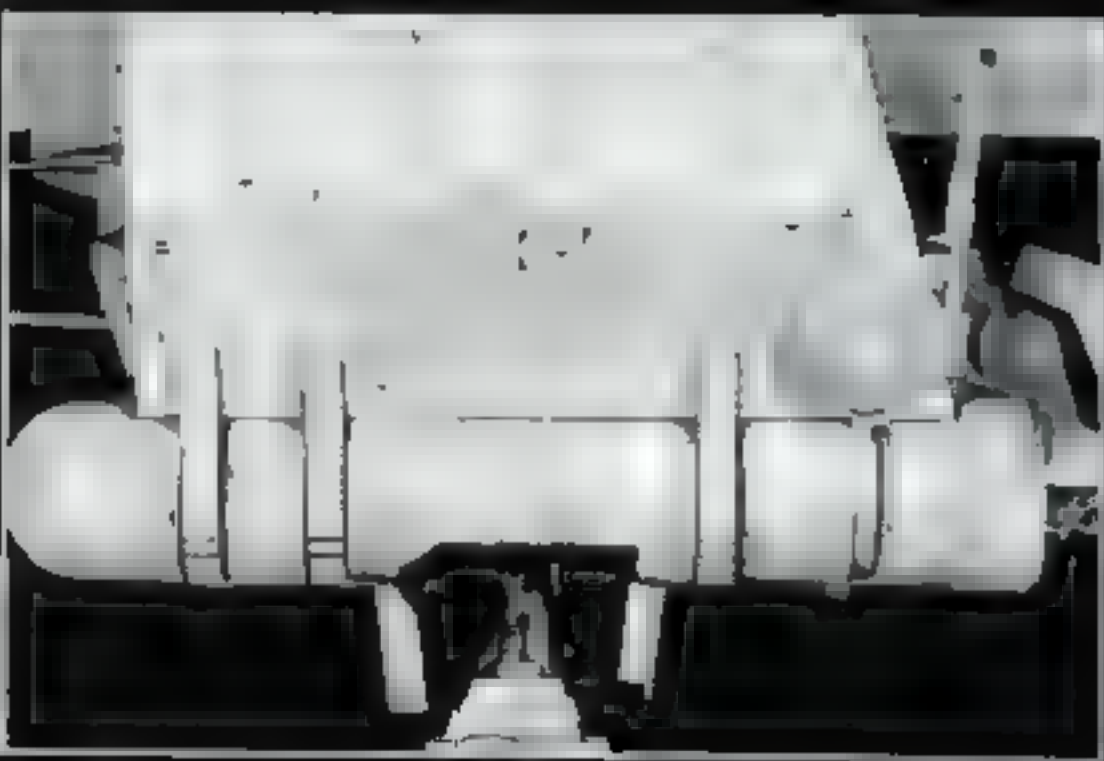
中段、下段：個別に作られた第２デス・スターの表面のミニチュア。建造の途中段階を表現しているせいか「エピソード4」のデス・スターほど密集した構造物の作りにはなっていない。

第2デス・スターはオプチカル合成の背景部分のため、左右逆のミニチュアが作られた。
また、第2デス・スターの設定上の大きさは、2005年までは初代デス・スターの120キロの約１.３倍の160キロというものだったが、近年になって主要ビークルの大きさが見直され、劇中で第2デス・スターに突き刺さった〈エグゼクター〉の１５倍近い設定全長変更の影響を受け、「160キロよりは大きい」という曖昧な設定となった。

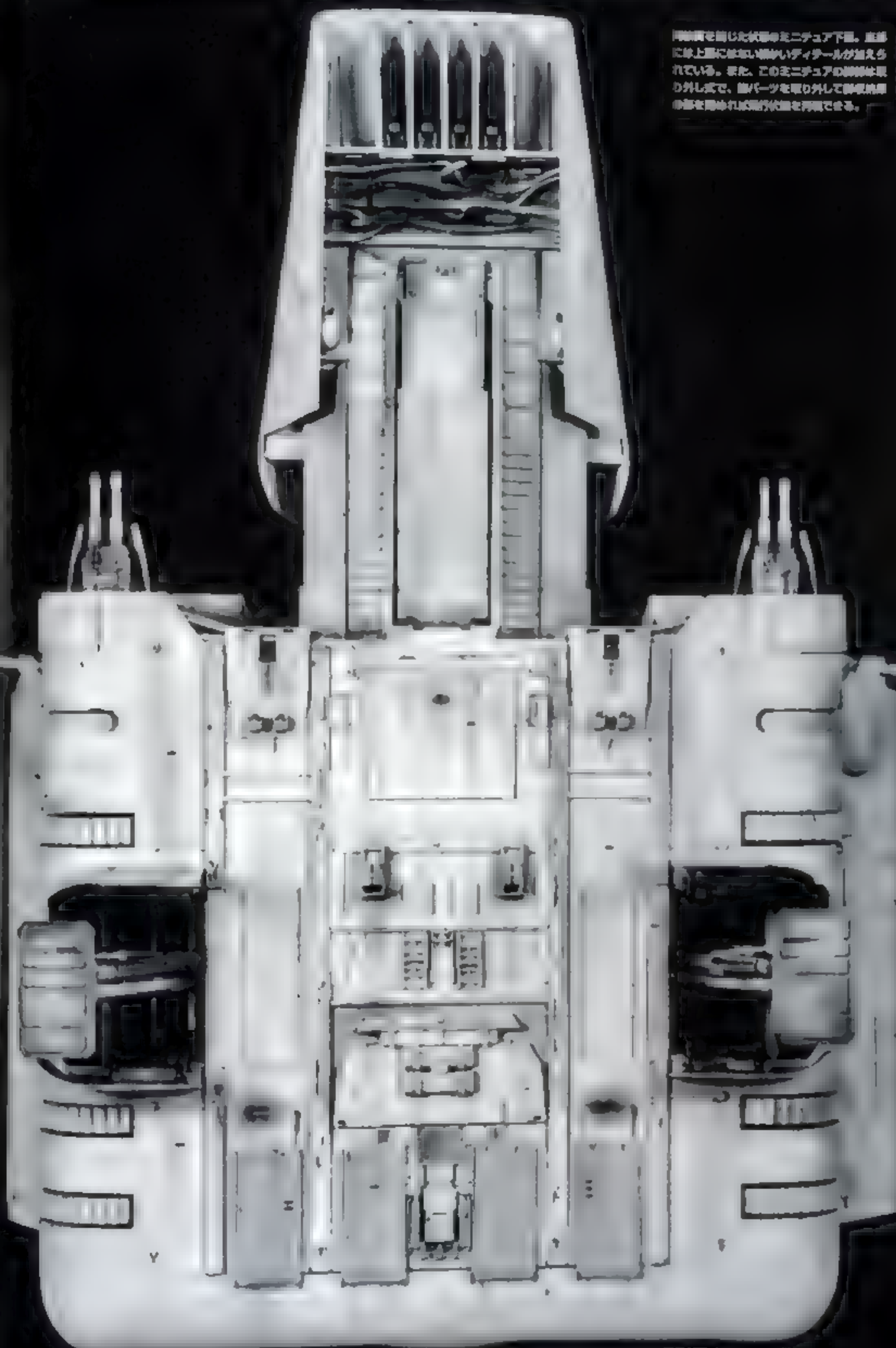
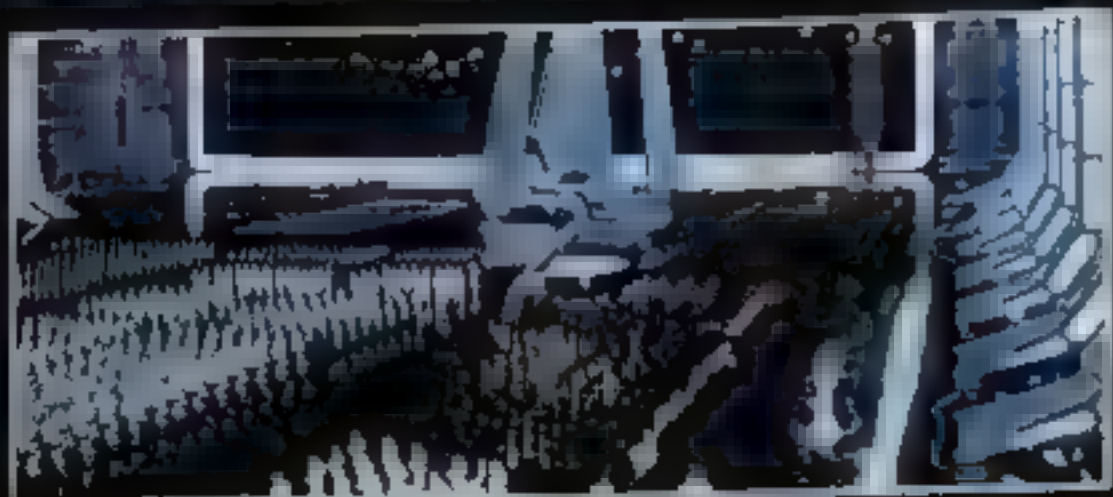
Imperial Shuttle インペリアル・シャトル

インペリアル・シャトルとも呼ばれるラムダ級T-4aシャトルは、実にエレガントな容姿を持つ。この多目的トランスポートは、帝国艦隊において貨物輸送と人員輸送の両役を担い、帝国の要人であるダース・ベイダーや皇帝までもがこの機種を利用した。本機種は、中央の固定翼と可動式の両舷翼の合計3基の翼を持つことが外見上の特徴で、飛行時には両舷の翼が展開して安定性を確保する。着陸時にはこれらの翼はたたまれ、機体をコンパクト化する。ハイパードライブを内蔵。製造元はサイナー・フリート・システムズ。全長20メートル。

ラムダ級T-4aシャトルのエンジン部分が光芒を放っている写真は、映画公開当時撮影された宣伝用写真素材のみである。

ラムダ級T-4aシャトルは「エピソード6」でデビューしたが、1997年公開の「エピソード5」〈特別篇〉にも登場することになった。

両舷翼を展開して飛行状態のミニチュアの記録写真。この角度で見れば、基本のデザインはT-16スカイホッパー（36ページ参照）を元にリファインしたと推察できる。

ミニチュアの左側面。本来はシャトルという名が示す通り輸送目的の本機だが、前部にダブル・レーザー砲を2基、両翼の付け根には回転式ダブル・キャノンを2基、後部にはダブル・レーザー砲を1基備えており、戦闘機並みの強力な武装で装備されている。

両翼を閉じた状態のミニチュア。

左：インペリアル・シャトルのコクピットのセットから降りてくるダース・ベイダーの[illegible]ショット。シャトルの大きさがよくわかる。

両翼を展開した状態のミニチュア上面。

両翼を閉じたミニチュアの[illegible]のアップ。

両翼面を閉じた状態のミニチュア下面。底部に地上撮影には無い細かいディテールが加えられている。また、このミニチュアの翼部は取り外し式で、翼パーツを取り外して[illegible]を閉めれば飛行状態を再現できる。

前方から撮影した両翼を展開した状態のミニチュアで、インペリアル・シャトルの持つ美しい機体ラインがわかる。

上2点：ラムダ級T-4aシャトルが着陸する発着場面。

両翼を展開した状態のミニチュアを後方から撮影した写真。

正面から撮影した両翼を閉じた状態のミニチュア。翼がたたまれて[illegible]、脚柱を取り付けた着陸状態となっている。この写真では操縦席のキャノピーはスモークで塗られ中が見えないが（写真ではライトが反射して写り込んでいる）、操縦席には2名のパイロット・フィギュアが置かれている（次ページの下右写真参照）。

後方から撮影したミニチュア。白く写っている2か所の楕円部分がエンジンノズルで、内部には蛍光灯が組み込まれており、白く発光する。その上にある円形部分がダブル・レーザー砲で左右には黒い砲口が見える。

CONCEPT MODEL & MINIATURES

コンセプト・モデル&小型モデル

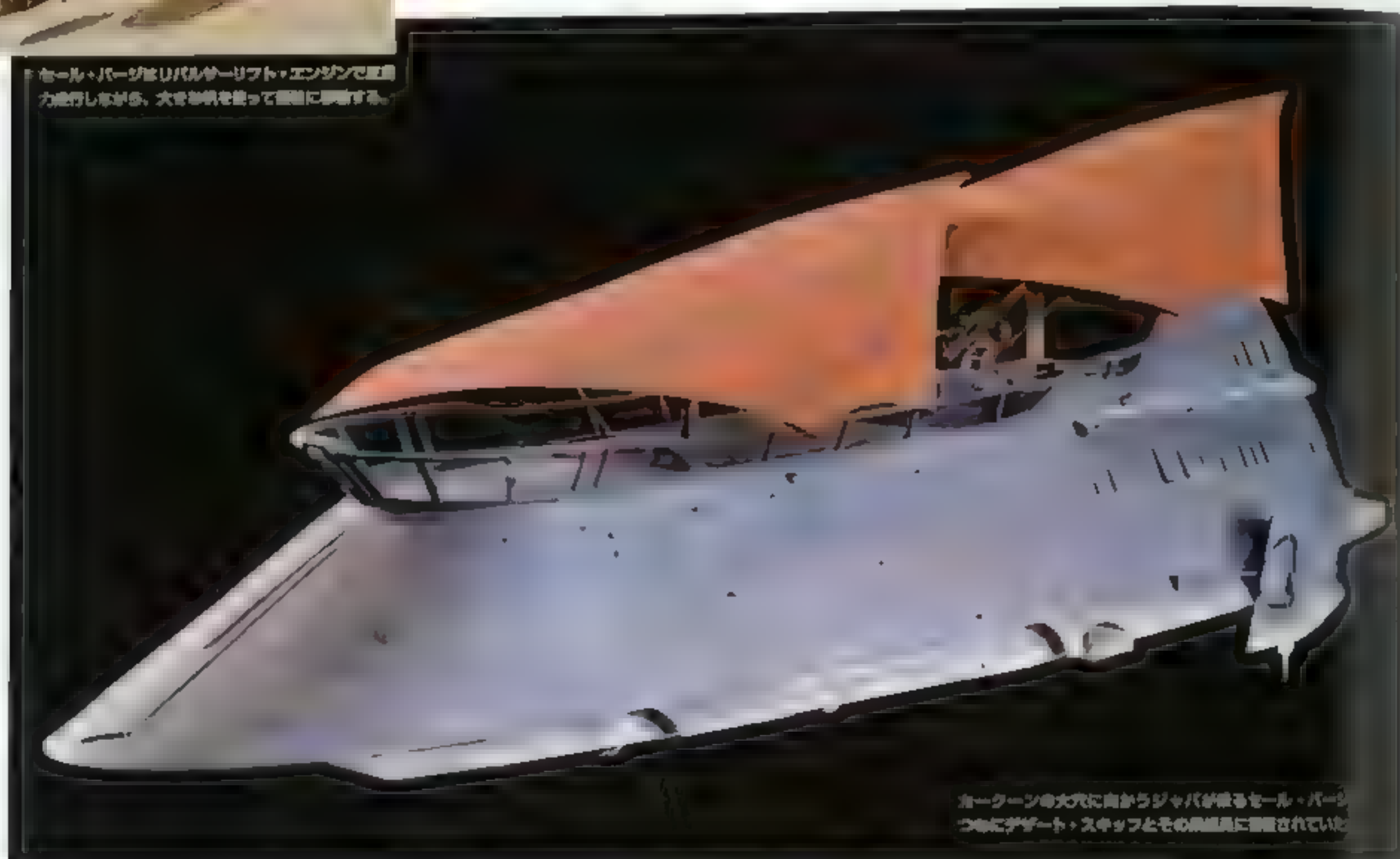
インペリアル シャトルのコンセプト モデル 昇降口が左側にある

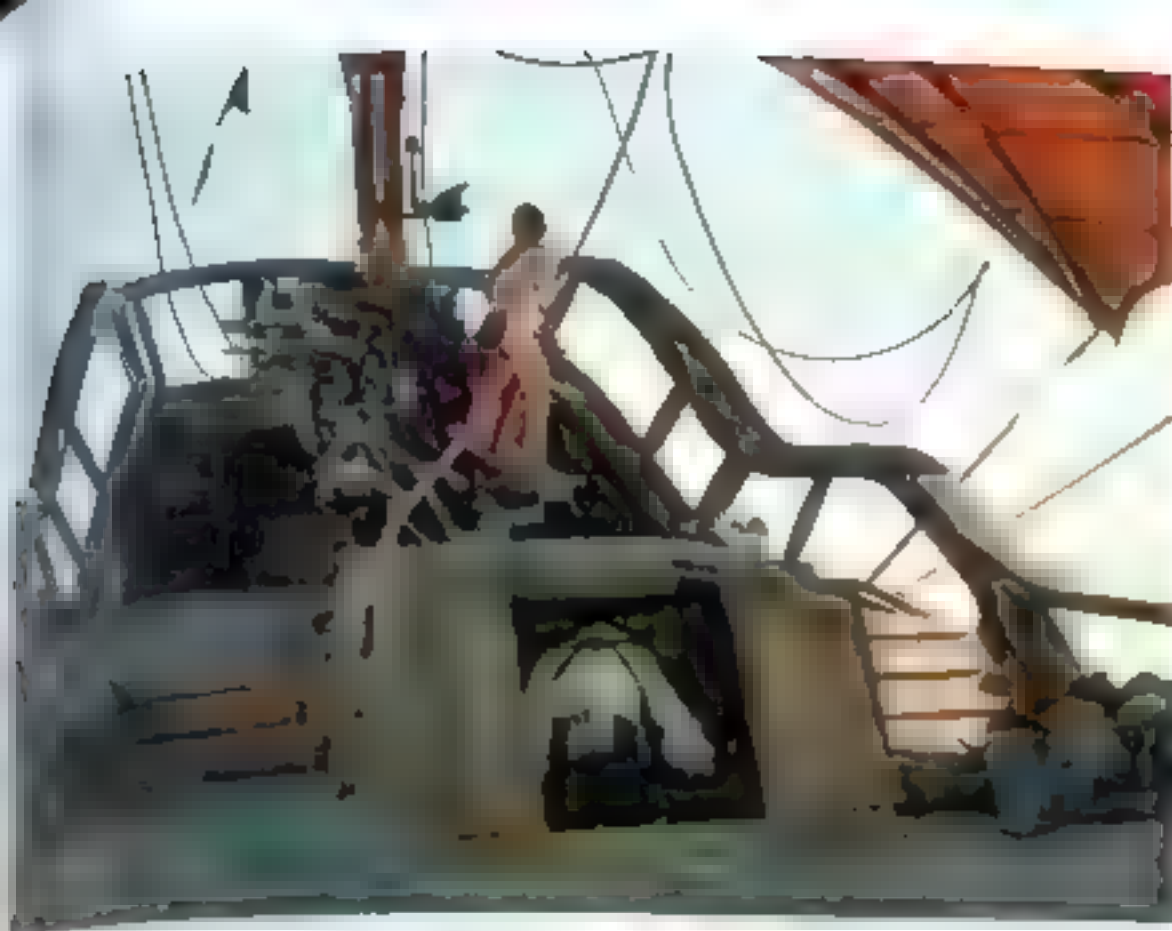
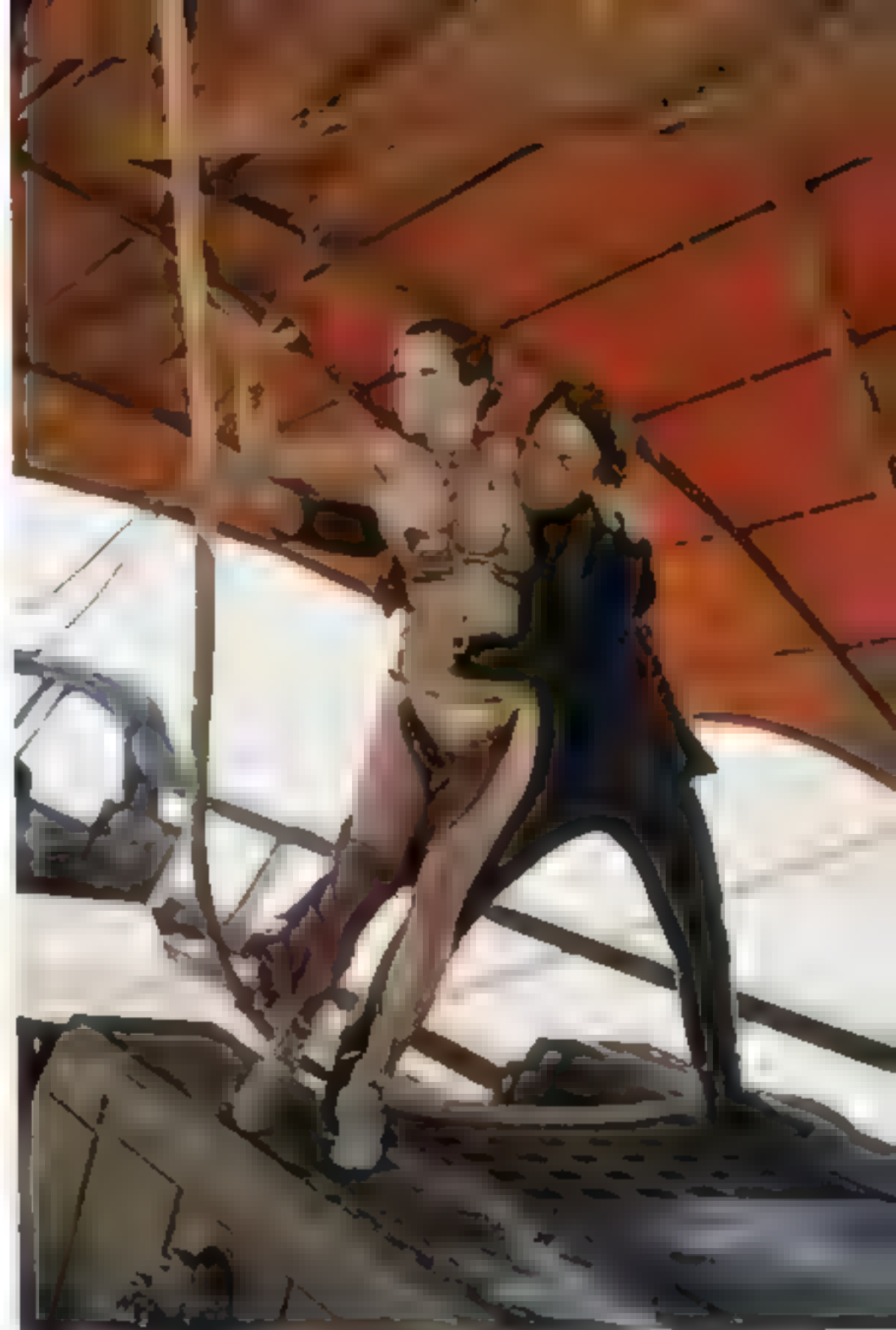
インペリアル シャトルの撮影用ミ チュアは大小2種類作られた

下写真は最終的な機体形状を決めるために作られたプロトタイプ・モデルで、当初は尾翼の後ろにアンテナらしきものが付いており、機首の先端もスラッと上に伸びていた。左写真は搭乗用タラップが下がる時には機首が上に上がる構造になっているミニチュアで、下写真と同時期のものか、機首が下向きに変更された次の段階のものかは不明（尾翼のアンテナはなくなっている）

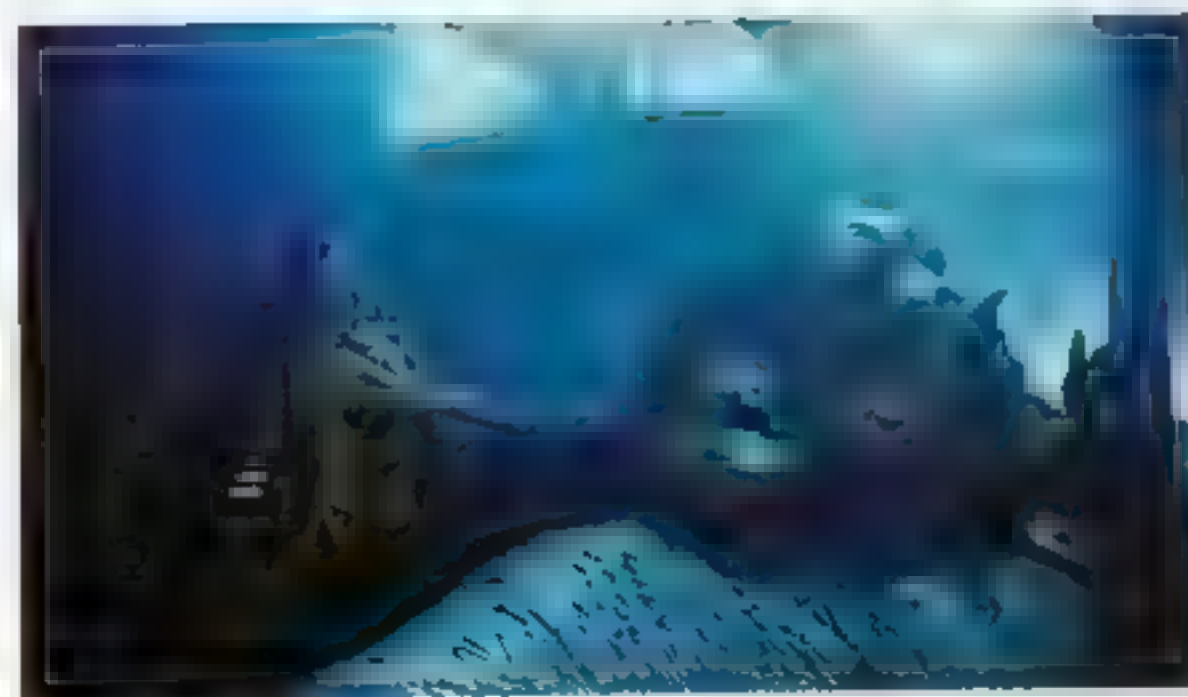
PROTOTYPE MODEL
プロトタイプ・モデル

撮影用に製作された〈ケタンナ〉のミニチュア模型。

本ページ：アリゾナ州ユマ砂漠のバターカップ・バレーに建造された実寸大セール・バージ〈ケタンナ〉とデザート・スキッフのセット。〈ケタンナ〉は片面だけ作られたセットではあるが、ミニチュアと同じ密度ディテールで細かく作り込まれている。このセットは砂漠の上に直接建てられたものではなく、まず大きな高台を作ってそこに砂を撒いて広い砂漠を再現し、その上に〈ケタンナ〉とスキッフの両セットが作られた（右写真参照）

LIFE-SIZED MODEL & OTHERS

実寸大モデルほか

上3点　ライトセーバーを使いデッキ上で奮戦するルークと、大型ブラスター砲を内部に向けてセットするレイア。この後2人はロープでデザート・スキッフに飛び移り、ハン・ソロと共に脱出に成功する

下3点　爆破専用の《ケタンナ》のミニチュアも2隻作られ、1隻目は爆発しても船体が崩れず内部爆発を起こすもの（下写真）、2隻目は船体が木っ端みじんになるもの（一番下写真）で、別々に撮影された

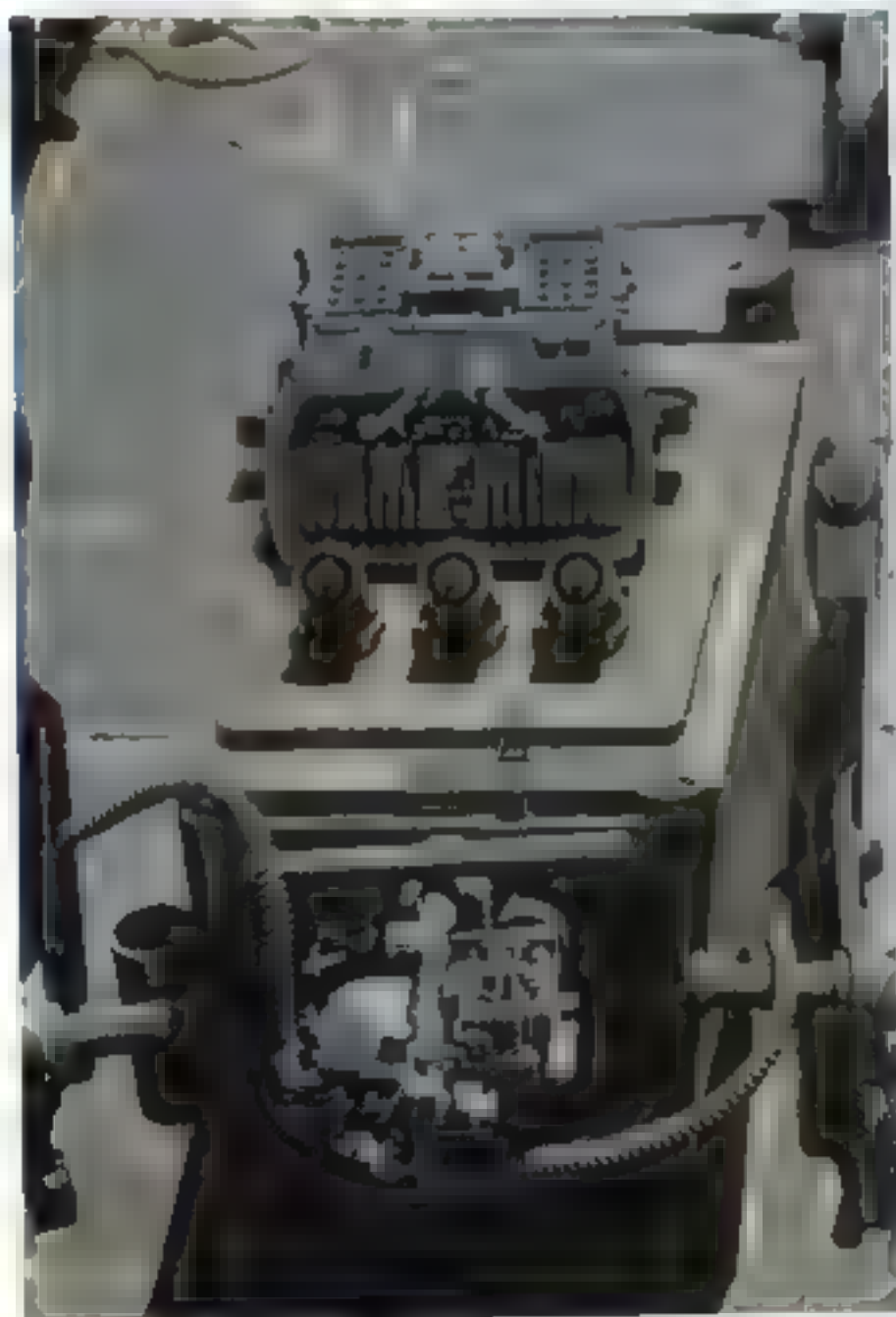
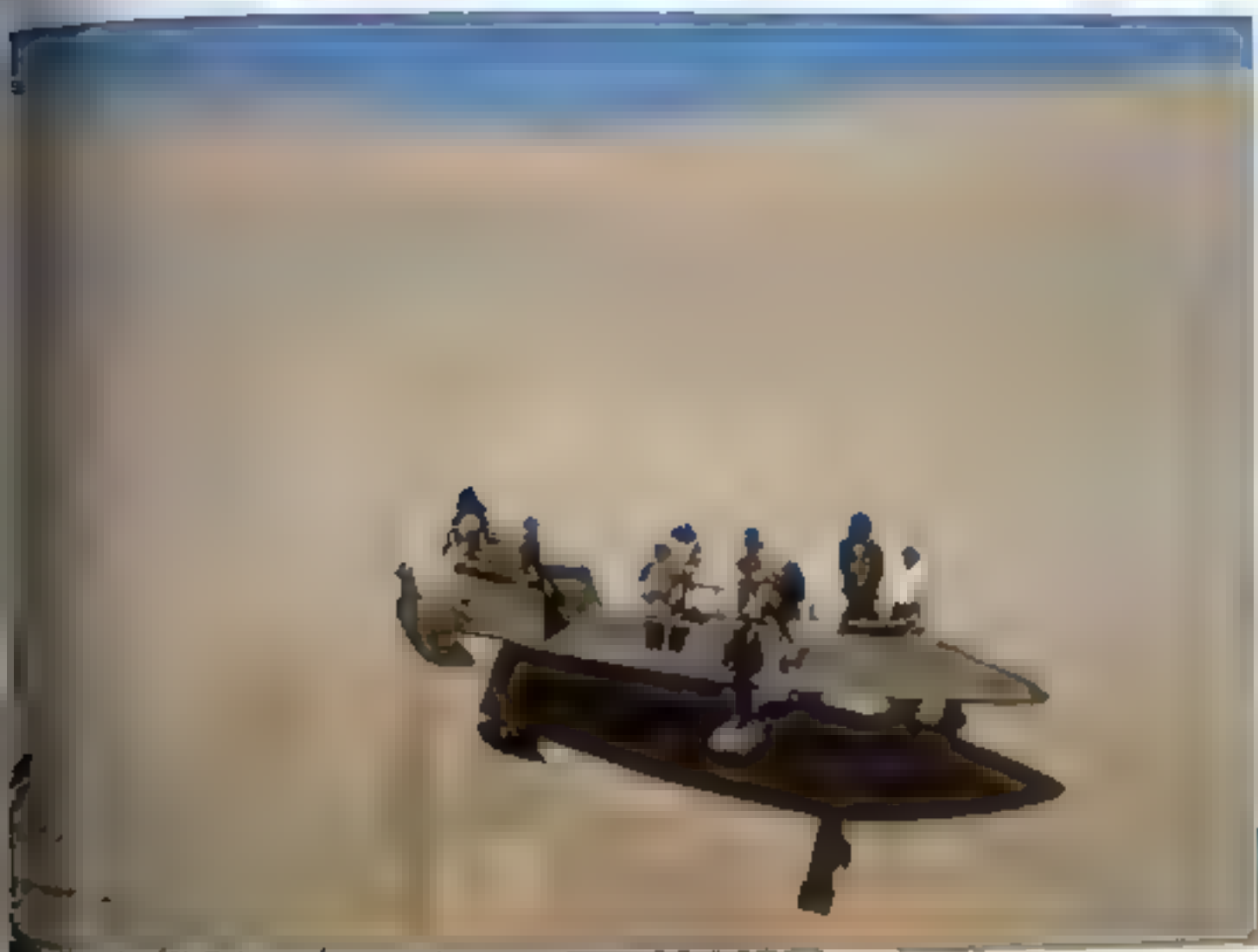
INTERIOR
船内セット

本ページ・右ページ 〈ケタンナ〉の内部セットとジャバの下僕たち。セール・バージ内部のシーンはイギリスでセット撮影され、砂漠での撮影と辻褄が合うように違和感なく編集された

Desert Skiff デザート・スキッフ

ハンサII・カーゴ・スキッフはタトゥイーンのような砂漠の惑星で多用されているため、別名デザート・スキッフとも呼ばれる。その名のとおり荷物搬送用や警護用に用いられ、ジャバの〈ケタンナ〉の警護にも使用されていた。本機は、〈ケタンナ〉のベースとなったセール・バージと同様、ユブリキアン・インダストリーズが製造したリパルサーリフト・ビークルで、全長は9メートル以上。

爆発する〈ケタンナ〉から逃げるシーンに使われた、全長約60センチのミニチュア。

下左：同じスキッフのミニチュアだが、別の人形を乗せている。操縦手が劇中とは違うエイリアン（ボート・スニットキン）だ。

下右2点：初期には船の背中にスキッフを乗せて運ぶアイデアもあった（上写真）。全長40センチのデザート・スキッフのプロトタイプ（下写真）。

LIFE-SIZED MODEL
実寸大モデル

上写真はカメラアングルからちょうど支柱が隠れて、砂漠に浮いているように見える実寸大のスキッフ。ロケーション撮影とは別に、デザート・スキッフが移動するシーンではスタジオ内でブルーバック撮影が行われた

MC80 Home One Type Star Cruiser

MC80ホーム・ワン型スター・クルーザー

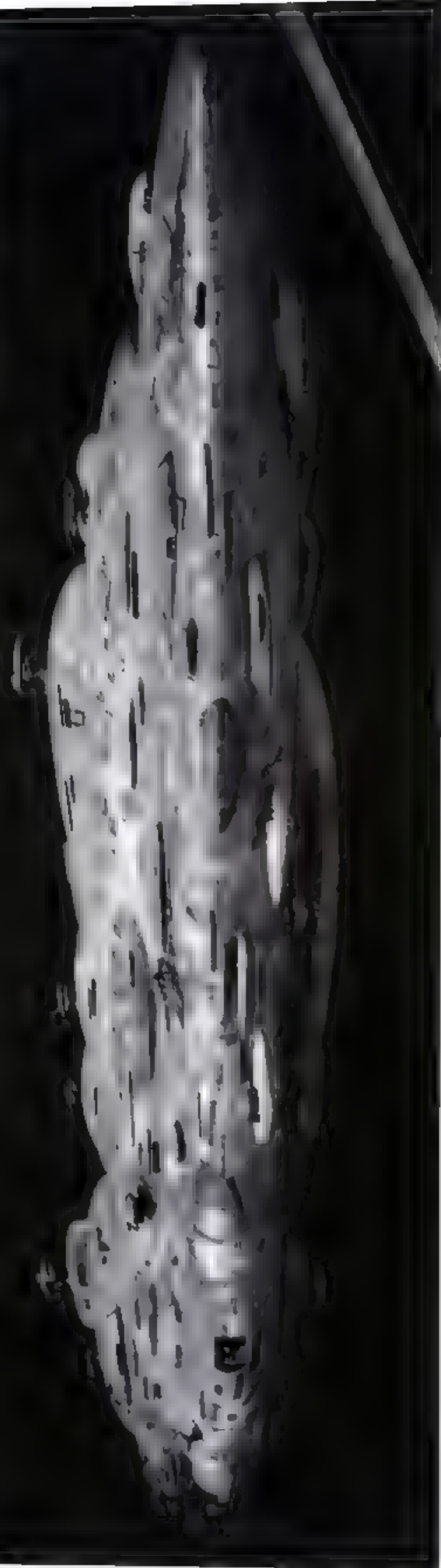
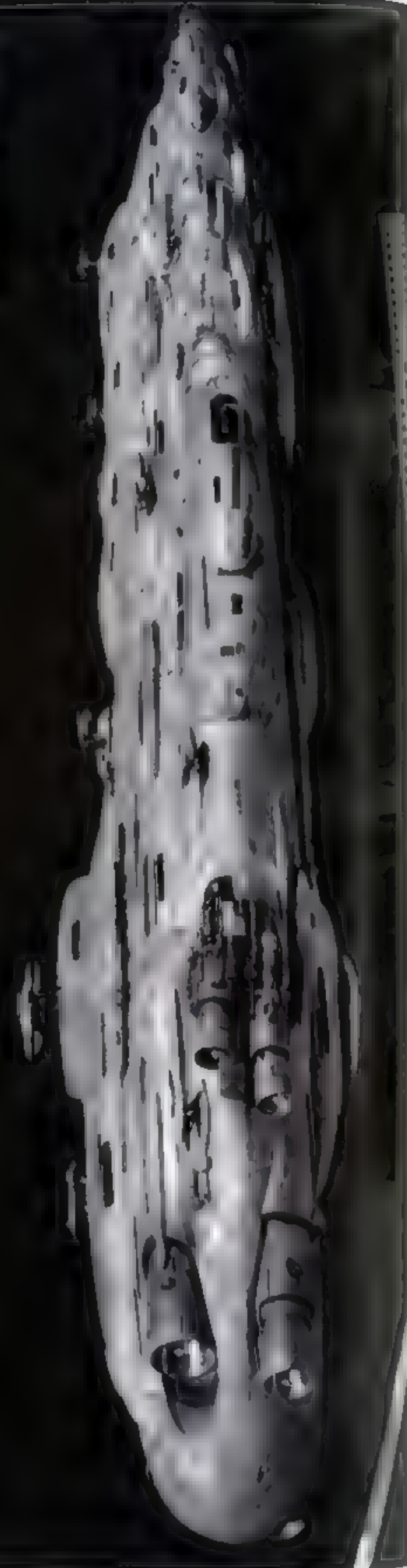
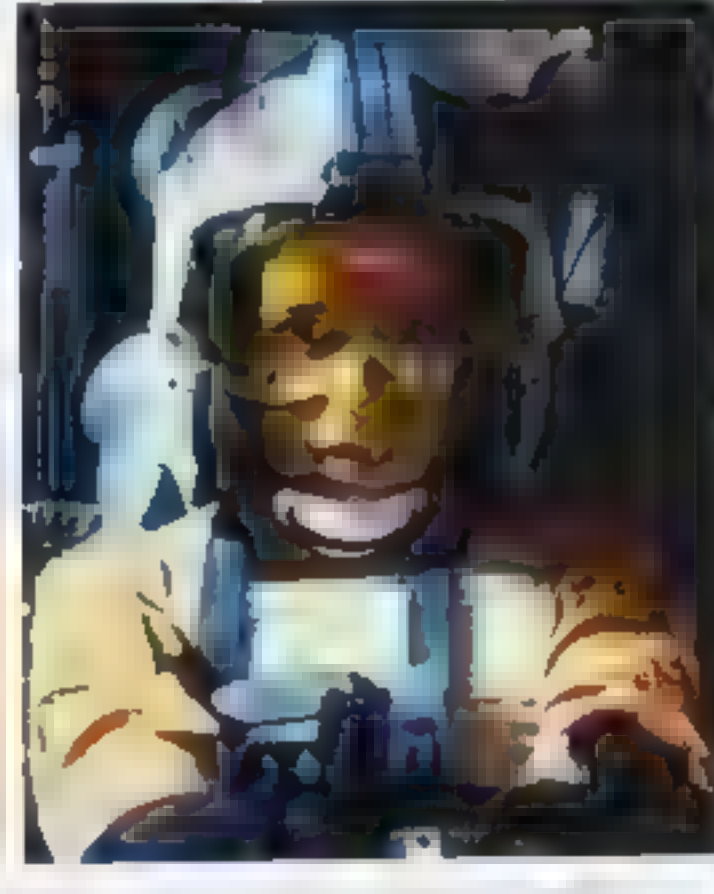
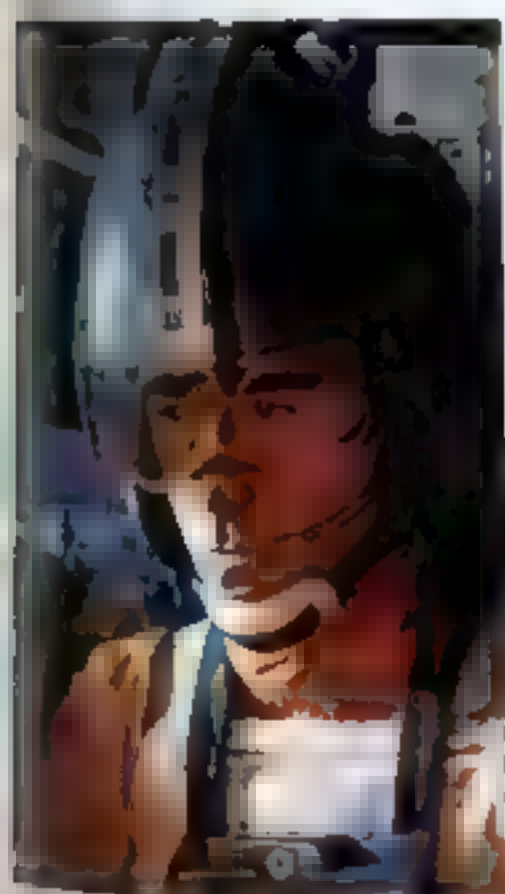
エンドアの戦いにおいて、反乱同盟軍の旗艦となった〈ホーム・ワン〉は、作戦の指揮を執ったアクバー提督が属する種族であるモン・カラマリによって建造された、MC80ホーム・ワン型スター・クルーザーの1隻である。もともとは民間船として使用されていたが、反乱同盟軍によって軍用艦へと改装され、同盟軍艦隊における司令船として使用された。〈ホーム・ワン〉の全長は1200メートル。

本ページ上写真は長い船体を左後方上から、左写真は左後方下からとらえた写真。本作にはほかにも数隻のMC80ホーム・ワン型スター・クルーザーが登場しており、その内の1隻は〈インディペンデンス〉と命名されている。

ミニチュアの後面。

ミニチュアの前面。

ミニチュアの全体側面。下の定規は72インチ（約1.8メートル）。巨大なミニチュアである。

ミニチュアの下面。左ページの側面写真では見づらいが、下面後方には、カバーのないむき出しのエンジンノズルが見える。

左2点 上 第2デス スターの攻撃に際して ホーム ワンの作戦室に集まった人間とエイリアンのパイロットや将兵 その奥には機器のオペレータ たちも見える この作戦室はアクバ 提督らの艦橋指揮所のすぐ下に位置している

上4点 ウェッジ アンティリーズ 上左端写真)をはじめとする第2デス・スター攻撃に参加したスターファイター パイロットたち 中には女性パイロット(上右端写真 も含まれていた

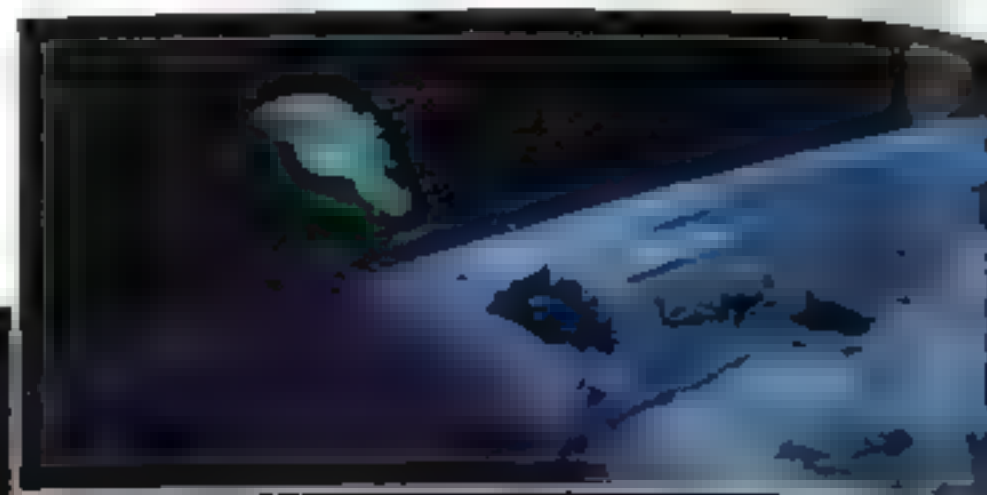
右 第2デス スターのドッキング ベイにて帝国軍から奪ったインペリアル シャトル(タイディリアム)に乗り込むルーク たちと 劇中では確認しづらい女性オペレータ のコスチューム

INTERIOR & COSTUME

艦内セットとコスチューム

MC80 Liberty Type Star Cruiser

MC80リバティ型スター・クルーザー

MC80リバティ型スター・クルーザーは、反乱同盟軍で使用されていた初期型モン・カラマリ・スター・クルーザーで、〈リバティ〉をはじめとするこの同型艦は、エンドアの戦いにおいて反乱同盟軍艦隊の一翼を担った。リバティ型の全長は1200メートル。

未完成のはずだった第2デス・スターのスーパーレーザーの最初の餌食になったのが、〈リバティ〉という名のモン・カラマリ・スター・クルーザーだった。

正面上方から見たMC80リバティ型スター・クルーザー〈リバティ〉のミニチュア。表面の細かいパネル描写はデス・スターのミニチュア製作時に余ったエッチング・パーツを使って塗り分けられた。

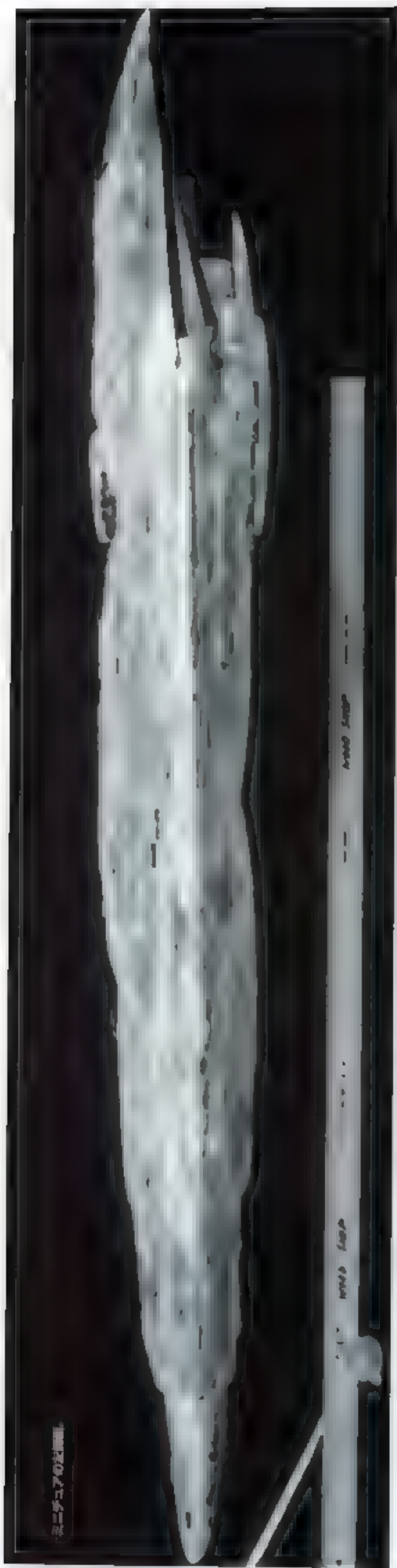
MC80 リバティ級スター・クルーザー（リバティ）。後方やや上から見たミニチュア。

ミニチュアの側面。

ミニチュアの左側面。

ミニチュアの上面。側面に顔がないと（ホーム・ワン）との区別がつきにくい（267ページ参照）。

左後方から見たミニチュア。

ミニチュアの下面。船体後部にあるエンジンに注目。少し出っ張っている。

74-Z Speeder Bike 74-Zスピーダー・バイク

ホバー・バイクとも呼ばれるスピーダー・バイクはオープン・エア型のリパルサー・リフト・ビークルで、通常は1名から2名が搭乗する。スピーダー・バイクは一般的なスピーダーに比べ、スピードや機動力に優れており、スリルを求めるティーンエイジャーや軍の斥候によって使用されることが多い。典型的なスピーダー・バイクの最高飛行高度は10メートル（32フィート）となっており、それゆえかなりの荒れ地においても高い機動力を発揮することができる。全長約3.2メートル、最高速度は時速500キロ。

本ページ：スカウト・トルーパー、ルーク・バブルーの各フィギュアを乗せた74-Zスピーダー・バイクのミニチュア。スピーダー・バイク本体の使い古された感じの画面が、モデラーには参考になるであろう。上写真と左写真はほぼ同アングルでフィギュアを乗せ換えて撮影されている。

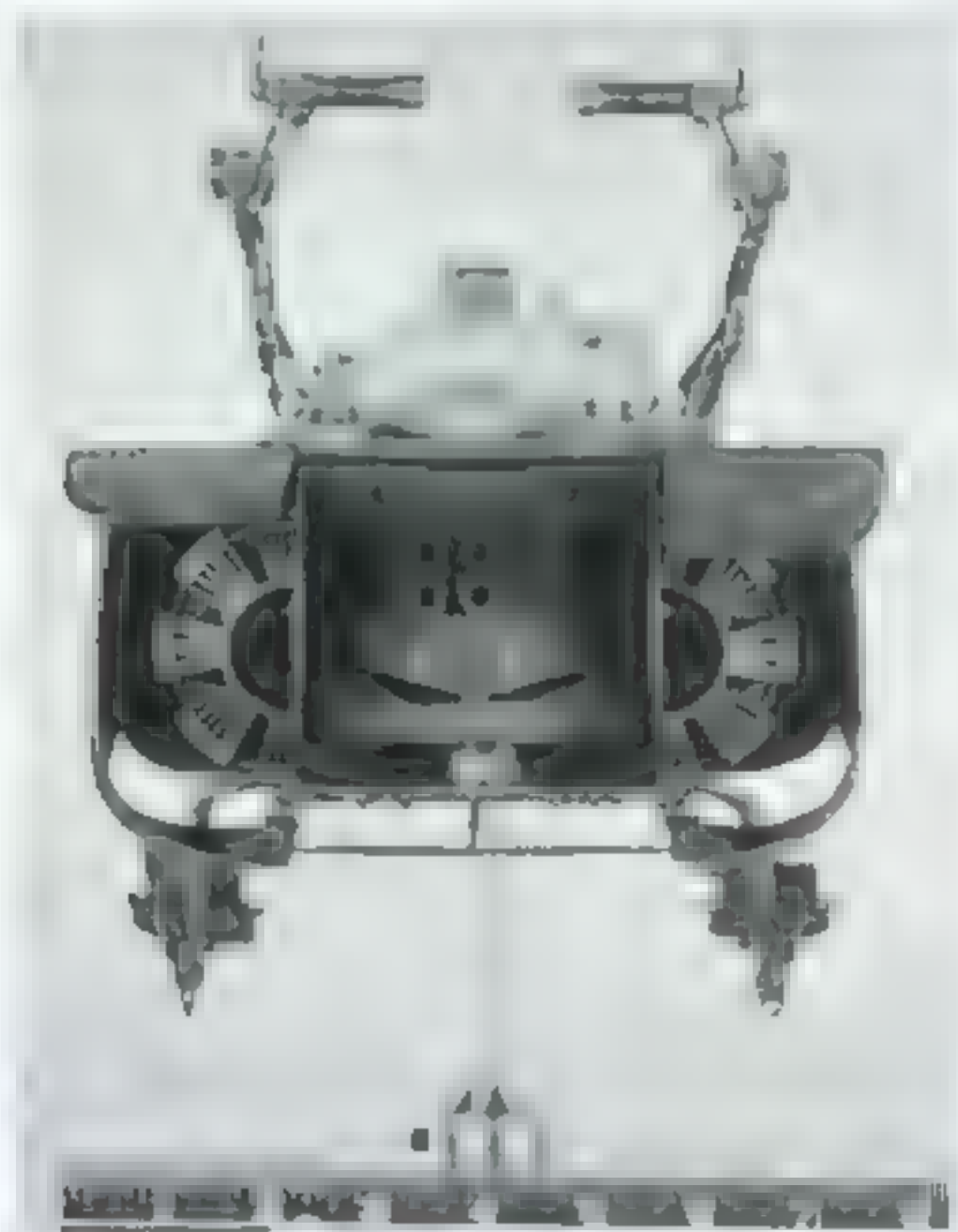
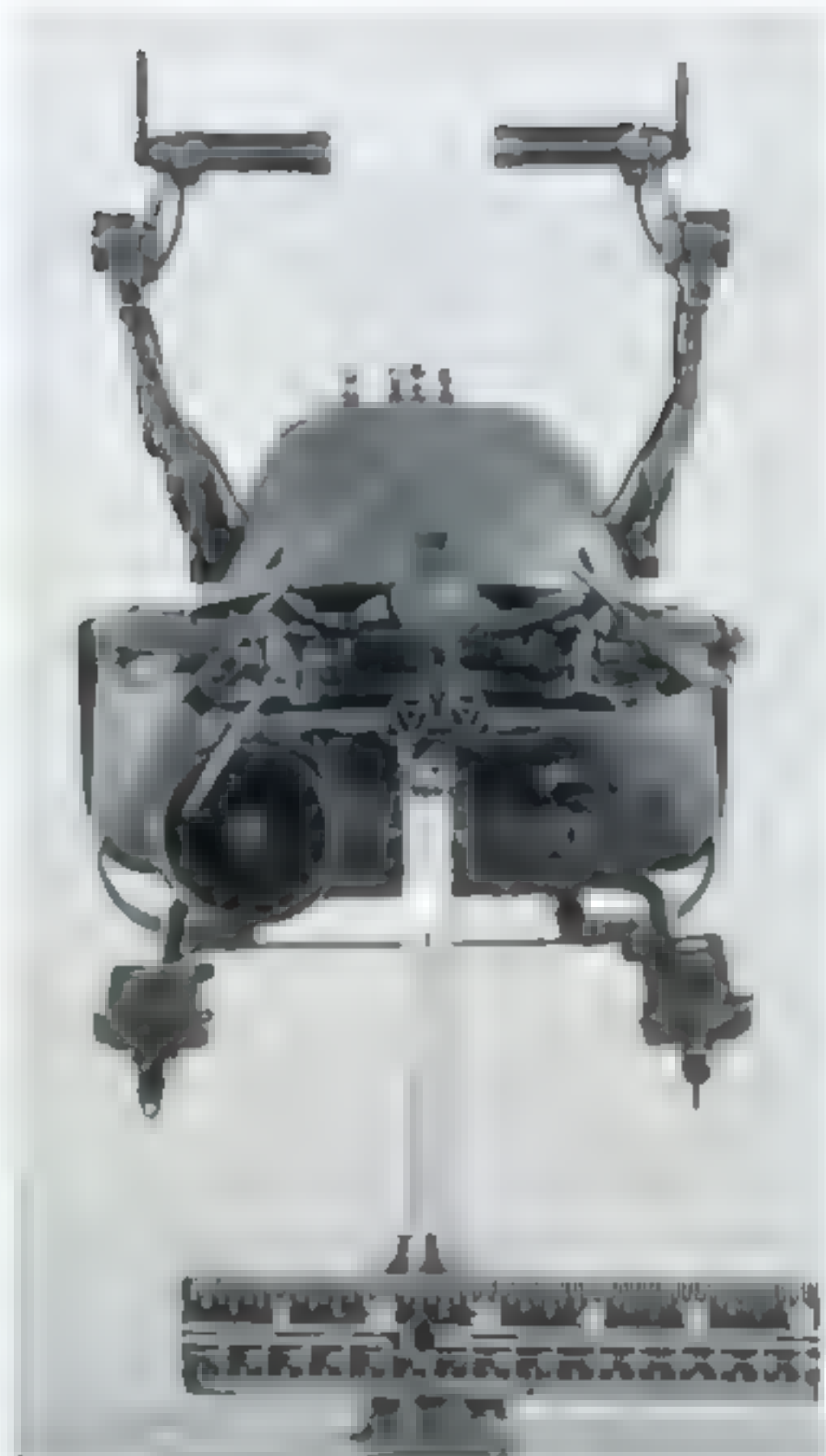
右前方から見た74-Zスピーダーバイクのミニチュア

左後方から見たミニチュア。後方の両サイドにあるボルトから[illegible]れたフラップは閉じている

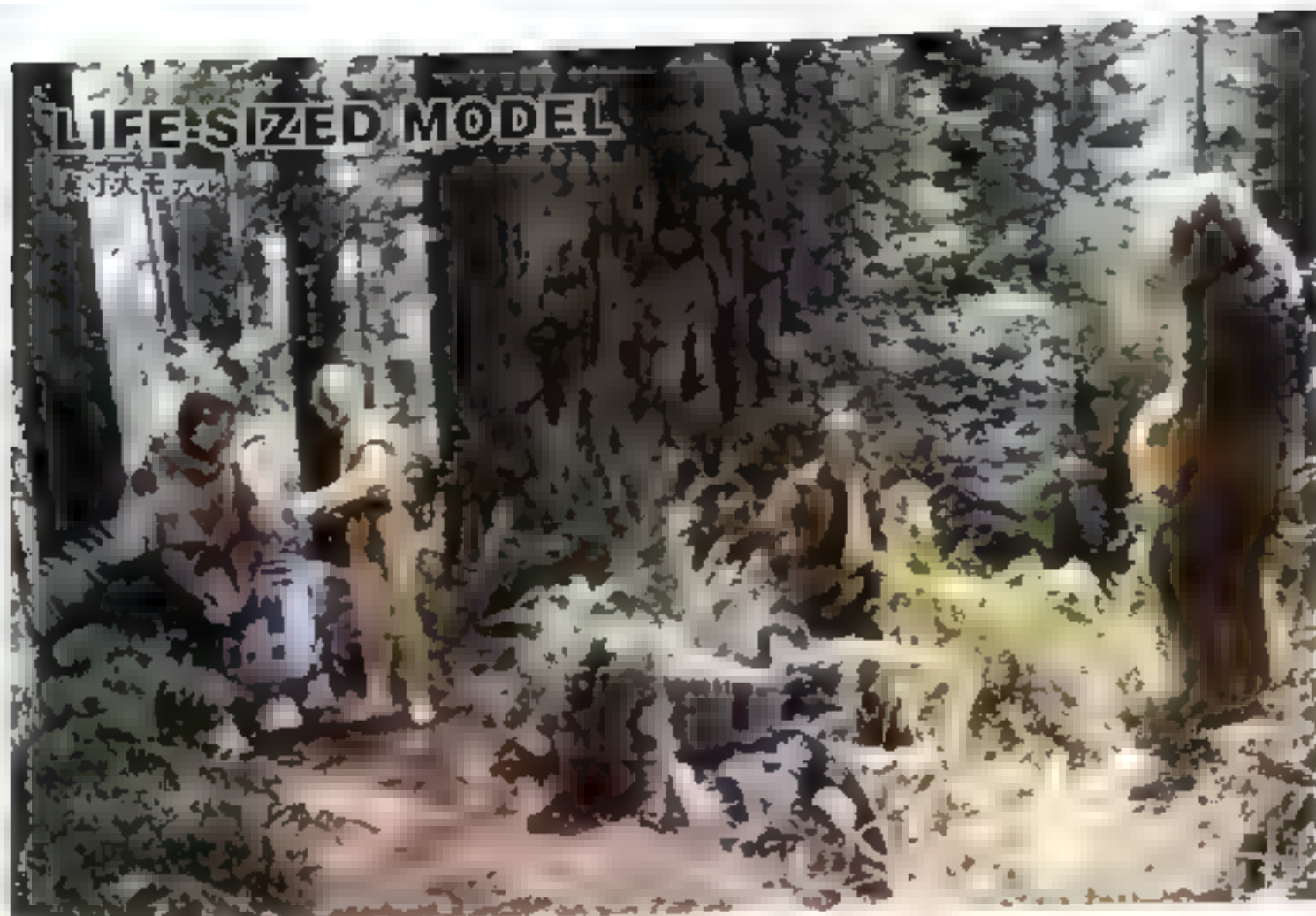
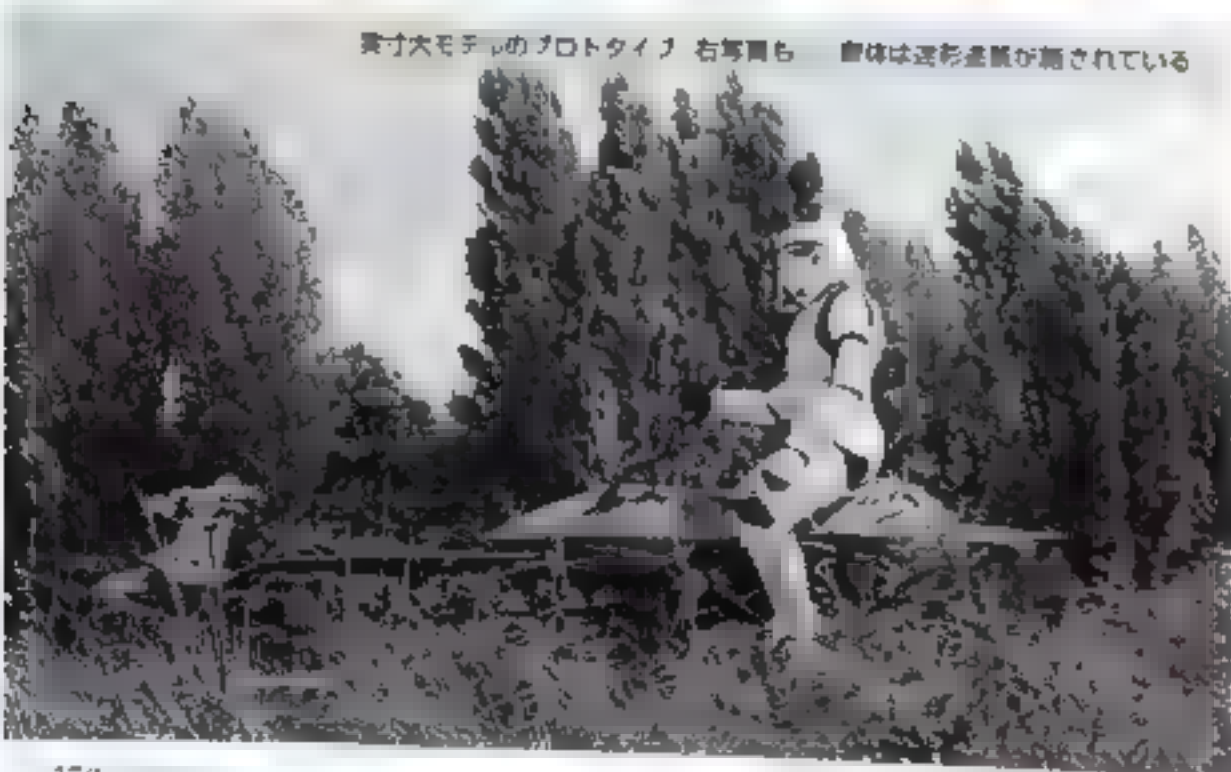
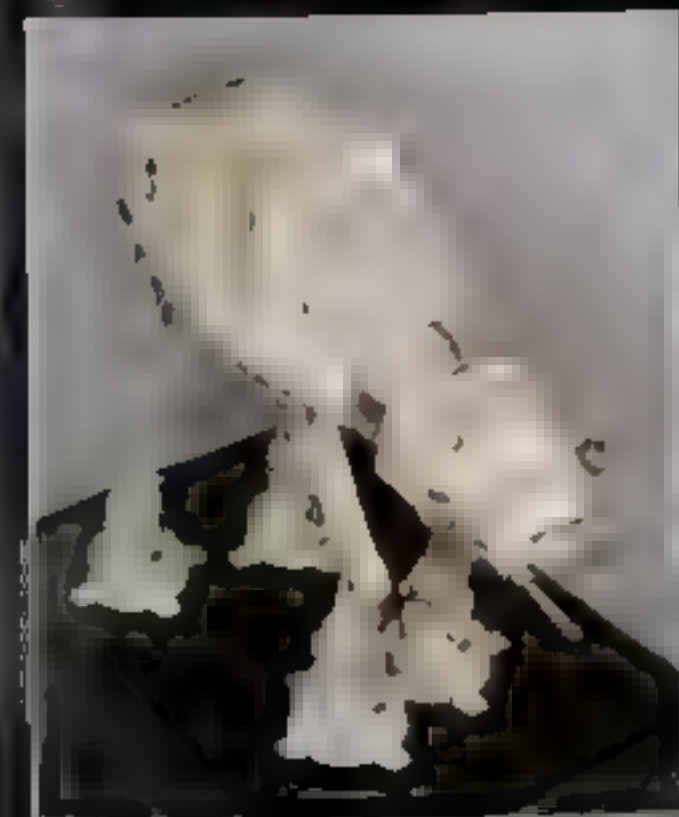
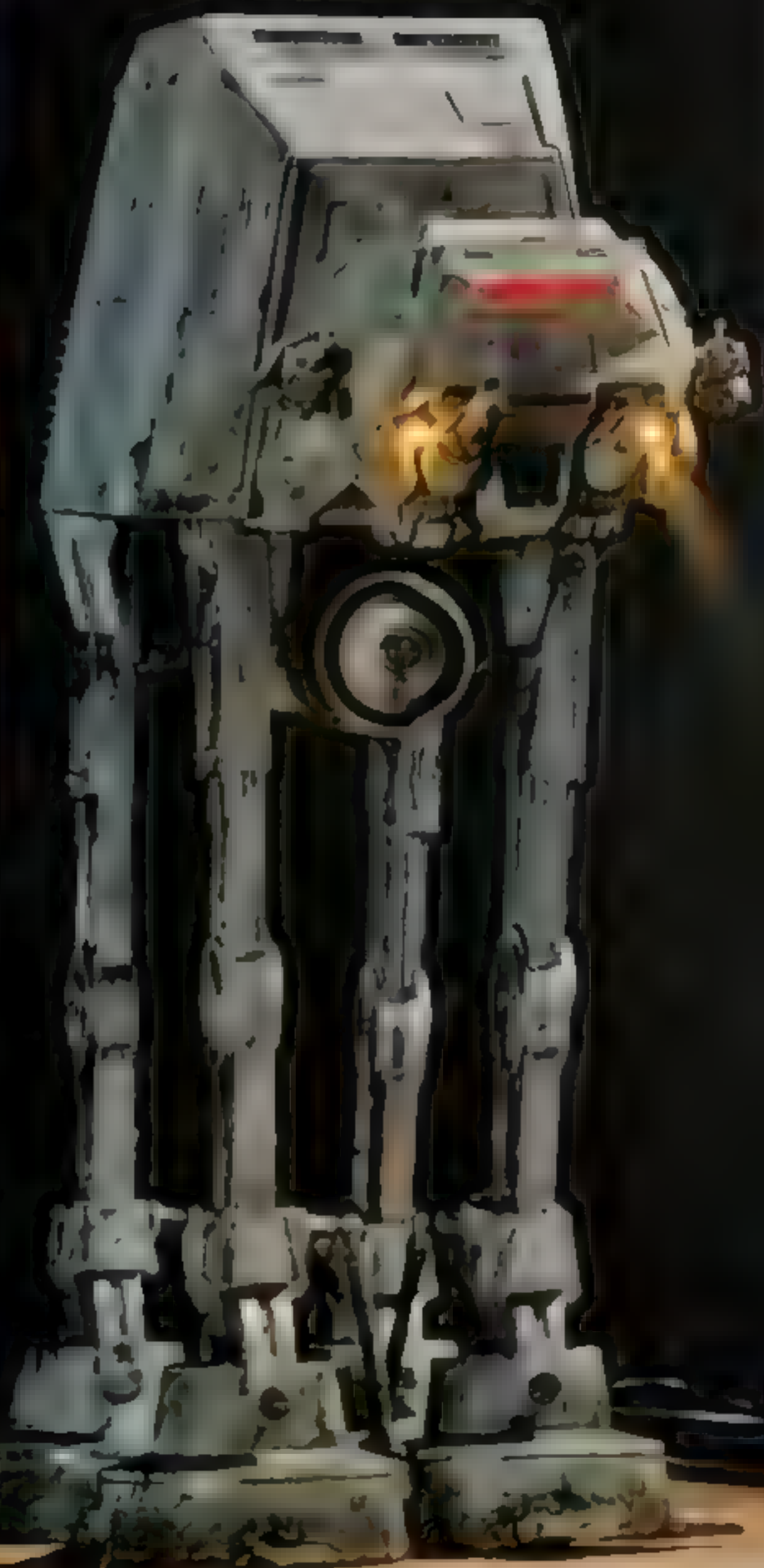
上 小さいスケールで作られたプロトタイプ。このミニチュアは多くの市販プラモデルのパーツを組み合わせただけでできており、全体に迷彩塗装が施されている

右 撮影用ミニチュアの組み立て途中写真。

全長約80センチのミニチュアの上面。ミニチュアと平行に置かれている定規は、上がセンチで下がインチの目盛りとなっている。

同ミニチュアの下面。後部のフラップは上がった状態である

左　ミニチュアの左側面

上2点：ミニチュアの前面　背面。両サイドのフラップが上がって中のエンジンが見えている

LIFE-SIZED MODEL
実寸大モデル

破壊されたスピーダー・バイク（上写真）と、スカウト・トルーパーのコスチューム（右写真）。下写真4点はブルーバックを使用した戦闘シーンのメイキング

実寸大モデルのプロトタイプ（右写真も）。車体は迷彩塗装が施されている

A-wing Starfighter Aウイング・スターファイター

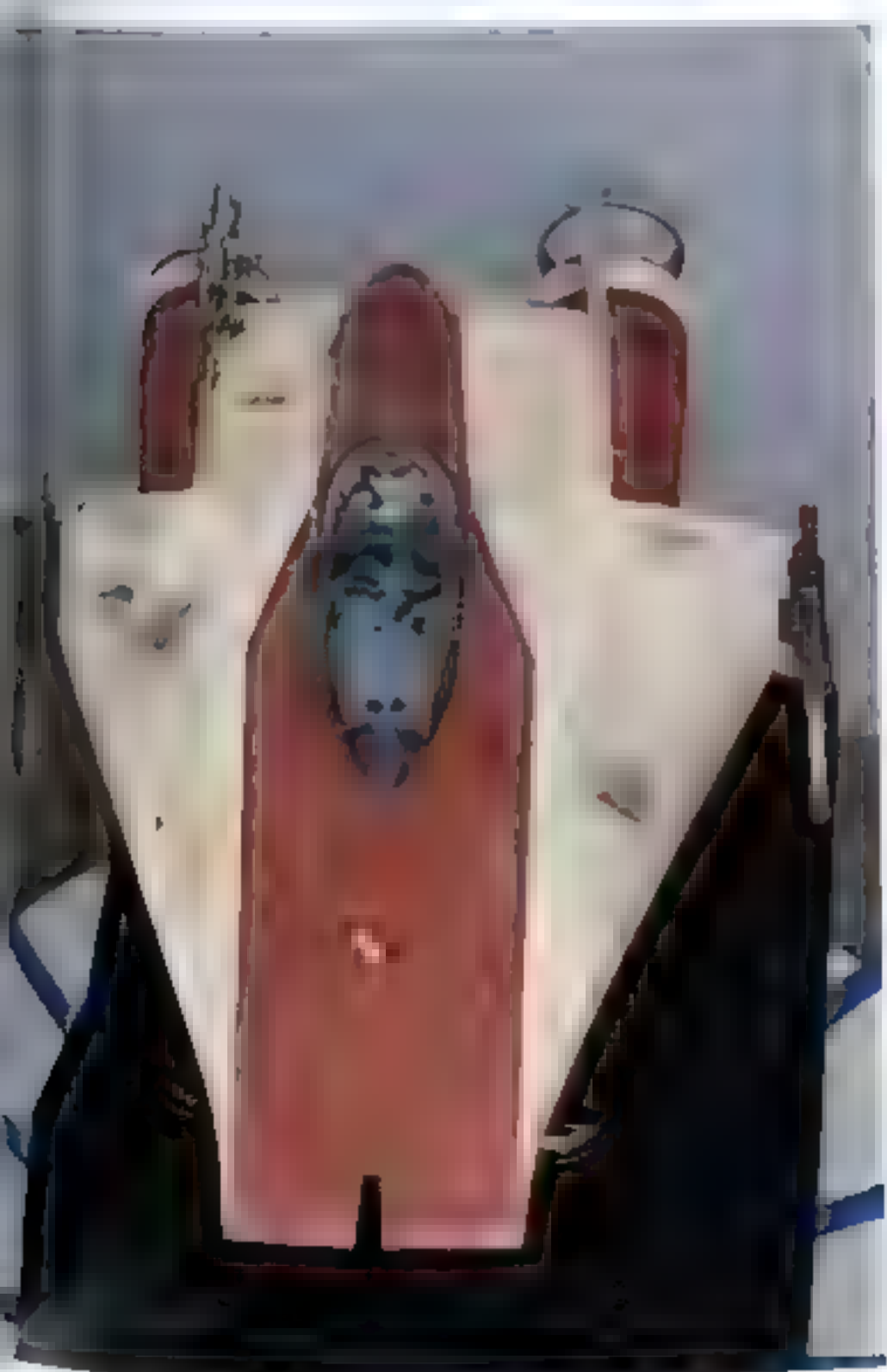
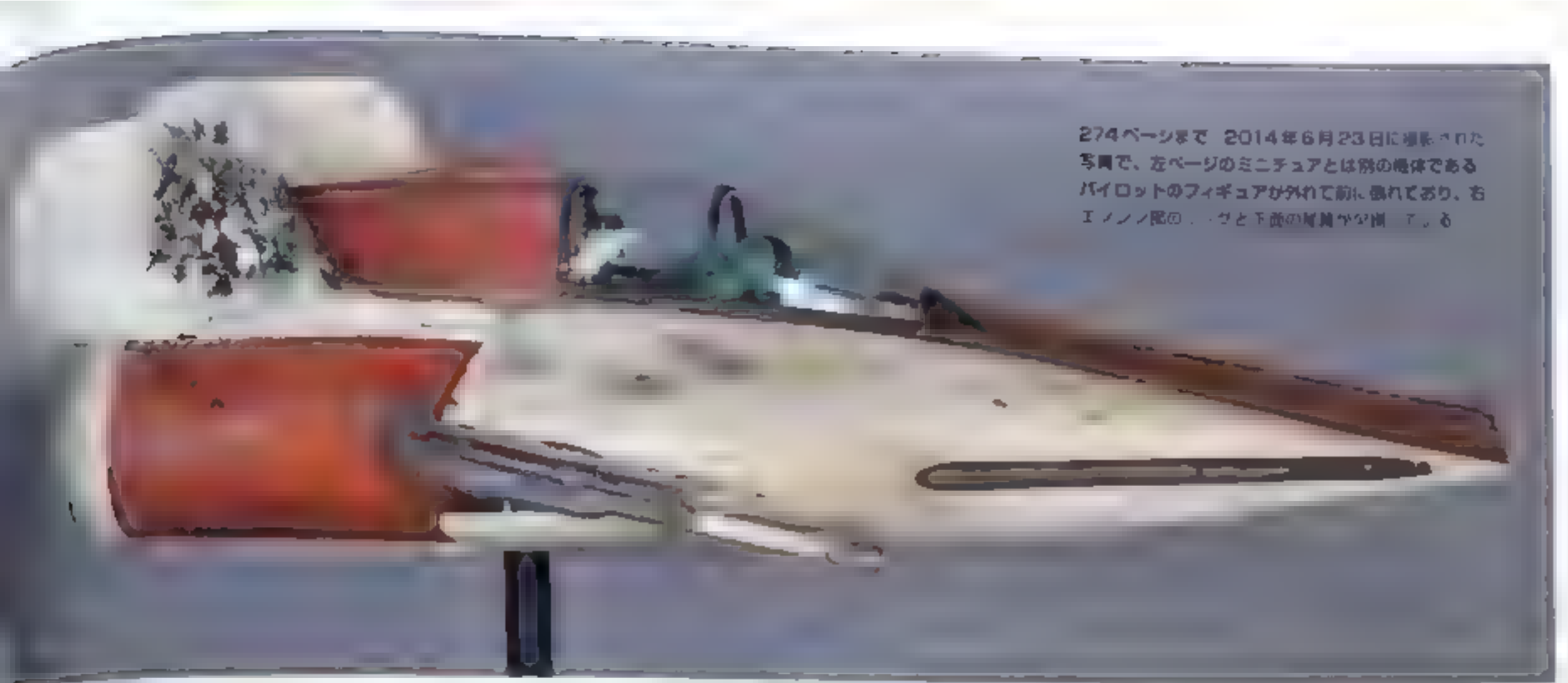
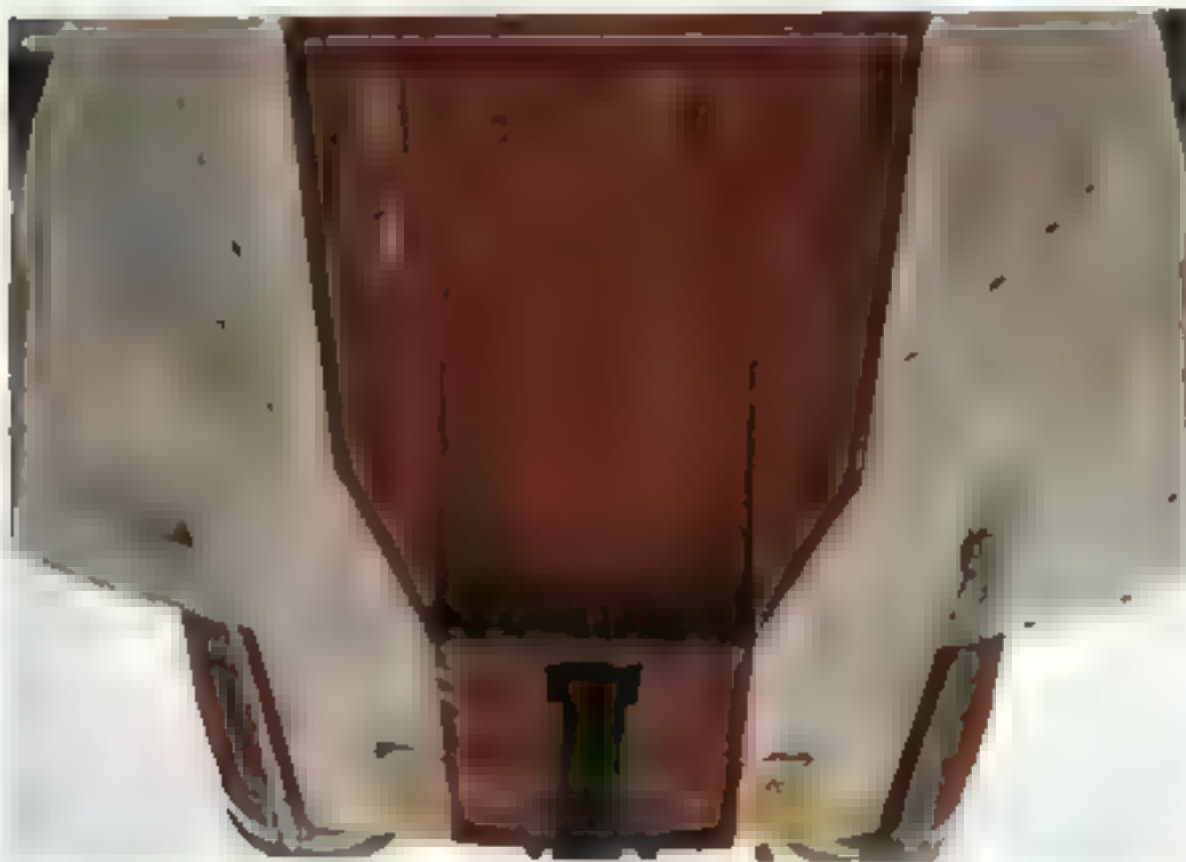
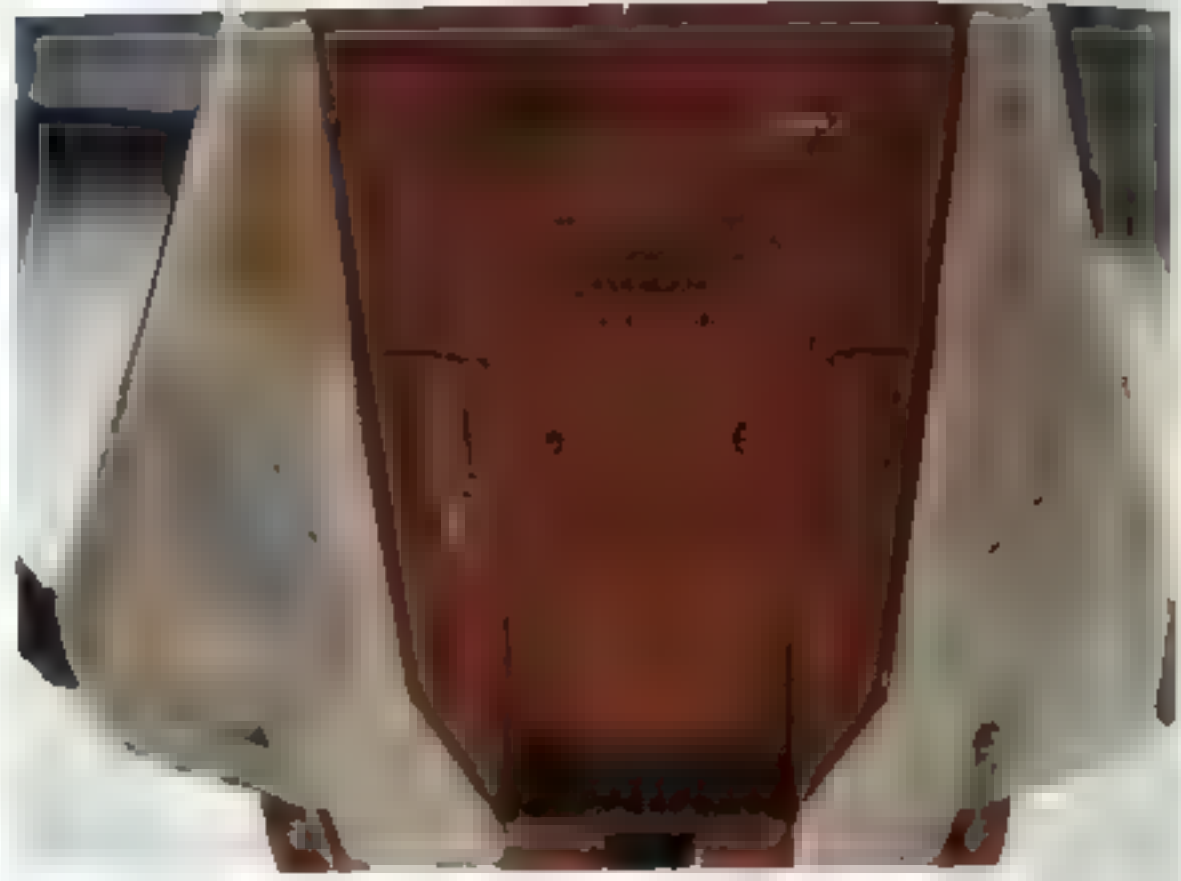
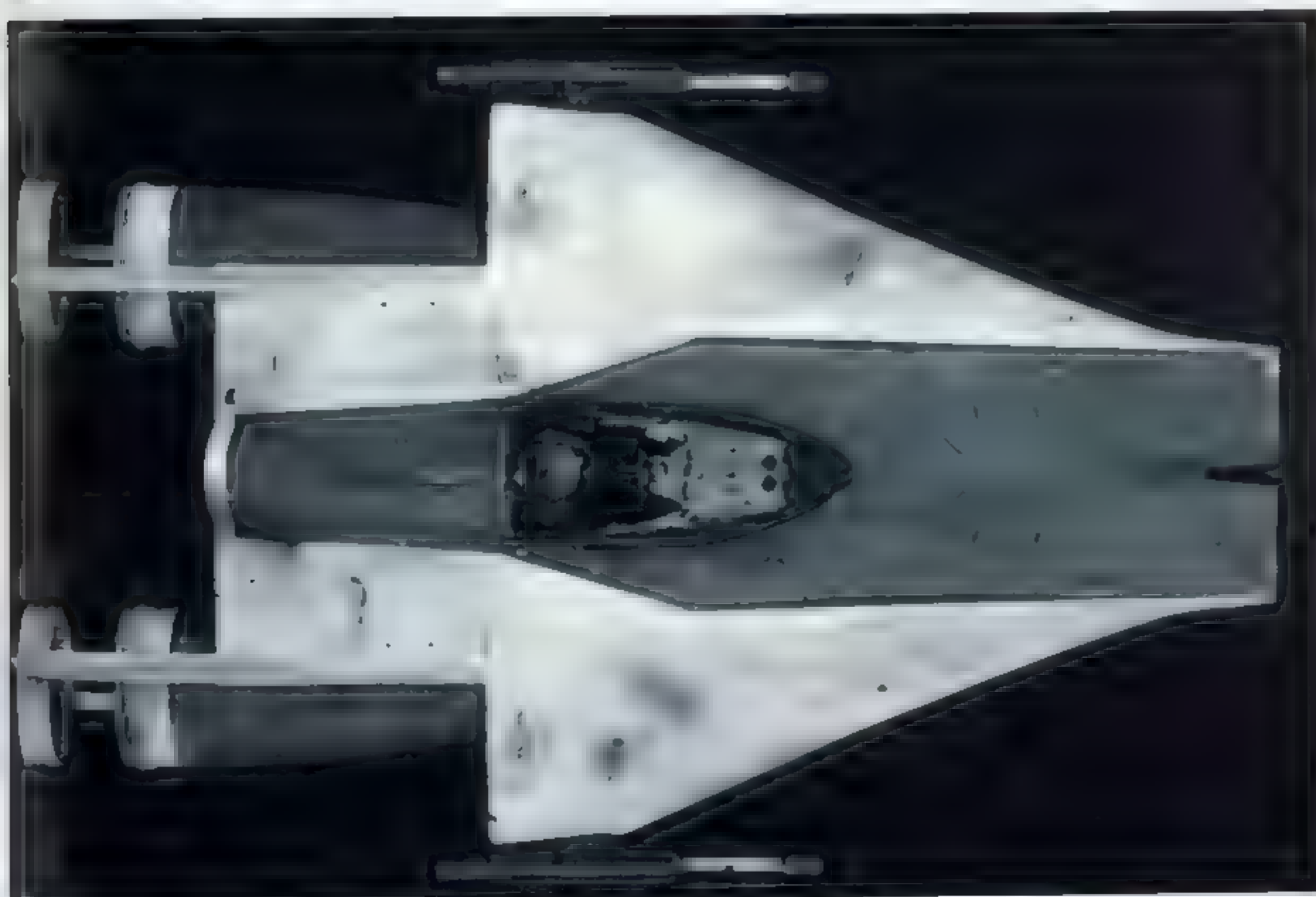
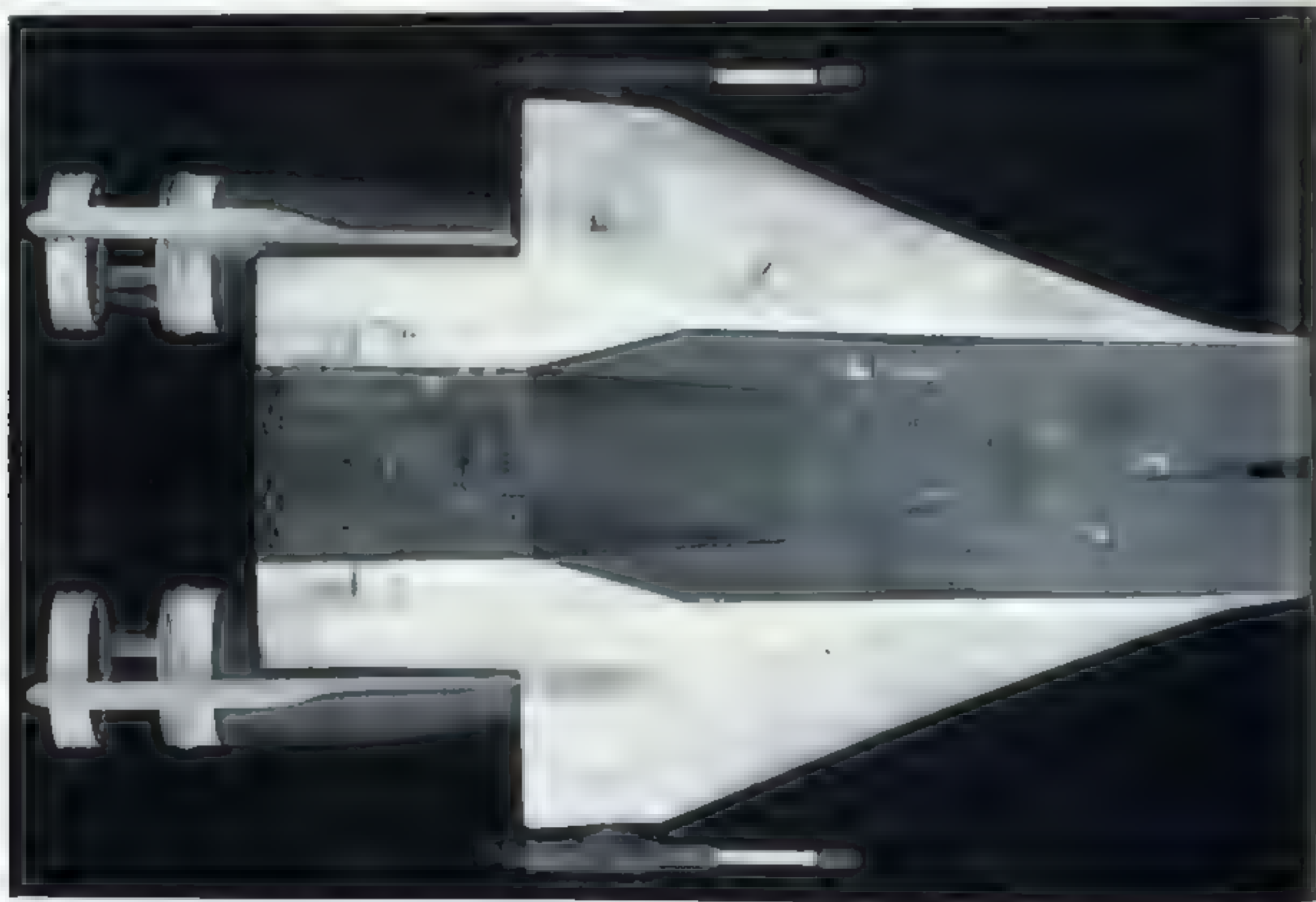
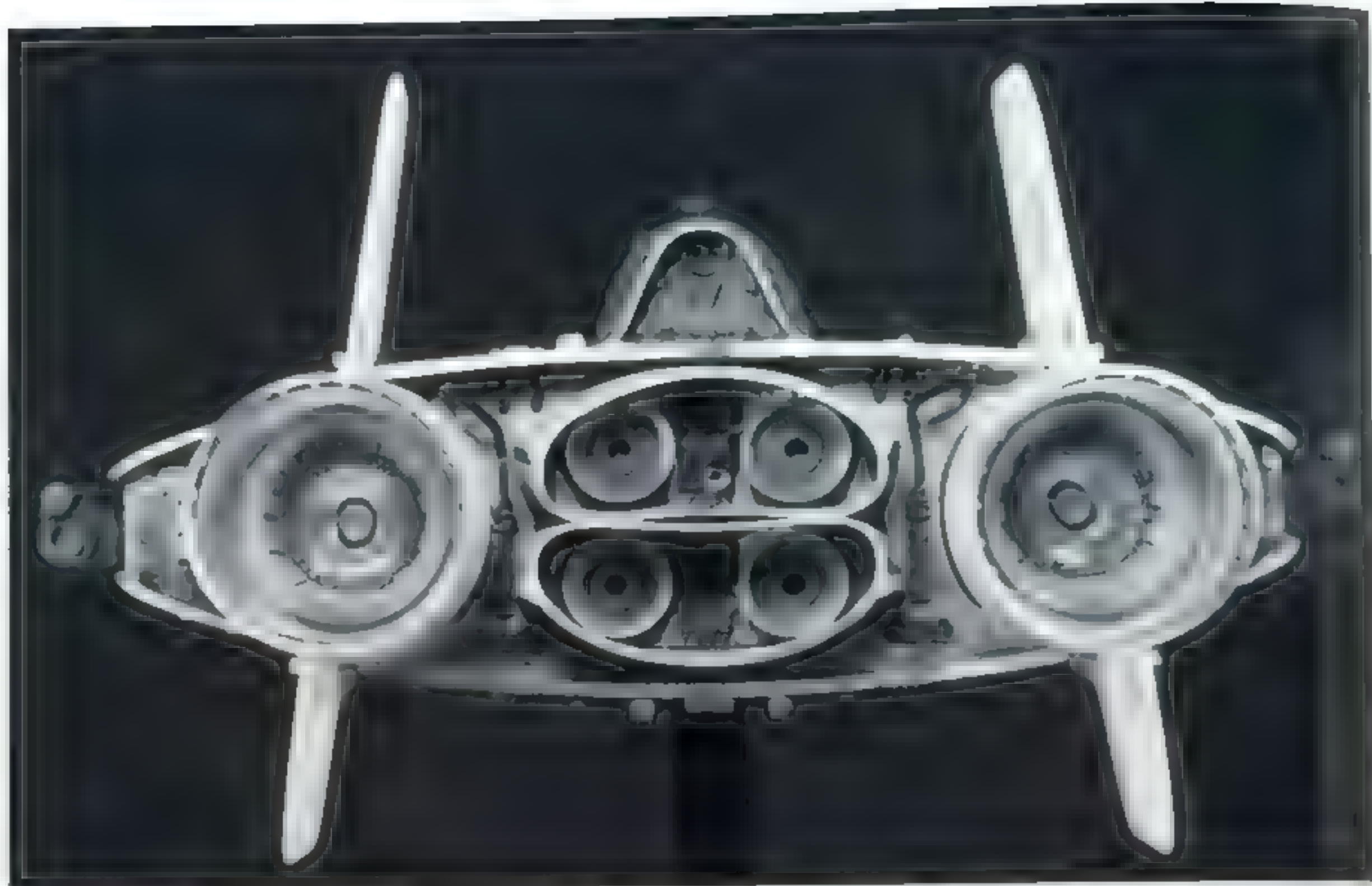
「RZ-1 Aウイング・インターセプター」という制式名のAウイング・スターファイターは、高速度を誇るくさび型の単座式宇宙戦闘機で、製造元はクワット・システムズ・エンジニアリング。クローン大戦前後に同社が製造した銀河共和国のジェダイ・スターファイター（デルタ7Bイーサスプライト級軽インターセプターやイータ2アクティス級インターセプター）の後継機種的存在であり、ハイパードライブ装置を搭載する。全長9.6メートル

Aウイング・スターファイターのグリーン・リーダー機に乗るグリーン中隊隊長のアーヴェル・クライニッド。

Aウイングのミニチュアは撮影用に2機作られた。その内の1機を右前方から撮影した写真。

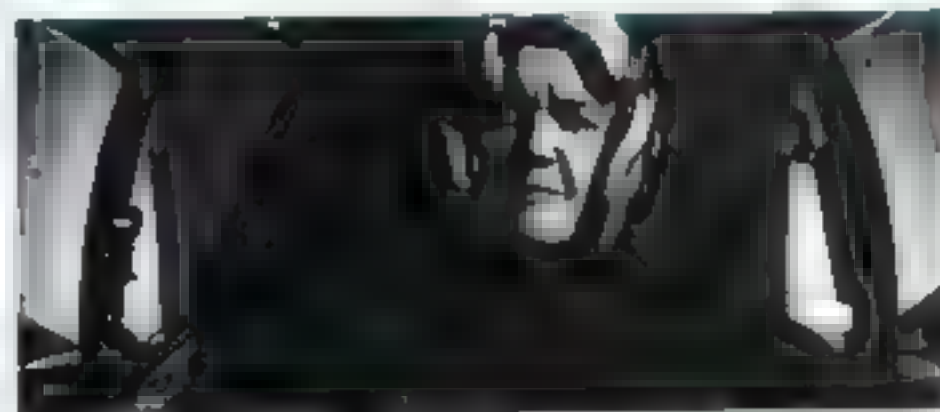
クライニッドの操縦するAウイング・スターファイターが〈エグゼクター〉のブリッジに衝突して、この超弩級艦は制御を失い、第2デス・スターに墜落した。

同ミニチュアを左後方から見る。こちらの機体は機首前方の左に塗り分け部分があり、右ページのミニチュアとは別のものである。

274ページまで　2014年6月23日に撮影された写真で、左ページのミニチュアとは別の機体であるパイロットのフィギュアが外れて前に倒れており、右エンジン部の[illegible]ザと下面の尾翼が欠損[illegible]る

277ページまで 記録用に撮られたAウイングのミニチュア このミニチュアは機首前方左に塗り分け部分がないことなどから 273～274ページのミニチュアと同じ個体であると判断できる

本ページ　ミニチュアの後面と下面。ミニチュアは2機同時に作られたが、エンジン取り付け部の後面パネルに付いている細部パーツが両者では若干異なっている。下段写真を見ると、パネルの一部が近似色で塗り分けられていることがわかる。

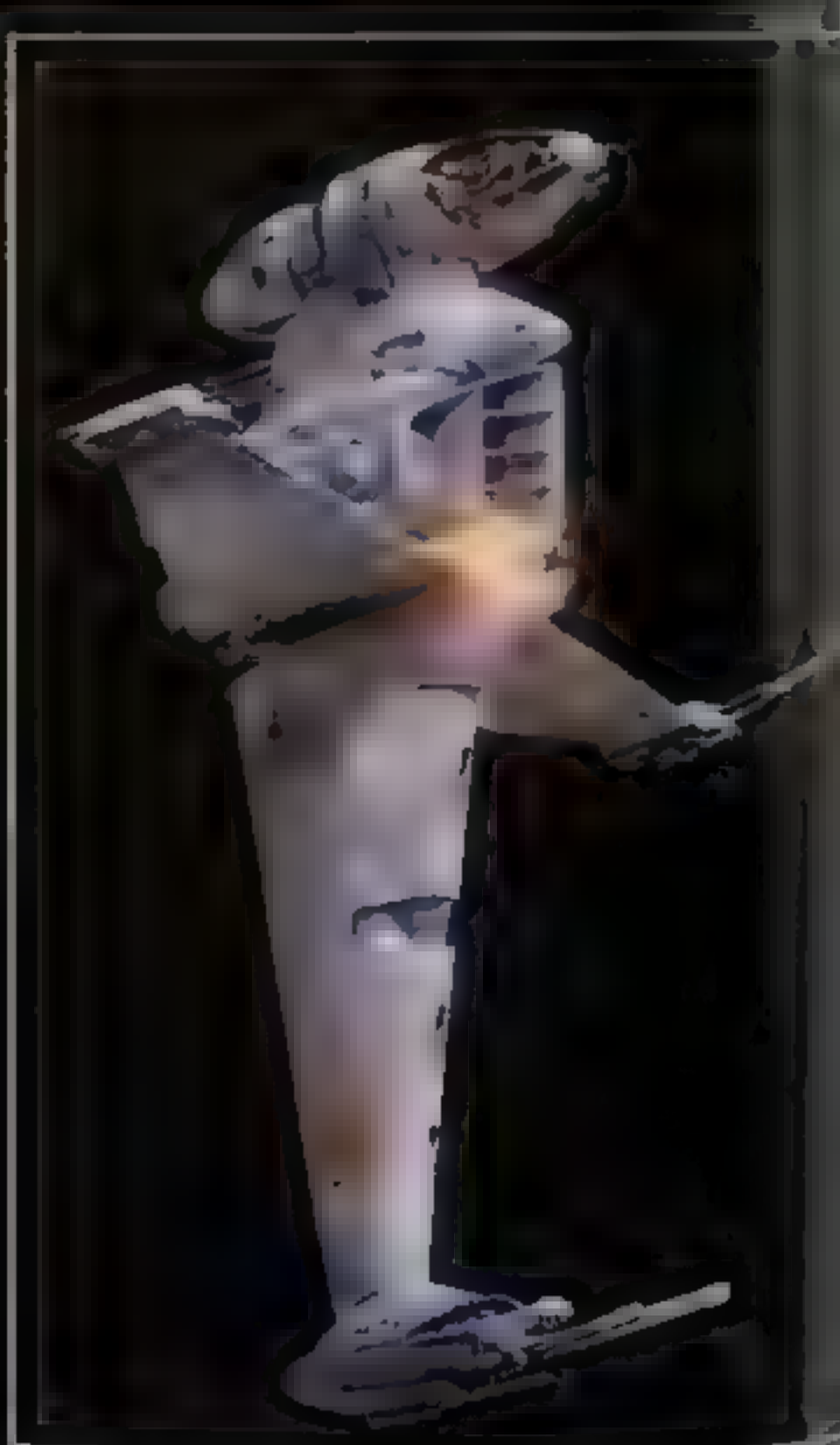
ミニチュア パイロットのアップ このフィギュアはコクピットに入らなかったため 両脚のところでカットされている

こちらのミニチュアでは上の写真と異なる、スケールの小さなパイロット・フィギュアが乗せられている

Aウイングのプロトタイプ・モデル

中年女性のAウイング パイロット

B-wing Starfighter Bウイング・スターファイター

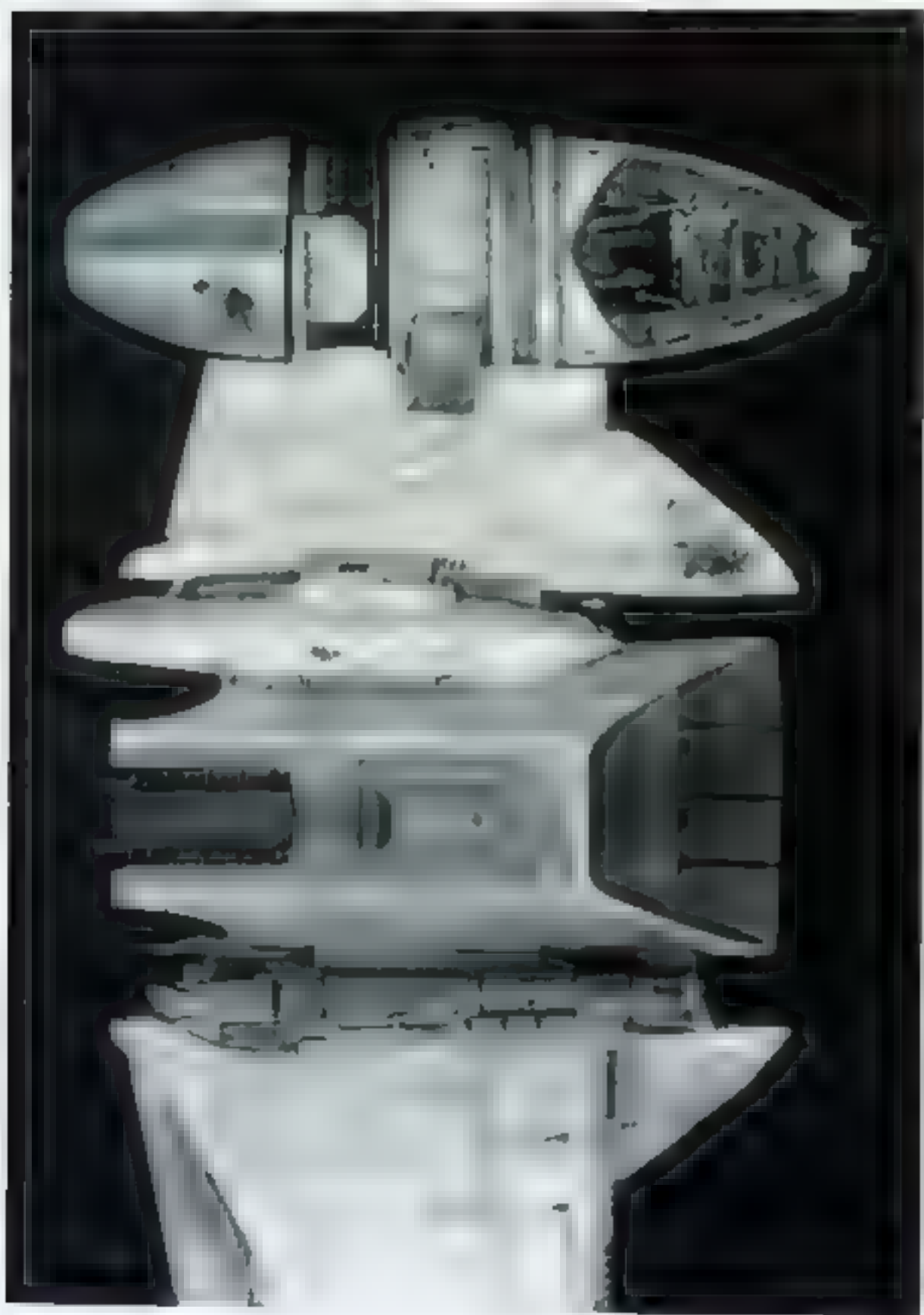
機体最上部に位置するコクピットをはじめ、特異な機体構造が特徴のBウイング・スターファイターは、A/SF-01 Bウイング・スターファイターという制式名の単座式宇宙戦闘機である。Xウイング・スターファイターよりも飛行速度は劣るものの、高い火力と防御力を持っている。製造元はX-19トーレント・スターファイターも製造した昆虫型種族ヴァーパインの企業、スレイン&コーピルである。全長16.9メートル

本ページ：ライトを点灯した飛行状態のBウイングのミニチュア。Bウイングは通常、このように機体を縦にして飛行する。コクピットは回転式で、機体がどんな体勢になろうとも絶えず水平なポジションを保つ機構である。

エンジン部に組み込まれたライトが点灯していない、ミニチュアの雄姿。右写真はその側面。

「スター・デストロイヤーを攻撃しているBウイング」の宣伝用コラージュ写真用に撮られた素材写真で、機体表面には爆発の照り返しであるオレンジのライティングが施されている。

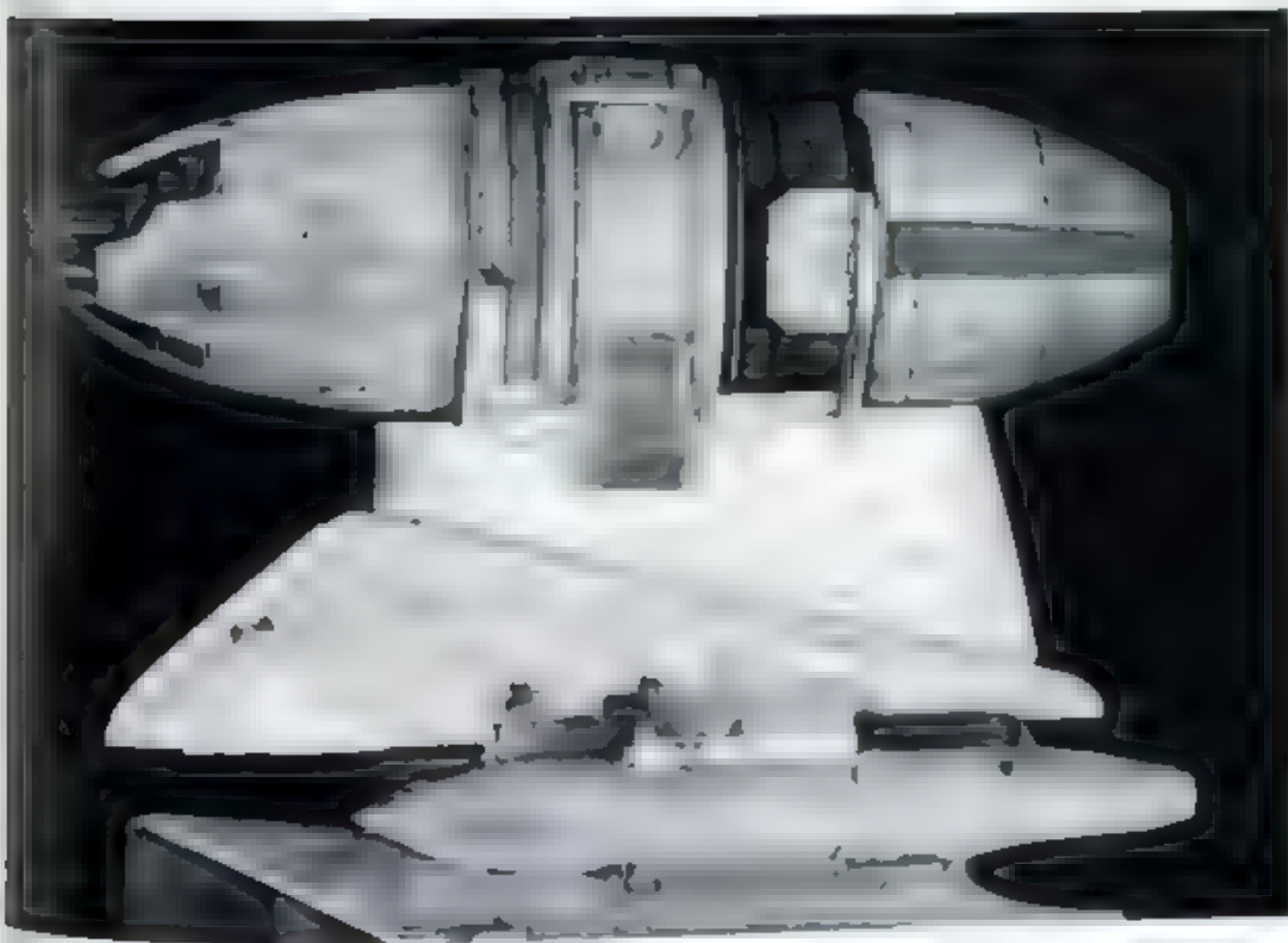
左2点：ラルフ・マクォーリーが描いたコンセプト・アート（上図）と、それを元に作られた宣伝用コラージュ写真（下図）。

本ページ・右ページ：撮影用に造られたBウイングのミニチュア。[illegible]はたたまれている状態。右ページと同じミニチュアであるが、まだ胴体と翼に「日の丸」のような赤いマーキングが描かれていない段階である。

この「エピソード6」における、BウイングとAウイングの登場に至る過程がとても興味深い。デザイナーのジョー・ジョンストンやほかのスタッフへのインタビューによると、当初のシナリオでは物語の後半で帝国軍と大規模な戦闘シーンがあるため、反乱同盟軍側にも新型の戦闘機を2機出すことは決まっていたが、名前などの具体的な記述は何もなかった。そこでスタッフは仮の名称としてこの2機をABCのアルファベット順に、新型機Aウイング、Bウイングと呼んでいた。その後映画の制作が進んでもこの新型2機に関する具体的な決定が何もなく、その名称のままデザインも進行し、映画に登場することになったという。それゆえジョー・ジョンストン当人でさえ、近年のインタビューで「どっちがAウイングでどっちがBウイングか、今もわからないよ」と答えている。

左ページ・本ページ　記録用に撮られたBウイングの各部アップ写真　左ページ下右写真は尾翼パーツがまだ組み込まれていないエンジンノズル　上左写真は翼を展開した機体を上から見た状態で　上右写真は同状態を下から見たもの．下右写真は翼を閉じた状態を正面からとらえた写真

本ページと右ページ：2012年9月頃と2015年8月頃に撮影されたミニチュアの各部写真。胴体はライトがある展開翼付け根から下の部分が欠損してしまっているが、それ以外の保存状態は良好だ

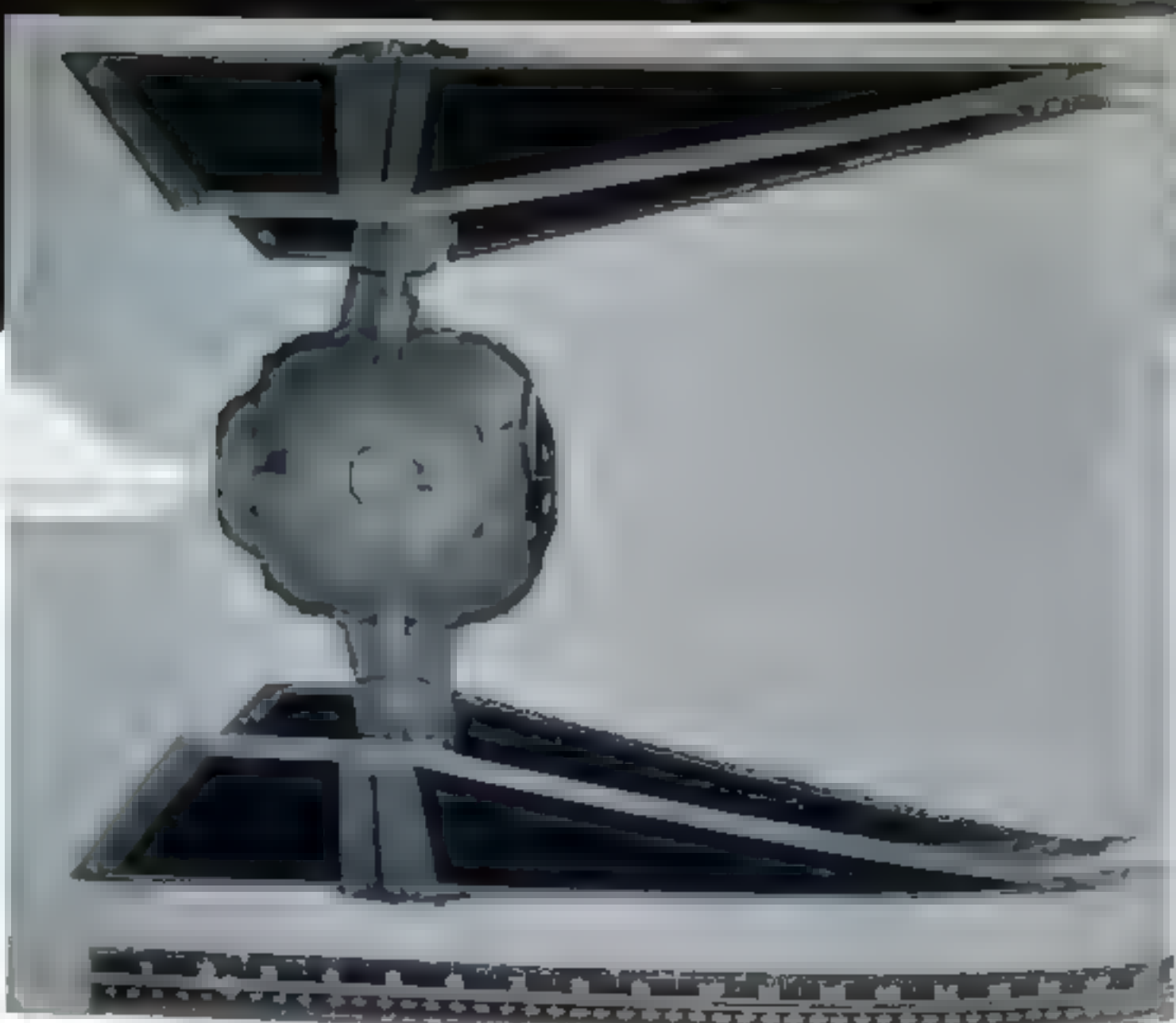
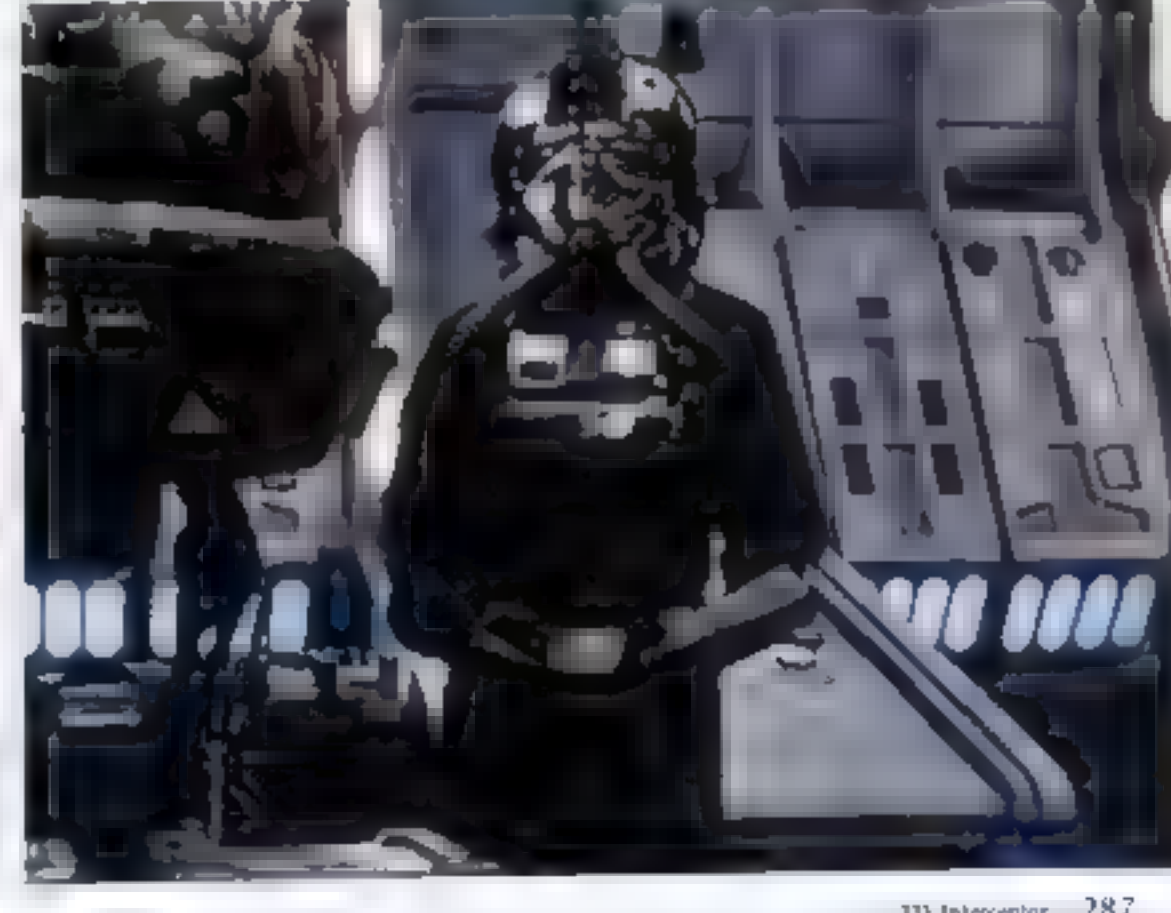
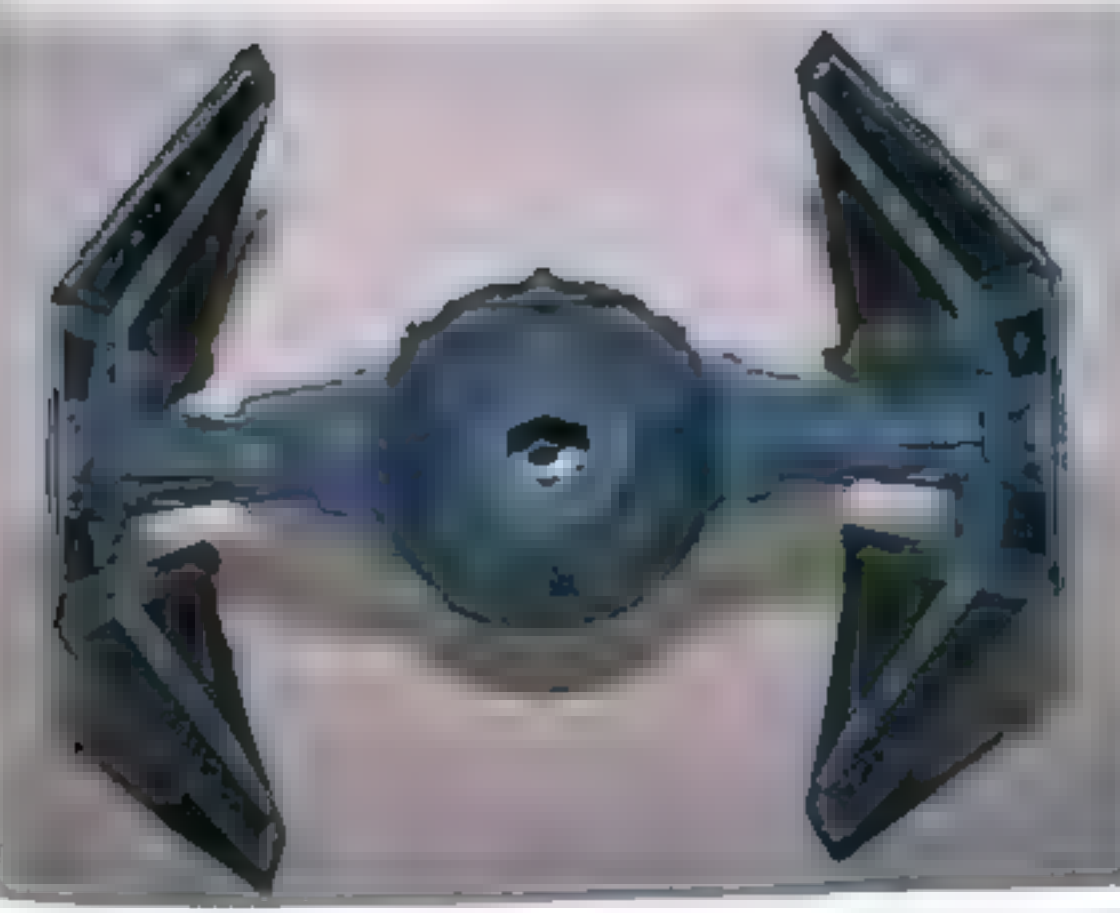
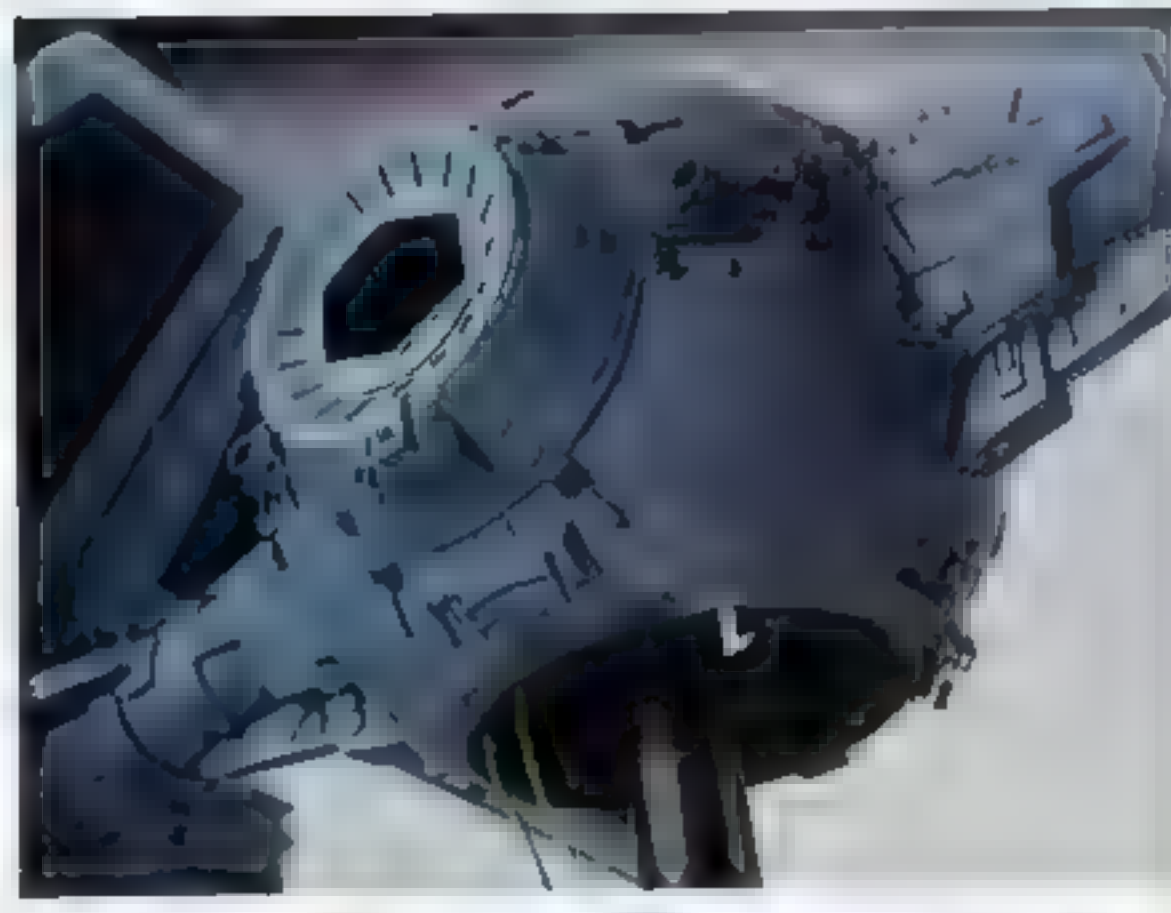
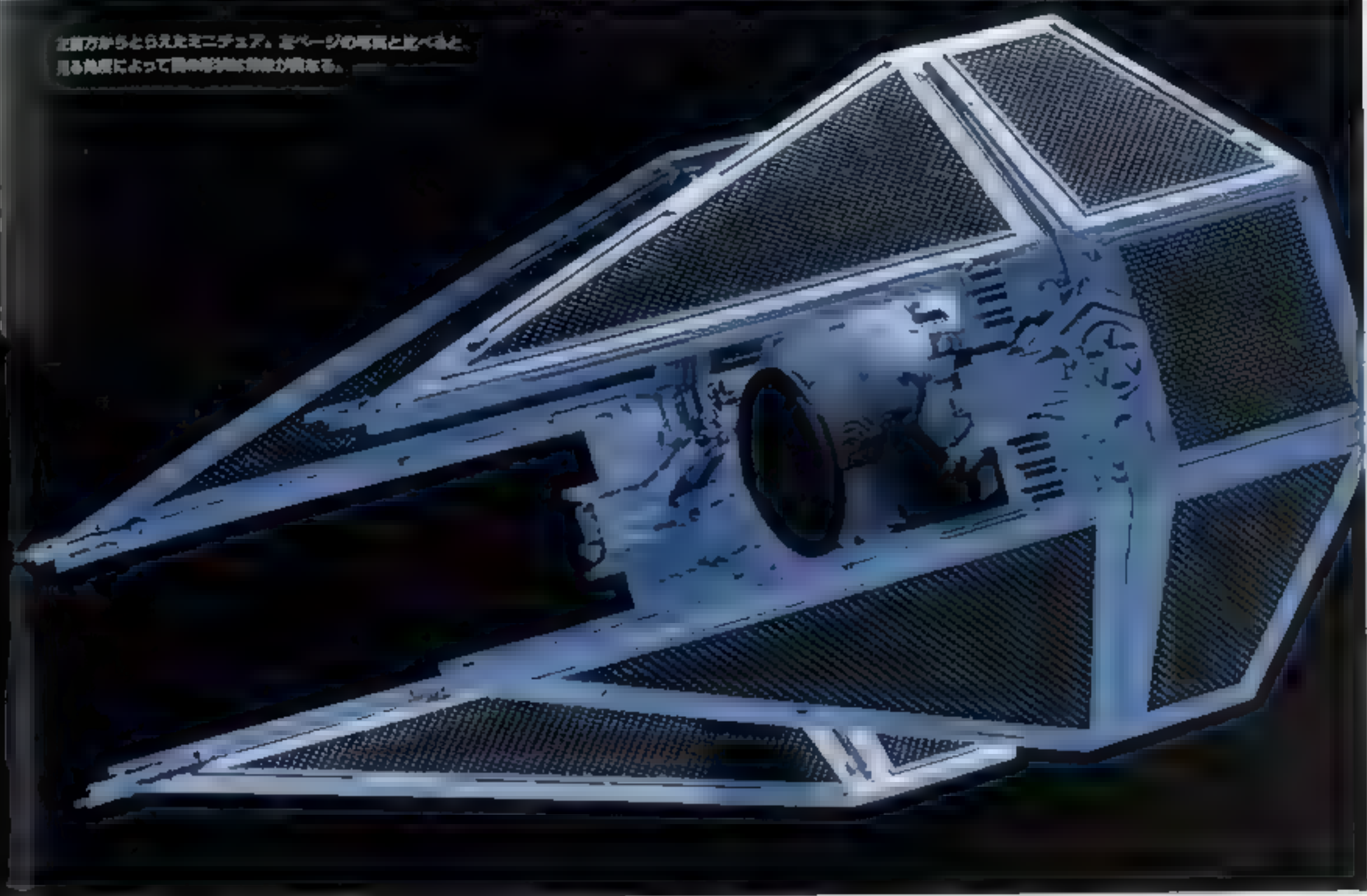
胴体後部にある、エンジン部分を
光らせるための配線も保存されて
いることが見て取れる

左　機体は横位置になっているが、コクピットは水平に保たれている

上6点・ミニチュアの各部ディテール

TIE Interceptor タイ・インターセプター

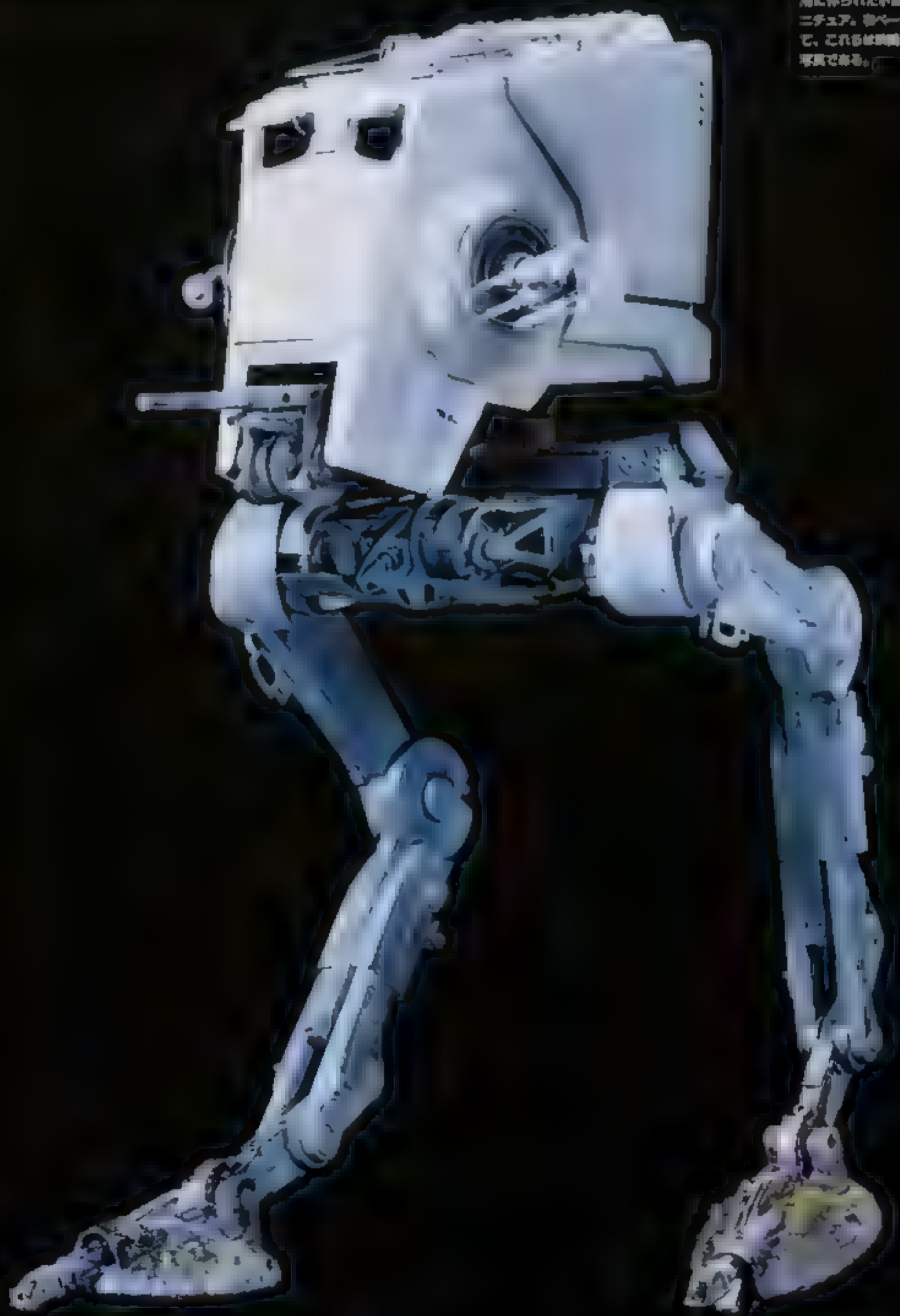
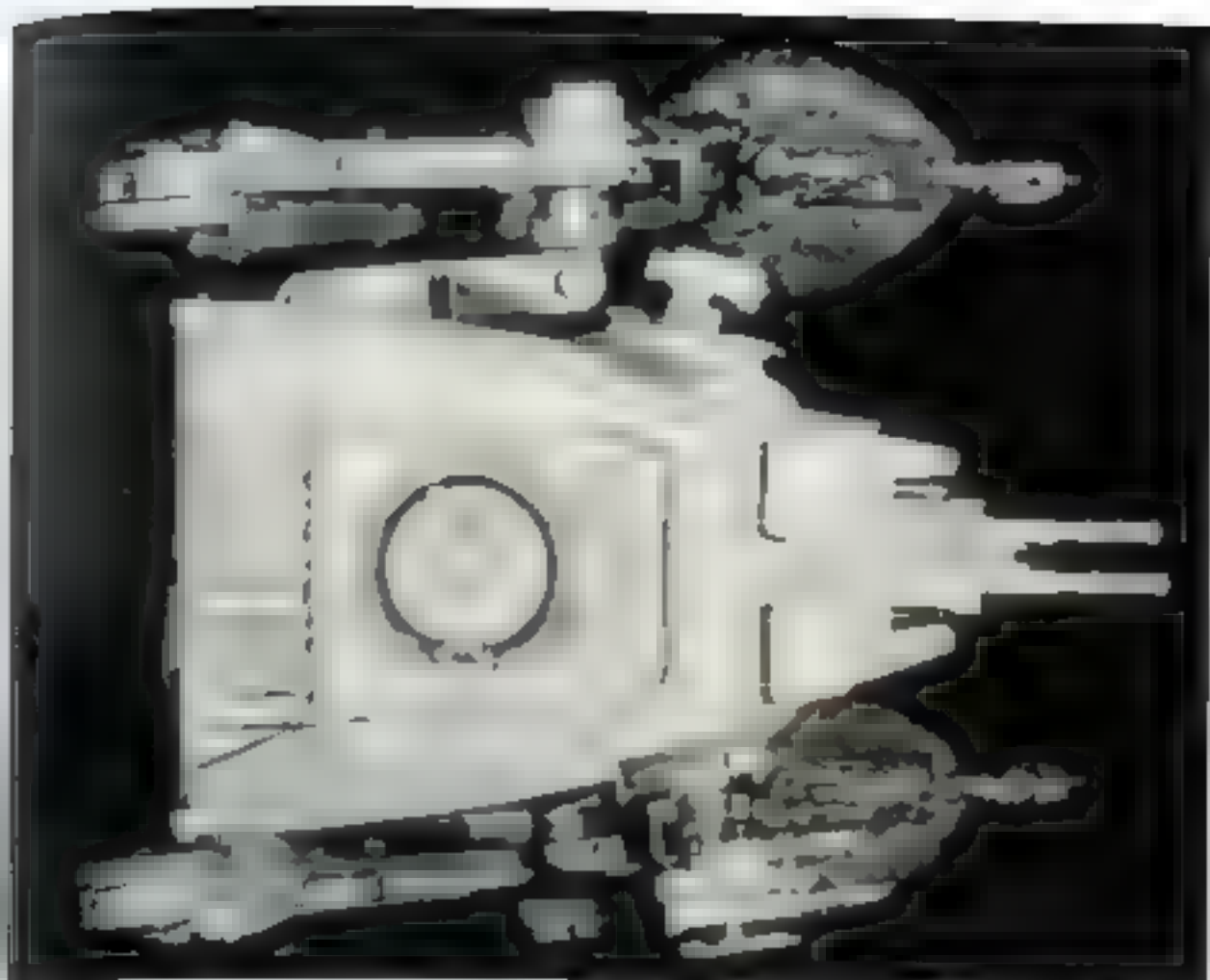
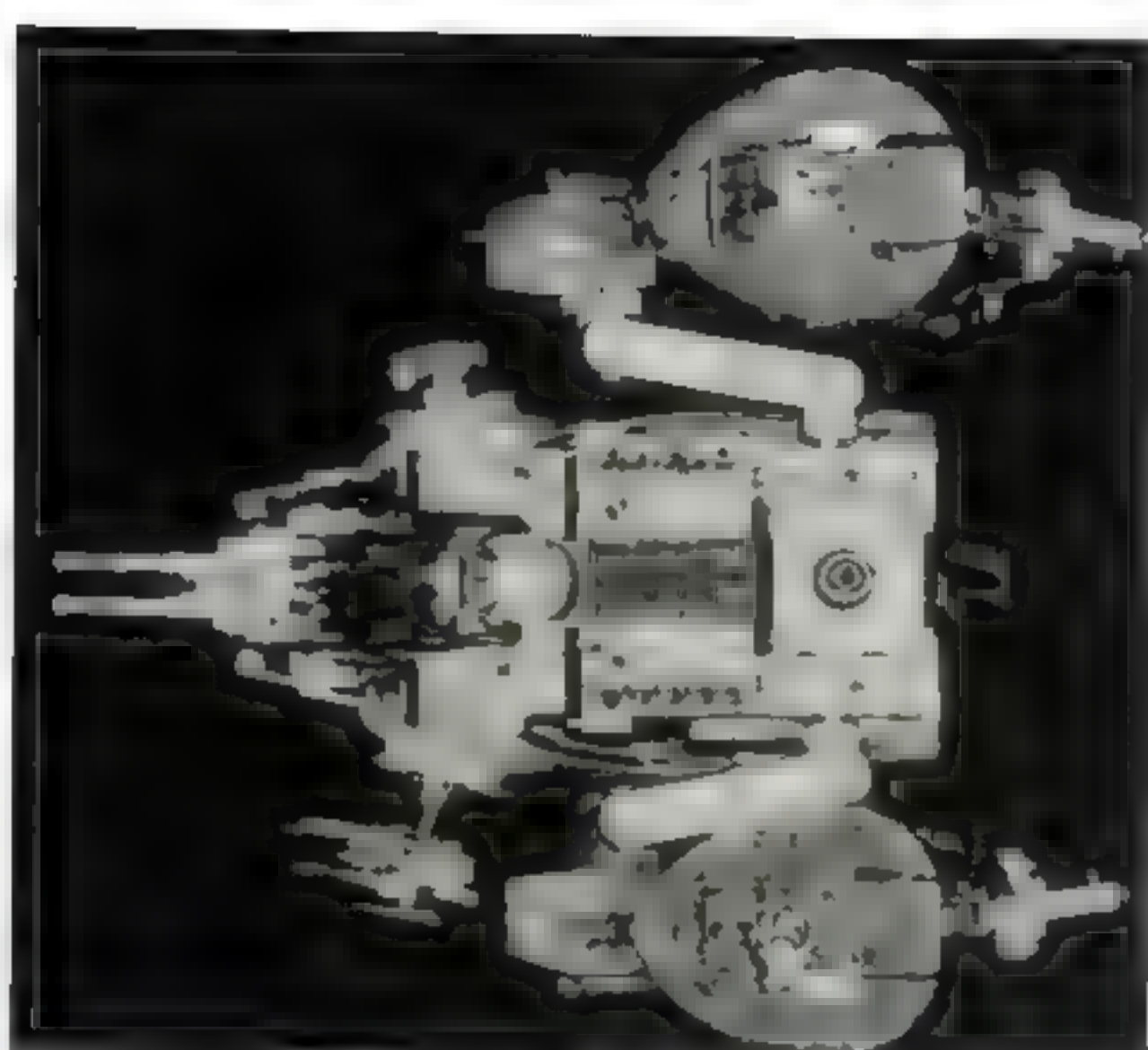
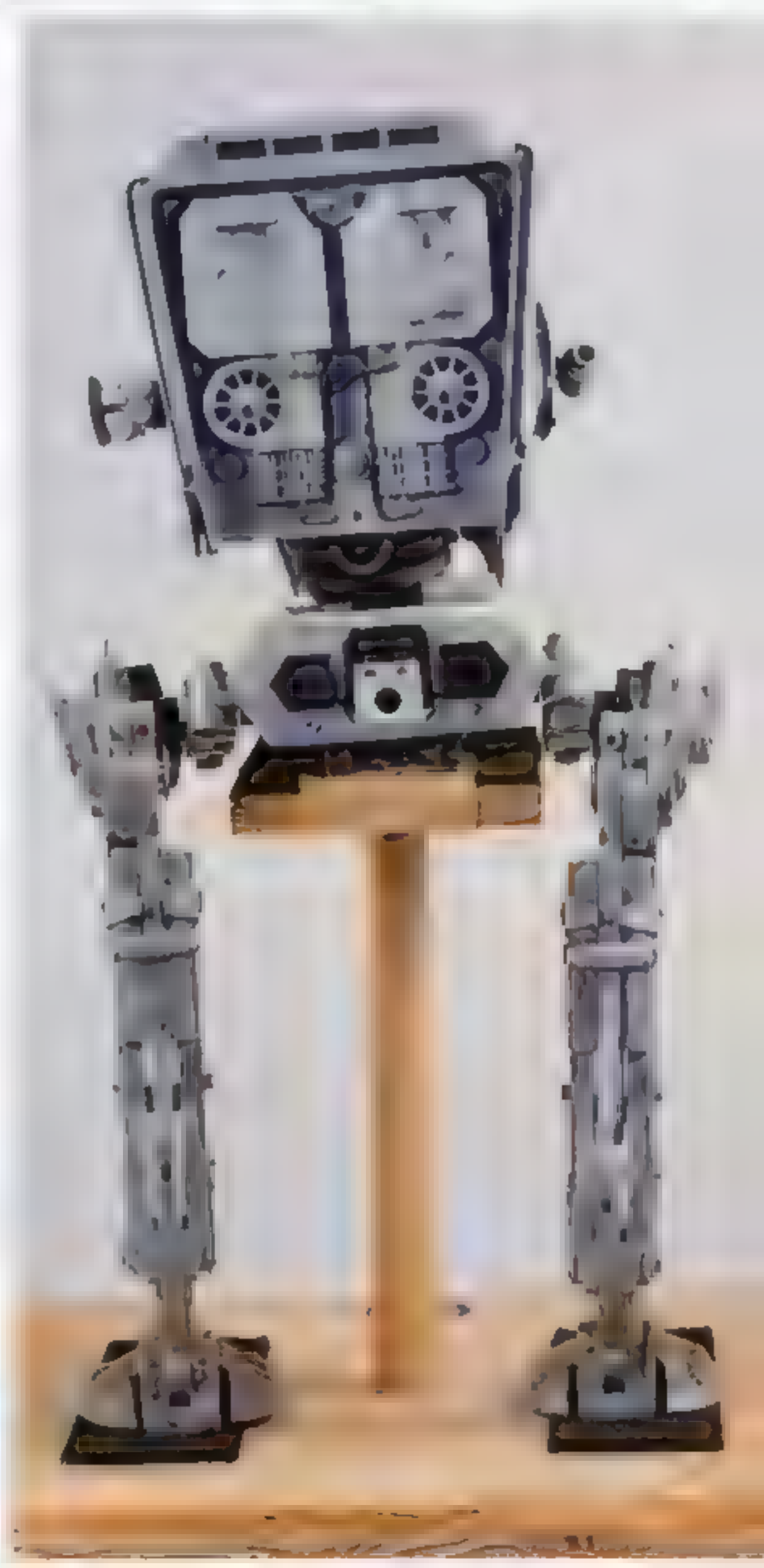
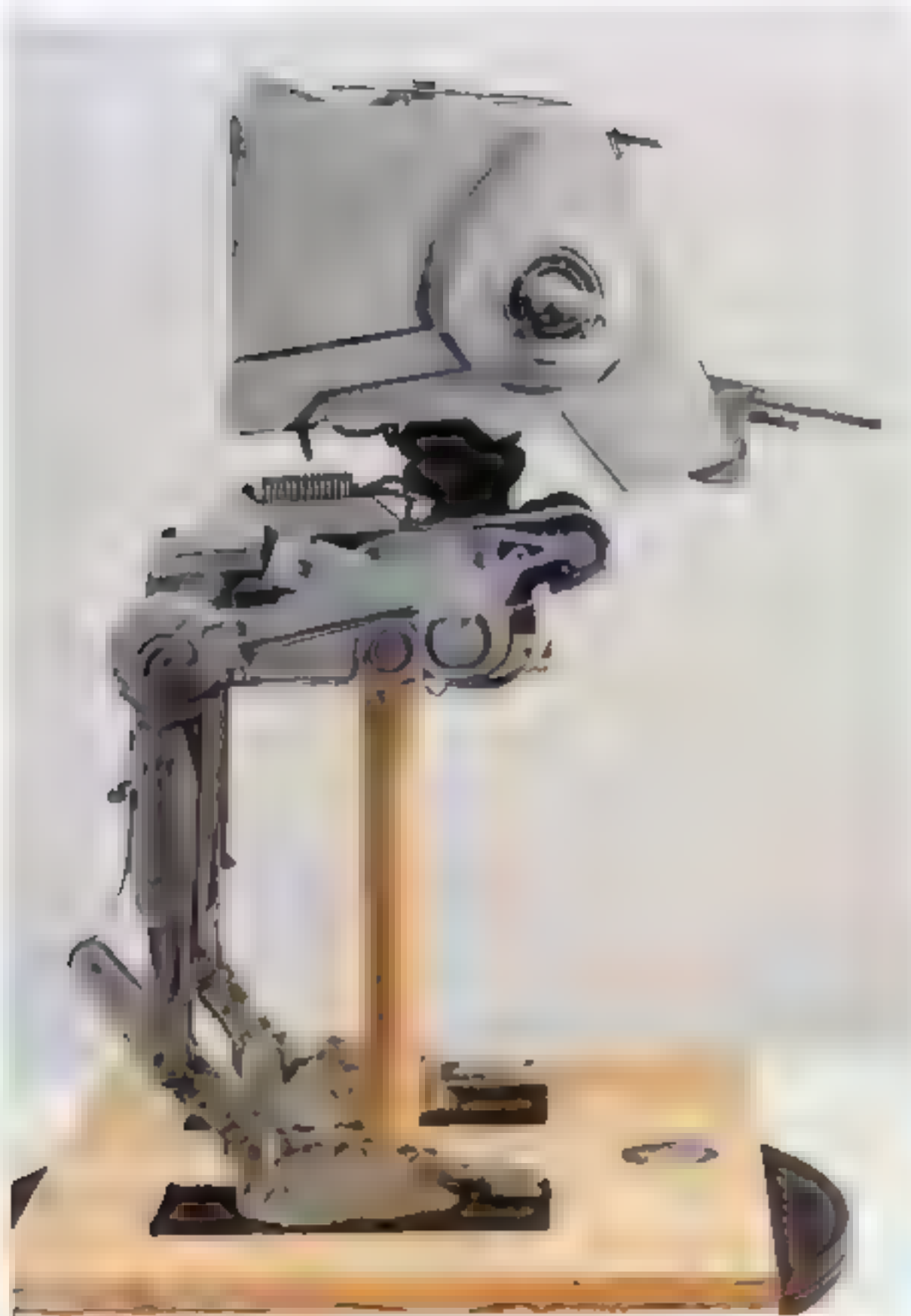
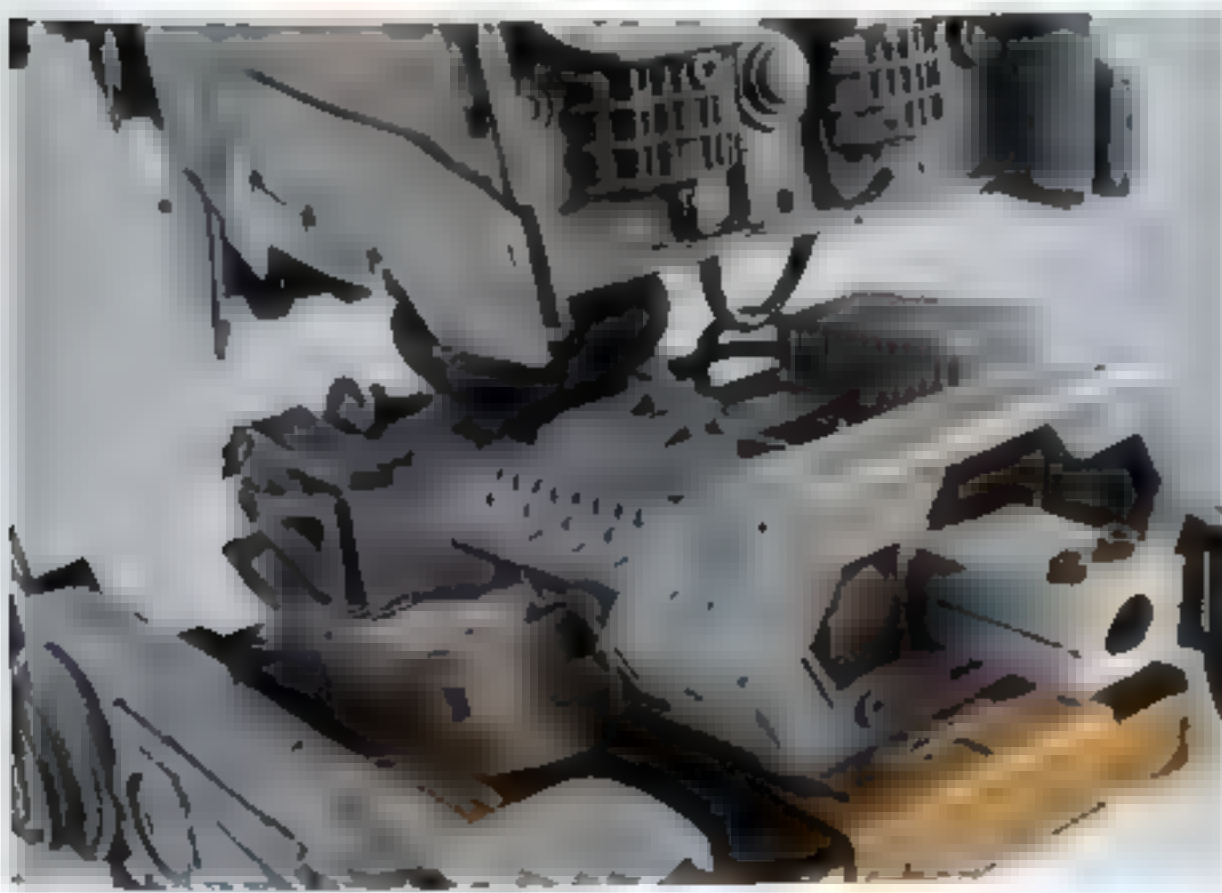
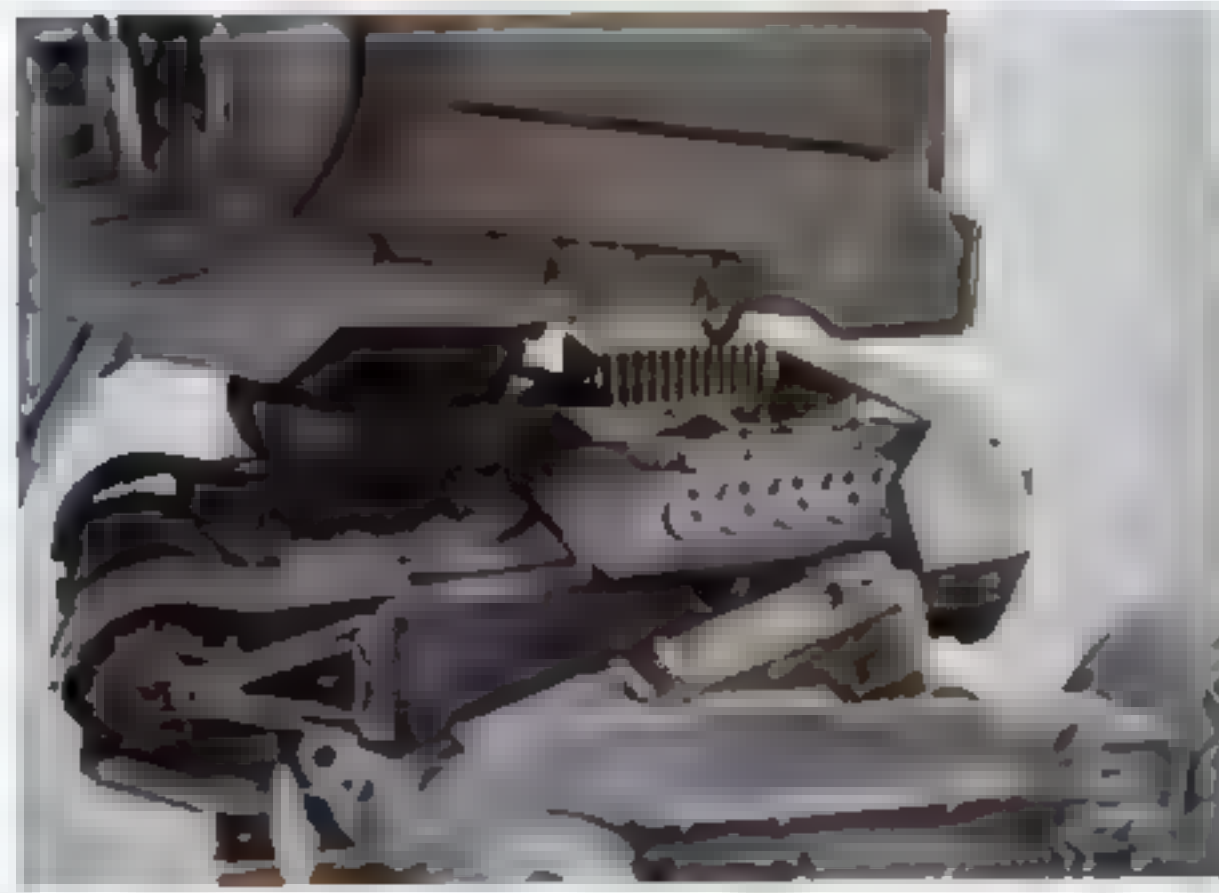
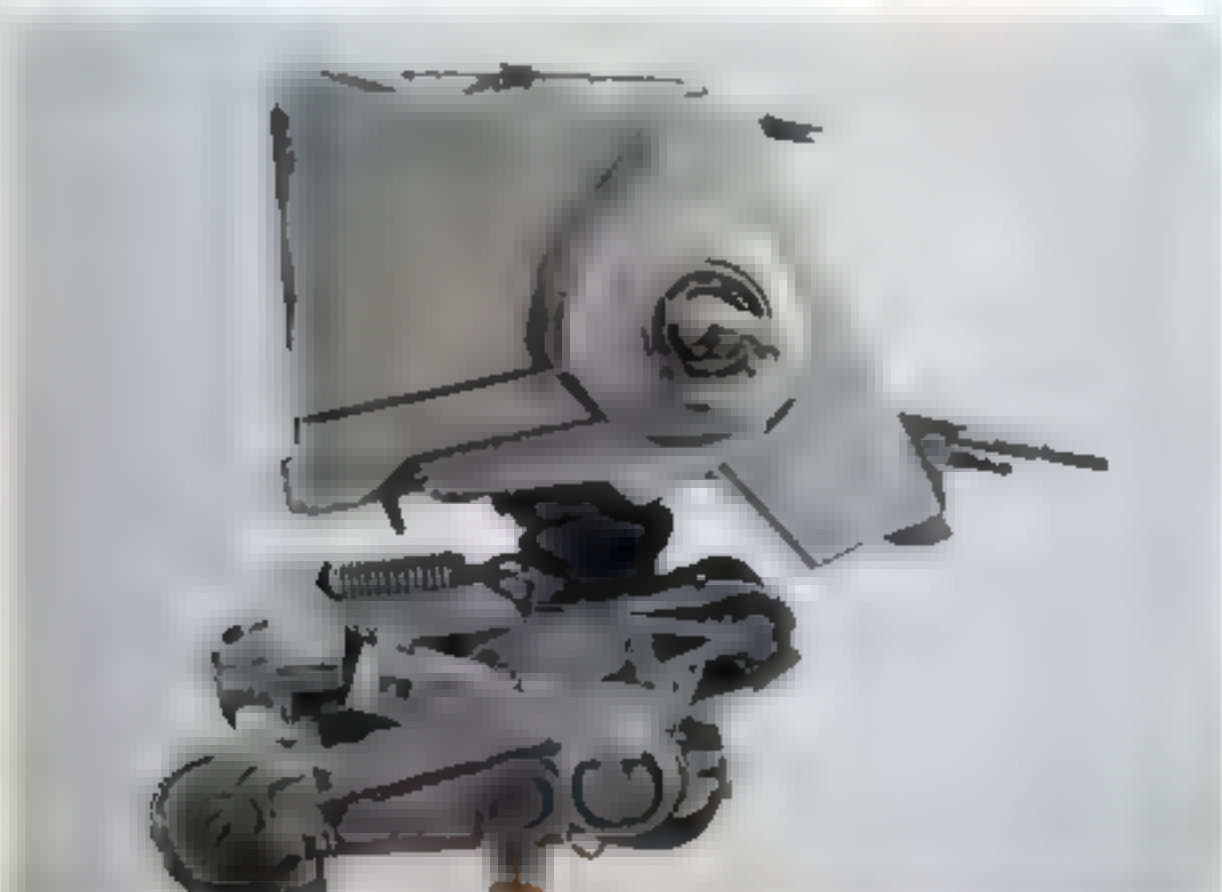
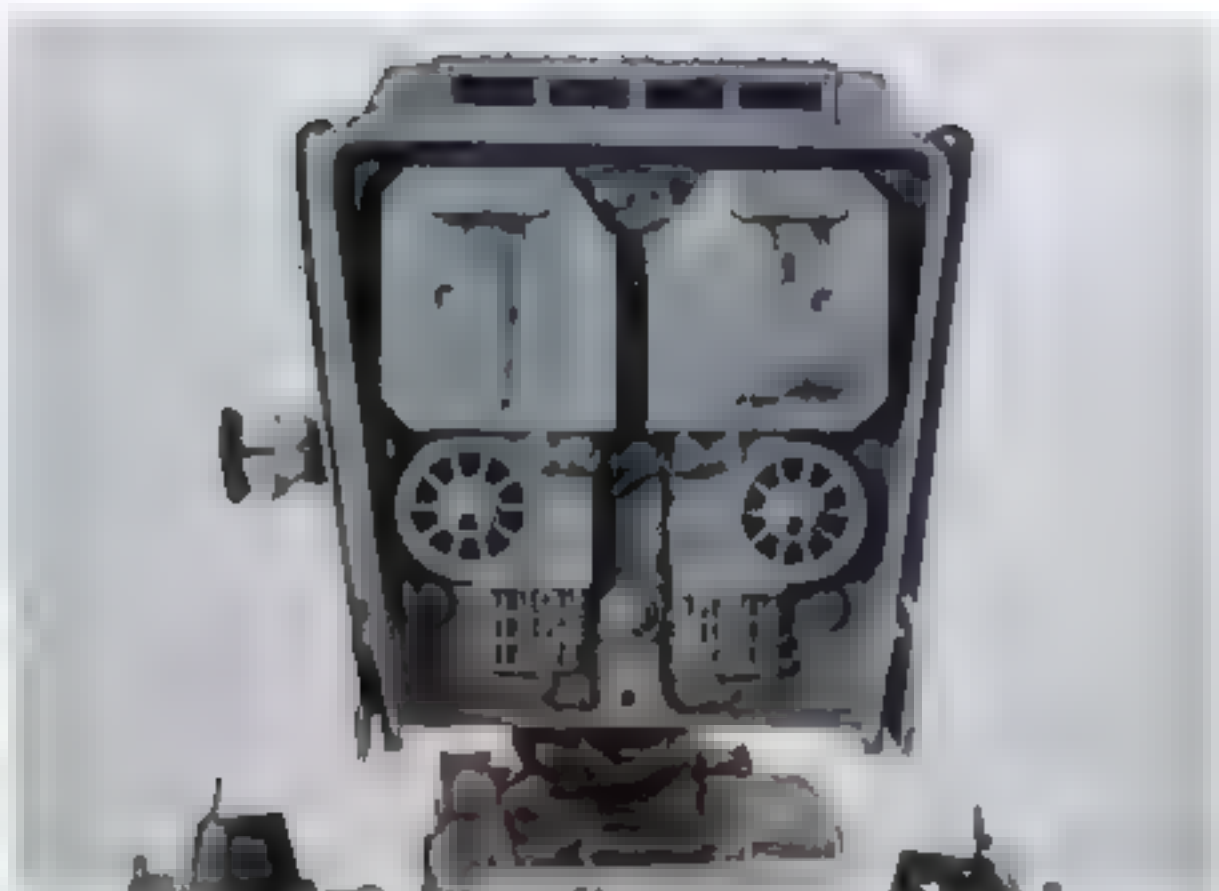
タイ・インターセプターに使われているコクピットやドライブ・ポッド、翼部支柱の設計などは原型となったタイ・ファイターとほぼ同じである。タイ・ファイターとの外観上の最大の違いであるソーラー・エネルギー収集パネルは、原型機と比べて伸長され、角度が付けられており、さらに両方中央部は切り欠かれた形状となる。これらの外観的特徴はパイロットの視界を向上させ、また機体が全体的にコンパクトになったため敵砲手からしてみれば照準を定めにくくなったといえる。製造元はサイナー・フリート・システムズ。全長9.6メートル

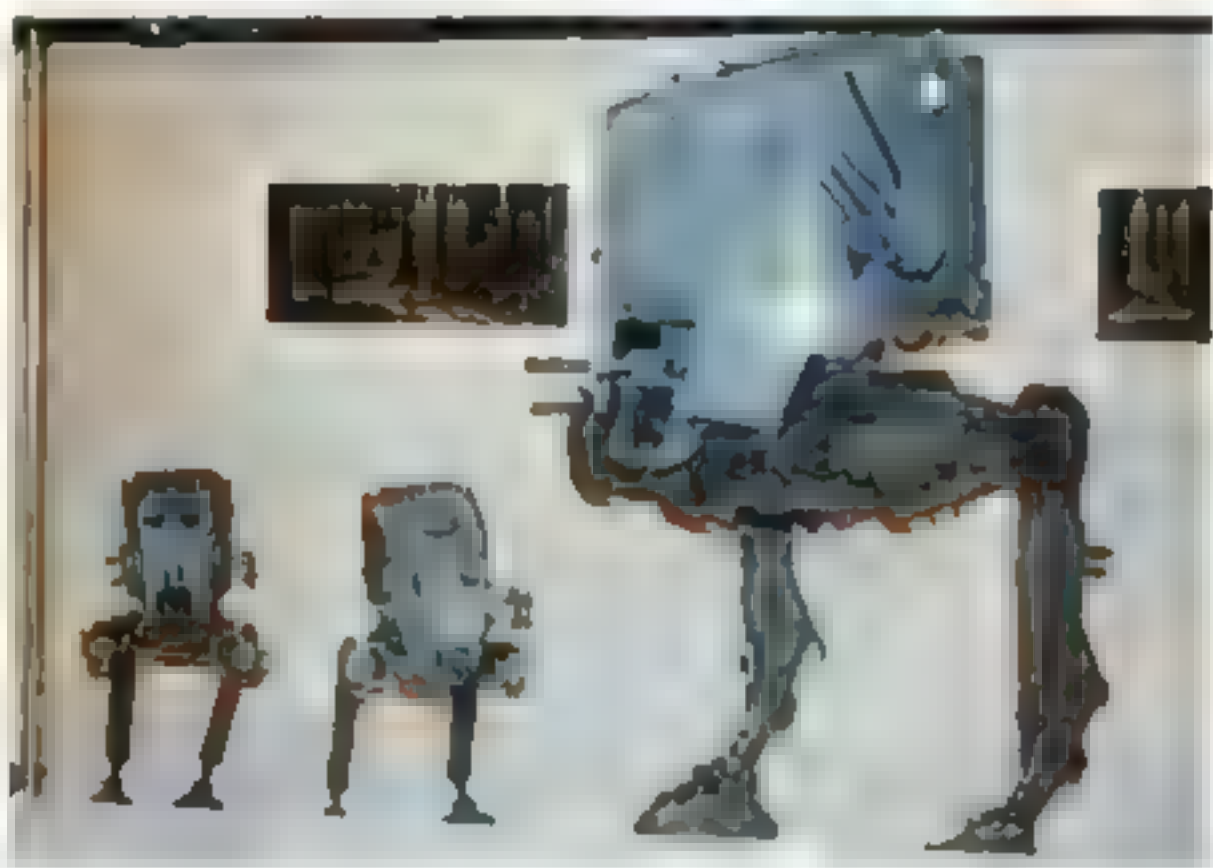
本ページ上は特徴的なタイ・インターセプターの翼形状がよくわかるアングルで撮られたミニチュア写真。右写真は記録用に真下から撮られたタイ・インターセプター。83ページ下のタイ・ファイター下面写真と比べると、胴体中心部にある12角形のパネル周りが両機で多少異なっている。

右ページ中段・下段：中段は2004年、下段左は2001年に撮影されたタイ・インターセプターのミニチュア前部側面とアップ写真。下段右は本作で再び登場し、コスチュームの一部が作り直されたタイ・ファイター・パイロット。胸の生命維持装置の側面から胸にかけて出ていたパイプが省略されている

左前方からとらえたミニチュア。左ページの写真と比べると、見る角度によって翼の形状は印象が異なる。

AT-ST (All Terrain Scout Transport)

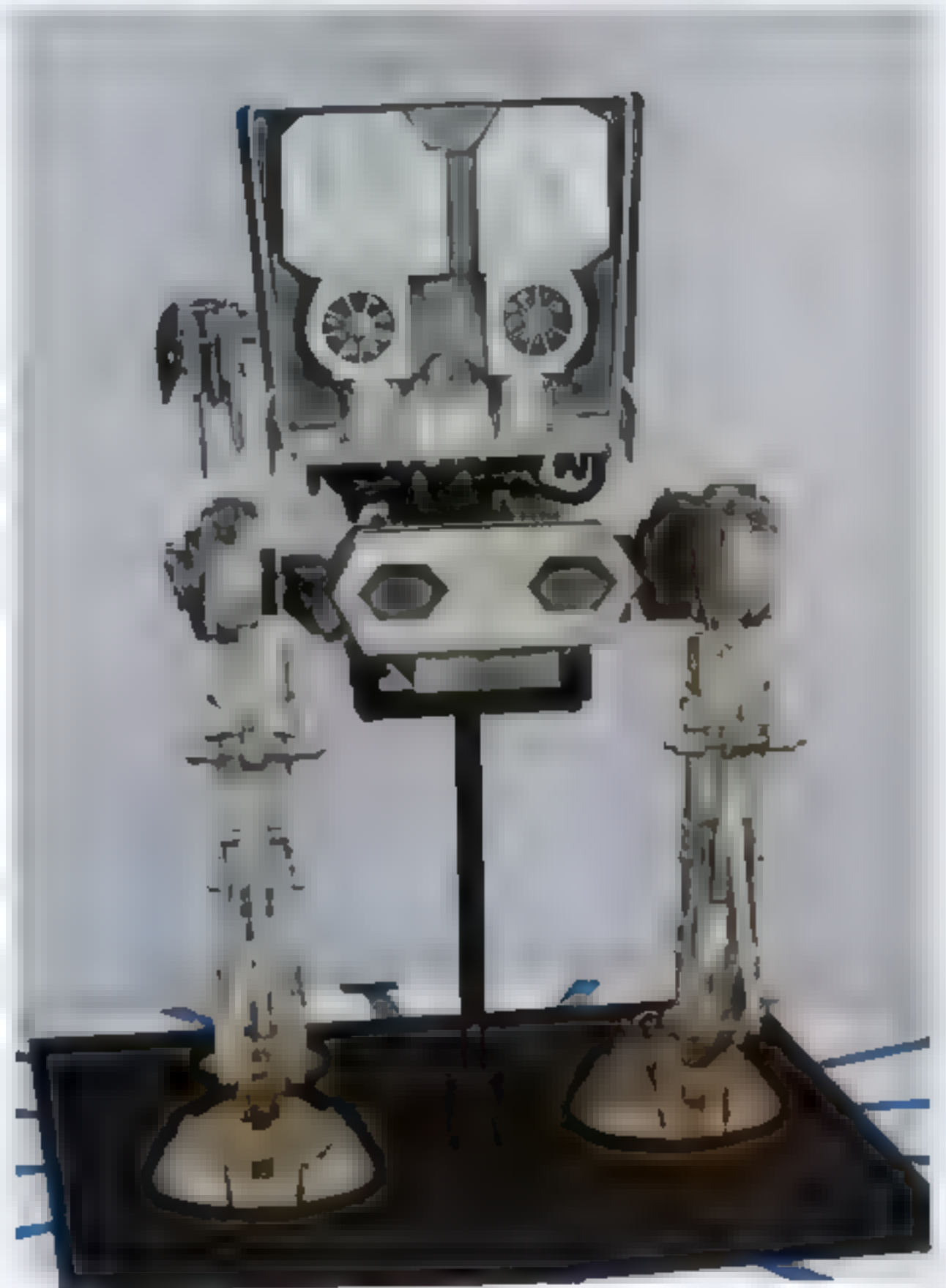
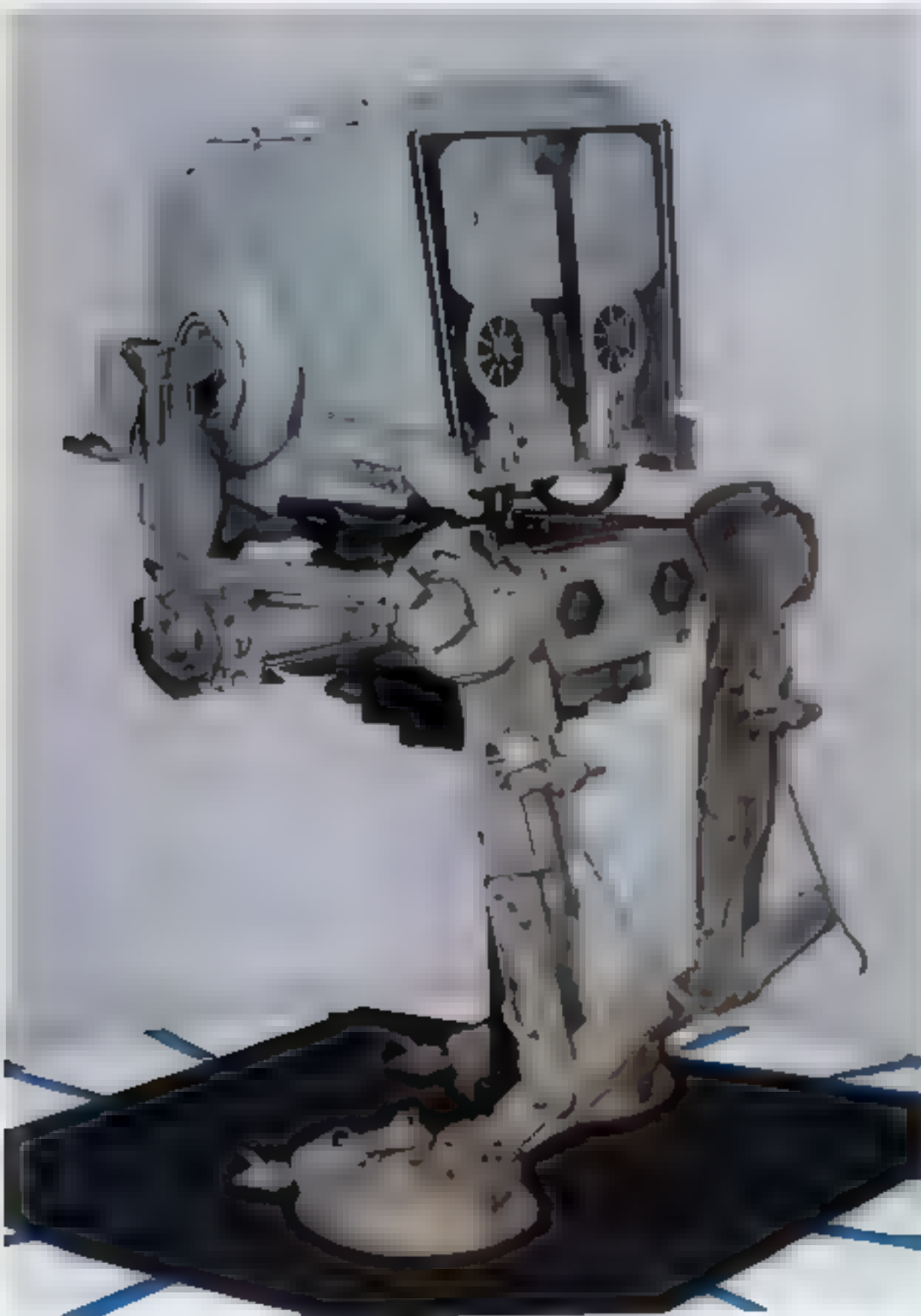
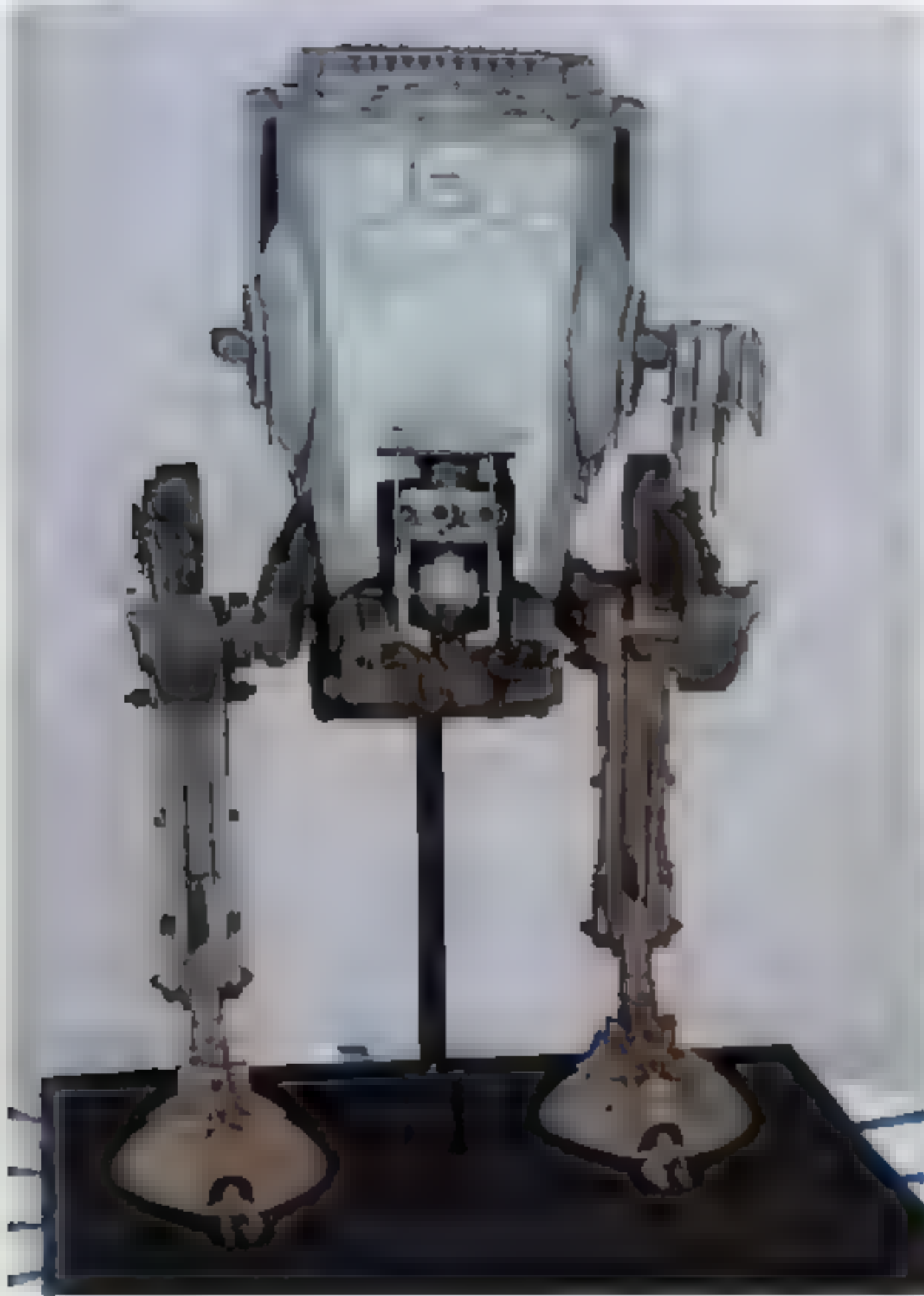
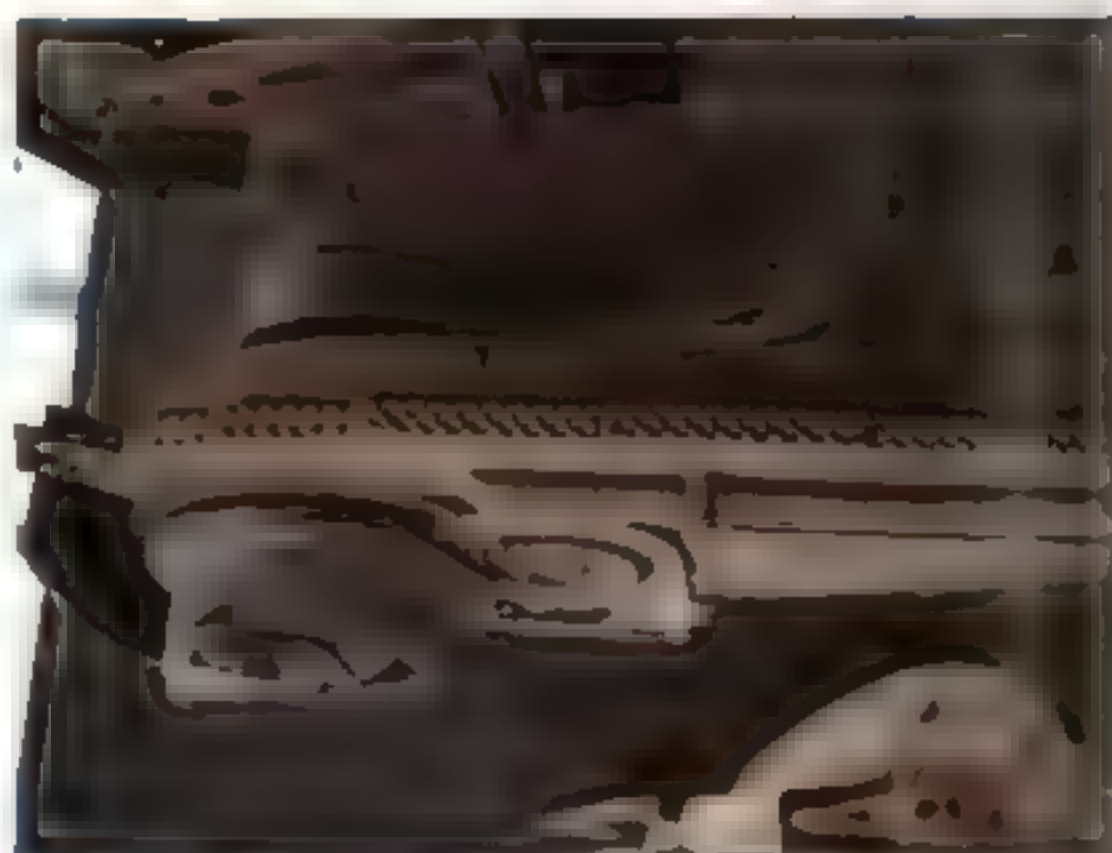
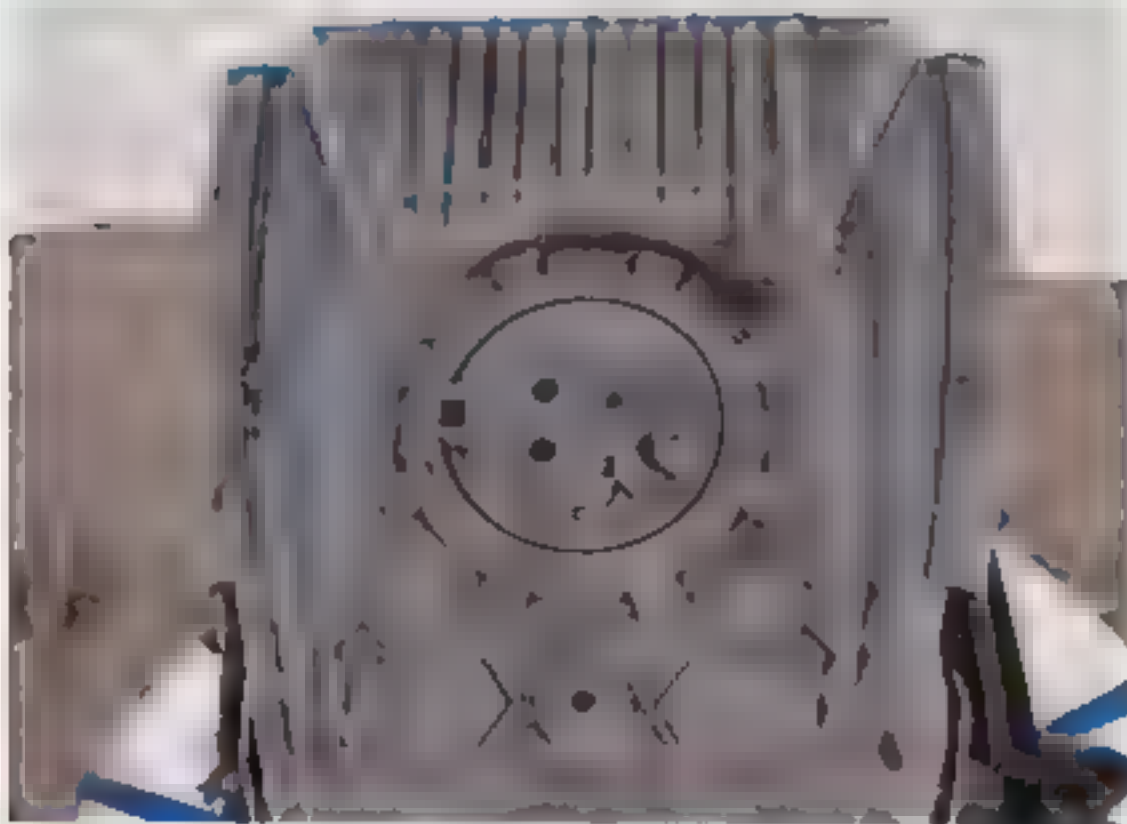
AT-ST（全地形対応偵察トランスポート）

森林に覆われた衛星エンドアでは、AT-ATの半分以下の全高の軽快なAT-STウォーカーが帝国軍部隊に数多く配備されていた。この2人乗りで2脚歩行のトランスポートはスカウト（偵察用）・ウォーカーとも呼ばれ、武装は顎部のレーザー砲と機体両脇の武器ポッドと軽装で、偵察やパトロール用として使用された。製造元はクワット・ドライブ・ヤード。全高8.6メートル。

ストップ・モーション・アニメーション用に作られた小型サイズのAT-STのミニチュア。次ページの上写真2点も含めて、これらは映画公開当時に撮影された写真である。

AT-STウォーカーは前作「エピソード5」のわずかな登場シーンにもかかわらず人気を博したので、このビークルが再登場する「エピソード6」公開前には、ボタンを押すと2脚が足踏みするAT-STのトイをケナー社が先行発売し、映画の公開を盛り上げた

290ページ下左まで、2014年に撮影されたミニチュアの全体写真。当時の記録用として定規を並べて撮られた。全体像のモノクロ写真が存在すると思われるが、まだ発見されておらず、代わりにこれらの写真を掲載した

本ページ　2014年に撮影されたミニチュア上半身の各部アップ写真。ハッチのみはエピソード5版と全く同じものが付いているが、それ以外はミニチュアの全身すべてが作り直された。左写真の胴体後ろから出ている四角いパーツはアニメートする際に支柱を差し込んで胴体を支える固定具

エピソード5版と比べると、エピソード6版のAT-STは頭部が大きく、脚が短いのが特徴である。この変更に関して具体的な理由を記述した書籍はないが、おそらく頭部は2人乗りになったことで大型化し、脚は実寸大セットを作った際に、安全上の理由から頭部の位置が高くなりすぎないようにしたためと思われる

上段4点 下段上右 前ページと同じミニチュアの脚部アップ写真 脚部はアルミの削り出しで作られ 各部にある六角穴付きボルトを調整して"ゴーモーション"撮影（ストップモーション・アニメーション撮影の露光中に被写体をわずかに動かし ブレを作り出して動きをなめらかに見せる技法）が行われた

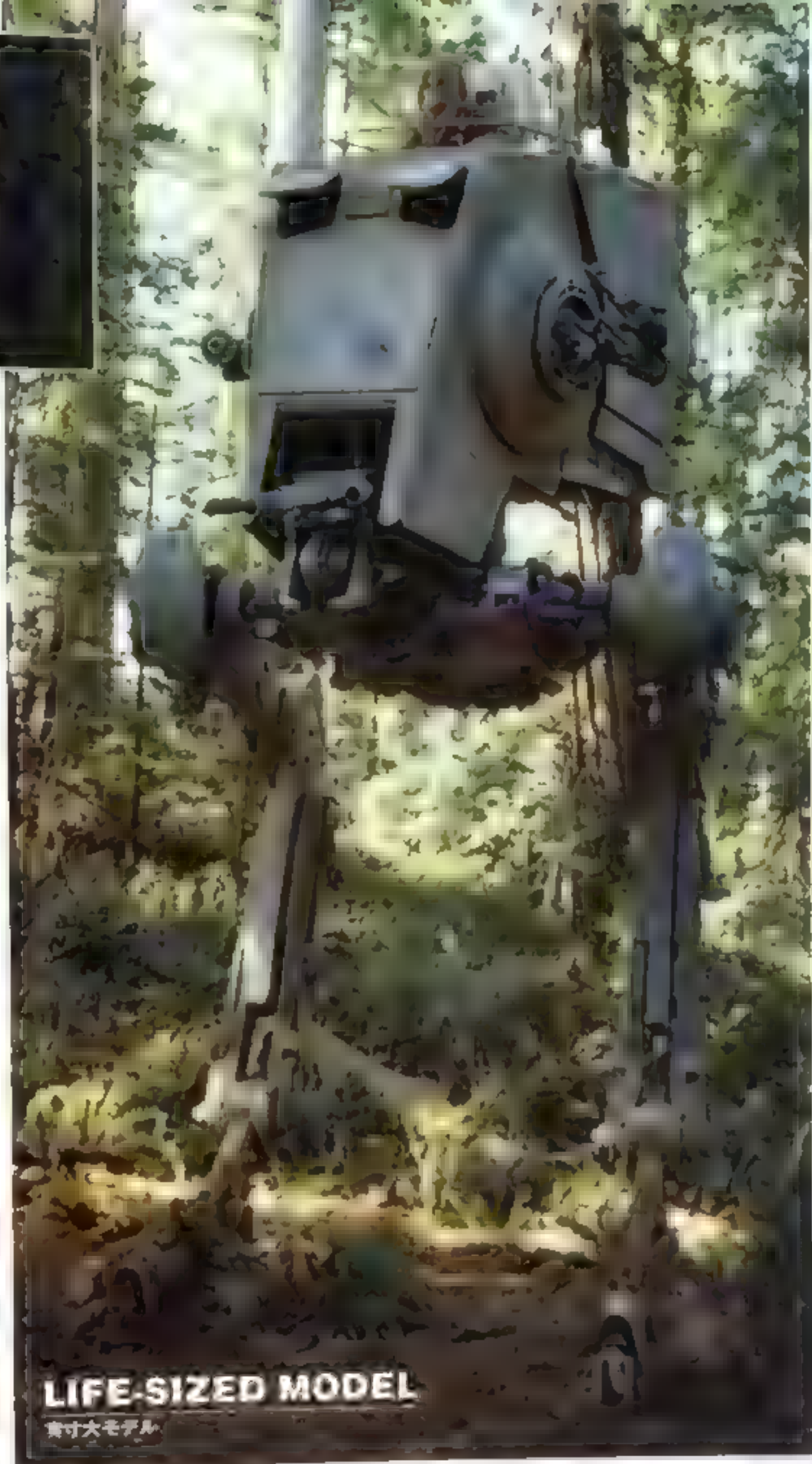
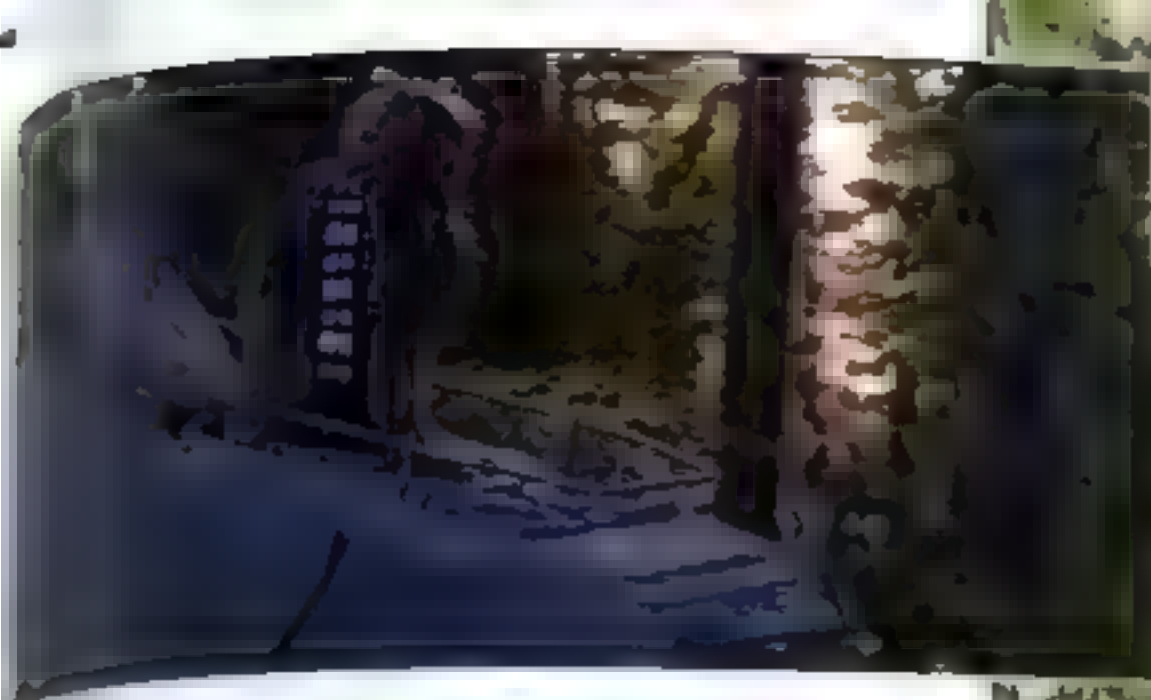
上：大型ミニチュア（右ページで紹介）と小型ミニチュアの大きさの違いがよくわかる

右 ルーカスフィルムの倉庫に保管されていた時の状態

本ページ　AT-STの大型モデルを各方向から見る

上段2点　大型ミニチュアの全身像　このモデルは主にイウォークの戦闘で撃破されるAT-STのシーンに使われた

中段2点および左　大型ミニチュアの各部アップ

下　制作中のミニチュア

LIFE-SIZED MODEL

実寸大モデル

1983年に米国で刊行された「シネフェックス」13号（この号は日本語版では創刊号として発売された）によると、このAT-STセットの全高は8.4メートルの実寸大で作られた

右　足元にいる人物と比べるとAT-STの実際の大きさがよくわかる

上左　動いているシーンの撮影は胴体部のみフォークリフトに載せて移動させていた

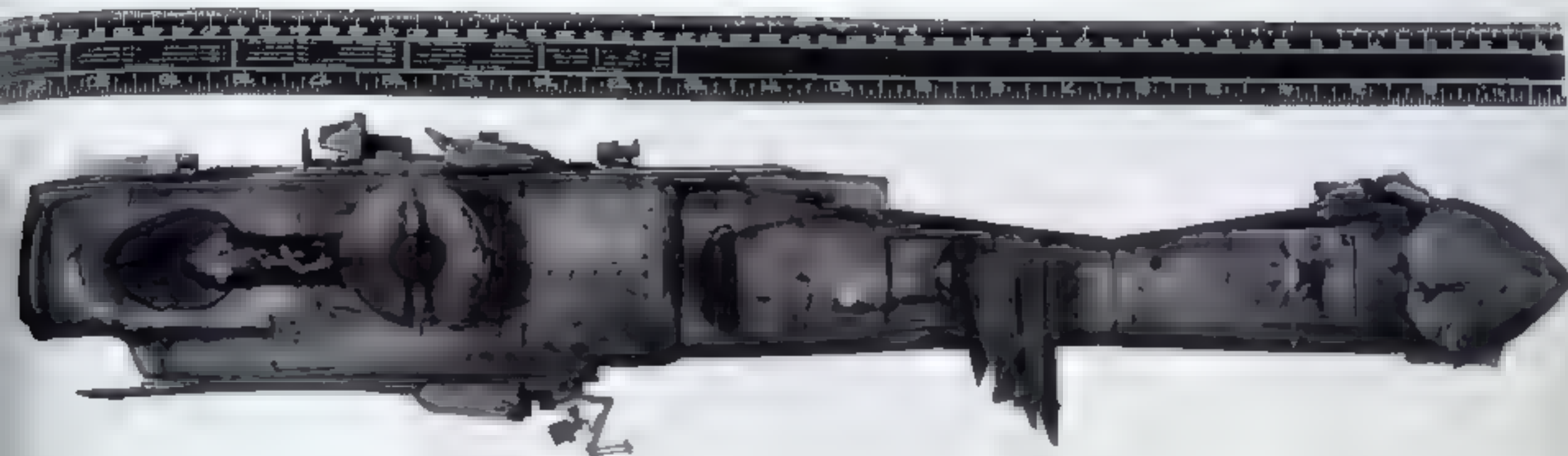
左中段２点　AT-STの内部セットとAT-STドライバー。この２人のドライバーを演じたのは、リチャード・マーカンド監督（左）と共同プロデューサーのロバート・ワッツ（右）だった

上　帝国軍のバンカー（秘密基地）の入り口で警戒するハン・ソロとレイア

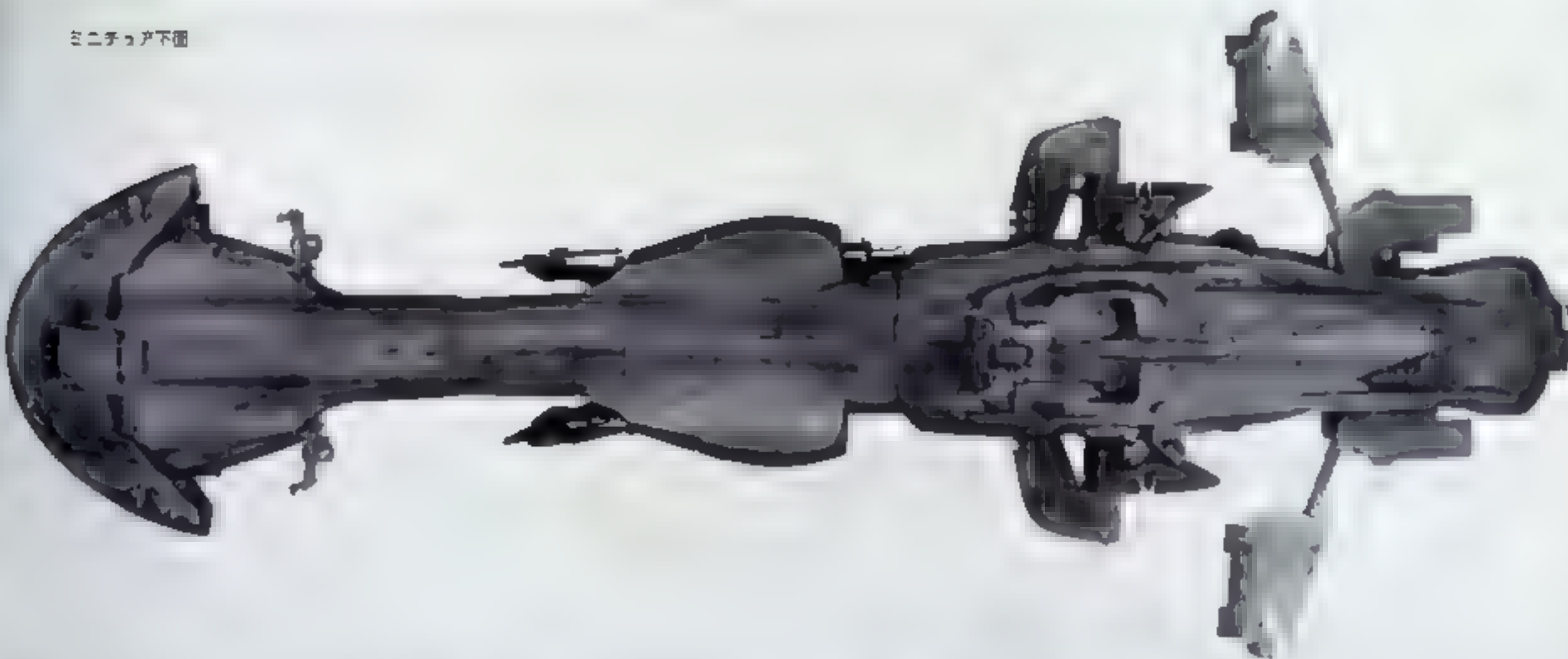
Braha'tok-class Gunship ブラハトック級ガンシップ

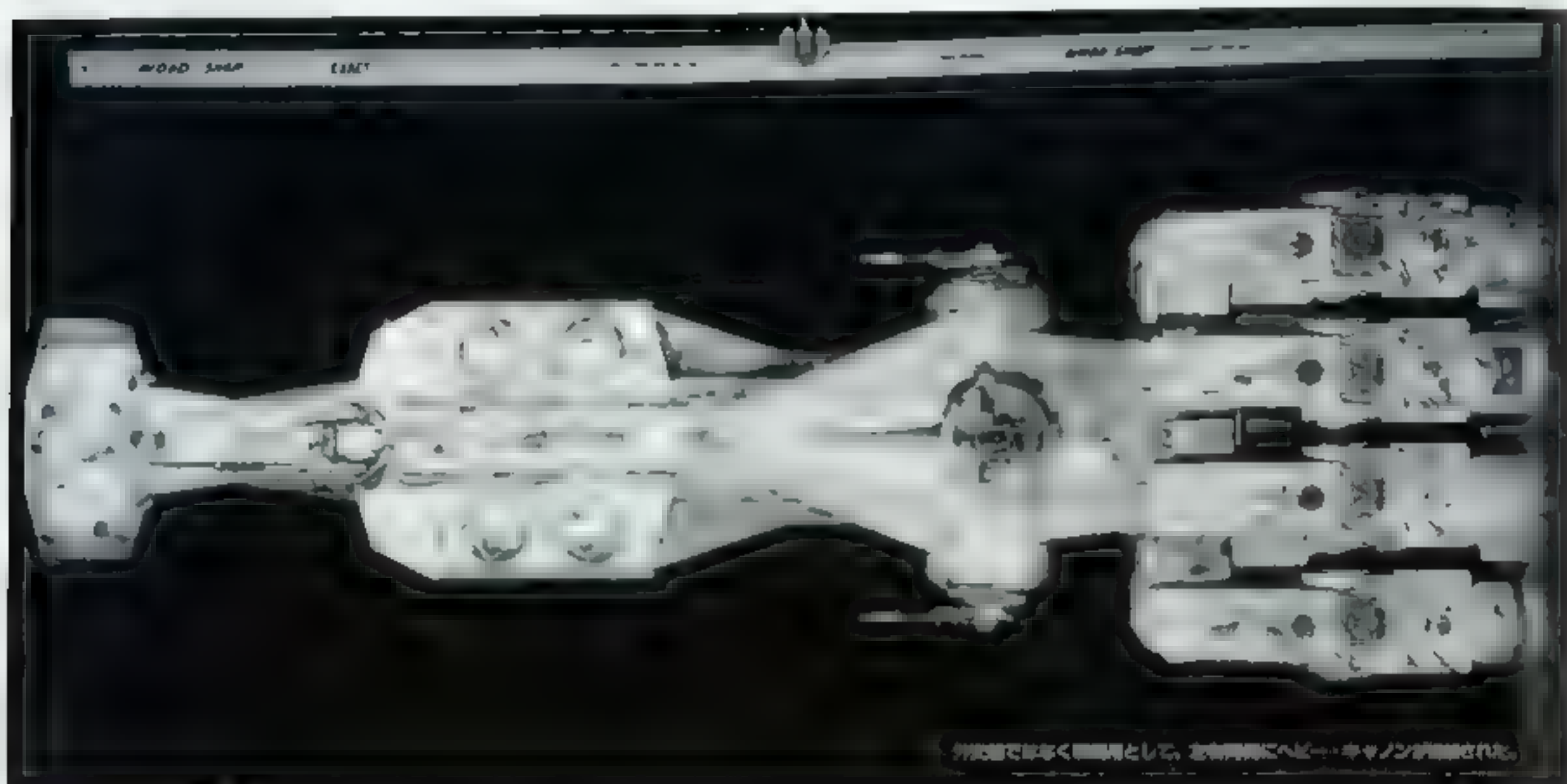
ブラハトック級ガンシップ（トーニアン・ガンシップ）は、惑星トーニアで製造された宇宙船で、衛星エンドア上空の決戦で反乱同盟軍艦隊に2隻が加わった。全長90メートル。

劇中では機体の全体像が確認しにくいブラハトック級ガンシップのミニチュア。このミニチュアの表面には複製された〈スレーヴI〉の模型がディテールの一部として使われている。

この写真ではわかりにくいが、第2デス・スターの輪郭の下側などに、ブラハトック級ガンシップが写っている。バックグラウンド的役割の宇宙船なので、完成画面には大きく写らない。

ミニチュア右側面

ミニチュア上面

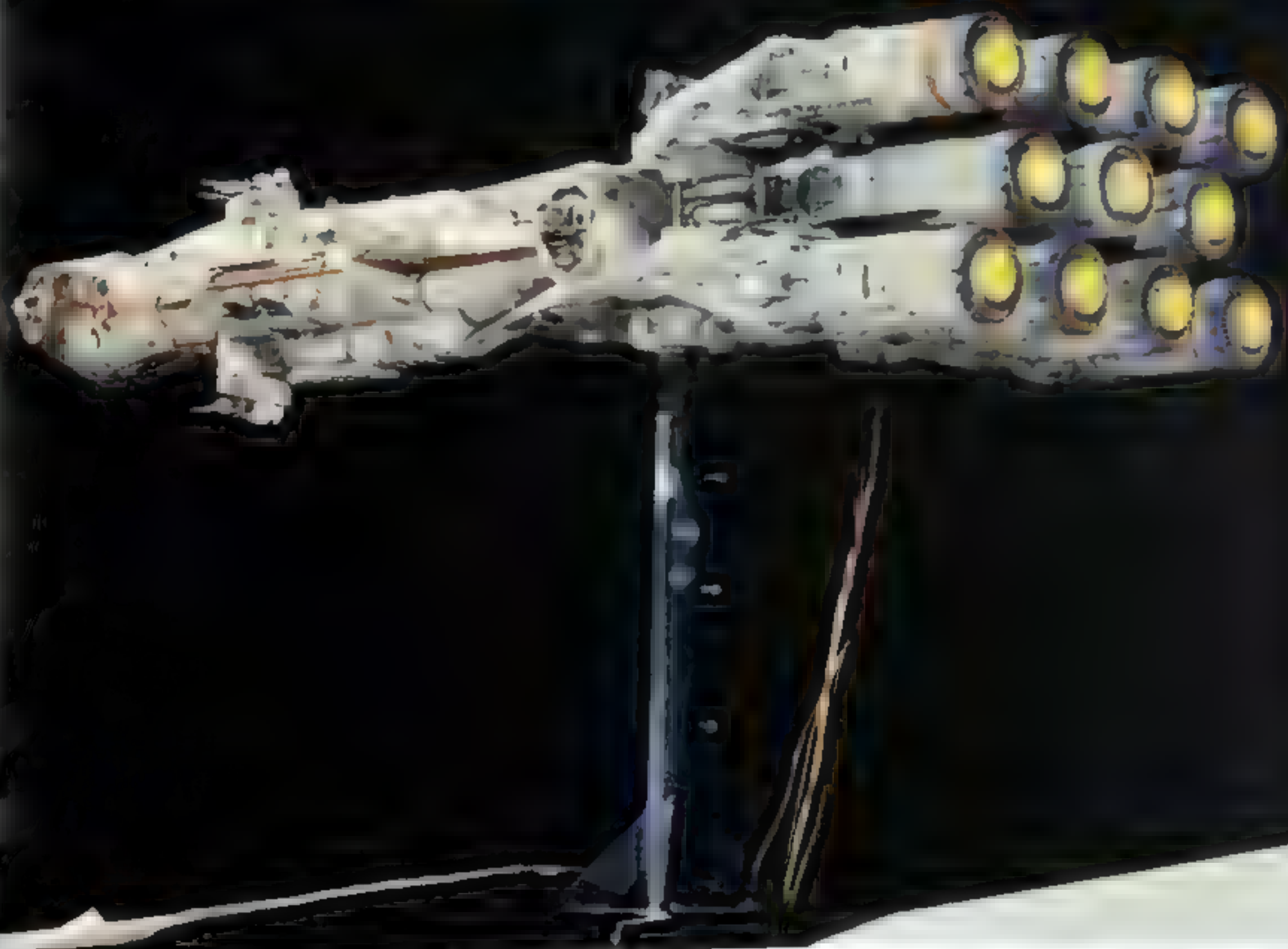
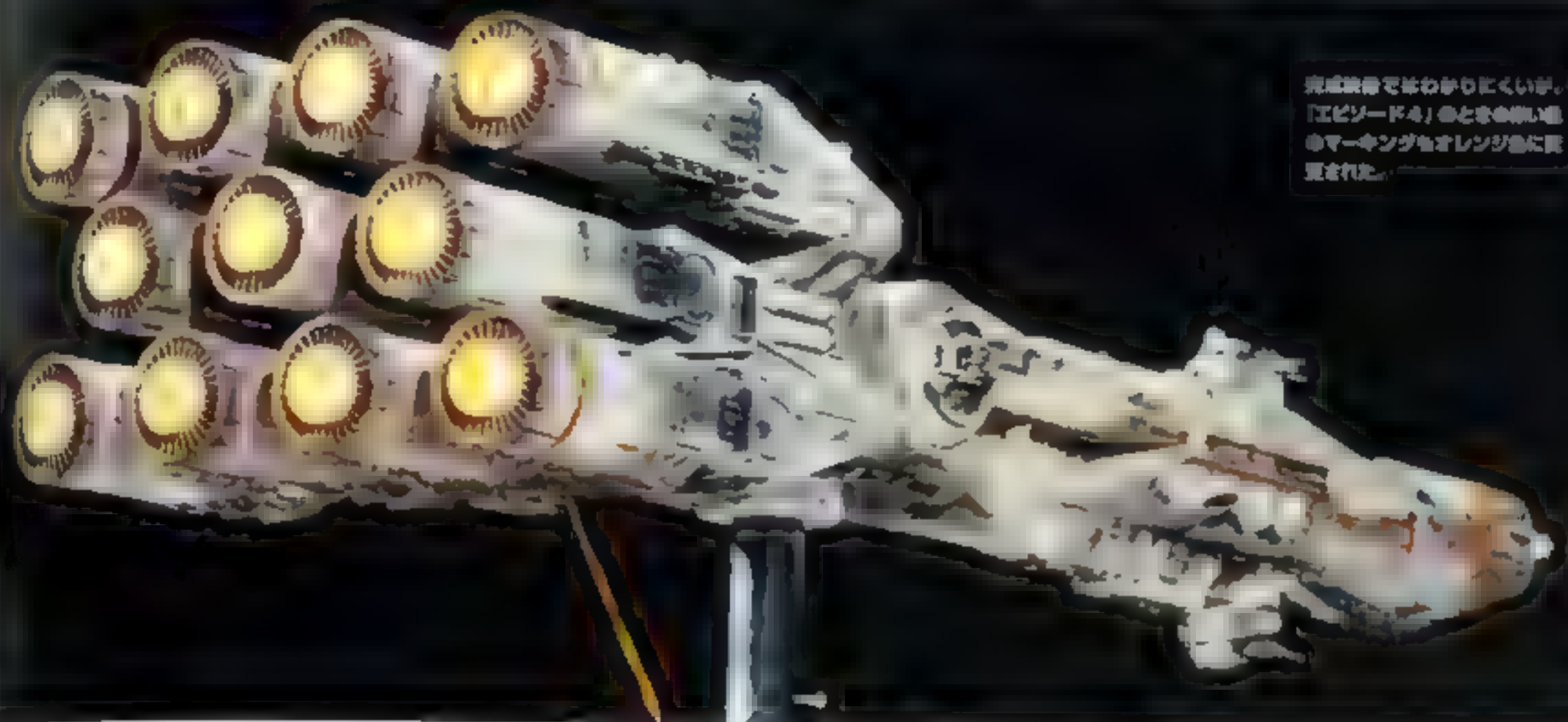
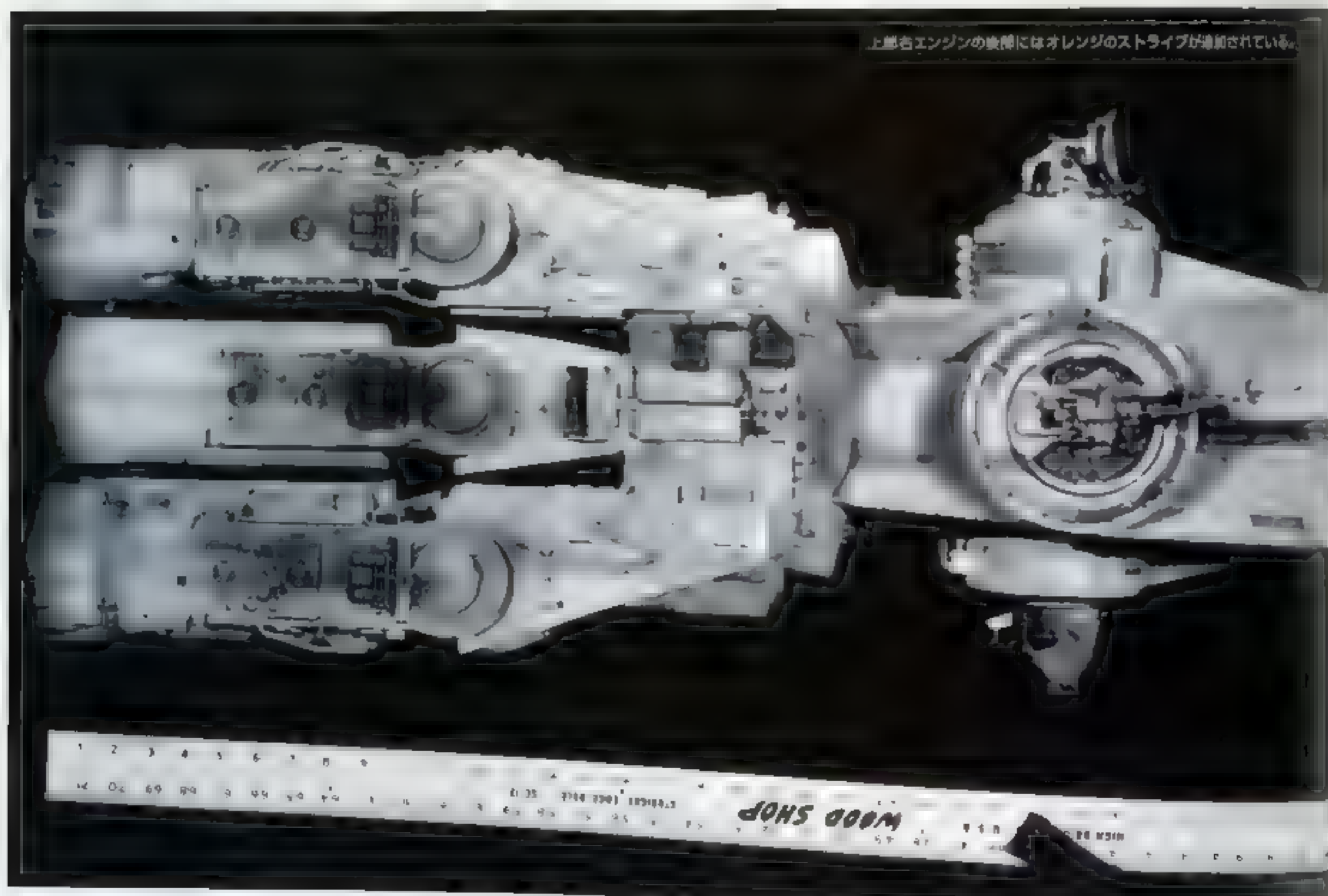
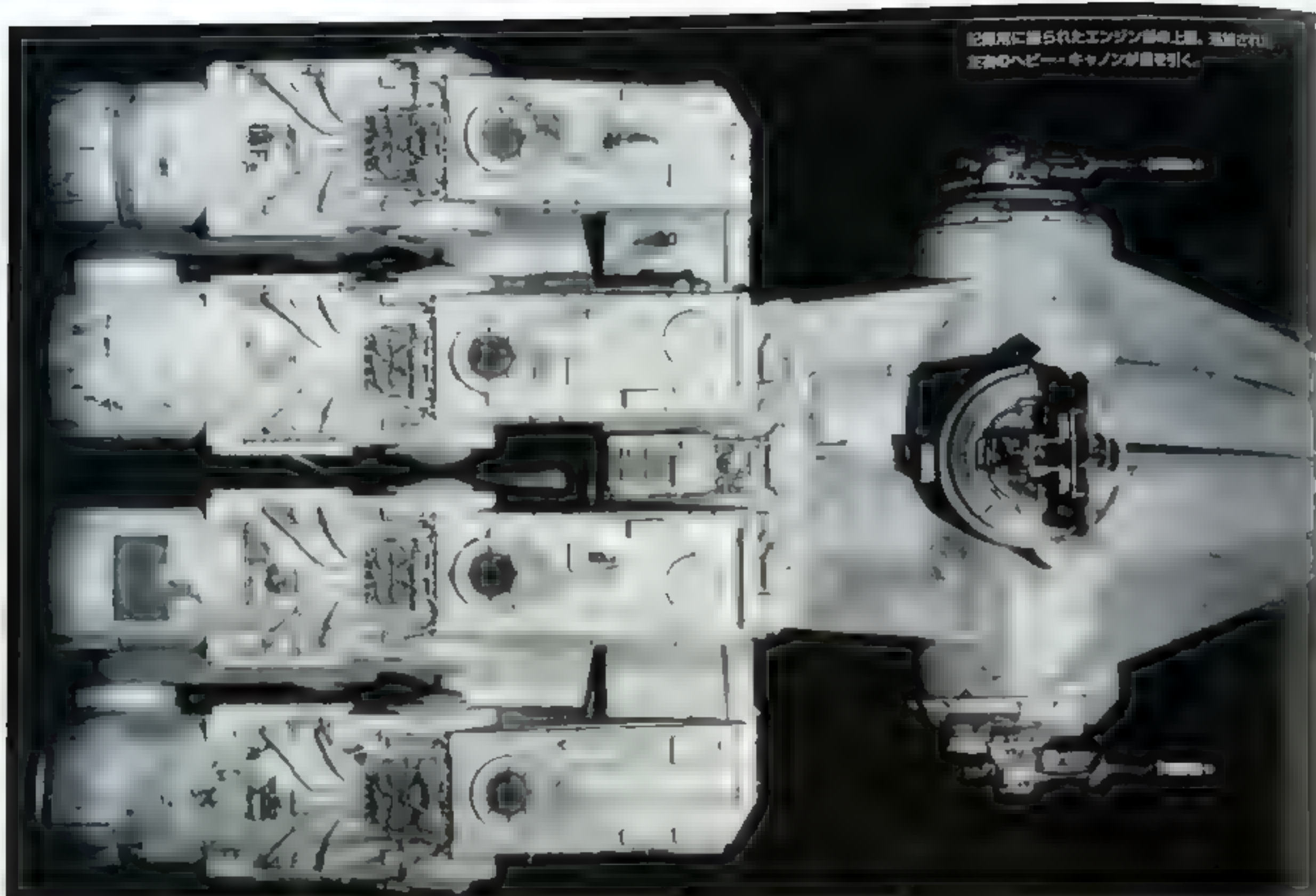
ミニチュア下面

Rebel Blockade Runner レベル・ブロッケード・ランナー

プリンセス・レイア・オーガナの外交船〈タンティヴIV〉に代表される、コレリアン・コルベットことブロッケード・ランナーも数隻サラスト星系に集結した反乱同盟軍艦隊に加わり、エンドアの戦いに参戦した。このコレリアン・エンジニアリング・コーポレーションが製造するCR90コルベットには、ヘビー・キャノンを装備したタイプもあり、エンドアの戦いでは戦闘艦として運用された。

外交船ではなく戦闘用として、左右両舷にヘビー・キャノンが装備された。

エピソード4の冒頭で拿捕された〈タンティヴIV〉の印象を変えるため、撮影用ミニチュアも大幅な改造が施された。右写真は、エピソード6撮影後にパーツの付け替えと再塗装を施され、再び「エピソード4」版に戻された現存ミニチュア。

完成映像ではわかりにくいが、「エピソード4」のときの赤い色のマーキングはオレンジ色に変更された。

記録用に撮られたエンジン部の上面。追加された左右のヘビー・キャノンが目を引く。

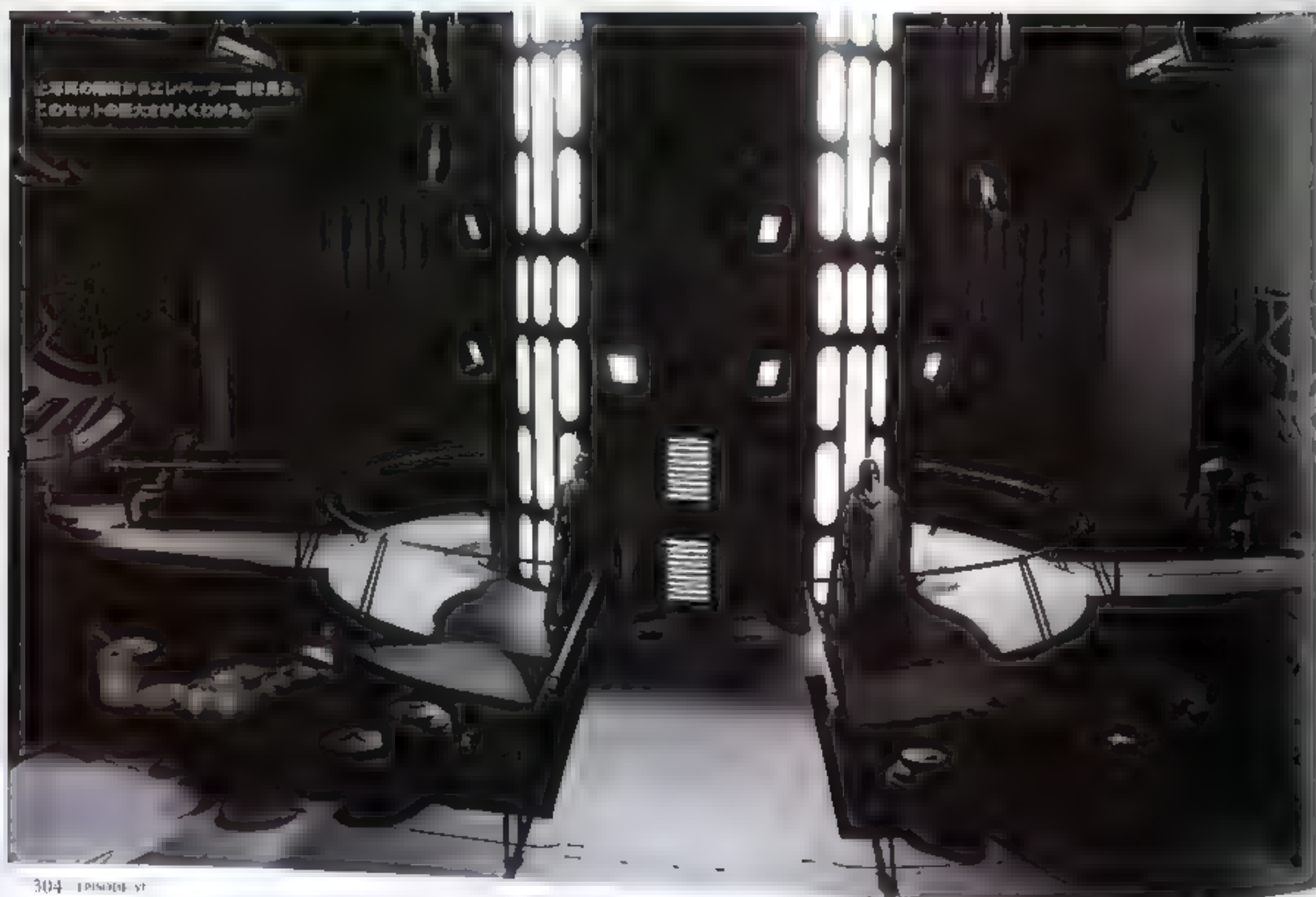
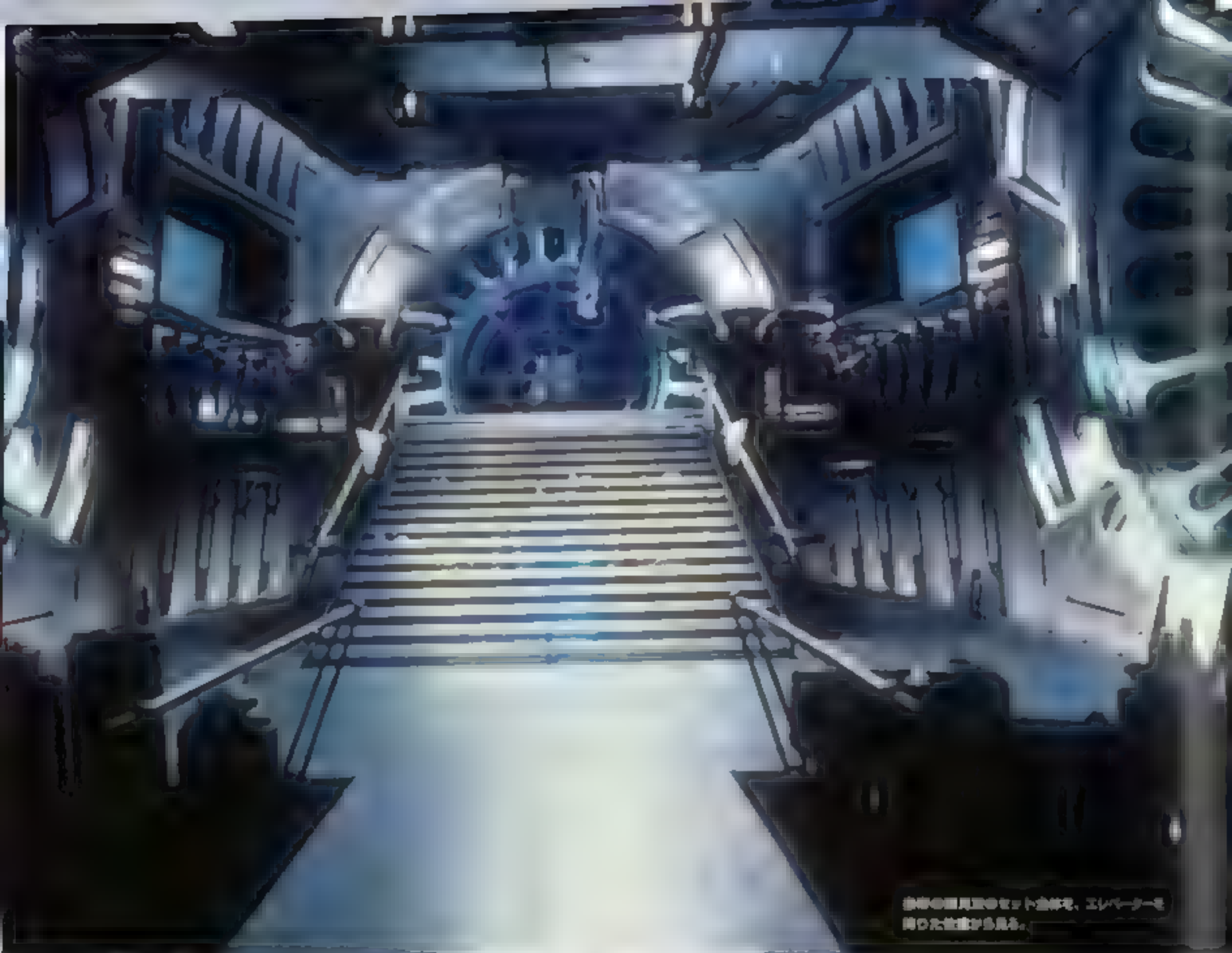
上部右エンジンの後部にはオレンジのストライプが追加されている。

船体上部には新たに8個の窓がある新造のパネルが追加された。これら各部の変更は、撮影後には元の姿に戻せるようにして行われ、現存のミニチュアは「エピソード4」に登場した姿に復元されている。

Death Star II Interior 第2デス・スター内部

第2デス・スターの建造が遅延しているという情報が反乱同盟軍に伝わった。しかしそれは、反乱同盟軍をおびき寄せるための、皇帝が仕組んだ嘘の情報だった。これを信じた反乱同盟軍の艦隊がサラスト星系からハイパースペースを抜けた途端、そこには帝国の宇宙艦隊が待ち受けていた。アクバー提督は全軍撤退を命じるが、第2デス・スターのスーパーレーザーの前に、多くの反乱同盟軍の艦艇は宇宙の塵と化した。

本ページ：画面に隠し絵がある皇帝専用のインペリアル・シャトルから降りてくる皇帝や側近たちを出迎えるダース・ベイダー。シャトルのコクピットのセットに施されたカラーリングがよくわかる。また、上写真では閉じた状態の両翼の上部は木材が剥き出しになっている

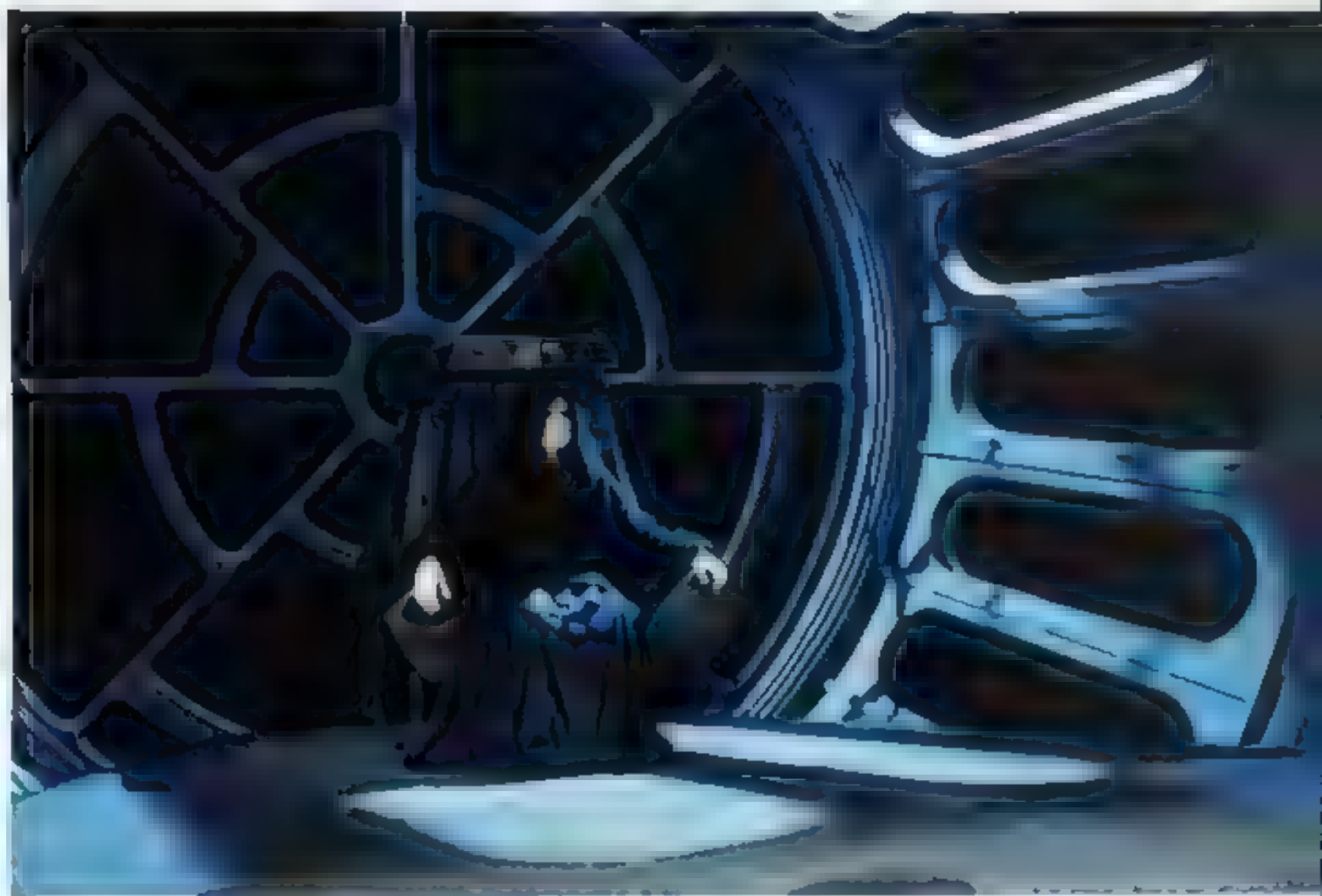
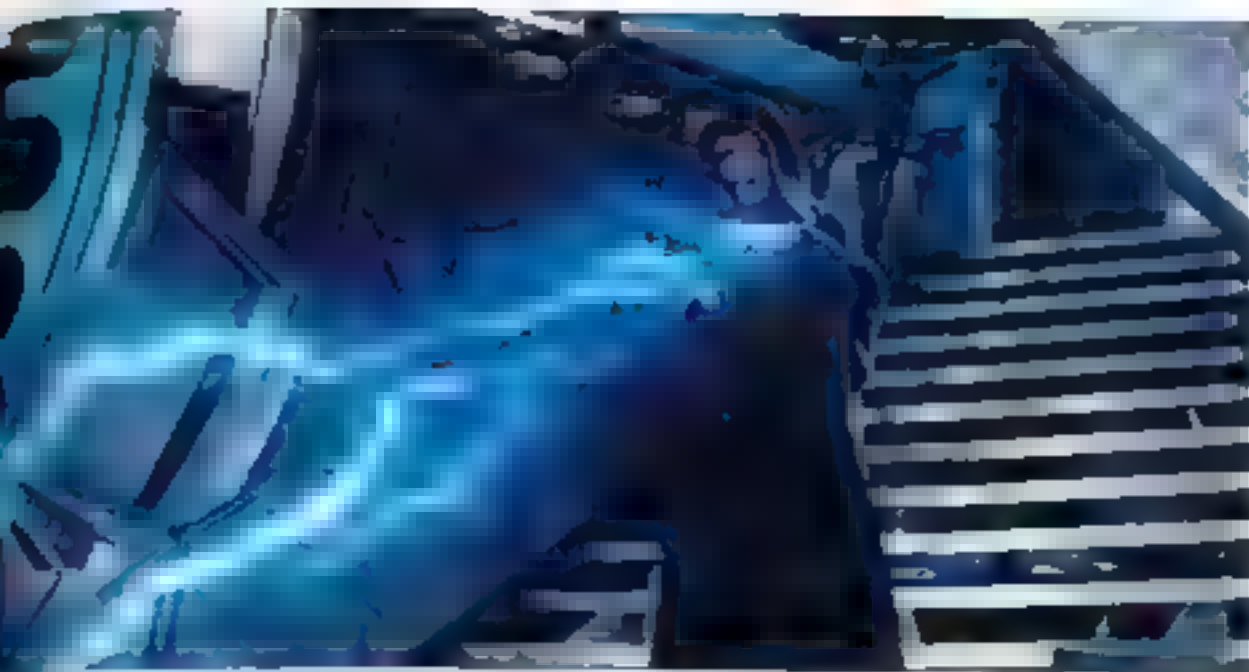
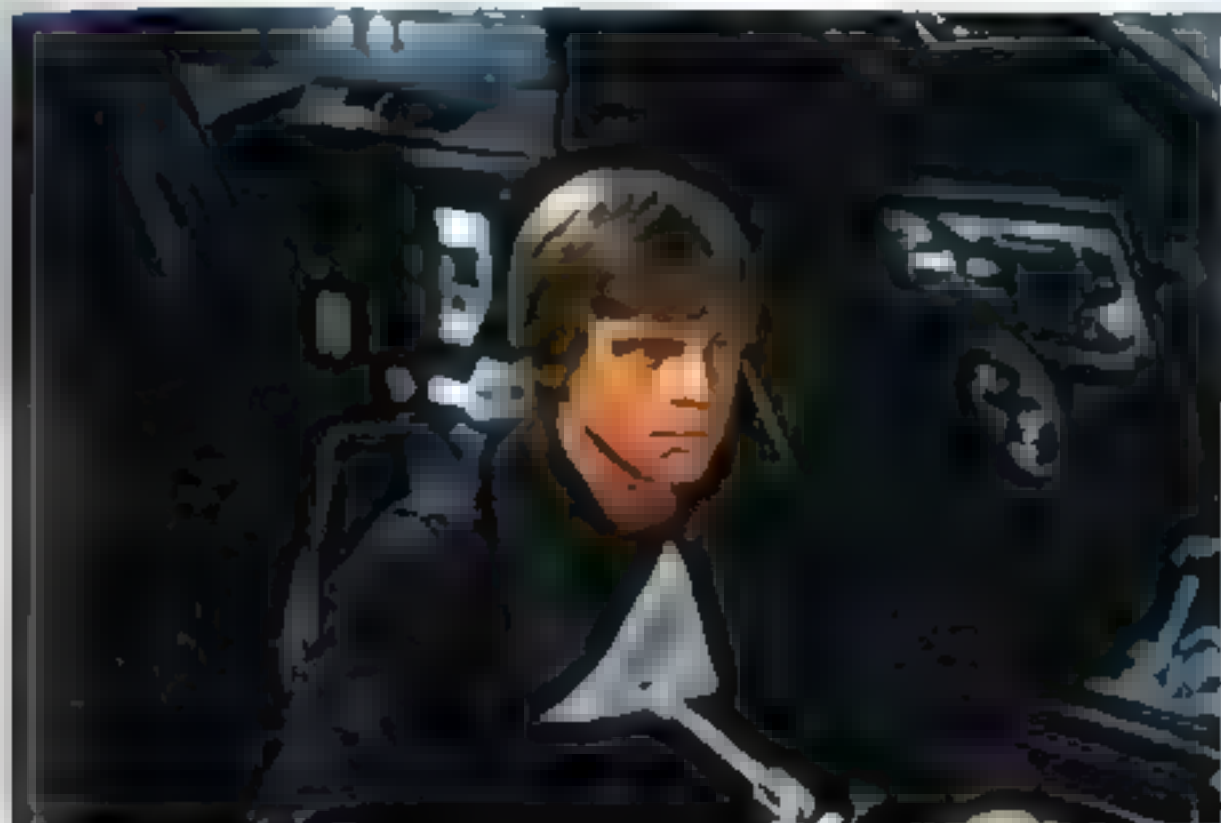
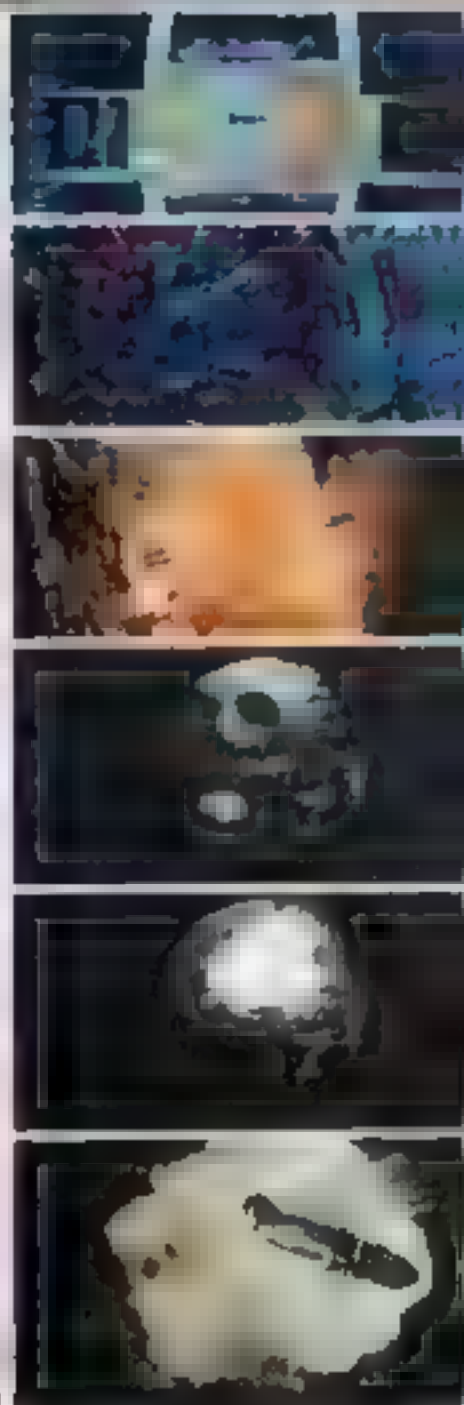
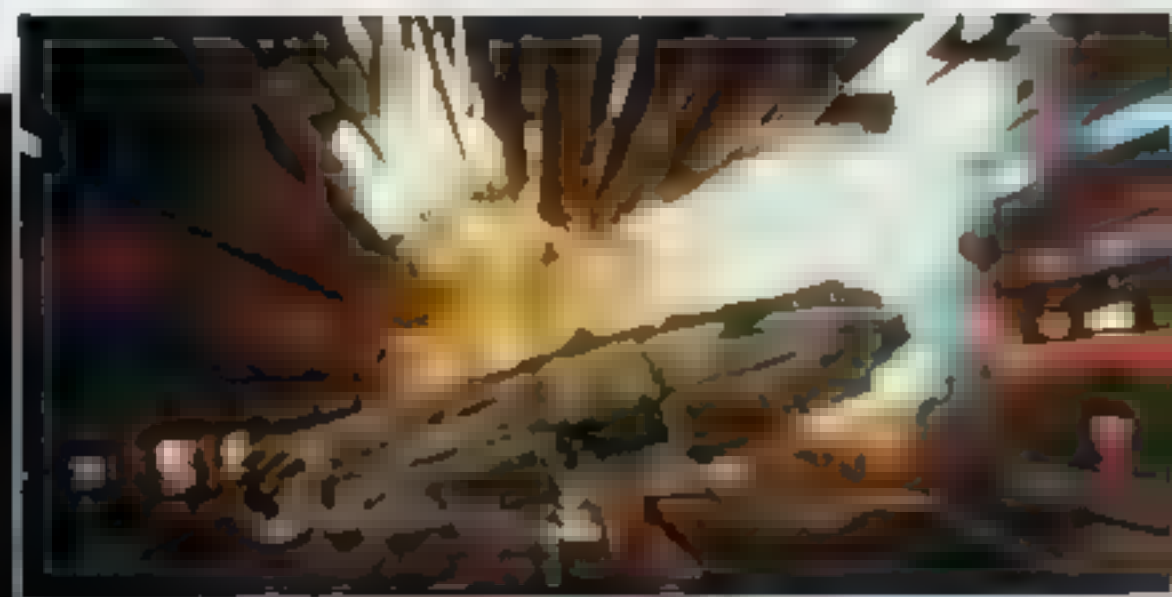
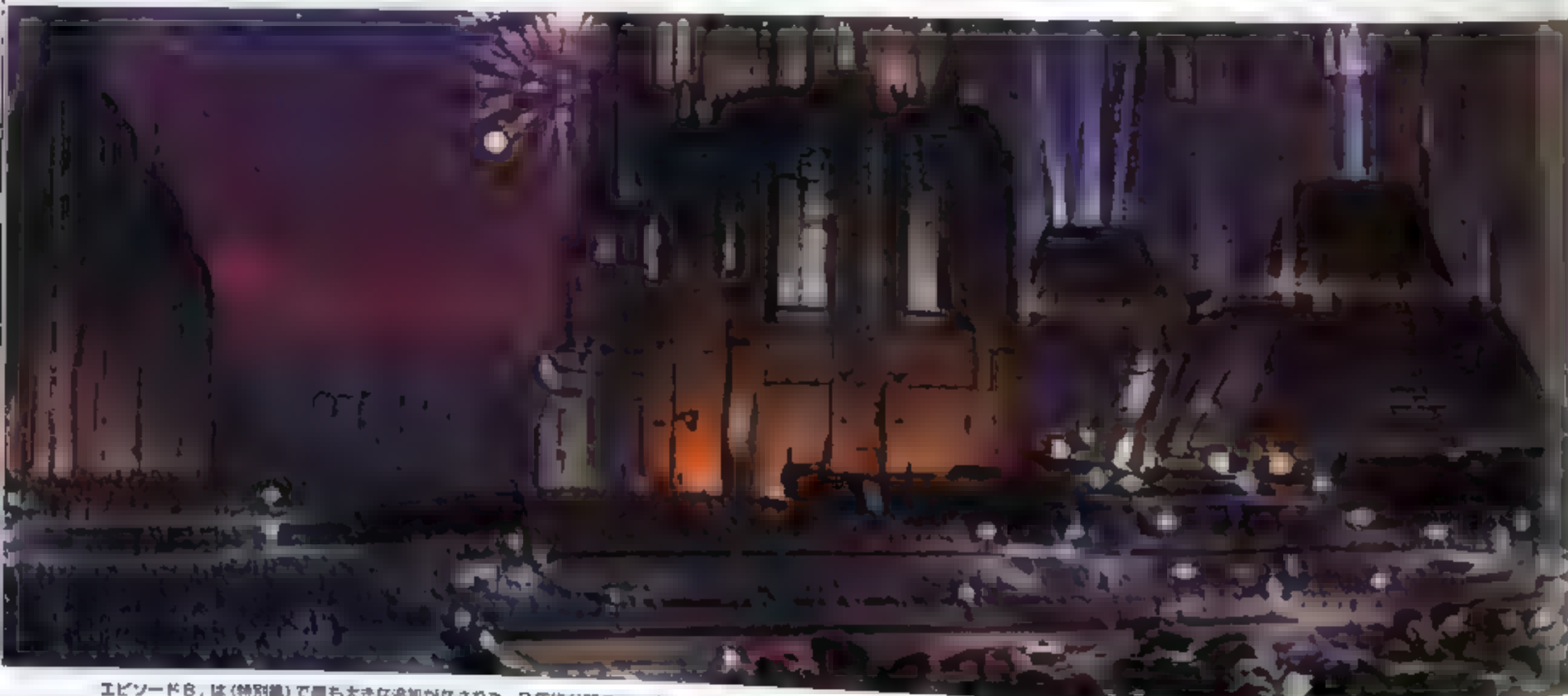
皇帝の謁見室のセット全体を、エレベーターを降りた位置から見る。

上写真の階段からエレベーター側を見る。このセットの巨大さがよくわかる。

上　上右2点　皇帝に常に付き添っている顧問たち、スーパーレーザーの発射をためらうモフ　ジャージャロッド

上　第2デス　スター表面にそびえ立つタワー　ここに皇帝の居室がある

右　ルークを待ち構える皇帝

下左　ルークの作ったライトセ　バーを手に持ち　満足げな皇帝

下右　皇帝のもとにルークを連れて来たダース　ベイダーの特写

本ページ　皇帝には従わず　ダース　ベイダーと対決するルーク　そしてルークが自分に従わないと見るや　ルークを殺そうとする冷酷な皇帝

左、下：シスの暗黒パワーを込めた強力な電撃を放つ皇帝。しかし、ルークの窮地を救ったのは息子の苦しむ姿を見て改心したダース・ベイダーだった

上・上右：ダース・ベイダーの亡骸を乗せてシャトルで脱出するルーク。一方、《ミレニアム・ファルコン》はアンテナを失いつつも反応炉の破壊に成功し脱出した。

左：第2デス・スターの表面と反応炉へと続く入り口のミニチュア

会う首都惑星コルサントのカットなどが追加され、銀河各地で反乱同盟軍の勝利を祝うシーンへとスケールアップされた。

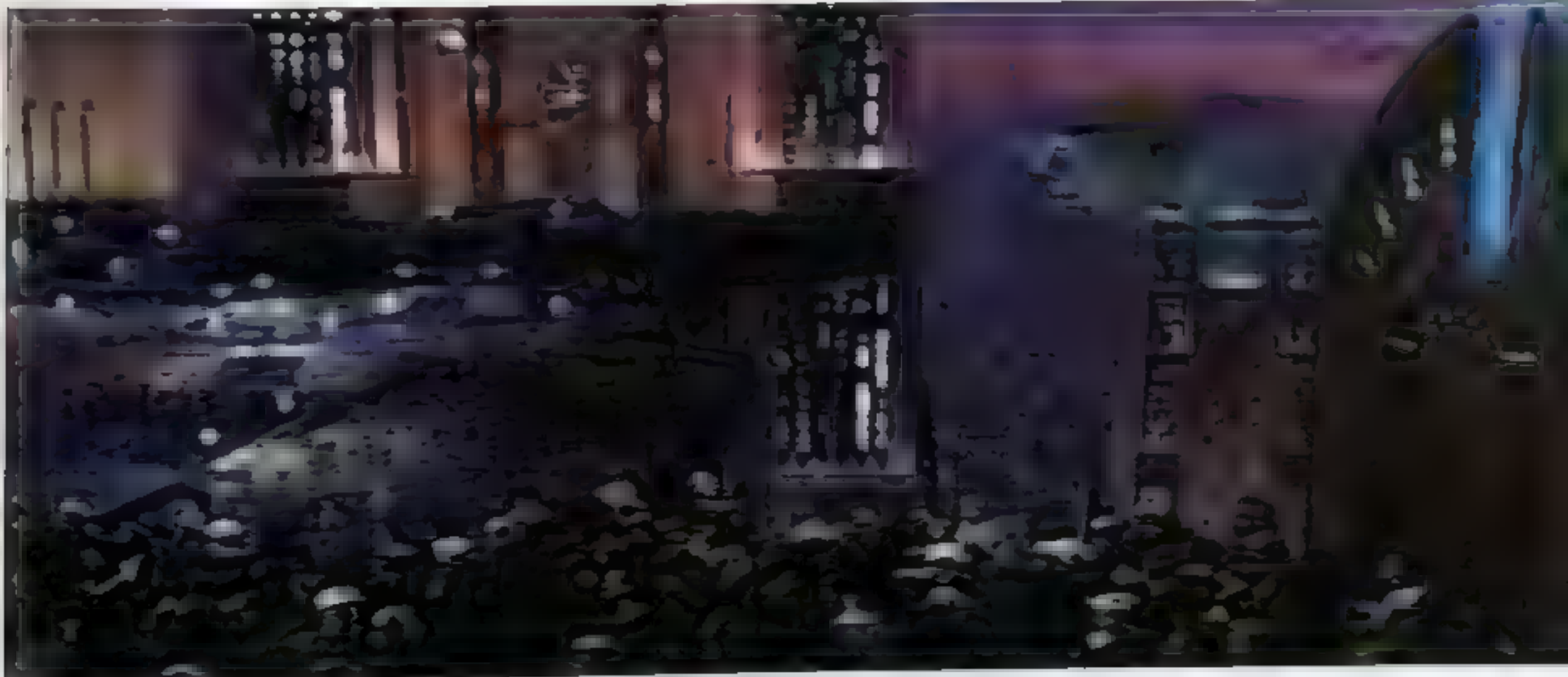
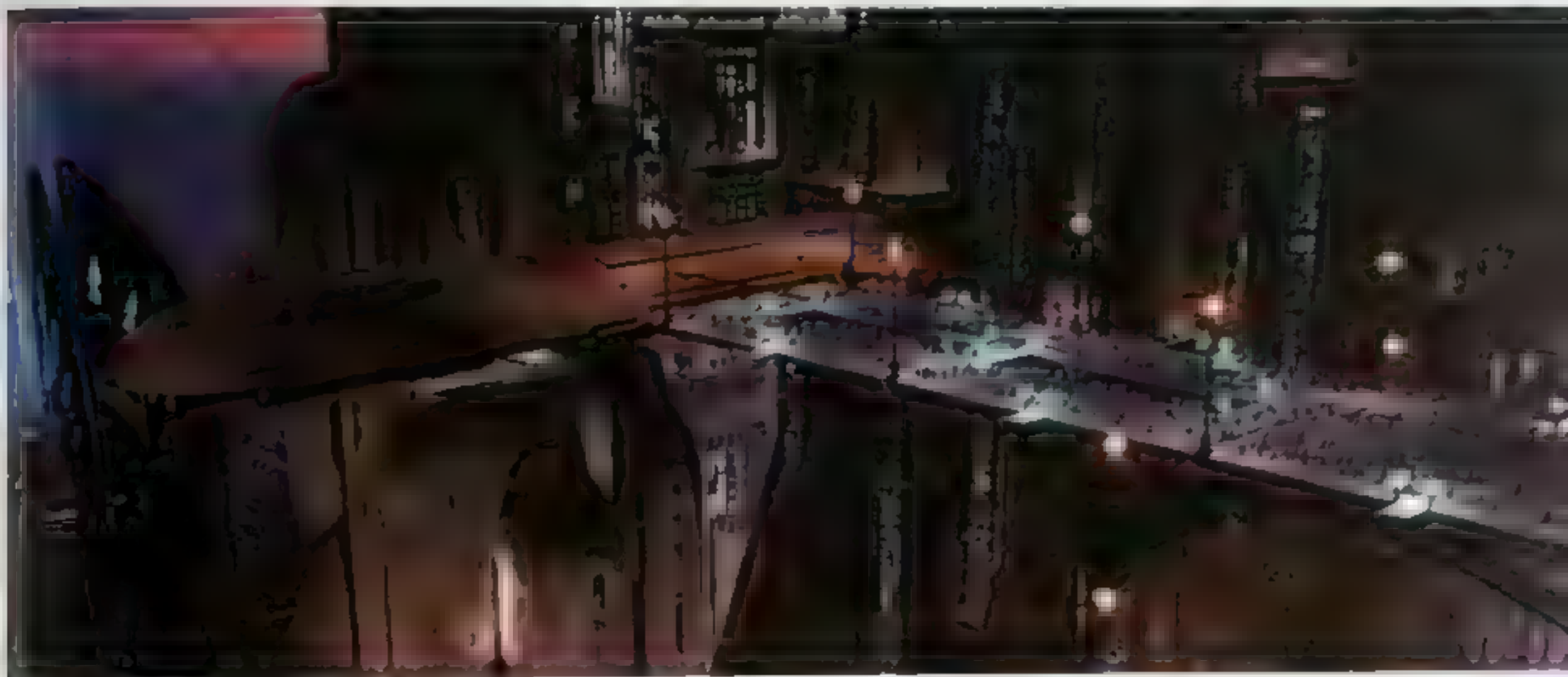
また、2004年発売のDVDボックスでは〈特別篇〉をベースにさらなる修正が加えられている。ここでは、オリジナル3部作がそれぞれの初公開版から、その後どのようにバージョンアップしたかということを、ビークル登場シーンを中心に検証してみたい。

2年後の「エピソード1」には同じデザインのエア・バスは登場しなかった

■ エピソード4：ドッグファイトがCGに

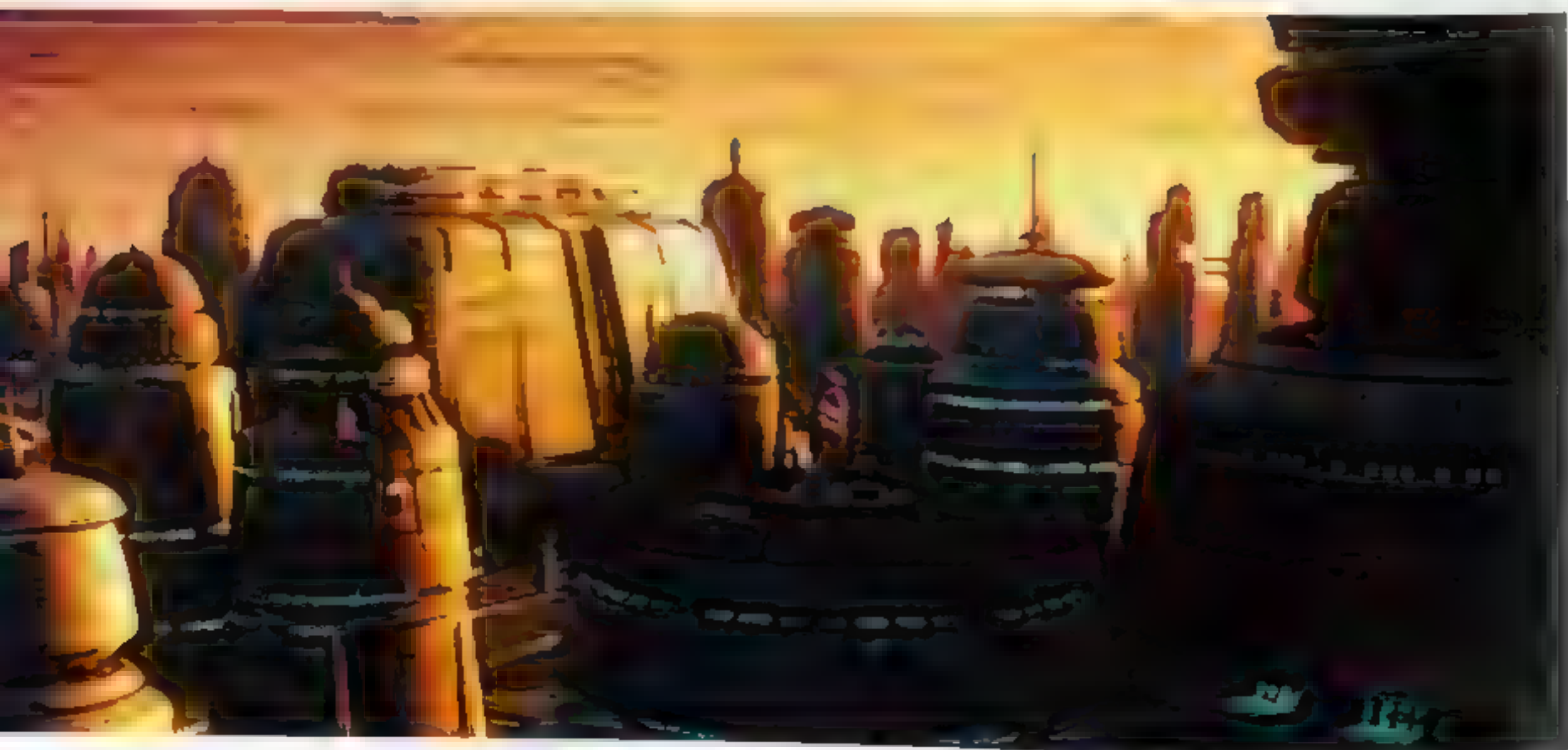
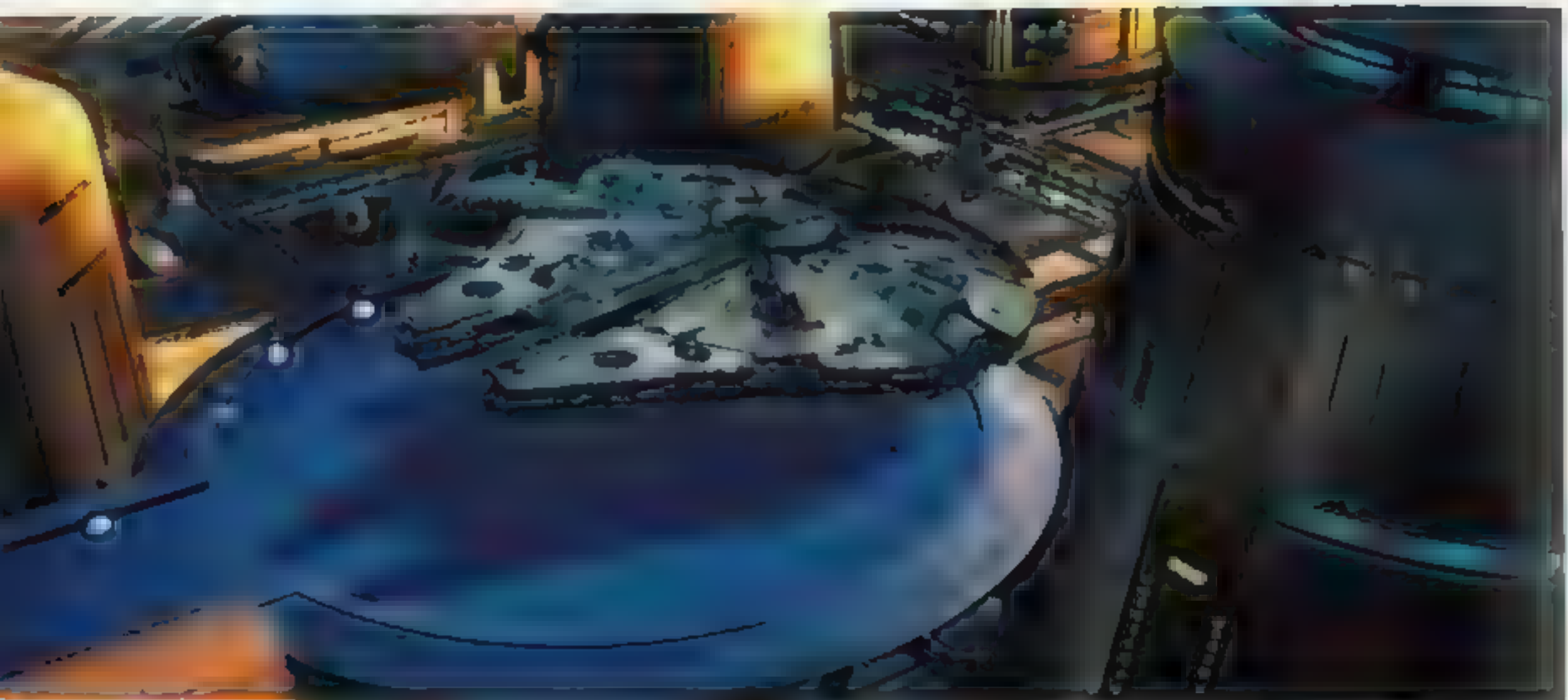
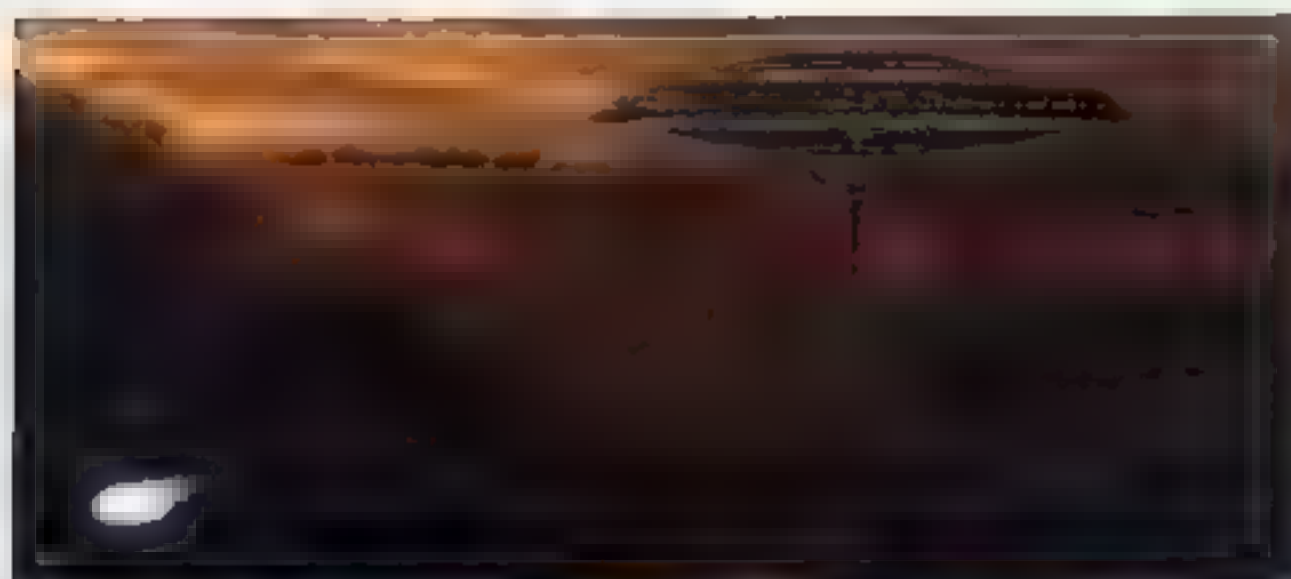
まず、1977年（日本公開は1978年）に公開された『スター・ウォーズ エピソード4 新たなる希望』に修正を施した同作の〈特別篇〉では、映画前半部分のサンドクローラー走行シーンが新規に追加撮影され、C-3POと別れたR2-D2がタトゥイーンの岩地を歩くシーンの情景は夕方となり、R2たちを捜索するサンドトルーパーのシーンにはCGのデューバックやシャトルなどが追加された。

さらにモス・アイズリーのシーンには数え切れないほどのクリーチャーやビークル、ドロイド、背景人物が追加で合成されている。モス・アイズリーでは反乱軍の貨物船やコレリア製の軽貨物船の姿も確認できる。有名なカンティーナでのハン・ソロとグリードの対決シーンはカットが変更されたことで撃ち合いのシーンとなり、オリジナル版ではカットされていたハンとジャバ・ザ・ハットの交渉シーンも追加、そこには新たにボバ・フェットも合成された。

また主役ビークル（ミレニアム・ファルコン）も、随所でCGに差し替えられたり、スラスターの青白いエフェクトが加えられたりしている。クライマックスへと向かうにつれビークル関連の修正はさらに目立ってくる。

〈特別篇〉の7年後、「エピソード3」公開の前年の2004年のDVD発売の時も新たな追加がなされている。首都惑星コルサントでの祝賀シーンには、さらにジェダイ聖堂（左ページ）や元老院ホールなど「エピソード1」に登場した名所が追加されている

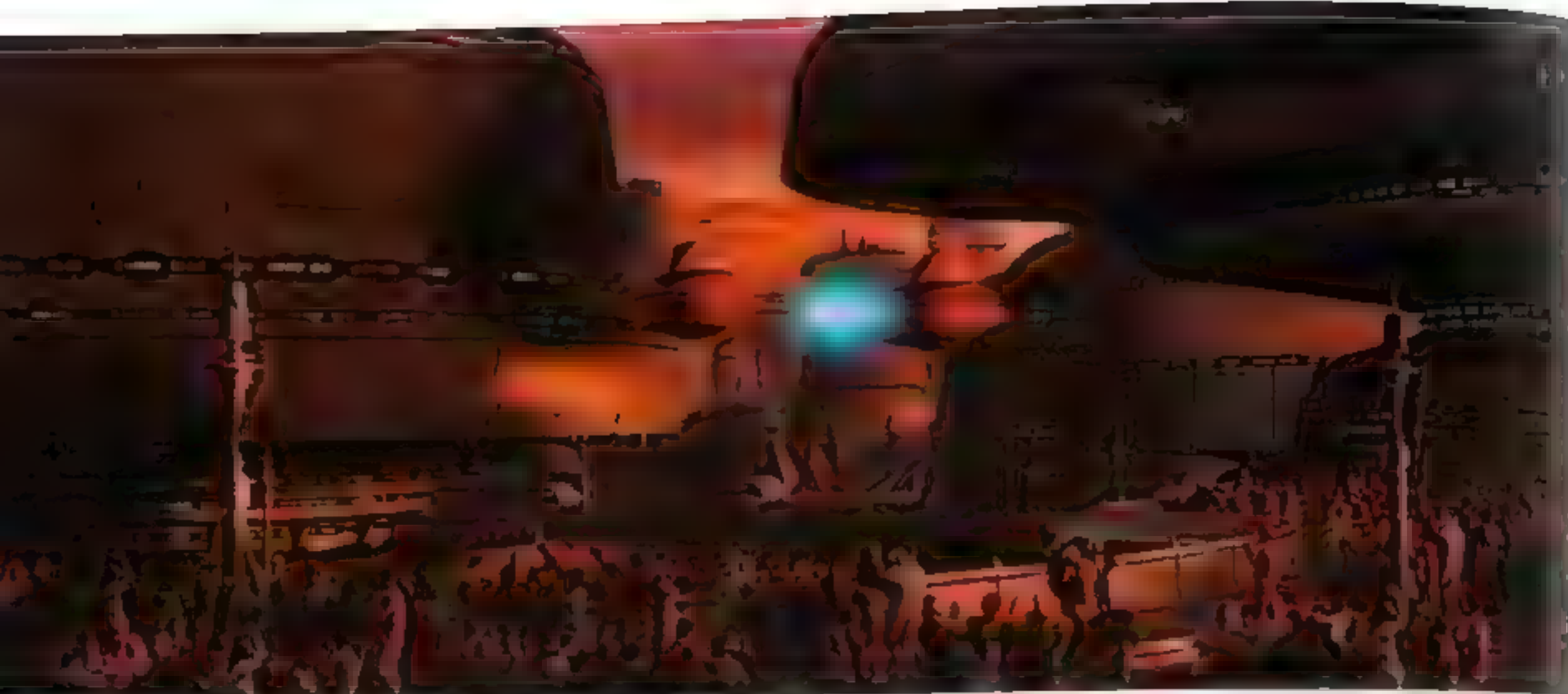
エンドアの夜の森を照らす花火のシーンから、画面は滑らかにクラウド・シティでの祝賀シーンに転換する

画面はオーバーラップし、惑星ベスピンのクラウド・シティのシーンへと変わる

《特別篇》で最も多くのカットがCGに置き換えられたのは、『エピソード5』のクラウド・シティのシーケンスだった

ヤヴィン4の反乱軍基地ハンガーの外観、デス・スター攻撃へ向かう反乱軍の戦闘機編隊、デス・スターでの攻防におけるXウイングやタイ・ファイター、デス・スターの爆発シーンのエフェクトなどひとつひとつ挙げてゆけば枚挙にいとまがない。特にデス・スターで戦闘機同士のドッグ・ファイトのシーンではCGに置き換えられることで構図なども大きく変わっている。また、効果音や台詞なども追加や変更された部分が多数ある。

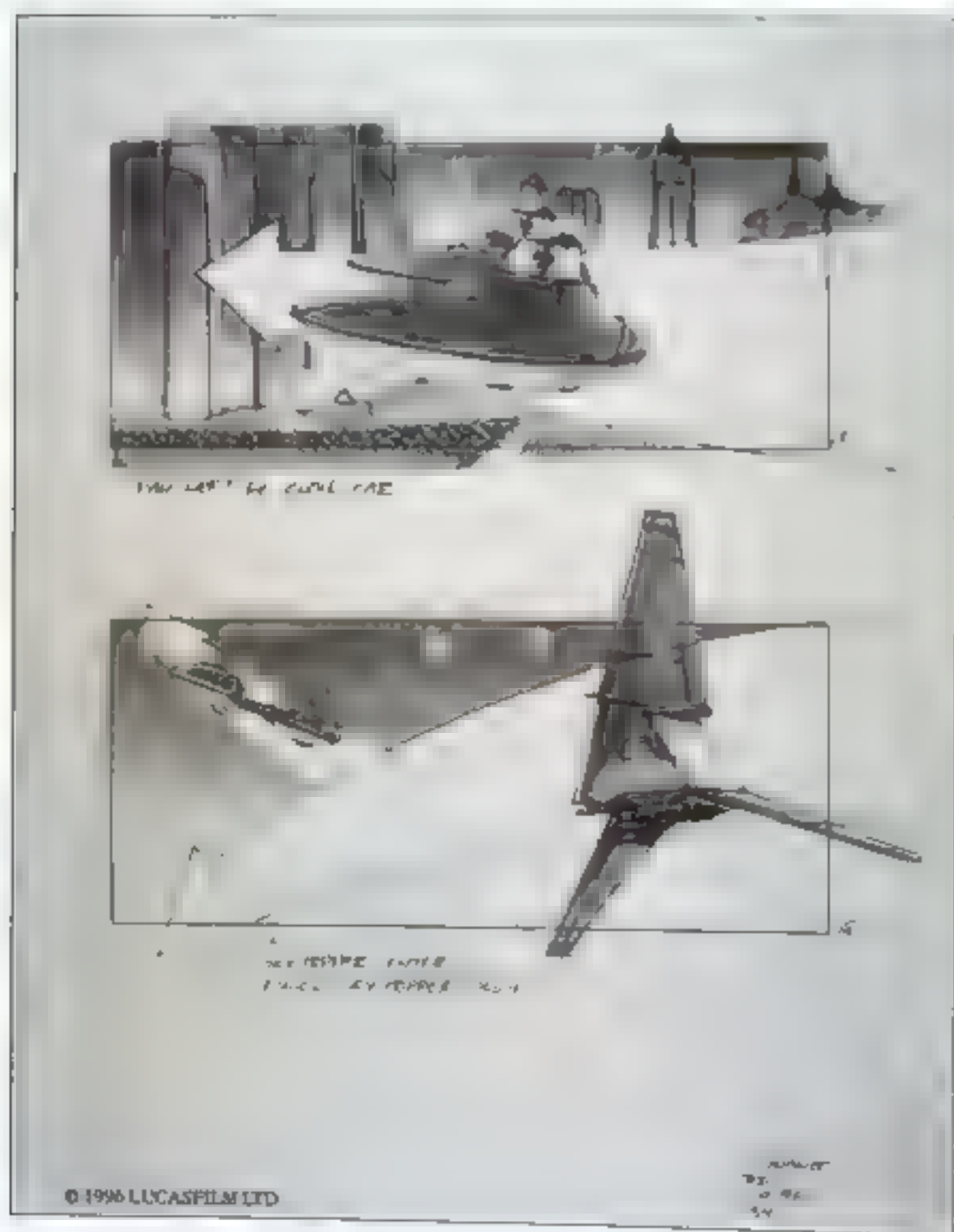
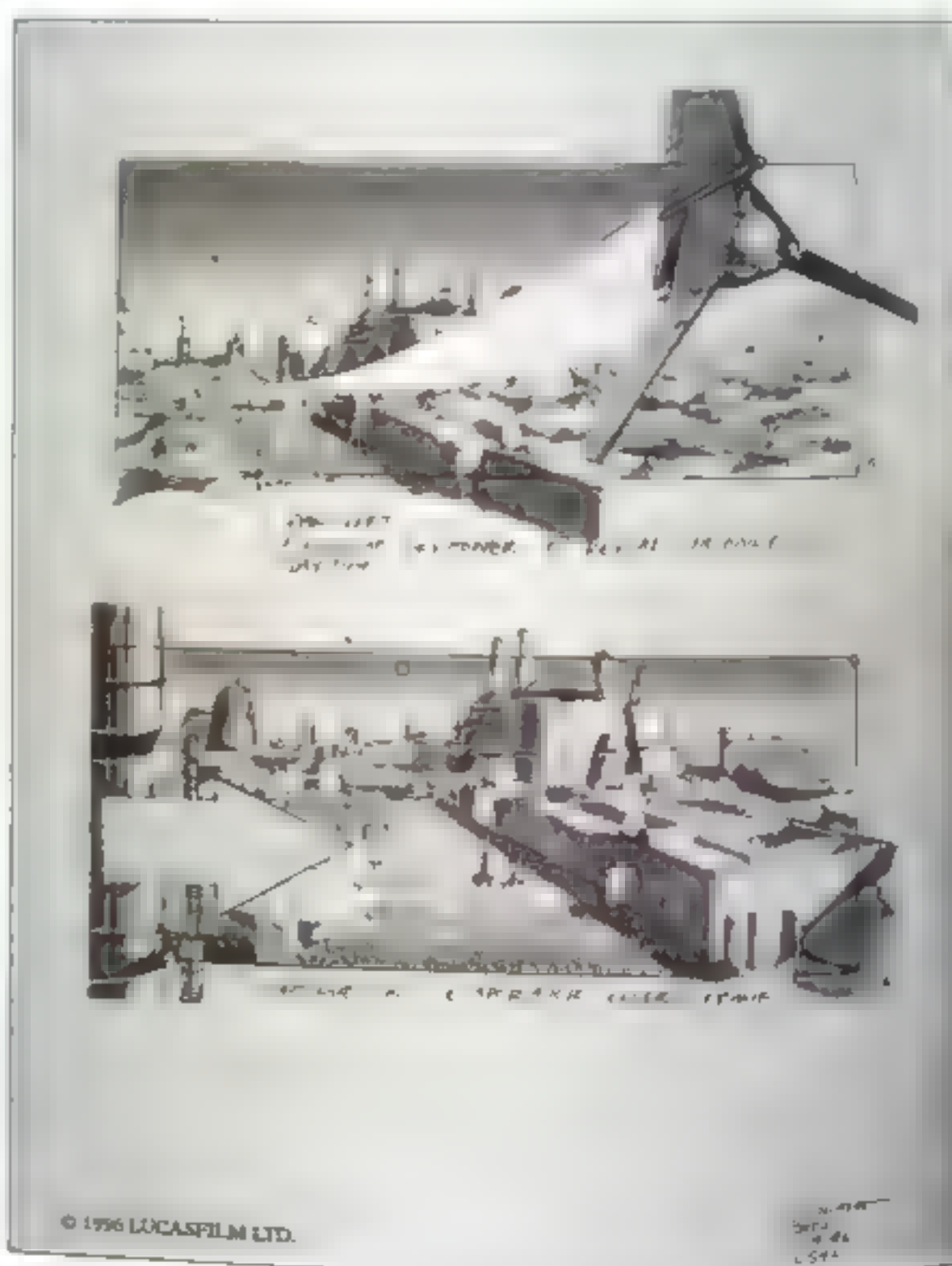
その後、2004年のDVD版ではモス・アイズリーにおけるハンとジャバの交渉シーンで、ジャバのCGがさらに全面的に変更されたことで『エピソード1』のCG表現に近づき、シリーズ作品間の整合性が向上した。さらにレイアが囚われていたデス・スター監房区画の通路の奥行きが深くなったと共に、同ゴミ処理区画のダイアノーガの目が瞬きするようになり、オビ＝ワンとダース・ベイダーの対決シーンのライトセーバーの表現にも変更が加えられた。

■ エピソード5：オープニングから変更あり

1980年公開の『スター・ウォーズ　エピソード5／帝国の逆襲』も1997年の《特別篇》、2004年のDVDでいくつもの変更が加えられた。

エピソード6〈特別篇〉のラストでは、クラウド・カーやT-16スカイホッパーなどが右から左側へ飛ぶのに合わせた「付けPAN」で銀河各地での祝勝会の光景を滑らかなワイプ処理で見せてゆく。上画像は、雲の惑星ベスピンのクラウド・シティでの祝勝会の光景。

まずオープニング・クロールだが、オリジナル版公開時には各国語のものが用意され、日本では当然、日本語のオープニング・クロールが使用された。しかし〈特別篇〉では英語のものに差し替えられている。これは、日本語版のものはあまり観客の評判がよくなかったからだといわれている。

そのほか画面でわかりやすい変更点は、オリジナル版では半身しか写っていなかったワンパが、モンスタースーツを新規に作り、新たなセットを組んで撮影されて全身像を見せたこと、CGで追加されたホスの戦いでの戦場の煙、〈ミレニアム・ファルコン〉を追跡する〈スレーヴI〉のシーンの構図、クラウド・シティに到着した〈ミレニアム・ファルコン〉やその後ろを飛ぶ数々のビークルなどに修正・追加が施され、クラウド・シティは外観、内観ともに大きく生まれ変わった。クラウド・シティ関連ではほかにクラウド・カーが追加され、シティの通路には窓ができ、窓の中にレイアが見えるビルは別物に変わっている。〈ミレニアム・ファルコン〉の上部ハッチは3枚扉になり、ベイダーがインペリアル・シャトルで〈エグゼクター〉に帰還するシーンも加わっている。台詞や音の変更も「エピソード5」では多かった。

シリーズの統一感を出すためにベイダーと通信する皇帝のホロ画像もイアン・マクダーミド演ずるものに差し替えられた。また、撮影時の混乱から起きた矛盾、たとえばカーボン凍結される際のハンの衣装や〈エグゼクター〉でのピエット提督らの階級章がフィルムの裏焼きにより左右反転していた不備が修正された。

クラウド・カーやT-16スカイホッパーが右から左側へ飛ぶのを追うようにPANした「付けPAN」のストーリーボード

エピソード6（特別篇）のラストで、T-16スカイホッパーが初めて空を飛んだ。そのT-16の動きに合わせて、銀河辺境の惑星タトゥイーンでも誰もが銀河帝国が打ち負かされたことを祝っている。これらタトゥイーンのシーンは、上杉裕世氏が作り出したデジタルマットアートの傑作である

■「エピソード6」：祝勝シーンの大幅な追加

1997年公開の『スター・ウォーズ エピソード6／ジェダイの帰還』の〈特別篇〉では、まず映画冒頭、ジャバ宮殿で演奏するバンドメンバーが修正されただけでなく、彼らの演奏曲まで変更されている。さらに宮殿関連では、ランコアの穴に落とされたウーラに変更が加えられ、レイアが化けたブーシがジャバと交渉するシーンなどにボバ・フェットが合成されている。カークーンの大穴のシーンでは、怪物サーラックに嘴を追加、また触手などが増え、デザート・スキッフから落ちそうになるハンの足に絡まるロープがCGで追加された。

エンドアの戦いでは第2デス・スターの爆発から脱出した〈ミレニアム・ファルコン〉を迎える反乱同盟軍艦隊の数が増えており、また第2デス・スターの爆発のエフェクトや、反乱同盟軍の勝利を祝うシーンではクラウド・シティ、モス・アイズリー、コルサントなど銀河の各地で人々が歓喜の声を上げるカットが追加された。それぞれのカットでクラウド・カーやT-16スカイホッパー、エア・タクシーなどのビークルが飛行しているのが確認できる。またこの祝勝シーンでは、衛星エンドアでのイウォークたちと反乱同盟軍将兵たちの宴でカットの差し替えや順番の入れ替えが行われた。

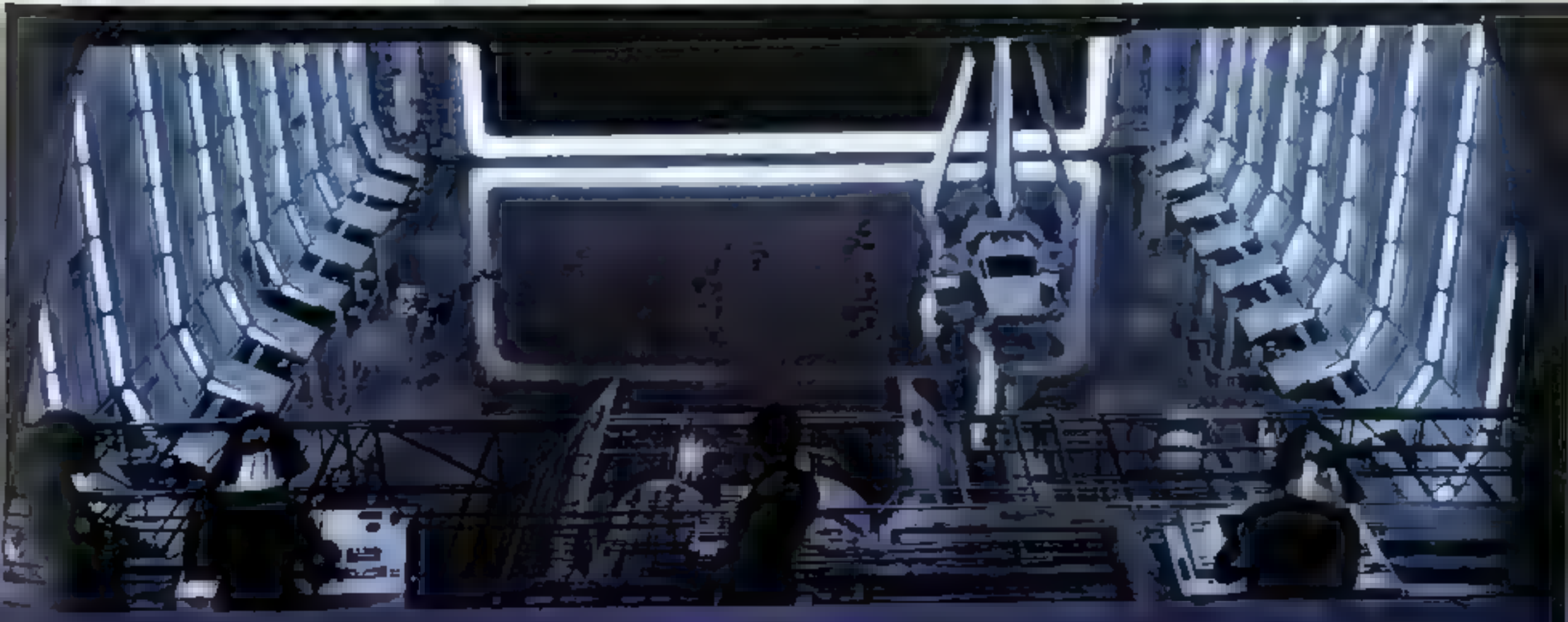
同作の2004年発売の日本版DVDボックスでの特筆すべき変更点としては、日本初公開時には興行的な理由から副題が『ジェダイの復讐』だったものが、DVD-BOX発売に伴ってようやく原題に即した『ジェダイの帰還』に改題されたことが挙げられる。

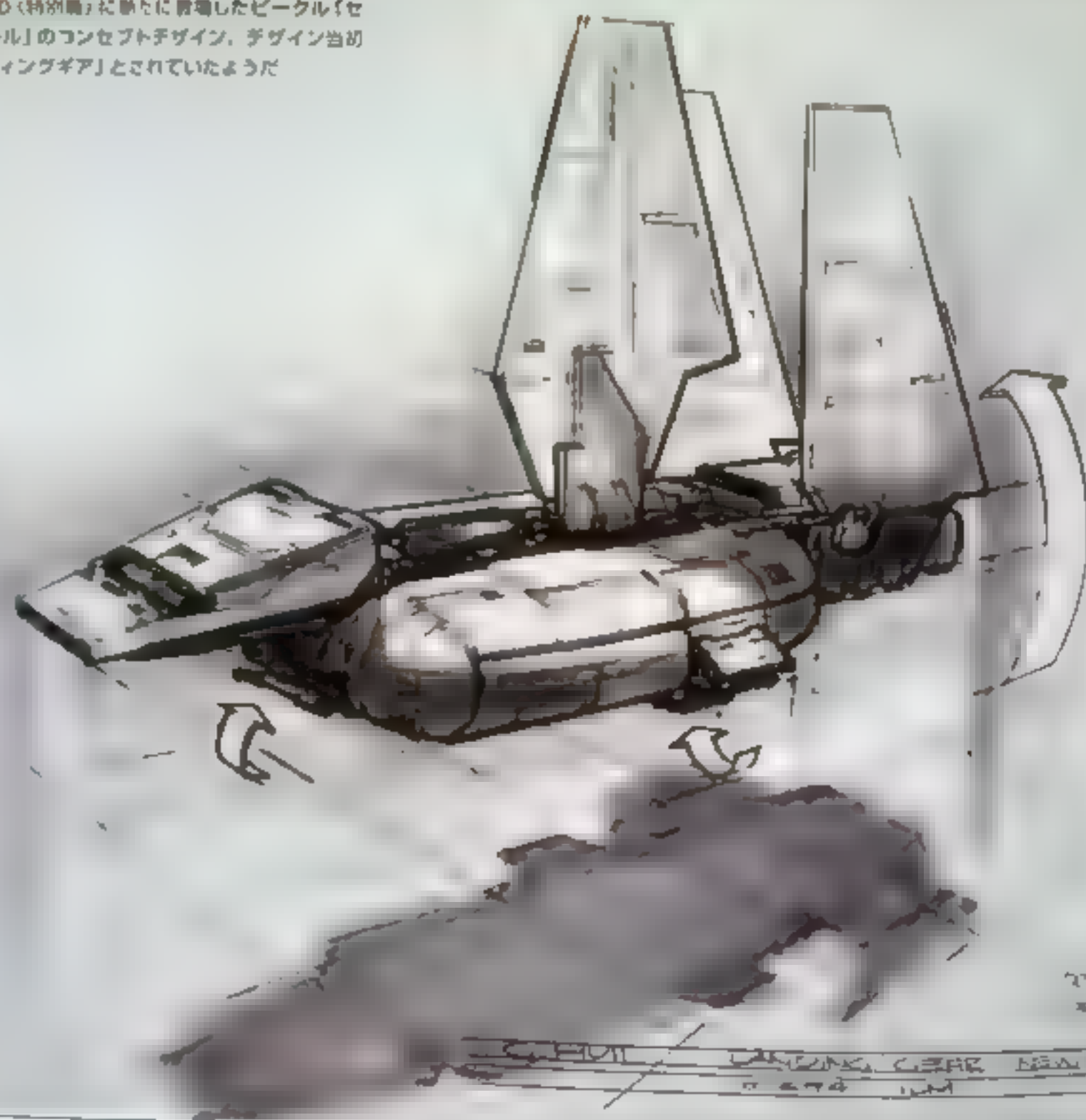
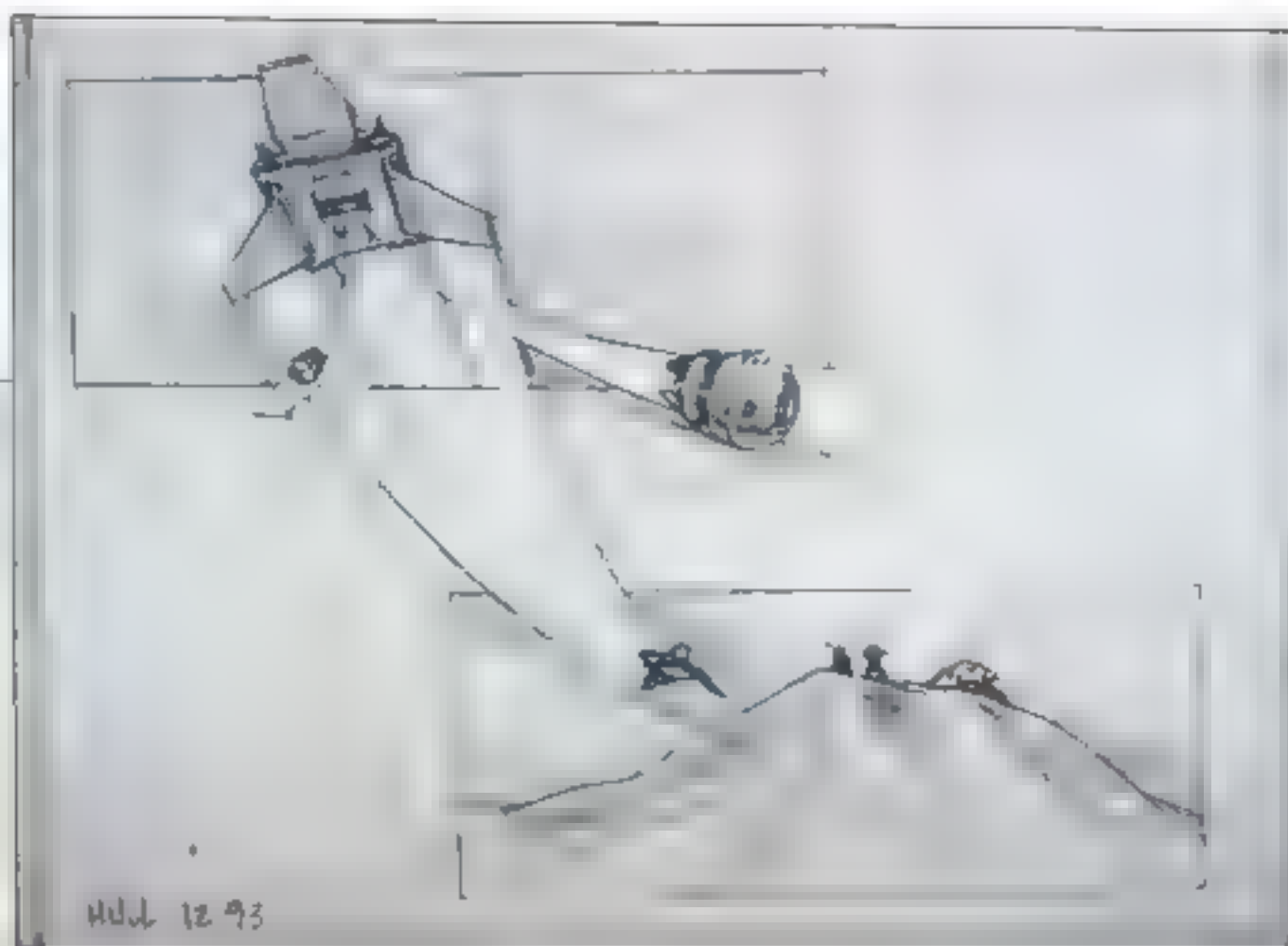
このDVDボックス版における主な映像の変更点は以下のとおり。C-3POたちが訪れるジャバ宮殿の扉がより大きく描き直されたこと、イウォークの戦士、ウィケット・W・ウォリックの瞳が青となり、ほかのイウォークたちと共にCGで目の動きが追加され、よりリアルになったこと、皇帝を倒したあと、ルークの前でマスクを外して素顔を見せたベイダーの眉が消され、瞳の色も青に変更されたことなどで、キャラクター関連の変更も目立つ。

またエンディングでルークを見守るヨーダ、オビ＝ワン、アナキンのシーンでは、アナキンの顔の部分のみ「エピソード3」製作中に撮影されたヘイデン・クリステンセンに差し替えられた。

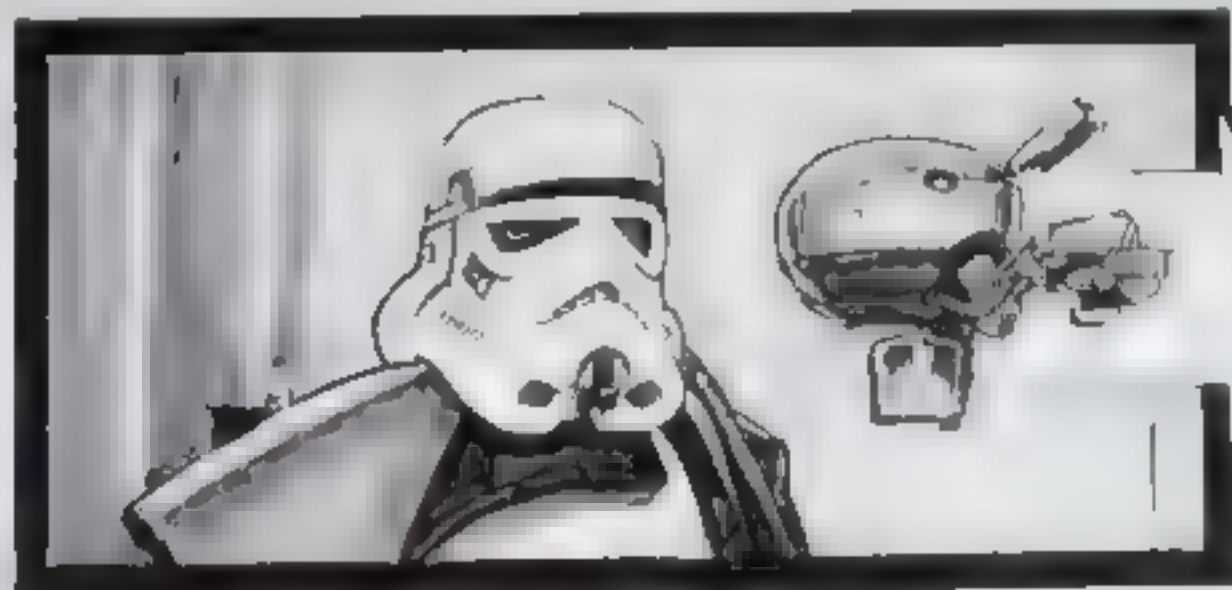
■付記：「エピソード1」「エピソード2」「エピソード3」の変更点

1999年に公開された『スター・ウォーズ エピソード1／ファントム・メナス』は2001年にDVD、2011年にBlu-rayが発売され、若干の修正が加えられてきた。以下、参考までに「エピソード1～3」に関する現在までの変更点などを記しておく。

ラムダ級シャトルは「エピソード6」だけでなく「エピソード5（特別篇）」にも登場することになった。また劇場的には「エピソード6」で出番が少なかったタイ・ボマーは、ドッキングベイに係留されたマットアートが2カット描かれ、中でも下写真のカットではさらに手前の帝国軍兵士たちも加えられた

エピソード4《特別篇》には、センチネル級シャトルが新たにデザインされ、CGでモデリングされた
要人を運ぶエレガントな外観のラムダ級シャトルとは異なり、センチネル級シャトルは軍事物資や兵員を輸送する目的で設計された
製造元はサイナー・フリート・システムズ
全長38メートル
ラムダ級シャトルと同様、センチネル級シャトルも着陸時に畳んでいた可動翼を離陸後は[illegible]

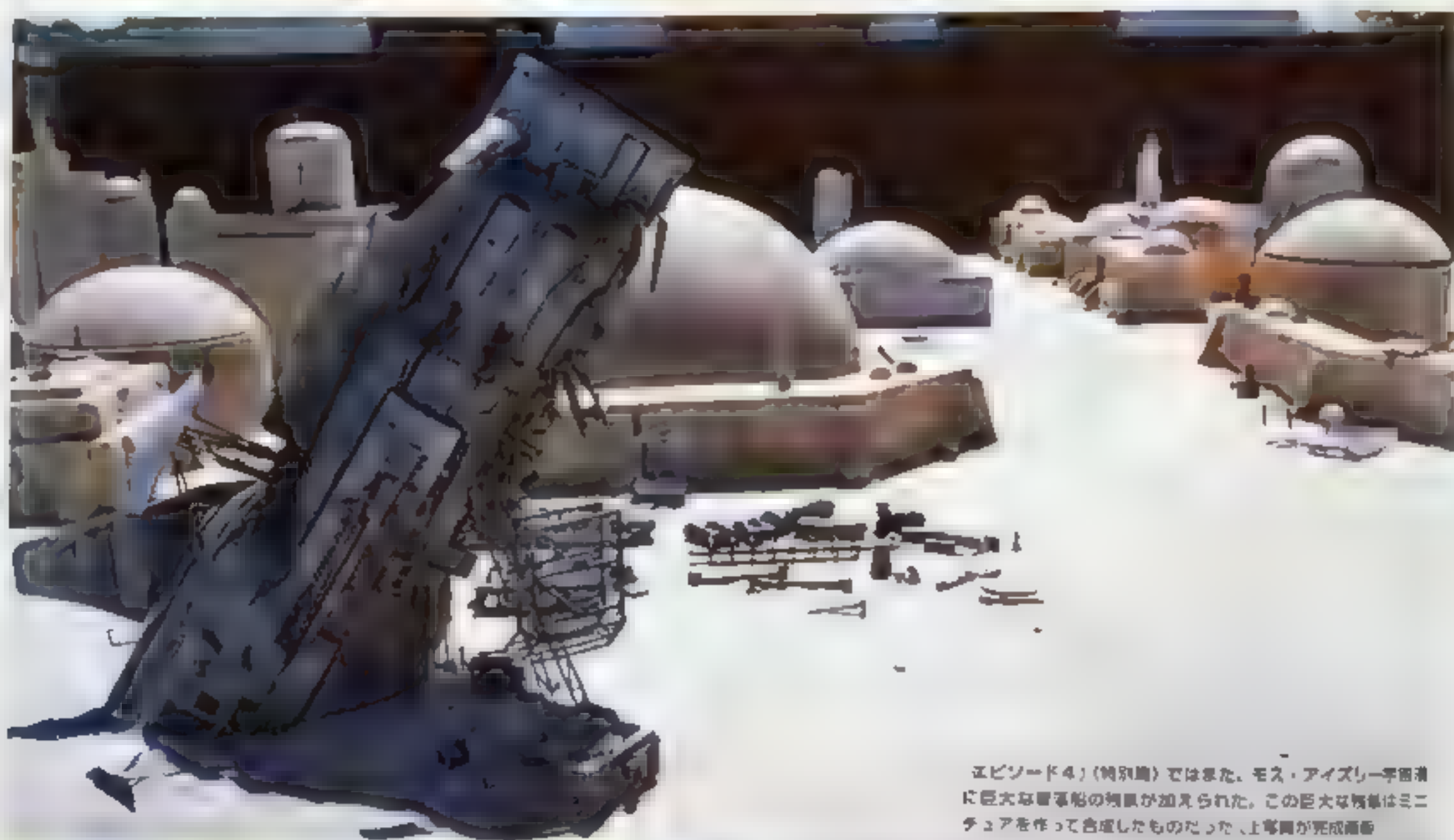
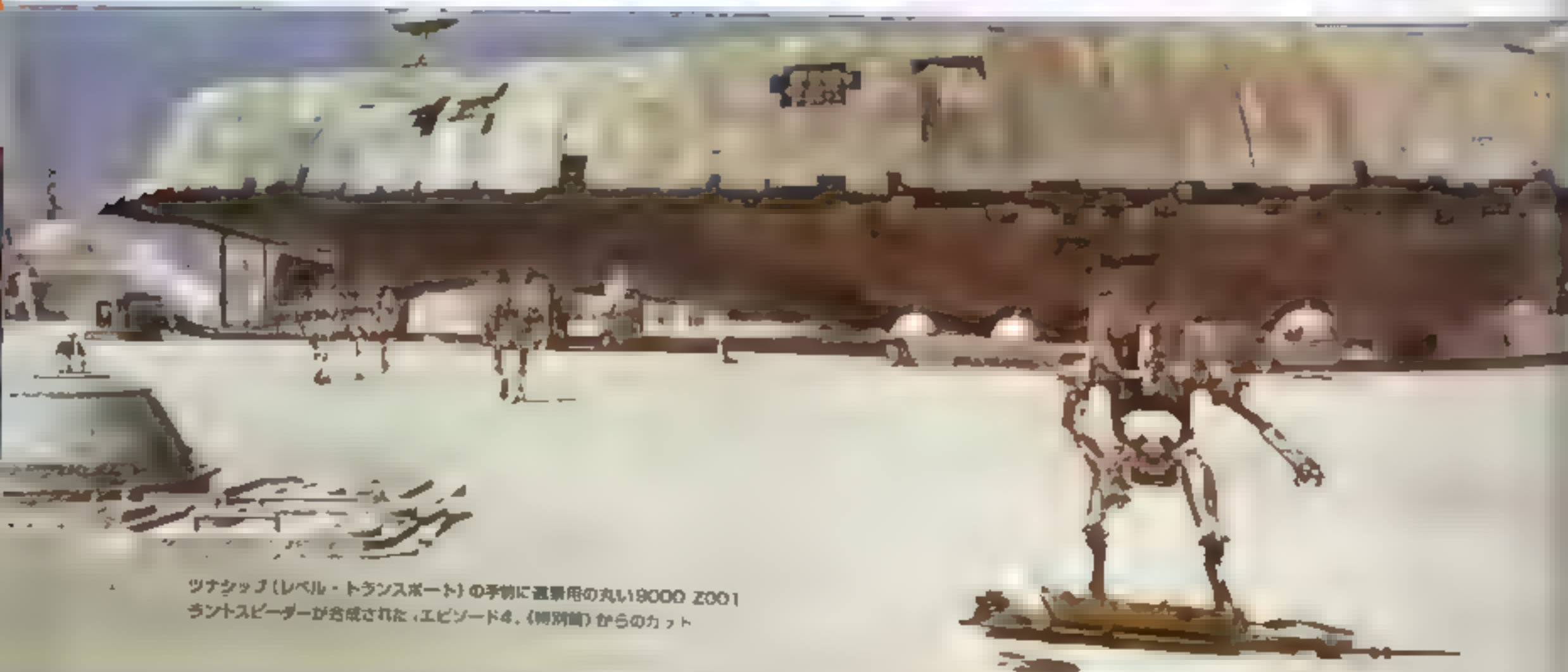
エピソード4 の《特別篇》に新たに登場したビークル「センチネル級シャトル」のコンセプトデザイン。デザイン当初の名称は「ランディングギア」とされていたようだ

左　1993年12月に描かれたストーリーボードには『エピソード5』の冒頭シーンのように何やら射出している様子が描かれている

下　右図のシャトルが射出しているものに酷似したPROBEのデザイン画で，1994年に描かれたもの

下　1993年12月に描かれたストーリーボード。ストームトルーパーの横を通り過ぎるPROBE。このPROBEは最終的にはセントリー・ドロイドと名付けられた

Ext. Mos Eisley
Close on Trooper probe passes behind him

No 12

New Hope
Dec. 3, 1993, ILM

《特別篇》のコンセプトアートやストーリーボードの多くは1993年12月以降にILMで描かれており，センチネル級シャトル（ランディングギア）のコンセプトデザインは主に1994年に描かれている。ILMがCGによって恐竜を描き，「エピソード1」以降の3部作などにも影響を与えたと思われる映画『ジュラシック・パーク』の全米公開（1993年6月11日）から半年後には，《特別篇》のデザイン作業がかなり進んでいたことに驚かされる

エピソード4」(特別編) ではまた、モス・アイズリー宇宙港に巨大な宇宙船の残骸が加えられた。この巨大な残骸はミニチュアを作って合成したものだった。上写真が完成画面

ツナシップ(レベル・トランスポート)の手前に遠景用の丸い9000 Z001ランドスピーダーが合成された。エピソード4」(特別編)からのカット

モス　アイズリーでジャワが乗るロントの近くを横切るスウープ・バイク。これはフレアS・スウープで　エピソ　ド　にも登場する。エピソード2　でラー ゼフィアG　スウ　プで　共にモブクェット社製。

1994年5月に描かれたスウープ　バイクのデザイン画　スウープ・バイクは、スピーダー・バイクに似たリパルサークラフト（反重力ビークル）の総称だが、民間用が多く　大きさや製造元は多種多様でスピーダー・バイクより強力なものもある

「エピソード1」におけるポッドレースのシーンでは当初描かれなかった何名かのポッドレーサー・パイロットがCGで新たにか加えられ、ヨーダが「エピソード2」以降のようにパペットからCG表現となり、表情などがより豊かになった

2002年公開の「スター・ウォーズ　エピソード2　クローンの攻撃」は、コルサントのエアスピーダーによるチェイス・シーンで行きかうスピ　ダーがいくつか減らされている。また、これはフィルム版とDLP版の違いになるが、ナ ブーの宇宙港に停泊しているYT-1300の数が2隻から3隻に増えている

2005年公開の「スター・ウォーズ　エピソード3　シスの復讐」では、アナキンとオビ　ワンの対決後、宇宙船内のオビ＝ワンから溶岩を這い上がるシーンの切り替えが変更された

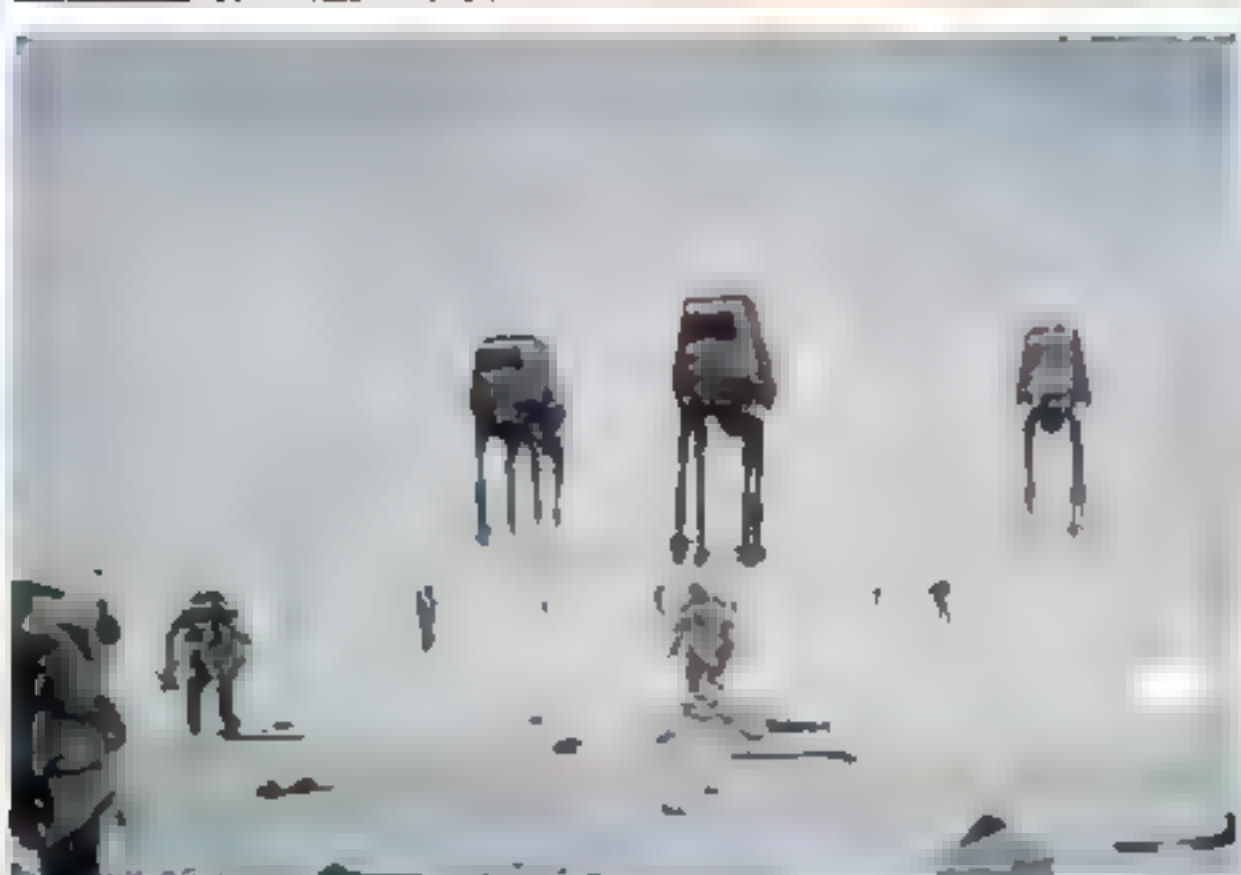
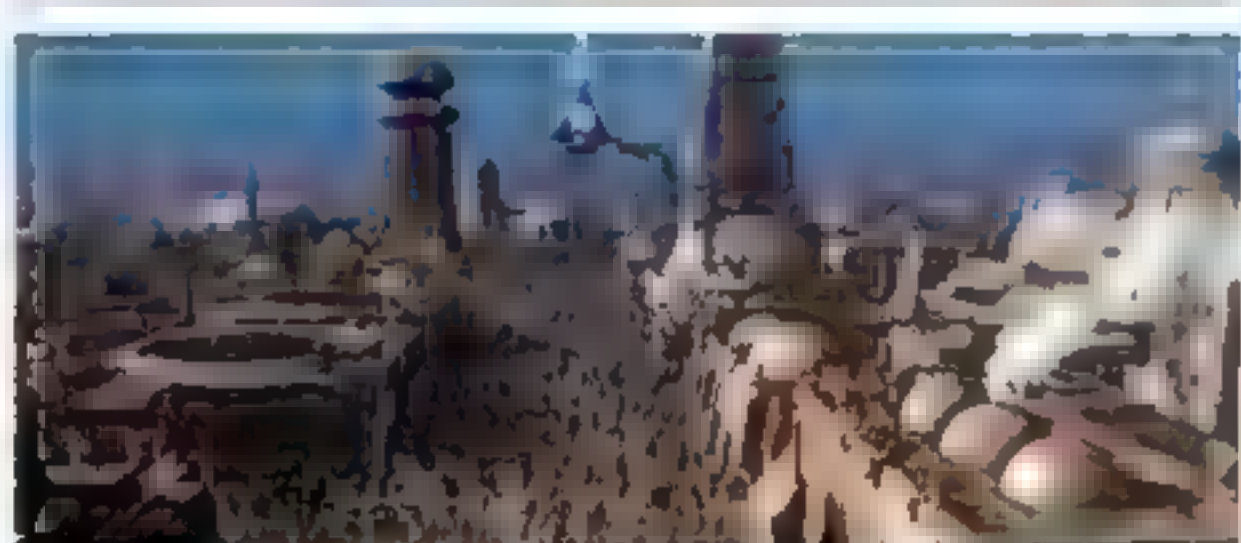
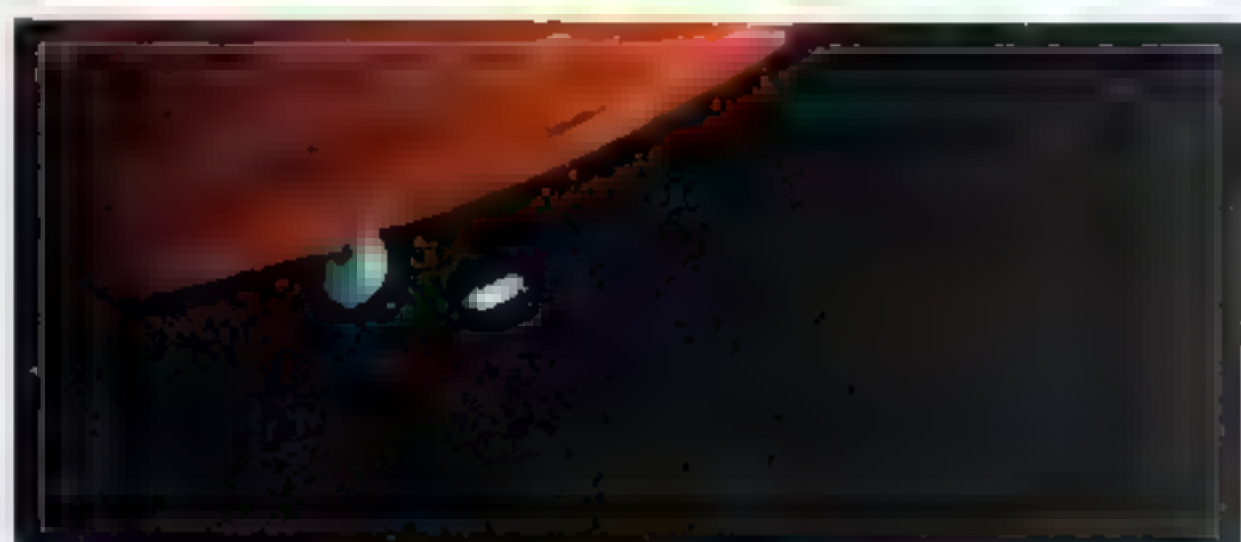
THE GALAXY
銀河

Galaxy Map 銀河マップ

左ページは銀河マップの最新版である。「エピソード1～6」の舞台となる星々に加え、「フォースの覚醒」の星々を追加したものである。カミーノは、銀河の中を移動する極小銀河にあるという設定なので、ここにはマッピングされていない。

銀河マップの歴史は意外と浅い。「エピソード1」公開後の1999年の秋に大航海時代の海図のような銀河マップが発表された。これは別銀河からの敵が圧倒的なパワーで攻め込んでくる小説シリーズ「ニュー・ジェダイ・オーダー」のために用意されたもので、当時の書籍における設定作りで定評があった作家のジェームズ・ルシーノとダニエル・ウォーレスが作りあげたものだった。2000年より各国でデアゴスティーニが刊行した週刊「スター・ウォーズ ファクトファイル」では、「ニュー・ジェダイ・オーダー」のものを元にした、よりビジュアル度の高い銀河マップを創刊号の付録とした。

そして2009年8月18日刊の「Star Wars: The Essential Atlas」において、銀河を真上から見た銀河マップが発表された。そこには、当時のスピンオフ小説やコミックス、ゲームに登場する星々が数多くマッピングされ、銀河マップはより複雑なものとなっていった。

その後、ルーカスフィルムが2012年10月30日にウォルト・ディズニーの傘下になり、やがて新作「フォースの覚醒」の製作が開始された。その撮影開始直前の2014年春から、映像作品以外に由来する設定は基本的に"LEGENDS"に分類されることになった。こうして現在（2016年）、銀河マップからLEGENDS由来の星々は消え、左ページの図のように、比較的シンプルなものになったのである。

【著者紹介】 Authors

■ 高貴 準三 Junzo Takagi

『アルティメット・スター・ウォーズ』『スター・ウォーズ コスチューム大全』『スター・ウォーズ／フォースの覚醒 ビジュアル・ディクショナリー』をはじめ、国内のスター・ウォーズ翻訳書籍の多くに監修・編集として関わる第一人者。共著に1995年版『スター・ウォーズ・クロニクル』、著作に『スター・ウォーズ・クロニクル エピソード1+2+3』『スター・ウォーズ 日めくりカレンダー2017』などがある。

■ 高橋 清二 Seiji Takahashi

SFプロップ研究家／原型製作者。バンダイなど玩具メーカーのスター・ウォーズ商品の開発、関連書籍の監修やホビー誌への寄稿などを行っている。スター・ウォーズのプロップに関しては国内屈指の知識量を持つ。共著に1995年版『スター・ウォーズ・クロニクル』『スター・ウォーズ:アクション・フィギュア・アーカイブ(NEKO MOOK 12)』などがある。

【参考資料】 Reference

BOOKS:

The Art of Star Wars (1978-1997)
The Art of The Empire Strikes Back (1980)
The Art of Return of the Jedi (1983)
A Journal of the Making of The Empire Strikes Back (1980)
The Making of Star Wars: Return of the Jedi (1983)
The Making of Star Wars (2007)
The Making of The Empire Strikes Back (2010)
The Making of Return of the Jedi (2013)
Sculpting a Galaxy: Inside the Star Wars Model Shop (2006)
Star Wars: The Blueprints (2011)
Star Wars Storyboards: The Original Trilogy (2014)
Ultimate Star Wars (2015)

VIDEOS (including TV Documentary) :

The Making of Star Wars (1977)
SPFX: The Empire Strikes Back (1980)
From Star Wars to Jedi: The Making of a Saga (1983)
Star Wars Insider
STARWARS.COM

Star Wars Chronicles Episode IV, V and VI - Vehicles
スター・ウォーズ・クロニクル エピソード４，５，６／ビークル編

2017年1月3日 第1刷発行

[企画／編集]
高貴準三 Junzo Takagi (FX Ltd.)

[構成／執筆]
高貴準三 Junzo Takagi (FX Ltd.)
高橋清二 Seiji Takahashi

[装幀]
シマダヒデアキ Hideaki Shimada (L.S.D.)
浅見ダイジュ Daiju Asami (L.S.D.)

[本文デザイン]
安藤正剛 Seigo Ando (Azul. Planning)

[編集協力]
川本崇之 Takayuki Kawamoto (FX Ltd.)
谷中欠二 Ketsuji Yanaka

[和訳・英訳]
池谷律代 Ritsuyo Ikeya
富永晶子 Akiko Tominaga
村上清幸 Kiyoyuki Murakami
岡本仲子 Nakako Okamoto

[資料協力]
鷲見博 Hiroshi Sumi

発行人 金谷敏博
編集人 川畑 勝
編集担当 内田恵三
発行所 株式会社学研プラス
〒141-8415
東京都品川区西五反田2-11-8

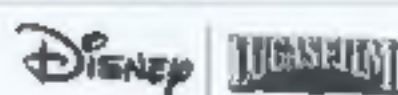
印刷所 凸版印刷株式会社
Printed in Japan

この本に関する各種のお問い合わせ先

【電話の場合】
編集内容については
Tel 03-6431-1581 (編集部直通)
在庫・不良品(乱丁、落丁)については
Tel 03-6431-1201 (販売部直通)

【文書の場合】
〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『スター・ウォーズ・クロニクル エピソード4,5,6/ビークル編』係

この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

学研の書籍・雑誌についての新刊情報、詳細情報は下記をご覧ください。
学研出版サイト http://hon.gakken.jp/

9784054064379

ISBN978-4-05-406437-9

C0074 ¥16000E

1340643700

1920074160006

定価：本体16,000円
※税が別に加算されます。

Disney | LUCASFILM

EPISODE IV - A NEW HOPE

EPISODE V - THE EMPIRE STRIKES BACK

EPISODE VI - RETURN OF THE JEDI

初公開・初掲載写真を大判カラーで大量収録！

歴史的ミニチュア・ビークルの細密美と迫力を目撃せよ!!

1977年、「スター・ウォーズ」シリーズ第1作『エピソード4』の冒頭。虚空を切り裂いて登場する「インペリアル・スター・デストロイヤー」の実在感と巨大感に、世界中の観客が度肝を抜かれた。

それ以降、今なお「スター・ウォーズ」ファンの大きな情熱の対象であり続け、あらゆるカルチャーに影響を与え続ける"SWビークル"。その魅力の本質に、極限まで迫ったのが本書である。

本書の特徴

- 伝説の大著『スター・ウォーズ・クロニクル』（1995年刊）のスタッフが21年の時を経て再結集。その後の調査・取材結果をもとに、"ビークル"をメインに据えたまったく新たな構想で完全新規編集！
- 「スター・デストロイヤー」「ミレニアム・ファルコン」「Xウイング」といった定番人気ビークルから、超マイナーな「ヴォイド・スパイダーTX-3」や各種プロトタイプ・モデルまで徹底紹介！
- 撮影用ミニチュアのあらゆる角度からのショット、さらに実寸大の船内・機内セットまで掲載・解説！